魔法少女リリカルなのは～七つの大罪～

村正

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは～七つの大罪～

【Ｎコード】
Ｎ７３４７Ｉ

【作者名】
村正

【あらすじ】
ＪＳ事件から二年。
再結成した機動六課に一人の青年がやってきた。
その青年が彼女達と出会うとき、新たな物語が始まる。

これは魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳの二次小説です。
苦手な方はお戻りください。

前書き

今まで書いていたものをボツにして、設定など色々変更して書き直します。
読んでくださっていた方々には申し訳ありません。
書き直す理由は色々とありますが、一番の理由は主人公格のキャラクターを二人も出して回せるのか、いや無理だろうという自分の力の無さが原因です。
そんな自分の作品ですが、よろしくお願いします。

キャラ設定

名前／神童（シンドウ）一真（カズマ）
年齢／２１歳
利き腕／左
出身／第９７管理外世界（現地惑星名称「地球」）極東地区　日本・海鳴市
所属／時空管理局本局武装隊
役職・階級／武装隊所属空戦魔導師・一等空佐
魔法術式／近代ベルカ式
魔導師ランク／総合ＳＳＳランク
好き／睡眠、ゲーム、マンガ、辛い食べ物
嫌い／睡眠を邪魔する存在、茸類、茄子
デバイス／神無（カンナ）

備考
なのは達とは武装隊時代に同じ部隊にいたため面識あり。
性格はめんどくさがりで仕事もサボりたいと思っている。だが、後で色々と言われるのが面倒なのでやることはやる。
寝ることが好きなので暇さえあれば寝ているが、邪魔されるとマジギレする。
ＪＳ事件後、機動六課に行った時にヴィヴィオになつかれ、以来『パパ』と呼ばれている。

名前／神無
待機モード／灰色の結晶の付いたブレスレット

備考

片刃大剣型アームドデバイス。

他のデバイスと違い、マスターに対して反抗や文句、罵詈雑言を言ったりする。耐久力は高く結構な重さがあるが、一真は片手で振り回す。

キャラ設定（後書き）

次から本編の始まりです。
つたない小説ですがよろしくお願いします

機動六課出向

機動六課隊舎前。そこに、一人の青年がボストンバッグを持って立っていた。

「・・・・はぁ」

［どうしたのよ一真。盛大に溜め息ついて］

青年の名前は神童一真。彼は今日から機動六課に出向になった本局武装隊の魔導師である。
そして彼に話しかけたのは、彼のデバイスである神無。

「最近になって機動六課が新説されたのはいいんだがよ、何で俺が引き抜かれんだよ。武装隊にいた方が絶対楽だ」

「・・・・」

「しょうがない。さっさと挨拶すまして寝るか」

「あんたって、本当に駄目人間ね」

デバイスに呆れられるマスターってどうなのだろうか。

その頃、機動六課隊長室。

そこには四人の女性と一人の女の子、そして３０ｃｍ程の女の子がいた。

「確か今日だったよね。出向者の人が来るのって」

サイドポニーの髪型の女性・高町なのははお茶を手にそう言った。

「ん？誰か来んのか？」

なのはの言葉にいち早く反応したのは、なのはの隣に座っていたオレンジの髪を三編みにした女の子・ヴィータだった。

「前に主が言っていただろう。聞いてなかったのか？」

とピンクの髪をポニーテールにしている女性・シグナムが言う。

「はやて。そろそろ、誰が来るか教えてよ」

シグナムの隣に座っていた金髪の女性・フェイト・Ｔ・ハラオウンがデスクに座っている女性に聞いた。

「もうちょっとしたら来るはずやから、その時の楽しみや」

「来たら皆さんびっくりすると思いますよ～」

デスクに座っていたショートカットの女性・八神はやてと彼女のユニゾンデバイスのリインフォース（ツヴァイ）が笑いながら言った。

「びっくりって、私達が知ってる人？」

「そうだったら誰になるんだ。まさか、クロノか？」

「それはないよ。だって今は任務に言っているはずだから」

「ならばアコース査察官・・・・」

『いやいやいや』

そんな会話で盛り上がっていると、

コンコン

とドアがノックされた。

「と、噂をすればなんとやらやな。どうぞ」

はやてが促すとドアが開き彼は入ってきた。

数分前。

神童一真は迷っていた。一度来たことがあるから案内とかなくても大丈夫だろうと思っていたのだが、すぐにどこがどこか分からなくなり迷ってしまったのだ。

「なぁ神無、隊長室ってどこだっけ？」

「知らないわよ。迷ったのはあんたでしょ」

「・・・・テメェ」

一真は文句を言おうとしたが止めた。どうせ、何言っても無駄だと分かったからだ。

「はぁ・・・・しゃーない、地道に探すか。ダリィけど」

もう一度溜め息をついて歩き出そうとしたときだった。

「あら？一真君？」

「あ？」

名前を呼ばれて後ろを振り向くと、白衣を来た女性が立っていた。

「あぁ、シャマルか。ちょうどよかった」

「どうしたの？」

「隊長室まで案内してくれねぇか。迷っちまってな、ここがどこか分からねぇような状況なんだよ」

「いいわよ。こっち」

一真はシャマルの案内で隊長室に向かう。

「今日はどうしたの？」

シャマルの言葉を聞いて一真は驚いていた。

「何だ聞いてねぇのか。今日から機動六課に出向することになってな。だから、面倒だけど一応顔を出しておこうと思って」

「そうだったの」

「俺としては嫌なんだがよ」

「どうして？みんなもいるから楽しいわよ」

シャマルの笑顔に対して一真の顔は萎えていた。

「だって、武装隊よりも忙しいだろ」

それを聞いたシャマルは苦笑いを浮かべていた。

「着いたわ。ここよ」

「ここか。ありがとな、シャマル」

「どういたしまして。それじゃあまたね」

シャマルは手を振ってから去っていった。

「ここに来るまで、結構時間がかかったな」

「あんたが迷子になるからよ」

「そうですね～」

と言いながら一真は自分の服装を見た。
一応制服なのだがネクタイはずらし、制服のボタンは止めていない。
普通はちゃんと着たほうがいいのだが、一真は直す気は無さそうだ。
そして、一真はドアに手を伸ばしてノックをした。

コンコン

「どうぞ」

中から声が聞こえ、一真は隊長室に入って・・・すぐに出た。

「何してんのよ、あんた?」

「いや、悪魔達が揃って談笑してたから」

「何言ってんのよ。あの娘達が一緒にいるのなんていつものことでしょ」

「そうなんだがな。武装隊の時に一悶着あってあいつら全員にな・・・だから、あいつらが全員揃ってるのを見るとあの時の死にかけた記憶が蘇るんだよ」

「難儀なことね」

そしてもう一度中に入る。と、恐怖の光景が待っていた。

「えっと、何でお前らデバイスをセットアップしてんだ?」

一真の視界には負のオーラを纏った五人が立っていた。

「何か物凄く失礼なことを言われた気がしたの。気のせいかな？」

なのはが目の笑っていない笑顔で聞いてくる。

「気のせいじゃないっすかね。多分、いや、絶対に気のせいです」

「そうだったらいいけど。一真、気を付けてね。一真の口から変なことが出たら、殺しちゃうかも」

はげしく物騒なこと言うフェイト。その言葉に一真は震えている。

「はい」

全員がデバイスをしまったところではやてが口を開いた。

「という訳で、今日から機動六課に出向することとなった神童一真君や」

どういう訳だ、と一真はツッコミを入れそうになったが止めた。何と無くだが、嫌な予感がしたらしい。

「えーっと、面倒だが一応やっておくか」

一真は服装はそのままで適当に敬礼をした。

「あー、さっきそこの狸から紹介があったように今日から機動六課に出向することになった神童一真一等空佐だ。よろしく」

一真はそう言ったところで彼は気づいた。はやてとリイン以外の全員が目を見開いていることに。

「どうしたんだ、お前ら？」
一真が聞くと次の瞬間、
『一佐ぁぁぁぁぁ！？』
機動六課中に叫び声が木霊した。

「るせぇなぁ・・・・何大声出してやがんだよ」

「だ、だって、一真君一等空佐って」

「あぁ、そう言ったな」

一真はなのはの言葉にサラッと返答する。

「確か、前に来たときは三等空尉ではなかったか？」

「そういやぁ、そうだったな」

シグナムにそう言われて思い出しながら適当に答える。

「この二年ちょっとで何をした？」

「目立ったことといえば、ＪＳ事件の時に眼帯のチビを半殺しにしたろ・・・それに麻薬組織を十ぐらい末端からボスまでを壊滅させて、広域指名手配者三人くらいを殺しかけ――いや、四分の三殺しにしたし、他には――――」

「いや、もういい」

シグナムが止めると一真は、そうかと言って黙った。

はっきり言って全員が引いていた。しかも殺しかけたって言いかけて四分の三殺しと言い直したが、意味は同じだ。

「それにしてもたった二年間でそれだけのことをやっちゃうなんて、

すごいよ一真は」

「そうだな」

フェイトとヴィータの言う通り、犯人を殺しかけたということを除けばたった二年ちょっとでやったことにしたら異常だった。

「そうだ、狸」

「さっきはツッコミそびれたけど、誰が狸や！」

「テメェしかいねぇだろ。で、マメ狸。俺の部屋はどこだ？」

「さっきより酷くなっとる！って、部屋？・・・・まさか寝るつもりじゃあ」

「何当たり前のこと聞いてやがる。寝るつもりだ」

武装隊時代一緒だったはやては、一真の行動パターンや性格はそれなりに知っている。だからこそ、一真がやろうと思っていることを言い当てることが出来たのだ。

「部屋には案内するけど、寝たらあかん」

「何だと？」

「これから六課のみんなに一真君のこと紹介せなあかんし、その他にも色々とやってもらうこともあるんよ」

「よし、殺そう」

一真は声色を変えてそう言い、拳をつくる。

「ちょ、ちょっと待った！」

「何だよ？」

一真の声にたじろぐ。

「八つ当たりなら後でさせてあげるから、今はすることちゃんとせなあかんよ」

「チッ、わーったよ。だったら、さっさと部屋に連れていけ、狸」

「・・・・もうええ。リイン、一真君を部屋に案内してあげて」

「はいですぅ。一真さん、行きますよ」

一真は床に置いていた鞄を持ち上げるとリインと共に出ていった。

「・・・・泣いてええ？」

はやては泣きそうな顔で全員に聞いてきた。

「にゃははは、はやてちゃんお疲れ様」

「しっかし、一真の奴昔と全然変わってねぇな」

なのはになだめられるはやてを見ながらヴィータが言う。

「そうだね。武装隊のときも、仕事より眠ることだったもんね」

「確かにな。特に睡眠時間を寄越せと、理不尽な理由で上官をところに行こうとしたときは驚いたな」

「あー、あれなぁ。止めようとした私達もあぶなかったもんなぁ」

その時のことを思い出して全員は少し震えていた。

「そうだはやてちゃん。そろそろみんなを集めないと、一真君怒るんじゃない？」

「そうやね。じゃ、行こうか？」

なのは達がドアに向かって歩き始める中、フェイトはあることを思い出した。

（そういえば、はやては八つ当たりなら後でさせてあげるって言ってたけど・・・まさかね）

フェイトは自分の中で勝手に納得させると、なのは達を追った。

サンルーム

そこにはフォワードメンバーやバックヤードスタッフなど、機動六課のスタッフが揃っていた。

「えー、今日から機動六課に新しい仲間が加わります。それでは登場していただきましょう。どうぞ」

はやてに言われて段上に上がった一真。こんなみんなの揃う場であっても、服装はだらしないままだ。

「あー、今日から機動六課に出向することとなった神童一真だ。階級は一等空佐。以上」

そそくさと下りていこうとする一真。だが、はやてはそれを許さなかった。

「ちょっと待ちぃ！」

「んだよ？」

「まだや。質問とかあるかもしれんやろ？」

「へいへい。じゃあ一人な。はやて、誰か一人選んでくれ。俺ダリィから」

「誰か一真君に質問がある人」

はやてが聞くと、フォワードメンバーの中からゆっくりと手が上がった。

「じゃあ、キャロ」

名前を呼ばれたピンクの髪の少女、キャロ・ル・ルシエはゆっくりと声を出した。

「神童一佐――――」

「一真でいいぞ。いちいちそんな風に呼ばれっと、イライラしてくるから」

「えっと一真さんは八神部隊長と知り合いなんですか？」

「ああ、それな。はやてだけしゃなくて、ここの隊長陣全員に言えることだが、こいつらが武装隊にいるときからの知り合いなんだ。だから、こいつらと俺は同期。わかったか？」

「はい」

こうして一真の紹介は無事に終わった。

時間は経ち、今は3時。仕事の説明や六課の案内などは終わり一真が待ちに待った時間がやって来た。

「おい、はやて」

「ん、どうしたん？」

「お前、八つ当たりさせてくれるって言ってたよな。早くさせろ」

それを聞いてはやては困った。冗談で言ったことを本当にやらせろ

と言ってくるとは。

「そ、そやなぁ・・・・」

（多分、大丈夫やろ）

「わかった。それじゃついて来て」

「あぁ」

この時のはやて決断が、この日一番の大惨事になるとは誰も思っていなかった。

模擬戦と書いて八つ当たりと読む・前編（前書き）

今回からおまけが始まります。

模擬戦と書いて八つ当たりと読む・前編

機動六課の海上訓練施設には、はやての指示ですでになのは達とフォワードメンバーが揃っていた。

「一体なんだろうね。いきなり、訓練所に集まれなんて」

と言っているのはショート青髪をしているスバル・ナカジマだ。

「さぁ？もしかして、神童一佐と模擬戦だったりして」

フォワードメンバーにとって今最も起こってほしくないこと言っているのは、腰まである長いオレンジの髪の持ち主、ティアナ・ランスターである。

「まさかぁ」

「でも、神童一佐ってどれくらい強いんだろうね？」

赤髪の少年、エリオ・モンディアルがフォワードメンバーが一番気になっていることを呟く。

「一佐なんだからとても強いんじゃないかな？フェイトさん達なら知ってるかも」

キャロがそう言ったことによって全員が隊長陣を見る。

「どうなんですか、なのはさん？」

スバルの質問になのははは説明に困る。
なぜなら、この後のことがあるからだ。
「それはね・・・・模擬戦をしたら分かるんじゃないかな？」
地獄の始まりの時間は少しずつ近づいていた。

「みんな早いなぁ～」
「あ、八神部隊長・・・・に神童一佐」
「一佐はいらんと言ったはずだ。次付けたら殺「えっと、集まってもらった理由やけど、今から模擬戦してもらいます」
全員がはやての隠した一真の言葉は聞こえていたが、何も言わなかった。
「それって、あたし達と神童一――一真さんとですか？」
「そうや。あ、でもフォワード陣だけじゃあれやから、なのは隊長達もな」
「えっ！？」
「はやて！？」

「主!?」

「あたしらを殺す気か!?」

なのは達の言った言葉にスバル達が反応する。

「殺す気ってどういうことですか!?」

「それはやな――――」

はやてが説明に困っていると、一真が会話に入ってきた。

「なぁ、こいつら誰だ?」

「そういえば、一真君には紹介がまだやったな。この子からはウチのフォワードメンバーや。えっと左からフロントアタッカーのスバル・ナカジマにセンターガードのティアナ・ランスター。で、その隣がガードウイングのエリオ・モンディアルとフルバックのキャロ・ル・ルシエ、そしてキャロの使役竜のフリードや」

「「「「よろしくお願いします」」」」

「チームねぇ・・・いいんじゃねぇの。それよりも、はやて。お前だけ逃げようってじゃねぇよな?」

一真がはやてに対して死刑宣告をした。

「ちょ、ちょっと待って。何で私まで。それにリインが――――」

「これ」

と言って一真が手を出すと、そこにはリインが握られていた。

「はやてちゃ～ん、助けてくださ～い」

「いつの間に！？」

「さっき来るときに浮いてたから、こんなことだろうと思って捕まえておいた」

「さすが一真君・・・」

「こういう時のあいつは怖いな」

「じゃあ始めるぞ。テメェらに拒否権はねぇからな」

「神無、セットアップ」

［セットアップ］

一真の手には片刃の巨大な刀が。そして、服装は制服からＡＣＣのクラ〇ドの服のようなバリアジャケットに変わる。

「神無、殺るぞ」

［それ、字が違うわよ］

一真は眠れないことでいろんな意味で限界が来ていた。

その頃、理不尽な理由で戦うことになった人たちはというと。

「どうやってあの化け物の攻撃から生き延びるかだな・・・・」

「ヴィータ副隊長、それってどういう意味です？」

「今のあいつは、倒すつもりじゃなく殺すつもりで攻撃してくるから、そう言ったんだ」

「え、でも、模擬戦だから非殺傷設定じゃ・・・・」

エリオの言う通り、これは模擬戦であって実戦ではない。だから設定も酷くても気絶が限界である。のだが・・・・

「一真の場合、魔導師を攻撃するとき物理攻撃なんだよ。しかもあいつのデバイスの重さは異常だからな、当たるなよ」

「は、はい・・・・」

「次の注意点だけど、今の神童に手加減はないぞ。相手が赤ん坊でも子供でも女でも老人でも、本気で殺りに行くはずだからな」

その説明を聞いて、フォワード陣は完全に引く。

「さっきから気になっていたんですが、今のってどういう意味です？」

「エリオ、それは今は説明しないけど、理由を聞いたら一真を心のそこから怒ることが出来るよ」

フェイトが笑顔で言う。その時、エリオは背筋が寒かったとか。

「一真君にはちゃちな攻撃は一切通用せぇへんからな。みんな、最初から全力やで」

『了解！』

＞一真君、始めるよ＜

念話でなのはが聞いてきた。それに一真は、あぁと即答した。

＞それじゃあレディー、ゴー！＜

こうして理不尽な戦いが始まった。

「さぁて、誰からだ？」

［あんた、自分で探す気無いわけ？］

「ない。お前が探してくれるなら別だが」

［拒否ね。でも、近づいてきたら教えてあげるわ］

一真は神無を肩に担ぎ、会話をしながら歩いている。
初めから探す気はないように見える。

「範囲は？」

［そうねぇ・・・・半径４００ｍ圏内］

「あっそ。と、来たか。じゃあ、八つ当たりの開始だな」

一真が神無を構えた瞬間、頭上からは大量の桃色の光の玉と鉄球が、前からは金色の槍が、後ろからはオレンジ色の光の玉が飛んできた。

「あ？」

一真は気づいて体から魔力を放出させて、直撃コースで飛んできた魔力弾だけを消滅させる。

「ちっ、周りが見えねぇじゃねぇかよ」

一真の周りは外れた魔力弾が作り出した砂煙が立ち込めていた。

［それがあっちの作戦でしょ］

「そうらしいな」

一真は一歩隣に移動する。
次の瞬間、一真のいたところを何かが通り抜けた。

「シグナムか・・・・」

通り抜けたのはシグナムのデバイス、レヴァンティンのシュランゲフォルムだった。

「・・・吠えろ、蛇尾丸ってやらしてくれねぇかなぁ・・・・」

[何言ってんのよ、あんたは]

「あっちが蛇尾丸なら、こっちは斬月だ！」

わけの分からない対抗意識を燃やして、一真は斬月ならぬ神無を持ち上げる。

「月牙天衝！」
一真は攻撃を放つと同時に、真上に飛び上がる。

「「うおりゃあああぁぁぁぁぁ！」」

砂煙から一真が出てくるのを待っていたヴィータとスバルが仕掛ける。
しかし、二人の攻撃は当たる前に止められた。

「クソッ。スバル、退け！」

「させるかよ」

一真はヴィータのデバイス・グラーフアイゼンを弾き上げ、掴んでいたスバルのリボルバーナックルを離してスバルを蹴りあげる。

「隙だらけだな・・・・ヴィータぁ！吹き飛べやぁ！」

「がはっ――――」

一真は神無をフルスイングでヴィータを吹き飛ばした。

「はい、一人ぃ」

機動六課隊長・FW組、残り八人と一匹。

「大丈夫、スバル？」

「はい。ありがとうございます、フェイトさん」

思いっきり蹴りあげられたスバルは、フェイトによって助けられていた、

「でも、ヴィータ副隊長が・・・・」

「大丈夫だよ。それに、一真の一番の狙いははやてだと思うから」

「え？部隊長ですか？」

「うん。だから危険はないはずだよ」

スバルにそう言うフェイトだったが、このあとその認識が間違いだったことに気づく。

《一真の部屋》

一真「今回から始まりました、《一真の部屋》。いや、始まなんくてもいいけどよ。つか、何で始めやがったよ、クソ作者ぁ！」

なのは「一真君ダメだよ、ちゃんと進行しないと。ＭＣなんだから。アシスタントの高町なのはと」

神無［同じくアシスタントの、一真のデバイス神無よ］

なのは「この《一真の部屋》は、完全に言えばおまけのトークコーナーです」

神無［進行役の一真は一切やる気がないんだけどね］

なのは「まぁ、それが一真君のいいところなんだけどね」

神無［それ、違うような気がするわ。まぁいいけど］

なのは「にゃはは。それで、今回のお話は模擬戦が始まる前から模擬戦前半のお話だったんだけど、あれってもう八つ当たりじゃないよね」

一真「八つ当たりだぞ。あのクソ狸に対してだけのな」

なのは「だったら何で私達まで巻き込まれてるの！？」

一真「いや、お前らがいたほうがストレス発散のサンドバ・・・・いや、相手になるからな」

なのは「サンドバックっていいかけたよね！？サンドバックって！」

一真「気にすんな。さて・・・・」

神無［どこに行くのよ？］

一真「寝る。あとはだべるなり次回予告するなり適当に頼むわ」

一真様はログアウトされました。

なのは「えっと、本当に行っちゃった。神無、どうしようか？」

神無［次回予告して終わりましょ］

なのは「そうだね」

神無［始まった一真君の八つ当たりという名の模擬戦］

なのは「全力で戦うなのは達だけど、一真には全く歯が立たない」

神無［私達は無事に生き残ることが出来るのか、それとも・・・・］

なのは「次回、魔法少女リリカルなのは～七つの大罪～」

神無［【模擬戦と書いて八つ当たりと読む・後編】］

な・神「［スタンバイレディ！］」

模擬戦と書いて八つ当たりと読む・前編（後書き）

一真達に質問があれば、あまり多くは出すことは出来ませんが《一真の部屋》で紹介していきます。

模擬戦と書いて八つ当たりと読む・後編

「めんどくせぇなぁ・・・・」

模擬戦が始まって１０分。六課隊長・ＦＷ組で残っているのはなのは、フェイト、はやて、シグナム、ティアナ、キャロとフリードの六人と一匹である。

「はぁっ！」

シグナムに向かって振り下ろし直撃するが、それは幻術で消えてしまった。

「さっきのキャロも幻術だったな」

一真はキャロのブーストで強化されたティアナの幻術魔法、ブーステットイリュージョンで翻弄されていた。

「またか・・・・」

どこからともなく飛んできたオレンジと桃色の魔力弾を、一真は魔力を放出させて当たる直前で消滅させる。
幻影がいるため、どこから飛んできたか推測できない。

「こんなこと出来るやつは俺の記憶には存在しねぇ・・・・ってこたぁ、残ってるフォワード陣の誰かってことだな。神無。ここの幻を全部払うぞ」

［OK。で、どれにする？］

「この辺り一体だと思うから、範囲の狭いあれで行くか」

［わかったわ］

一真の足下にベルカ式の魔法陣が現れる。

「本当ならこんなめんどくせぇことしたくはねぇんだけどよ。しねぇと行けねぇ状況だからな」

一真は神無を振り上げる。すると神無が一真の魔力光と同じ灰色の稲妻を纏い始めた。

「轟け、天の雷。蒼龍破！」

一真を中心に龍の姿をした雷が落ち、幻影を消していく。

［ねぇ、一真。この魔法の名前、片方がよくない？色が灰色なのに蒼って変でしょ］

「気にすんな。さて、行くか」

「何ですか今の雷！？」

キャロは今落ちた雷雲もないのに雷を見て驚いていた。

「多分、一真さんよ。今の雷が消えたらあたしのシルエットが全部消えてたから」

「確かにそんなことが出来るのは奴しかいないだろうな」

「シグナム副隊長！」

「キャロ。私とティアナにブーストを使って何分保つ？」

「十分くらいが限界です」

それを聞いてシグナムは考えるしぐさをする。

「問題ない。それともう一つ。速度強化魔法を私に使ってくれ。厳しいと思うが」

「大丈夫です」

「そうか」

シグナムは少し微笑んだが、また真剣な表情となった。

「ティアナ、まだ行けるな？」

「はい！」

「それでは、我々であの化け物を少しでも削るぞ。隊長達に楽にさせるために」

「「了解！」」

「さっきから攻撃が誘導弾ばっかだな。俺の魔力を削るのが目的か？」

［ありうるわね。あたしとしてもあんたが負けるのは嫌だし、今から探索を始めるわ］

「いや、その必要はない」

「シグナムか」

一真が振り向くとそこにはシグナムが立っていた。

「俺と一対一でやんのか？」

「そんなはずがないだろう。今日は我々とお前の模擬戦なのだからな」

「模擬戦（八つ当たり）だろ。つーかな、何でお前らまでやってんだ？」

「は？」

一真の驚きの発言で、シグナムは唖然としてしまった。

「ちょっと待て。それは一体、どういう意味だ！？」

「どういう意味だって言われてもな。俺の狙いはあの狸で、お前らは一切関係ねぇぞ。何か成り行きでやることになってたから、何も言わなかったが」

＞ということは、私達はただ巻き込まれただけってことですか！？＜

ティアナが念話で一真に話しかける。

「あぁ。でも、もうそんなこといいだろ。俺の標的は、逃げて攻撃して俺の睡眠時間を奪ったテメェラ全員に切り替わってるからな」

一真の言葉にシグナムが目の色を変えた。

「そうか。ならば倒すまで」

「やってみな。うおらぁ！！」

「ぐっ――――」

一真の一撃をレヴァンティンで受け止めたが、最後まで衝撃を受け止めきれなかったため吹き飛ばされた。

「クロスファイアー・・・・」

「あそこか」

「シューット！」

一真がティアナの所に移動しようとした瞬間、

「フリード」

「なっ！？」

後ろから真の姿のフリードからブラストレイが放たれた。

「チィッ！プロテクション！」

一真はブラストレイを神無で、クロスファイアーシュートをプロテクションで防いだ。

「レヴァンティン！」

［ｊａ］

レヴァンティンの刃が離れていき連結刃とかわる。

シグナムはそれを一真へと向けて伸ばして行く。

「んなもんが俺に届くわけがねぇだろ！！」

一真はそれを簡単に弾き返す。

「当たり前だ。それはただの囮だからな」

「んだと？」

［一真、七時の方向。三百メートル先のビルの屋上よ］

「なっ！？」

そこにはファントムブレイザーの発射準備の完了したティアナがいた。

「させっか」

一真は神無に魔力を込める。

「メテオセイ――――」

「させません！アルケミックチェーン！」

キャロが鎖を召喚させて一真を縛り、動きを止める。

「主達を出すまででもなかったな」

シグナムは離れて、レヴァンティンをボーゲンフォルムに変えていた。

「駆けよ、隼！」

（マズイな、この状況は。どうやって打開する・・・・）

「ファントムブレイザー！！」

「シュツルムファルケン！！」

「フリード、ブラストレイ！！」

三方向からの攻撃が全て一真に直撃する。

「落ちたか？」

＞これで落ちていない方がおかしいですよ＜

＞普通ならな。だが、神童を普通と考えるな。奴は本当の化け物だからな＜

シグナム達は一真のいたところを見る。

「ふぅ・・・あぶねぇあぶねぇ。死ぬかと思ったぜ」

その声はシグナム達の視線の先からではなく、シグナムの後ろから聞こえてきた。

「貴様、いつの間に・・・・」

シグナムが振り向くと無傷の一真がビルの屋上に笑って立っていた。しかも、一真は神無を振り上げて柄を軸にして回転させている。

「そうだなぁ・・・当たる直前、転移魔法でここまで移動したんだよ」

「くっ・・・・」

神無の先には高速回転している巨大な灰色の玉が出来ていた。

「ティアナ！キャロ！急いで離だ――――！」

「獄龍破！」

「これで残りはあの三人だけか。さて、どこにいる？」

［これは、ちょっとやりすぎじゃない？］

「知らん。俺の睡眠を邪魔した奴は全てが悪だ」

かなりおかしなことを言っているが、誰もツッコミを入れることはなかった。

「はぁっ！」

「ホラよ」

一真は死角からの攻撃を神無で防ぐ。

「出てきたか。遅かったな」

一真は目の前にいるフェイトにそう言った。

「ヒーローは遅れて登場するってか？」

［それ悪役のセリフよ、一真］

「そうか？」

「一真、やりすぎだよ。どうしてここまで？」

「さぁ？やられたらやりかえすがモットーだからじゃね」

［プロテクション］

神無の張ったオートプロテクションがアクセルシューターとブラッディダガーを防ぐ。

「一真君。頭、冷やそうか？」

「一真君！一切容赦せえへんからな！覚悟しぃ！」

フェイトの後ろには魔王モードのなのはと、キレているはやてがいた。

「おい、はやて！何でテメェがキレてんだ！こいつらが巻き込まれた一番の原因のテメェがよ！」

それを聞いてフェイトがバルディッシュを退いて、一真に質問をした。

「一真、それってどういうこと？」

「お前ら、俺が隊長室にいたときに、俺に向けてはやてが言った言葉を覚えてるか？」

「・・・・」

全員が覚えてないと分かって盛大に溜め息をついた。

「はやては俺に八つ当たりは後でさせてやると言った。俺はこの時、はやてだけにすると考えていたんだが、あいつはお前らを呼び出して俺の相手をさせた。というわけで、お前らは完全に巻き込まれただけだ」

この場を静寂が支配する。

「は～や～てちゃ～ん?」

「は～や～て?」

「ちょ、ちょっと待ってぇな!それって私だけのせいやないやん!一真君だって、肝心なこと言わへんで進めたんよ!」

完全に責任の擦り付けあいである。

「まぁ、はやてちゃんへのお仕置きは模擬戦は終わってからだね。今は一真君にお仕置き」

「そんな殺生な・・・・」

「行くよ一真!」

フェイトはザンバーフォームのバルディッシュを振り抜く。

「っ――――」

（結構重いな）

「おらぁっ！」

一真はバルディッシュを弾き、神無を振り下ろした。

［プロテクション］

バルディッシュがプロテクションを張り、神無を受け止めた。

「砕けろぉ！」

一真がさらに力を加えるとプロテクションにひびが入る。

［ソニックムーブ］

フェイトはソニックムーブて離脱。それと同時にプロテクションは砕け、前方からなのはのディバインバスターが飛んでくる。

「カートリッジロード」

［カートリッジロード］

神無の柄の根本から二発の薬莢が弾き出される。

「メテオセイバー！」

神無から延びた魔力刃がなのはのバスターとぶつかる。

「ぶった切れぇぇぇ！」
一真のセイバーはバスターを真っ二つにした。
「やっぱなのはのバスターはキツイな・・・って、お前らマジですか？」
一真の目の前では、フェイトとはやてがブレイカーのチャージが終了しており、なのはももうすぐで完了するところだった。
「神無、カートリッジフルロード」
［カートリッジロード］
神無から残っている全てのカートリッジが排出された。
「全力全開！スターライト――――」
「電光一閃！プラズマザンバー――――」
「響け終焉の笛！ラグナロク――――」
三人の下に巨大な光球が出来上がる。
「「「ブレイカー！！！」」」
闇の書の防御プログラムの本体を貫いた3つのブレイカーが一真を襲う。
「ここだな」
一真は三大ブレイカーが当たる寸前で神無を振り下ろす。

「爆流破！」

一真の放った一撃が、なのは達の砲撃を押し返して巨大な魔力の竜巻を作った。そしてその竜巻はなのは達三人を飲み込んだ。

「終わった・・・・」

［思ったけど、この技反則よね。自分と相手の魔力を押し返して相手にぶつけるんだから］

竜巻が収まり、地面には気絶している三人が横たわっていた。

＞シャマル＜

＞どうしたの一真君？＜

＞模擬戦で九人ほど気を失って寝てるからなんとかしてやってくれ＜

一真は返事をまたないで念話を切ると、隊舎に向かって歩き始めた。

「よし。帰って寝るぞ」

理不尽な模擬戦。

勝者・神童一真。

《一真の部屋》

なのは「始まりました、《一真の部屋》。アシスタントの高町なのはと」

神無［一真のデバイス、神無よ！］

なのは「で、大事なＭＣの一真君はというと・・・・」

一真「Ｚｚｚｚ・・・・」

なのは「眠ってます」

神無［今回もこいつをほっといてトークしましょ。で、今回は模擬戦の後半部分だったけど、よくよく考えたら一真ってオリジナルの魔法使ったの一回だけなのよね］

なのは「えっ、そうなの？」

神無［そうよ。メテオセイバー以外はマンガから持ってきた技よ］

なのは「ということは私達のブレイカーを押し返したのもそうなんだよね。あれ凄かったなぁ・・・・」

神無［完全に反則技よ、あんなの。あんなの喰らって無傷でいられるのっているわけないわ］

一真「まぁ、そうかもな」

なのは「一真君！いつ起きたの？」

一真「さて、そろそろ時間だから次回予告して締めるか」

神無［あんた、それだけをしるために寝てたのね］

一真「模擬戦から一週間。俺達は訓練漬けの毎日を送っていた」

なのは「そんな中起きた一つの事件」

神無［それは犯人がもっとも起こしてはいけない事件だった］

一真「次回、魔法少女リリカルなのは～七つの大罪～」

な・神「［【魔王と鬼神と爆弾と】］」

一・な・神「「［スタンバイレディ！］」」

魔王と鬼神と爆弾と

模擬戦から一週間。
一真たちは訓練漬けの毎日を送っていた。
これは余談だが、あの後目を覚ました悪魔と死神によってはやてへのお仕置きが実行されたのは、言うまでもない。

「今日の訓練はここまで！」

『ありがとうございました！』

「飯だな飯。今日は・・・・うーん」

「訓練終わったら生き生きしてやがんな、お前は」

と後ろを歩くヴィータがそう言った。

「当たり前だ。俺は睡眠欲と食欲、特に睡眠欲には忠実だからな」

「いや、忠実過ぎるだろ」

呆れたヴィータが半眼で言う。

「どうしたのティア？」

「いや、何でこんな人が一佐になれたんだろうって思って」

「聞くか？ここ数年で俺がしてきたこと」

それを聞いた瞬間、なのは達が急いで一真の口止に動いた。

「か、一真、早く食堂に行こう」

「そ、そうだよ。お腹減ったしね」

フェイトとなのはが一真のの腕を引っ張って食堂に歩いて行った。

「フェイトさん達、どうしたんでしょうか？」

「何かを隠してるみたいだったけど」

フェイトとなのはが一真の口止に走った理由が、自分達に聞かせないためだということはエリオもキャロも知らない真実である。

「ま、知らねぇほうがいいこともあるってことだ」

「はぁ・・・・」

この後、スバル達が食堂で見たのは普通に食事している一真と悶絶しているなのはとフェイトに、楽しそうに食事をしているヴィヴィオだった。

スバル達が来る少し前。
一足先に一真はなのは達が連れてきたヴィヴィオと食堂に来ていた。

「パパは何にするの？」

「なぁ、ヴィヴィオ。前にも言ったけど俺をパパって呼ぶの止めてほしいんだが」

「パパはヴィヴィオのこと嫌いなの？」

ヴィヴィオは一真に目に涙を溜めて言う。

「うっ・・・・」

完全に言葉を詰まらせる一真。なかなか言葉を出すことが出来ず結局、

「はぁ、俺の負けだ。嫌いじゃないから、もう好きなように呼んでくれ」

と言ってしまった。それを聞いたヴィヴィオは笑顔に変わり、

「うん、パパ！」

「はぁ・・・・」

完全にヴィヴィオに負けた一真であった。
そんな一真を見てなのはとフェイトは笑い始めた。

「あんだよ？」

「いや、一真君でも勝てないんだって思ってね」

「こいつに勝てる奴がこの起動六課にいるのかどうか知りたいな」

「まぁ、そうかも」

と言ってフェイトはなのはを見た。

「さて、今日は裏メニューの担々麺にすっかな」

裏メニュー。その聞いたことのない言葉に？マークを浮かべた。

「裏メニュー？」

「何それ？」

「俺が頼んで作ってもらった、おそらく俺しか食べれない」

それを聞いて興味を持った二人は、

「ちょっと食べてみたくなった」

「いい一真？」

そう聞いてくる二人に一真は、

「いいけど、後で文句言うなよ」

と言った。
そして二人はうなずく。その判断が失敗だと気づくのはもう少し先。

一真の頼んだ裏メニューの担々麺。
見たところ、外見上には普通の担々麺と違いはない。

「最終確認だが、本当に食べるんだな？」

一真は念を押して確認をするが、二人は首を縦に振り肯定の仕草をした。

「わかった。食え」

そう許可が出て二人は担々麺を一口食べた。その瞬間、二人の時間は止まった。

「だから言ったのに。俺しか食べれないってよ」

一真はなのは達の方へ出していた丼を引き寄せ、何事もなかったかのように担々麺を食べ始めた。それと同時に二人の時間は動き出す。

「「っ～～～～～～～～！！！！」」

口が痛くて二人は声を出せないで悶え苦しむ。
これがスバル達が来るまでにあった出来事だ。

「ちょっ、なのはさん、フェイトさんどうしたんですか！？」
なのは達は口をパクパクさせながら悶えているだけで言葉をなさない。
「スバル、まぁ誰でもいいんだが水持って来てやれ」
一真に言われてスバルが二人に水を持ってきた。
なのは達はそれを一気に飲む。それでは足りないらしく、二人はスバルに催促して何度か水を持って来てもらった。
数分後。二人は落ち着いたらしく、やっと声を出すことが出来た。
「まだ口の中がヒリヒリするよぅ」
「なのはママ、大丈夫？」
「大丈夫だよ、ヴィヴィオ」
「よく食べられるね、そんなもの」
一真は担々麺を食べ終えてお茶を飲んでいた。
「さっきはどうしたんですか？とても辛そうでしたけど・・・・」
「大丈夫だよ、キャロ。ただ、一真の頼んだ裏メニューがね」
一真の頼んだ裏メニュー。その正体は・・・・
「すっごく辛かったんだよ」
激辛メニューだった。

「辛いねぇ・・・・この程度がか？」

それを聞いてなのはとフェイトは驚く。

「大丈夫。なのはとフェイトの舌は正常よ。異常なのは一真だから」

「さて、訓練まで寝るか」

一真は食器を持って立ち上がる。

「え？お仕事は？」

「一週間分のデスクワークは済ませてある。何か事件が起きない限りは仕事はない。じゃな」

と言って食堂から出ていった。

「凄い。もう一週間分の仕事終わらせてるなんて」

「あいつは自分が寝るためなら何でもするからな。あの時の模擬戦がそうだ」

シグナムの言う通り確かに寝るためなら何でもしていた。

それがトラウマなのかキャロが少し震えている。

「私達も行こうか、フェイトちゃん」

「そうだね。ヴィヴィオも行こ」

「うん」

「なのはさん、フェイトさんまた後で。ヴィヴィオもまたね」

「うん。それじゃ、また後で」

ヴィヴィオを部屋に連れて行ったあと、二人はオフィスに向かって歩いていた。

「ねぇ、なのは」

「どうしたの？」

「一真、食堂から出ていく前に一週間分の仕事は終わらせたって言ってたけど、本当？」

「うん、本当だよ。一真君の分も私の所に回ってくるんだけど、本来なら一週間分の仕事が提出されてたから私も驚いちゃった」

「本当だったんだ。でも、そんなに早く仕事終わらせて、いつも何をしてるんだろ？寝てるだけじゃないだろうし」

「そうだよね。もしかしたら、新しい魔法を考えてたり」

「まさかぁ」

その頃、一真の部屋ではこんなやりとりが行われていた。

「これをお前に組み込んでおくか」

「ちょっと待ちなさい。それは流石に獄龍破ほとじゃないけど、マズくない？」

「問題ねぇだろ。そんなこと言ってたら、お前の中に組み込んである魔法、全部がマズイことになるだろ」

「それはそうだけど」

「だから入れるぞ」

なのは達の言う通り、魔法を神無に組み込んでいた。

時間は進み、まもなく訓練が始まる時間。

なのははは一真の部屋に向かっていた。

（今日も起きてるかな？）

なのはは、一真の部屋に着くといつもようにノックをした。

（あれ？）

いつもなら「入っていいぞ」と返事があるはずなのだが、今日は返事が帰ってこない。

「寝てるのかな？」

そう思い入ってみると、予想通り一真はベッドで眠っていた。

「あ、なのは。いいところに来たわ。あたしじゃ一真起きないから代りに起こして」

「いいよ」

神無に頼まれて一真を起こすためにベッドに近付いた。

「一真君、起きて。訓練の時間だよ」

一真の体を揺すりながら起こそうとするが、起きる気配は一切ない。

「起きてよ、一真君」

もう一度起こそうとするが、やはり起きない。

（こうなったら）

なのはは一真に近づいて、鼻を摘もうとしたなのははふと思った。

（一真君の寝顔、可愛い・・・・子供みたい）

いつものヤル気の無さそうな顔との違いでマジマジと見ていたのが失敗だった。

「きゃあっ！！」

突然誰かに腕を引っ張られ、ベッドに倒れこんでしまった。

「えっ、えっ！？な、何！？」

あまりにも突然の出来事過ぎて頭がついていかない。

「か、一真君！？」

そして目の前には一真の顔。

一応はカッコイイ部類にある一真の顔を超近距離で見て、なのはは更にパニックを起こす。

［ゴメン、なのは。こんなことになるだろうと思ってあえて黙ってたけど、寝てる一真って近くにあるものを抱きこもうとするのよ］

それを聞いたなのはは我に返った。

「か、神無。そういう大事なことは最きゃっ、一真君、力強いよ・・・・」

一向になのはを放す気配のない一真に、抵抗を弱くしていく。

「・・・・」

（何だろう、この感覚。すごく落ち着く）

なのはは今の状況を忘れ、このままでも良いかなって思い始めていた。

（何だか眠くなってきちゃった。このまま眠っても・・・・）

［いいネタ手に入ったわね］

「か、神無!!」

［あたしの存在を忘れるくらいよかったみたいね。一真との添い寝］

「えっと、その・・・・神無、このことは内緒にしててほしいんだけど」

［いいわよ～。ふふふっ、これで脅しネタが出来たわ］

とんでもないデバイスだった。

さて、なのはが幸せな時間を取るか仕事を取るか悩んでいると（なぜ悩む？）機動六課中に警報がなり響く。

「うるせぇなぁ、何だよ？」

この音を聞いて一真が目を覚まし、そのおかげで解放されたなのはもベッドから立ち上がる。

「アラート!?」

「はやて、こりゃ何だ？」

一真がはやてに状況を聞くため通信する。

〔事件や。クラナガンのビルがテログループに占拠されたんや。怪我人はまだいないんやけど、人質が数人いてな手出しが出来ん状況らしいんよ〕

「また面倒な・・・はやて、俺が出る」

〔もう一人ほど一緒に――――〕

「私も行く！」

「なのは？」

〔なのはちゃん！？〕

「私も行く。いいよね、二人とも？」

その時のなのはは一真によると魔王の再臨したようだったと、はやてによると睡眠を邪魔された一真のようだったと語っている。

「お、お待ちしておりました神童一佐、高町一尉」

現場に来た二人を見てギンガは恐怖を抱いた。

なぜなら、かなり不機嫌なオーラを出していた。

「詳しい状況を説明してくれるかな、ギンガ？」

「は、はいっ！テロリストは十人以上。人質はこのビルのスタッフで人数は五人ほど」

「あっちからの要求は？」

「身代金の要求だけです」

「あっそ・・・・」

一真はそう返し、ビルを見上げた。

「んなくだらねぇことで、テロなんかやりやがって・・・・俺の睡眠時間を奪いやがって。殺すこと、」

「あんな気持いい時間を過ごしてたのに、それを邪魔するなんて。お仕置き、」

「「決定だな（だね）」」

この時ギンガは、本気で犯人に同情したという。

「なのは、俺は正面から行く。お前は上からだ」

「了解」

「私達はどうすれば？」

「ここにいろ。邪魔したら、テメェらも容赦しねぇからな」

管理局員が言う言葉ではないのだが、今の一真に反抗するのは死と感じたギンガは黙って頷いた。

「神無、行くぞ」

「オッケー！」

一真はビルの入り口へと向かい、

「行くよ、レイジングハート」

「ＯＫ　Ｍｙ　Ｍａｓｔｅｒ」

なのはは屋上へ飛んで行った。

「うおらぁ！死ねぇ！」

一真はテロリストの攻撃をプロテクションで防ぎながら、神無で容赦なく薙ぎ倒していく。

「あんた、手加減してやってる？あたしの重さ結構あるのよ？」

「手加減？するわけねぇだろ。俺の睡眠を邪魔した奴の存在価値はねぇ！」

［あんた、本当に管理局員よね。たまにどっかで犯罪を犯したんじゃないかと思うわ］

「しゃらくせぇ！テメェら全員吹き飛びやがれ！」

一真の手には灰色の光が集まっていた。

［それを使っちゃうわけね］

「セロ・オスキュラス！」

とんでもない魔法を放つ一真。それが当たったテロリストメンバーは死んだかのように気絶していく。

「早くこのテロリストの首謀者を殺すぞ」

一真は首謀者を目指して階段を上っていく。

別行動のなのはは、

「ディバイン・・・・バスター！！！！！」

こっちも容赦なかった。

「うわあああぁ！」

なのはに恐れてテロリスト達は魔力弾を撃ち込んでくるが、

「遅いよ」

全てをアクセルシューターで撃ち落とし、ゆっくりと進んでいく。
いつもならこんなことをするなのはではないのだが、あの一真との一時を奪われたのが頭に来たのだろう。
全力で魔砲を敵へ雨のように撃ちこんでいる。

「面倒だからいっそのことスターライトブレイカーやっちゃうかな・・・」

とんでもないことといい始めた。

［マスター。それは流石に・・・それに一真もいますし］

「そうだった」

怒りで、一真の存在が頭から消えていたらしい。何とも恐ろしい。

「急ごうかレイジングハート。一真君が待ってるかもしれないからね」

「ボス！大変です！」

「どうしたぁ！？」

ボスと呼ばれた人物が手下に呼ばれ立ち上がる。

「管理局の奴らが突っ込んできました！」

「何言ってやがる。まだ外に――――」

そこまで言って、中から爆発音が聞こえてきた。

「な、何だ！？」

「だから、管理局の奴らが突っ込んできたんですよ！」

「人数は？」

「野郎と女の二人でさぁ！」

「オメェ、ふざけてんのか？」

ボスは手下に詰めるよる。

「いえ、ふざけてなど――――」

「そいつはふざけてねぇよ」

「まぁ。ふざけたことをしたのは間違いないけどね」

魔王と鬼神がとうとうやってきた。

「て、テメェらこそふざけてんじゃねぇぞ。こっちには人質がいるんだぞ！」

一真は人質となっている人達を見て、

「そうだな。なのは、頼む」

なのはは一真の言葉の意味を理解して、人質の人達の周りにオーバルプロテクションを張った。

「これで、テメェらはこの人達に危害を加えることは出来なくなった、ってわけだ。さて、どうする？おとなしく投降するか？」

挑発するように一真が聞く。まぁ、テロリストがこんなことで諦める訳がないと知っていて一真は聞いているのだが。

「してたまるか！テメェら、これが見えねぇか？」

ボスが持っているのは何かのスイッチらしい。

「これはこのビルに仕掛けて――――」

「なげぇんだよ！」

バキといい音が部屋中に響く。

「テメェのせいで」

「がっ！」

「俺は」

「も〝、も〝うやべふぅっ！」

「睡眠時間が減ったんだよ！」

「ごぼぅっ！」

殴られ続けるボスを見て手下は、

「うわあああぁぁぁ！！！！」

逃げようとしたが、バインドで捕まった。

「誰が逃がすって行ったのかな？頭、冷やそうか？」

「ぎゃあああああ！！！！！」

「ギンガ！」

「はやてさん、フェイトさん。どうしたんです？」

はやてとフェイトが慌てた様子でやってきた。

「なのは達は？」

「もう中に入っていきましたよ」

「遅かったか・・・・」

はやての呟いたその一言にギンガは疑問を持った。

「それってどういう――――」

「ぎゃあああああ！！！！」

断末魔の叫び声が聞こえて数分後。すっきりした二人が出てきた。

「あれ、はやてちゃんにフェイトちゃん。どうしたの？」

「えっと、犯人達は？」

「なのはのバインドで縛ってある。全員死んで――――気絶してるから大丈夫なはずだ」

いい直した一真の手に血が付いていることを三人は気づいていた。

「帰るぞ、なのは」

「うん♪」

ここに来た時と違う二人にギンガは恐怖覚えたという。

これは余談だが、フェイト達が犯人達の所に行くと犯人達は気絶しているものの「すみません、二度としません」と繰り返していて、人質になっていた人達は地獄画図を見たと言っていた。
これも余談だが、一真となのはの二人ははやてによって思いっきり怒られたという。

《一真の部屋》

一真「ヤル気はねぇけど、始まりました《一真の部屋》。MCの神童一真だ」

なのは「アシスタントの高町なのはと」

神無［同じくアシスタントの神無よ］

一真「しっかしすげぇな。こんな小説のアクセス数が二万超えてんだからよ」

なのは「皆さんありがとうございま～す。これからも応援よろしくお願いします」

神無［で、今回はあんた達二人がメインだったけど、あれはやりすぎでしょ］

一真「何を言ってる。当然の報いだ」

なのは「そうだよ、神無。あの人達にはちゃんとしたお仕置きが必要なんだよ」

神無［言ってることはいいんだけど、行動の理由が本当に管理局員？って気がするわ］

一真「まぁトークはここまでだ。次は感想への返事だ」

なのは「ＴＯＵＤＡさんからだよ」

神無［楽しんでくれてありがとうね］

なのは「えっと、『爆流破と蒼龍破はいいけど獄龍破は完全に死にますよ？』だって」

一真「そういや、シャマルがシグナムとキャロとティアナが一番酷い状況だって言ってたな」

なのは「ははは・・・ん？これははやてちゃんのお仕置き方法だ！ありがとうＴＯＵＤＡさん。今度試してみます」

一真「じゃ、最後に次回予告だな」

なのは「最近になって見付かったロストロギア『アビス』」

神無［それを狙って動き出す者達］

一真「全ての物語はそこから加速する」

なのは「次回、魔砲少女リリカルなのは～七つの大罪～」

神無「【デモンズ・ストーン・前編】」

一真「さぁ、お前の罪を数えろ」

な・神「［ちっがーう］」

一真「ごふっ」

な・神「［スタンバイレディ！］」

「あの～、これ模擬戦ですよね」

スバルの質問になのはが苦笑いを浮かべる。

その理由は、目の前で行われている模擬戦が異常に激しすぎるからだ。

「私達はそのつもりなんだけどね。当の本人達が――――」

そこまで言ったところで、今模擬戦をしている片方から通信があった。

〔なぁ、そろそろ終わらせていいか？〕

「いいんじゃないかな？」

「貴様、本気でやっているのか！？」

「あー、多分、やってんじゃねぇの。いや、やってるやってる」

完全に挑発としか取れないような発言を繰り返す一真。

「貴様・・・・」

「さて、本日初めての魔法を使いますか」

「何？まさか、今まで一度も魔法を使ってなかったのか！？」

「もち。肉体強化系の補助魔法もな。つか、魔法ってのはなあそこにいるなのはの封印魔法みたいなことを言うんだ。こんなのは魔法ではない！」

訳の分からないことを言い始める一真に、なのはからの通信が入る。

〔一真君！何でそれを知ってるの！？〕

「確かこんなんだったよな。リリカル、マジ――――」

〔それ以上はダメー！！！！〕

なのはが叫んだところで一真は通信を切った。

「さて、なのはイジメはここまでにして」

［あんた、いい性格してるわね］

神無がツッコミを入れるが、一真はスルーしてシグナムを見る。

「獄龍破、いい？」

「いや、それは流石に・・・・」

あのシグナムが青い顔で拒否する。それほどまでに獄龍破は驚異的だったらしい。

「わかった。なら、これだな。神無」

［カートリッジロード］

一真は神無を頭上で回転させて背中に持っていく。

［やることは分かったけど、これも結構容赦ないわよ］

「いいんだよ、終われば。さて、行くぞ」

一真はシグナムに向かって走り始めた。

「レヴァンティン」

［エクスプローション］

「紫電」

シグナムは構え、射程範囲に一真が来るのを待つ。

「神無、タイミングは分かってるな？俺は攻撃に集中するから」

［もちろん］

一真の体が射程範囲に入った瞬間、シグナムは一真の目の前から消え後ろに回り炎を纏ったレヴァンティンを振り抜く。

「一閃！」

「予想通りだな」

［プロテクション］

神無の張ったプロテクションで紫電一閃を受け止め、一真はシグナムの懐に潜り込む。

「おらよっと！」

一真は神無でシグナムを上に吹き飛ばし、追い掛けるように跳び上がる。

「俺の勝ちだな、シグナム」

一真は全包囲から斬りつけ、最後に上から切り落とす。

「超究武神覇斬Ｖｅｒ．５。成功」

［成功って、今まで何度も使ってるくせに何言ってんのよ］

「さて、寝る――――」

＞一真さん、早くそこから逃げてください！＜

突然のエリオからの念話に一真は頭を傾げた。

逃げろと言われても何がなんだかという状況である。

＞何言ってんだお前。魔王と死神が同時に降臨するわけでもあるまい・・・・し＜

一真は何かを感じて後ろを振り向く。

そには満面の笑みを浮かべたなのはが立っていた。しかし、その笑み表面だけで目が一切笑っていない。

＞降臨したんですよ、魔王が＜

「一真君、次は私と模擬戦しよ？」

「いや、ちょっと待て。俺、今シグナムと模擬戦やったばかりで・・・・」

「だから？疲れてないでしょ」

「いや、バリバリ疲れて・・・・」

「フェイトちゃ～ん、始めるよ～」

フェイトから返事がある前になのははレイジングハートを構える。

＞まぁ、神童。がんばれ＜

＞シグナム、テメェ！＜

「レストリクトロック」

一真はバインドで拘束され、動くことが出来なくなった。

「スターライト・・・・」

「か、神無！助け――――」

［今回は自業自得ね］

「ブレイカー！！」

一真は桜色の砲撃に飲み込まれ消えた。

ご愁傷さま、一真。

「あのヤロウ・・・全力でやりやがって。死んだらどうすんだよ」

一真は医務室から出て、食堂に向かっている。

全力のブレイカーを喰らって気絶していたのだ。

［あんたがなのはをイジメルからでしょ］

「何言ってやがる。俺は本当の魔法ってのがどんなものか説明――」

ヒュンッ

桜色の玉が一真の頬をカスって行った。

「・・・・」

ゆっくりと後ろを振り向く。そこには笑顔のなのはがいた。

「また、医務室に行きたい？」

「いえ、結構です・・・・」

「それと、はやてちゃんが隊長室に集合だって」

「はやてが？」

「うん」

一真がなのはと一緒に隊長室へ行くと、そこには隊長陣がそろっていた。

「それじゃ全員そろったから、みんなを集めた理由を説明しよか」

はやてがボタンを押すとモニターが現れ、そこには赤黒い宝石が写っていた。

「これは最近になって発見されたロストロギアなんやけど「コキュートス」」

はやてが名前を言おうとしたのと同時に一真がそう呟いた。

「いや、でもあれとは色が違うか。あれは碧だったしな・・・ん？どうしたお前ら。もの珍しい物見るような目で見やがって」

一真は全員が自分に視線が集まっていることに気づいた。

「いや、だって一真がロストロギアの写真を見てから様子がおかしくなったから・・・」

「まぁ、気にすんな。はやて、続けてくれ」

「いや、それで誤魔化そうってのは無理だろ。ちゃんと説明しろ」

「そこはかとなくダルいんだが・・・説明しねぇと納得してくれねぇよなぁ。神無、あれの写真残ってるか？」

［あるわよ］

「じゃあ出してくれ」

神無に頼み一真は一枚の写真を映し出してもらう。そこには、はやての出した写真に写っているロストロギアと同じ形だが色の違うものが写っていた。

「これは・・・ちょっと前に発見されたロストロギアでな、名前は「コキュートス」。使用用途は・・・まぁ、分かってない。だから、厳重に封印して保管してある」

「そうか。しかしその写真をなぜお前が持っている？」

シグナムのいいたいことは全員が理解した。

「確かにそうだよね。「コキュートス」は厳重に封印して保管してあるはずなのに、何で一真が持ってるの？」

一真は黙ったまま喋る気配はない。

「何で持ってるのか、か・・・言う気はないな。というよりも、今テメェらに言うことでもないだろう？」

なのは達は一真から今まで聞いたこともないような冷たい声を聞いた。

「っ――――――！」

「テメェ！！」

ヴィータが一真の胸ぐらを掴む。
しかし、一真は動じないでヴィータを見下ろす。

「何だ？本当のことを言っただけだろ？それよりもはやて。そのロストロギアの説明を頼む」

「そ、そやね」

ヴィータは一真から手を放し、一瞥してからはやての方を見る。

「このロストロギアの名前は「アビス」。数は一つだけやなくて何個かあるみたいなんやけど、詳細は一切不明で、今ユーノ君に頼んで調べてもらってる最中や」

はやてがそこまで言ったところで一真は、はやてをじとっとしたた目で睨む。

「どうした一真？」

さっきのことがあるためか、少し警戒したような声で聞くヴィータに一真は、

「ワーカーホリックのテメェらには分からねぇかもしれねぇが、すっげぇ嫌な予感がするんだよ」

いつも通りのやる気のない声でそう答えた。

「私達ワーカーホリックじゃないもん」

「ただお仕事が好きなだけだよ」

なのはとフェイトが言い返すが、どう聞いてもワーカーホリックと言っているようなことを言う二人。

その二人を見て一真とヴィータが溜め息をついた。

「ははは。まぁ、私達がワーカーホリックかどうかは置いといて、一真君は勘がええなぁ」

一真はそれを聞いて顔を引きつらせた。

「明日から機動六課は滞在任務に付くことになりました。理由はさっき見せたロストロギア「アビス」の反応がとある次元で見付かったからや」

「数はいくつです？」

「3つ。詳しい場所は行ってみな分からんけど、だいたいの場所は把握しとるよ」

「その場所ってどこなの？」

なのはが聞くとはやての顔は笑顔に変わる。

それを見て一真の顔は更に拒否反応を見せる。

「海鳴市や」

さて次の日。飛びすぎだ?はて?何のことだ。話を進めるぞ。
機動六課の入り口前。一真となのはとフェイト以外の全員が集まっていた。

「遅いね、なのはさん達」

「確かにそうね。珍しい事もあるわね」

「遅いわけじゃねぇぞ。一真を呼びに行ってるんだ」

「一真さんをですか?」

エリオが聞くとヴィータはうなずく。

「あぁ。あいつは今回の任務に何が何でも行きたくないらしい」

「いつもは嫌と言いながらでも仕事はちゃんとしますよね。私達にも仕事だけはサボるなって言ったの、一真さんですし」

「そうだな。だから、私達もよく分からないんだ。なぜ神童がなぜ行きたくないのか」

シグナムは昨日の隊長室てのことを思い出していた。

「海鳴市や」

「な、なぁ、はやて。俺、その任務行きたくねぇんだが・・・・」

「どうして？一真君も海鳴市出身なんだから、家族や友達に会えるからいい――――」

「良いわけあるか！！とにかく俺は明日から休むからな！」

そう言って一真は逃げるように出ていってしまった。

「どうしたんだろ、一真？」

「さぁな。今日の奴は何を考えているのか、いつも以上に分からなかったのは確かだ」

全員がその考えは同じようだ。

「ま、考えてもしょうがない。なのはちゃん、フェイトちゃん。明日、一真君を起こしに行ってくれへんか？」

「うん」

「わかったよ、はやて」

これが昨日の隊長室での出来事で、一真の部屋では・・・・

「一真君、開けてよ！」

「知るか！！行きたくねぇんだよ！」

「でも、お仕事はちゃんとしろっていつも言ってるの一真だよ」

「今回だけはそんなは無視だ。テメェらだけで行ってろ！」

完全ダダをこねる子供である。

「しょうがない。フェイトちゃん、強行手段に出るよ」

「うん」

「行くよ、レイジングハート」

［ＯＫ、マイマスター］

なのははレイジングハートをブラスターモードにして、一真の部屋のドアに向けて構える。

「ディバインバスター！」

ドアは吹き飛び、一真の部屋に入ることが出来るようになった。

「お前ら、無茶苦茶だろ。って、何考えて――――」

「一真君」

「一真」

二人は一真にデバイスを向ける。

「な、何だよ？」

「早く準備しようか？」

「じゃないと、間違えて殺傷設定で撃ち抜いちゃうかもしれないよ？一真の頭を」

とんでもない脅しであった。

ここまでされると命のおしい一真は渋々準備を始めた。

「お前ら、恨むからな」

「ウィーッス」

全員を待たせていた張本人は、悪びれる様子は一切なくいつも以上にやる気はない顔で現れた。

「遅い！」

「知らん」

ヴィータの文句をバッサリと切り捨て、はやての方を見る。

「さっさと行こうぜ」

何とも空気を読まない発言。それに全員から誰のせいだと言う視線が向けられるが、一真は一切無視である。

「そうやね。じゃ転送ポートに行こか」

転送ポートに着くと、一真がある疑問を抱いたらしく質問をした。

「そういや、あっちのどの辺りに着くんだ？もしかして山の中とかじゃねぇだろうな？」

「違いますよ。なのはさん達の友達の方の家の庭に転送されるんです」

一度海鳴市に行ったことのあるスバルがそう説明すると、一真は納得したらしい。

「それじゃ海鳴市へレッツゴー！」

「何でそこまでテンションが高いんだよ」

と言うわけで、機動六課のメンバーは海鳴市へと向かった。

「着いたー！」

「いつ来てもいいとこです～」

着くなり元気のいいスバルとリインに対照的に、やはり一真はテンションが著しく低かった。

周りから見ても大丈夫かと思うような下がりかただ。

「大丈夫ですか、一真さん？」

「エリオか。そうだな・・・大丈夫かって聞かれると、微妙なところだな」

そんな会話をしていると、金髪の女性が走ってきた。

「なのは！フェイト！はやて！みんな！」

「アリサちゃん！久しぶり！」

「元気だったアリサ？」

「うん！」

「すずかちゃんはどうしたん？」

「今買い物に行ってるわ。もう少ししたら来るわよ」

そこまで話してアリサと呼ばれた女性は一真に気づいた。

「こいつ誰？」

「さぁ誰だろうな？」

「彼は神童一真君。最近、機動六課に来たばかりなんよ」

「だってよ」

自分の紹介してくれているのに完全に他人事の一真である。

「ふぅん。あたしはアリサ・バニングス。なのは達とは幼馴染みよ」

「カ○ビィのコピー能力みたいな名前だな」

「誰がバーニングだ！バニングス！」

「俺は一言もバーニングとは言ってねぇぞ。まさか、自分でバーニングと認識してんのか？」

ブチン

何かが切れた音が聞こえ、一真以外の全員が下がる。

「死ねぇ！！」

アリサの拳は一真の顔を狙うが、首を傾けるだけで避ける。

「おお、怖い怖い。手から炎は出ねぇんだな。出たら面白かったんだが」

「まだ言うか！」

しばらくの間、アリサは一真に向け拳を振り下ろしていた。

「一真君のおかけでちょっと時間食ってしもうたけんど、今日の調

査を始めよか」

機動六課のメンバーは、前回来た時と同様に待機所として借りたアリサの別荘にいた。

「俺はここで待機――――」

「させへんよ。ちゃんと調査班に加わってもらうことは決定済みや」

「ならせめて、なのはと一緒に回らせてくれ。こいつがいたら大抵のことは何とかなる」

「ええよ。じゃあ、組分けはなのは隊長と一真君とスバル。ヴィータ副隊長とシグナム副隊長とティアナ。最後はフェイト隊長とエリオとキャロの三組。これで今日の調査をしてもらうよ」

『了解』

「へぇ～い」

調査を始めたなのは組だが、珍しい状態に陥っている人物がいるためそっちに興味が行ってしまい調査に集中出来ないでいる。

「えっと、一真。どうしたんですか？そんなに警戒して？」

「いや、ちょっとな・・・・よしっ、ここにはいねぇな」

「今の一真君の状況って、こっちに来たくないって言ってたことと

関係あるの？」

「大有りだ。ここには唯一俺が勝て――――」

「一真ぁ～～～～！！」

「ごふぅっ！！！！」

奇声と共に一真の姿が二人の視界から消えた。
代わりに彼が立っていた場所には、ヴィータと同じくらいの少女が立っていた。

「しょ、小学生？」

「あれ、一真は？」

一真がその場からいなくなった原因を作った少女は、本気で消えた一真を探している。

「えっと・・・・あそこで」

「気絶してるのがそうなんだけど・・・・」

二人が指差す先には白眼を剥いて気絶している一真がいた。

「ホントだ！」

「ってちょっと！」

「え、何？」

少女はスバルに呼び止められ、一真の方へ向けていた足を止めた。

「ダメだよ、いきなりあんなことしちゃ」

「あんなこと？」

「ドロップキックだよ」

「ああ！！」

少女は何を言われているのか理解していなかったが、そう言われてなぜ怒られているのか理解したらしい。

「ごめんなさい」

「私達じゃなくて一真君にだよ」

「いいんだよ、一真には・・・・って、一真の知り合い？」

「そうだけど、君は？」

スバルの質問に少女は、純粋な笑顔を二人に向けて驚くべきことを言い放った。

「えっと、楠木千歳、２１歳。一真の幼馴染みです」

「「・・・・」」

三人の間に沈黙が流れ、

「「えええぇ！！？幼馴染みぃぃぃ！？」」

一真が自分の階級を行った時と同じ叫びが木霊した。

海鳴市の外れの森の中。銀髪女性が立っていた。

「ここが『あれ』のある次元ね・・・・かなり良い所じゃない。それに次のグリード候補に裏切り者のラースもいるみたいだし。ふふふ、面白くなりそうね」

女性は妖艶な笑みを浮かべると、どこかへ転移した。

《一真の部屋》

なのは「お久しぶりです、皆さん。アシスタントの高町なのはです」

神無「アシスタントの神無よ。で、あいつは？」

なのは「そう言えばどこにいったんだろ？」

神無「まぁどうせどこかで――――」

一真「神無！セットアップ！」

なのは「どうしたの一真君!?黒焦げだけど?」

一真「隆浩の野郎に挑戦状叩き付けたら、次元を超えて俺の部屋に魔力砲をぶっ放して来やがった」

なのは「それってＴＯＵＤＡさんの所の？」

一真「あぁ」

神無「で、あんたはどうすんのよ?わざわざあっちに行ってやるわけじゃ無いでしょ」

一真「当たり前だ。これをあいつの所に飛ばす」

なのは「そ、それって・・・・死ぬんじゃ」

一真「知るか！吹き飛べ！獄龍破！」

なのは「えーっと、見なかったことにして続けようかな。今回は更新までが長かったけど、どうしたのかな?」

神無「インフルエンザで受けることの出来なかったテストの追試や、なかなか文章を組み立てられなかったりしたのが原因らしいわ。更に、本来なら前後編にするつもりはなかったらしいけど、詰め込み過ぎて結局前中後編にする予定みたいだし」

一真「適当だな、オイ」

神無「当たり前よ。この小説、始めたはいいけど最後がいつになる

か皆目見当がついてないんだもの」

一・な「「マジ？」」

神無「マジよ」

一真「少しは考えて書けよな作者」

なのは「まぁ、作者さんへの文句はそれくらいにして、感想のお返事しようよ」

一・神「「そうだな（ね）」」

なのは「ＴＯＵＤＡさんは犯人の処刑シーンが面白かったって。あれは・・・・当たり前だよね」

一真「そうだな。俺の眠りを妨げる存在は悪でしかないからな・・・・って、隆浩！人の部屋にトンデモねぇ魔力砲を撃っておきながら、何がか弱い子羊だ！いつか消し墨にしてやる」

神無「なのは。あの罰ゲーム、最終的にははやてを食べないといけないらしいわよ」

なのは「大丈夫。一真君が最後まで食べてくれるから。または某無表情の宇宙人さんを呼ぶから」

神無「あんた、さりげなくだけど鬼ね・・・・」

一真「そんじゃ、《一真の部屋》もそろそろ時間だから、次回予告するぞ」

なのは「そうだね」

神無「一真の幼馴染みと名乗る少女、楠木千歳」

なのは「彼女はある意味で最強の少女だった」

一真「機動六課が地球で平和な一時を過ごしているなか、裏では闇がうごめていた」

神無「次回、魔法少女リリカルなのは～七つの大罪～」

なのは「【デモンズ・ストーン・中編】」

一・な・神「「「スタンバイレディ！」」」

二人は千歳の爆弾発言で固まっていた。

「あれ？どうしたの？」

「えっと、千歳・・・・さんだったよね」

スバルは千歳ちゃんと言いそうになったが、ギリギリで飲み込んだ。

「うん」

「一真さんの従兄弟とかじゃなくて、本当に幼馴染み！？」

その質問に答えたのは、

「そうよ。ちぃは一真の幼馴染みで、ちゃんと成人を向かえてるわ」

本来なら魔法を知らない人間には知られてはいけないデバイスの神無だった。

「あ、神無ちゃんだ！久しぶりぃ！！」

「久しぶりね、ちぃ。今日は早かったけど、いつもの？」

「違うよ。今日はお散歩してたら、一真をたまたま見つけたから走って来ただけ」

「たまたま見つけただけでドロップされてたまるか！」

起き上がると同時にツッコミを入れる一真に、千歳は抱きついた。

「お帰りぃ、一真！」

「・・・・はぁ」

一真は千歳を怒ることを諦めて、千歳の頭を撫でた。

「あぁ。ただいま」

「ねぇ、一真。ずっといるこの人達誰？一真のお友だち？」

今頃になって二人を知らないことを思い出したらしい千歳。

「まぁそんなことところだな。こっちから、高町なのは」

「よろしく、千歳ちゃん」

「で、こっちがスバル・ナカジマだ」

「初めまして千歳さん。スバル・ナカジマです」

「なのはちゃんとスバルちゃんだね。よろしくお願いします！」

スバルちゃんと呼ばれた当の本人は、あまりそう呼ばれないためか恥ずかしそうにしていた。

「千歳さん、スバルちゃんは止めて欲しいんですが・・・・」

「何で？スバルちゃんはスバルちゃんでしょ？」

可愛く首を傾げる千歳に、スバルも簡単に負けた。

「スバルちゃんでいいです」

＞一真君、これからどうする？千歳ちゃんがいるから調査は・・・・＜

＞問題ねぇよ。千歳は魔法のことは知ってるし、何かあったらその辺に転がってる木の棒を持たせときゃ何とかなる＜

＞それに、ここには俺達もいるんだ。大抵のことなら解決するだろ。それに、あいつらも近くにいるだろし、大丈夫だ＜

＞でも、ちゃんと警戒はしておいてよ＜

＞ああ。わかってる＜

一真は盛大な溜め息をつきながら、面倒なことになりそうだと考えていた。

一真達は千歳を加え海鳴市の調査を再び始めた。

そんな中、なのはとスバルは隣を歩く二人を複雑な心境で見ている。

＞頼むからそんな目で見ないでくれ。言いたいことは分かってるからよ＜

二人の目線の先では手を繋いで歩いている姿があった。
手を繋いで欲しいと言い出した千歳はご機嫌だが、一真の方はいろいろと諦めていた。

「なのはちゃん達も魔法使いなの？」

「そうだよ。一真君とは違う魔法だけどね」

「そうなんだぁ。今度見せてね？」

「こっちにいるときに模擬戦するかもしれないから、その時にね」

「うん！」

「・・・マジか」

地球に行くと言った時よりも嫌そうな顔をする一真。
いつもならダリィと言って結局はやるのだが、今回は本気でやりたくなさそうだ。

「一真さん、どうかしたんですか？」

「スバル。こっちにいる間に模擬戦、または訓練が入ったら俺は全力で逃げるからな」

「え？どうして？」

「理由は言えねぇけど、あの魔王どもが本気で追い掛けて来ようが何が起ころうが、俺は――――」

「一真もその模擬戦って言うのやるよね？」

「・・・・うっ」

一真が返答を躊躇う。

＞もしかして千歳さんに負ける姿を見せたくないとかですか？＜

＞そんなだったら、死ぬほど見せてやるよ＜

＞だったら・・・・＜

＞この際だ。スバル、お前も道連れな＜

＞へ？＜

＞何が起きようと、絶対に文句は言わせねぇ。いいな！＜

＞は、はい＜

一真は何かを決心したらしく、千歳を見て答える。

「あぁ、やってやるよ。なぁ、スバル？」

「え、あ、はい」

その時の一真の顔はとんでもなく悪の顔だったらしい。

調査を終えた一真達は千歳も連れてアリサの家に戻ってきた。

「調査結果だか、こっちは異常無しだった」

「こちらも異常無しでした、主」

「同じく異常無しだったよ」

「そか。それはええことや。こっちも全力でロストロギアの反応さがしとるけど、なかなか見つからんのよ」

「まぁこっちに来たばかりだし、すぐには見付からないよ。時間はまだあるんだし、慎重に見つけていこう。ね、はやてちゃん」

「そやね」

報告が終わり、次に全員の興味が向いたのはフリードと遊ぶというよりも、フリードを玩具にしている千歳だった。

「ずっと気になってたんですけど、あの娘って一真さんの妹さんですか？私とエリオ君よりも年下みたいですけど」

キャロの質問に一真、なのは、スバルの三人は困る。どうしたら、誤解なく信じてくれるのだろうかと。

「ちぃ。こっちに来て、みんなに自己紹介しなさい」

「はぁーい！フーちゃん、また遊ぼうね」

「キュ～」

フリードは疲れきっていて、もう遊びたくないようだ。

「一真さん、いいんですか?デバイスの神無が喋っても?」

「問題ねぇよティアナ。そんなこと吹っ飛ぶくらいのことが起きるから」

一真の言っている意味が分からないまま、ティアナは千歳の方を見た。

「初めまして、楠木千歳です。２１歳です。一真の幼馴染みです。皆さんよろしくお願いします」

千歳はペコリとお辞儀をした。

「こちらこそ・・・・・・・」

はやてはそこまで言って、異変に気づいたらしい。
それを見た事情を知っている三人は耳を塞ぐ。

『何いいいい!?』

七人の叫び声が響きわたる。

「おい、一真!本当に幼馴染みか!?お前の妹とかじゃないよな!?」

[スバルと同じ反応をありがとう、ヴィータ]

「あぁ、間違いなく俺の幼馴染みだな」

「見た目は僕らより年下ですよ！？」

「安心しろ。見た目は子供、中身も子供だ」

「まさか一真ってロ――――」

「言わせねぇぞ！それ以上は絶対に言わせねぇ！つか、テメェも似たようなもんだろ、フェイト！」

「感電死がいい？」

「すみませんでしたぁ！」

「千歳ちゃんが本当に小学生やったら犯罪やで一真君！」

「だまれ、マイクロ狸！揉み魔のテメェに言われたかねぇわ！」

「神童。本当は妹で、あえて別の名前を使わせて幼馴染みと言わせてはいないか？」

「そんな発想が出てくるテメェが怖いわ！こいつは正真正銘の俺の幼馴染みだ！」

全員にツッコミ入れて疲れたのか、一真は肩で息をしている。

「はぁ、はぁ、はぁ・・・テメェら、ボケ倒すのも大概にしろよ」

「だって、なぁ・・・」

ヴィータの言葉に全員が頷き、

『一真（君／さん／神童）がペド野郎だと思ったから（です）』

「テメェら、ぶっ殺――――」

「うっさいのよ！」

「ぶっ――――！」

一真の叫び声に似たツッコミを聞いて、アリサがやって来たのだ。

「何しやがる・・・・」

「あんたが煩いのが原因よ！人の家で叫びまくって・・・・少しは考えなさい」

「知るか・・・・って、そいつは？」

一真はアリサの後ろにいる青く長い髪の女性に気がついた。

「あ、すずか。久しぶり！」

すずかと呼ばれた女性はなのはに気づき、なのは達の方に走りよる。

「なのはちゃん、フェイトちゃん、はやてちゃん。久しぶり！」

「久しぶりやなぁ、すずかちゃん」

「うん！元気だった？」

「元気だよ。すずかちゃんも元気そうでなりよりだね」

四人は楽しそうに話している。

それを見て一真は、

「一応、あんたにも紹介しとかなきゃね。あの娘は月村すずか。あたしやなのは達の幼馴染みよ」

「へぇ～」

「で、あの娘は誰よ？」

アリサは千歳を指差しながら言う。

「こいつはだな――――」

「えっと、初めましてですよね。私、月村すずかって言います」

さっきまでなのは達と話していたすずかが目の前にいた。

「俺はあいつらの同僚の神童一真だ」

「よろしくお願いします」

「あぁ。ちなみに敬語は使わなくていいぞ。普通に話してくれ」

「は・・・うん」

「ねぇ一真。もう一回聞くけど、あの娘は？」

（またあの反応が来るのか・・・・まぁいい）

「千歳！こっちに来い！」

フォワードメンバーと話していた千歳がトテトテと走ってくる。

「どうしたの、一真？」

「この二人に自己紹介しろ。初対面だろ？」

「うん」

一真にそう言われて千歳は二人の方を向く。

「一真の幼馴染みの楠木千歳、２１歳です。よろしくお願いします」

「・・・ねぇ、一真。この娘、本当にあんたの幼馴染み？」

「あぁ、間違いなく俺の幼馴染みだな。ってか、お前らってあいつらみたいに驚かねぇのな」

「あたしもすずかも、魔法のことを知ってから大抵のことは驚かないわ」

「そうなのか？」

「そう、かな。でも、少しは驚いたよ」

「そうか。って、何だ千歳？」

一真は千歳が自分の服の裾を引っ張っていることに気がついた。

「この人達だ～れ？」

「こいつらか。こいつらはだな――――」

「アリサ・バニングスよ」

「月村すずかです。よろしくね」

「アリサちゃんとすずかちゃんだね。よろしく！」

全員の自己紹介が終わり、一真がこれからどうしようかと考えていると、なのはがとんでもないことを言い出した。

「これから少しの時間だけど、訓練しようか？」

「どこでやるんですか？」

「う～ん・・・そうだ。昔私が練習してた場所なんだけど、結界の中でやれば大丈夫だし。そこでやろうか」

さて、場所は変わり桜台。

訓練をするために来ているのだが、かなり場違いの人物がいた。

「わぁーい、訓練だぁ！頑張ってね一真、神無ちゃん」

そう。なぜか千歳がいるのだ。

「一真。お前、何考えてんだ？これから訓練すんだぞ」

ヴィータがそう言ってくるのも無理はない。

「そうだな・・・・」

そう言う一真の手には大剣の状態の神無と、シュベルトフォルムのレヴァンティンがあった。

「そろそろ教えた方がいいんじゃない？」

「教えなくてもバレるだろ。ほれ、千歳」

レヴァンティンを千歳に渡す。それを見ていたフェイトは、

「一真！レヴァンティンを千歳に渡してどうするの！？危ないよ！」

「・・・危ないなら渡すかよ」

「それってどういう――――」

フェイトは突然空気が変わったことに気づいて言葉を飲み込んだ。

「ち、千歳さん？」

ティアナの呼び掛けに、千歳は下を向いたまま反応しない。

「俺が地球に来たくないと言った理由、教えてやるよ。神無、カートリッジロード」

［カートリッジロード］

神無から空薬莢が弾き出される。

「メテオセイバー！！！！」

神無から延びた魔力刃が千歳に向かって振り下ろされる。

「一真！」

全員が、当たると思った瞬間。メテオセイバーは弾かれていた。

「不意打ちか・・・まぁまぁだが、ヌリィな」

聞き覚えのある声で、初めて聞く喋り方。一真以外の全員が自分の耳を疑った。なぜなら、今のそう言ったのは一真がメテオセイバーを放った相手、千歳からだったからだ。

「テメェ・・・今までサボってやがったな？」

下を向いていた千歳が顔を上げる。その顔は今までの幼い子供のようなものではなく、目は釣り上がり不良と言われてもおかしくないものであった。

「い、イヤ。サボってたわけじゃなくだな・・・」

「だったら何だ？言えるよな？」

「仕事が忙しくて――――」

「それをサボったって言うんだよ！」

＞ね、ねぇ、一真君。千歳ちゃんどうしちゃったの？＜

＞あいつはな、刀、あるいは刀に近い形状の物を持つと性格が変わるんだよ＜

＞二重人格、ですか？＜

＞普通はそう思うのが妥当だ。でもな、スバル。刀を持っていようが持っていまいが、どっちも素の千歳だ。そして千歳はな――――＜

「一真。テメェは鍛えてなおしてやる！拒否権は一切ねぇからな！？」

「あ、あぁ」

＞俺の師匠だ＜

一真の言葉に全員が驚いた。あの千歳の性格が変わったかと思うと、一真の師匠だという。

これは驚かない方がおかしいというものである。

＞師匠ってことは、一真さんより強いんですか？＜

＞あぁ。こいつは獄龍破を簡単に弾き返してきやがる。だから、俺はこんなことになるだろうと思ったからこっちに来たくなかったん

だよ〜

「一真！何してやがんだ！？早く行くぞ！」

「あぁ。そんじゃ、また後でな」

そのまま二人は森の中へと入っていった。

「凄かったですね、千歳さん」

「うん。性格が変わるなんて思ってもみなかったわ」

千歳の豹変ぶりを見て全員が唖然としていた。

「一真さんが本気で嫌がるって、どんなことをしてるんでしょうか？」

「う〜ん・・・ちょっと気になるよね」

「じゃあ、スバルとエリオは私じゃなくて千歳ちゃんに頼もうか？一真君がいるから大丈夫だと思うよ？」

なのはの提案を二人は全力で拒否した。

「冗談だよ。それじゃあ、私達も――――――」

ドォン

今の音は一真達方から聞こえてきた。

「一真、大丈夫かな？」

「はぁっ！」

「それ、本気でやってんのか？」

千歳は振り下ろされた神無を片手で持ったレヴァンティンで受け止めた。

そんな力がこの小さな体のどこにあるのだろうと気になるところだ。

「ふんっ！」

千歳は神無を弾くと、一気に一真の懐に潜り込んできた。

「ヤベっ・・・・」

「反応が遅いんだよ！」

一真は下からの切り上げを防ぐことが出来ず、そのまま上に打ち上げられる。

「がはっ――――！」

「落ちろ」

「クソっ」

一真は千歳のいる方に手を向けプロテクションを張り、千歳の攻撃を受け止める。

「防ぐのはいいが・・・・その程度の魔法じゃ無理だな」

プロテクションは千歳が力を入れていくに連れヒビが入っていき、ガラスが割れるようにプロテクションは割れた。

「じゃあ、改めて。落ちろ！」

「がっ！」

レヴァンティンをもろに受けた一真は、受け身をとることが出来ないまま地面に叩きつけられた。

「予想通り、弱くなってんじゃねぇか」

「始めたばかりで判断してんじゃねぇよ」

一真は立ち上がり、千歳を睨みつける。

「じゃあ、あたしに勝ってみろ」

「やってやる」

一真と千歳の模擬戦はなのは達が呼びに来るまで続いていた。
なのはが来たときには二人の戦った場所には木はなく、更地と化していた。

「楽しかったね、模擬戦」

模擬戦が終わり、レヴァンティンを一真に渡したため元に戻っている。

「楽しくねぇよ・・・・」

「え～、そうかなぁ？」

（あそこまでボロクソに言われて楽しいわけあるか。忘れるために帰って寝た方がいいな。よし、寝よう）

二人はこんな調子だが、後ろを歩いているなのは達は千歳の変わりように慣れないでいた。

「今の千歳とレヴァンティンを持った時の千歳が同じだって」

「そうだよね」

フェイトとなのはは変わった時の千歳を思い出していた。

「まだ信じられないわね。あの千歳さんが一真さんの師匠だなんて」

ティアナは一真と手を繋いで歩いている千歳を見ながら言う。

確かにさっきの千歳なら納得はできるだろうが、今の千歳からは一真に言われたって信じることは出来ないだろう。

「たしか一真さんの話だと、あの獄龍破を弾いちゃうんだよね」

「どうやったらそんなことが出来るんでしょうか？」

＞本人曰く気合いと根性らしいぞ＜

エリオの質問には話を聞いていたらしい一真が念話で答えた。

「そんなことで、あんな巨大な魔力の塊を弾くことが出来るんですか！？」

一度獄龍破をモロに受けたキャロとしては驚きだった。

＞それをこいつはやってのけたぞ。あの時は本気で萎えたなぁ・・・・＜

その時のことを思い出したらしく、前にいる一真はちょっと遠い目をしていた。

あれを弾かれるとやる気をなくすのは、なんとなく分かる気がする。

突如話は変わるが、今ここにいるメンバー九人の内、七人が女性。

しかも全員が美のつくレベルである。そんなのが町を歩いていると、こんなのが現れるのは当然である。

「ねぇねぇ、君達可愛いねぇ」

「今からどこ行くの？よかったら俺達とお茶しない？」

「こんな野郎やガキよりも、俺達と来た方が楽しいぜ？」

絡んで来るのはどう見たって軽そうな男達。

その男達にあえて聞こえるように、

「あー、お前ら。この粗大ゴミどもの相手をする必要はねぇから。帰るぞ」

帰って寝たい一真はこう言い放った。おそらく一番手っ取り早く終わるだろう。

「テメェ、今何て言いやがった！？」

当たり前だが、一真の言葉に腹を立てた男Ａがキレてそう言ってきた。

「粗大ゴミだが。何か問題でもあったか？」

「ふざけんじゃねぇぞ！」

今までなのは達に向いていた興味は、一瞬で一真への怒りへと置き換わる。

一真がこれを狙っていたことを全員が理解した。

「千歳はさがってろ」

「うん」

自分達の周りにいた男達は一真の方に行ったことで助かったと思った者はいなかった。なぜなら、全員が男達が無事に帰ることが出来

るのだろうかという思いが表れたからである。

「死ねぇ！」

「テメェがなぁ！」

振り被った男Ａに対して急所を蹴りあげる。
それを見てエリオは顔を歪めて、それ以外のメンバーは何が痛いのだろうかという顔をしていた。
これは女子には分からない痛みであるから、そういう反応は間違いではない。

「はっきり言うぞ。俺は眠いんだ。邪魔するなら消す」

「やっちゃえ、一真ぁ！」

完全に火に油を注いだ二人。完全にキレた残りの二人は一真に殴りかかるが、カウンターで秒殺された。

「さっさと帰って寝るぞ」

「私も～・・・・一真、おんぶ～」

模擬戦で疲れたのか、眠そうな千歳を一真は背負って歩き始めた。

「やっぱり、あの二人。どこをどうみても兄妹よね」

ティアナの言葉に全員が頷いた。

「これで十八体・・・・簡単ですむわぁ、人間は堕ちやすくて」

銀髪の女性の前には三体の人形の生物が立っていた。目は真っ白でそれ以外の部分は全て黒。

「じゃあ、あたしが呼ぶまでここに入っていなさい」

女性が開けた次元の穴に、三体は入っていく。

「さて、これからどうしようかしら・・・・」

悩むような仕草をしているが、その表情には笑みが浮かんでいた。

「・・・・」

［凄い状況ね］

「ねぇ、ねぇ、一真。私もお酒――――」

「ダメだ。ガマンしろ」

「えぇ～！」

「ほれ、お前の好きなリンゴジュースだ」

「ありがとう、一真♪」

千歳はリンゴジュースを渡してもらってお酒のことは忘れたらしく、ご機嫌でリンゴジュースを飲み始めた。

「何でこうなってんだ？」

一真がそう言ったので回想モードに突入しよう。それは今から３０分前。

一真がヴィータに起こされたところから始まる。

「普通、あんな起こし方するか？」

「リインが起こしに行ったのに起きねぇお前が悪いんだよ」

「ヴィータちゃんはやりすぎです」

リインが最初に起こしに来ていたのだが、なかなか起きないためリインがヴィータを呼んだのだ。だか、ヴィータが普通に起こしても起きないのでアイゼンでぶっ叩いたのだ。

「いいんだよ。こいつにはこれくらいで」

（こいつ、模擬戦で落としてやる）

そう心に決めた一真だった。

「で、何の用だよ？人が気持よく寝てたのによ？」

「夕飯だから一真君を呼んで来てって、はやてちゃんに頼まれたんです～」

それを聞いた瞬間、一真の目の色が変わった。

なぜ目の色が変わるのか。その理由にヴィータはすぐに気がついた。

「そういうことは早く言えリイン。そう言えば早く起きたぞ」

「そ、そうですか」

そんな会話をしている内に一真達は食堂に着いた。

「あ、一真君。やっと起きたんか」

「飯って聞いてりゃもうちょい早かったぞ」

「そか」

「で、１つ聞きたいんだが、今日は何でここまで豪勢なんだ？」

一真の目の前にはかなり豪華でかなりの量の料理があった。

「よくよく考えたら一真君の歓迎会してないこと思い出してな、じゃあ今日やってしまおうということになったんや。で、私達で頑張って作ったんよ」

「うわ。すっげぇ聞きたくなかった真実」

しばらくすると全員が食堂に集まった。

「一真、おはよぉ～」

起きたばかりでまだ眠そうな千歳がフラフラと一真に近づいてきた。

「おはよなわけあるか。今は夜だ。アリサ、ちょっといいか？」

「何よ？」

「こいつに顔を洗わせてやってくれ」

一真は眠そうでフラフラしている千歳をアリサに渡した。

「わかったわ。千歳、こっちよ」

「うん～」

千歳を任したあと、部屋を見る。知っている顔がほとんどだが、よく見ると赤い髪でリインほどの大きさの女の子がシグナムのそばにいることに気づいた。

「どうかした一真君？」

「シャマルか。どうかしたってわけじゃねぇんだが、あんなチビいたか？」

一真はシグナムのそばにいる女の子を指差しながら言う。

「アギトちゃんのことね。あの娘はＪＳ事件の時に保護したユニゾンデバイスでね、シグナムがあの娘の前のロードに任されて今はシグナムの相棒なの」

「ふ～ん」

顔を洗って千歳が帰ってくると同時に、部屋中にはやての声が響きわたる。

「今回は一真君の歓迎会ということで、主役の一真君。一言お願いします！！」

「お、俺！？」

＞はやて、テメェ！なんつー無茶振りしやがる。無理だ！＜

＞無理でもやらなあかんよ。千歳ちゃんが目をキラキラさせてんやから＜

言われて隣を見ると千歳が目を光らせて、一真が何を言うのかと期待ＭＡＸで一真を見ていた。

＞わかった。でもな、振ったのはお前だから面白くなくても文句いうなよ？＜

＞もちろんや＜

一真ははやてからマイクを受け取った。

「あー、今回の主役らしいが全然そんな自覚もなく、テンションの

上がらない一真だ。一言って言うから簡単にすます。今日は上下関係無しにして好き勝手盛り上がれ！いいな！？」

一真の一言で会場が盛り上がる。

一真としては、どこに盛り上がる要素があるのかと聞きたいようだった。

「ありがと、一真君」

「礼を言われても困るんだがな」

「一真、早く～」

早く食べたいと千歳が袖を引っ張っていた。

通常時の千歳には甘い一真は、

「千歳が限界みたいだから、行ってくる」

千歳に腕を引っ張られて山のような料理のもとへ連れていかれた。

この後、しばらくは平和なものだった。

一真と千歳は千歳の自己紹介をしながら食事をしていたし、ＦＷメンバーはスバルとエリオが限界まで食べてキャロに心配されていたし、隊長陣はアリサやすずかと仲良く食事をしていた。

こんな平和な時間は突然終止符を打つことになる。たった二人の異変から。

その異変に気づいたのは、千歳、リインと食事をしていた一真だった。

「ん？」

「どうかしたですか？」

「気のせいならいいがな、フェイトとシグナムの様子がおかしくないか？」

「フェイトちゃんとシグナムちゃん？」

指摘された二人の様子がおかしいのは明白だった。顔は真っ赤になっており、シグナムの目には涙、フェイトからはいつもからは想像もつかないような言葉づかいになっていた。

「・・・・酒か」

誰の目から見てもそれしか考えられない状況だった。

「ははは～、一真くん元気～」

「ん、ああ・・・・ってお前もか、なのは！」

「なにがぁ？それよりも、ヒック、はいジュース」

「あ、あぁ。サンキュー」

一真は、なのはから渡されたものがジュースでないと分かっていたため口はつけなかった。

「それじゃあね～」

と、ここまでがさっきまでに起きたことである。

「マズイな・・・・リイン、ＦＷメンバーとヴィヴィオとアギトを連れてこい」

「は、はいです！」

Ｔ－ウィルスが感染するのかように増えていく酔っぱらいの数。
一真はどうやって逃げたらいいのか考えていた。

「一真さん！千歳さん！」

呼ばれて顔をそっちへ向けると、リインとエリオにキャロ。そしてアギトがいた。

「お前が一真か？」

「そうだが、自己紹介はあとだ。それよりスバルとティアナは？」

「酔っぱらったアリサさんと八神部隊長に捕まってた私達を助けてくれたんですけど、代わりに捕まっちゃって」

「一口飲まされたとたんすぐに・・・・」

「クソ狸にカ○ビィが・・・・って一口？」

一口という言葉に引っ掛かった一真は、自分が持っているなのはから渡されたジュース（？）に目を向ける。

（すっげぇ嫌な予感がするんだが・・・・）

一真はそれを一口飲んで驚いた。喉が焼けるように痛い。

「がぁ――――」

「パパ、大丈夫!?」

「あぁ・・・・」

一真は確認のためもう一度飲んだが、やはり焼けるような痛みが喉を襲う。

「この酒、どんなアルコールの度数だよ。こんなもん飲んだら、どんな奴でも一発なのは当たり前だ」

「でも、一真さんは大丈夫なんですね?」

「まぁ一真は、昔から酒には強かったからね。だから大丈夫なんでしょ」

一真はもう1つあることに気がついた。この食堂に、シャマルがいないことに。

「まさか、あいつらのグラスに酒を入れたのって――――」

「どうないしたんや、一真くん?」

「は、はやて・・・・」

逃げようとしたが、隊長陣が逃げないように周りにいた。

「一真くん、さっきのジュース飲んでくれたぁ？」

「なのは、あれはジュースじゃ――――」

「テメェ、なのはが入れてくれたものが飲めねぇってのか！？」

「フェイト、キャラが壊れてるぞ」

「ほら食堂、飲め。飲んでくれないと私・・・・」

と言いながらシグナムが一真の腕を掴みグラスを口に近づけて行く。

「んだよ、この力・・・・強すぎだろ・・・・」

そして口に酒が入る瞬間、

「シャマルゥゥゥゥ！」

という叫びがバニングス家に木霊した。

《一真の部屋》

一真「始まらなくてもいいものが始まったぞ～」

神無「えっと今回はなのははお酒でダウンして欠席よ。で、代わり

に前回の終りと今回から出演した一真の幼馴染みの千歳に来てもらったわ」

千歳「楠木千歳です。皆さんよろしくお願いします」

神無［今回だけど、ちぃのこととあんたの甘さが露呈したわね］

千歳「あれって他のみんなもでしょ？」

一・神「［ちげぇわ！］」

一真「何かを条件にあそこまで性格が変わる奴がそこら中にいてたまるか！」

千歳「そうなんだぁ」

神無［これ以上は疲れるだけだから、感想の返事に行くわよ］

二階堂さんへ

千歳「身長詐欺じゃないもん！」

神無［いや、２１歳でその身長は詐欺よ］

一真「身長だけじゃなく性格も、詐欺っちゃあ詐欺だな」

千歳「神無ちゃん、一真がイジメル～」

神無［セットアップ］

一真「テメェ！」

千歳「何が詐欺だ！ぶっ殺すぞ！」

ＴＯＵＤＡさんへ
一真「テメェ、やりたい放題しやがって・・・・」

神無［懲りないのね、あんた］

一真「あの野郎は俺が殺す」

千歳「晶彦、あたしは牛乳飲んでなかったから身長が伸びなかったわけじゃねぇからな。ただの体質だ」

一真「さすがに体質だけじゃねぇだろ。神無、モードリリース」

千歳「そうだよ。お父さんもお母さんも私よりおっきいもん」

一真「二人とも確実に俺よりも低いけどな」

千歳「おっきいもん！」

一真「そうだな・・・・はぁ、次回予告すっぞ」

神無［そうね］

一真「鳴り響いたのは１つのアラーム」

神無［それは新たなる闇との出会い］

千歳「そして自分の中の罪との出会いでもあった」

一真「次回、魔法少女リリカルなのは～七つの大罪～」

神・千［「【デモンズ・ストーン・後編】」］

一・神・千「「［スタンバイレディ！］」」

「う～、頭が痛いよぉ～」

こう嘆いているのは管理局のエースオブエースの高町なのは。

「昨日確かシグナムと一緒にご飯を食べてて、うぅ・・・・思い出せない」

「テスタロッサ、私もだ。昨日の食堂の途中から、クッ・・・・記憶がない」

一番の醜態をさらしたライトニングの隊長二人にいたっては記憶がないらしい。

（この二人は記憶がないほうが幸せかもしれねぇ。けどな・・・・）

「テメェら、全員正座しろぉ！」

今の一真にはその程度のことはどうでもよかった。

「一真君、もう少し声の大きさ下げて。頭に響いて、ガンガンするんや」

「黙れ、クソチビ狸」

今、一真からの説教を受けているのは機動六課の隊長陣を筆頭にしたｏｖｅｒ　ｔｗｅｎｔｙの皆さんだけ。未成年組と千歳とリインとアギトはというと、はやてとアリサに酒を飲まされ完全にノック

ダウンしたスバルとティアナの看病をしている。
ちなみに、昨日の夜囲まれた一真達が無事な理由は、キレた一真と神無を持ってバトルモードと化した千歳がはやて達全員を気絶させたため、無事だった。

「テメェとアリサのせいでダウンしてる奴がいるんだが、それでも自分の頭が痛いと言えんのか？あぁ？」
それを聞いた二人はすぐさま、

「「すみませんでしたぁ！」」

と、土下座をするがその程度では一真の怒りは収まらない。
なのは達には、一真の後ろに鬼が見えていた。

「次にフェイトとシグナム！」

「「は、はい！」」

「聞いた限りだとテメェらは記憶がねぇみてだな。だが、そんなことは関係ねぇ！」

「わ、私達は何をしたんだ？」

「そ、そうだよ。私達には記憶がないんだから、証拠を――――」

「あるんだよ、んなもん」

証拠なんてないと思っていた二人の顔に陰が入る。

「神無、例のヤツ出せ」

［いいの？二人とも精神がイっちゃうんじゃない？］

「知るか！」

［わかったわよ］

神無は昨日の二人の映像の一部を写す。

『テメェ、なのはが入れてくれたものが飲めねぇってのか！？』

『ほら神童、飲め。飲んでくれないと私・・・・」

そこに映っていたのは、一真に対してドスの聞いた声で思いっ切り脅しているフェイトと、目に涙をためて泣き脅しをしているシグナムだった。

それを見た二人は、目を見開いている。

「まずフェイトだが。飲まない相手を脅すってどういうことだ！？」

「これは酔っていたからで・・・・」

「そうだな。俺だったからよかったが、これがもしエリオやキャロ、ヴィヴィオだったどうするつもりだ？」

「はい・・・・」

「次にシグナムだが・・・・ってお い聞いてるか？」

「・・・・」

返答はない。よく見ると、目を開けたまま気絶していた。
よほど精神的にショックだったのだ。

「あの、一真。怒っている理由って、それだけじゃないよな？」

手を上げて、質問するヴィータ。
それに一真は大きくうなずいて、

「当たり前だ。一番の理由は・・・・テメェらが原因だ」

説教されている全員がそれを聞いて、二日酔いで痛い頭を悩ませるがまったく何が原因なのか分からない。

「お前ら、朝起きたときなぜ自分がベッドで寝ているか気にならなかったか？」

「言われてみればそうね」

「俺がお前ら全員を、それぞれの部屋まで運んだんだ」

「それが私達が原因になる理由と関係あるの？」

その言葉を聞いて、一真の額に大量の十字が現れる。

「テメェらを運んで、俺の睡眠時間は大幅カットされたんだよ！」

それを聞いて隊長陣全員がこれ以上逆らわない方が賢明だと、このまま流れに身を任せようと思った。
だが、危険な状態の一真の地雷を踏む者が現れた。

「まさか、それが理由ですか？ただ眠ることが出来なかったということが」

「あ？今何つった？」

鬼が鬼神へと昇華した瞬間であった。

「ですから、ただ眠ることが――――」

『グリフィス（君）！』

「どうされたのですか？」

「それ以上は言っちゃだめ！」

「確実に死ぬぞ」

フェイトとシグナムが言わないように止めるが時既に遅し。

一真は完全にぶちキレていた。

「テメェら、ゴミどもにはお仕置きが必要だな・・・・」

＞キャロ、今からすぐに庭に来い。いいな？＜

＞は、はいっ＜

一真の足下にベルカ式の魔法陣が現れた。

「強制転移」

転移先はバニングス家の庭。
説教されていたメンバーは、何が起こるのか理解出来ていない。

「一真さん」

「来たか。じゃあ、さっそくこいつらが動けないようにバインドをかけて、結界を張ってくれ」

「え、でも・・・・」

キャロが渋るが、一真は一言、

「やってくれ」

「はい。えっとごめんなさい！錬鉄召喚、アルケミックチェーン！」

召喚された鎖がなのは達を捕まえる。

「広域結界も展開、終わりました」

「わかった、もう帰っていいぞ」

キャロはそう言われて逃げるよいに結界から出ていった。

「神無、セットアップ」

［セットアップ］

一真は神無を柄を軸に回し始めた。それと同時に、神無の切っ先に

高速回転する巨大な玉が出来上がる。

「じゃあ、言い残すことはあるか？」

『すみませんでしたぁぁ！！！！』

全員が同時に謝るが、一真は止めるつもりは一切ない。

「獄龍破！」

バインドで身動きできない彼女達は、一瞬で獄龍破に飲み込まれた。

さて。これは余談だが、この結果をもたらすこととなったシャマルはというと、ここでなのは達と獄龍破をくらっていたほうがマシだと思えるようなお仕置きを受けたのだとか。

歓迎会の2日後。今日は、昨日出来なかった分の訓練をしている。

出来なかった理由は言わなくても分かると思うが、一応説明だけはさせてもらう。

昨日は二日酔いに一真のお仕置きという2つの事が重なり、一真と看病をしていたメンバー以外はボロボロの状態となってしまった。

そのため、全員の看病をしないといけないようになったため、昨日は何も出来なかったのである。

「はぁっ！」

「初動がまだ遅い！」

「はいっ！」

今日はスバルが千歳の訓練を受けていた。
その二人を一真達は離れた場所から見ていた。

「凄いね、千歳ちゃん。私達じゃどうにも出来なかったスバルの体術への指摘をちゃんとしてる」

「まぁ、あいつはちょっと訳ありでほとんどの武術を完全にマスターしてるからな。俺もあいつから剣術だけを教わった」

「だからあんなに強いんだね、一真は」

「ふん、そいつはまだまだだ。体の動きが雑すぎるからな」

スバルと組手をしながら千歳は一真の悪いところを指摘する。

「体なんぞ後からついて来りゃなんとでもなる」

「それであたしに勝てねぇのは誰だ？」

「テメェ・・・殺されてぇか？」

全員が、なぜいつもの千歳の時と対応が違うのだろうと疑問をもったが、誰も聞くことはなかった。

〔みんな、今日の訓練はそこまでや〕

突然、はやてからの通信が入る。それを見て、千歳とスバルも組手を一時中断する。

「とうしたんだ、はやて？」

突然のことにヴィータが聞く。

〔「アビス」の反応を捕えたんや。場所はそこから南西に五キロの位置。数は１つ。それと、「アビス」の周りに別の複数の魔力反応があった〕

「その魔力反応、ちょっと気になるね」

「「アビス」回収班と、その魔力反応の方に行く班とで別けたらいいんじゃねぇか？」

〔それもそうやね。じゃあ、ＦＷは「アビス」の回収。隊長陣と一真君は魔力反応の方へ。みんな気を付けてな〕

『了解！』

「あたしは帰った方がいいな。先にアリサの家に行ってる」

「あぁ」

「それと、みんな無事に帰ってこいよ。一真、死んだらあたしがもう一回死なす。いいな」

そう言って千歳は帰って行った。

「・・・死ぬか、バカが」

「いいな、一真は」

「何が？」

「さぁね」

フェイトの言葉の意味が分からない一真は一瞬悩んだが、どうでもいいと結論付けてこれからのことに集中することにした。

「みんな。「アビス」の回収は迅速にかつ安全にね」

「はいっ！」

「さっきから黙ってるがどうした、神無？」

なのは達のように飛んで移動できない一真は、身体強化の魔法を使い民家の屋根づたいに魔力反応の場所へと向かっている。

［何かざわざわするのよね］

「デバイスのお前がか？」

［それは本気？それとも冗談で言ってるの？あたしのことは、あんたがよく知ってるでしょ。あたしが、他の人格型アームドデバイスとは違うって］

「あぁ。俺があんたをそうしたんだからな」

一真の表情は怒りと悲しみの両方がうかがえるものだった。

＞スターズ1から神童一佐へ＜

＞どうした？＜

＞今、スターズ2とライトニング1がアンノウンと交戦中＜

＞アンノウン？＜

＞うん。人型で色は全身黒。目は開いていてそこだけ白＜

＞――――――っ！＜

＞一真一佐？＜

＞何でもない。もうすぐ着くから待ってろ＜

＞了解＜

なのはから敵の容姿を聞いた瞬間、一真の目には今までなのは達には見せたことのない憎悪の色が。

［なのはの言ってたアンノウンって、まさか］

「聞いただけじゃ、あれに酷似した奴らが現れただけかもしれやねぇが・・・その可能性が高い」

［もしそうならなのは達が危ないわよ］

「急ぐぞ」

一真は走る速度を上げてなのは達の場所へ向かった。

「クソっ！こいつら、うっとおしい！」

アンノウン達は猿のように動いて、なかなか攻撃が当たらない。

「キャッ！」

「フェイトちゃん！」

「フェイト！」

アンノウンの一体がフェイトに抱きついた。

「くっ・・・あ・・・・」

抱きつかれたフェイトの目は虚ろになり濁ると、そのまま倒れた。

「なのは！」

「一真君！フェイトちゃんが・・・・」

フェイトの状態を見た一真は舌打ちをした。

「すぐに結界を張れ」

「うん！」

一真は結界が張られるのを確認すると、フェイトのもとへ行こうとしたが、ヴィータに腕を掴まれた。

「ちょっと待てよ。お前までフェイトみたいなるかも――――」

「ならねぇよ。それにフェイトが、あの黒い化け物になってもいいのか？」

「フェイトちゃんを助けることが出来るの！？」

「あぁ。俺しか出来ない。お前らは離れた位置から射撃魔法でそいつらを掃除してくれ」

一真はなのは達を見ないで言うと、フェイトの方へ向かった。

「一真君・・・・」

「なのは。今はあいつに任せるぞ。あたし達には、一真に言われた通りのことしか出来ねぇんだからよ」

「そう、だね。レイジングハート、行くよ！」

［ＯＫ、マイマスター］

レイジングハートから空薬莢が排出される。

三十以上の光の玉が現れた。

「行くぜ、アイゼン！」

［ｊａ］

鉄球を空中にセットしてゆく。
その鉄球は赤く輝きだした。

「アクセルシューター！」

「ぶち抜け！」

桜色の光球とアイゼンで打ち出された鉄球がアンノウンへ向けて飛んでいく。

「邪魔だ！」

一真は黒い人型を神無で斬りながらフェイトに向かっていく。

［やっぱりこいつらだったわね］

「多分、あいつらの誰かがスバル達の方に行ってる可能性があるな。グリードのガキならいいが、ラストだったらマズイぞ」

フェイトの元へついた一真は、フェイトの上に乗っているアンノウンを真っ二つにして、フェイトの体を抱き上げた。

「おい、フェイト！聞こえるか！？」

「・・・・」

呼び掛けるがフェイトからの返事はない。

（面倒だがやるしかねぇよな）

＞俺はフェイトを連れて結界を出る。フェイトを治療をした後はスバル達の所行くからここは頼むぞ＜

＞うん＜

＞わかった＜

二人に連絡をした後、すぐに結界の外へと向かうがアンノウン達が立ち塞がる。

「時間がねぇんだ。退きやがれ、《堕人》（ダウナー）共！」

神無の刀身が灰色の光に包まれる。

「紅之太刀一式・煉刃」

神無を横に振り抜くと魔力が一筋の巨大な刃となって《堕人》へと飛んでいく。その刃は《堕人》の体を二つにした。

「もう少しだからなフェイト」

フェイトの空だからは黒い霧のような物が吹き出していた。

これを見た一真は焦り始めた。

「クソ、第一段階が始まったか。神無、ここでやるぞ！」

［わかったわ］

＞なのは、俺たちの周り限定でプロテクション張れるか？＜

＞うん、出来るよ＜

＞急いでやってくれ＜

一真達の周りにはオーバルプロテクションが展開された。
そこにフェイトを寝かせ、神無を地面に突き刺した。

「かの者の罪は創られし罪。かの者の罪は偽りの罪。創られし罪は必要なきもの。その罪、我名を持って無に帰す」

一真は指を噛みきり、神無の刀身に血を付ける。すると、神無は真っ赤に染まった。

「断罪之太刀」

神無を引き抜き、フェイトへと突き刺す。フェイトからは血は出ず、神無はそのままフェイトの中へ入り込んで柄以外は全て入った。

「フェイトの罪は何だ？」

［嫉妬、ね］

「あとでフェイトに聞くしかないか・・・・一気に片付けるぞ」

［問題ないわ］

「わかった。断罪！」

一真がそう言うとフェイトの体から吹き出していた霧は消えた。

＞ヴィータ、フェイトを連れてアリサの家に戻れ。シャマルには一日安静だと伝えろ＜

＞あぁ、わかった＜

一真はオーバルプロテクションから出ると、なのはの所へ向かう。なのはとヴィータのおかげで《堕人》の数は減っていたが、まだ結構な数がいる。

「一真君、フェイトちゃんは？」

「大丈夫だ。まぁ、一日安静だが」

「よかった」

フェイトが助かったと聞いて、なのはは安堵の溜め息をついた。しかし、まだ終わったわけじゃない。

「なのは、あいつらは俺がやる。お前はスバル達の所に行け。マズイ予感がする」

「それじゃあ一真君が・・・・それにスバル達も強いし・・・・」

「俺は《堕人》どもに遅れを取るわけねぇだろ。それに――――」

「ダウナー？」

「チッ」

なのはがそれを聞き返してきたのに気づいて、苦虫を噛み潰したような顔をした。が、すぐに真剣な顔に戻りなのはに叫ぶ。

「さっさと行け！取り返しのつかないことになるぞ！」

「う、うん！」

取り返しのつかないことになると聞いて、なのはは動き出す。

なのはがこちらの声が届かない位置まで行くと、神無が喋り始めた。

［これが終わったら、絶対に聞かれるわよ。《堕人》のこととか、フェイトが陥った状態のこととか］

「わーってる。でも、しょうがねぇだろ。隠したくても、隠せねぇ状況になっちまったんだから。ま、全部話すつもりもねぇがな」

一真は神無で肩を叩きながら言う。

［それもそうね］

「じゃ、さっさと片付けて行くぞ。なのはが行っただけじゃ、多分ダメだからな」

《堕人》達が一真へと跳びかかってくる。
一真はそれを神無でなぎ払う。

「カートリッジロード」

［カートリッジロード］

神無の刀身が魔力刃を纏い一回り大きくなった。

「神無・ブレイズモード」

体勢を低くして、腰の位置に神無を持って行く。
そして重心を前へと傾けた。

「一瞬で地獄に帰してやるよ」

「ティア！ねぇ、ティアってば！」

スバルが何度も呼び掛けるがティアナから返事はない。
フェイトと全く同じ状況に陥っている。

「ふふふ、あなたの声はその娘には届かないわよ。あたしの声なら届くけどね」

「お前！ティアさんに何をした！？」

エリオは空にいる女性に向かって叫ぶ。

「何をしたって、簡単なことよ。自分の罪の大きさを知ってもらって、堕ちてもらってるの」

銀髪の女性は当たり前のように言っているが、スバル達は言っていることが理解できていない。

「堕ちる？」

「そうよ、お嬢ちゃん。本当ならあなた達全員に堕ちてもらうつもりだったんだけど、その娘はあなた達三人よりも質がよかったからその娘だけ堕ちてもらうのよ」

「ふざけるなぁ！」

キレたスバルが女性に殴りかかる。
女性はそれを簡単に素手で受け止め、放り投げた

「いいわぁ・・・・」

着地したスバルの足下にはテンプレートが現れる。戦闘機人モードになったのだ。

「ティアを元に、戻せぇぇぇぇぇ！！！！」

カートリッジが全てロードされる。

「もっと怒りなさい。あなたの罪をもっと大きくするのよ」

「ＩＳ発動！」

［ウイングロード］

スバルはウイングロードを走って、女性へと向かう。

「リボルバー、ナックル！」

スバルの拳は女性の顔面を完璧に捉えた。が、女性の体は動かない。

「じゃあ、あなたも堕ちてもらうわよ」

女性はスバルの首に腕を回して、耳元へ口を近づける。
何かを言っているが、それはスバルには意味が分からない。
それを聞いているうちに、スバルの意識は遠くなっていく。

「あ・・・・あ・・・・」

「「スバルさん！」」

スバルも同じように意識を失い、地面に落ちた。

「これで二人」

「なっ！」

なのはがスバル達の時には、立っているのはエリオとキャロ、そして知らない女性だった。

「エリオ、キャロ」

「なのはさん・・・・」

「あら、あなた達のお仲間？来るのが遅いじゃない。面白いものが見えたのに」

「面白い、もの？」

「そ、この娘達がこんな姿になる過程がね」

それを聞いて、なのはの中に怒りが宿る。

「あなたも堕ちる？」

「許さないよ・・・・レイジングハート」

レイジングハートはアクセルモードからバスターモードへと形を変える。

「ディバイン――――がっ！」

なのはは首に衝撃を受けて、意識を失った。

「あぶねぇ、あぶねぇ」

「一真さん」

「お前ら二人は無事か・・・・なら、今すぐここを離れろ。三人は俺がアリサの家に転移させておくから」

「じゃあ、一真さんも僕達と――――」

「いや、俺はあの女と話がある」

そう言って一真は女性を見上げた。女性も一真を見て笑みを浮かべる。

「分かりました。一真さん、無茶はしないでくださいね」

「言われなくても分かってる」

二人とフリードが走り始めたと同時に一真は、気を失っている三人を転移させた。

「優しいのね、ラース」

「その名前で呼ぶんじゃねぇよ」

「なら、こう呼べばいいかしら?裏切り者」

「好きにしろ」

一真は殺気を込めて睨むが、女性は怯みもしない。

「今日は何のようだ、ラスト」

「今日はただ、あの娘達が持って行った「デモンズ・ストーン」を回収に来たのよ」

「「デモンズ・ストーン」？「アビス」のことか？」

「あなた達はそう呼んでいるの。まぁ、あれには元々名前はないのだから、何と呼ぼうが勝手なのだけどね」

ラストと呼ばれた女性は、ふふふと笑い話を続ける。

「ま、持っていった物は今は諦めるわ。色々と収穫もあったし、あたしはこれで帰らせてもらうわ」

「待ちやがれ！」

「嫌よ。じゃあね、ラース。それに“神童神無”ちゃん」

そう言い残してラストは消えた。

「クソッタレが！」

［一真・・・・］

《一真の部屋》

一真「始まったぞ～っと。今回はゲストが来てるみてぇだな」

なのは「今回のゲストは、「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　Ｃａｌｉｖｅｒ&ａｍｐ;Ｐｈａｎｔｏｍ」から来てくれた神藤旭君と赤羽千華ちゃんです」

旭「よろしくお願いします」

千華「よろしく～」

千歳「よろしくね旭君、ちーちゃん」

旭「千歳さん！失礼なこと言ってすみませんでしたぁぁぁぁ！！！！」

神無［綺麗な土下座ね］

千華「始まって早々、何土下座してるのよ」

千歳「え？え？旭君、どうしたの？」

旭「だって、前に千歳さんのこと悪く言ったから感想コーナーだけじゃなくて、直接謝ろうと思って」

一真「それなら問題ねぇよ、旭。今の千歳はそれくらいのことなら許してくれる」

旭「本当、ですか？」

千歳「うん！」

なのは「よかったね、旭君」

千華「甘いわね。みんなが許しても、このあたしが許さないわ。一真さん、お願い出来る？」

一真「・・・・神無、セットアップ」

神無［セットアップ］

旭「え？」

千歳「誰が許すって言ったよ、旭」

旭「・・・・助けてください」

一真「無理だ。手元に神無ねぇし」

なのは「ゴメンね、旭君」

千華「ゴメンね神藤君。助けたくない♪」

千歳「だそうだ。残念だったな、旭ぁ」

旭「薄情ぎゃあああああ！！！！」

一真「えげつねぇのな、お前」

千華「誉めないでください」

一真「いや、誉めてねぇから」

なのは「えっとそれじゃあお返事コーナーに行こうか」

二階堂さんへ

一真「俺も突然、ああなった時は驚いたさ。自分の目を疑ったからな」

なのは「千華ちゃん、旭君が酔うとどうなるの？」

千華「それは飲ませたときのお楽しみ。でも、あたしはどうなっても知らないわよ」

一真「千歳とどっちが酒癖わりぃんだろうか・・・ちと、気になるな」

U．Tさんへ

なのは「初めての人だね。読んでくれてありがとうございます」

一真「クラウド、俺程度を化け物っていうなら千歳はそれ以上だぞ。それとセフィロス、惰眠って言うな！時間を有効に使っていると言え！」

千華「いや、惰眠だと思うわよ」

一真「なら、今から寝ることの素晴らしさを教えてやる！」

な・千「「結構です」」

ＴＯＵＤＡさんへ

なのは「ＴＯＵＤＡさんも千歳ちゃんのこと驚いてるみたいだね」

一真「隆浩、今回はお前と同意見だ。俺も今までのことを思い出す度に泣きそうになる」

千華「隆浩さん、晶彦君。あまりそういうことを言わない方がいいと思うわよ。一真のように――――」

千歳「隆浩、晶彦・・・今後も男として生きたいなら、自重しろよ。まぁ、女として生きたいなら別だかな」

なのは「あれ、旭君は？」

神無［あそこにいるわよ］

旭はまるで屍のようだ。

千華「ナイス♪」

旭「何がナイスだぁ！！！！」

千歳「チッ、死ねばよかったのによ。つか、死ね」

旭「酷くないっすか！？」

神無［それじゃ次回予告ね］

旭「スルー！？」

なのは「帰還した私達に話してくれたのはアンノウンに関すること」

一真「しかし、俺が全てを話してないと気づいたなのは達と俺の間に壁が出来てしまう」

神無［そんな中、助かったはずのフェイト達には小さな異変が起き始めていた］

千歳「次回、魔法少女リリカルなのは～七つの大罪～」

旭・千「「【罪人】」」

一同『スタンバイレディ！』

デモンズ・ストーン・後編（後書き）

二階堂さん、出演許可ありがとうございます。
上手く二人を書くことができたか分かりませんが、どうでしょうか？
何かあれば一言お願いします。

《罪人》（前書き）

今回は説明部分が大半です。
分からない部分ががあれば質問してください。一真が答えてくれます。

一真「他人任せかよ！」

それでは始まります。

一真「無視すんなぁ！」

《罪人》

はやての部屋はかなり重い空気が漂っていた。

「一真君。三人の様子はどうや？」

「落ち着いてる。だが、丸一日は絶対安静だ。出動待機からも外れてもらってくれ」

「そか」

そして沈黙が流れる。

その中、シグナムが口を開いた。

「神童。今回の任務の内容はなのは達から全て聞いた」

「そうか」

「そこでお前に何点か聞きたいことがあるが、いいな？」

一真はそう言われて全員を見る。

「拒否権はなさそうだな。わかった、話す。が、その前に場所を変えるぞ」

「入るぞ」

「どうぞ」

「どうしてですか？」

リインの問いに一真は、

「外にいる二人も話を聞きたいだろうから、ここじゃ狭いだろ」

「外にいる二人？」

ヴィータに聞き返されて一真は外に聞こえるように言う。

「入ってこい」

「「失礼します」」

一真に促されて入ってきたのは、暗い面持ちのエリオとキャロだった。

「お前らも聞きたいだろ？」

エリオとキャロは黙って頷く。

それを見た一真は、振り返りドアへと歩き始めた。

「話が聞きたいんだろ？さっさと行くぞ」

一真達はさっきの部屋よりも広い部屋に来ていた。

「じゃあ順番に話していくぞ。まず、こいつらについてだ」

最初に現れた写真は《堕人》。

「こいつらの名前は《堕人》。戦闘能力は高くはないが、動きは素早い。たいていこいつらは言われた通りのことしかしないが、罪が大きな人間がいた場合は、」

一真は《堕人》がフェイトに抱きついている写真を出す。

「こんな行動を取る」

「この行動の意味はなんなん？」

「それは後で説明する。次にこいつらの正体、いや材料だが、生きている人間だ」

一真が言った一言で、全員が動揺した。

「こいつらが人間だと？テメェ、ウソ言ってんじゃねぇだろうな！？」

「ウソを言ってどうすんだ、バカチビ。どうして人間がこうなったかは次に説明するから待ってろ」

ヴィータは納得いかない顔をしたが、渋々座った

「ちなみに、《堕人》になった時点で人間としての自我は全て失われているからな。じゃあ次の写真」

《堕人》の写真からフェイト、スバル、ティアナの写真に変わる。

「人が《堕人》、または《罪人》（シナー）になることを《堕落》

（ダウンフォール）って呼んでいる。《罪人》についてはあとで説明するから質問すんなよ」

最初に釘を打ち、説明を続ける。

「で、《堕落》だが。人間をこの状態することができるのは、《罪人》と《堕人》だけ。どうやってするのかと言うと、《堕人》の場合は人間に抱きつくだけだが、《罪人》の場合はとある言葉を聞かせるんだが俺は知らん」

そこまで言って一真はお茶を飲んだ。少し疲れたらしい。

「えっと、《堕落》には段階があって第一段階は体から黒い霧が吹き出し始める。それがこれだ」

一真が出したのはフェイトの体から霧が吹き出している写真。

「第二段階は霧の量が増える。第二段階までなら、俺は助けることができるぞ。で、第三段階だが、この段階となると霧が体を包み込み繭を作る。この繭になった時点で罪に飲まれた場合は《堕人》に、飲まれず自分の物にした場合は《罪人》となる」

「あの、一真さん。いいですか？」

「何だエリオ？」

「罪って何ですか？」

エリオから質問を受けた一真は、忘れていたと説明を始めた。

「お前ら、七つの大罪って知ってるか？」

一真にそう聞かれたなのは達だが、誰も知らないらしく全員が答えようとはしない。

「七つの大罪ってのは《傲慢》、《嫉妬》、《憤怒》、《怠惰》、《強欲》、《大食》、《色欲》のことだ」

エリオとキャロは意味が分かっていないらしく、シグナムが説明していた。

「何でその七つが大罪なの？」

「これ自体が罪ってわけじゃないんだが、地球の宗教のキリスト教ではこの七つは人を罪に導く可能性があるとみなされた欲望や感情だ。一応説明しておくと、フェイトとティアナは《嫉妬》、スバルは《憤怒》に罪を持っていた」

それを聞いたはやては怪訝な顔をした。

「スバルが《憤怒》なのは理解出来るけど、何でフェイトちゃんとティアナは《嫉妬》なん？」

「さあな？それは本人に聞いてみねぇと分からねぇよ。じゃあ最後に《罪人》についてだな」

一真は一度息を吐いて話を続ける。

「《罪人》って言うのは《堕落》の時に罪に飲み込まれなかった人

間のことで、《堕人》のように自我をなくしたり姿が変わることはないが、目の色が銀に変わる。でも、《罪人》なる人間はなかなかいないな。たいていは《堕人》になる場合が多い」

写真はスバル達が対峙した銀髪の女性ラストの写真に変わる。

「こいつらは名前は自分の名前ではなく《傲慢》はプライド、《嫉妬》はエンヴィー、《憤怒》はラース、《怠惰》はスロウス、《強欲》はグリード、《大食》はグラトニー、《色欲》はラストという風に罪を名前として使ってる」

「では、この者の名は？」

「ラスト。こいつの他にもスロウス、グラトニーがいる。一応ここまでが、こいつらの説明だな」

そう言って一真は座り、コップに入っているお茶を飲み干した。

「あー、疲れた。で、質問はあるか？二、三個なら受け付けるぞ」

「じゃあ私」

「ほい、なのは」

「罪の数は七つだよね。でも、一真が言うには《罪人》は三人しかいない。これはどうして？」

「・・・・」

一真は完全に黙ってしまった。

［ここまで説明したんだから、言える限りのことは言えば？」

「・・・・」

「一真？」

「一真君、どないしたんや？」

「・・・・残っているプライド、エンヴィー、ラース、グリードの内、エンヴィーとラース以外は・・・・俺が殺した」

「なっ――――――！」

全員が言葉を失う。
予想斜め上を行く返答だった。

「冗談、ですよね？」

「それが残念なことに本当だ、キャロ」

「じゃ、じゃあエンヴィーとラースは？」

一真は外を見て一言、知らんと返した。

「私もいいか？」

「勝手にしろ」

シグナムを見ることなくそっけなく返答する。

「そうか。ならば前にもお前に対して同じようなことを聞いた覚えがあるが、言わせてもらう。お前は《堕人》に《堕落》、《罪人》についてなぜそこまで知っている？」

「その質問に関しては、答える気は一切ねぇ。答えが知りたいなら自分で考えてみろよ」

そう言い残し、一真は立ち上がり部屋を出ていった。
まるでシグナムの質問から逃げるかのように。

「何なんだよあいつ。確か「コキュートス」のときもこんな感じだったよな」

「そう言えばそうだったね」

「「コキュートス」って何ですか？」

初めて聞く単語に、キャロが聞き返す。

「そうか。一真君が話してくれたとき、二人はいなかったな。「コキュートス」とは、形は「アビス」全く同じで色違いのロストロギアだ」

「色違いって、そんなロストロギアが存在するんですか？」

キャロは、色違いと聞いて驚いた。
今まで形が“似ている”はあったが、“全く同じ”で“色違い”など聞いたことがなかった。

「あぁ。私達も聞いた時は驚いたが、写真を見せてもらったからな。信じることは出来た」

「そのロストロギアは、今どこに？」

「厳重に封印して保管してあるらしいのだが、私は気になった。神童は自分が回収したとは言ってないのに、写真を持っていたことにな」

「それって一真さんが、自分で回収したって言わなかっただけかも・・・」

「確かにエリオの言う通りかもしれないな。だから私は聞いたんだ。「なぜその写真をお前が持っているのか？」とな。それに対しての神童の答えは「言う気はない」だ」

「でも、シグナムさん。それは一真君に言えない理由があるからじゃ・・・・・」

なのはがそう言うが、シグナムは腕を組んで言い返す。

「たとえそうだとしても、今の奴を私は信じることが出来なくなった」

「あたしも同じだ。仲間に隠し事してる奴は信じらんねぇ。もしかしたら、あいつは《罪人》の仲――――」

ドォン！

突然、家に衝撃が走る。

「な、何や！」

〔はやてさん、緊急事態です！〕

「どないしたんや、、シャーリー！？」

「敵か！？」

〔違います。衝撃の中心はシャマルさんの部屋からです〕

「シャマルの部屋！？原因は？」

〔スバルです〕

―嫉妬してるよね。なのはやはやて、スバルの家族に。違う？―

「そんなことない！！」

―本当に？―

「本当だっ！！」

フェイトは叫んで目を覚ました。

「はぁ、はぁ、ここは・・・シャマルの部屋？」

フェイトは、なぜ自分がここにいるか思い返していた。
だが、一向に思い出せない。

「がああああ！！」

いきなり部屋の中から、かすれた叫び声が聞こえた。

「何！？」

声のした方にはベッドで眠るスバルとティアナ。そして、その叫び声の主はスバルだった。

「スバル！」

スバルはベッドの上で、背中を反らせて叫び続ける。
フェイトは一瞬恐怖したが、ベッドを下りてスバルのもとへ駆け寄った。

「スバル！しっかりして！！」

「あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝！！！！！」

スバルの下にミッド式でもベルカ式でもない、六芒星の魔法陣が現れた。

「スバルっ！」

魔法陣から漆黒の光の柱が現れ、スバルを包み込んだ。
スバルを包み込んだ光の柱は広がっていく。

「くっ――――」

フェイトはとっさにティアナを抱きかかえ、部屋から飛び出した。

「何、これ・・・・」

《一真の部屋》

一真「帰っていいか？」

なのは「始まってすぐに言う！？」

神無「あんたＭＣでしょ。それに今日はゲストが来てるんだから、しっかりしなさい」

隆浩「そうだぞ一真。おいら達が来てあげたんだから、感謝するべきだ」

一真「感謝してたまるか！って、お前！まだ――――」

千歳「あ、晶彦君。いらっしゃい！」

晶彦「千歳様、初めまして！」

千歳「うん！」

なのは「という訳で、今回のゲストは「なのはＳＳ・Ｆｒｅｅｄｏｍ」から安部隆浩君とその弟・晶彦が来てくれました～」

安部兄弟「「イエーイ！」」

一真「帰れ、クソ兄弟」

千歳「ダメだよ、一真。せっかく来てくれたのに」

隆浩「ありがとうございます、千歳様」

一・な・神「「［様！？］」」

晶彦「えっと、こちらがお土産です」

千歳「お土産？」

隆浩「はい。うさビットのなのはフェイトｖｅｒ．のＤＶＤです」

なのは「え！？何それ！？」

千歳「ありがとう、隆浩君♪大事にするね」

隆浩「喜んでいただき、おいらも作った甲斐があります」

なのは「ちょっと、隆浩君！何でそんなものがあるの！？」

隆浩「作ったんだよ。千歳様の為だけにな」

一真「真性のアホだ・・・・」

神無［かなり無駄よね、それ］

晶彦「そういえば以前に送った特製ケーキと斬馬刀はどうでした？」

千歳「ケーキは美味しかったよ。刀の方はまだ試し切りしてないんだ」

一真「千歳、問題ない。今、そこに試し切り用の人間がいる。ホレ、斬馬刀だ」

千歳「一真の言う通りだな・・・・隆浩、動くんじゃねぇぞ」

隆浩「へ・・・・千歳、様？」

一真「晶彦、よく見ておけ。お前の兄貴の最後だ」

なのは「千歳ちゃん、遠慮はいらないから思いっきりね」

晶彦「兄ちゃん、僕は一人で生きていけるから。今までありがとね」

隆浩「晶彦の裏切り者！一真、なのは助け――――」

一・な「「いや、そんな義理はないから」」

神無［ご愁傷さま、隆浩。達者でね］

千歳「じゃあ死ね」

隆浩「テメェらぁぁぁぁぁぁ！！！！」

一撃必殺。隆浩は死んでしまった。
千歳は2の経験値を手に入れた。

晶彦「低っ！！兄ちゃん殺してそれだけって！」

千歳「いい切味だったよ。ありがとう、晶彦君！」

神無［しかし、ゲストが来たら必ず死にネタってどうなのよ・・・・」

なのは「それはあまり気にしない方が・・・・」

一真「さて、感想の返事コーナーだ」

千・晶「「わーい♪」」

二階堂さんへ

晶彦「あのフェイト姉ちゃんを卒倒させるって、昶兄ちゃんすごいな」

なのは「対女性兵器って何だろ？」

神無［年末企画が気になるわね］

千歳「ねぇ、一真ぁ。お酒――――」

一真「絶対にお前には飲ませない。我慢しろ」

千歳「はぁーい」

ＴＯＵＤＡさんへ

なのは「楽しんでくれてありがとうございます。で、晶彦。質問あるんだよね？」

晶彦「うん。千歳様って刀剣以外の武器、例えば銃とかでも性格は変わるんですか？」

一真「これは俺が答える。あいつに聞いても意味がないからな。で、答えは飛び道具じゃ変わらんが、籠手や具足・・・・ＤＭＣ３に出てきた武器ベオ〇ルフなんかだな。それなら変わるぞ。千歳、これを付けてみろ」

千歳「いいよ・・・・おっし、なのは。そこに転がってるサンドバック起こせ」

なのは「えっと・・・・これでいい？」

千歳「いいぜ。うおぉぉ！二重の極み！」

隆浩「フゴォォっ！」

神無［生体反応が、完全に消えたわね。ＴＯＵＤＡさん、隆浩死んじゃったけど・・・ゴメンね］

シグマさんへ

神無［初めての人ね。面白いって。よかったわね、作者］

あぁ。もう嬉しいぜ！

千歳「何かキャラ変わってねぇか？」

気にすんな。そのまま続けろ。

なのは「リボーさん、あまりそういうこと言わない方が・・・・」

一真「シグマさん、あなたはよく分かってる。そしてリボー、要求通り獄龍破を撃ってやるよ。獄龍破！」

晶彦「リボーさん、頑張って下さいね～」

隆浩「ふっかぁ～つ！」

一真「遅かったな。もう予告して終りだぞ？」

な・千「チッ・・・・」

一同『怖っ！』

なのは「それじゃ次回予告して絞めようか？」

一真「《堕落》は止まり助かったはずのスバルの罪による暴走」

なのは「暴走するスバルを止めようとするが、全く歯が立たない」

神無［そして、最悪の状況をさらに悪化して行く］

千歳「次回、魔法少女リリカルなのは～七つの大罪～」

安部兄弟「「【《憤怒》】」」

一同『スタンバイレディ！』

《罪人》（後書き）

ＴＯＵＤＡさん、どうでしたか？
自分なりに頑張ってみたつもりです。至らない点があれば一言お願いします。

《憤怒》

「フェイトちゃん！」

「テスタロッサ、無事か！？」

呼ばれたフェイトはそちらを向く。
そちらからは、走ってくるなのは達の姿があった。

「みんな！！」

「よかった。無事やっ――――っ！」

フェイトの顔を見た瞬間、全員の安堵の表情が驚愕で塗り潰される。

「フェイトさん・・・・その目・・・・・」

「どうしたの、キャロ？」

「えっと、その・・・・」

キャロが言葉を詰まらせるのも無理はない。
なぜなら、今のフェイトの左目は綺麗な紅の瞳でなく、濁った銀。
さっき一真から説明を受けた、《罪人》と同じ瞳になっていたからだ。

「す、スバルさんは！？」

エリオに聞かれて、フェイトは部屋の中を黙って指差す。

部屋の中には体から漆黒の魔力を、オーラのように纏っているスバルか立っていた。それは悪魔にしか見えない。

《ティアを返せ！》

顔を上げたスバルの目は、左目はフェイトと同じように濁った銀。右目は《堕人》と同じ白。

「どうなってるのこれ？スバルは助かったんじゃ・・・・」

「やっぱり、あいつは信じらんねぇ！助かってねぇじゃねぇか！」

《ティアを・・・返せぇぇぇぇ！！！！》

魔力は禍々しさを増し、なのは達を圧倒する。

スバルは床を蹴りフェイトへ、いやティアナを取り戻すために近づく。

「ストップだ」

その声とともに現れた手が、スバルの頭を掴み部屋へ投げ返した。

『一真（君／さん／神童）！』

「で、どうなって――――」

「テメェ、言ってたことと違うじゃねぇか！」

一真はいつの間にか近づいていたヴィータに胸ぐらを掴まれる。

「《罪人》や《堕人》になるのは、《堕落》が第三段階になってからだろ！？」

「そうだな」

「だったらあれは何なんだよ！？」

一真は起き上がろうとしているスバルを見た。

「暴走だ」

「止める方法はあるのか？」

「簡単だ。気絶させれば止まる。が、スバルの体、精神の限界がいつくるか分からねぇから、最大三十分以内に落すことだな」

「そうか。それだけ聞くことが出来れば十分だ。我々だけで止める」

「テメェらだけで？」

「そうだ。貴様のような奴に任せることは出来ないからな」

シグナムは一真を睨みつけて言う。

「勝手にしろ」

一真が言うとシグナムとヴィータは部屋に入っていく。

「アイゼン！」

「レヴァンティン！」

「「セットアップ！」」

《邪魔するなぁ！》

拳を振り上げ、ヴィータの顔面を狙う。

「おせぇよ！！」

体を屈めてスバルの拳を避け、カウンターでグラーフアイゼンをスバルの腹へ叩き付け外へと吹き飛ばす。

「あたし達は先に行く！」

「主、アギトに私のもとに来るように伝えてください！」

ヴィータとシグナムはスバルを追って外へ出ていった。

「一真君は、どうするの？」

「行くなって言われて行くかよ」

「そっ、か・・・・」

「一真君・・・失望したで。行くよ、みんな。スバルを助けに」

「「はい！」」

「うん」

なのはとエリオとキャロは先に出ていった三人を追って、はやては地球での捜査本部へと向かっていった。

「一真」

「何だ？」

「本当にいかないの？」

「いいや、行く。あぁは言ったが、多分今のスバルにあいつらは勝てない。もって十分程度だな」

「そんなに強いの？」

「強いわね。あのスバルから吹き出していた魔力の質。明らかに違うことが分かったでしょ？」

「うん」

スバルから吹き出していた禍々しい魔力。その質は、なのは達よりも異常なものだとフェイトは感じていた。

「俺は行くが、その前にお前に聞くことがある」

「何？」

「眠っているとき、夢にもう一人の自分が出てこなかったか？」

「――――！」

フェイトは誰にも言ってないことを的確に言い当てられ驚く。

「やっぱりか・・・・まぁ、そのことは後で説明する。ティアナを頼んだぞ」

「うん」

一真もスバル達が出ていった穴から出て、彼女達を追った。

「本当にこいつスバルかよ?」

「私もそう思っていたところだ」

二人がそう言うのも無理はない。いつものスバルと動きが違うのだから。

全ての攻撃は防ぎ、避け、受け止め、受け流される。

暴走しているとは思えない動きであった。

「当たる位置をずらしてるが、マズイな」

「あぁ。確実にあたしたちの体にはダメージが溜ってる」

《ああぁ!!!》

スバルが振るうは漆黒の拳。

「紫電一閃！！」
シグナムが振るうは炎を纏いし剣。
しかしお互いの技はお互いを捕えない。

「なっ！？」

目の前にいたはずのスバルは、魔法陣だけを残して姿を消す。

《ディバイン――――っ！》

ディバインバスターを放ちかけたスバルは、発射を中断してその場から離れた。と同時に、スバルのいたところを桃色の軌跡が駆け抜ける。キャロのシューティング・レイだ。

「やっと来たか・・・・」

「おせぇよ、お前ら！」

遅れてやってきた頼りになる援軍のなのは達を見て、二人は笑みを浮かべた。

「シグナム、大丈夫か？」

「ダメージはあるが、大丈夫だ」

「ヴィータちゃんも・・・・」

「心配すんな、リイン。あたしよりも問題は・・・・」

ヴィータは少し離れた位置に立ってこっちを見ているスバルを見つめる。

「スバルの方？」

「あぁ。今のあいつは、いつものあいつとは全然違う。本当の化け物だ」

「そんなに強いんですか？」

「そうだな。笑えない事を言うと、私達二人がかりでスバルにまだ一撃も入れてはいない。むしろ、追い詰められかけていたのはこちらだ」

「シグナム副隊長とヴィータ副隊長の二人でも、スバルさんに勝てない・・・・」

キャロは今のスバルに恐怖を抱いた。

「みんな、全力で行くよ！」

「「はい！」」

「あぁ」

「「おうよ！」」

「はいです！」

「リイン！」

「アギト！」

「「「「ユニゾン・イン！」」」」

ヴィータの髪の色は薄くなり目は水色に、バリアジャケットは白に変わる。

シグナムは髪は彩度の低いピンクで目は薄紫、バリアジャケットは上着がなくなり色は青紫、篭手は金色に。背中からは炎の羽が現れた。

《邪魔だぁぁぁ！！！！》

スバルの両腕に環状魔法陣が現れ、両手が発光を始める。

構えはディバインバスター。左手の先には体から出ているオーラと同じ漆黒の光弾がセットされる。

《ディバインドライバー！！》

バスターがジャイロ回転をしながら飛んで行く。それは砲撃ではなく弾丸。

「避けろ！」

シグナムの叫びと共に左右に分かれる。

左右に分かれたなのは達の間を通った弾丸は、民家を破壊しながら突き進み、一定の距離を進んだところで止まった。

結界内でなければとんでもないことになっていただろう。

「アイゼン！」

［ギガンドフォルム！］

「レヴァンティン」

［ｊａ］

「「うおおおぉぉぉぉ！！！！」」

こちらへ走ってくるスバルに向けて大鎚が振りおろされ、連結刃が伸びて行く。

それをスバルは掴んで止めた。

「ブーストアップ・アクセラレイション！」

エリオの足下にキャロの魔法陣が現れる。

「カートリッジロード！」

ストラーダの噴射口から噴射が始まった。

「スピアーアングリフ！」

スピードを上げながらスバルへと突き進む。

《ふんっ！！》

スバルはレヴァンティンを引っ張り、その先にいるシグナムを引き寄せる。

「なっ！？」

突然のことで対応が出来ないシグナムは、そのまま引っ張られた。
そしてシグナムとエリオの位置がならぶと、レヴァンティンを振りシグナムをエリオにぶつけた。

「うわぁっ！」

「くぁっ！」

「エリオ君！」

「クソッタレがぁ！」

グラーフアイゼンを持つ手に更に力を込める。しかし、スバルが沈む気配はない。
むしろこちらが持ち上げられている。

「アクセル・・・・」

桜色のスファアがなのはの周りに作り出される。

「フリード。ブラスト・・・・」

ケリュケイオンから放たれた光がフリードに吸収され、オレンジの光弾が口の前にチャージされる。

「シュートッ！」

「レイッ！」

スバルは避ける動作を行わず、全弾がスバルに着弾。
しかしスバルの体には傷一つ無い。
オーラとなっている漆黒の魔力が、スバルの体を守ったのだ。

「うそ・・・・」

スバルは連結刃を放し、両手でグラーフアイゼンを持つ。そのまま、自分を軸に回転を始めた。

「あああああぁぁぁぁぁぁ！」

《りゃぁっ！》

そしてなのは達の方へ向けて投げ飛ばされる。

「ぐっ・・・・レヴァンティン！」

シグナムがレヴァンティンを伸ばし、ギリギリでグラーフアイゼンを捕まえて激突を防いだ。

＞ヴィータちゃん、シグナムさん、エリオ。まだ大丈夫？＜

＞策でもあるのか？＜

＞二人を囮としてしまいますけど・・・・＜

＞大丈夫ですよ＜

＞私もだ＜

＞あたしもだぜ。隙を作ればいいんだろ？＜

ヴィータにはなのはのやりたいことが分かっていた。

＞うん＜

＞じゃあ、あたし達に任しとけ。行けるな？二人とも＜

＞もちろんだ＜

＞はい！！＜

三人は立ち上がってデバイスを構える。

［［ソニックムーブ］］

ソニックムーブで一気に近づいた二人は、ほぼ同時に切りつける。

「＞炎熱加速っ！＜」

レヴァンティンを纏う炎が激しさを増す。

「＞紫電一閃！＜」

ストラーダの刃は雷を纏う。

「紫電一閃！」

刃となった炎と雷は、スバルの纏う魔力を削る。

頭上からは、さっきよりも二周り大きくなったグラーフアイゼンが

振り下ろされた。

「スバルさん、罪に飲みこれ無いで勝って下さい！」

魔力は削られ、もうすぐで完全に剥がれる。という瞬間だった。

《退けぇぇぇぇ！！！！》

スバルの感情に反応して、なくなりかけていた魔力が再び膨れ上がる。

三人は膨れ上がる魔力に吹き飛ばされた。

「錬鉄召喚！」

スバルの足下に召喚魔法陣が現れた。

「アルケミックチェーン！」

召喚された鎖はスバルに絡みつき動きを止める。

「なのはさん！」

「行くよ、レイジングハート！カートリッジロード！」

レイジングハートから三発、空薬筴が弾き出される。

「ゴメンね、スバル。ディバイン・・・・」

バスターモードの先に桜色の巨大な光弾がセットされ、更に大きくなっていく。

「バスター！！！」

巨大な砲撃がスバルを飲み込む。

「止まってくれたでしょうか？」

「どうだろ？スバルの纏ってる魔力は、物理と魔法の攻撃を全て防ぐからまだ分からないよ」

スバルのいる所は砂煙で全く見えない。

スバルが飛び出してくることも考えられる。

（お願い・・・止まっ――――！？）

なのはは砂煙の奥に何かが光ったのを見た。

《ディバインドライバー！！！》

砂煙に穴を空け、漆黒の弾丸が飛んで来る。

［［プロテクション］］

魔導師二人が本気で張る防御魔法。しかも一枚は管理局の［エース・オブ・エース］の張るプロテクション。

本来のスバルの魔法では貫くのはほとんど不可能。

だが、今のスバルの魔法は、隊長陣とエリオとキャロを圧倒する魔力を一転集中させて放った一撃。二人のプロテクションを一撃で貫いた。

「「きゃあっ！！」」

直撃した二人はそのまま落下して行く。

「おっと、あぶねぇ。ギリギリだったな」

なのはは薄れていく意識の中、聞き覚えのある声を聞いた気がした。

一真は、抱えているなのはとキャロ、そしてフリードを地面に下ろす。

［もう少し早く動けば、ギリギリで助けなくてもすんだのに］

「スバルのあの魔法が、二人のプロテクションを貫くとは思ってなくてな」

と言ってスバルを見る。

スバルを見る一真の瞳は黒ではなく、フェイトやスバルの左目と同じ濁った銀色だった。

［ウソね］

神無は白々しい一真のウソを一蹴した。

「本音を言えば、見られたくないっていうのがあるな」

［やっぱり。で、スバルのこと分かってるわよね？］

「それは終わってから考える」

一真の足下に、スバルの暴走が始まる前に現れた六芒星の魔法陣が出現する。

「《罪》（シン）リリース。《憤怒》」

魔法陣から光が溢れだし、柱を作る。
そして柱が消えた後、一真は灰色の魔力を纏っていい、服はバリアジャケットに変わっていた。

「時間がねぇからな。さっさと終わらせてやる」

一真はスバルへと走り出す。
それを見たスバルは、

《お前もかぁぁ！！！！》

自分を邪魔する敵だと認識し、一真へと走り出した。

（どういうことや？）

はやて達、ロングアーチの眺める画面には2つの光が点滅している。
一つはスバル。そしてもう一つは、なのはとキャロの反応がロストした瞬間現れた一真の魔力反応。

はやてが驚いている理由は二人の魔力反応にあった。

「シャーリー、これは間違いじゃないのか？」

「私もそう思ったけど間違いじゃない。スバルと一真さんの魔力はどう調べても、測定不能と出るの」

「まさか一真さんも」

「いや、多分それはない・・・・はずや」

起き続けるイレギュラーにはやては頭を悩ましていた。
現れた《罪人》に《堕落》する三人。さらに暴走するスバルに、極め付けは測定不能の二人の魔力。
全てがはやての予想の範疇を、許容のレベルを越えて起きていた。

「私も出るよ」

「え、でもはやてさん」

「心配せんでも大丈夫や。ちゃんと帰ってくるよ」

そう言ってはやては出ていったが、はやては気付いていなかった。
一真達に近づく2つの魔力反応があったことに。

「うおりゃ」

《ぐぅっ！》

なのは達の攻撃では動きもしなかったスバルが、一真の一閃だけで飛ばされる。

［あんた、結構遊んでるけど大丈夫なの？］

「さあ？でも、暴走した奴相手は楽だってこっとは確かだな」

《うぉぉぉ！》

「ほらよ」

神無の刃を下にしたまま振り上げ、スバルの体を真上へ浮き上がらせる。

一真もスバルを追い掛け跳び上がった。

「紅之太刀壱式・煉刃」

魔力の刃がスバルの腹へと直撃するが、纏う魔力が防ぐ。

《がっ！》

「やっぱりあの魔力のオーラを剥がさねぇと、直接ダメージを与えんのは無理か。神無、残り時間は？」

［十分切ったわ］

「遊ぶのはここまでだな。神無、やるぞ」

［ＯＫ、一真］

神無から空薬筴が三発弾き出される。
それと同時に、神無の刀身が一回り細くなる。

「神無・ライズモード」

バリアジャケットの上着はなくなり、中の黒いインナーだけとなった。

「行くぞ」

魔法陣を蹴り、一真は速度を上げながらスバルへ頭から落ちて行く。
スバルは一真へ向けて跳び上がる。

《吹き飛べぇ！》

一真は神無を腰へと持っていく。

「蒼之太刀壱式・天墜閃」

一真とスバルがすれちがう。
その瞬間にスバルのオーラは全て消え去る。

「カートリッジロード」

［カートリッジロード］

神無から魔力刃が伸びる。

「メテオセイバー！」

灰色の魔力刃で何度もスバルの体を斬る。

《がはっ！》

「ラストっ！」

その言葉と共に放たれた一撃が、この戦いを終わらせた。

「おっと・・・・」

落ちてきたスバルをキャッチして、地面に下ろす。

「神無、俺以外をアリサの家に転移さるぞ」

［わかったわ］

気絶しているなのは達のもとに転移魔法の魔法陣が現れる。

転移を始めようとした一真は、結界の端で漆黒の柱が二本上がるのが見えた。

その場所からは記憶にある魔力が感じられた。

「おいおい。マジかよ・・・・」

［冗談にしては、笑えないわね］

決着がつく少し前。フェイトとティアナは結界内に侵入していた。

「これ・・・・スバル一人が？」

「うん。詳しいことは私も分からないけど、今のスバルは暴走しているみたい・・・・・」

（なのは・・・・）

フェイトは気を失っているなのはを見る。

その時だった。

―どうしたの？今なら妬ましいなのはを消せるんだよ？―

（黙れ！）

―ほら。早く・・・・・―

ドクン

「がっ・・・・」

―ほら、ほら、ほら！―

「あああああああ！！！！」

暴走の始まりだった。

《一真の部屋》

一真「あー、始まったぞぉ～っと。よし、帰る」

神無［待ちなさい！！今回もゲスト来てんだから、よしなさいよ！］

なのは「というわけで今回のゲストは「魔法少女リリカルなのは～片翼の天使の導いた世界～」から来てくれたクラウド・ストライフさんです」

千歳「いらっしゃ～い」

クラウド「あぁ・・・・」

神無［クールねぇ。でも、そんなんじゃこのコーナーで生きていくの難しいわよ］

クラウド「どういうことだ？」

一真「そこに最凶の幼女がいるからだ」

千歳「私、幼女じゃないもん！」

なのは「そこもだけど、“最凶”ってところも気にしようよ」

神無［小説じゃなかったら分からないボケを拾わない］

なのは「はぁーい」

神無［本当は一真と千歳がボケるからよ。わかった？］

クラウド「一応はな。そうだ、一真。これ」

一真「何だこれ？」

クラウド「超究武神覇斬の『奥義書』だ」

一真「俺は覚えてるから、千歳にやると喜ぶぞ」

クラウド「そうか。千歳、これを」

千歳「ありがとう、クラウド君！」

クラウド「あぁ」

なのは「クラウドさん・・・・」

クラウド「どうしたの、なのは？」

なのは「多分あの『奥義書』、『奥義書』の意味なさないような気がします」

クラウド「なぜだ？」

千歳「覚えたぁ！」

一同「早っ！！」

千歳「というわけで・・・・一真ぁ、今すぐ試させろ」

一真「全力で拒ぶぁっ！」

千歳「超究武神覇斬！」

クラウド「すごいな千歳は」

神無［一応、このコーナーで最凶。いや、最強だからね］

クラウド「なるほど」

一真「勝手に納得してんじゃねぇ！ごふっ！！」

千歳「超究武神覇斬ｖｅｒ．５」

一真「ぎゃあああああ！！！！」

なのは「それじゃ、二人はほっといてお返事コーナー始めようか」

神無［なのはも慣れて来たわね］

Ｕ．Ｔさんへ

なのは「ホント、一真君は何を隠してるんだろ？」

クラウド「俺も興味があるが、こういうことは一真自身が言うまで聞かないほうがいい」

神無［いいこと言うわねあんた。もしかして、あんたもそういうのを経験したことあんの？］

クラウド「さあな」

神無［面白くないわねぇ］

ＴＯＵＤＡさんへ

千歳「隆浩君、一真の女装の写真ありがとう♪」

一真「隆浩、テメェ！！ふざけたもん、千歳に送ってんじゃねぇ！」

なのは「そんなに怒ることかな？すっごく似合ってたよ」

一真「ま、まさかお前らも見たのか？」

な・神・ク「「「［もちろん］」」」

一真「全員死んじまえぇ！！！」

千歳「どうしたの一真？何で鳴いてるの、似合ってるのに」

千歳の言葉がクリティカルヒット。

一真は９９９９９９のダメージを受けた。

神無［死んだわね］

クラウド「ん?最後にこれを読めって?えっと一真からだが、「誰がカスだ。さっさと狸とくっつけ、ミジンコ」だと」

シグマさんへ

なのは「リボーさんすごいね。獄龍破、喰らって耐えてるよ」

クラウド「そんなにすごいのか、獄龍破っていうのは?」

一真「では、ご希望に応えまして獄龍破行きます」

クラウド「ま、待て一真。誰も受けるとは」

一真「黙れ敵。死ね、獄龍破!!」

なのは「千歳ちゃんは前からだけど、一真もゲストに対して容赦ないよね・・・・っていうか、写真のことまだ根に持ってたんだ」

神無「それにしても「グラビコンシステム」って気になるわね。楽しみにしてるわ」

クラウド「・・・・」

千歳「大丈夫?クラウド君」

クラウド「ギリギリ、だな・・・・」

一真「一線を越えちまえよ」

なのは「そんなことしたら死んじゃうよ」

一真「いいんだよ、俺の敵は」

一同『・・・・』

一真「じゃ、次回予告しちまうぞ」

神無「始まった一真ＶＳフェイト＆ａｍｐ；ティアナ」

なのは「その戦いは激しさを増し、結界内を変えていく」

一真「そんな中に着いたはやては、自分の予想を超えた戦いに戸惑ってしまう」

千歳「次回、魔法少女リリカルなのは～七つの大罪～」

クラウド「【《憤怒》と《嫉妬》】」

一同『スタンバイレディ！』

《憤怒》（後書き）

U．Tさん、どうだったでしょうか？
自分もクラウドを知ってるので、頑張ってみましたが難しいですね。
足りない部分があれは、一言お願いします。

《憤怒》と《嫉妬》

「確か、あの二人の罪は・・・・」

一真の視線の先には、ついさっきまでのスバルと同じように漆黒の魔力を纏っている、フェイトとティアナが立っていた。

［《嫉妬》だったわね］

フェイトの視線はなのはに、ティアナの視線は俺達全員に向けられている。
その目には嫉妬の感情が込められていた。

「あの目が何を意味してるかは知らねぇが、ヤバいな。神無、やるぞ」

［ええ］

「神無・ストライクモード」

神無の刀身を元の大きさに戻し、一真は二人の元に向かって走る。

《フォトンランサー！》

《クロスファイアーシュート！》

金色の光はなのはへ、オレンジの光は俺達全員に飛んで行く。

「神無、カートリッジの残りは？」

［一発］

「わかった。なら、これか」

神無の刀身が魔力でできた結晶を纏う。

「金剛槍破！」

その結晶はフォトンランサーを落とすべく飛んで行く。

「次はあっちだな。風の傷！冥道斬月破！月牙天衝！紅之太刀壱式・煉刃！」

全方位に散らばっているオレンジの光球に対して、一真は衝撃破、冥道の刃、魔力に乗して飛ばした斬撃、巨大な魔力の刃を飛ばす。

「これでいいだろ」

一真はカートリッジを補充しながら、また走り出す。

［一真、後ろ！］

そう言われて、一真は真上へ飛び上がる。

それと同時に一真のいた所に、金の刃が突き刺さる。

（後ろからハーケンセイバーが飛んできたってことは、あそこのフェイト、もしかしたら二人ともフェイクって可能性もある）

［ソニックムーブ］

機械的な声と共に、真横からザンバーフォームの切っ先を一真に向けて突進してくる。

（いつも思うが、罪を暴走させた奴は面倒なんだよ！）

「らぁっ！」

一真はバルディッシュを蹴りあげ、神無を振り抜こうとしたが、その行動を止めてしゃがむ。
その上をオレンジの光球が通りすぎた。

（あぶねぇ）

フェイトを神無で思いっ切り吹き飛ばし、一真はフェイトが飛んでいった方向とは別の方向に向かう。

「神無、ティアナの位置を探れ。さすがに、《堕落》してすぐにあんだけの膨大な魔力を制御できるはずがねぇからな。すぐに見付かるはずだ」

［わかったわ］

一真は全包囲から飛んでくる魔力弾を避けながら、自分の目でもティアナを探す。

（早く、あいつらを逃がさねぇと・・・・どうする？）

［いたわ。一時の方向に五百メートル先！］

神無の示した方向にはビルが1つあった。
隠れるにはちょうどいい場所だ。

「紅之太刀壱式・煉刃！」

ビルに向け、二枚の刃が飛ぶ。
しかし、その刃は横から砲撃を受けて軌道を変えた。

（プラズマスマッシャーだぁ！？）

砲撃が飛んできた先には、一真が全力で吹き飛ばしたはずのフェイトがいた。

［ティアナの反応ロスト。転移したみたいね］

「クソッタレが！」

一真は完全に不利な状況に持ち込まれていた。

（今までもそうだったけどよ、やっぱり罪を暴走させた奴はやりづれぇ・・・・）

罪の暴走。それは力に振り回される暴走とは全くの別物。
《堕落》した者の中にある負の感情が罪により強大なものとなり、主人格を塗り潰し力を使う。そのため、力に飲み込まれ自我を失って暴れまわる暴走とは違い、冷静に力を行使し目的を達成させる。
これが罪の暴走である。
ちなみに、暴走中その膨大な魔力は常に放出しているため長時間暴走していると、肉体と精神の両方が壊れてしまう。

《何で邪魔をするの？》

「テメェらの行動が大問題だからだっ！」

受け止めたバルディッシュを弾き飛ばし、すぐにその場から離れる。

＞黙ってあたしに殺られてください＜

＞全力で拒否してやる！＜

一真は神無をライズモードに変えて、二人の攻撃に対応している。

［ちぃがいたらいいんだけどね］

「千歳を巻き込めるか！あいつならまだしもよ」

［そうね。一真、真上］

「なっ！？」

上からは、ダカーモードのクロスミラージュを持ったティアナが降ってきた。

「幻術で近づいてやがったか・・・・」

一真は一歩横に動き、一真を突き出す。が、ストライクモードほど重くはないので、ティアナのダメージは少ない。

「蒼之太刀弐式・崩天魔突！」

一度突いたことにより浮き上がったティアナの体を、何度も突き上げる。
一真の狙いはスバルの時と同様、オーラを剥がすこと。

「あと少し・・・・」

もう少しで全てのオーラが剥がれる。そう思った瞬間、一真の足は地面を離れた。

「がっ――――――！」

一真はザンバーで思いっ切り吹き飛ばされ、民家に突っ込んだ。

「かはっ――――――」

《一真さん、さよならです》

フェイトの手には環状の魔法陣が、クロスミラージュの前には光球がセットされている。

［一真！］

神無が呼び掛けるが、一向に動く気配を見せない。

《プラズマスマッシャー！》

《ディバインバスター！》

二種類の砲撃が、障害物となっている民家を破壊しながら一真へと向かう。

万事休す。神無がそう思った時だった。

「ディバインドライバー！」

一つの弾丸が二つの砲撃を貫き、消し去った。

《なっ！？》

［え！？］

「ナイスだ、スバル」

一真は今のことが起きることを分かっていたらしく、神無を支えにして立ち上がる。

《スバル・・・・》

「ギリギリだったな。まぁ、助かったぞスバル」

［何でスバルが・・・・ってか、何で暴走してないのにデバイス無しで魔法が使えるわけ？］

その問いに一真は笑みを浮かべて答えた。

「ずっと念話でスバルに呼び掛けててな、ついさっき意識を取り戻したんだ。で、いくつか質問すると暴走してた時のことを覚えてたんだよ」

［本当なのスバル？］

「本当だよ、神無。迷惑かけてごめん」

スバルの言葉を一真は完全に無視して話し始める。

一真としては自分に謝られても困るのだろう。

「スバルに俺を手伝ってほしいが、こいつはデバイスを持ってねぇ。だから、デバイス無しで魔法を使えるように一時的に罪を軽い暴走状態にする方法を教えて・・・・」

「タイミングよく魔法をなんでもいいから使えっていわれたんです」

「・・・・」

一真の説明を聞いて黙ってしまった神無。呆れてしまったようだ。

「スバル」

「はい？」

「状況は後で説明してやるから、今は聞くな」

「わかりました」

一真とスバルは二人を見据える。

「お前の体は今の状態じゃ、もって十分。できたらでいいから、その間にティアナを落とせ。出来なかった、十分になった時点で合図すっから教えた暴走解除の呪文で止まれ。いいな？」

「はいっ！」

「じゃあ・・・・仕切り直しだ！」

二人はフェイト達を止めるために走り出した。

はやては走っていた。

自分自身の目で、何が起きているのかを確かめるために。

「はぁ、はぁ、はぁ」

＞はやてさん、聞こえますか？＜

＞何や、シャーリー？＜

＞スバルの反応がまた出ました。今は・・・・ティアナと交戦中です！＜

さっきから念話で伝えられる、結界の中の情報。

スバルの反応が消えたと思ったら、フェイトとティアナの暴走。

＞そか。ありがと＜

はやては足を止め立ち止まる。

ここが結界の一番外側になる位置らしい。

「よし・・・・セットアップ」

はやての服が騎士甲冑に変わる。
そして、結界の中へ入った。

「・・・・何や、これ・・・・」

はやてが結界の中を見た感想がこれだ。結界の中は、はやての想像を遥かに越えた状況だった。
建物は殆んどなく、一真とスバルがフェイトとティアナと戦っている。しかもスバルにいたっては、デバイスとバリアジャケットなしの状況でだ。

《・・・・スター！》

「えっ？」

「部隊長！」

呼ばれて前からディバインバスターが飛んでくることに気づいた。

「プロテク――――」

はやてがプロテクションを張ろうとしたが、どう見ても間に合わない。

「くっ――――」

「うぉぉぉぉ！」

「スバル！？」

横から現れたスバルがバスターを素手で殴り、直撃コースから外した。

「大丈夫ですか？」

「う、うん・・・・ってか、スバル！体は大丈夫なん？」

「一応は・・・・っ！」

スバルは後ろから近づいてくる気配に気づき、

《スバル！退きなさい！》

手をクロスさせ受け止める。

「嫌だ！」

（ティアナの目、部屋の中にいたときのスバルと同じ。ということは、暴走してるんか？）

＞おい、狸！聞こえるか！？＜

頭の中に、今フェイトと交戦中の一真の声が響く。

＞たぬ――――＜

＞ツッコミはいいから、聞きやがれ。いいな！？＜

＞うん＜

＞今、フェイトとティアナは暴走してる。まぁ、そこは問題じゃねぇ。問題は、こいつらの目的だ＜

＞目的？＜

＞あぁ。フェイトはなのはを、ティアナは自分以外の全員を殺すことだ。だから、今からすぐに俺達四人以外をアリサの家に強制転移しろ。いいな！？＜

＞了解や＜

はやては一真に言われた通りにこと始めた。

「これで何とかなるだろ」

《一真ぁぁ！！》

「んだよ。テメェの考え通りに動くとはかぎらねぇんだ。そこを覚えとけ！」

神無を脳天めがけ振り下ろす。

フェイトは素手で受け止め、そのまま一真を放りなけた。

＞一真君！みんな無事に転移させたよ＜

＞じゃあお前も帰れ＜

一真は一回転すると、空中に出した魔法陣を蹴ってフェイトのもとへ戻る。

＞そんな。私も手伝――――＜

＞言い方が悪いかもしれねぇけど、お前はここては足手まといでしかねぇ。分かるな＜

＞っ・・・うん＜

＞だから帰れ＜

そこまで言って一真は回線を切った。
一真ははやてを巻き込まないように、あえてキツイ一言を言って帰した。

［よかったの？はやてを帰しちゃって］

「いいんだよ。ぐぅっ・・・」

下から切り上げられたバルディッシュの刃を防ぎ、

「いいかげんに・・・落ちろやぁ！」

フェイトの顔面を横から蹴り飛ばす。
だが、フェイトの体は殆んど動かない。

「くそ。やっぱり、あの魔力のオーラが邪魔だな。剥がすか。神無・ストライクモード」

神無の太さを再びもとに戻し、フェイトに向かって突き出す。
フェイトはバックステップで避けるが、一真は逃がさない。

「メテオセイバー！」

切っ先から魔力刃を伸ばし追撃する。

「貫け！」

《くっ！》

避けきれなくなったフェイトは、上へ飛んだ。

「ハロー」

飛んだ先には、魔力刃を消して先回りしていた一真がいた。

《――――っ！》

「死ねや、クソアマぁ！！」

［あんた何言ってんのよ！？］

完全に的外れなことを叫びながら、フェイトを力の限り殴る。
さっきの蹴りでは動かなかったフェイトが吹き飛ぶ。

「なのは達はいねぇし、じゃあやるか」

［何すんのよ？］

一真は神無を頭上で回し始める。
この動作は、機動六課の全員に地獄を見せた禁断の技の動作である。

「フェイト。テメェがなのはに何を嫉妬してるかは後で聞いてやるから、今は寝てろ！！獄龍破！」

放たれた巨大な光球はフェイトに真っ直ぐ向かう。

《プラズマザンバー・・・・》

逃げても間に合わないと判断したフェイトは、自身最大の魔法を準備した。

《ブレイカー！！！！》

しかし、獄龍破は止まらずブレイカーを吸収しながら進みフェイトを飲み込んだ。

「終わった、か・・・・さて、スバル達はっと」

一真とフェイトの決着がつく、五分前。

《死ね！》

「ティア！止まってよ！」

《あんたを殺したらね！》

ティアナは躊躇なく、スバルに対して刃を振り下ろす。
スバルはそれを魔力の纏った左腕で受け止めて、右の拳でティアナの腹を殴った。

《無駄よ》

「知ってるよ」

すでにクロスミラージュから離していた左手の前には光球がセットしてある。

「だから、貫く！ディバインドライバー！」

至近距離でのドライバー。それは確実にティアナの体を貫く。

《ぐっ・・・・クロスファイア・・・・》

ティアナは離れつつ、複数のスフィアをしていく。
その数はゆうに百を越えた。

「はぁぁぁ！！！！」

スバルの魔力が膨れ上がり、オーラが濃くなっていく。しかし、それでも全てを防ぎきるには足りない。
それを知っているティアナは、迷いなく全てのスフィアを放つ。

《シューット！！》

全ての魔力弾は外れることなくスバルに着弾した。

「はぁ、はぁ、はぁ・・・・」

ボロボロになったが、スバルはまだ落ちていない。
その目はまだ諦めていない。

《いいかげんに死になさいよ》

「それはできない。一真さんから聞いたんだ」

《何を？》

「ティアの罪をだよ。ティアは何で嫉妬してるの？」

《あんた達みたいに才能に恵まれた奴らによ》

スバルを睨む瞳。それは、機動六課に来て間もないころのティアナだった。

「なのはさんに言われたことを忘れたの！？」

《うるさいうるさいうるさい！！！！なのはさんなんて関係ない！》

「そう・・・じゃあ、頭冷やそうか」

かつてなのはから聞いた一言を、教え子であり相棒の口から聞くティアナ。
その言葉に一瞬硬直するが、銃口をスバルへと向けた。

《消えろぉぉぉ！ファントムブレイザー！！！！》

バスターの時よりも巨大な光球がセットされる。

「ディバイン・・・・ブレイカァァァ！」

寸前まで迫っていたファントムブレイザーを押し返し、砲撃はティアナを襲った。

「終わった・・・・」

スバルは目を閉じ、そのまま意識を失った。

「あー、クソ眠ぃ。はやて奴を帰したのは間違いだったみてぇだな」

一真はフェイトを転送したあと、スバルとティアナの所へ向かって歩いていた。

その足取りは重く、欠伸を繰り返している。かなり眠いようだ。

「神無、この二人と俺をアリサの家の庭に転送してくれ」

［わかったわ］

三人の下に魔法陣が現れ、次の瞬間にはアリサの家の庭にいた。

「一真君！」

「一真。おかえり！」

戻ってきた一真を出迎えてくれたのは、はやてと千歳。

「この二人を頼む。俺は・・・・限界」

千歳に向かって一真は倒れ、そのまま眠ってしまった。

「千歳ちゃん、大丈夫？」

「大丈夫だよ。私は一真を部屋に連れていくね」

「ほな、お願いな」

「うん」

千歳は眠っている一真に向かって微笑み、

「お疲れ様」

その笑みはいつもの幼いものでなく、優しい姉のようなものだった。

《一真の部屋》

一真「今回、いつもより真面目な姿を見せた神童一真だ」

なのは「言われてみればそうだよね」

神無［『やるときは』やるんだけどね・・・で、今回もゲストが来てるから、千歳お願い］

千歳「はぁ～い♪今回は、『魔法少女リリカルなのは　Ｇｏｉｎｇ　Ｍｙ　Ｗａｙ』から来てくれましたリボー＝グレイブ君です♪」

リボー「ども～。えっと、千歳さんにお土産があるぞ」

千歳「何何？？」

リボー「俺の作った『グラビコンシステム』だ」

一真「テメェ・・・また面倒なことになりそうな物を持ってきやがって・・・」

神無［リボー、その『グラビコンシステム』って何？］

リボー「簡単に言えば重力を制御することが出来るんだ」

なのは「リボーさん、ダメ。千歳ちゃんにそんなもの渡しちゃ・・・きゃっ」

千歳「おもしろ～い」

一真「無重力にしたり、戻したりすんな！酔う、うっ・・・うぷっ」

リボー「ナイスだ。一真、いつかの借りをかえしてやる」

一真「うぷっ・・・・今は、まっ・・・・うっ」

リボー「ライダーキィィック！」

一真「このやろ・・・・セロ・オスキュラス」

リボー「ワームホール」

一真「ぎゃあああああ！」

なのは「千歳ちゃん、そろそろ終りにしよ。お願い」

千歳「うん♪ありがとう、リボー君。面白かったよ」

神無［千歳の本性しってから、千歳の玩具が続々と送られてくるわね・・・・］

なのは「それじゃお返事コーナーだよ」

U．Tさんへ

なのは「そうだよね。あのスバルは強すぎだよ作者さん」

神無［作者もそれは思ったみたいよ］

一真「獄龍破とスーパーノヴァを比べてどうする。規模がちげぇわ

！」

リボー「千歳さん。スーパーノヴァ弾き返せるか？」

千歳「えっとねぇ・・・分かんない」

リボー「だそうです」

ＴＯＵＤＡさんへ

一真「神無、セットアップ」

神無［今回はマズイわね。あの魔法、全員死ぬわよ］

なのは「そうなの！？」

一真「あぁ。だから手伝え！冥道残月破！」

冥道への道が開き、巨大な鳥は一瞬で消えた。

一真「さて、お返しだ。シン・ベルワン・バオウ・ザケルガ！」

超巨大な竜人が次元を超えて飛んでいく。

なのは「隆浩の予想通り、一真君一人じゃダメだったね」

リボー「だな」

千歳「ダメダメだねぇ～」

一真「テメェら・・・言わせておけばぁ。覚えてろよ」

シグマさんへ

一真「リボー。多分お前のレアスキルでも、罪を暴走させた奴らや制御出来る奴らは潰せねぇぞ」

リボー「何でだ？」

一真「纏った魔力が守るから。あれ、ほとんど無尽蔵だからな」

なのは「通りで強すぎるわけだよ」

神無「てかあんた。作者に迷惑をかけるなって言われてんでしょ。ちぃにあれを渡すこと事態が迷惑かけてんのよ！」

なのは「それは言い過ぎなんじゃ・・・・」

一真「いいんだよ。だから千歳、ほれ斬馬刀」

千歳「『グラビコンシステム』はありがてぇが、迷惑をかけんなって言われてんだろ。だから、それを実行しなかったテメェを切る」

リボー「なぁっ！？」

一真「行ってらぁ～」

リボー「ぎゃあああああ！！！」

なのは「お約束もすんだし、次回予告に行こうか」

一真「暴走した三人を止めることに成功した俺は、その三人に対して特訓を始めた」

なのは「しかし、その特訓は思ったように進まない」

神無「そこで一真のとった方法は、とても厳しいものだった」

千歳「次回、魔法少女リリカルなのは～七つの大罪～」

リボー「【特訓とは死にかけるものではない】」

一同『スタンバイレディ！』

《憤怒》と《嫉妬》（後書き）

シグマさん、どうでしたでしょうか？
何か問題でもあれば一言お願いします。
では、また。

特訓とは死にかけるものではない（前書き）

あけましておめでとうございます

皆さん、よい一年を。

では始まります。

特訓とは死にかけるものではない

「ん・・・ここ、アリサちゃんの・・・・」

目を覚ましたなのはは、自分がアリサの家のベッドで眠っていたことに気が付いて戸惑った。

「あれ?何で私・・・・そうだ!スバルっつぅ・・・・」

勢いよく起きたことが響いたらしい。

「あ、なのはちゃん。目が覚めたのね」

「シャマルさん・・・・スバルは?」

「別の部屋で眠ってるわ」

なのははシャマルの言ったことに疑問を覚えた。

意識を失う直前まで、自分達と戦っていたスバルが別の部屋で眠ってる。それは信じがたいことだった。

「なのはちゃん。あなたは、今体を休めることが大切。もうちょっと眠ってたら?」

「えっと、はい・・・・」

シャマルに言われて、また体をベッドに沈める。

なのはは目を閉じながら、自分が気を失う直前に聞いた声のことを思い出していた。

（あの声、聞き間違いじゃなかったら――――）

そこでなのはの意識は眠りに落ちた。

「で、はやて。あたし達はバカみたいにデカイ音がしたくらいして、しばらくして怪我人となったなのは達が意識を失って帰ってきたくらいのことしか分からないんだけど・・・・説明できる内容？」

「ゴメン。私もうまく説明出来へん状況なんよ・・・・だから」

「そっ。ならいいわ。あんた達をこれ以上混乱させちゃ悪いからね」

はやてはそう答えたが、頭の中には別のことが浮かんでいた。

それは戦闘中の一真の姿であった。

「どうかしたはやてちゃん？」

「えっ、あぁ。何でもあらへんよ、すずかちゃん」

「ならいいんだけど。はやてちゃん、無茶しちゃダメだよ」

「うん」

「あんた達はすぐに無茶するんだから」

「ははは」

「たくっ。それじゃ、あたし達は行くから」

「またねはやてちゃん」

「バイバイ、アリサちゃん、すずかちゃん」

二人が出ていくと、はやてはベッドに横になって今日のことを思い出していた。

「はぁ・・・濃い一日やったな」

「アビス」の発見から始まり、スバル達三人の《堕落》、そして暴走。
しかも、スバル達だけではなく一真の魔力値の測定不能。
はやての処理能力を超えたイレギュラーが起こり続けた一日であった。

「疲れた。今日はもう寝よ」

はやては目を閉じ、眠った

次の日。

「あ～寝た。で、今何時？」

［１０時。一回千歳が起こしに来たけど、あんたが起きないからみんなと午前の訓練に行ったわよ］

「おい神無。今みんなって言ったか？」

神無の言葉に一真の顔が変わる。

［うん。それが――――っ！］

「行くぞ。あのままじゃマズイことになる」

一真はベッドから飛び下りると、神無を持って部屋から飛び出した。なのは達が見たことのないくらい焦った顔をして。

「お前らっ！って、いねぇ！？」

「一真君！？」

「やっと起きやがったか」

いつものように訓練しているなのは達の中に、一真の目当ての人物はいなかったようだ。

「あり、フェイト達は？」

「今日一日は休ませてあげようと思って、来なくていいって言ってあるよ」

なのはの説明を受けて、げんなりする。
一真は《堕落》したのだから、自動的にそうなることを忘れていたらしい。

「あー、急いで損した。帰ってもう一回――――」

「待てよ」

振り返った先にはヴィータがいた。
一真にアイゼンを向けた状態で。

「退け。俺は眠いんだからよ」

「テメェ、何で昨日こなかった!?」

昨日、ヴィータは途中で意識を失ったので一真が来てないと思っている。

「お前とシグナムが来るなって言ったからだろ?お前、言ってることが無茶苦茶だぞ」

一真は自分が行ったということを言いはしなかった。

「じゃ～なぁ」

アリサの家に戻った一真は、はやてのもとへ来ていた。

「どうしたんや、一真君？」

「頼みがあるんだがよ。昨日の俺の戦闘データだけを全部消してくれねぇか？」

「どうしてや？あれは――――」

「いいから消せ。なんなら、テメェらから記憶を消して、データごと機械も壊すぞ」

それだけ周りに知られたくないのだろう。

一真の声には、消すことを渋るはやてに対しての怒りが込められていた。

「わ、わかった。でもその代わり一つだけ教えて」

「何だ？」

「一真君も・・・・《罪人》なんか？」

「・・・俺の目を見たのか？」

「うん」

それを聞いて、一真は盛大な溜め息をついて口を開く。

「他の奴らに絶対に言うんじゃねぇぞ。そのことは」

「うん」

「分かったならいい。じゃ、消しとけよ」

そう言い、一真が歩き出す。
はやてに声が聞こえない辺りまで来ると、神無が語りかけた。

［よかったの？］

「何が？」

［あんだが《罪人》だってことよ。今まで散々隠してきたくせに］

「あぁでも言わねぇと、あいつは逃がしてくれなかったからな。んなことよりもだ。問題の三人のところに行くぞ」

目を覚ましたスバル達は、昨日のことを思い出していた。
昨日自分達がしたことを全部覚えているのだ。

「はぁ・・・・」

かなり重い空気で部屋はいっぱいになっていた。
そんな中、外から声が聞こえてきた。

「・・・けろって・・・んだ！」

「ダメで・・・・！」

「るせぇ・・・佐の命令だ・・ろ！」

聞き覚えのある二つの声が言い合ってるのが聞こえてきた。
一真とグリフィスの声である。

「はい、どーん！」

「ちょ、ちょっと！一真さん！」

一真はドアを蹴り開けて部屋へと入ってきた。
完全にＫＹである。

「あんたいい性格してるわね。ある意味尊敬するわ」

「そりゃどうも。じゃ、グリフィス」

「何ですか？」

「出てけ。で、この部屋から離れろ。いいな？」

「でも、僕は部隊長に――――」

「切るぞ」

その言葉には殺気がこめられてい。
それも異常なまでに。

「は、はい・・・分かりました」

一真から逃げるようにグリフィスは出ていった。
足音が去って行くのを確認した一真は、三人に向かって話始める。

「さて、ネガティブ三人組」

もう少し言葉を考えないのだろうかと、神無はツッコミを入れそうになったが止めた。
一真がそんなことを謝るわけがないと確信したからだ。

「何一真？」

「テンション低っ。まぁいいか。さて、お前らに自分の状況を全部教えてやる。一回しか言わねぇから、絶対に聞き逃すなよ」

一真は三人が返事をしないが、それを無視して話だした。
内容は、昨日なのは達に聞かせたものである。
フェイト達はそれを何も言わず聞いていた。

「という訳だ。理解出来たか？」

「分かりました。でも、私達は今どちらなんです？」

「どちらって？」

ティアナの質問に一真は聞き返す。
質問の意味がわかっていないらしい。

「普通の人間なのか、それとも《罪人》なのかってことです」

「そのことか・・・聞く必要はねぇと思うけどな」

［あんたの口から聞きたいんのよ。言ってあげなさい］

「へぇへぇ。お前らは《罪人》だ。これでいいか？」

［オブラートに包むってこと知らないの？］

「知らん。で、本題に入るぞ」

一真の纏っていた雰囲気が真面目なものに変わる。

「まずは、しばらくの間出動待機から外れてもらう。理由は簡単だ。一応今は大丈夫だが、いつ暴走するか分からねぇ状態だからだ。ついでに訓練にも出んな。いいな？」

全員の沈黙は納得したものだとと解釈して、一真はさらに続ける。

「次に、お前達には今日から俺と俺の知り合いの作った訓練をしてもらう」

「一真と一真の知り合いの作った訓練？」

「あぁ。お前達の罪を制御するためのものだ。ちなみにこの訓練は、あいつらには言うなよ。内容はかなり厳しいものになるし、無茶苦茶だからな」

それを聞いて少し考え、スバルが口を開いた。

「・・・分かりました、やります。もうみんなに迷惑をかけたくないですし」

「そうか。で、お前らはどうすんだ？」

一真の問いに二人は答えない。

「まぁいい。少し考えてまた言ってくれ。スバル、行くぞ」

「はい」

そう言って一真はスバルと部屋から出ていった。

残された二人は考えていた。

一真の作った訓練をやるかどうかを。

二人は一真の知り合いが、その訓練で本当に制御出来るようになるのか信じることが出来なかったのだ。

「フェイトさん・・・・」

「何？」

「一真さんって、どうしてあそこまで詳しいんでしょうか？」

「・・・分からない。もしかしたら一真も《罪人》なのかもしれないね」

そう考えたら一真の訓練も意味があるのかもしれないと思えたが、

やはり恐怖はある。
しかしなのは達に迷惑をかけたくはない。
いろいろな思いがフェイトの中にはあった。

「あたし一真さんの訓練受けてみます」

「ティアナ・・・・」

「このままじゃ、いつかみんなを怪我だけじゃなくて死なせてしまうかもしれない。もしかしたら自分が死ぬかもしれない。自分の力が上手く使えないせいでそうなるのは嫌なんです」

「そっか・・・・ティアナ、行こうか。私はまだ一真の訓練が本当に意味があるのかなって思ってる。けど、やってみないことにはね」

「はいっ」

二人は自分達の相棒と、スバルが忘れていったマッハキャリバーを持って二人を追った。

「で、スバル。お前、マッハキャリバー持ってきたよな」

一真は玄関に来たところで、そのことを思い出してスバルに聞いた。
一真に言われてスバルも思い出したらしく、

「あっ！部屋に忘れて来ちゃいました。取って――――」

「その必要はないわよ。持って来てあげたから」

「ティア、フェイトさん」

「一真。私達も訓練を受けるよ」

「わーった。じゃあ行くぞ」

しばらく歩いて、とある建物の前で止まった。

「着いたぞ。ここだ」

その建物を見て、全員は唖然とする。

「えっと・・・ここでやるの？」

と聞き返されるのも無理はない。その建物とは、何の変哲もない一般住宅だったからだ。

「あぁ。正確にはここじゃねぇんだが」

「それってどういうことですか？」

スバルが聞き返すが一真は、

「それは中で説明する。入るぞ」

一真達が中に入ると、奥からロケットの如く何が飛んできた。

「ゴホォッ」

「何か似たようなことが前にもあったような・・・・」

スバルの脳裏には、千歳と初めて会った時のことを思い出していた。
確かあのとき一真は、千歳にドロップを華麗に決められていた。

「一真！一真！一真ぁ！」

一真に飛び付いたそれは、一真の胸に顔を擦り付けながら名前を呼び続けていた。

「いい加減に・・・・しろぉ！！！！」

自分の上にいるそれを、起きると同時に投げ飛ばす。が、それは綺麗に着地する。

「さっきからそれそれ言うなぁ！！私にはちゃんとした名前があるんだからぁ！！」

頼むから、こちらにツッコミを入れないでほしい。
それに、周りから変な顔をされてるぞ。

「お前、誰と話してんだ？」
一真はそれ、もとい女性に聞くが

「誰かな？で、そちら様は？」

とはぐらかされたと同時に、スバル達を睨みつけながら一真に聞く。

「俺の同僚と部下だ」

「フェイト・T・ハラオウンです」

「スバル・ナカジマです」

「ティアナ・ランスターです」

「ふぅーん」

全員の名前を聞いて女性は、かなり薄い反応を変えした。
フェイト達としては、なぜこのような反応をとられているのか分からない。

「たくっ・・・・えっとこいつは桜ノ宮アリス。俺と千歳の友人だ」

「正確にはア・イ・ジ・ン♪」

「「「なぁっ!?」」」

一真はアリスの言葉を聞いて盛大に溜め息を吐く。

「お前。かなり誤解を招くから、そういう発言は止めろって言ったよな」

「だって本当のことだも~ん」

「よし、入るぞ」

一真は完全にアリスを無視して中へと入っていった。

「だいたい話はわかったよ」

アリスに全て話した一真は、目の前の湯飲みに口をつける。

「そりゃよかった」

「で、これから移動するんだけどその前に、あなた達の罪を聞こうかな」

そう聞かれたが、フェイト達は自分達の罪は聞かれていないので答えることができない。

三人は迷わず一真を見た。

「そういやまだ言ってなかったな。フェイトとティアナの罪は《嫉妬》で、スバルが《憤怒》だ」

「へぇ～、私達と同じなんだ」

「私達、ですか？」

複数系だったので意味がからず、ティアナは聞き返した。

「まだ言ってなかったんだ」

アリスの言葉を無視して、またお茶を飲む。

「じゃあ、私が言うね。私達っていうのは、私と一真のこと。ちなみに私が《嫉妬》で、一真が《憤怒》だよ」

スバルは驚き、フェイトとティアナはやっぱりという顔をした。

「一真さんも《罪人》・・・・」

「そっちの二人は反応薄いね。もしかして知ってた?」

「知ってたわけじゃなくて、一真があまりにも詳しいからもしかしたらって思ってたんだ」

「へぇ、勘がいいんだね」

アリスはティーカップを空にすると立ち上がった。

「それじゃ移動しよっか。こっちだよ」

アリスに連れていかれた先は、この家の地下・・・なのだが、地下には見えない。

なぜなら、某死神漫画に出てくる商店の地下と同じ空間が広がっていたからだ。

「広っ!」

とティアナ。

「海鳴の地下にこんな空間があったんだ・・・・」

とフェイト。

「・・・・ははは」

とスバル。

三者とも別々の反応をしてくれた。

「これを千歳に見せた時はすごく楽しんでたよね」

「あぁ。確かボッコボコにされたがな」

フェイト達がこの空間に驚いている後ろでは、一真とアリスは昔話で盛り上がっていた。

「おいお前ら。今から特訓を始めるが、その前に自分達が手に入れた力の異常性を知ってもらう。そのために、アリス！」

「はぁ～い」

アリスが返事をすると同時に、真ん中に六芒星の魔法陣のある召喚魔法陣がフェイト達の前に現れた。

そこから召喚されたのは《堕人》。

「この《堕人》どもは、アリスが本物をもとに作ったコピーだ。遠慮なく倒して構わん」

「じゃあ始めーーーーー」

「待ってください！」

突然ティアナがアリスの声を遮った。

「どうしたのティアナ？」

「私達力の発動の仕方を知らないんですけど、どうしたら・・・・」

「そうだったね。ちょっと来て」

アリスは三人の眉間に軽く触れる。

「一時的に軽い暴走状態にしたから。一人一体、ちゃんと倒してね。じゃあ改めて、模擬戦スタート♪」

「バルディッシュ」

「マッハキャリバー」

「クロスミラージュ」

「「「セットアップ！」」」

三人がバリアジャケットを纏うと模擬戦が始まった。

「プラズマランサー！」

現れたスフィアの数は、通常時のフェイトで出せる数を超えていた。

「ファイアッ！」

その全てが《堕人》へとむかう。
フェイトは全てのスフィアを放つと同時に動いていた。

「はぁっ！」

ソニックムーブで《堕人》の後ろに回り込んでいたフェイトは、ライオットフォームに切り換えていたバルディッシュで切り上げる。
しかし、《堕人》の体には傷はほとんどない。

《がぁぁぁ！！》

《堕人》は両手を振り下ろそうとするが、フェイトは《堕人》の腹に手をあて零距離で、

「プラズマスマッシャー！！」

零距離で放った砲撃は、《堕人》の体を簡単に貫き風穴を開けた。
《堕人》の体は後ろに倒れていきながら、砂となって消えていく。

「・・・・いつもより体が軽い」

戦いを終えそう感じだフェイト出会った。

「たぁっ！！」

スバルは《堕人》の顎を蹴りあげて、負うように飛び上がる。

「行くよ、マッハキャリバー！」

［ＯＫ、相棒］

「カートリッジロード！」

ガコンッ、ガコンッ

リボルバーナックルのスピナー部分から煙が出る。

「リボルバーシューット！！！！！」

放たれた衝撃破が《堕人》を襲う。が、それを避けてスバルへと落ちてくる。

《おぉぉぉ》

「うりゃあ！」

オーバーヘッドの要領で顔面を蹴り後ろへ飛ばす。

「カートリッジロード！」

［カートリッジロード］

ガコン、ガコン、ガコン

スバルは体勢を直さず、上下逆さまのまま光弾をセットする。

「ディバインバスター！」

過去に見たこのないくらいの大きさのバスターは、スバルより一回り大きい《堕人》を飲み込んだ。

「・・・・凄い」

「――――っ！」

ティアナはダガーモードの刃を交差させ《堕人》の拳を受け止めた。
それを押し返すと、《堕人》の手首から先を切り落とす。

「クロスファイアー・・・・」

バックステップでさがりながら、光弾を複数作り続ける。
そしてある程度下がると立ち止まり、

「シューット！」

外れることなく全て着弾。それを確認すると、腰を入れて足を広げ二丁で構える。

「ファントムブレイザー！」

オレンジの砲撃は、《堕人》を貫いた。
残ったのは首と両手両足だけ。それは砂となって消えていった。

「軽くても暴走は暴走だな。容赦ねぇわ」

「そう・・・だね。もう少し時間がかかると思ってたけど」

《堕人》を倒した三人は、バリアジャケットを解除してこっちに向かってくる。

「さて、お前ら。今戦った《堕人》は、いつものお前らなら勝てねぇ相手なんだが、簡単に勝ってしまった。これがどういうことか分かるよな？」

一真の言葉に三人が頷く。

「なら問題ねぇな。一応今日はここまで」

「本格的な訓練は明日からね。それで、はいこれ」

アリスは三人に、元の目の色と同じ色のカラコンを渡した。

「それは罪の力を押さえるリミッターになってるから、ちゃんとつけててね。色は一真から聞いて元の色と同じ色にしておいたから」

「ありがとうアリス」

「「ありがとうございます」」

「ねぇ一真。フェイト達が《罪人》になったってことは、あいつらが現れたんだよね」

「あぁ」

一真は話す内容を聞かれたくないらしく、フェイト達を先に帰らせた。

「こんなに早い登場とは思わなかったけどな」

「そうだね。そうだ、神無さんは元気？」

「ほれ」

一真は神無を取り出し、テーブルの上に置いた。

「お久しぶりです、神無さん」

「久しぶり、アリス。元気だった？」

「もちろん元気です♪神無さん、そろそろ一真も身を固めたほうがいいと思いませんか？」

話が突然変な方向へ進み始めた。

完全に脱線している。

「ちょ、ちょっと待てアリス――――」

［いい考えね。あなたは二番目でかなわないのよね？］

「もちろんですよ。だって正妻は千歳ものですから。嫉妬しちゃいますけど・・・・」

「ちょっと待てぇぇ！！！！何、俺の意思関係なく話を進めてやがりますか！？」

［何言ってんの。ちゃんとあんたの目の前で進めてるじゃない］

「黙れ！」

一夫多妻の方向で話が進んでいく。

一真は千歳と神無だけでなく、アリスにも勝てないことが判明した。

「はぁ・・・・じゃあ帰る。また明日な」

一真はアリスの頭を乱暴に撫でてやる。

「ふぁ・・・・」

乱暴でも気持ちがいいらしく、目を細めた。

（犬だな）

アリスに犬の尻尾があれば、ぶんぶんと勢いよく振っていただろう。

「じゃな」

「で、一真君。今の今までどこに行ってたんや？」

帰って来てそうそう、一真はなぜか怒りモードのはやてに捕まってしまっていた。

一真としては何で怒られているのか、一切分かってない。

「知り合いのところだが。問題でも？」

「絶対安静の三人を連れて？」

後ろから、いろんな意味で聞きたくない声が聞こえてきた。

ゆっくりと後ろを見る。

そこには満面の笑みを浮かべたなのはが立っていた。

「な、なのはさん？」

「反省しようか？」

今日は早起きすればよかった。そう思う一真であった。

次の日から、スバル達の特訓が始まった。

内容は簡単。罪を解放した状態でスバルは一真と、フェイトとティアナはアリスと限りなく実戦に近い模擬戦をするだけ。

もしも暴走しかけたら、アリスが無理矢理押さえ込むという保険も、ここでならありだ。

「そんなもんじゃねぇだろ！？」

一応一真とアリスも罪を解放して、フェイト達と模擬戦をしている。

「くっ・・・・」

「ほらほらぁ！そんなにトロイと、レヴィアタンの糸の餌食だよぉっと！」

アリスのデバイスは両手に装着するグローブ型インテリジェントデバイス。

指先からは魔力で構成した紐が出ており、それで捕まえたり、紐を一つにして巨大な鞭としたり、硬化して敵を刺したりと出来るため、使い勝手のいいデバイスである。

「このっ！」

ライオットブレードで魔力紐を切りながら近付こうとするが、魔力紐は無尽蔵に伸びてくるためなかなか近づけない。

「シューット！」

「無駄だよ！」

アリスは空いていた左手から魔力紐を伸ばし、スフィアを全て落とす。

「スバル！こんなんなら、暴走の時が強いぞ！」

一真が神無を振り下ろそうとした瞬間、スバルの纏っていた魔力のオーラが消えてしまった。

「五分か・・・アリス、そっちは！？」

「こっちもだよ。ちょっと休もうか」

「そうだな」

一真は肩で息をしてフラフラなスバルを背負って、この空間にある小屋へ連れていった。

「疲れたか？」

「はい」

「ほら水だ」

かなり疲れているらしく、スバルはゆっくとした動きで出されたコップを受け取った。

「ん？」

突然、後ろからの視線に気づき振り向く。

そこにはフェイト達を連れて半眼で一真を睨むアリスがいた。

「どうした？」

「私だったら、そんなことしてくれないくせに」

アリスの意味が一真には理解できていないらしく、スルーしてフェイトとティアナの分を用意する。

「「「「［鈍感］」」」」

全員がそろってそう言ったが、一真の耳には届いていないようであった。

「落ち着いた？」

「うん。もう大丈夫だよ」

「一真さん」

「どうしたスバル？」

「あたし達五分しか罪の解放してないのに、あんなに疲れるものなんですか？」

「最初のウチはそうだな。でも、解放していられる時間が伸びれば疲れにくくなってくるだろ」

それを聞けばもちろん疑問が出来る。

それを聞いたのはティアナだった。

「一真さんやアリスさんは、どれだけ解放状態を維持出来るんです

か？」

「やったことはないけど、一ヶ月くらいは出来るんじゃないかな？」

「一ヶ月！？」

「多分な。ちなみに、お前らの目標は三日。まぁ目標だから、出来なくてもいいが出来るだけ近づけろ」

「「「はい」」」

こうして始まった訓練は五日目を向かえた。

「・・・伸びねぇなぁ」

「そうだね」

五日過ぎて、三人の解放時間は二十秒増えただけ。
なかなか維持時間が伸びない。

「やっぱり、あの娘達を自分の中のもう一人の自分と戦わせた方がいいのかなぁ？」

「あれやんのか？」

疲れで眠っている三人を見ながら、二人は話続ける。

「そうしたら、維持時間は伸びやすくなるし暴走の確率も減るよ？」

「まぁ、確かにそうだな。じゃ、明日やるか。今日はこいつらに無理させんのはあれだしな」

「そうだね」

二人は立ち上がり、何かの準備を始めた。
それは明日やろうとしていることの準備だ。

はい次の日。
読者の皆さん着いてきてくださいね～。

「じゃあ今日は模擬戦はやらねぇ。別の事をやる」

「別の事？」

「うん。あなた達には、あなた達の中にいるもう一人の自分と戦ってもらいます」

そう言ってアリスは近づいていく。

「え？え？言ってることがよく分からないんだけど！？」

「すぐに分かるから。えいっ♪」

アリスは三人の眉間に触れる。
すると三人は目を開いたまま気を失った。

「結界張るぞ」

「オーケー」

アリスが三人から離れたのを確認すると、一真は地面に魔力を流し込む。

流し込まれた魔力に反応して、巨大な結界が三人を中心に作られる。

「問題はここからだな」

「そうだね」

「えっと・・・・ここどこ?」

フェイトは昔母と行った、正確にはアリシアが母と行った草原に立っていた。

「何でこんなところに・・・・」

《それは、ここがあなたの心の中だからだよ。フェイト》

後ろから聞こえた自分の声。

そこには、赤い髪に黒と白が逆転したバリアジャケットを着て銀色の目をしたフェイトが立っていた。

「ここって・・・私の家？」

さっきまで地球にいたのに、いつの間にか実家の庭にいて混乱した。

「誰も、いないみたいだけどどうしてここに？」

《初めまして、スバル》

突然聞こえた自分の声に振り替える。

「なっ！？」

驚くスバルの視線の先には、金色の髪に銀色の瞳、白の部分が灰色、黒の部分が薄い紫となったバリアジャケットを着た自分がいた。

「ここって、機動六課の訓練所よね」

《そうよ。そして、なのはさんに落とされた場所よね》

「誰っ――――っ！」

横から聞こえてきた声にそちらを向く。

《私よ、ティアナ》

「嘘・・・・」

そこには自分がいて、青い髪に銀色の瞳、黒が紫に白が黒になったバリアジャケットをまとていた。

「始まるな・・・・」

「そうだね」

二人が見まもるなら、三人に異変が起き始めていた。
それは特訓の始まる合図だった。

《一真の部屋》

な・神・千『読者の皆さん。あけましておめでとうございます！』

一真「はい、おめっとさん」

なのは「とうとう２０１０年だね。今年もいいことあるといいね」

千歳「えっと、作者さんからお手紙だ。なのはちゃんに」

なのは「え、私？」

千歳「うん。えっとねぇ、『なのはには悪いがしばらくの間出番すくねぇから。千歳もな』。そうなんだぁ」

なのは「うそ・・・・」

一真「あー、なのはが部屋の隅で小さくなっちまった。まぁいいか」

神無［じゃあここでゲスト紹介。自称一真の愛人・桜ノ宮アリスの登場よ］

突然、星間〇行が流れ始める。

アリス「キラッ☆」

一真「それが言いたいがためだけに無駄な時間を使うな！」

アリス「いいんだよ。というわけで、今回から登場した桜ノ宮アリスでっーす！」

千歳「アリスちゃん！」

アリス「千歳！」

千・ア「「イェーイ♪」」

一真「テンションについていけねぇ・・・・って、なのはさん？」

なのは「いいよねぇ・・・出番が沢山あって余裕のある人は」

神無「ちょっと待ちなさい、なのは。落ち着いて、そのレイジングハートしまって！」

なのは「うん。それ無理」

一・神・ア「「「そのネタは」止めろぉ！」」」

ネタの分からない方は、涼宮ハルヒ○憂鬱の原作第一巻をどうぞ。
ｂｙ作者

なのは「スターライトブレイカー！」

一・神・ア「ぎゃあああああ！！！！」

千歳「あぶねぇ、あぶねぇ。斬馬刀があって助かったぜ」

なのは「じゃ、残った二人でお返事コーナーに行こうか」

千歳「そうだな」

二階堂さんへ

千歳「旭、あたしも近接専門だぜ。そもそも、魔法とか使えねぇからな」

なのは「そう言えばそうだよね」

アリス「一真と一緒にバトルロワイヤルでるんだってね、千歳。頑張ってね～」

千歳「おぉよ！！」

シグマさんへ

一真「んなもん効くかぁ！爆流破！」

飛んできた劣化獄龍破×5とグラビティ・ブラストを押し返して、そのまま次元を超えて飛んでいく。

神無［シグマさんから質問が来てるわよ］

一真「そうか。読んでくれ」

アリス「暴走した面子をワームホールに入れる場合はどうなるのか？だって。ちなみにあの中は疑似虚数空間になってるみたいだよ」

一真「死ぬな」

なのは「そんなはっきり！？」

一真「あぁ。だって、あのオーラは外から攻撃を防ぐだけであって、あんな底無し沼状態の場所に落ちて帰ってこれるわけねぇだろ」

千歳「なるほどな。というわけだ、シグマさん。納得してくれたか

？」

U．Tさんへ

千歳「一真、神無を貸してくる」

一真「ほい」

千歳「超新星爆発がなんぼのもんじゃあ！」

なのは「千歳ちゃん、言葉遣いなんとかしようよ・・・・」

千歳「トランザム！」

アリス「千歳って魔法使えないんだよね！？」

そんな設定《一真の部屋》では皆無です。

千歳「トランザムライザー！」

一同『爆発を切ったぁ！？』

神無「ちぃ、とうとう人間を超えたわね・・・・凄いわ」

アリス「そんなレベルじゃないよね！？」

なのは「気にしたら終りだよ。というわけで、次回予告！」

一真「どういう意味だ！」

千歳「自分の中のもう一人の自分と戦うことになったフェイト達」

アリス「外にいる私達も大変なことになっていた」

一真「次回、魔法少女リリカルなのは～七つの大罪～」

な・神「「【誰も見ていないミラクルは浮かばれない】」」

一同『関係ねぇだろこれ！』

誰も見ていないミラクルは浮かばれない・前編（前書き）

今回は多分、過去にないくらいグタグタになった気がします。
それくらい問題ないって方は、『魔法少女リリカルなのは～七つの大罪～』の世界へどうぞ～

「今日も、だね」

なのはは誰もいない部屋を見て言った。

本来なら、ここにはフェイトがいるはずの部屋だ。

「一真君にスバル、ティアナもおらん。ホント、何してるんやろか？」

二人は四人のことが心配で堪らなかった。

「どうしたの二人とも？」

「千歳ちゃん・・・・」

「ちょっと、ね・・・・そうだ、千歳ちゃん。一真君がどこに言ったか知らんか？知り合いの所に行ってるみたいなんやけど」

はやては一真の知り合いだから、千歳なら何か知ってるだろうかと聞いてみたが、

「知り合い・・・・」

思い浮かばないらしく、考え始めてしまった。

「もしかしたら、アリスちゃんの家かも」

千歳の言葉に二人は即座に食い付いた。

「千歳ちゃん！」

「ひぅっ！」

二人の形相に驚いたのか、千歳は涙目になって身を小さくした。

「そのアリスちゃんって娘の家に連れてってほしいんだけど、ダメかな？」

「いいけど・・・・・」

「じゃあ決定や。みんなも連れて行くよ」

「うん！千歳ちゃんは先に玄関で待ってて」

「う、うん・・・・・」

千歳を置いて二人は去っていく。

その勢い圧倒された千歳は少しの間呆気にとられていた。

「一人何時間？」

「二時間、かな。一応、限界は十二時間だね」

二人の視線の先には立ち上がったフェイト達。だが、正気はなく完

全に暴走状態となっていた。

「俺から行くから、二時間になったら変わってくれ」

「はぁーい」

一真が結界の中に入るとすぐさま三人は襲いかかってきた。

「始めるぞ、神無」

［OK、一真］

「セットアップ」

［セットアップ］

《ここに来たってことは私を倒しに来たか、私に飲み込まれにきたかのどちらかみたいね》

「・・・・」

フェイトは、現れたもう一人の自分を見て戸惑っていた。

（これがアリスの言ってたもう一人の私・・・・）

「ねぇ・・・・何でなのはを嫉妬してるの？」

《それはあなた自身もわかってるんでしょ・・・・いや、分かってないから私に聞いてるのか》

もう一人のフェイト・・・いや、面倒だから裏フェイトでいいな。

うん、決定。

裏フェイトは笑みを作り話し始めた。

《十年前に母さんを失った。同時に姉も。それが原因よ》

それを言われて、虚数空間に落ちていった二人を思い出す。あれは悲しい過去でしかない。

《あなたは気付いていないのかもしれないけど、無意識に嫉妬してたの。まぁ、なのはにだけじゃないんだけど》

「・・・・」

《で、何で嫉妬してたのかというと・・・・血を分けた家族が自分にはいないから》

「そんなことない！」

《あるの。今までもそうだったから。あなたがエリオやキャロの責任者、そしてヴィヴィオの後見人になったのは自分のそばに同じ境遇の子達をおいて、仲間としておきたかったから》

「違うっ！私はそんな理由であの子達と一緒にいるんじゃない」

フェイトは叫びバリアジャケットを纏い、ハーケンフォームにした

バルディッシュで切りかかる。

《認めないのね。じゃあ、力づくで認めさせてあげる！》

裏フェイトは真っ白なバルディッシュで防ぎ、簡単に吹き飛ばす。

《始めましょう、フェイト》

「ぐぁっ――――――！」

《どうした？怒れよ、スバル》

「どうして？」

裏スバルの一撃を受けきったスバルは、立ち上がり目の前にいるもう一人の自分を見据える。

「どうして怒る必要があるの！？」

《ハッ、何で怒る？簡単だよ。ティアナがやられたんだぞ。憎くないのか！？》

真っ白なリボルバーナックルとマッハキャリバーを装着した裏スバルは、そう叫ぶ。

スバルはそれを聞いて、

「憎いかどうなのかって言われたら多分憎い。でもね、ずっと怒ってても意味がないよ」

《意味がない？それ本当か？》

「本当だよ」

裏スバルは突然笑いだした。
なぜ笑いだしたのかスバルには分からない。

《ならお前は何で力を得た？怒りだろ。なのはさん達を圧倒する力は、怒りの衝動に身を任せたから手に入ったんだろ。どこが意味がないんだ？》

「それは・・・・」

《だから奴を憎んで怒れ！それが力の源になるんだ！》

裏スバルの言っていることはスバルにとっては正論に近い。
たが、スバルとしてはそれをそのまま鵜呑みにするわけにはいかない。

「君の言ってることはわかる。でも、怒りだけが力とは限らない！マッハキャリバー！」

声は帰ってこない代わりに、光でスバルに返事をする。

《見せてみろよ。その力を！》

「あたしは嫉妬なんかしてないっ！」

《まぁ、認めないことは分かってたよ。でもね、本当なんだ》

ティアナはクロスミラージュを向けて叫ぶが、裏ティアナは動じず言い返した。

「あたしが嫉妬してるって言うなら、何に嫉妬してるか説明しなさいよ」

《いいよ。凡人の君は、才能の塊ばかり機動六課の隊長陣や君以外のＦＷメンバーに嫉妬してるんだ》

「あたしが凡人？違うわよ。最初はみんなだけに才能があると思って――――」

《違うよ。今でも思ってる。そしてこれからもずっと。だから、君は嫉妬し続ける》

裏ティアナは黒いクロスミラージュをティアナに向けて、話し続ける。

《じゃあ見せてよ。君が凡人じゃなくて、才能があるところを》

「もちろん」

ダガーモードに変えて、自分の周りにスフィアを出現させる。

「後悔するほど見せてあげるわよ！クロスファイアー・・・・」

更にスフィアの数は増えていく。

《いいよ。見せてよティアナ》

同じように、裏ティアナもスフィアを出現させ始めた。

「シューット！！」

「あー、やりずらい！」

一真は三対一で戦っていた。

三人を倒さないように戦うのは、今までほとんど容赦なく戦ってきた一真にとっては難しい作業であった。

「チッ。このヤロウが！」

フェイトの斬撃をギリギリで避けて、左から迫ってくるティアナの刃を蹴りあげる。

すぐさま後ろに飛び、上から降ってきたスバルに標準を変えて、裏拳で殴り飛ばす。

「あぶねぇの」

頬からは血が流れ始めた。
さっき顔を狙ってきたザンバーを避けた時に出来た傷だろう。
三人は容赦がなく、殺傷設定で向かってくる。

「これ、死ぬんじゃないか？」

そう呟きながら向かってくる三人へ走り出す。

「頑張れ、一真ぁ！死んじゃダメだよぉ！」

外では紅茶を飲みながら応援をしているアリス。
それを見てアリスに殺意のわいた一真であった。

「くっ――――」

《遅いわよ。私を倒すならもっと速くないと》

今のフェイトのスピードはいつもより確実に速くなっている。しかし、裏フェイトの動きはそれを上回っていた。

（もう一人の私だけじゃなく私も罪の力を使っているはず。それに彼女も私も同じ私なのに、どうして？）

《罪を使ってるもの同士。しかも、私と私なのに何で追い付かないのかって言いたそうね？》

「っ――――」

完全に言い当てられた。

《あなたと私の違いは、罪を受け入れたかどうか》

「罪を受け入れる？」

フェイトは距離を開けて裏フェイトと対峙する。

《そう》

「くっ――――」

フェイトよりも速いソニックムーブを使い、裏フェイトは懐へ潜り込みハーケンフォームで切り上げる。

フェイトには高速移動ではなく瞬間移動に見えただろう。

《反応は出来るみたいね》

フェイトはバルディッシュの柄で防ぐ。

あと一瞬防ぐのが遅れていたら、白バルディッシュ刃はフェイトの体に届いていた。

「受け入れるとか受け入れないとか、私は関係ない！だって――――」

《嫉妬なんてしてないから》

裏フェイトは溜め息をついて続ける。

《だったら、何で《堕落》したの？罪があったから、嫉妬していたからでしょ？》

「・・・違う」

《まだ認めないのね・・・しょうがない。私に倒されて体を渡しなさい！》

「嫌だ！」

フェイトはハーケンフォームからライオットブレードへ切り替えて、ソニックムーブで後ろに回りこむ。

「はぁっ！」

《だから遅いのよ》

目の前にいたはずの裏フェイトの声は真横から聞こえてきた。

「なぁっ！」

フェイトは白バルディッシュのザンバーフォームでなぎ払われた。

《当たる瞬間にプロテクションでダメージ軽減。さすが私ね》

「はぁ、はぁ・・・フルドライブ。真ソニックフォーム」

フェイトのバリアジャケットはレオタードに変わり、ライオットブレードは二本となった。

《じゃあ私も。フルドライブ》

裏フェイトはフェイトの真ソニックフォームとは色の違う、白いレオタードとなった。

二人はお互いに走り始めた。

「うぉぉぉ！」

《軽い一撃だな。そんなんじゃ・・・・》

裏スバルは素手でリボルバーナックルを受け止めた。

《あたしに届かないぜ！》

カートリッジが連続ロードされ、白リボルバーナックルのスピナーが回転しその間から煙が出る。

《リボルバーキャノン！》

裏スバルの拳は、スバルの顔面へ。同時に蹴り、スバルを吹き飛ばす。

《見せてくれるんだろ、怒り以外の力を？》

「もちろん・・・・」

スバルの体を魔力のオーラが包む。
罪の力を解放して、裏スバルへ突っ込む。

「カートリッジロード」

ガコンッ、ガコンッ

「リボルバー――――」

《言われてたろ、千歳さんに。初動が遅いって》

「かはっ！」

カウンターで腹に決められ、よろめいた所を蹴りあげられる。
スバルを追い掛けるように裏スバルも跳び、

《はっ！》

二発蹴りを加えて右の拳で殴り落とした。
裏スバルは魔法陣を足場にして、落ちたスバルの方を見る。

《ん？》

砂煙の中から道が伸びてくる。

《ウイングロードか》

それを見た裏スバルも同じようにウイングロードを作り、その上を走ってスバルへと向かう。が、あっちから来るはずのスバルの姿が

見えてこない。

「かかったね。ディバイン・・・・」

砂煙が消え見えてきたスバルの姿。それはディバインバスターの構えをして、いつでも放つことの出来る状態のスバルだった。

《なるほど》

「ドライバァァァ！」

貫通弾は一直線に裏スバルめがけて飛んでいく。

《でもな》

魔力のオーラは消えて、全ての魔力が右手に集まる。
そして裏スバルは減速せず、むしろ加速してディバインドライバーへ向かう。

《オラァァッ！》

魔力を纏った拳は弾丸とぶつかり、弾丸は方向を変えて飛んでいった。

「うそっ・・・・」

《ウソじゃねぇ。これは現実だ》

「・・・・っ・・・・まだ！まだだ！」

スバルが纏うオーラが一気に膨れ上がる。
それは今までの比ではない。

「Ａ．Ｃ．Ｓ発動！フルドライブ！ギア・エクセリオン！」

マッハキャリバーから羽が生え、腰を落として構える。
そしてウイングロードにのり、その上を駆ける。

「行くよ、あたし！」

《来い！》

二人のスバルは、空を駆ける。
自分の力を認めさせるために。

「クロスファイアー・・・・」

《クロスファイアー・・・・》

向かい合った二人の周りには大量のスフィアが出現する。
その数はお互いに五十ずつ。
ティアナはクロスミラージュを、裏ティアナは黒クロスミラージュを目の前にいる自分に向けて構えた。

「《シューット！！！！》」

二人は同時にスフィアを放つ。
ティアナが放ったスフィアは裏ティアナをめがけて飛んでいくが、全てが裏ティアナの放ったものに落とされた。

《消えた・・・訳じゃないね。幻術か》

裏ティアナは周りを見てから、後ろへ銃口を向け引き金を引く。
放たれた魔力弾は何かに辺り、その何かは姿を現す。
「きゃっ！」

オプティックハイドで姿を消し近づこうとしていたが、裏ティアナはそれに簡単に気づいた。

《私の魔法でもあるのに私が気づかないわけがないよ》

「うっさいわね。あたしの顔でそのしゃべり方！」

ティアナは裏ティアナの顔に照準を合わせて、躊躇なく魔力弾を放つ。が、裏ティアナの纏うオーラにそれは防がれる。

《君の力じゃ無理だよ》

「そんなのやってみないと――――」

《やらなくても分かるよ。凡人の君じゃね》

「っ――――！クロスミラージュ、セカンドモード」

クロスミラージュから返事はないが、グリップと銃身が一直線になる。

クロスミラージュはガンモードからダガーモードへと変形した。
同じように裏ティアナもダガーモードへと変える。

《行くよ！》

裏ティアナは、左手の黒クロスミラージュをダーツのように投げてきた。
ティアナはそれをクロスミラージュで弾き裏ティアナを見るが、さっきまでいた所に彼女はいない。
今、ティアナがしたことと同じ事をしているのだ。

（どこにいるの？）

周りにはビルがある。その陰から攻撃してくることだって出来る。
それを予想したティアナは、フェイク・シルエットで自分の幻影を作ってその場から離れた。

（これなら・・・えっ！？）

自分の作った幻影が消されていく。
そしてティアナ自身への攻撃は、

《私はここだよ、ティアナ》

（うし――――）

零距離で放たれたディバインダスター。それは容赦なくティアナの体を包みこみ、吹き飛ばした。

《へぇ・・・・》

裏ティアナは吹き飛んだティアナを見てそう漏らした。
彼女がそう漏らしたのは、ティアナがディバインバスターが発射される寸前に行った行動に理由がある。

「ぐぁ・・・はぁ、はぁ、零距離で撃ってそんなもんなわけ？こんなのだったらまだ、スバルの方が強いわよ」

ゆっくりと立ち上がるティアナ。しかし、足は完全にフラついている。

《あの一瞬で魔力を纏ってダメージを軽減か。やるね》

裏ティアナは笑みを浮かべながら言うと、オーラの魔力を黒クロスミラージュへ装填した。
オーラの魔力は無尽蔵なため、裏ティアナは再びオーラを得る。

《あれは・・・》

クロスミラージュの銃口付近には６つの光弾が現れた。

「クロスファイア！」

光弾は打ち出される。

《無駄だよ！》

裏ティアナはプロテクションで防ぎきる。

「まだよ！」

ベースとなった光弾は銃口付近に残ったまま。
その6つの光弾は1つになり、巨大な光弾となった。
「シューット！」
その光弾は裏ティアナへと真っ直ぐ飛んでいく。
《っ――――》
もう一度プロテクションで防ぐがヒビが入っていく。
そしてプロテクションが破れ、裏ティアナへと光弾は向かう。が、
ダガーモードの刃で弾き落とされた。
《やっぱり凡人だね。努力で何とかしてきたけど》
「うっさい！これ以上喋れないようにしてあげるわ！」
「一真、交代！」
「あぁ」
一真は結界から出て座り込む。
身体中は傷だらけで、血が出ている。
「一真、大丈夫？」

「大丈夫だ。しっかし、殺傷設定でやってくるか」

［一応あの娘達からしたら、あたし達は敵なんだから］

「まぁそうだけどよ」

一真は立ち上がり、小屋へと向かおうとしたときだった。

「なにこれ・・・・」

「なにこれって特訓だよバ・・・・カ」

聞こえた方向に振り向きながら答える一真。

そこには、なのは達機動六課のメンバーが揃っていた。

《一真の部屋》

一真「始まったぞ～い」

なのは「今回、最初と最後だけ・・・・」

千歳「そうだね～」

神無［私なんて最後だけよ。二回もあるだけマシだと思いなさいよ］

なのは「そうなんだけど・・・・」

アリス「しょうがないよ。三人の特訓のお話なんだから」

一・な・神『なっ！？』

アリス「ど、どうしたの！？」

一真「お前、前回だけのゲストじゃなかったのか？」

アリス「そういうことね。これ、作者から」

なのは「『最初はゲストのつもりだったが、今回から《一真の部屋》のレギュラーな』だって」

神無［あのバカ作者。大丈夫なのかしら？］

一真「さあな」

千歳「よかったね、アリスちゃん！！」

アリス「ありがとう、千歳！」

なのは「これでまた減っちゃった・・・でもへこんでてもしょうがない！テンション上げてお返事コーナー行くよ！」

二階堂さんへ

アリス「二階堂さん、その通り。ご近所には内緒だよ。それと旭。お詫びに、一真からお年玉があるみたいだよ」

一真「ハハハハ！旭、大丈夫だ。被害が行くわけじゃない。ただ『巻き込まれるだけ』だ。獄龍破！」

なのは「私も気になっ――――」

一真「聞いてすぐに記憶喪失になりたいのなら、教えてやるよ」

なのは「ごめんなさい」

千歳「綺麗な土下座だね」

神無［そんなに言いたくないね？］

朱へ

アリス「朱さん、初めまして。読んでくれてありがとう！」

一真「特訓の方法だが――――」

そうです。ブリーチから持ってきました。

なのは「らしいよ」

千歳「これからも応援よろしくね」

U．Tさんへ

神無［よかったわね、ちぃ。「選ばれし者」だって］

千歳「ありがとう、クラウド君。それとセフィロスさん。私――――」

なのは「はい、千歳ちゃん」

千歳はベオウルフを装備した。

千歳「誰が幼女だ！」

一真「さて今日は何が見えるのか？」

千歳「超元気玉！」

一同『すごっ！』

一真「超サイヤ人にならないでやりやがったよ」

神無［これがちぃのクオリティ］

アリス「だよね～。じゃあ次回予告に行こうよ」

一真「地下訓練場に来てしまったなのは達」

なのは「一真君とアリスちゃんは私達にとんでもないことを頼んできた」

神無［そしてフェイト達の戦いの決着は・・・・］

千歳「次回、魔法少女リリカルなのは～七つの大罪～」

アリス「【誰も見ていないミラクルは浮かばれない・後編】」

一・な・神・ア『だから関係ないって！』

千歳「？」

誰も見ていないミラクルは浮かばれない・後編

一真はなのは達の方を見て固まっていた。
理解不能の状況に陥り、フリーズしてしまったのだ。

［一真。一真！椎茸！］

「きゃあああああ！！！！！」

女みたいな声で叫ぶ一真。そんなに嫌なのか。

「いや、止めて。怖い、茸怖い・・・・って、匂いがねぇ！」

『・・・・』

全員の冷たい視線が一真に突き刺さる。

「ゴホン・・・・で、何でお前らここにいるんだ？」

「ち、千歳ちゃんに連れてきてもらったんよ」

「イェイ♪」

と、一真に向けて笑顔でブイサインを決める千歳。
そんな千歳に一真は半眼で睨みつけた。

「それより、何やってるの？」

「特訓」

なのはの行動に一真は、さらっと答える。
もちろんそれの答えに気に食わない者はいて、一真に対してつっかかる。

「神童。それは本気で言っているのか？」

「もちろん。じゃなかったら言わねぇよ」

「だったら何でまたフェイト達は暴走してんだ！？」

「説明ダリィからパス。言っておくが、今回のことについては絶対に文句は言わせねぇからな」

ヴィータは何かを言おうとしたが、一真に釘を刺されてしまってその言葉を飲み込んだ。

「一真君。フェイトちゃん達は大丈夫なの？」

「あいつらが、自分に負けなきゃ問題はねぇだろうよ。そうだ千歳」

「ん？」

「アリスの次に入れ。絶対にあいつらに怪我はさせるな？」

「オッケー！」

一真はまた小屋に向かって歩き始めたが、何かを思い出したらしく歩みを止めて振り返った。

「そうだ、お前ら。千歳が入って二時間後に入れ。入らなかった奴がいれば、ルルル～」

そう言い残し、小屋に向かってまた歩き始めた。

「あれ一真は？」

［あそこです］

レヴィアタンの言った場所に、一真はいた。ここから大声で叫んでも、何を言っているか分からないだろう。

「もうすぐ二時間経つのに・・・・」

アリスは三人の攻撃を避けながら、どうするか考えていると結界の外から声が聞こえてきた。

「アリス、代われ。次はあたしだ」

「千歳？どうしてここに？」

戦っていたためアリスは千歳がいることに気が付いていなかった。

「それは来たからだ」

簡単な説明であったが、今はそれだけで充分。アリスは結界に人一

人通れる入り口を作り、千歳と入れ替わった。

「ふぅ・・・・」

［お疲れ様です、マイロード］

「ありがとうレヴィアタン」

待機モードのレヴィアタンにそう言い返し、アリスは顔を上げ目の前のなのは達に視線を向ける。

「あなた達は？」

「人の名前を聞く前に自分の名前を言うものではないか？」

「人の家に勝手に入って来た人が言えるセリフかな？千歳は親友だからいいけど、あなた達とは初対面だからね。不法侵入ととってもいいんだよ？」

と笑顔で言っているが、言い直せばそっちから言わないと不法侵入で訴えるぞと同意である。
一応正論ではあるためシグナムも言い返すことが出来ない。

「確かにそうかもしれへんな。えっと、私は八神はやてです。よろしく」

「私は高町なのは。ゴメンね、勝手に入って来て」

二人は笑顔で自己紹介するが残りの二人、特にヴィータはアリスを睨みつけている。

「ヴィータ・・・・」

「ヴォルケンリッターの将、シグナムだ」

「ヴォルケンリッター・・・・」

アリスはその言葉を聞いて考える仕草をしたが、思い出せなかったらしく顔を上げた。

「まいっか。じゃあ、私の番だね。私は桜ノ宮アリス。千歳の大親友で、一真の二番目で～す♪」

と明るく言うアリス。これを一真が聞いていればツッコミされているが、今はそのツッコミ要員はいない。そのため、アリスの暴走は止まらない。

「二番目って、どういうこと？」

意味が何と無く分かったなのははは、引きつった顔で聞いてきた。

アリスはそれに当然のように返す。

「簡単だよ。一真の二番目の女って意味。一番目はもちろん千歳だけどね～」

「一真君、後で“お話”やね」

「そうだね。私も手伝うよ、はやてちゃん」

黒いオーラを出して一真への“お話”の内容を話すなのはとはやて。

そんな二人を見てアリスは楽しそうにしていた。

「そうだ。今更だけどあなた達、一真と千歳の友達なんだよね？」

「あぁ・・・・そうだな」

完全に今更だ。

違っていたらどうしていたのだろうか、これは。

「よかった」

アリスは微笑みながらそう呟いた。

さて、その頃フェイト達はというと・・・・

《そろそろ認めて私に取り込まれなさい、フェイト。そうすれば楽になれるんだから》

フェイトは立ち上がるが、構えるが傷だらけで肩で息をしている。

対する裏フェイトは傷はほとんどなく呼吸も乱れていない。

完全に劣勢である。

「くっ・・・・」

フェイトは睨みつける。それを見た裏フェイトは（笑）ながら、

《その様子じゃまだ諦める気は無さそうね。じゃあ、続けるわね》

裏フェイトは魔力のワイヤーを持ち、片方のライオットブレードを頭上で回転させ始めた。

《はぁっ！》

そしてそれをフェイトに向け、ワイヤーを伸ばして飛ばしてきた。
手元にはもう片方のライオットブレードは残っている。

「ふっ！」

フェイトはそれを弾き避けるが、意味はなかった。目の前には裏フェイトが立っていたからだ。
飛ばしたライオットブレードを飛ばすと同時に、それを追って来たらしい。

《ハロー》

「がはっ！」

フェイトは思いっきりライオットブレードで殴られ、吹っ飛ばされた。
罪を使える者同士の戦いでは、どれだけ自分の罪を認めているのかで決まる。
フェイトやスバル達がもう一人の自分に勝てないのは、罪を認めようとしないのが理由だ。

「ぐぁっ・・・・」

《さっさと認めればいいのに》

裏フェイトは頭上でライオットブレードを回しながら言う。

（私の罪・・・《嫉妬》。“私”が言うにはなのはや、それ以外の家族に嫉妬してる・・・・）

フェイトは自分がハラオウン家の一員となったころ、闇の書事件の後のことを思い出していた。

《どうしちゃったの？もしかして諦めちゃった？》

（あの頃の私は、とても遠慮してた。自分にはもったいないくらいの家族だったから。その時の私はなのはを見て・・・・）

《返事がないから、肯定ととっちゃうわね。じゃ、消えて私に取り込まれなさい！》

裏フェイトは日本のライオットブレードを一つにしてザンバーフォームにした。

（そう・・・私はずっと・・・・）

《バイバイ、フェイト》

躊躇なく振り下ろされる白バルディッシュ。

しかし、白バルディッシュの魔力刃がフェイトを捕えることはなく、魔力のオーラに弾き返された。

「そうだね。今分かった・・・・ううん。思い出したよ」

今まで喋ることなく沈黙を続けていたフェイトが、やっと口を開いた。
そしてゆっくりと立ち上がる。

「あなたの言う通り、今まで私は嫉妬してた。血の繋がった家族がいることが羨ましくて」

《ようやく認めたわね。ということは、私に取り込まれる――――》

「違うよ。嫉妬してたことは認めたけど、あなたに取り込まれようとは思ってない。むしろ、私があなたを取り込む」

その言葉に裏フェイトは目を見開いて驚いたかと思うと、突然笑い始めた。

《アハハハ・・・・》

「私、変なこと言った？」

《言ったと言えば言ったわね。あなたが私を取り込むなんて不可能よ》

「それはやってみないと分からないよ」

裏フェイトの視界からフェイトの姿が消える。
ソニックムーブを使ったのは裏フェイトでも分かった。

《無駄よ。そこっ！》

振り抜いたザンバーは空を切る。

《なっ！？》

「こっちだ！」

裏フェイトは、突然視界に入ってきたフェイトのザンバーで払い飛ばされた。

「今の狙いはよかったけれど、少し振り抜くタイミングが遅かったよ。多分、今の私はあなたより速いから」

《くっ》

裏フェイトもソニックムーブで高速移動を始め、フェイトもソニックブームで裏フェイトを追う。

「はぁっ！」

フェイトは自分のスピードに合わせて、ザンバーを振り抜く。

《ぐぅっ！》

裏フェイトはそれをギリギリで受け止める。

フェイトはすぐにザンバーを分離させ、二本のライオットブレードへと戻し一旦離れる。

裏フェイトはフェイト追うが追い付けない。いつしかフェイトの姿は消えていた。

《――――っ！》

「どこ見てるの？」

声が背後から聞こえ振り向くが、フェイトの姿はない。

《クソ！》

裏フェイトの背後に音もなく現れたフェイト。その手には、ザンバーフォームのバルディッシュが握られていた。

「そっちでもないよ」

フェイトは裏フェイトの背中に向けて、ザンバーを振り抜いた。

《がぁっ！！》

フェイトはソニックブームを止めて、肩にバルディッシュを担ぐ。

すると足下に六芒星の魔法陣が現れた。

「決めるよ、“私”！」

《来なさい・・・・フェイト！》

立ち上がった裏フェイトも同じ構えを取る。

「《撃ち抜け、雷神！》」

二人は同時にザンバーをお互いに向けて振り下ろす。

二本の魔力刃はぶつかり、拮抗するがゆっくりとフェイトが押し始めた。

「うぉおお！！！！」

《あぁぁぁぁ！！！！》

フェイトのザンバーは白ザンバーを押し返し、裏フェイトを切り裂いた。

切り裂かれた裏フェイトは光の粉となり、フェイトに吸い込まれていった。

「ありがとう、“私”」

そう呟いてフェイトは目を閉じた。

「がっ・・・・」

《どうしたよ？これで終わりって言わねぇだろうな？》

裏スバルは、スバルの首を掴んで持ち上げている。

「まだだぁ！」

スバルは首を掴んでいる裏スバルの手を剥ぎ取ると、腹にアッパーを入れて持ち上げている右ストレートで吹き飛ばした。

「げほっ、げほっ・・・・」

《ディバインドライバー！》

スバルよりも遥かに速い速度で向かってくるディバインドライバー。
スバルは避けたが腕にかすった。

「くぅっ！」

かすった場所からは血が出てくる。

《あれを避けたか。勢いをつけてぶん殴ったんだがな》

スバルの本気の拳を喰らって無傷の裏スバル。
オーラがスバルの攻撃を全て受け止め、衝撃を完全に遮断したのだ。

（フルドライブでも届かない・・・・）

《そっちが動かねぇならあたしから行くぜ！》

裏スバルは、白マッハキャリバーを加速させながらスバルへ突っ込んでいく。
スバルも同じように、マッハキャリバーを加速させ裏スバルへ突撃する。

「《リボルバーキャノン！》」

オーラの魔力を込めた2つの拳は、二人の間でぶつかる。

「うぉぉぉぉ！！！」

《うらぁぁ！！！》

一瞬だけ拮抗するが、力の差は歴然でスバルの拳は押し返される。

「カートリッジロード！」

リボルバーナックルから薬莢が弾き出され、スバルの魔力が増幅される。だが、スバルの拳は裏スバルの拳を押し返すことはなく、そのまま吹き飛ばされた。

《やっぱりお前があたしに勝つのは無理だ。怒りを力にしないお前がじゃあな》

裏スバルは拳を地面につきつけ、

《ウイングロード！》

作り出した道の上を走ってどんどん加速していく。

「怒り・・・・」

スバルは、今までに二度怒りを力にしてそれを行使したことがある。一度目はＪＳ事件のときに、ギンガを連れ去ろうとしたナンバーズに対して。

そして二度目は一週間前現れた《罪人》に対して。

スバルは怒りがどれほどの力を与えるかは分かっていた。

（でも・・・怒りだけの力は相手に届かない）

《ＩＳ発動！》

裏スバルの瞳の色が右だけ金色へと変わる。

《振動拳！》

「あああぁぁぁぁ！！！」

裏スバルの拳がスバルの胸部にめり込んだ。
しかもかなりの加速での一撃のため、かなりの衝撃がスバルを貫く。

《ほぅ、まだくたばんねぇか。じゃあ、次で決めてやるよ》

裏スバルはディバインバスターの構えをとり始める。
スバルをそれを、朦朧とする意識の中で見つめていた。

（あたし、負けちゃうんだ。それであたしの意識は、もう一人のあたしに・・・そうなったら、みんなどう思うかな？悲しむよね・・・）

なぜか他人事のように考えることができ、スバルは不思議だった。

（みんな悲しむんだ・・・・）

《じゃあなスバル》

（みんなを悲しませる・・・・のは、嫌だ！！）

スバルは、自分の中で何かが大きくなっていくのを感じた。それはすぐに分かった。
それは・・・・怒りだった。自分に対する怒り。

（こんな簡単に弱音を吐いてどうする、あたし！みんなを悲しませてどうする！！）

《ディバインバスター！》

裏スバルの砲撃は、スバルを一瞬にして飲み込んだ。

《これであたしが――――》

「オリジナルのあたし？違うよ」

《んだと？》

裏スバルは予想外のことに戸惑った。
本来なら消えて自分に取り込まれているはずのスバルが、さっきよりも濃いオーラを纏ったスバルが立っていた。

《そういうことか・・・何に対してかは分からねぇが、怒りで力が増幅されたみたいだな》

「そうみたいだね」

《でもな、今ごろ使っても遅いんだよ！》

スバルの顔面を狙い殴りかかる。スバルはそれを避け、裏スバルの腹に一撃を決める。

《ごほぉっ！》

「全然遅くないよ！はぁっ！」

スバルは裏スバルを蹴りあげ、ウイングロードを展開し追い掛ける。
裏スバルもウイングロードで着地して、スバルへと向かう。

「《ディバイン・・・・》」

「ドライバー！！！！！」

《ブレイカー！！！！！》

弾丸と砲撃。力で見れば、スバルの放ったドライバーは劣る。しかし、今のスバルの放ったドライバーの貫通力は、

「貫けぇぇぇ！！！！」

裏スバルの放ったブレイカーを貫けるほどのものだった。
そしてドライバーは、そのまま裏スバルの体を貫いた。

「はぁ、はぁ・・・・終わった」

スバルはそのまま寝転んで、空に笑顔を向けた。

ティアナはビルの物陰に隠れて、裏ティアナの攻撃から逃げていた。

《そろそろ、かくれんぼに飽きてきたな》

真後ろから聞こえた裏ティアナの声。その手は振り上げられており、ダガーモードの黒クロスミラージュが握られていた。

「くっ！」

ティアナはオプティックハイドとフェイク・シルエットを同時に使い、その場から離脱する。

裏ティアナが自分の視界から消えると同時にシュートバレット・バレットFを三発放った。

これはサーマルセンサーの効果の付いた誘導弾で、熱源を自動追尾して飛んでいく。

「ふざけんじゃないわよ」

ティアナは悪態をつきながら、カートリッジを入れ換える。

「なのはさん達に嫉妬してる？今はむしろ、あんたに嫉妬してるわよ！」

ティアナが移動しようと立ち上がった瞬間、背中に衝撃を受け倒れこむ。

「なっ・・・・」

飛んできたのはシュートバレット。裏ティアナの放った物である。

オーラを纏っているため、本来ならばティアナに届くはずのない魔法なのだが、これは《罪人》同士の戦い。

罪を認めないティアナには、ティアナの罪そのものの裏ティアナの魔法は届いてしまう。

《ここだったんだ。シュートバレットを追ってきて正解だったね》

裏ティアナも同じようにシュートバレット・バレットFを使い、ティアナを探していたらしい。

「このっ！」

ティアナは立ち上がり踏み込むと、ダガーモードのクロスミラージュで切りつける。

しかし、刃は魔力のオーラで遮られた。

《本当に頑張るね。無駄なのにさ》

ティアナの腹に黒クロスミラージュの銃口を向け、何度も引金を引き魔力弾を連射する。

「かっ――――！」

裏ティアナにもたれるように倒れこんでくるティアナを裏ティアナは持ち上げて、大通りへ投げ飛ばす。

《ディバインバスター》

空中のティアナに向け、バスターを使い追い撃ちをかけた。

ティアナはそのまま地面に落下する。

（何で・・・何であたしなのに、こんなに強いのよ・・・羨ましくて、ムカつく！）

落下していくティアナの周りに大量のスフィアが現れる。

そのスフィアの大きさは、いつもよりも一回り大きい。

「クロスファイアーシューット！」

それを見た裏ティアナも、同じようにクロスファイアーシュートを放つ。狙いはもちろん、ティアナの放ったスフィアだ。

裏ティアナの放ったスフィアは、ティアナのスフィアと直撃し相殺する。はずだったのだが、消えたのは裏ティアナのスフィアだけ。

《なっ！？》

想定外の光景から意識をティアナに戻すと、ティアナは四人になっていた。

《バレバレだよ》

黒クロスミラージュを左腕と体の間から覗かせて、後ろへ魔力弾を放つ。が、後ろにいたティアナの姿は消えた。

「あんたがどうやってあたしとシルエットを見極めているかは知らないけど、それは外れ。あたしはずっとここにいたわよ」

姿を現したティアナは魔力刃で裏ティアナを切り裂いた。

「凡人が才能のある人間に嫉妬するのは当たり前よ！あんたに言われて、最近までずっとしてたってことに気付かなかったあたしもあたしだけど、あんたにそこまで言われる筋合いはないのよ！」

ティアナは裏ティアナを蹴り飛ばし、魔力弾を何度も撃ち込む。

「ディバイン・・・・」

クロスミラージュを1つにして、銃口に光弾をセットして構える。

「バスター！」

オレンジの砲撃が裏ティアナを飲み込むが、ティアナはこれで終りだとは思っていない。
ティアナは素早く次の攻撃の準備をする。

「これで最後よ、“あたし”」

足を大きく開き、腰を入れてクロスミラージュを二丁で構える。
銃口の先にはオレンジの光弾がセットされ、それを囲むようにターゲットサインが現れる。
銃口から伸びるレーザーサイトの先には、立ち上がろうとする裏ティアナがいた。

「ファントムブレイザァァァ！」

裏ティアナの姿は光の中に消え、砲撃が消えた時にはその姿はなくなっていた。

「終わったのよね？はぁ・・・・」

ティアナはそのまま目を閉じ、ビルにもたれかかり座り込んだ。

「全力全開！スターライト・・・・」

「響け、終焉の鐘！ラグナロク・・・・」

「剣閃烈火！火竜・・・・」

「ツェアシュテールングス・・・・」

《雷光一閃！プラズマザンバー・・・・》

《一撃必倒！ディバイン・・・・》

《ファントム・・・・》

今の状況を外で見ている一真は、異常なまでの寒気を覚えた。

「なぁ、あれ誰か死ぬんじゃねぇか？」

「ありそうね・・・・って、フェイト達の様子おかしくない？」

「戻るんじゃねぇか。ってことはあいつら止めねぇと。アリス！終りだ！」

一真は千歳と一緒におやつを食べているアリスを呼ぶが、

「えっ、ちょっと待ってよ。まだ準備が！」

「ふざけんな！たくっ、俺が行く」

何があってもいいように神無を起動させ肩に担ぐと、結界に近づい

ていく。

「なのは！はやて！シグナム！ヴィータ！終りだ！その、ヤバイ魔法の発動を止めろ！」

一真の声は届いていないらしく、四人は止める気配はない。

「だから止めろっての！」

結界の中に入って叫ぶが、集中しすぎていてまだ届かない。
フェイト達はというと、倒れてしまっている。

＞一真、何がどうなってるのか分からないけど助けて＜

動けないフェイト達の声。

「お前ら、いい加減に止めろ！」

ほんとんど発射出来る状態までなっている。
そしてここで、とうとう一真がキレた。

「テメェら、大概にしろや」

一真は頭上で神無を回転させ始める。
それに一番最初に反応したのは、これを間近で喰らったシグナムだった。

「し、神童。それだけは止めてくれ」

シグナムの言葉を聞いて、なのは達も発動を止め一真を見る。する

と、すぐさま一真の説得に入る。

「か、一真君！それはダメだよ！」

「せや一真君！死人が出る！」

「一真！ちょっと考えろ！」

全員が全力で説得するが、一真は額に十字路を浮かべたまま笑顔になった。

「うん、それ無理」

一真は、アリスなら一発で堕ちるような笑顔で獄龍破を放った。
獄龍破はなのは達を飲み込み、そのまま結界をいっぱいにした。
一応・・・今日の特訓、終了☆
・・・似合わないことはやるものではないな。

《一真の部屋》

一真「作者。お前、何やってんだよ？」

神無［気持ち悪いわよ］

すみませんでした。

なのは「今回も出番少なかったなぁ。最後は一真君にやられるし・・・」

千歳「なのはちゃん、大丈夫だよ。私の方が少なかったから」

アリス「千歳、ダメだよそんなことで暗くなっちゃ。今までよりも絶対に出番は増えるから！」

一真「だといいな。んじゃ、感想の返事コーナーだ」

シグマさんへ

一真「荒療治でもやらねぇといけねぇんだよな、これが」

アリス「一回やってみる？結構、自分って強いよ」

千歳「お年玉ありがとう、リボー君！」

神無「お年玉だけど、結構あるわね。なのは、ちゃんと分けてよ。一真達にポンって渡したらすぐに消えるから」

なのは「どうして？」

神無「好き勝手に使っちゃうから。今まで同じようなことをどれだけやって来たか」

なのは「にゃはははは・・・・」

U．Tさんへ

千歳「よっしゃぁ！セフィロス、殺ったぜ！」

一真「最近千歳が神になってきたような・・・・」

神無［確かにね。《一真の部屋》だけじゃなくて、他のところでも最強ってどうよって感じするけど］

なのは「一真君達、次はU．Tさんの所に行くんだ」

アリス「いいなぁ。私もいろんなところ行きたいなぁ」

一真「知らん。我慢しろ」

朱さんへ

一真「見られたが問題ねぇぞ。手伝わせりゃいいんだからよ」

なのは「無茶苦茶すぎるよ。書かれてないけど、結構頑張ったんだからね」

一真「あっそ」

アリス「それにしても、殺傷設定相手に非殺傷設定は厳しいね」

千歳「そうか？あたしはそうは――――」

神無［ちぃだけよ、そう思うのは］

ＴＯＵＤＡさんへ

一真「その話には同情する・・・・さすがに十二神将全員とのバトルは遠慮する」

千歳「あたしはやってみてぇな」

神無［ちぃなら二、三人倒しちゃいそうね］

なのは「隆浩のフルドライブ危険なんだもん。使わせたら死人がでるよ」

アリス「あれはちょっと・・・・でも、あのファイナルモードで星間飛行流してほいな」

一真「何で？」

アリス「それはもちろん、キラッ☆したいからだよ」

一同『・・・・』

アリス「あれ、みんなどうしたの？」

一同『じゃあ次回予告いってみよう～』

アリス「スルーはイヤァァァァ！」

なのは「自分の負の面との戦いを終えたフェイトちゃん達は、一日休みをもらえた」

千歳「その休みを有効利用するために、あたし達は町へ出かけたんだが」

アリス「それは休めない休日の始まりだった」

神無［次回、魔法少女リリカルなのは～七つの大罪～］

一真「【誘拐は拐う人物の事前調査をしっかりと】」

一同『次回へスタンバイレディ！』

誘拐は拐う人物の事前調査をしっかりと

帰ってきた一真達は、自分達以上に疲れきった上獄龍破の巻き添えを喰らったフェイト達をシャマルに任せ、会議室に使っている部屋に集まっていた。

「ホント、呆れるよ。まだ言ってなかったって」

「るせぇよ。お前だって言わねぇだろうが」

と言い合いを始めてしまった二人。

「ちょっと一真君、アリスちゃん。その辺にして」

なのはに言われて二人は止まり、なのは達の方を向いた。

「で、何の話だった？」

「お前とアリスが話があるって言って呼び出したんだろうが！」

「そうだったな。俺は、話す気なんか微塵もねぇのに」

＞あそこまで見られて、言わないわけにはいかないでしょ＜

＞わーってるよ、ったく＜

一真は盛大な溜め息をつき話始めた。

「あー、エリオとキャロ以外に聞くが、アリスの家で俺とアリスの

目の色は見たか？」

一真の質問に全員が首を横に振る。
それだけで一真の気力はなくなった。

「よし寝よう。じゃあ――――」

「待ていっ！」

部屋を出ていこうとする一真の手をはやてが掴み、止める。

「分かった。分かったから、その手を放せ」

そう言って一真は椅子に座りなおし、再び話を始めた。

「見てねぇなら見せるしかないか」

一真とアリスは手を目元に持っていき、リミッターとなっているカラコンを外し本来の色の瞳を晒す。

「その色・・・・」

「《罪人》と同じ色じゃねぇか」

「そりゃ私達《罪人》だからね」

今まで一真が黙秘してきたことを、アリスはさらっと言ってしまった。
一真としても言うつもりだったから文句はないのだが、もう少し言い方を考えてほしかったみたいだ。

「神童。なぜ言わなかった？」

「言いたくなかったからだ。それ以外に何がある？」

一真は一言で一蹴する。

「もういいよな？で、明日だが」

もう話したくない一真は、話を無理矢理切り替えた。
なのは達もそれを察して何も言わない。

「フェイト達の特訓は休みだ。今日の疲れが残っている状態でやっても意味をなさないからな」

「今日のあれって、そんなにキツイ特訓だったん？」
はやての疑問に一真の代わりにアリスが答える。

「かなり、ね。でも、あれをしたことで暴走する確率は０と言ってもいいくらいになったよ」

「本当ですかアリスさん！」

それを聞いたキャロは叫ぶように聞き返す。

「本当だよ。自分の罪を取り込んで、自分の物にしたんだからね」

エリオとキャロは笑顔になる。
今まで母親や自分の友人であり仲間が、いつ暴走してもおかしくない状況にあったのだ。それがなくなったと聞いて嬉しくないわけが

ない。

「で、一真。そのことまだフェイト達に言ってないんだ。だからね、伝えてきて」

「何で俺――――」

「伝えてきて」

「はぁ・・・分かった。行きゃあいいんだろ」

そう言いながらもアリスの言葉に従う一真であった。そして一真が出ていくと、アリスの表情が悪魔のような笑みに顔に変わる。

「ねぇ、みんな。一真と千歳のデート見たいと思わない？」

一真と千歳、特に一真がいないから出来る会話である。

そうそう。言い忘れていたが、千歳はこの場にいない。疲れて一真の部屋で眠っている。

「どういうことだ、桜ノ宮？」

「そのまんまの意味だよ、シグナム。明日を一日休みにして、みんなで街に行くことにするんだ。そこで組分けをして、一真と千歳を二人きっりにするように仕組んで私達はそれをバレないように尾行」

『・・・・』

あのシグナムとヴィータも興味があるのか、なのは達と同じように黙ってしまった。

しかしここで、キャロがこの作戦の問題点に気がついた。

「あの、この考えって尾行が始まってすぐにバレるんじゃ・・・・・
一真さんと千歳さん鋭いですし」

それを聞いたアリスは得意気な顔をして、打開策を言う。

「ふふふ。忘れたの？私達には魔法というものがあるんだよ。姿を消す。または変身して別人になりすますって言う手もあるんだから。それに、もしも見つかっても大丈夫」

「どうしてや？」

「私が脅して無理矢理手伝わされたって免罪符付き。どう？」

アリスが同意を求める。それに対してなのは達は顔を見合せて、

『アリス（ちゃん／さん／桜ノ宮）断ろうとしたけど脅されてしまい、手伝うはめになりました』

棒読みで同時に言い放った。

しかし、この時なのは達は間違った選択をしてしまったことに気付いていなかった。

「というわけだ。理解したか？」

シャマルの部屋に来ていた一真は、フェイト達に暴走することはほとんどないと言うこと伝えた。

「本当ですか！？」

「大声で返すな、スバル。聞こえてるからよ」

「すみません・・・・」

一真は欠伸をすると、フェイト達に背を向けた。

「まぁ、明日は休みだ。なのは達にも言ってあっから、好きに過ごせ。じゃな」

そう言い残し部屋から出てた。が、部屋の前には険しい顔をしたシャマルが立っていた。

「一真君」

「な、何だよシャマル？」

「ちょっと一真君にお話があるんだけど、いいかな？」

「あぁ。問題はねぇぞ」

「じゃあ一真君の部屋に行きましょ」

一真はわけの分からないまま、シャマルに連れられ自分の部屋に向かった。

「で、何だよ話って？」

一真のベッドの上で千歳が気持よさそうに眠っているのを見て、一真は千歳を睨みつけた。自分が寝れないので、軽い八つ当たりである。

「体のどこか傷とかある？それも大きな傷」

「いいやねぇぞ」

シャマルの質問を即座に否定する一真。

「そっか。それならいいんだけど。帰ってきた時、様子がおかしかったからもしかしてと思って」

「そういうことか」

「うん。それじゃあね一真君」

「あぁ」

一真はベッドに座り込み、千歳の寝顔を眺める。

「あんた、どんな顔をしてたのよ？」

「さぁ？もしかしたら、眠くて顔をしかめてたのがそう見えたのかもな」

［眠いだけで心配させる顔って、どんな顔よ］

「んなこと言われても困るっての」

一真そう言って床に寝転んだ。

ベッドは千歳に占領されているから仕方がないのだが、寝にくいのではないかと思う。しかし、一真としては寝ることが出来れば問題ないらしい。

［朝まで起きるつもりはないのよね？］

「あぁ」

［そう。じゃあおやすみ、一真］

「あぁ・・・・」

（一真君、部屋にいるかな？）

なのはは明日、みんなで遊びに行くことを一真に伝えに来たのだ。

「一真君、いる？」

ノックして声をかけるが、中から返事はない。いないのかと思いドアノブを回すと、開いたのだ。

（もしかして、寝てる？）

中に入ると、予想通り一真は眠っていた。
しかも、布団を被らず床の上で。一真だから可能性は低いが、風邪をひくかもしれない。

［あ、なのは。ちょうどよかったわ］

「神無。どうしたの？」

［このバカ布団に入らずに寝ちゃったから、何かかける物持ってきてほしいのよ。こいつ、昔から風邪だけはひきやすいから］

「だったらベッドに・・・・あぁなるほど。これじゃ無理だね」

なのははベッドで眠っている千歳を見て、一真が床で眠っている理由がわかった。

「アリサちゃんに頼んで毛布か何かもらってくるね」

「もらって来たよ神無」

［ありがとう、なのは］

「どういたしまて」

なのははもらって来た毛布を一真にかけながら、あることを思った。

「何か神無って一真君のお姉さんみたいだね」

［へっ？お姉さん！？そ、そんなわけないじゃない！私が一真のお姉さんだなんて！］

かなり動揺している神無。なのははなぜ神無がここまで動揺しているのか分からなかったが、気にすることなく続ける。

「そうかなぁ？でも、みんなもそう言うと思うよ」

［そ、そう？］

「そうだよ。神無みたいなお姉さんだったらいいなって、私も思うな」

「あ、ありがとう・・・・」

「うん。あ、そうだ。一真君が起きたら、明日みんなで遊びに行くこと伝えておいて」

［分かったわ］

なのはが出ていくと、神無は眠っている一真に話しかける。

［一真聞いてた？あたしがあんたのお姉さんだって。あんたはどう思ってるのかしらね？もしあんたがまだ・・・・まぁいっか。おや

すみ」

「・・・・重い・・・・・」

一真は胸に感じる重さで目を覚ました。

「んだよ・・・・・」

一真の上にいたのは、

「もう・・・・お腹一杯・・・・・」

ベタな寝言を呟きながら眠っている千歳であった。
千歳の口から垂れる涎は、一真の服に染みを作っている。

「・・・・」

「あ、美味しそう～・・・・・」

「おい・・・・・」

「一真ぁ～・・・・・あ～ん・・・・・」

「起きろや、千歳」

「ね、美味しいでしょ・・・・・椎茸？」

「ふざけんなぁぁぁぁ！！！！！」

叫びながら千歳を振り落とす。涎にもムカついたのだが、一真としては夢で自分に椎茸を食わせた千歳が許せなかったのだ。

「ふぇ・・・・あ、おはよう、一真ぁ」

「あぁ。さて、千歳。お前は今見ていた夢の内容を覚えているか？覚えていないなら許し――――」

「あ〝・・・・」

運が悪いことに、夢の内容をはっきりと覚えていたらしい。

「ごめんな――――」

「謝ろうが許さねぇ。お前は俺を汚した！」

椎茸を食べさせる夢見て、その内容を聞いただけで汚したってどうよ。

「お仕置きだ、千歳」

「にゃあああぁぁぁぁぁ！！！！！」

「そろそろ一真も起きてるよね」

「まぁ起きてへんかったら、起こすまでやけど」

「でも怒らないといいけど・・・・」

なのは達三人が一真の部屋の前に着くと、中から声が聞こえてきた。

「そ、そこはらめ・・・・ひゃう・・・・そこよわ・・・・あぁ！」

「んなこと分かっててやってんだよバカ。おとなしくお仕置きを受けろ！」

「にゃうっ・・・・しょこはぁ・・・・ぁあぁ！」

千歳のこの声を聞いて、三人の思考はある一点に行き着いた。

それにより三人は顔を真っ赤に染めた。

「あ、あ、あ、あぁぁ！」

『朝から何やってんじゃあ！！！！』

ドアを壊す勢いで中に入る三人。その中では、

「は？」

「はぁ、はぁ、はぁ・・・・」

千歳に覆い被さり、擽っている一真の姿があった。

しかし、千歳の服は乱れ、呼吸も荒い。端から見れば、一真が千歳

を押し倒しているように見えるわけで。

「な、何してるのかな～一真ぁ」

「ここにいたるまでの説明はダリィから省くけどな、千歳を撫ってる。で、何で顔が真っ赤なんだ？」

「っ！！！！」

「ディバインバスター！！！！！」

前置きもなく放たれたディバインバスターに、二人は抵抗することなく飲み込まれた。

「今日はみんなで遊びに行こうと思います。で、今から組わけをします！」

「組わけだぁ？」

「そや。こんな大所帯で動くわけにはいかんやろ？」

はやての言う通り、ここに集まっている人数は結構なもの。

なのは達三人とヴィヴィオにザフィーラを抜いたヴォルケンズにＦＷメンバーに、一真とアウトフレームのリインとアギトを含めた六課メンバー。そして、アリサにすずかに千歳、アリスの地球メンバー。計１７人。

「確かにな。でもどうやって分けんだよ？」

「なのはちゃん、お願いや」

「は～い」

なのはが出して来たものは、穴の空いた箱。この中にクジが入っている。

「この中には数字の書いてある紙が入っていて、同じ数字の書いてある人同士が組になってな。ちなみに、数字は一から四が三枚、五と六だけは二枚入っててフェイトちゃんはヴィヴィオと行動や」

一真はなのはに近づいていき、箱に手を入れる。

掌の中には一枚の小さな紙。その中には、

「五か」

「次は千歳ちゃんね。はい」

千歳も手を入れてクジをひく。

その数字は、

「五だよ！」

「じゃ、一真君と千歳ちゃんがペアやな」

この後もぞくぞくとペアが決まっていく。

そして組わけの結果はこうなった。

1．なのは、ヴィータ、アリサ
2．スバル、ティアナ、エリオ
3．アリス、はやて、リイン
4．シグナム、シャマル、アギト
5．一真、千歳
6．すずか、キャロ
7．フェイト、ヴィヴィオ

さて、このクジだが、最初からどう引いても一真と千歳は必ず五を引くようになっていた。その仕組みはこうである。

まずクジの中身はどれを引いても五になるようにしておく。

次になのは達は自分が誰と組むか決めておき、クジを引いたときに数字無視して一緒になる。

以上、これが一真と千歳を同じ組にする方法だ。

「組わけも終わったし、それじゃ出発や！」

「一真、アイス！」

千歳は31アイスクリ●ムの看板を指差しながら言う。

「お前、その手に持ってるクレープは何だ？」

「さっき一真に買ってもらったクレープだよ」

「だよな？だったら、何でアイスクリームをねだる？」

「もちろん食べたいからだよ」

胸をはって言う千歳に一真は、

「黙れ甘党チビ娘！手に持ってるものが食えてねぇのに、次をねだるな！」

「ということは、クレープを食べたら買ってくれるんだよね？」

「まぁ・・・・」

言い返すことが出来ずに、あいまいな返事を返した一真。
それを聞いた千歳は、流し込むようにクレープを食べた。どういう食べ方をしたら、そんな風に食べることが出来るのか知りたい。

「んくっ・・・・っと、これでいい？」

「ありえねぇ・・・・」

二人は手を繋いだまま歩き出す。二人を見ている存在がいるとも知らずに。

＞こちらスターズ1。バレることなく、問題なく監視は続けてるよ＜

＞こちらアリス。了解。そのまま監視を続けてね＜

＞了解＜

なのははアリスとの念話を切ると自分達の前を歩く二人に集中する。
二人とは何度も目があっているがバレていない。なぜなら、変身魔法で姿を変えているからである。

「千歳、あたし達といるときと全然違うわね」

「それに一真もな。あんな二人、見たことないぞ」

ヴィータの言葉になのはとアリサは肯定のしぐさをする。

「恋人同士って言われてもおかしくないよね」

「「まぁ、周りから見たら、妹だけど（な／ね）」」

二人の言っていることは間違いではないだろう。
当の千歳も、それをたまに使っている節がある。

「お、あそこに入るみてぇだぞ」

二人を追い掛けようとした時だった。アリスから連絡が入る。

＞ストップ。あそこにはスバル達を行かせるから、なのは達は外で待機ね＜

＞うん。分かったよ、アリスちゃん＜

他の二人に今のアリスからの連絡を伝えると、少し離れた位置に移動した。
さて、そのころ一真達は・・・・

「もちろん、ここはお前が金を出すんだろうな？」

「え～、一真買ってぇ」

千歳は上目使いで一真を見上げる。

「さっきクレープを買ってやった気がするぞ」

「そうだね。でも買ってよぉ～」

「でも」の間違った使い方をしながら、千歳は一真にアイスをねだる。

「だから――――ん？」

周りを見ると、一真に対して「酷い兄」という視線が注がれる、完全なアウェイの状態になっていた。が、それはしょうがないことかもしれない。

千歳の容姿だけをみれば、誰も一真の幼馴染みで同い年とは思えない。むしろ兄妹である。だからこんな状況が出来上がるのは自然なことだ。

「・・・・はぁ」

＞どんまい、一真＜

神無からの励ましの言葉。それに対して一真は、

＞うるせぇ。同じような状況なら何度も体験してっから、慣れてんだよ。悔しいくらいにな！＜

なんという悲しいセリフ。

耐えろ一真。それが世界を、いや千歳を救う！

「どれだ？」

「え？」

「だからどれだって聞いてんだよ。俺も買うからお前のも言ったら早いだろ」

それを聞いた千歳は笑顔を一真に見せて、アイスの並ぶケースを向いた。

「えっとね・・・チョコとオレンジとストロベリーのトリプル」

「食えるのか？」

「もちろん。何せ特訓したからね」

「何の特訓だよ」

そう言いながら、盛大な溜め息をついてからレジへ向かう。

ここに入る前は拒否していたのに、結局買うことになった一真。これがアリス、またはなのは達が相手だったら買ってはいないだろう。

一真は、千歳だけには甘いのだ。

「ほれ、千歳」

「ありがとう、一真！」

「あぁ」

（絶対に残して、俺が食うことになるよな・・・・つか、そうなると分かってて何で買ったんだ？バカだろ俺・・・・・）

そう思いながら、千歳の手を取り店を出る一真であった。

「今更だけど。何で、あたしが他人のデートを尾行しないといけないのよ」

ここまで参加しておいて、本当に今更なことを言うティアナ。
それに対してスバルは、

「こういうのって、面白いじゃん。ティアは興味ないの？」

「無いわけじゃないけど・・・・」

ティアナもあの一真と千歳のデート（？）は気になるが、尾行はさすがに気がひけてしまう。

「そういえばさ、エリオ」

「何ですか？」

「キャロとはどこまでいったの？」

「えっ！？」

スバルの不意打ちのような口撃に、エリオは言葉を失ってしまう。
ティアナもスバルと同じことを思ったようで、

「それは気になるわね。キスはしたわけ？」

「そ、そんなこと出来るわけないじゃないですか！」

それを聞いて二人は同じ考えに行き着いた。

「「もしかして、告白さえしてない！？」」

「・・・・はい」

「だってあんた、機動六課が再設立するまでの間も一緒にいたんでしょ？」

「はい・・・・」

そう。ＪＳ事件が終結し機動六課が再設立するまでの間、エリオとキャロの二人はキャロの前所属の辺境自然保護隊にいたのだ。
機動六課時代からキャロが好きだったエリオにとっては、キャロに自分以外の男が寄り付かないチャンスだけの日々だったのだが、

「だけど告白も出来ないまま、機動六課再設立の日を迎えて今にいたるってわけだ」

「はい・・・・」

エリオは、二人の言葉にどんどん小さくなっていく。
エリオとしてもかなり後悔しているようで、かなりえぐるらしい。

「まぁ、頑張りなさい。あたし達が応援するから」

「そうだよ、エリオ。チャンスはまだまだあるからさ。諦めちゃダメだよ」

「スバルさん、ティアさん・・・・ありがとうございます！」

というわけで、今日ここに「エリオを応援する会」が結成されたのであった。
頑張れエリオ！負けるなエリオ！作者も君の味方だ！

「で、どこに行くんだ？」

「ここだよ」

昼食をすませた一真と千歳は、ショッピングモールの時計売り場に来ていた。

「時計でも壊れたのか？」

「違うよ」

千歳は腕時計を選ぶと、それを会計に持って行った。

「時計ねぇ・・・・」

＞どうしたのよ?＜

喋ることが出来ないため、神無は念話で一真に話しかける。

＞いや。ただ、あれからもう13年だと思っただけだ＜

＞そうね・・・・＜

「一真」

「ん、あぁ。もういいのか?」

「うん。欲しいものはあったから」

千歳は満足そうな顔を浮かべて、袋を大事そうに抱えていた。

「そうか。なら行くぞ」

「あ、その前にトイレ」

「分かった。そこで待ってるからな」

「うん」

千歳がトイレに行ってからすでに15分が経った。
まだ帰って来ていない。

「何してやがんだあいつ？」

＞どこかで寄り道してるんじゃない？ちぃなら有り得るわよ＜

＞だな。しょうがねぇ、探すか＜

一真は立ち上がり、千歳を探すために歩き始めた。

「どこ行きやがったんだあいつは」

＞ねぇ、あれちぃが買ったヤツじゃない？＜

言われた方を見ると、通路には千歳が時計売り場で買った袋が落ちていた。

「どういうことだ？」

（嫌な予感しかしねぇ・・・・）

その時だった。突然、一真の携帯が鳴り始める。ディスプレイには千歳の名前。

「タイミングいいな、おい」

一真は通話ボタンを押して、耳に当てる。

「もしもし」

『もしもし』

聞こえて来たのは、聞いたこともない男の声。千歳の携帯からであればありえないことだ。

「誰だ、テメェは？」

『お宅のガキを預かってる』

「千歳のことか？」

『三時間だ。三時間で一億用意しろ』

「・・・・」

『また三時間後に電話する』

そこで電話は切れた。

「ふざけてんじゃねぇぞ・・・・」

そう呟き、一真は携帯を握り締めた。

「一真、今の話は本当？」

「あぁ。本当だ」

一真に召集され、なのは達は一真のいるショッピングモールにいた。

「千歳ちゃんが誘拐・・・・」

「で、犯人からの要求はあったのか？」

「あぁ。三時間以内に一億だと」

それを聞いて、アリサが口を開いた。

「たった一億でいいの？」

『え？』

「だからたった一億でいいのか？って聞いてんのよ」

「あぁ」

「分かったわ。今から用意させるから、一旦帰りましょ」

「大丈夫か、一真？」

「楠木は絶対に帰ってくるから――――」

「くくくく・・・・」

うつ向いていた一真は突然笑い始めた。
その笑いかたは全員の背筋に悪寒を走らせる。

「か、一真さん?」

キャロが呼ぶが、

「くくくく・・・・あーっはっはっはっはっはっ!」

一真は狂ったかのように笑い続ける。
それを見てアリスは呟いた。

「ヤバイ・・・・」

「アリスさん、一真さんはどうしちゃったんですか?」

エリオの問いにアリスは引きつりながら答える。

「今の一真、そうとうキレてる」

「千歳ちゃんが誘拐されたんだから、それは当たり前やろ?」

「そうなんだけど。私としては、我を忘れるくらいキレてほしかったって言うか・・・・」

全員がアリスの言っていることの意味が理解できていない。

「簡単に言えば、キレすぎて逆に絶好調になってるんだよ」

アリスの言う通りかもしれない。今の一真のテンションはおかしなことになっている。

「一真さん大丈夫ですか？」

そうリインが聞くと、一真は簡潔に答えた。

「大丈夫じゃあないな。むしろダメだ」

「ダメって・・・・一真君」

「率直に言うぞ？俺は今、この街を灰塵に帰しても千歳を取り戻したいと思っている」

（うわぁ・・・・）

これがここにいる全員の考えていることであった。

「一真君」

そんな中、アリサとすずかが部屋に入ってきた。

「お金は用意したよ、ってどうしたの？」

「一真君が暴走してるんよ」

「何て言うか、ダメでしょあれ」

三時間後。

予告通り、一真の携帯に千歳の携帯から電話がかかってきた。

『金は出来たか？』

「出来たぞ」

『なら、今から金を持って海鳴公園に来い』

「分かった」

電話はそこで切れ、全員を見る。

「海鳴公園に来いってよ」

「分かった。私達は、回りにいるから、千歳をちゃんと助けてね」

「あぁ」

アリスにそう返すと一真は家から出ていった。

一真が公園に着くと、狙ったかのように携帯が鳴る。

「もしもし？」

『トイレの中においておけ』

「分かった」

指示通りに一真は、一億の入ったアタッシュケースをトイレの中に置く。

その時、一真はニヤリと笑みを作った。

＞一真さん、見つけましたよ！＜

ティアナから念話で連絡が入る。

その連絡は千歳を見つけたと言うものだった。

＞場所は！？＜

＞駅から二キロ北西に行ったところにある廃ビルです＜

＞分かった。今から行く＜

ティアナと念話を切ると走り出した。

それではここで、千歳の場所が見つけられた方法を説明しよう。

千歳のには、過去に迷子になりなかなか見付からなかったこともあり、ＧＰＳ機能の付いた携帯を持たせていたのだ。

それを使いアリサ達に別に探させていた。

「殺してやんよ」

廃ビルに着くと、なのはとフェイト、そしてアリスがいた。

「ここか」

「うん。このビルの中から千歳ちゃんの携帯の反応があったって」

「そうか・・・・行くぞ」

ビルの中のとある部屋。そこには三人の男達と、椅子に縛られ眠っている千歳がいた。

「こうも簡単に金が手にはいるとはな」

「そうだな。それで、このガキどうする?」

千歳を見て、男が言う。

「売りとばしちまえばいいんじゃねぇか?」

「金にもなるし、そうするか」

「でもよ、テメェら売った方が人類のためだろ」

「確かにそうかも、って誰だ!?」

「俺だ」

それは誘拐犯グループにはいない男の声だった。

「俺の声をついさっきまで聞いてた奴がここにいるはずだが？」

「まさかお前は・・・・一真って奴か？」

「そうだ」

犯人グループはなぜ一真がいるのか理解できていない様子。

「何でお前がここに？」

「さぁな？」

一真は立ち上がり三人を見る。

「お前らがした失敗は原因はな、まずちゃんと千歳のことを調べなかったこと。そして、相手が俺だったことだ！！」

「ひぃっ！」

「一真、千歳は助けたよ」

「殺っちゃえ！」

なのはに背負われて眠る千歳を確認したあと、犯人グループへ笑顔を向ける。

「では、始めようか。俺による、俺のためだけの、楽しい楽しい時間をなぁ！」

六課の女性メンバーの写真を見て、しばらくお待ちください。

地面に転がっているのは、一真にボッコボコにされた犯人グループ。もう無惨な姿だ。

「じゃあ帰ろっか」

「そうだな」

一億の入ったケースを持ち、アリサの家へと帰っていった。

「ん・・・・」

「目ぇ覚めたか？」

「一真？ここは、アリサちゃんの家？」

「あぁ」

一真はあえて誘拐されたことを言わないようにした。

「あ、そうだ一真」

「ん？」

「あれ？どこに？」

千歳は何か探してキョロキョロしていることに気づいた一真は、紙袋を取り出す。

「これか？」

「そう。それなんだけど・・・・一真の誕生日プレゼント」

「俺の？」

「うん！一真の誕生日って先月だったから・・・・遅れちゃったけど」

一真は袋から取り出し腕時計を見る。

「サンキュー千歳」

千歳の頭を乱暴に撫でながら、一真は言う。

「えへへ・・・・」

こうして一日が終わった。
平和で楽しい休日が。

《一真の部屋》

アリス「ちょっと最後のは嫉妬しちゃうなぁ」

一真「勝手にしてろ、バカ」

千歳「なのはちゃん。今回はお客さんが来てるんだよね？」

なのは「そうだよ。では、登場していただきましょう！『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅＳ～聖王の騎士～』より来てくれた龍崎伊吹先輩です」

一真「では早速。神無、セットアップ」

伊吹「何をする気だ？」

一真「ここに来たゲストは、必ず一回は逝くって言うお約束があるんだが」

伊吹「嘘言え！」

アリス「本当だよ。今まで何人犠牲になってきたか・・・・」

伊吹「くっ・・・・俺を殺ったら美味いものやらないぞ」

一真「・・・・・・・・うん、止めよう」

神無［美味いって聞いて止めたわね］

なのは「まぁ、一真君は欲望に忠実だからね」

千歳「ねぇねぇ、伊吹君？何をくれるの？」

伊吹「一真は辛いものが好きみたいだから激辛の麻婆豆腐。千歳には苺の生クリームケーキ。アリスにはミートスパゲティで、高町にはチャーハンだ」

な・千・ア「「「おいし～！」」」

一真「確かにうめぇな。辛さもいい感じだ」

伊吹「それはよかった」

神無［あんたすごいわね。あれ一人で作ったんでしょ？］

伊吹「まぁ、家が有名レストランだからな。これくらいは出来る」

アリス「へぇ～」

一真「ふぅ。食った食った。じゃ、返事のコーナーに行くか」

シグマさんへ

伊吹「へぇ～、お前椎茸がダメなのか？以外だな」

一真「正確には茸全般だ。それとリボー、俺はそこまで雑食じゃねぇ！」

アリス「ライガ、もう一人の自分って結構辛いものだよ。自分だから、次にどうするかって読んでくるからね」

なのは「そうだね。自分に勝つのは難しいことだね」

千歳「リボー君、ハリセンとピコハンありがとね～。ちゃんと使わせてもらうよ」

神無［また千歳の武器が増えたわね・・・・誰が犠牲者になるのかしら？］

來人さんへ

一真「フム、爆流破までしか知らないか・・・・」

伊吹「どうした一真？」

一真「喰らってみるか？習うより慣れろって言うだろ？」

神無［それ使い方違うから］

なのは「あれはダメだよ。人が死んじゃうから」

千歳「そうなの？」

神無［そうよ。あれ一つで街が消える可能性だってあるんだから］

伊吹「そんなものを人に向かってやるな！」

一真「知らん」

ＴＯＵＤＡさんへ

一真「まだまだだな。隆浩の言う通り、強くなったのは力だけだからな」

伊吹「一真にしてはまともだな」

神無［確かにそうね。気持ち悪］

一真「テメェら・・・・ってか、アリス。お前、なにもらってんだよ」

アリス「超高性能の「星間飛行」の流れる腕輪だよ」

千歳「可愛い～」

アリス「では、行きます。みんな、抱きしめて！銀河の果てまで！」

なのは「始まっちゃったね。どうしようか？」

一・神・伊「「「ほっとけ」」」

アリス「キラッ☆」

一真「さて、ここでお知らせだ。第二章に登場させる「七つの美徳」を持ったキャラを管理局のとある部隊所属として登場させたいと思ってる。そこで、七つの内の五つ《信仰》《節制》《希望》《分別》《忍耐》を持つキャラを募集したい」

千歳「期限は今の所なしなので、感想でもメッセージでも構いませんので待ってまーす♪」

アリス「キャラ募集ねぇ。来るといいけど・・・・」

なのは「なかったら、作者が頑張るしかないね」

伊吹「だな」

そうなんだが、お前達酷くない？

一同『全然』

・・・バカヤロー！！！

一真「よし、作者も消えたし次回予告するぞ」

アリス「千歳も帰ってきて、特訓漬けの毎日を送る私達」

千歳「そんな中見付かる、残り二つのロストロギア「アビス」」

神無「それが最悪のシナリオへの幕開けだった」

伊吹「次回、魔法少女リリカルなのは～七つの大罪～」

一・な「【襲来】」

一同『次回へ、スタンバイレディ！』

誘拐は拐う人物の事前調査をしっかりと（後書き）

來人さん、いかがだったでしょうか？
伊吹のことで何かあれば一言よろしくお願いします。

襲来

「か、一真君、落ち着いて。それはダメや！」

「そうだ。楠木も止ろ！」

はやてとシグナムが叫ぶが、二人は止まらない止められない。

「そんな・・・・」

なのはの顔が絶望に染まり、

「イヤァァァァ！」

アリスの叫び声が木霊する。

なぜこんなことになっているのか。それを説明するには、時間軸を少し前に戻す必要がある。

それでは回想モードの始まりだ。

千歳の誘拐事件から二日後。

一真はフォワードメンバーと一緒に朝食を食べていた。

「そういえば、今日は千歳さんはどうしたんですか？」

いつもなら朝練の時からいるのだが、今日は見掛けない。

そのことが気になったエリオが一真に聞いた。

「寝てる。昨日、ホラー映画やってたろ?あいつ、それを見て寝られなくなって、三時くらいまでずっと起きてたんだよ」

「もしかして、一真さんも寝てない?」

「あぁ・・・・かなり眠ぃ」

この瞬間、スバル達は一真の機嫌を損ねないよう気を付けようとアイコンタクトで意志疎通をする。

「あの一真さん。ちょっといいですか?」

「何だ、ティアナ?」

「千歳さんって、一真さんと同い年なんですよね?」

「それがどうした?」

「いつも一真さんと一緒にいますけど、大丈夫なんですか?」

「そのことか。それは問題ねぇ。あいつの本業は学生で、今は夏休み真っ最中だからな」

そう体型や言動で忘れがちだが、千歳は２１歳。大学生なのだ。

「そうだったんですか」

朝食を取りながらそんな会話をしてると、少女が目を擦りながら入ってきた。

「一真、おはよぉ・・・・・」

今話の話題に上がっていた千歳である。
いまの千歳を見たスバル達の感想は、

（（（（（可愛いぃ・・・・・）））））

「パンでいいか？」

「うん・・・」

一真が取ってきた食パンを、一真の隣に座りハムスターのように食べ始めた。

（（（（（飼いたい・・・・・）））））

「あ、それって・・・・・」

スバルは一真の右手首の腕時計に気がついた。

「ん？」

「千歳さんが買ったやつですよね」

「そうだな・・・・ってちょっと待てや、スバル」

一真はスバルの言葉を聞いてあることに気がついた。

「お前、この時計のこと誰から聞いた？俺は誰にも言ってねぇはずだが」

「げっ・・・・」

＞＞＞スバル（さん）！！＜＜＜

＞ご、ごめーん！＜

「千歳、お前言ったか？」

「言ってないよぉ」

それを聞いて一真の目は鋭くなる。目が据わっていると言っているほうがいいだろう。

「さて、ガキ共」

『は、はひぃっ！』

アイスコーヒーを飲み干すと、一真はゆっくりと口を開いた。おそろしく低い声で。

「何でこれのことを知ってるか、あらいざらい話してもらおうか？」

「なんだろう大事な話って？」

「さぁ？はやては聞いてる？」

アリスも聞いていないらしく、頭の上に?を浮かべている。

「私も聞いてへんよ。どうしたんやろ?」

何も聞かされず集まったのはなのは達三人だけではない。正確には、あの時尾行に参加したメンバーだけだった。
そのことに誰も気づいてはいない。

「あ、呼び出した張本人の登場よ」

アリサの指差す方からは一真と千歳、その後ろにＦＷが歩いてなのは達の方へ向かっていた。

「おー、集まってるな」

「なんなんだよ一真。いきなり集まれって?」

「ん、ちょっとな~」

何だが上機嫌な一真。
全員が違和感を覚えた。

「お前らあっちな」

一真に言われ、スバル達はなのは達の方に歩いていく。その足取りは重く、何かに脅えているようでもある。

「さて質問だ。二日前、お前ら何してた?」

『・・・・』

それを言われてなのは達は一真の言いたいことがすぐにわかった。

「さて、言いたいことはあるか？」

「し、神童。あれはだな、私達は桜ノ宮に脅されていてだな」

「アリスちゃん、本当？」

珍しく千歳の声に怒りが込められている。

「う、うん・・・・」

「そっかぁ・・・・」

「ま、脅されていていようがいまいが関係ねぇ」

『え？』

なのは達の声がハモる。予想外の展開であった。

＞アリスちゃん、どういうこと！？＜

シャマルがアリスに聞くが、アリスに繋がらない。

アリスは念話の回路を遮断しているのだ。

「さて、お仕置きといこうか。なぁ？」

全員の脳裏には獄龍破の恐怖が思い浮かぶ。

「まぁ、そんなに脅えるな。獄龍破は使わねぇ」

恐怖で震えていたなのは達は、その言葉を聞いて安堵するが、

「まずアリサとすずか。お前らは、なのは達とは別のお仕置きがある。千歳」

「はい、これ」

千歳が差し出したのはコップに入った透明な液体。見た目は普通の水と何ら変わらない。

「な、何それ？」

すずかの質問に一真は簡潔に、

「イワシミズ」

「な、何だ。普通に水じゃない」

二人は名前を聞いて何もないと感じ一気に飲み干した。

「うぁっ！」

「かはっ！」

水を飲んだ直後二人は倒れる。

それを見ていたなのは達は、当然の質問を一真にした。

「その水、何？」

「こいつらは名前だけを聞いて勘違いしたようだが、これはイワシミズ。漢字で書くと魚の鰯の水と書いて、鰯水だ。ちなみに鰯の栄養素満点の水だ」

それを聞いて全員が驚愕する。しかし一真は、

「次はお前らか」

そんなこと関係なしに話を進めていく。

「な、何をするんだよ・・・・」

「アギトはシグナムと、リインははやてとユニゾンしろ」

今の一真に逆らうのは得策でないと考えた四人は、指示に従いユニゾンする。

＞出来ましたよ＜

リインの言葉を聞いて一真は目の色を変えた。

「じゃあ、始めようか」

千歳は一真からに木刀を受け取り、バトルモードに切り替わる。

「今から一切抵抗しないで、俺達の攻撃を受けてもらう」

「防御魔法なんか使ってみろ。殺すぞ」

二人からの死刑宣告。それを聞いた時、獄龍破でやってくれたほうが楽だと感じた。

「それじゃあ、最初は・・・・はやてだな」

「か、一真君、落ち着いて。それはダメや！」

「そうだ。楠木も止ろ！」

はやてとシグナムが叫ぶが、二人は止まらない止められない。

「そんな・・・・」

なのはの顔が絶望に染まり、

「イヤァァァァ！」

アリスの叫び声が木霊する。

と、ここまでが回想だ。

はやては一真と千歳から九頭龍閃を同時にくらい、沈んでいる。

「次は・・・・シグナムだ」

「ちょ、ちょっと待て！考え直せ！」

「「拒否」」

シグナムは千歳から超究武神覇斬を、そしてその直後に一真から超究武神覇斬ｖｅｒ．５をくらい落ちた。

「楽しいなぁ、一真ぁ」

「そうだな、千歳ぇ」

二匹の化け物による死刑執行。さすがに管理局の悪魔でも勝つことは出来なかった。
そして残ったのはＦＷメンバーだけ。

「残りはお前らか・・・・」

殺られていくなのは達を見ていたため、恐怖で動けなくなっている。
そんな四人に二人は近づく。

「一真。こいつら、情報くれたから別の方法にしてやらねぇか？」

「・・・・それもそうだな」

一真は神無をしまい、代わりに青い液体を取り出した。

「な、何ですかそれ？」

「青酢」

キャロの問いに一真は即答で返す。

「黒酢なら聞いたことがあるけど、青酢って・・・・」

「スバル、そういうこと言わない。考えないようにしてるんだから」

「はい、みんな」

笑顔で千歳は、青酢の入っているコップを差し出してきた。

「飲めよ。一気にな・・・・」

『はい・・・・』

一真に脅され四人は一気に飲み干し、

『ごふっ！』

この日、機動六課は一時間で壊滅した。たった二人の手によって。
これを近くで見ていたデバイスの感想は、

「地獄絵図ね。そうとしか言いようがないわ。あんな光景が目の前で起きているなんて、現実逃避したくなるわね」

と言っていた。

「起きなさいよ、一真！」

「眠いからパス・・・・」

訓練の時間なのだが、一真は昨日というか二時間前まで起きていたので睡眠時間が足りないのだ。
訓練があると知ってて、こいつは一体何をしてるんだろうか。

［そろそろ、誰かが呼びに来るわよ］

「知らん・・・・」

と、また眠りにつこうとするが、ドアが壊れんばかりの勢いで開いた。

「おっはよぉ～！！！！」

勢いよく入ってきた千歳は、某主人公の妹のように一真にボディプレスをした。

「ごふぅ！」

「おっきろ～、おっきろ～！」

千歳は一真にダメージを与え続ける。
一真は自分の上で暴れる千歳を放り投げ、上半身を起こした。

「いい加減にしろ！」

「やっと起きたぁ」

「そりゃあ起きるわ！たくっ、ほとんど寝てねぇのによ」

［あんたがずっとゲームしてるからでしょうが」
それを言われると何も言えなくなる一真であった。
「しょうがない、行くか」
一真が立ち上がり服を着替えようとした時だった。
＞一真君！＜
はやてから念話で通信がはいる。
声からして、かなり緊急らしい。
＞んだよ、クソ狸。朝っぱらから騒がしいぞ＜
＞狸は余計や！そんなことよりも、今から私の会議室に集合！朝練は中止！＜
＞・・・・わかった＜
はやてとの念話を切ると、すぐさま制服に着替える。
「千歳。今日の朝練はなくなった。何か知らんが、緊急事態みてぇだ」
「そっか。それじゃあ、頑張ってね」
「あぁ」
待機モードの神無を腕につけると、一真は部屋から出ていった。

一真が部屋に入ると、すでに隊長陣とＦＷメンバーは集まっていた。
全員が集まったのを確認するとはやては口を開いた。

「集まってもらった理由はこれや」

ウインドウが開くと、そこには赤い点が２つとそれを目指す沢山の反応があった。

「これって、残り２つの「アビス」と《堕人》だよね？」

「そうや。「アビス」が見付かったのは今朝がた、そしてすぐさま《堕人》が現れたんよ」

ウインドウを黙って見続けていた一真は、はやてに質問した。

「なぁ、はやて。これって、リアルタイムだよな？」

「そやけど、どうかした？」

「ん、ちょっとな」

一真が何故そんなことを聞いてきたのか気になったが、質問してきた本人がそこで切ってしまったので、聞くのは諦めた。

「で、今回は二ヶ所に「アビス」があると言うことで封印班を二つ、そして対《堕人》班を二つで行こうと――――」

「待て」

一真がはやての言葉を遮り、割り込むように入ってくる。

「どうしたんや？」

「俺とフェイト、ティアナとスバルは別行動させてほしい」

「理由は？」

「あそこにはまだ、主力の三人が来てねぇんだよ」

「主力だと？」

聞き返すシグナムに、一真は答える。

「ラスト、スロウス、グラトニーの三人だ。多分、今回は最低でも二人は来るはず」

一真はラスト、スロウス、グラトニーの三人の内の誰かが来ると予想していた。

それに対抗できるよう、《罪》の使える自分達を別行動出来るようにこの提案をしたのだ。

「全員はダメや。一真君が含めて二人。これが限界やな」

「二人・・・・フェイト、お前は俺と来い」

「うん」

「それじゃあ、今から班を発表します。まず、第一封印班なのは隊長、ヴィータ副隊長」

「「了解」」

「第二封印班はキャロとエリオ」

「「はい」」

「次に《堕人》迎撃班やけど、シグナム副隊長にスバルとティアナ」

「「「了解」」」

「そして、《罪人》迎撃班にフェイト隊長と一真君」

「あぁ」

「了解」

「機動六課、出動や！」

《堕人》の元に着いた三人は言葉を失った。

その数、見積もりでも１００は超えている。これだけの数の《堕人》が元人間だと思うと、《堕落》させた《罪人》が恐ろしくなってくる。

「スバル、ティアナ、アギト。行けるな！？」

「「はいっ！」」

「おうよ！」

「「ユニゾン・イン！」」

アギトとユニゾンしたシグナムの瞳と髪の色が変わり、髪を結んでいたリボンは布に変わる。そして背中には二対四枚の炎の羽根が現れ、上着は消えインナーだけとなった。

「ティア、行くよ」

「えぇ」

二人はリミッターとなっているカラコンを外し、

「「《罪》解放！」」

魔力のオーラを纏う。

「ディバインドライバー！」

放たれた弾丸が《堕人》の群れに一筋の道を作る。

これが開戦の合図となった。

「うぉぉ！」

スバルの右ストレートが《堕人》の顔面を捉え、そのまま後ろにいた五体の《堕人》もまとめて吹き飛ばす。

「リボルバーシューット！」

放たれた衝撃波は目の前の《堕人》に当たり、そこを中心に半径２ｍの《堕人》が消えた。

「はっ！」

ティアナはダガーモードで《堕人》を切り裂きくとすぐにスフィアを出現させ、

「クロスファイアーシューット！」

《堕人》を狙い撃つ。

「はぁぁっ！」

レヴァンティンを突き刺し、切り上げる。

そしてカートリッジを排出し、レヴァンティンを炎が包む。

「＞炎熱加速＜！飛竜一閃！」

連結刃が《堕人》を次々と貫いていき、そのまま振り抜いた。

「あまり減った気がしないわね」

「むしろ増えてるような・・・・気のせいかな？」

気のせいではない。本当に《堕人》の数は確実に増えていた。

「シグナム副隊長！」

スバルは、《堕人》がシグナムの死角から襲いかかろうとしていることに気付き叫ぶが、シグナムの耳には届いていない。

「あんたは《堕人》の相手をしてなさい。あれはあたしが・・・・」

クロスミラージュを両手で構え魔力弾を放つ。
放たれた魔力弾は真っ直ぐ飛んで行き、《堕人》の頭を貫いた。

＞助かった、ティアナ＜

＞いえ。それよりも、気が付いてますよね？＜

＞あぁ。《堕人》の数だろう？おそらくどこかに発生の基点があるのだろうが・・・・＜

＞まだ分からないんですね＜

ティアナはすぐにダガーモードに切り替えると、《堕人》を切りつけながら念話を続ける。

＞そうだ＜

＞どうにか見つけないといけませんね＜

＞だが、この数だ。探すのは難しいだろう。スバル、聞こえているか？＜

＞何ですか？＜

＞この《堕人》を私達三人で殲滅する。やれるな？＜

＞もちろんですよ！いつでも行けます＜

三人は《堕人》の群れから離れ、群れを見据える。

「一撃必倒！ディバイン・・・・」

左手の先に、バスターの時よりも一回り巨大な光弾がセットされた。

「スターライト・・・・」

空気中の魔力を吸収しながら、セットされたスフィアは巨大化していく。

「＞剣閃烈火！火竜・・・・＜」

魔力変換を使わずに顕現させた炎を纏ったレヴァンティンを、腰で構える。

「「ブレイカァァァ！！！！」」

「＞一閃＜！！！！」

２つの砲撃と炎の連結刃が《堕人》を消滅させていく。

そして攻撃の余韻が消えた瞬間、見たこともない現象が起こった。

突然地面に無数の穴が開き、そこから《堕人》が現れたのだ。

「何これ？」

＞気持悪っ！！＜

「まさか、これが《堕人》が増える理由・・・・」

「そのようだな。どこかに基点があると思っていたのは間違いだったらしい」

三人は再びデバイスを構え《堕人》へと走り出した。

「久しぶりの封印だけど出来るかな？」

「お前、ロストロギアの封印とか出来たんだな？」

「うん。ジュエルシードを封印したのは、私とフェイトちゃんなんだよ」

そう。なのはとフェイトが出会った事件、ＰＴ事件の時になのははジュエルシードを封印して回っていたのだ。

「そういえば、そんな話フェイトから聞いてたな」

「えっと、それでねヴィータちゃん。私が封印してる間は目を閉じて、耳を塞いでいてほしいんだけど」

「どうしてだよ」

「お願い！」

「あ、あぁ・・・・」

ヴィータはなのはに言われたように目を閉じて耳を塞いだ。

［では始めましょうか、マスター］

「そうだね。恥ずかしいけど・・・・」

アクセルモードのレイジングハートを自分の前に構え、

「ふぅ・・・リリカル！マジカル！」

封印呪文を叫びながらレイジングハートを回転させる。

「「アビス」封――――」

［マスター、上です］

レイジングハートの言葉を聞いて、なのははバックステップでその場を離れる。一瞬遅れて上から鉄槌にトゲのついたデバイス（三国無双のキョチョの武器の鉄球部分にトゲのついた物を想像してほしい。それでも想像出来ない場合は、棍の先に巨大な鉄球があり、その鉄球にトゲのついた物を想像してくれればいい。）を振り下ろした中学生ほどの少女が落ちてきた。

鉄球部分の落ちた場所はクレーターが出来上がる。

「お腹減ってるんだから避けないでよぉ」

女の子は自分の体ほどもあるデバイスを、片手で持ち上げ担いだ。

「何だよ、今の揺れ！？」

目を閉じ耳を塞いでいたヴィータも今の異変には気が付いたらしい。

「抵抗しないで、ベヘモスに潰されてねぇ」

女の子は鉄槌型デバイス、ベヘモスを引きずりながらなのは達へと向かってくる。

動きは遅いが、あの力は異常だ。

「アイゼン！」

［ギガントフォルム］

「ギカント・・・・ハンマァァァ！！！！」

グラーフアイゼンの柄が伸び、少女をへと振り下ろされるがベヘモスでそれを防いだ。

「軽――――」

「アクセルシューター！」

少女へ向けて桜色の光弾が飛んでいく。が、信じられないことが起きた。

彼女が息を思いっ切り吸い込むと、アクセルシューターは彼女の口へと入っていった。

「えっ！？」

「食べやがった！？」

「ごちそうさまぁ。おいしかったよ、お姉ちゃん」

少女は笑顔でそう言うと、グラーフアイゼンを弾きあげて距離を取るように転移した。

「カートリッジロード」

［カートリッジロード］

柄の根本部分からカートリッジが排出された。

「ディケイランサー！」

鉄球についていたトゲがなのは達へと飛んでいく。その数１０。

「もう一回、アクセルシューター！」

なのははランサーと同じ数のアクセルシューターを放ち、全てのランサーを落とそうとするが、

「スプレッド」

少女がそう呟くとランサーは壊れ、中から無数の針が現れ二人を襲

う。

［オーバルプロテクション］

二人を球状のプロテクションが包む。

「無駄だよぉ！」

＞それは防ぐな！＜

と念話で連絡が入るが、すでに遅い。あと少しで、針の雨は降ってくる。

「紅之太刀壱式・煉刃！」

声と共に飛んできた複数の斬撃が、降り注ぐ針を吹き飛ばす。

「たくっ。間に合わなかったら、サボテンが二つ出来上がりだぞ」

「一真君！」

「一真！」

なのは達と少女の間に一真は降り立つ。

「どういうことだ？さっきの針を防ぐなって？」

「あの針は、プロテクションやバリアを侵食して破壊する。そうだよな、グラトニー？」

一真は少女をそう呼び、仇を見るように睨みつける。

「へぇ、覚えててくれたんだぁラースぅ。神無お姉ちゃんやエンヴィーは元気ぃ？」

［あんたに心配されても嬉しくないわよ］

完全に茅の外の二人。

しかし、そんな二人を無視して会話は続く。

「でも、ラースぅ。こっちに来て大丈夫なのぉ？」

「問題ねぇよ。テメェらのおかげで《罪人》が増えたからな」

その頃エリオ達は、突然あらわれた籠手と具足を装備した少年と対峙していた。

「戦ったりするのダルいからさ、「デモンズ・ストーン」を渡してくんないかな？」

少年は話すこともめんどくさうに二人に言う。

「デモンズ・ストーン？」

聞いたことのない言葉にキャロは聞き返す。

「説明するの面倒だから聞き返さないでよ」

と言ってキャロを指差す。

「お前が今封印して回収したロストロギアだよ。僕はそれを早く渡して欲しいんだ」

「嫌だって言ったら？」

「なら、お前達を殺さないといけない。面倒だから抵抗しないでくれよ？」

少年がゆっくり前に倒れ始めたと思ったら、次の瞬間にはエリオの隣にいた。

「えっ・・・・」

「ふっ」

そして、何もできないでいるエリオへ少年の足が振り上げられる。

［プロテクション］

「ちっ」

少年の足は、ストラーダが張ったプロテクションに阻まれた。

「抵抗するなって言ったろ。ベルフェゴール」

［イエッサー］

籠手に付いている宝石が光ると、具足の踵部分からブースターが現れ噴射が始まる。

「風牙・・・・」

「ぐっ」

ヒビが入り、エリオとキャロも割れる、と思ったらときだった。
少年の両手両足が金色のバインドで拘束される。

「ん？」

＞二人とも。そこからはなれて＜

二人は指示通りに少年から距離を取る。

「アルカス・クルタス・エイギアス。疾風なりし天神、今導きのもと撃ちかかれ。バルエル・ザルエル・ブラウゼル。フォトンランサー・ファランクスシフト・・・・ファイアー！」

その号令の直後、少年に槍の形の魔力弾が降り注ぐ。その数は千を超えてる。

「よかった、間に合って」

「「フェイトさん！」」

「怪我はない？」

「はい。ギリギリでしたけど・・・・」

「キャロは？」

「大丈夫です。それとこれ」

キャロが取り出したのは、少年が狙っている「アビス」だった。

「彼もこれを狙っているみたいなんです」

キャロがそう言ってくれて、これから対峙する少年が何者なのか理解した。

「本当に面倒なことになったよ。お前達に使うことになるとも思ってなかったからね」

煙幕が晴れ見えてきた少年は、見覚えのあるオーラを纏っていた。

「エリオとキャロは下がってて」

「嫌です」

「私達も戦います」

二人の強い意志にフェイトは、笑みを浮かべすぐに真剣な表情に戻った。

「でも、危険だと思ったらすぐに退くんだよ」

「「はい！」」

フェイトはリミッターのコンタクトを外し、銀色の瞳で少年を見つめる。

「《罪》解放！」

フェイトの魔力が膨れ上がり、魔力のオーラを纏う。

［［ソニックムーブ］］

フェイトとエリオは高速移動魔法を使い、少年の目の前まで距離を詰めた。

エリオは突き、フェイトは切り上げる。

少年はそれを見ても動じず、ゆっくりとした動きで左腕を上げて《罪人》であるフェイトの刃だけを防いだ。

「ストラーダ！」

噴射口が４つ現れて、デューゼンフォルムへ変わる。

それと同時に、エリオの足下にキャロの魔方陣が現れた。

「猛きその身に、力を与える祈りの光を！」

詠唱が終わり、エリオをオーラが包む。

「紫電一閃！」

キャロのブーストアップ・ストライクパワーにより力の上がった一撃を、少年に叩き込む。

少年もオーラだけでは防ぎきれないと判断したのか、右腕を上げ防

ぐ。

「あいつが厄介だな」

少年の瞳に写るのはフェイトとエリオではなく、後衛のキャロ。
少年はオーラを両腕に集中させてストラーダとバルディッシュを弾き、二人の体勢を崩すと前傾姿勢へと変える。

「初めからこうすれば、面倒なことをしなくてすんだんだ」

その声が聞こえたときには、少年の姿は二人の前にはなくキャロのすぐそばにいた。
今の体勢からでは何をしようが間に合わない。

「キャロ！」

体勢を無理矢理直したエリオも走り始めるが、もちろん間に合うはずがない。

「またか・・・本当に面倒だな、お前達は」

何を言っているのか二人にはすぐに理解できなかったが、すぐに理解できた。
少年の体はバインドで縛られていたのだ。

「フリード！」

真の姿となっているフリードは、体を回して尻尾を少年へ叩きつける。
一瞬ぐらついたが、すぐに体勢を戻す。

しかし、これだけの時間があれば二人は十分だった。

「はぁっ！」

真ソニックフォームとなったフェイトが現れ、ライオットザンバーで少年をなぎ払う。

その先にはデューゼンフォルムから、ウンヴェッターフォルムに変えたストラーダを構えたエリオが立っていた。

「ストラーダ、カートリッジロード！」

［カートリッジロード］

ストラーダから四発の薬筴が排出される。

「サンダー・・・・」

ストラーダの先端から放電が始まる。

「レイジ！」

放たれた電撃は少年の体を包む。

＞フェイトさん、キャロ！＜

「雷光一閃！プラズマザンバー・・・・」

高速儀式魔法で発生させた雷のエネルギーを、ザンバーの刀身に蓄積させる。

「フリード。もう一度行くよ？」

「ガァァ！」

フリードに口元の火球が現れ、それを囲むように環状魔方陣が発生する。

「我が求めるは、戒める物、捕らえる物。言の葉に答えよ、鋼鉄の縛鎖。錬鉄召喚、アルケミックチェーン！」

キャロはフェイトとフリードの魔法が避けられないように、少年を召喚した鎖で縛り上げる。

「ブレイカァァァ！！」

「ブラストレイ！」

フェイトの砲撃とフリードの火球は一直線に少年に直撃した。彼を中心に砂煙が立ち込める。その煙はすぐに晴れていく。

「いない！？」

そこに少年の姿はなかった。

「そういえばラストが言ってたねぇ。新しく《罪人》を作ったってぇ」

「そうかよ」

一真は神無を自分の目の前に地面に平行に構える。

「それじゃあ、殺させてもらうぜ。神無！フルドライブ！」

足下に現れた六芒星の魔方陣から光があふれ、一真の体を包み込む。
そして光が消え、現れた一真のバリアジャケットと神無の姿は変わっていた。
バリアジャケットは漆黒のスーツに膝まであるコートを羽織っている。
そして神無の形は日本刀となっていた。

「神道・神無」

一真はグラトニーに向かって走り始めた。

「いいよぉ。まだお腹へってるけど、相手してあげるぅ。君が満足するか分からないけどねぇ」

グラトニーも、ベヘモスを引きずりながら一真に向かって走り始める。

「っ！」

一真は走る速度を上げ、一気に近づき神無を振り下ろす。グラトニーは、それをベヘモスで受け止めるが、

「ぐぅっ・・・・」

顔を歪め、声を漏らす。
ヴィータの一撃を防いだときとは全く違う。

＞ヴィータ。今から援護しろ。それとなのははは、攻撃すんな＜

＞どうして？援護しないと・・・・＜

＞あいつがお前の魔法を食ったら、空気中に魔力は残らない。だからお前は魔法の使用しないで、最後の特大の一撃に回せ。意味は分かるな？＜

振り抜かれたベヘモスをバックステップでかわすと、グラトニーの顔を狙って足を振り上げる。

＞スターライトブレイカーに魔力を回せってこと、だね＜

＞正解だ。合図があったら準備しろ＜

言いたいことを全部言い切ると、目の前のグラトニーに集中する。
一真の足は、グラトニーの纏う魔力のオーラに止められていた。

「女の子に向かって蹴りはダメだよぉ」

「俺のポリシーは男女平等でな。それに、俺はお前を女の子と思ったことはない」

「ひどいな、ラースはぁ」

「俺をその名前で呼ぶんじゃねぇ！！」

神無を突き出しグラトニーの体を貫こうとすると、彼女は神無を蹴って軌道を変えた。
それと同時にグラトニーの背後にヴィータが現れ、鉄球をグラーフアイゼンで撃つ。

「死角だから気づかないと思ったら大間違いだよぉ」
グラトニーはベヘモスを持ち上げ回転し、鉄球を弾き返す。

「鉄は食べねぇのか？」

「食べるのは魔法だけだよぉ。鉄は食べても美味しくないからねぇ」

グラトニーは一真の腹を狙ってベヘモスを突き出す。普通の魔導師ならば死ぬ一撃だが、一真は普通の魔導師ではない。《罪人》なのだ。

「無駄だ、クソガキ」

ベヘモスを掴み、一真はグラトニーを引き寄せる。
ベヘモスを片手で振り回しているが、基本は少女。一真の力に敵うはずがない。

「てやぁっ！」

グラトニーがベヘモスを振り上げる。

「なっ！？」

そうなれば一真ももちろん振り上げれる。そしてベヘモスを振り下

ろす。一真を叩きつけるために。

「冗談じゃねぇですよ！」

一真はベヘモスから手を離して空中へ身を投げ出す。

＞ヴィータ。全力の一撃を俺にあわせて打て＜

＞あぁ！＜

一真は魔方陣で足場を作り、その上で神無に魔力を流し込む。

＞なのははブレイカーの準備だ＜

＞うん！＜

「神無、殺るぞ」

［言われなくても分かってるわよ］

「カートリッジロード」

［カートリッジロード］

神無の刀身から魔力が更に溢れだす。

「死天閃破ぁぁぁ！！」

「ツェアシュテールングスハンマァァァ！」

巨大な漆黒の刃と、ドリルがグラトニーを襲う。

グラトニーも二人の攻撃を全力で防ぐ。

＞いまだ！＜

「全力全開！スターライト・・・・」

セットされた光弾は、今までの中でも最大級の大きさを誇る。（劇場版を見た方は、あのスターライトブレイカーの一回り大きい物を想像してほしい）

「なぉヴィータ」

「あぁ。あたしも思ったところだ」

「俺／あたし達、死ぬんじゃないか？」

そんなことを思う二人は関係無しで、なのははブレイカーを放つ。

「ブレイカー！」

放たれた巨大な砲撃はグラトニーに直撃しかけたが、その直前で止まる。

「ちっ！」

「えっ！？」

「嘘だろ！？」

突然現れた女性と少年によって止められていた。

「何をしてるんだ、グラトニー」

「ゴメンねぇ、スロウスぅ」

スロウスと呼ばれた少年は、心底めんどくさそうに溜め息をはいた。

「ほら、グラトニー。これ食べちゃいなさい」

「うん。いっただきま～す！」

グラトニーがガバッと口を開けると、巨大な砲撃はその中へと吸い込まれていく。

なのはとヴィータはあり得ない光景に言葉を出せないでいた。

「なのは、ストップだ！」

なのははスターライトブレイカーを強制的に止める。

「ラスト、スロウス・・・・」

「ハロー、ラース、神無ちゃん」

一真はラストが持っている黒い繭に気がついた。それは見覚えがあるもの。

「んだよ、それ」

「ん？これ？これはね、これとは目的の一つよ」

ラストはなのはが封印しそこねた「アビス」を取り出した。

「この中にはねあなたのお友達がいるの。確か名前はね・・・・楠木千歳ちゃんだったっけ？」

「・・・テメェ。今、なんつった？」

「だから、楠木千歳ちゃんよ」

「死ね」

一真が神無を一振りすると巨大な斬撃が三人を襲うが、ラストは簡単に消し去る。

「じゃ、またね」

そう言い残し三人は消えた。

何も出来ずに立っている三人を残して。

《一真の部屋》

なのは「始まりました《一真の部屋》」

一真「今回からしばらくの間、千歳は休みだ」

神無「千歳ファンの皆さん、ゴメンね」

一真「いるかどうかはわからねぇがな」

アリス「ねぇ一真。私思ったんだけど、一真のフルドライブって某黒崎家の長男の卍解にちょっと似てない？」

神無［まぁ、作者曰くそれを少しイメージしたらしいし］

一真「それに、想像しやすいし他のイメージがわかなかったんだと」

なのは「適当過ぎだね・・・・」

アリス「あの作者だからね。適当なのはいつものことだよ」

一・神・な「「［確かに］」」

アリス「満場一致となったところで、お返事コーナー行ってみよ～」

ｕｎｉさんへ

なのは「ｕｎｉさん。指摘ありがとうございます」

一真「バカな作者ですまん。これでも頑張ってるみてぇなんだがな」

神無［それでも駄文製作なるでしょうね］

アリス「そんなでもいいなら、これからも応援よろしくお願いします」

Ｎａｋｉさんへ

アリス「初めての方だ。こんな小説だけど、読んでくれてありがとうございます」

なのは「確かに一真君が敵になったら、生きていられるか不安になるね」

神無［確か昔、あんたに喧嘩売った組織を一時間で潰したわよね］

一真「そういやそうだったな。獄龍破を二十発くらいお見舞いしてやったんだっけ」

な・ア（（その組織の皆さんご愁傷さま））

シグマさんへ

一真「よっしゃあ！」

神無［何よろこんでんのよ？］

一真「だってリボー自爆してんだろ？バッカじゃねぇの」

なのは「他人の不幸喜んじゃダメだよ」

アリス「ダメじゃないよ、なのは。それはちゃんと喜ばないと」

なのは「そうなの？」

アリス「そうだよ」

神無（なのはが染められていく）

來人さんへ

神無［そういえば、前回ゲスト来たのに逝かなかったわね］

一真「ちっ。まぁいい。どうせあっちに行くからな。奴を殺るのはその時だ」

アリス「また一真がSモードなってる」

なのは「伊吹先輩。頑張ってくださいね～」

U．Tさんへ

アリス「クラウド。一真は茸類だけで死ぬよ。昔、口に入っただけで痙攣起こして気絶したから」

なのは「以外だね。でも茸がそこまで嫌いなのも珍しいね」

神無［そうなのよね。あんた治らないわけ？］

一真「無理だな。あんなもん食えるかよ。てか、クラウドォ！ここで礼をさせてもらうぜ。セロ・オスキュラス！」

神無［ホント懲りないわね・・・・］

ＴＯＵＤＡさんへ

一真「誰が変態じゃあ！」

神無［だってねぇ・・・・］

一真「んだよ？」

な・神・ア「「［だってロリコンでしょ］」」

一真「ふざけんなぁ！それとＴＯＵＤＡさん。獄龍破は撃ってないから安心を」

神無［では最後に、ＴＯＵＤＡさんのご希望の誘拐犯の処刑シーンをご覧ください］

一真「オラ、オラ、オラ、オラ・・・・」

犯人Ａ「ひぐぅ、あべ、がぼ」

一真は返り血を浴びながら、笑顔で犯人を殴り続ける。

一真「え？何？もっとしてくれって？いいぜぇ・・・・アハハハハハ」

一真は殴るのを止めて残っている犯人の仲間を見る。

一真「次はお前らだからな。楽しみだろう？」

一真は狂気の笑みを浮かべそう言った。

ブツン

ふりすくさんへ

神無［とうとう来たわね］

なのは「そうだね・・・一真君の性格と行動が気持ち悪いっていうのと、デバイスが普通に話しているのに違和感があるかぁ・・・・」

一真「神無が普通に話しているのには理由があるから仕方ねぇけど、俺が気持ち悪いって・・・・」

アリス「どうしようもないね」

一真「だな。はぁ・・・・」

神無［意外とショック受けてるわね］

アリス「そりゃねぇ。そうだ、なのは。一真の変わりにあれお願い」

なのは「うん。えっと、まず新キャラを投稿してくださった皆さんありがとうございます。募集していたすべての《美徳》のキャラがそろいましたので、募集は締め切らしていただきます。皆さん本当

にありがとうございました。」

一真「それじゃ次回予告するぞ～」

アリス「ラスト達に拐われてしまった千歳」

なのは「目の前にいるのに助けることが出来なかった一真君は、怒りにすべてを任してしまう」

神無「そして始まってしまった暴走。それはフェイト達の比ではなかった」

一真「次回、魔法少女リリカルなのは～七つの大罪～」

一同『【最凶対奇跡の部隊】』

一同『次回へ、スタンバイレディ！』

「・・・・」

「一真君・・・・」

なのはが呼び掛けるが一真は反応しない。

［一真。《罪》の解放を止めなさい。そうじゃないと――――］

「黙れ・・・・」

一真は神無の言葉を遮り、一蹴する。

＞一真・・・・＜

＞アリスか。何だ?＜

＞ゴメン!!＜

＞んなことはどうでもいい。何があったか説明しろ＜

＞う、うん・・・・＜

一真達が出撃してすぐにラストが現れたことを知った千歳は、自分も戦うと言った。それを聞いたアリスはもちろん首を縦に振らなかったのだが、「一真が頑張ってるのに、自分だけここで待ってるのは嫌だ」と言いアリスは渋々了承した。しかし、隙をとられて千歳はラストの手に堕ちてしまった。

以上がアリスの説明である。

＞そうか・・・・＜

一真はそれだけ言い、アリスとの念話を切った。

「まただ・・・・」

一真はそう呟くとすぐにオーラが膨れ上がっていく。
それはなのは達にも見てとれた。

「また俺は・・・・」

［違う！あんたが責任を全部背負う必要はないのよ！］

神無がそう言うが、一真には届いていない。
そして一真の足下に六芒星の魔法陣が現れた。

［なのは！ヴィータ！気絶させてもいいから一真を止めて！］

いきなりのことで二人は準備出来ない。
そんなことをしている内に、魔法陣からは光が溢れだし柱となって
一真を飲み込んだ。

「ティア」

「うん・・・・」

「どうした、二人とも？」

突然《堕人》の群れが消えたことをはやてに報告し、その場で待機をしていた。

「あたし達の気のせいかも知れないんですが・・・・誰かが暴走したような気がするんです」

「それ本当は？」

シグナムが聞き返すとスバルは答えにくそうに話始めた。

「本当かと言われると、何となくとしか言えないです。本当に感覚的なものですから・・・・」

「ティアナもか？」

「はい」

そんな会話をしているときだった。ヴィータから念話での連絡が入る。

＞スターズ2から全体へ。一真が今暴走を始めた。すぐに応援を頼む＜

その内容はたった今話していたものであった。

「お前達の言った通りだったな」

「でも一真さんが暴走って・・・・」

「マズイんじゃない」

ティアナの言う通り、六課からしてみれば一真の暴走とは最悪の状況である。

＞んなこと言っている場合じゃないぞ。急がないと＜

「確かにな。行くぞ二人とも」

「「はい」」

「一真が暴走・・・・」

連絡が来る少し前、フェイトは暴走を感じ取っていた。

「フェイトさん」

「うん。行こう」

フェイトは、自分を助けてくれた一真を助けるために飛び立った。

結界内。セーラー服のようなバリアジャケットで身を包んだアリスは、アリサの家の庭で空を見て立っていた。

「一真・・・・」

アリスは連絡を受ける前から一真が暴走したこと、いやすることは分かっていた。

「ちゃんと謝らないといけないよね」

その言葉に返事をするように、手の甲の宝石が光る。

「アリスちゃん」

呼ばれて振り向くと、はやてとリインがいた。

「はやて、リイン」

「行くよ。一真君を助けに」

「うん」

「リイン、行くよ」

「はいです、はやてちゃん」

「セットアップ！」

はやては騎士甲冑を身に纏う。そして二人は一真のもとへと向かっ

た。

《邪魔をするな》

なのはの放ったショートバスターを防ぐそぶりを一切見せず、真っ正面からくらった。が、一真の歩みは止まらない。

「止まりやがれぇ!!」

ギガントフォルムのアイゼンを一真には当てず、すぐ目の前に振り下ろす。

《何だ?》

「テメェが止まらねぇからだらうが!」

《俺は言ったよな。邪魔をするなって》

一真はグラーフアイゼンを持つと、あしらうように投げ飛ばした。それを見ていたなのはは、迷わずディバインバスターを放つ。

《ふんっ》

一真はそれを手で払うだけで、なのはのバスターの軌道を変えた。

「くっ・・・・」

完全にあしらわれている。

「リボルバー・・・・・」

「紫電・・・・」

「ラーケテン・・・・・」

ヴィータと合流したスバル、シグナムの三人が同時に攻撃をしかける。声は聞こえているのだろうが、一真は振り向こうとはせず歩き続ける。

「キャノン！！」

「一閃！！」

「ハンマァァ！！」

完全なる直撃コース。

しかし、三人の攻撃はオーラに阻まれて一真には届かなかった。

《何だ、テメェらか》

一真は三人を一瞥すると、突然目の前から消えた。

《消えろ！》

三人の後ろに現れた一真は足を振り抜いた。

鈍い音を立てて、シグナムの脇腹に一真の脛がめり込んだ。

「ごふぅっ！」

蹴られたシグナムに巻き込まれ、スバルとヴィータは巻き込まれるように吹き飛んだ。

＞なのはさん！同時にいきますよ！＜

＞うん！＜

「「ディバインバスター！」」

一真を挟むように右から桜色の、左からオレンジの砲撃が向かってくる。

だが、なのはの威力が弱い。先ほどの戦闘で放ったスターライトブレイカーの影響で、なのはの魔力が減っていることが原因だ。

《テメェらの魔法が届く分けねぇだろうが》

そう言ったところで一真はあることに気がついた。ティアナの砲撃は《罪人》の状態で撃っていた。

一真はすぐさま神無を左手に持ち変えると、バスターを真っ二つにするように振り下ろしすが、

「させるかぁ！」

伸びてきた魔力紐が神無を縛り、動きを止めた。

《ちっ・・・・》

何もできない一真を二つの砲撃が飲み込む。

＞みんな離れて！デカイのいくで！＜

それを聞いてシグナム達はアリスの魔力紐で引き上げられ、動けるメンバーはその場から離脱していく。

＞はやてちゃん、いつでも行けます！＜

「ＯＫ。遠き地にて、闇に沈め！デアボリック・エミッション！！」

はやての目の前に発生したスフィアは消え、一真の１０メートル先に現れた。

そしてそのスフィアは巨大化していく。

《紅之太刀壱式・煉刃》

放たれた刃は巨大化していくスフィアを真っ二つにした。

霧が晴れて一真の姿が見えてくるが、バリアジャケットにすら汚れはなく完全に無傷だった。

「はあぁぁぁ！」

「うおぉぉぉ！」

空から二つの雷が、一真めがけて降ってくる。

「猛きその身に、力を与える祈りの光を！」

キャロはブーステット・ストライクパワーの詠唱を終えると、すぐ

にすぐに別の詠唱に入る。

「我が乞うは、疾風の翼。若き槍騎士に、駆け抜ける力を！」

フェイトに合わせるためにキャロはエリオにブーステット・ストライクパワーの他に、ブーステット・アクセラレイションを使い機動力も上昇させた。

［［ソニックムーブ］］

《おせぇよ》

一真は高速で迫ってくる二人の頭を掴んだ。そして身近な建物に向けて投げつけた。

「ブラストレイ！」

《無駄って分からねぇのかよ》

放たれた火球をトマトを切るように切り裂いた。
そして一真は睨むようになのは達を見る。

《どいつもこいつも邪魔ばかりしやがって・・・・》

一真の纏う魔力がさらに大きくなる。
その禍々しさや強大さは、フェイト達が暴走したときの比ではない。

《そんなに邪魔がしたいなら、あいつらよりも先にまずテメェらから殺してやるよ》

「みんな、全快ってわけにはいかないよね・・・・」

アリスの言う通り体力、魔力共に消費しているメンバーが多い。
おそらく全力で戦えるのは、アリスとはやてとキャロだけ。
しかしキャロは、今は他のメンバーの治療に回ってもらっているため、実質アリスとはやての二人だけとなる。

「はやて、リイン。援護お願いできる？」

「もちろんや、アリスちゃん」

＞リインもいつでも行けますよ！＜

「でも、魔力は使いすぎないでね。今回の切り札は《罪人》の力じゃなくて、はやて、なのは、フェイトだから」

アリスが何を言いたいのかはやては理解できたようだ。

「そういうことならＯＫや」

それを聞いたアリスは、手元のレヴィアタンに視線を落とす。

「久しぶりのフルドライブ。行くよ、レヴィアタン」

［ＯＫ、マイロード］

アリスの足下に六芒星の魔法陣が現れ、光が溢れ出す。

「レヴィアタン、フルドライブ！！」

［フルドライブ！！］

その言葉と共に光は強くなり、アリスの体を包み込んだ。
そして光が消え現れたアリスのバリアジャケットと、レヴィアタンの形が変わっていた。
セーラー服だったバリアジャケットは漆黒のドレスに、レヴィアタンは指先に金色の爪が生えていた。
その姿はまさに魔姫とでも言ったらいいだろう。

《まずはテメェからだ》

フルドライブに移行したばかりのアリスの前には、ついさっきまで地上にいた一真の姿があった。
突然のことで、はやては魔法の発動が出来ない。
だがアリスは反応し、一真をうけとめていた。いた。解放していなかったはずの《罪》を解放して。

「危ない危ない」

アリスは神無を握っている拳を開くと魔力紐を伸ばすと、一真の両手両足に胸と腰に巻き付ける。

「てえやぁっ！！」

掌で神無を押し返すと、腕を振り下ろして一真を投げ飛ばす。
一真がある程度の場所までいくと、アリスは魔力紐を切り離した。

「レヴィアタン、ソード」

［チェンジ、ソード］

右手の親指、小指から伸びる魔力紐が繋がり硬化し魔力刃のソードとなる。

一真は体勢を直すと、魔法陣を展開しそれを蹴り向かってきた。

《紅之太刀弐式・轟滅点穴（ゴウメッテンケツ）》

加速してアリスに向かう。切っ先が狙うはアリスの胸。

一真の速度は徐々に速くなる。そして今の速さは、ソニックブームを遥かに超えている。

アリスは魔力紐を伸ばし一真を捕らえようとするが、一真が速すぎるため捕らえ損ねた。

《死ね》

神無の凶刃がアリスを捕らえかけるが、

「バルムンク！」

アリスの後ろから飛び出してきた刃が、一斉に一真に襲いかかる。

しかしそこに一真の姿はなく、魔法の無駄撃ちとなってしまった。

《蒼之太刀壱式・天墜閃》

一真は初めから轟滅天墜を当てるつもりはなかったのだ。本当の狙いはこっち。

しかも狙うのは前にいるアリスではなく、後ろで援護に回っている
はやて。

「ブリューナク！」

＞フリジットダガー！＜

魔力弾と氷の刃が一真を襲うが、魔法のオーラがそれを阻む。

「はやて！」

「くっ・・・・」

万事休す。
そう誰もが思った瞬間、オレンジの光弾がはやての前に現れ直角に
曲がる。
行き先は一真の顔面。

「バースト！」

その声とともに魔力弾は炸裂した。

《があっ》

一真ははやてを切ることなく落ちていく。
今の炸裂弾が効いたのだ。

「八神部隊長！」

「ありがと、ティアナ。助かったわ」

「ふぅ・・・・」

安堵の息を吐いたアリスは地上に向かう。

「はぁっ！」

アリスは一真に向けて右手の刃を振り抜く。

一真はそれを受け止め押し返すと、掌に魔力を集める。

《イーラ・カンノネッジャメント！》

「うりゃぁぁぁ！」

アリスは発射直前で、魔力紐で一真の腕の向きを変えて軌道を無理矢理変えるが、

「くっ」

放たれた砲撃はアリスのオーラを削り腕に傷を付けた。

本来の一真は砲撃魔法は得意ではない。威力はＡＡ＋ほど。

しかし今の一真は《罪》の解放中で、しかも暴走状態である。威力がどこまで上がっているのか想像できない。

「乙女の肌に何するかぁ！」

とても戦闘中とは思えないセリフを吐きながら、アリスは腕を振り上げて殴りかかる。

それに会わせるかのように、一真の後ろからウイングロードの上を走ってくるスバルが見えた。

《後ろからならバレねぇと思ってねぇか？》

「「え？」」

一真は左手に神無を持ち変えると、右手でアリスの拳を受け止めスバルの方に神無を向けて振り下ろした。

斬撃は向かってくるスバルに飛んでいく。スバルは止まらない、止められない。自ら刃へと向かっていく。

「させへんよ！クラウ・ソラス！」

「ディバインバスター」

白とオレンジの砲撃が真横から刃にぶつかり打ち消した。

《ちっ・・・・》

一真は舌打ちをするとアリスを一瞥する。

「リボルバー・・・・」

拳を掴まれていて動くことの出来ないアリスを、一真はスバルへと投げつける。

「きゃぁぁぁぁぁ！！」

「へ？」

投げつけられたスバルはアリスを受け止められず、そのままアリスの下敷きになってしまった。

「スバル！アリスさん！」

《人の心配をしてる暇なんかあんのか？》

二人の前で来ていた一真は迷いなく神無を切り下ろす。

ティアナはすぐさまはやての前に出て《罪》を解放すると、ダガーモードを交差させ受け止める。

＞捕らえよ、凍てつく足枷！フリーレン・フェッセルン！＜

一真の足下にベルカ式の魔方陣が現れると、ティアナは神無を魔力弾で弾き上げるとその場から離脱した。

同時に一真の体が凍りつく。

「これで時間が稼げる。ティアナ、今のうちにアリスちゃん達と合流や」

「はい」

「だ、大丈夫、スバル？」

「はい、何とか・・・・」

アリスとスバルはゆっくりと立ち上がり、一真の方を見る。
そこには氷の中にいる一真がいた。

「どういう状況？」

「動かれると困るから、一時的に凍らしたんよ」

凍っている時間はあまりない。一真があのまま長時間凍っているわけがないのだ。

「キャロ」

ティアナは、今治療に回っているキャロにモニターの回線を繋げる。

〔はい！？〕

「そっちの治療はどこまで終わった？」

〔フェイトさんとエリオ君、ヴィータ副隊長の怪我はそれほど酷くなかったので、もう治ってそちらに向かってます。シグナム副隊長とアギトはもう少しかかります〕

「わかったわ」

ティアナの話が終わると、はやてと入れ替わる。

「なのはちゃん」

〔何、はやてちゃん？〕

「魔力をあまり使わんよう、もうちょっとそっちにいてくれるか？アリスちゃんの作戦では、私になのはちゃん、フェイトちゃんは切り札みたいや」

〔切り札・・・うん、りょ――――〕

《紅之太刀壱式・煉刃》

その声はなのはの声を遮り、アリス達の真上から刃が降ってきた。アリス達はギリギリでその場から離れ、一真を見つめる。

「もうちょっと凍ってるかと思ったけど、ダメやったか」

四人の目の前にいる一真のオーラは、凍らせる前よりも膨れ上がっていた。

「あれ？」

「どうしたのよ、スバル？」

「気のせいかもしれないけど、一真さんのオーラがおかしいような・・・」

それを聞いてアリスは一真に視線を向ける。

それと同時に一真は突っ込んできた。

《おらよっ》

一真の狙いはアリス。
この中で一番厄介になるからであろう。

「ぐっ・・・・・」

アリスは神無を受け止めると一真を姿を見ながが、かなり険しい顔に変わる。それは今、一真に力負けして落下しているからではない。

（マズイ、マズすぎる。これ以上長引けば、一真に勝てなくなる・・・・）

［マイロード、あと六メートルで地面です］

「分かってる！」

アリスが右手に魔力を集中させると、環状魔方陣が現れる。

「クラウン・レイス！」

掌から放たれた一撃は、一真を神無ごと押し上げる。
アリスは地面にぶつかる直前で止まることに成功した。
アリスから離れた一真にはスバルとティアナが向かう。

「はぁっ！」

一真の顔面にスバルの拳は進む。
一真は拳を神無を持っている左手で反らすと、スバルの腹を膝で蹴り上げる。

《蒼之太刀弐式・崩天魔突》

放たれた突きはスバルの頭上を通り抜ける。

「かはっ・・・・」

後ろから一真に向かってきていたティアナの姿は、ゆっくりと消える。幻術だったのだ。

一真は何度も突き上げる。

《幻術を使えばなんとかなるとでも思ったか?》

地面に落ちていくティアナとスバル。

「おっと・・・・セーフ」

落ちていく二人をはやてとアリスが助ける。

《があっ!?》

突然一真は苦しみだした。

それに呼応するように魔力のオーラ、そして一真の魔力が膨れ上がっていく。

「な、何やあれ?」

「遅かったか・・・・」

《があああぁぁぁぁぁぁ!!》

魔力のオーラは形を変えて、西洋竜の形をとっていく。

「最悪の状況ね」

―お姉ちゃん！お姉ちゃん！―

一真の目の前には血の海に倒れ込む高校生くらいの少女と、その少女を泣きながら姉と呼び続ける小学生低学年くらいの男の子がいた。

「・・・・・・」

男の子はゆっくりと顔を上げて一真を睨み付ける。

―お前のせいだ・・・お前のせいでお姉ちゃんは！！！！―

「そうだよな・・・俺のせいだ・・・・」

男の子は成長していき一真になる。
男の子は一真だったのだ。

―テメェがいたから姉さんが死んだ！―

「反論はしねぇよ・・・・」

一真はゆっくりと目を閉じた。

一真のオーラの変化が終わると同時に、アリス達とフェイト達は合流していた。

「何ですか、あれ？」

「暴走の第二段階っていうのがいいのかな」

エリオの問いに、アリスは簡単に説明する。

「あの状態になるともう自我はないよ。頭にあるのは目の前を壊すだけ。それに身体能力は本当の化け物レベル。こっちも殺る気でいかないと殺られる。いい？一真だからって遠慮しちゃダメだよ」

渋々ながらフェイト達は頷く。

「スバル。ティアナとここにいてね」

「でもっ！」

フェイトにそう言われて反抗して、スバルは自分も行こうとするが、

「バカ。ティアナは気絶してんたぞ。何かあったときに一番運びやすいだろうが。いいな！？」

「はい・・・・」

返事を聞いたアリス達は一真へ向かっていく。

「一真ぁ！」

アリスが叫ぶと一真はアリス達を見るが、

《ぐうぅ・・・・があああぁぁ！！！！》

威嚇するように吼える。

「ぐっ・・・・」

「完全に僕らを認識してませんね」

口を閉じると一真はこちらへ飛んできた。

アリスが一真に向けて魔力紐を伸ばす。一真はそれを掴み、

「きゃあ！」

引っ張り引き寄せた。

すぐさまフェイトとエリオ、ヴィータが動く。

フェイトはハーケンフォームで魔力紐を切り離しアリスを助けると、

プラズマランサーをセットする。

「ファイア！」

一真の顔に五発、その他の場所に五発の計１０発を放つ。

いつもの一真ならば、《罪人》の魔法は弾くなりプロテクションを

使うなり何らかの方法を使い、魔法が直撃しないようにするのだが、

今の一真はそれをしようとはしない。

プラズマランサーが向かってくるのが分かっていて、一真は魔力を

神無に集中させる。

「させるかよ！エリオ、合わせろ！」

「はい！」

二人は左右から一真に攻撃をしかける。

「アイゼン！リミットブレイク！」

［ツェアシュテールングスフォルム］

グラーフアイゼンのハンマー部分が巨大化し、ドリルと噴射口が現れる。

「ストラーダ、フォルムツヴァイ！」

［デューゼンフォルム］

噴射口が七つになり魔力刃が現れる。

「「カートリッジロード！」」

［［カートリッジロード］］

グラーフアイゼンのドリルが回転を始め、ストラーダからは放電が始める。

「一撃突貫！ティタンブレイクハンマァァァ！！」

更に巨大化したグラーフアイゼンを、回転しながら一真の背中へ叩

き込む。

「轟雷一閃！ライジングメッサー！！」

魔力変換で顕現させた雷とそのエネルギーを、すべて魔力刃に集中させ一真の腹へ振り抜く。

一真が反応した時にはすでに遅く、グラーフアイゼンとストラーダに挟まれた。

「「行けぇぇぇぇ！！」」

《ぐるぅ・・・・があああぁぁぁぁぁ！！》

一真はグラーフアイゼンとストラーダの柄を持つと、力ずくで自分から引き離し始める。

「ぐぅ・・・・」

「くそがぁ・・・・」

《がぁっ！》

完全に引き離すと自分を中心に回転を始めた。

しかしその回転は止まる。

伸びてきた魔力紐が一真を無理矢理止めたのだ。

「フェイト、はやて！早く二人を！そんなに持たない！」

「うん！」

「了解や！」

二人はエリオ達を助けるために急いで向かう。
それに気がついた一真は、顔をフェイト達に向け口を開く。

「二人ともダメ！離れて！」

《がぁっ！》

口から放たれた一筋の閃光は二人を一瞬で飲み込む。
飲み込まれた二人は、地面へ真っ逆さまに落ちていく。意識は完全に失っている。

「「はやて！！」」

「「フェイトさん！！」」

《がぉぁっ》

アリスの魔力紐を無理矢理千切った一真は、ヴィータとエリオを上へ放り投げると、

《ぐるぅ》

煉刃を放つ。
二人はプロテクションを使い防ぐが、意味はなく破壊された。
四人を落とした一真は、残っているアリスを見る。

（ここにいるメンバーで残りは私とスバルだけ。なのは達、早く来ないかな？）

そんなことを考えている内に一真は向かってくる。

［ウイングロード］

鮮やかな青い道が一真へと伸びていく。

「うぉぉぉ！！」

「ダメ、スバル！」

アリスが叫ぶがスバルは止まらない。
カートリッジロードをしながら一真へと突っ込む。

「くっ、間に合ってよ！」

一真に反撃をさせないために、アリスは捕縛用の魔力紐を伸ばす。
が、一真の動きの方が早い。

「レストリクトロック」

「錬鉄召喚！アルケミックチェーン！」

一真の両手両足がバインドと鎖で縛られた。

「「ディバイン・・・・・」」

「飛竜・・・・」

「レヴィアタン、急いで縛り上げて！」

［ＯＫ］

レストリクトロックで止まっている一真を、更に拘束する。

「バスター！」

「ドライバー！」

「一閃！」

三人が同時に放った魔法は同時に着弾する。が、アリスは違和感を覚えた。手元に縛っている感覚がないのだ。

（嫌な予感がする・・・・何これ？）

霧が晴れくるといるはずの一真がいなかった。
それを見た瞬間、背筋に悪寒が走る。

（まさか・・・・）

アリスが後ろを振り向くと、頭上で神無を回転させている一真がいた。
最悪とはこのこと。
いつもよりも巨大な獄龍破。それは完成しており、神無をこちらへ向ければいつでも飛んでくる状態であった。

「みんな、逃げて！」

全員がちりじりに逃げていく。

しかし残った五人もあっさりと獄龍破に消えていった。

《がああああぁぁぁぁぁぁぁ！！！！》

六課メンバーが落ちた結界の中。

一真の絶叫だけが支配した。

《一真の部屋》

一真「あー、《一真の部屋》を始める前に一言。俺、おかしいだろ・・・・」

なのは「作者さんもやってしまったって思ってるみたいだよ」

一真「だろうな。性懲りもなくまた前後編にしてるし」

アリス「ま、終わったことなんだから気にしない。それに今日はゲストがきてるんだからね。神無さん、お願いします」

神無「それじゃ、紹介しましょう！『魔法少年の物語』から来てくれたソラ・フォード君よ」

ソラ「よろしくおねがいしまーす」

アリス「可愛いぃぃぃ！！」

ソラ「わ、わわわ！」

一真「話してやれアリス。困ってるだろ」

アリス「はぁーい」

ソラ「ありがとうございます、一真さん」

一真「礼なんぞいらん」

なのは「一真君からまともな言葉が！？」

神無［明日は嵐、いや天変地異ね］

一真「お前らなぁ・・・俺は基本的に子供には優しいつもりだぞ」

ソラ「でも千歳さんには厳しいですよね？」

一真「あぁ。あれは例外だ例が――――」

突然あらわれた極太のレーザーに、一真は飲み込まれて消えた。

ソラ「今の何ですか？」

神・な・ア「「［天罰］」」

ソラ「そ、そうですか」

神無［それじゃ一真抜きでお返事コーナーに行きましょうか］

ソラ「いいんですか？」

なのは「大丈夫だよ、一真君ならね」

ソラ「そうなんですか。分かりました」

アリス「あぁ！もう、その笑顔反則だよ～！！」

ソラ「うー？」

シグマさんへ

神無［一真は残念ねぇ］

アリス「そうだね。レン言っておくけど、一真は多分デバイスを見せないよ」

ソラ「何でですか？」

アリス「うっ・・・危ない危ない。ソラの可愛さに負けてネタバレするところだった」

なのは「弱すぎだよ、アリスちゃん。リボーさん、その言葉ちゃんと伝えておくからね」

紅龍さんへ

一真「初めての人だな。読んでくれてありがとな」

なのは「今日は早かったね」

一真「俺をナメんな」

ソラ「零さんが一真さんと戦いたいみたいですよ」

一真「・・・・」

アリス「どうしたの？」

一真「今すぐあっちに獄龍破ぶっ放したら、戦わなくてすむかなって思ってな」

なのは「無理だよ。もう作者さんがＯＫ出しちゃってるから」

ふはははは！死んでくるがぼぅっ！

アリス「バカね・・・ま、紅龍さん一真をお願いね～」

灰色の野良猫さんへ

アリス「大丈夫！ソラ君は《堕落》なんてさせないよ！」

一真「だとよ、ソラ。よかったな」

ソラ「はい！ありがとうございます、アリスさん」

なのは「そういえば、あっちで何かもらってたよね？あれどうしたの？」

一真「千歳に渡すやつは保存してある」

神無［ちぃ宛てだものね。本当にちぃに甘いわ。絶対に他の人だったら適当に扱うはずだもの］

一真「そうかい」

ＴＯＵＤＡさんへ

なのは「ソラ君は、千歳ちゃんのことはどう思う？」

千歳「可愛いい方だと思いますよ」

神無［ソラ。その返答は正解ね。変なこと言ってたら、一真に］

一真「あ〝ぁ？」

アリス「拐われたってこと思い出してキレてる」

ソラ「一真さんって千歳さんのこと・・・・」

神無［言っても無駄よ。絶対に認めないから］

なのは「一真君だからね～」

Ｎａｋｉさんへ

一真「ひぃっ！！」

ソラ「どうしたんですか、一真さん？」

アリス「あ、そっか。ソラは知らなかったんだよね」

なのは「一真君はね茸が苦手なの。だから、セラフィムが送ってきた茸エキス凝縮ドリンクは見たくもないみたい」

神無［ソラ。そこのウォーターガンに茸ドリンクセットして］

ソラ「こ、こうですか？」

アリス「そうそう。それで一真に向けて」

なのは「シューット」

ソラ「えいっ」

一真は声を出すことなく沈んだ。

U．Tさんへ

なのは「みんな千歳ちゃんだけが心配みたいだね」

神無［そりゃ一真だもん。誰も心配しないわよ］

ソラ「一真さんが可哀想です」

な・神・ア「「［おぉっ！］」」

アリス「ソラ君が仏に見えるよ！」

な・ア「「うんうん」」

ソラ「一真さん、頑張ってくださいね」

來人さんへ

アリス「ゼクスさんには賛成ね」

ソラ「誘拐する人は本当にモテないんですか？」

神無［それは・・・どうかしら？］

なのは「でも、モテるモテない関係なく誘拐はダメだよね」

ソラ「はいっ」

なのは「それにしても伊吹先輩、どうしたんだろう？」

神無（一真が原因だって言えないわね）

沫乃憂谷さんへ

アリス「ヒスイ。次回は無理だけど、近いうち来てみる？」

ソラ「そういえば、僕は逝かなくていいんですか？」

なのは「そもそも、ソラ君を逝せられないよ」

神無［それにいつもゲストを行かせてる片方はいないし、片方は死んでるからね］

ソラ「そうですか」

なのは「そろそろ終わりだね。一真君を起こさないと」

アリス「そうだね。ソラ君、このカンペに書いてあることを一真に言って」

ソラ「はい。えっと、一真さん、早く起きないと茸ドリンク頭からかけますよ」

一真「うっし、目が覚めた」

神無［早いわね］

一真「もう、あんなもんかけられたくないからな。つか、今日は俺がアウェイの日だったか」

なのは「そんな日もあるよ。それじゃ次回予告にいくよ」

一真「暴走を続ける俺に落とされてしまった六課メンバー」

なのは「なすすべのない私達は、圧倒的な力を持つ一真君を止めることは出来るのか？」

ソラ「次回、魔法少女リリカルなのは～七つの大罪～」

神・ア「「【最凶対奇跡の部隊・後編】」」

一同『次回へ、スタンバイレディ！』

最凶対奇跡の部隊・前編（後書き）

灰色の野良猫さん、いかがでしたでしょうか？
自分なりにがんばってみたつもりですが、問題などあれば一言お願いします。

＞みんな、生きてる・・・・？＜

アリスは薄れかけている意識に鞭を打って、なのは達に念話で話しかける。

＞何とか、ね・・・・＜

＞お前があの一瞬で私達に防御魔法を使ってくれなかったら生きていなかったかもな＜

アリスはゆっくりと立ち上がり、一真を見上げる。
今は結界内だが、あんなのが外に出たら本当にヤバい。

＞今動けるのは何人いる？＜
アリスから少し離れたいちに倒れていたシグナムが立ち上がる。

＞私達三人だけ――――＜

＞私達も、いけるよ・・・・＜

先に落ちたフェイト達も、傷で顔を歪めながら立ち上がった。

《ぐぅ・・・・》

自分の敵が立ち上がったことに一真は気づき、こちらを向く。
そして口を大きく開く。それは咆哮の動作ではなく、フェイトとはやてを落とした砲撃の動作であった。

＞みんな！なのは、フェイト、はやてを守るよ！＜

「スバル！来い！」

「え？」

ギガントフォルムのグラーフアイゼンを携えたヴィータに呼ばれ、スバルはよく分からないが近づく。

「今からテメェをあのバカの所まで飛ばす。思いっきり跳べ。タイミング合わせて――――」

「ど、どうやってあそこまで？」

「アイゼンでぶっ飛ばすんだよ。それ以外に何がある。さっさとやるぞ！」

「え、え、え！？」

ヴィータは思いっきりグラーフアイゼンを振りかぶる。

スバルが周りを見ると、頑張ってこいという視線だけがスバルに突き刺さる。

＞ティア～＜

＞今回だけはあんただけが頼りなんだからね。頑張って行ってらっしゃい＜

＞そんなぁ～＜

「時間がねぇんだ！早くしやがれ！！」

ヴィータに催促されスバルは渋々覚悟を決める。

「は、はい」

スバルは拳を作ると環状魔法陣が現れる。そして水色の光弾をセットした。

一真の光弾は徐々に大きくなり、発射まで時間は飛んどんなくなっていく。

「アイゼン！」

［シュラーゲンフォルム］

ギガントフォルムの片方に噴射口が現れる。

形としては、ツェアシュテールングスフォルムにドリルがない形態だ。

＞跳んだら、足の裏に何でもいいから防御魔法で防御膜を張れ＜

＞はい＜

スバルは思いっきり飛び上がり、足下にプロテクションを張る。

「いっけぇぇぇぇ！！！」

打ち上げられたスバルはまっすぐ一真へ向かう。

一真は地上に向けて放つために向けていたスフィアを、単独のスバ

ルへと向ける。

＞今や！狙いは一真君の作ったスフィア！＜

なのはとフェイトとティアナ、そしてシグナムの四人はすぐにカートリッジをロードする。

そして遠距離魔法の使えるメンバーは、目標のスフィアを見上げた。

「「ディバインバスター！」」

「トライデントスマッシャー！」

「クラウ・ソラス！」

「駆けよ隼！シュツルムファルケン！」

「ブラストレイ！」

「クラウン・レイス！」

放たれた全ての魔法は一真の口元のスフィアを、放たれる前に直撃。

辺りは煙に覆われる。

「《罪》解放！」

そして煙の中から現れたスバルは、残り時間の少ない《罪》を解放し光弾を一真の顔面零距離に構える。

「ディバインブレイカァァァ！！」

光は一瞬にして一真の顔を吹き飛ばす。

「がっ・・・・」

直撃すればなのはでも気絶する、《罪》解放状態での一撃。
それを零距離で受けた一真の腕はスバルを掴んだ。
そしてその口には、さっきよりも小さな光弾。

「撃ち抜け、雷神！」

［ジェットザンバー］

伸びていく魔力刃は一真の腕を狙うが、神無で簡単に防がれた。これが全快のフェイトであれば、防がれることはなかっただろう。
反対側に現れたなのはの手には、エクシードモードのレイジングハートが握られていた。

「マニューバ、A・C・S！」

［A・C・S、スタンバイレディ！］

レイジングハートの先端から紅色の半実体化魔力刃が現れ、六枚の魔力翼も生えた。
なのはの狙いは魔力のオーラを削り、一真への直接攻撃。
両手が塞がっていて無防備の一真に、なのはは突撃する。
防げないと理解した一真は、掴んだままのスバルをなのはへと向けた。

「えっ！？」

「スバル！？」

フェイトは一真の予想外の行動に驚き、なのはは目の前に現れたスバルに驚いて止まる。

《らぁっ！》

一真はスバルをなのはに向かって投げ飛ばさず、下へ容赦なく振り落とす。

落下速度が速すぎるためレヴァンティンのシュランゲフォルムでも、レヴィアタンの魔力紐でも間に合わない。

「スバル！」

ティアナが叫ぶ。

しかし誰もスバルまで届かない。

キィンッ

スバルの落下点に現れたベルカ式魔法陣。

そこから現れたのは、銀髪で青いバリアジャケット着た男だった。

男は飛び上がると、スバルをお姫様ダッコすると着地した。

「大丈夫か？」

「あ、はい。ありがとう、ございます・・・・」

ギリギリで現れた男を見たなのはとフェイトは、魔法を解除するとかなり強力なバインドをかける。

はやてはその上から一真を凍らせ、氷に閉じ込めた。

「えっと、どちらさまで？」

スバルがそう言うのも無理はない。
スバルはその男が誰なのか知らないのだから。

「む？そうか。この姿は初めてだったな」

「この姿って、――――」

「ザフィーラ！」

はやてに呼ばれた人間の姿のザフィーラは、そちらを向く。
そしてスバルはというと、固まっていた。

「ざ、ザフィーラってあの、犬の！？」

「犬ではない。狼だ！」

他のＦＷ陣や最近知り合ったアリスも、スバルと同じような状況に陥っていた。
しかし、そんなことを気にしている場合ではない。

「すみません、主。遅れてしまいました」

「大丈夫。それで、シャマルは？」

「今準備をしているところです」

全員がはやてとザフィーラの会話を聞いて、頭上にクエッションマークを浮かべている。

「はやて、どういうこと？」

代表して聞いたはやては、ニヤリと笑い説明を始めた。

「今の一真君は、あの魔力のオーラで無敵や。私達が束になっても敵わん。でもそれは外からの攻撃に対してや。内側からの攻撃にはどうや？」

そこまで聞いてヴォルケンリッターの騎士達は気がついた。

はやてが考えた方法は、過去に自分達が闇の書のページを増やすために使用した方法。

「そういうことか、はやて」

「せや。その方法が通れば一真の魔力をかなり削れる」

頷くはやて。

闇の書のページを増やすための糧とされたことのあるなのはとフェイトはというと、いまだにはやての考えが解っていない。

「八神部隊長。ぼく達には何がなにやら・・・・」

エリオに催促されてはやては、その方法の名前を口にした。

「そやな。その方法は、リンカーコアの蒐集や」

「いい、みんな。ここから先は、なのは達には最後の一撃のために魔力を温存するため、戦いに参加できない。だから、あたし達で全部やるよ！」

「何でおめぇが仕切ってんだ、バーカ」

「それに、そんなことは言われなくとも分かっている」

ヴィータとシグナムにそう言われ、アリスは肩を落とす。
そして後ろにいるＦＷ陣はというと、

「スバル。いい？何があっても、一人で突撃なんてするんじゃないわよ」

「分かってるよ～。もー」

ティアナにそう言われふてくされるスバル。

「キャロ」

「うん。頑張って一真さんを助けよう」

「がぁっ」

フリードもエリオの言葉に返事をした。
ザフィーラを新しく含めた八人と一匹は、ヒビの入っていく氷の塊を見る。

『リンカーコアの蒐集、ですか？』

聞きなれない言葉にティアナは聞き返した。

『昔に『闇の書事件』ってあったのは知ってるやろ？その時に、闇の書のページを増やすために使った方法かんやけどな』

その話をしている時、はやてやヴォルケンリッターの顔に影が刺す。

『はやてちゃん・・・・』

『はやて・・・・』

『大丈夫や、二人とも。それで、その方法で集めた魔力を使いページを増やしてたんやけど、今は闇の書はない。かわりに、私達の魔力にプラスする。それにリンカーコアから蒐集されたら一真君のオーラだって減少――――』

『それじゃあのオーラはなくならないよ』

アリスは、はやての作戦を一言で否定した。

もちろんそれに疑問を抱かない物はいない。

『どういうことだ、桜ノ宮？』

『簡単に説明するね。《罪人》に《罪》を解放するととある存在と魔力的に繋がるの。そしてその存在から魔力がリンカーコアに直接

供給されて、リンカーコアに収まりきらなくて溢れ出た魔力があのオーラとなるってわけ』

『ということは、一真君の魔力を蒐集しても結局は無駄、ってことだね・・・・』

なのはの言葉に全員が落胆するが、アリスがとあることを質問する。

『ねぇ。リンカーコアから魔力が奪われるときって、激痛が走るとか・・・ある？』

その質問に体験者のなのはとフェイトが、

『『すっごく痛いよ』』

と声を合わせて言った。

『なら、手はあるかも・・・・』

『本当か！？』

『うん。暴走しようが激痛は激痛。必ず隙は出来る。そのタイミングで私が、最強魔法で一真のオーラを剥がすよ。そこになのは、フェイト、はやては砲撃を叩き込んで』

『うん』

『わかったよ』

『了解や』

3人は笑顔でアリスに返事をする。

『それじゃ作戦開始！』

氷が割れ、竜のオーラを纏った一真が現れる。

《がああああぁぉぉぉぉ！！！！》

封印から解き放たれた魔王。その言葉がぴったりの光景であった。

最終ラウンド、始まりである。

一真は立ち尽くしていた。

真っ暗で何もない場所に。

周りから聞こえてくる声を拒絶するように耳を塞いで。

「姉さん・・・・」

その声はあまりにも弱々しく、闇に溶けていった。

そして一真の姿も闇に溶け始めていた。

「はぁっ！」

シグナムはレヴァンティンで切り上げる。
一真はそれを神無で叩き落とし、右手を彼女の顔に伸ばす。

「うぉぉ！」

《罪》を解放しフルドライブを発動したスバルが、シグナム後ろから飛び出してきた。
それに合わせてシグナムはその場から離れる。
スバルはオーラの魔力を拳に集め、一真の顔面を真正面から殴りかかる。
拳が当たる直前、スバルの体を神無の刃が貫いた。
その直後、一真は真横にぶっ飛んだ。

「よしっ！」

オプティックハイドで姿を消していたスバルが、フェイクシルエットに気をとられていた一真を殴ったのだ。
飛んで行った一真の前には、ツェアシュテールングスフォルムのグラーフアイゼンを構えたヴィータが立っていた。

「アイゼン！カートリッジロード！」

［ｊａ］

カートリッジロードをすると、グラーフアイゼンが二回り大きくなる。

「一撃突貫！ティタンブレイクハンマァァァ！」

一真を打ち上げるようにグラーフアイゼンを振り上げる。

《ぐぅぅぅ》

「あたしの魔力全部！まとめて持ってけぇぇぇ！」

噴射口の光が更に強くなる。

飛ばされまいと耐えていた一真だったが、負けて真上に飛ばされてしまう。

「＞焔帝招来！！＜」

「轟雷一閃！」

真上にぶっ飛んだ一真を、ソニックムーブでシグナムとエリオが追いかける。

それに気がついた一真は煉刃を放つため神無を振り抜こうとしたが、なぜか出来なかった。

「ぐっ・・・本当に獣ね。獣なら、獣らしく大人しく躾られろ！」

神無は１０本の魔力紐に絡めとられ、引き抜くことの出来ない状況だった。

「シグナム！アギト！エリオ！手加減なんて一切いらないから、思いっきりやって！」

「あぁ！！」

＞任せろ！！＜

「はいっ！！」

レヴァンティンの刀身を紅い炎、プロミネンスが包む。
ストラーダの刃は異常な量の雷が集まり、漏れ出した雷が放電を始めた。

「紅竜一閃！！」

「ライジングメッサー！！」

《がああぁぁ！！》

神無を捕らえていた魔力紐を引きちぎり、一真は煉刃を放った。
放たれた魔力の刃と、紅炎と雷電の刃が拮抗する。

「ぬぅっ・・・・・」

「くっ・・・・」

だが、力で押され二人は落下を始める。

「クロスファイアーシュート！」

放たれた百を超える光弾は煉刃ではなく、それを放った一真へと向かう。
シグナムとエリオも何も言わない。
今はそれが最善なのだから。

一真はオーラを膨らませ、全ての光弾を打ち消した。
そして口には三発目の巨大な光弾。
落ちていくシグナムとエリオを狙った一撃だ。

「フリード！」

「がぁぉ！！」

フリードの口から放たれたブラストレイと、キャロのシューティングレイが一真へ向かう。
それが直撃したにも関わらず、一真は光弾を放った。
しかしそれはシグナム達のいる下ではなく、

「どういうことだ、あれは？」

誰もいない上だった。
全員が、一真の行動に疑問を持つ。
直後、光弾が花火のように弾けた。
そして雨のように小さくなった光弾が降り注ぐ。

「うそっ！」

（どうしよう・・・あれを防ぐ方法なんて。みんなの魔力も、もう少ないのに）

「火竜一閃！！」

その言葉と共に全員の視界には、光弾を消していく炎を纏った連結刃が見えた。

「ザフィーラ、スバル、ティアナ、キャロ、桜ノ宮！頼んだ・・・・・」

「おい、シグナム・・・・シグナム！」

「大丈夫だよ、ヴィータ。魔力の使いすぎで気を失ってるだけだから」

シグナムとヴィータは魔力のエンプティ。エリオは、一真の一撃で気絶。
これでこの場で戦えるのは五人と一匹となった。

「ザフィーラ。シャマル先生は？」

「ヤツが動き回ることで座標が絞れないのだろう」

スバルの問いにザフィーラは簡潔に答える。

「来ました！」

キャロの声に全員が反応する。
一真がこちらに向かって落下してきていた。

「散って！」

五人がその場から離れると同時に一真は地面へ直撃した。

＞スバル、ティアナ、キャロ。あと魔力はどれくらい！？＜

＞えっと、あたしはディバインドライバーを一発＜

＞あたしはファントムブレイザーを一発です＜

＞私は、四割くらいです＜

それを聞いてアリスは舌打ちをした。
自分が思っていた以上に絶望的な状況だったからだ。

（戦えない三人もいるから、早くしないと・・・・）

《ぐるぅ・・・・》

（一か八か・・・・獣の脳になってる一真に賭けるか・・・・）

＞スバル、ティアナ。私が合図したら、あいつに向かってディバインドライバーとファントムブレイザーを撃って。キャロとザフィーラは、あいつの動きが止まったらすぐに捕獲。いい？＜

＞＞＞はいっ！＜＜＜

＞あぁ＜

アリスはいつもより太めの魔力紐を作る。
それを一真へ伸ばし縛り上げる。

＞撃って！＜

直後、左右から青とオレンジの砲撃が一真へと向かう。
当たる直前にアリスは一真を解放する。

《ぎっ・・・・》

＞キャロ、ザフィーラ！＜

一真が耐えきり砲撃が消えると同時に、

「錬鉄召喚！」

「ぬうぅっ！」

召喚された鎖が一真の動きを止めて、表れた魔力の棘がその場に固定した。

「これなら・・・・」

《があっ！！》

一真が力を入れると、鎖と棘がは砕けた。

「そんな・・・これで、もう一真を・・・・」

スバルとティアナは最後の一撃にかけて魔力はゼロ。

キャロも一真捕縛のために、いつも以上に魔力を使いほぼゼロ。

アリスとザフィーラだけでは一真を止めるのはほぼ不可能。おそらくなのは達が来ても、最後の一撃を与えることができなくなり負け。

つまり、アリス達の勝ちはなくなった・・・と思われた時だった。

《があっ！？》

一真が不自然な声を出した。

その声を聞いたアリスは顔を上げて一真を見る。
それはアリスが始めて見る光景であった。

《ぎゃあああああぁぁぁぁぁぁ！！！！！！》

絶叫。
それは痛みによる声だった。

「一真の胸から腕が・・・・」

「ザフィーラ、あれって」

キャロに聞かれザフィーラが頷いた。

「シャマルだ。ギリギリ間に合ったようだな」

＞遅れてごめんなさい、みんな。間に合った、みたいね＜

「ふぅ・・・じゃあこっちも準備するよ、レヴィアタン！」

[了解です、マイロード]

「アインス」

その言葉と共にアインスの真正面に光弾が現れる。

「ツヴァイ、ドライ」

そしてそれを挟むように同じ大きさの光弾が現れる。

「フィーア、フュンフ」

最後に三つ光弾を挟むように光弾が現れ、計五つの光弾がアリスの前に現れた。

＞シャマルさん！蒐集は！？＜

＞終わったわよ＜

＞じゃあ、すぐに手を抜いて！＜

一真の胸から生えていた腕消える。
アリスの腕には環状魔法陣が現れている。

「イノセンス・・・・」

五本の指から伸びた魔力紐が五つの光弾と繋がる。

「スマッシャァァァ！！」

魔力紐を引き抜いたと同時に、五つの光弾から砲撃が放たれる。
痛みで隙のできていた一真は、それを防ぐことも出来ず直撃。

＞三人とも、準備は？＜

＞出来てるよ＜

＞じゃあお願い。私も限界だから・・・・＜

＞うん＜

なのは達の位置からも、アリス達の戦いが見えていた。

なのは達は、何度この場を放たれてみんなの所に行こうと思ったか・・・・

「みんなが作ってくれたこのチャンス」

「無駄にしたらあかんな」

「全力全開でいくよ！」

「「うん！！」」

霧が晴れ一真が見えてくる。そこには魔力のオーラがなくなった一真が、無傷のまま浮いていた。

《ぐぅぅ・・・・》

「レイジングハート！ブラスター１！」

［ＯＫ。ブラスターモード、スタンバイ］

なのはの周りに８基のブラスタービットが現れた。

なのはやレイジングハートに、限界以上の負荷のかかるブラスターモード。

本来ならばＪＳ事件の時、ブラスター３までしようしたことにより後遺症が残っている。
しかし、今はそんなことを言っている場合ではない。

「全力全開！スターライト・・・・」

レイジングハートの前に空気中の魔力が集まる。
その大きさは、さきに放った一撃に匹敵する。

「雷光一閃！プラズマザンバー・・・・・」

高速の儀式魔法で発生させた雷のエネルギーを、ザンバーの魔力刃に蓄積させる。

「響け終演の笛！ラグナロク・・・・」

はやての後ろに現れたらベルカ式魔法陣の頂点に魔力が集中する。

「「「ブレイカァァァ！！！」」」

なのはと８基のブラスタービットから放たれた桃色の砲撃に、ザンバーの刀身から放たれた金色の砲撃。そして、ベルカ式魔法陣の頂点から放たれた白い三つの砲撃。
計１３の砲撃が一真に集中する。

《がぁぁぁ・・・・ぁぁぁぁぁぁ！》

一真も煉刃を放つが、力の差が歴然。
そのまま砲撃の中へと消えていった。

「終わり？」

「多分ね。でも一真だから、まだ立ってそう」

「ありそうで怖いなぁ・・・・」

光が消えると、一真は落下を始める。

「あっ！！」

「一真君！」

三人は忘れていた。

意識を失えば、そのまま落下を始めることを。

「どうしよ、間に合わない！」

なのは達はまたもや忘れていた。あそこには動ける者がまだいたことを。

落下している一真は、飛んできたフリードに助けられた。

「ふぅ・・・・」

「これで一件落着、だね」

「じゃ、みんなと帰ろか」

《一真の部屋》

一真「おー、終わったな。お前らよくやった」

なのは「一真君・・・・」

アリス「一真・・・・」

一真「な、何だよ？」

な・ア「「一回、死のうか？」」

一真「あー、すまーーーー」

一真は全てを言うことなく光に消えた。

神無［えーと、いろいろ無視してゲストの紹介よ。『魔法少女リリカルなのは　ｔｈｅ・Ｆｉｎａｌｓｔｏｒｙｓ』より九条零が来てくれたわ］

零「まず一言いいか？」

神無［どうしたのよ？］

零「神童だよな、あれ？」

なのは「零君・・・・」

アリス「零・・・・」

零「な、何だ？」

な・ア「「気にしたら・・・・お話だよ」」

零「あ、あぁ・・・・すまん」

神無［今日のあの二人に逆らうと死しかないわね］

零「今日は神童と決着をつけたかったんだが、仕方ないな」

一真「くくくく・・・・」

神無［・・・・Sのスイッチが入ったみたい］

一真「てめぇらぁ・・・・死ぬかぁ？」

な・神・ア・零『死にたくないです』

一真「ならいい。それと、九条。俺のホームに来て、勝てると思うなよ？」

零「やってみないと分からないだろう？」

一真「じゃあ始めるか」

零「おう」

アリス「させるかぁ！！レヴィアタン！」

零「何するんだ、桜ノ宮!?」

なのは「ここで戦われちゃ、感想のお返事ができないの」

神無［つまり、決着はお預けね］

一真「ちっ・・・・」

零「しょうがない」

アリス「それじゃお返事コーナー行くわよ!」

U．Tさんへ

一真「ナナキ正解だ。第二段階は自我がねぇから、茸なんぞ関係ねぇ!」

零「神童。それは自慢することじゃないぞ」

なのは「じゃ、今見せてみようか?」

アリス「いいね。はい、一真」

一真「きゃあああああ!!」

アリス「あーあ。気絶しちゃった」

神無「あんた。本当に一真のこと好きなのよね?」

灰色の野良猫さんへ

なのは「こんなのを書くって、まさかソラ君が暴走？」

神無［何か想像できないわね］

アリス「ダメっ！ソラ君を暴走させちゃ！」

零「桜ノ宮のヤツ、どうしたんだ？」

一真「なんつーか、ファンみたいなもんだ。そう考えてくれ」

ＴＯＵＤＡさんへ

一真「こいつらも同じ考えか・・・・」

零「お前、そんなにダメなんだな」

一真「あぁ・・・・ひぃっ！？」

零「どうした？」

アリス「大丈夫だよ。ただ茸がここに来ることを感じただけだから」

零「すごいな、神童。それで、あの兄弟からは何が送られてきたんだ？」

神無［庭で取れた松茸みたいよ］

なのは「いいね。一真君がいないところで食べようよ」

アリス「賛成！」

零「いいな」

一真「茸怖い茸怖い茸怖い茸怖い茸怖い・・・・」

Ｎａｋｉさんへ

一真「謝るねぇ・・・・許す訳ねぇだろうが」

アリス「はい。セラフィムからの追加のドリンク」

一真「消去！」

一真はドリンクをセロで一瞬で消し去った。

零「これは大丈夫なのか？」

神無［茸の形が目に入らなかったら、一真は普通よ］

なのは「それはまた不便な・・・・」

一真「そっちに行った時、テメェらの最後だと思えよ」

紅龍さんへ

一真「あっちじゃ決着がつかなかったな」

零「決着、つけないとな」

一真「だな」

零「始め――――」

な・ア「「死にたいなら、してもいいよ」」

一・零「「いいえ。やりません」」

神無［今日の二人は最強ね。もしかした暴走にも勝てるんじゃ・・・・」］

な・ア「「それは無理」」

神無［あ、そう・・・・］

來人さんへ

零「ジンの言っていることはあっているのか？」

アリス「そ、それはぁ・・・・・」

なのは「私も気になるな。一真君が何を思っているのか」

神無［・・・・］

一真「それは・・・・秘密だ」

なのは「でもね、これ。作者さんから」

一真「あ？・・・・ふざけんなよ、あのクソ作者ぁ！」

零「どうした、神童？」

アリス「何かしら、一真の琴線に触れたみたいだね」

神無［じゃ、次回予告に行こうか］

なのは「一真君の暴走から三日。意識を取り戻した一真君に全てを聞いた」

アリス「今まで何を聞いても喋らなかった一真は、隠していたことを話し始めた」

神無［それは悲しくて辛い過去だった］

零「次回、魔法少女リリカルなのは～七つの大罪～」

一真「【ラースの生まれた日】」

一同『次回へ、スタンバイレディ！』

最凶対奇跡の部隊・後編（後書き）

紅龍さん。どうでしたでしょうか？
何かあれば一言ください。
それではまた次回。

ラースの生まれた日（前書き）

過去の話って難しいものですね。
ちょっとグダグダになりましたが、よろしくお願いします。
それでは始まります！

ラースの生まれた日

深夜一時。

「・・・・」

一真は夜中、目を覚ましていた。

(あー・・・確か暴走して・・・・記憶がねぇな。つーことは、第二段階に入ったか・・・・)

そんなことを思いながら、なんか久しぶりにこの部屋を見たという気になった。

が、どうでもいいかとまた寝るために目を閉じた。

「・・・・眠い」

いつもなら目を閉じただけで眠ることができるのたが、今日はなぜか眠ることができなかった。

「神無はいねぇし・・・・くそったれ」

そう呟きながら何もない天井を眺めていると、ドアが開きアリスが入ってきた。

「一真・・・・」

「んあ？あぁ、アリスか。どうした？」

「一真ぁ！！」

「ごふぅっ」

「一真一真一真一真一真一真一真ぁ！！」

目を覚ました一真に、容赦なく飛び乗り胸に顔をこすりつけるアリス。

「痛いわぁ（怒）！！」

「だってぇ・・・・・」

目に涙をためて一真を見上げる。

「たくっ・・・・・」

「それとね、一真」

「あ？」

「ごめん・・・・・」

突然謝られて何のことか解らなかったが、すぐにピンと来た。
アリスが謝ることは一つしかない。千歳のことだ。

「許すつもりはねぇ・・・・・」

「そう、だよね」

「予定だったんだが」

「え」

「俺の暴走を止めてくれたんだろ？それも二段階目を」

「私一人じゃないけど・・・・」

と呟くアリスの頭に一真は手を置く。

「ありがとな、アリス。ま、そういう訳で千歳のことは許す」

「うん・・・ありがとう」

「でもまぁ、お仕置きはあるよな？」

「へ？」

「つーわけで、お前の大嫌いな蛇」

一真がパチンと指を鳴らすと、ベルカ式の魔方陣が現れてそこから何かが降ってきた。

「え・・・・」

アリスは落ちてきたそれが何か理解すると、凍りつく。

このあとに起こることを予想し、一真は耳を塞ぐ。

「きゃあああああああああぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！」

もちろん、こんな大声が出れば人は集まってくるのは当然で、

「どうしたの！？」

「アリス！？」

「何があったん！？」

「どうしたですか！？」

「桜ノ宮、大丈夫か！？」

「何だ何だ？」

「一真に何かあったのか！？」

「何ですか今の！？」

「こらスバル！痛い、って何これ？」

「きゃっ、蛇！？」

「これオモチャ・・・・ってアリスさん！？」

一真のいる部屋になのは達が集まってきた。

そして大声を出したアリスはというと、

「きゅ～」

目を回して気絶していた。

「おー、来た来た」

「一真、君？」

「何で疑問形なんだよ」

なのはに呼ばれ、そう言い返す一真。

全員が驚いた顔で一真を見る。

「一真（君／さん／神童）！」

「うっす」

「いつ目覚ましたん？」

「今日の一時。つか、俺どれくらい寝てた？」

「三日だよ」

「十五食も食い損ねた！？」

「一日五食計算かよ」

「一真君らしいけどね」

「確かにな」

とそこまで話したところで、ティアナがこの空気を終わらせること

を聞いた。

「一真さん。アリスさん、どうしたんですか？」

「あぁ、そいつな。お仕置きしただけだ」

『お仕置き？』

「あぁ。千歳のこと許したんだが、やっぱり何か罰くらいあったほうがいいだろうと思って、不意討ち気味にそいつの嫌いな蛇のオモチャをな」

一真は自分の手元に蛇のオモチャを転移させ、それで遊び始めた。

「そっかぁ・・・・じゃあ一真君」

「ん・・・・ってお前ら何でデバイス出してんだよ？」

ここにいる全員が笑顔で、

『お仕置き』

「俺、病み上がりなんだが・・・・」

『関係ない』

一真はお仕置きという名のリンチでまた意識を失った。

次の日。
一真達は会議室に使っている部屋に集まっていた。

「んで話って？」

一真とアリスははやてに呼び出されたため、何の話をするのか知らない。

「私達が聞きたいんは、一真君とアリスちゃん、そして神無とラスト達の関係や」

「・・・・」

二人と一機は何も言わず、黙って聞いている。

「一真君が眠ってる間に聞いたんよ。グラトニーと呼ばれる女の子と一真君が知り合いだってこと。一真君をラースと呼んでいたこと。グラトニーが神無のことをお姉ちゃんと呼んでいたこと。そしてエンヴィー、つまり《嫉妬》の《罪》を持ってるアリスちゃんのことを知っていたこと」

そこまで聞いて一真がゆっくり口を開く。

「《嫉妬》って言っても、フェイトとティアナだってそうだぞ」

「確かに。でも、それは最近や。でも、彼女達と一真君が古くから知り合いということは、エンヴィーはアリスちゃんしかおらへん」

「・・・・」

一真は腕を組んで、目を閉じてしまった。

［そろそろ教えてもいいんじゃないかしら？なのは達なら、ちゃんと理解してくれるわよ］

「私もそう思うよ。一真と神無さんほどなのは達を知ってるわけじゃないけど、なのは達なら・・・・」

「はぁ・・・しょうがねぇなぁ。話してやるよ、俺達とあいつらの関係をよ。ありゃあ、俺が五歳の時の話だ――――」

俺が物心がつく前に事故で両親を亡くした俺は、姉さんと一緒に住んでたんだ。
本来なら高校三年のはずだった姉さんは、俺のために学校を止めて働いていた。
俺はそんな姉さんが大好きだったんだ。

「ほら一真、起きなさい。幼稚園に遅れるわよ」

「う、うん・・・おはよう、お姉ちゃん」

目の前にいる、綺麗な黒い髪の毛をポニーテールにした女の人は神童神無。

僕の大好きなお姉ちゃんだ。

「はい、おはよう。まず顔を洗ってきなさい。朝ごはんはそれからね」

「うん」

顔を洗って戻ってくると、姉さんがご飯の準備をしていた。

「それじゃ、食べよっか？」

「うん。いただきます！」

「はい、いただきます」

僕は姉さんの作ってくれるご飯がどんな料理よりも好きだ。

「一真、今日は給料日だから晩御飯は豪華だぞ～」

「え、でもお姉ちゃんお金・・・・」

お姉ちゃんがお仕事頑張ってくれてるのは知ってる。

けれど、僕達の家はそんなにお金があるわけじゃない。

だから僕は、お姉ちゃんに我が儘を言ったりしたことはない。お姉ちゃんを困らせるようなことはしたくなかったから。

「いいの。一真はそんなこと気にしなくても」

「うん・・・・」

「じゃあ、そんないい子の一真にはご褒美よ。今日の晩御飯は、一真の大好きなハンバーグ」

「いいの！？」

「もちろん。私を誰だと思ってるの？」

「お姉ちゃん」

「そう。だから、お姉ちゃんに任せなさい」

「うん！」

「ハンバーグ、ハンバーグ、ハンバーグ！」

「ホント、一真はハンバーグが好きね？」

「だってお姉ちゃんのハンバーグすっごく美味しいもん」

「それは嬉しいわね。でも、ハンバーグは夜よ？」

「知ってるよ。でも楽しみなんだもん」

「それなら頑張らないとね」

僕はお姉ちゃんと手を繋いで幼稚園に行ってる。

お姉ちゃんの手は温かくて優しくて、とっても安心するんだ。

「一(カズ)くん、おはよう」

「おはよう、千歳ちゃん」

千歳ちゃんとはお友だちなんだ。

「楠木さん、おはようございます」

「神無ちゃん、おはよう」

この人は千歳ちゃんのお母さんの楠木千里(センリ)さん。すっごく優しい人なんだ。

「おはよう、一真君。今日も元気ね？」

「うん！」

「神無お姉ちゃん、おはようございます」

「おはよう、千歳ちゃん」

「お姉ちゃん、行ってきます」

「うん。気をつけてなさいね」

「うん。じゃ、行こう千歳ちゃん！」

「うん」

僕は千歳ちゃんと手を繋いで走って入っていった。

千歳ちゃんとはいつも一緒で、毎日遊んでるんだ。

「一真君と千歳ちゃんは仲良しね～」

そう言われて、先生に僕は

「うん♪」

嬉しくて大きな声で返事をした。

「私と一くんはラブラブなんだよ～♪」

千歳ちゃんの言葉を聞いて、僕の体は熱くなった。

恥ずかしいこと言わないでよ～。

「羨ましいなぁ、千歳ちゃんは。そんなかっこいい恋人がいて」

「えへへへ♪」

「い、行こう千歳ちゃん！」

「う、うん」

僕は千歳ちゃんの手を引っ張り、その場から逃げるように走り出した。

「どうしたの一くん？」

僕は恥ずかしくて何も言えなかった。

「一真君、千歳ちゃん。お迎えよ～」

「「はぁーい！」」

僕らが出ていくと、お姉ちゃんと千里さんが待ってた。

「お姉ちゃん！」

「ごめんね、一真。遅くなっちゃって」

「大丈夫。千歳ちゃんと遊んでたから」

「そっか。千歳ちゃん、ありがとうね」

「うん♪」

「バイバイ、千歳ちゃん」

「バイバ～イ！」

千歳ちゃんと別れた僕は、お姉ちゃんと手を繋いで歩き始めた。

「今日は楽しかった？」

「うん♪楽しかったよ」

「そっか。そうだ、今日の晩御飯は覚えてる？」

「ハンバーグ！」

「そうよ～。だから急いで帰らないとね」

それを聞いて家に向かって走り出す。

お姉ちゃんの作ってくれるハンバーグが待ちきれなかったから。

「お姉ちゃん、まだ～」

「もうちょっと待ってて」

僕はずっと椅子に座って待ってる。

「っと、出来たわよ」

お姉ちゃんが持ってるお皿の上には、大きなハンバーグが乗っている。

「お姉ちゃん、早く早く！」

「はいはい」

僕の前におっきなハンバーグが置かれる。

「いっただきまーす♪」

「どう？美味しい？」

「うんっ！すっごく美味しいよ！」

「頑張ったかいがあったってもんね。それだけ喜んでくれるんだから。それじゃ私も、いただきます」

姉さんと二人だけの生活は、両親ががいなくても幸せだったんだ。
だけど、それも長くは続かなかった。
一週間後。全てが動き始める。

「ねぇ、お姉ちゃん。今日は・・・・」

「わかってるわよ、一真。それでね、今日は準備があるから千歳ちゃんのお母さんと帰ってきてね」

「わかったよ、お姉ちゃん」

今日は僕の誕生日。
いつもお姉ちゃんが何かを用意してくれるから楽しみだ。

「それじゃ行きましょ、一真」

「うん」

僕はいつものように手を繋いで幼稚園に行った。

「それじゃ楠木さん、今日はお願いします」

「はい、任されました。ちゃんと準備してあげてね。一真のために」

「はい」

「お姉ちゃん」
「お母さん」
「「行ってきます！」」
お姉ちゃんと千里さんと別れて僕らは幼稚園へ入っていった。
「一くん、今日誕生日なんだよね？」
「そうなんだ」
「おめでとう、一くん」
「ありがとう、千歳ちゃん」
僕は夜が待ち遠しかった。
いつも言わない我が儘を言える日で、お姉ちゃんが僕のために何かをしてくれる日だったから。
「そういえば、今日は一真君の誕生日だったわね」
帰り道。
今日は千里さんに送ってもらっていた。
「うん。だから楽しみなんだ、お姉ちゃんが今日は何をしてくれるのか」
「そっかぁ」

「いいなぁ、一くん」

「じゃあ、千歳の誕生日も今度からそうしようかしら？」

「いいの！？」

「もちろん。千歳のためだもの」

「やった♪」

千歳ちゃんと千里さんを見てると羨ましいって思うこともあるけど、寂しいとは思ったことはない。
僕にはお姉ちゃんがいるから。

「ここでいいよ」

「そう？」

「うん、ありがとう。千歳ちゃんバイバイ！」

「バイバイ！」

千歳ちゃん達と別れると、僕は急いで家に帰った。

「ただいま！・・・・あれ？」

いつもならお姉ちゃんが出てくるのに、今日はどうしたんだろ？もしかして、お仕事がまだ終わってないのかな・・・・
僕はそんなことを考えながら靴を脱いで、家の中に入っていった。

「お姉・・・・ちゃん？」

夕日で真っ赤にそまった部屋。
そこでお姉ちゃんは、倒れていた。

「お姉ちゃん！お姉ちゃん！お姉ちゃん！！」

読んでも揺らしてもお姉ちゃんは目を覚まさない。
そこで気がついた。お姉ちゃんからいっぱい血が出てることに。

「お姉ちゃん・・・お姉ちゃぁぁぁぁぁん！わぁぁぁぁぁん！！！！」

泣いてたらお姉ちゃんが起きると思った。
でもお姉ちゃんは起きなかった。

「ひっく、ひっ、お姉ちゃん・・・・お姉ちゃん・・・・」

「あらあら、死んじゃったみたいね」

「誰？」

「はぁーい♪」

僕の後ろには銀色の髪の毛をした知らない女の人がいた。

「お姉さん、誰？」

「ラスト。そう呼ばれてるわ。それと、あなたのお姉さんだけどは殺されたの」

「殺された・・・何で?何でお姉ちゃんが殺されたの!?」

ラストさんは、僕の質問に笑いながら答えてくれた。
何がそんなにおもしろいのか分からない。

「それは分からないわ。あたしは見ていただけだから」

「見ていただけ・・・ならお姉ちゃんを助けてよ!」

「それは無理よ。だってあなたやあなたのお姉さんとは他人で、助ける義理もないもの」

「っ・・・!」

突然ラストさんはニヤッと笑い、顔を近づけてきた。

「聞くけど、お姉さんを殺したヤツは憎い?仇をとりたい?」

「うん!お姉ちゃんの仇をとりたい!」

「いい返事ね。それじゃ、あたしの声をよく聞いて」

ラストさんの聞いたことのない言葉を聞いて僕の目の前は真っ暗になった。

「ふぅ・・・・」

一真はため息を吐いて休憩する。

「で、何で泣いてんだよ？」

「だって、だって・・・・」

「一真さん、可哀想です・・・・ひっく・・・・・」

「キャロ・・・・そこまで泣かれると困る」

等々言われる一真。

そんな中、エリオが手を上げた。

「どうしたの、エリオ？」

「神無さんって一真さんのお姉さんなんですよね？」

「あぁ」

「じゃあ、一真さんのデバイスの神無は・・・・」

「まぁ、そうなるわな」

一真はもう一度ため息をつくと、目を閉じた。

代わりに神無が話始める。

「そうやって振るの止めなさいよ。たくっ・・・・えっとね、後で

話す内容で分かるんだけど私が神童神無、一真の姉よ」

全員がありえないって顔になる。

「ちょっと待てよ。おかしいだろそれ。お前の姉ちゃん、殺されたんだろ？ なのに何で？」

「まぁ、それは続きを聞けば分かる。じゃあ、始めるぞ」

僕が目を覚ますと、目の前には僕と同じくらいの女の子や男の子、それに僕の家に来たラストさんの他に女の人と男の人がいた。

その手には武器。

そして僕は・・・・

《そこをどけぇぇぇ！》

「いい怒りよぉ・・・・みんな、殺しちゃダメよ？この子は次のラースになる子なんだからね」

自分の中から込み上げてくる気持ちが押さえられない・・・・憎い・・・・憎い・・・憎い・・憎い・憎い憎

い憎い！
お姉ちゃんを殺したヤツが憎い！

「いい男の子だね、ラスト♪」

「あなたもそう思うのね、エンヴィー」

「うん♪」

「めんどくさいからさぁ、早く終わらせない？二人とも」

《あああああぁぁぁぁぁぁ！！》

「いいのか？そのガキ、早くしねぇと死ぬぞ？」

「そうね・・・・じゃ、終わらせましょうか。アスモデウス」

「イエッサー」

ラストさんが僕にむけて降ったところで、僕の目の前はまた暗くなった。

「ん・・・・ここって」

「あ、目が覚めたぁ♪」

僕が目を覚ますと、さっき目の前が真っ暗になるまえに見た女の子がいた。

「君は？」

「えっとね～、本当の名前は桜ノ宮アリス。ここではみんなにエンヴィーって呼ばれてるんだ。よろしね、ラース」

「ラース？」

「うん。今日から君の名前になるんだよ、えっと・・・・」

「一真。神童一真って言うんだ、アリ――――」

僕がアリスちゃんを名前で呼ぼうとしたら、人差し指で止められた。

「違うよ。エンヴィーだよ、エンヴィー」

「エンヴィー、ちゃん？」

「“ちゃん”はいらないよ。エンヴィー」

「う、うん、エンヴィー」

「一真君、じゃなくてラース。着いてきて。ラストが呼んでたから」

「うん」

エンヴィーに僕が連れていかれたのは、とても大きな部屋だった。

「いらっしゃい、ラース」

「ここはどこなんですか？」

「あなたが住んでいた世界とは別の世界よ。それで、あなたにプレゼントよ」

ラストさんは灰色の宝石のついたブレスレットを渡してくれた。

「これは？」

「デバイスよ。名前は「サタン」。詳しいことはエンヴィーに聞いてね」

「はい」

「これであなたはお姉さんの殺したヤツに復讐できる力を手に入れた。次は、その力を制御する力を手に入れないとね」

「はい・・・・」

俺はそれから毎日のようにアリス達と、特訓やお仕事をして過ごした。

《堕人》達を使い、色んな世界の人間を落としたりサタンで殺したりもした。

管理局の人間、一般人、犯罪者、色んな人間をな。

そんなことを続けて三年がだったが、姉さんを殺した犯人は一向に見つからなかった。

かわりに復讐に取りつかれていき、感情はほとんどなくなっていった。

「ねぇ、ラース。今度はどこに行こうか？」

「今帰ってきたばかりで行くかよ」

「じゃあ、ご飯食べよ？美味しい所知ってるんだよ私」

「勝手に行けばいいだろ」

俺の部屋に向かっていると、ラストが話しかけてきた。

一体何なんだ？

「今日でここに来てから三年。それに誕生日だったわよね？」

「それが何だよ？」

「あなたにプレゼントしようと思ってね。サタン、貸してくれない？」

「あぁ」

俺はラストにサタンを渡すと、そのまま部屋に向かった。

しばらくやることもないし、寝るためにな。

しばらくして目が覚めると、俺の部屋にはラストがいた。

「何の用だ、ラスト？」

「こぉれ。あなたにプレゼント。目覚めなさい」

「ん・・・？ここは、どこ？」

「なっ！？」

「驚いた、ラース？」

今、サタンから聞こえてきたのはいつもの声ではなく、俺がいままで聞きたくても聞けなかった人の声だった。

「何で・・・姉さんの声が！？」

「簡単よ。あたしは魔法じゃなくて魔術が使えたの。だから、あなたのお姉さんの神無ちゃんの魂を呼び寄せてサタンに定着させたの」

「はは・・・・ははは・・・・」

「それじゃあね、一真君」

ラストはそう言い残し俺の部屋から出ていった。

「姉さん・・・・・」

「その声・・・・あなた、一真なの？」

「そうだよ、お姉ちゃん」

「よかった、元気で。いままでどうやって？」

「それは・・・・」

俺は姉さんにこの三年間のことを全て話した。

何も隠さず、俺のしてきたことを。

［一真！あんた何してんのよ！？復讐なんて頼んでない！私は一真に幸せになって欲しかったのに・・・・」

「もう遅いよ・・・俺はお姉ちゃんを殺した奴を殺す。それが俺がここにいる目的だから・・・・」

［・・・そう。一真］

「何？」

［ごめんね］

「いいんだよ、お姉ちゃん。お姉ちゃんが悪いわけじゃないから」

それからも俺は姉さんと共に人を殺し続けた。
何人も何人も、何の躊躇いもなく。
姉さんを殺した奴の情報も手に入らない。姉さんに聞いてもその時の記憶がないらしい。

「ねぇラース、神無さん。いいこと教えてあげようか？」

突然俺の部屋に入ってきたエンヴィーは、笑顔を俺に向けてそう言ってきた。
いいことだと？

［いいことって何？］

「神無さんを殺した奴のこと」

それを聞いた瞬間、俺の頭の中が沸騰した。

「どういうことだ！言え！早く言え！」

俺はエンヴィーの服を掴み押し倒した。

「い、痛いよラース」

［落ち着きなさい、一真］

「ぐっ・・・すまん」

「まぁいいんだけどね」

エンヴィーは乱れた服を直しながら起き上がる。

［ねぇ、アリスちゃん。どうして、そんなことを教えてくれるの？あなたに特なんてないでしょ？］

「特なんてないけど、理由はあるよ。私はラースが好き。それだけだよ」

調子が狂うな。

「今から言うことをラースと神無さんが信じるかは知らないけど、ちゃんと聞いてね」

「あぁ」

［えぇ］

「神無さんを殺したのは、ラストだよ」

衝撃だった。

俺をここに連れてきた奴が犯人・・・・・

「本当なの？」

「うん。ラストは一真をラースにするために神無さんを殺して、憎しみで憤怒に染めたんだよ」

「・・・ウソじゃ、ないんだな？」

「全部本当の話だよ」

「そうか・・・・」

俺は姉さんを手に取ると部屋を出た。エンヴィーの言ったことを確かめるために。

「ラストォ！」

「あら？どうしたの、そんな怖い顔しちゃって」

「お前に聞きたいことがある」

「何かしら？」

「姉さんを・・・お姉ちゃんを殺したのはお前か！？」

俺の問いにラストは、あの時に見たニヤリと何かを企んでいるかのような笑みを浮かべた。

「何でそう思うのかしら？」

「黙れ！俺の質問に答えろ！」

俺は姉さんの刃をラストに向ける。

「エンヴィーに聞いたのね。ふふふ、答えてあげるわぁ。あなたのお姉さん、神無ちゃんを殺したのはあたしよ。どう？これで満足かしら？」

「あぁ・・・満足だ。くくくく・・・・あはははは！！灯台もと暗しとはこのことだな・・・・」

「で、どうするのかしら？」

「死ねよ、クソババァ！！」

ラストの首に向けていた姉さんを、躊躇なく振り抜く。

「む～だ」

「それはあんたよ、オバサン」

その声と共に魔力紐が伸びてきて、ラストの鞭型デバイス・アスモデウスを縛った。

「エンヴィー！」

「じゃあ、さよらなだ」

「俺達がいることを忘れてないか？」

気づくと姉さんの刃を掴み止めているスロウスがいた。
ラストの周りには他にもグラトニー達がいる。
いつの間に・・・・

「ちっ！」

俺はエンヴィーの手を掴むと出口に向かって走り始めた。

「一真、これからどうすんの！？」

「一旦逃げる！エンヴィー・・・じゃない、アリスを連れて！」

この屋敷から出ると、先回りされていた。
目の前には《堕人》の群れにそれを従える五人がいた。

「ふふふ。どこに行くのかしらねぇ、二人とも？」

「逃げるのぉ？ダメだよぉ」

「・・・面倒だからな。早く寝たいんだ」

「ふん。貴様らがここから逃げることができるわけないだろう」

「諦めて、ここに残りなさいよ」

勝手なことばかりで言って、ふざけるなよ。

「ラース・・・・ううん、一真。私は一真に着いていくからね」

「地獄に行くかもしらないけど、いいのか？」

「うん♪」

「姉さん、カートリッジロード！」

［カートリッジロード］

「このあと、俺達はグリードとプライドを殺して奇跡的に逃げることが出来てな。次元転移でミッドチルダに行ったんだよ」

「そこでたまたまミゼットさんに保護されてね、一真は管理局員に、私は管理局に入らずにしばらくミゼットさんの家にいたの」

「まぁ、これが俺達の過去だ」

一真は湯飲みを取って、お茶を口に含んだ。

「さて、感想は？」

［過去話に感想を求めてどうすんのよ］

「気分だ、気分」

「ねぇ、一真君。今でもラストさん達は憎い？」

「あぁ。憎くて憎くてしょうがねぇよ。あいつらだけは絶対に許すつもりはねぇからな」

「まだ殺そうと思ってる？」

「あぁ、思ってる」

一真は真剣な声でそう返した。
そう言われるとなのは達は何も言えなくなってしまった。

〔八神部隊長〕

突然、グリフィスの声が会議室に響く。

「どうしたんや？」

〔通信です。相手は分かりません〕

「相手は不明。ちょっと怪しいけど、繋げて」

〔はい〕

次に響いた声は、一真にとって今一番聞きたくない人物の声であった。

〔ハロー、聞こえてるかしら？〕

「ラスト！」

〔ちゃんと聞こえているみたいねぇ。じゃ、要件を簡単に言うわ。一週間後、私が指定する世界にきて。場所は後で教えるわ。心配しなくても、ちゃんと千歳ちゃんもいるからね。それじゃ、一週間後会いましょう〕

そこで通信は切れた。

一週間。それが準備期間。

奪われた千歳を取り戻すための。

《一真の部屋》

なのは「どうしたの一真君？」

一真「くくくく・・・・神無ぁ。久しぶりに殺せるからなぁ」

神無［・・・私からは何も言えないわね］

アリス「今回もゲストが来てるから紹介するよ。『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～償いの槍～』より、ラディオン・メイフィルスとそのデバイス、セラフィムです」

ダダダッダダン、ダダダッダダン、ダダダッダダン

一真以外『ターミネ●ター！？』

セラ［どうも、セラフィムです。そして、私のペットの］

ラディ「誰がペットだぁぁぁ――――」

一真「喧しい、クソガキ」

なのは「だ、ダメだよ。ラディ君を蹴り倒しちゃ」

一真「うるせぇ。さて、ラディ」

ラディ「な、何だよ一真。っていうか足をどけろ」

一真「フム・・・・テメェ、歳は？」

ラディ「１３」

一真「テメェ、歳上は敬えってママから習わなかったか？あぁ？」

ラディ「ぐっ・・・・」

セラ［させませんよ神童一真。あなたのために、茸ドリンクを――］

一真「消去」

セラ［消えた！？なぜ！？］

一真「アリス！説明！」

アリス「この部屋は一真の部屋。だから、何でも一真の思い通りになるの。ちなみに、なぜか千歳もここでは神だよ」

一真「つーわけだ。それじゃラディ。それとクソマシン。お仕置きの時間だ」

セラ［行きなさいメカ●ジラ］

一真「させるかよ。超特殊召喚！ゴ●ラ（ファイナルウォーズＶｅｒ．）」

ゴ・メカ『ガアアア！』

な・神・ア『怪獣大戦争！！』

一真「じゃ、始めようか？」

一真に引きずられ一人と一機は消えていった。

ドコ、メキ、バキ、ガコ、バキン、ガキィン！！

神無［ターミネータ●って、素手で壊せたっけ？］

アリス「無理ですよ・・・・」

なのは「でも一真君だよ」

神無［それで納得できる自分が怖いわ］

一真「ふぅ・・・・じゃあ行こうか？」

ラディ「はい、一真様」

セラ［・・・・］

神無「えっと何があったか聞かないで、お返事コーナーに行きましょうか」

Ｎａｋｉさんへ

一真「で、クソマシン。何をするつもりだ？」

セラ［教えるわけがないでしょう。そんなことよりもプレゼントです］

一真「ほれラディ」

ラディ「お、俺？」

チッチッチッ・・・・

なのは「何、この音？」

ドォン！

アリス「ラディ！？大丈夫？」

セラ［ナイスです神童一真］

一真「中身が分からなかったら俺が危なかったがな」

神無［最悪の二人ね・・・・］

U．Tさんへ

一真「俺をなめるなよ、セフィロス！」

ラディ「ていうか、セフィロス前に千歳にやられてなかったか？」

セラ［ラディも千歳に殺られてはどうですか？痛みが快感に変わる瞬間が楽しめるかもしれませんよ］

ラディ「何でだよ！」

なのは「ねぇ、リユニオンって何？」

神無［説明が面倒だから、ここではしないわ］

アリス「最後にセフィロス。千歳から伝言だよ。『また還してやるから待ってろ！』って」

TOUDAさんへ

一真「誰が魔物じゃあああ！！」

ラディ「あれを見たあとじゃ、そう言われてもしょうがないだろ」

一真「るせぇ！！」

ラディ「がふぅ！」

アリス「でもあぁなったら動物よね」

セラ［朕のなってないペット同然ですね］

神無［何か来たわよ？］

なのは「秋月の撃った茸ミサイルみたいだね」

プチン

一真《がああああぁぁぁぁ！！》

一真以外『第二段階！？』

一真《がああああ！！！》

一真の放った一撃はミサイルを破壊して、そのまま次元を超えて飛んでいった。

紅龍さんへ

アリス「そういえばまだ決着ついてなかったんだよね」

一真「お前らのせいでな」

な・ア「「もとはといえば、一真（君）だよね」」

一真「はい」

ラディ「決着といえばゴジ●と●カゴジラはどうなったんだ？」

神無［見てみましょうか？］

●ジラ×１０「ガアアアア！！」

メ●ゴジラ×１０「ガォォォォ」

ガメ●×１０「ギャアアア！」

セラ以外『増えてる！？っていうか●メラ！？』

セラ「増やしてみました♪」

セラ以外『増やすな！収拾つかないだろ！』

灰色の野良猫さんへ

アリス「はぅっ・・・・もう死んでもいい！一真、殺して！」

ラディ「あれ、何だ？」

神無［アリスはソラのファンなのよ］

ラディ「なるほど」

ソラ（？）「アリスさん、結婚しましょう」

アリス「え、ソラ君！？」

なのは「え！？何でソラ君が・・・・ってセラフィム！？」

セラ［どうですか？似てました？］

アリス「レヴィアタン」

レヴィ［オーケー］

アリス「一真。セラフィムの隣にラディを置いて」

一真「あぁ」

アリス「イノセンススマッシャァァァ！！」

ラディ「何で俺までぇぇぇぇ！！」

セラ［我が人生一片の悔い無し］

神無［ソラのことで弄るのはダメね］

一真「だな」

シグマさんへ

アリス「おいしー」

ラディ「俺はもうちょっと甘い方がいいな」

なのは「そうかな？私はこれくらいで・・・・・」

一真「お前ら、何勝手に食ってんだよ！それ俺の見舞いだろ！」

アリス「頑張ったの私たちでしょ」

なのは「そうだよ。一真君より私たちのお見舞いだよね」

一真「ぐっ・・・・・」

セラ［リボーから送られてきたリンゴですよ］

一真「あ、あぁ。サンキュー・・・・ぐふっ」

神無［セラフィム。あんた何したのよ？］

セラ［茸ドリンクを注入しただけですが］

一真「貴様・・・・バタッ」

神無［あ、死んだ・・・・］

なのは「死んじゃった一真君は無視して、次回予告やるよ」

ラディ「いいのかよ！？」

アリス「いいんだよ」

な・神・セ『グリーンダヨ』

ラディ「・・・・」

なのは「指定された世界は何もない砂漠だけの世界」

アリス「そこで待っていたのは《堕人》の大群とラスト達。そして」

一真「《堕落》し、俺に刃を向ける千歳だった」

神無「次回、魔法少女リリカルなのは～七つの大罪～」

ラ・セ「「【始まる総力戦！最強の師弟対決！】」」

一同『次回へ、スタンバイレディ！』

ラースの生まれた日（後書き）

Ｎａｋｉさんどうでしたか？

自分なりに頑張ってみたんですが。

何かあれば一言お願いします。

話を終えた一真達は、一週間後にそなえて訓練するためにアリスの家に向かっていた。

「えっと、神無さん・・・・」

今神無はなのはの手の上にある。

「あのね、なのは。他のみんなもだけど、話を聞いて私が一真の姉だからって畏まらなくていいのよ？」

「でも・・・・」

「はぁ。お願いだから今まで通りで」

神無本人がそういうものの、呼ぶ方としては難しいものがある。死んだときがなのはよりも年下でも、普通に生きていればなのは達よりも年上なのだから。

「本人がそう言ってんだからそうしてやれよ」

と一真。

というか、姉である神無を呼び捨て出来る一真が異常なのだ。それは全員が思っていたらしく、

「何でお前は姉ちゃんを呼び捨てに出来るんだ？」

「そうですよ一真さん！あたしもお姉ちゃんがいますけど、そんな

ことできませんよ！」

「私もだよ一真君！」

六課メンバーから散々言われる一真は、完全にスルー。
聞く耳持たずの状態である。

「つかアリス。組んでる手を離せ。歩きにくいだろうが」

「気にしない気にしない。このまま行こうね～♪」

「このヤロウ・・・・」

「昔はあんなにひねくれて無かったのに・・・・はぁ」

と懐かしそうに言う神無であった。
ちなみに神無に対しての話し方だが、話し方は今まで通りで名前を呼ぶときだけ変えることとなった。

「さて、何をするかだが・・・・なのは、何かあるか？」

「うーん・・・・私達は《罪人》との経験が必要だからね。《罪》を解放した一真君達と戦ってみたいな」

「じゃ、チーム戦がいいのではないか？スターズとライトニングに主達を入れてさ」

ザフィーラの案はすんなりと通り、チーム戦が始まった。
最後の一日を調整とし、《罪人》との戦闘経験を積む一週間となった。

そして六日目の夜。
一真は神無と自分の部屋にいた。

［一真。分かってるわよね？明日の目的］

「あぁ・・・千歳を取り戻すことが優先だ。俺だってそれくらい分かってる」

［ならいいんだけどね］

「んだよ？俺が千歳をほったらかして、あいつらに向かうわけねぇだろ」

一真はそう言って布団へ潜り込んでしまった。

［はぁ・・・おやすみ、一真］

「あぁ、おやすみ・・・姉さん」

そして次の日。

「あっちが指定してきたのは、第１０８管理外世界アルプトラオム。砂漠しかない魔法文化０の世界や」

「砂漠しかないってことは、やりたい放題の世界ってことだな」

「おもしれぇじゃねぇか」

ヴィータの言葉に一真が賛同する。

「それに《堕人》もいっぱい連れて来られるからね」

「桜ノ宮。《堕人》とはどれほどの数いるんだ？」

「さぁ？あんなの数えてどうこうなるって人数じゃないからね。軽く万はいるんじゃない？」

アリスの言葉に全員が息を飲む。

今回の戦いは機動六課のみで、管理局は関係ない。ということは援軍はないということだ。

「それではやて。アルプトラオムまでどうやって行くの？」

「それもあっちが用意してくれてるんよ。それがこれや」

新たに映し出されたのは、アリスの家の庭に描かれた巨大な六芒星の魔法陣だった。

「この上に立って『ｓｐｒｉｎｇｅｎ（シュプリンゲン）』って唱えればいいらしい」

「用意がいいわね・・・・」

ティアナの呟きは全員に聞こえた。

「それじゃ機動六――――」

「待て。行く前に言っておくことがある」

それを聞いて全員が一真を見る。

「千歳のことは俺一人でやるからな。手、出すんじゃぬぇぞ。出して俺とあいつの死合いに巻き込まれて死んでも、俺は責任とらねぇからな」

「分かってますよ、一真さん」

「僕らじゃ千歳さんを連れて帰ってこれませんから」

「千歳さんを絶対に連れて帰ってきてくださいね」

スバルとエリオとキャロにそう言われ、一真に驚いた顔をしたがすぐに笑みに戻った。

「あぁ、そうだな。はやて」

「うん。じゃあ改めて、機動六課出動や！」

部屋から全員が庭の魔法陣の上に移動する。

そして、

「シュプリンゲン」

はやてがその言葉を呟いたと同時に全員は光に包まれ、庭から消えた。

アルプトラオムに着いたなのは達は声を失った。

目の前には《堕人》の群れ。

それは、目の前に広がる砂漠を真っ黒に染めていた。
「はぁーい♪」
上から聞こえてきた声。
そこにはラスト、グラトニー、スロウス、そして知らない男がいた。
「初めまして先輩達。いや、先輩っていうのはもったいないな。程度の低い人間に成り下がったゴミでいいよね」
「んだテメェ」
「この子はあなた達が殺したプライドの次の代のプライド。あなた達が出ていってから来た子だから、知らないのも無理はないわね」
「確かにプライドだね・・・・ムカつく」
アリスが怒りを込めて睨み付けるが、プライドは完全に無視を続ける。
「じゃあ、ここから先はラース一人で行ってもらうわね。あの娘のご指名だから」
ラストの言うあの娘とは千歳のことだろう。
《堕人》の群れが割れて道が出来上がる。
「この先にあの娘は、楠木千歳ちゃんは、グリードはいるわ」
(グリード、ねぇ・・・・)
「ほら行ってあげなさい」

「テメェに言われなくても行くっての、クソババァ」

一真はそう言い残し、《堕人》の道を歩いて行く。
道がなくなり、しばらく歩くと千歳がいた。
髪型はツインテール。バリアジャケットの上は赤い上着に白いインナー、下はミニスカートを履いていた。

「ヤッホー、一真ぁ」

「千歳・・・・」

「遅いよ、一真」

「そうかよ」

一真は千歳に近づこうとはしない。
しゃべり方はいつも通りに聞こえるが、一真には違って聞こえたからだ。

「私ねラストと会って分かったんだ」

「何がだよ？」

「私は一真が欲しかった、一真を誰にも渡したくなかった。一真の体も心も魂も全部私の物・・・・アリスちゃんにも誰にも上げない！」

（《罪》で気持ちが暴走してるな・・・・ったく）

この時点で一真は、千歳の《罪》は《強欲》と判断した。

「で、どうするつもりだ？」

一真は低い声で聞き返す。

それを聞いた千歳は笑って、

「一緒にラスト達の所に行こう。アリスちゃんも連れて、ね？」

「嫌だね。あいつらは――――」

「神無お姉ちゃんの仇、だよね」

［ちぃ・・・千歳ちゃん、知ってたの！？］

「ラストに聞いたんだよ。でもね一真。そんなことどうでも――――」

「よくねぇんだよ！クソガキ！」

一真は千歳に対しての叫ぶ。

今まで、千歳に対してあまりに怒りを出さなかった一真が叫んだ。

「そっか。じゃあ一真を倒して連れて行くよ」

「出来るもんならやってみろよ」

「やってあげるよ。マモン！」

［ＯＫ、相棒］

千歳の手には、日本刀の形になったマモンが握られると同時に千歳の体を魔力のオーラが包む。

「神無、やるぞ」

［もちろんよ、一真］

神無の姿は片刃の大剣に姿を変える。
一真の体も魔力のオーラに包まれた。

「うぉぉぉぉ！」

「あぁぁぁぁぁ！」

ついに始まった。
最強の師匠と最強の弟子の戦いが。

「あっちは始まったみたいだよぉ」

「だな。こっちも始めないか？」

「そうねぇ。いいかしら、管理局の皆さん？」

「いつでも構わへんよ」

「そう。それじゃあこちらも始めましょう。悶えなさせるわよ、ア

スモデウス！」

ラストの手に鞭型デバイスが、

「食べようね、べへモスぅ！」

グラトニーの手に鉄槌型デバイスが、

「さっさと終わらせるか、ベルフェゴール」

スロウスの両手に籠手型、両足に具足型のデバイスが、

「ひれ伏させるよ、ベリアル」

そしてプライドの手に杖型デバイスが現れた。

「みんな、行くよ！」

こちらでも始まった。

二つの勢力による総力戦が。

一真は神無を千歳へと突き出す。

千歳は軌道をマモンで逸らすと、そのまま一真の腹へ蹴りを入れる。

「くっ、そがぁ！」

足が腹に入る前に掴んで止めた一真は、千歳を自分から離すために放り投げる。
投げられた千歳もそのままでは終わらない。マモンを鎖鎌に変化させると、それを一真へと投げつける。

「あのデバイス、何でもありかよ！」

千歳のデバイス・マモンは不定形デバイスで、一真達のようにこれといった形はない。
自分の思ったように形を変えて、戦況にあわせることができる。

「ふんっ」

マモンの鎖に腕を捕まえられた一真は、そのまま引っ張られ体が浮き上がった。
そしてマモンの形は槍に変わっていた。

「ふざけんなっ！」

マモンを弾き上げると、神無を振り上げる。

「紅之太刀壱式・煉刃！」

放たれた魔力の刃は、日本刀へと変わったマモンで切られ打ち消された。

「この程度？面白くないよ、一真」

（性格がかわってねぇ・・・《罪》を解放した影響か？）

「俺は最初から楽しんでねぇけどな」

一真は体勢を低くして神無を振り抜き、先ほど放った煉刃よりも巨大な煉刃を放つ。

千歳は跳び上がり煉刃を避けると、空中で何かを蹴って一真へと向かう。

（あいつ、今何しやがった？）

千歳のしたことが分からず何をしたか考えたが、すぐに考えるのを止めた。

千歳が大斧を振り上げているのを見て、一真はバックステップでその場から離れる。

「それじゃ意味がないよ♪」

「あ？」

大斧が地面に触れると、そこから一真へ真っ直ぐに衝撃波が走る。

（速っ）

横に転がることで衝撃波をギリギリで避けることに成功した一真は、掌に魔力を集め光弾を作り千歳へ向けた。

「イーラ・カンノネッジャメント」

その砲撃は棍棒に変わったマモンによって曲げられ、すぐさま棍棒から狼牙棒へと変えた。

しかしその大きさ本来の狼牙棒の三倍。直撃すれは無事ではすまな

い。

「おいおい、マジですか！？」

［そんなこと言ってる場合じゃないでしょ！］

「言われなくても、分かってる！」

一真はカートリッジを三発排出し、更にオーラの魔力を神無へ集中させる。

「潰れちゃえ！」

「全力で拒否してやんよ！紅之太刀惨式・天魔裂牙（テンマレツガ）！」

放たれた衝撃波は牙を剥き狼牙棒と拮抗するが、狼牙棒が勝ちそのまま振り下ろされた。

しかしそこに一真はいない。

「あれ？」

「バカかテメェは！いつまでもそこにいるわけねぇだろ！」

千歳の後ろに移動していた一真は神無を振り抜こうとしたが、自分の右側に突き立てる。

すぐに聞こえてきたのは金属と金属がぶつかる音。

「この異常娘（アブノーマル）が・・・・」

千歳は一瞬のうちにマモンを狼牙棒から大鎌へ変え、それで後ろの

一真に攻撃を仕掛けていた。

「それは一真もだよね。今のはなかなか見えないよ？」

（今のは勘だっての）

マモンを離すと、一真は千歳から距離を取りすぐさまカートリッジロードをした。

「メテオセイバー！」

魔力刃を伸ばして千歳へ切りかかる。

千歳はそれを日本刀マモンで受け止め、刀身を滑らせ流すと一真へと走り始めた。

一真は地面に落ちたセイバーを持ち上げて横に振るうが、千歳は跳んでセイバーの上に乗った。

そして魔力刃の上を走って近づいてくる。

「ちっ」

伸ばしていた魔力刃を消して千歳を砂の上に落とした。

「痛い～」

「お前がそれくらいで痛い分けねぇだろ。さっさと起きやがれ、ガキ」

「やっぱりそうだよね」

千歳は立ち上がると、一真を見つめる。

「さっきお前、俺が欲しいとかぬかしてやがったよな？」

「そうだけど？」

「じゃあ、そのスポンジみてぇなテメェの脳ミソに刻んどけ。俺は誰の所有物にもならねぇ！いいな！」

「嫌だよ～だ」

「ほう・・・じゃあ、今から理解させてやる！」

「出来るものならね～」

シリアスなのだが、この二人だとそんな空気に見えない。
むしろ、

「兄妹のケンカね・・・・」

神無よ、セリフを取るな。

フェイトがソニックムーブでスロウスへ一気に近づき、ハーケンフォームのバルディッシュを振りかぶる。
それを邪魔するように《堕人》がフェイトへと飛びかかるが、

「セクハラ厳禁！」

その声と共に、硬化した魔力紐がフェイトに飛びかかった《堕人》を貫いた。
消えていく《堕人》を無視して、スロウスへ魔力刃で切りかかるが、魔力刃は空を切る。

「遅いよ。僕に当てたいのなら、これくらい速くないと」

今まで目の前にいたスロウスは、フェイトの上にいて足を振り上げていた。

「落ちなよ」

「テメェがな！」

スロウスの更に上に移動していたヴィータの手には、ギガントフォルムのグラーフアイゼン。
それをスロウスの脳天へ向け振り下ろした。

「ダメだよぉ。そんな危ないことしちゃぁ」

横から現れたグラトニーの強襲により、グラーフアイゼンの軌道を変えられてしまう。

「クソッ・・・フェイト！」

邪魔されることのなかった一撃がフェイトに襲いかかる。

「ぐぅっ・・・・」

「ん？」

スロウスは動かそうにも動かない足を見て、ため息を吐いた。

「またか・・・・」

スロウスがそう呟いたと同時にバルディッシュで吹き飛ばされた。

こちらが接近戦をしているとき、なのは達は広域戦闘を行っていた。

「アクセルシューター！」

「クロスファイアー・・・・」

「「シュートッ！！」」

放たれた二色の光弾は《堕人》へと向かう。

「ストゥラージェスフィア、セット」

プライドの周りに大量の黄金の光弾が現れる。

「ファイア」

放たれた三色の光は、敷き詰められた《堕人》の頭上はでぶつかり、消滅した。

「こんなゴミでも兵隊だから、消されると困るんだよね」

「プライドとか言ったな。では、これならどうだ？」

声の方にはベルカ式の魔法陣を展開したはやてがいた。

「来よ、白銀の風、天よりそそぐ矢羽ねとなれ！フレースヴェルグ！」

放たれた砲撃は着弾すると炸裂し、その場にいた《堕人》を消滅させた。
はやてはフレースヴェルグを二発、三発と連射する。

「それ以上は遠慮させてもらうわ。いくら大量だからって、あまり減らされたくはないの」

ラストははやてに向けてアスモデウスを伸ばす。
その鞭はレヴァンティンの連結刃のように、際限なく伸びていく。
だがそれはたった一人の手によって止められる。

「あら、あの時の青髪のお嬢ちゃんじゃない」

そう。ラストのアスモデウスを止めたのはスバルだった。

「うおりゃぁぁぁ！！」

そしてスバルはラストを自分へと引っ張る。

「きゃあ♪ってね」

掴んでいた先が伸び、アスモデウスはリボルバーナックルに絡み付き、

「えっ！？」

スバルを投げ飛ばした。

「そのまま刺さっちゃいなさい！」

投げ飛ばされたスバルを、魔力でコーティングし硬化させたアスモデウスが狙う。

「スバルっ！」

シグナムの声。

スバルはそれでも動こうとはしない。

当たる直前、スバルの口が動いた。《罪》解放、と。アスモデウスはスバルに刺さらず、皮膚の上で止まった。

そして魔力のオーラでアスモデウスの先端は、スバルから弾かれてしまった。

「ディバイン・・・・」

ラストを振り向いたスバルの手には水色の光球。

「サンダー・・・・」

上から降ってくるエリオの手には、ウンヴェッターフォルムのストラーダ。

「ドライバー！」

「レイジ！」

一筋の閃光と落雷。

二つの魔法がラストを襲う。

「甘いわよ♪」

その言葉と共にラストはオーラを纏う。
それがラストの身を二方向からの魔法から守った。

「甘いのは貴様だ！キャロ！」

「はい！フリード！行くよ！？」

「がぁぁ！」

フリードの足下にミッド式の魔法陣が出現する。
シグナムの足下にはベルカ式の魔法陣。

「だから、無駄♪」

フリードとシグナムが攻撃を放とうとした瞬間、アスモデウスが伸びてきた。
それを避けるために攻撃は中断。

「さて、ラースは勝てるのかしらね？」

「その言い方。まるで千歳さんがお前らの仲間みたいな・・・・」

「そうよ。あの娘は私達の味方。最初は嫌がってたんだけど、あれを埋め込んじゃったら百八十度変わっちゃってね♪」

「埋め込んだ、だと？まさか貴様！」

「そ。あの娘にはあなた達の方では「アビス」だったわね。それが埋め込んであるの♪」

一真と千歳の師弟対決。
ほんの一瞬の隙が、負けを呼び込んでしまう闘いが繰り広げられていた。

「ちぃ・・・・」

一真の足下にはベルカ式の魔法陣が現れる。

「蒼龍破！」

神無を地面に突き刺すと、ランダムに地面から龍の姿をした魔力の柱が立つ。
もちろんそんな魔法に千歳が当たるわけがなく、次々に避けていく。

「こんな分かりやすい攻撃はダメ――――」

「んなこたぁ、言われなくても分かってんだよ！行けぇ！」

魔力の龍は全方位から千歳へと向かう。
並の魔導師ならば、これだけの魔法が発動されればなにしようと負けなのだが、相手は千歳。そう簡単には終わらない。

「マモン♪」

［ＯＫ］

マモンの刀身に魔力が集まる。
そして刀身が地面に平行になるようすると一回転した。

「デタラメだな、おいっ！」

回転とともに放たれた魔力は刃となり、波紋のように広がって魔力の龍を切っていく。
魔力の刃は消えることなく、一真に襲いかかる。

「ふっ！」

その刃を切って防ぐと、一気に千歳へと近づいて振り下ろす。
千歳は懐に潜り込んでかわすと、ガントレットに変わったマモンを装備した右手で腹を殴る。

「ぐふっ・・・・」

一真の体はくの字に曲がる。
容赦なく顎を殴られ、一真は真上に浮き上がった。

［一真っ！］

「動けないよ。軽い脳震盪起こしてるはずだからね」

［プロテクション！］

「マモン、ブースト！」

［ブーストアップ］

その言葉と共に、ガントレットの周りの魔力だけが膨れ上がる。
千歳の一撃は簡単にプロテクションを打ち抜き、一真な顔面に突き刺さった。
一真は真っ直ぐに砂漠へ墜落。

「終わり～？」

「んなわけあってたまるか・・・・」

砂煙が消え見えてきたのは、頭から血を流しながらも立っている一真であった。

「やっぱり一真は頑丈だね」

「けっ」

血を吐き出すと、口の拭う仕草をした。

「風の傷！」

放たれた衝撃波は真っ直ぐに千歳へ向かう。
千歳はそれを簡単に消し、一真へ鎖鎌を投げつけた。
投げつけた鎖鎌は神無に巻き付く。

「おらよ」

千歳は引っ張られ、宙を舞う。

「作戦通り～」

「あ？」

巻き付いていたマモンは、また姿を変えて神無と同じくらいの大剣に変わった。

「てやっ！」

千歳は煉刃と同等の威力の刃を放つ。
それに対抗して一真も煉刃を放った。
先に放った千歳は、刃を放つと同時に何かを蹴り加速すると一真へと向かって落ちてくる。

（あれ、もしかしたら魔力で作った足場か・・・・）

そんなことを考えていた一真の目の前には、すでに千歳が迫っていた。
一真は千歳の大剣を神無で受け止める。

「ぐぅっ・・・・」

足は砂漠に沈む。
この一撃は予想外に重かった。

「神無・・・・」

［ＯＫよ。いつでも行けるわ］

「何をするっ・・・・！？」

千歳は一真の魔力が膨れ上がるのに気がついて、その場から離れた。
一真の足下には六芒星の魔法陣が現れた。

「神無、フルドライブ！」

［フルドライブ、イグニッション］

魔法陣から光が溢れだして柱を作り上げた。
そして柱が消えるとスーツにコートを羽織り、日本刀の神無を持った一真が見えてきた。

「神道・神無！」

「すごい、すごい！それが一真の本気？」

「だったら何だ？第二ラウンド始めるぞ！」

そう叫ぶ一真は走り出す。
千歳まで残り五メートルというところで跳び上がり、千歳の真上に移動した。
ついさっきの状況とはまったく逆だ。

「蒼之太刀壱式・天墜閃！」

一真は千歳に向かって落ちていく。
千歳はそれを向かえうつため跳び上がった。
天墜閃は相手とすれ違った瞬間に、連続で相手を切りつける技。

一真にとっては都合がいいのだが、何か嫌な予感がした。
その嫌な予感がを抱いたまま、一真は千歳とすれ違う。

「ぐっ・・・・」

砂に血が落ちる。
その血は千歳ではなく、天墜閃を使った一真の血だった。
千歳は一真の斬撃をすべて防いで、更に一撃を入れていたのだ。

「ク、ソっ！」

一真が見上げると槍のマモンを構えた千歳が見下ろしていた。

「させっかよ！」

痛みを我慢し立ち上がろうとしたと同時に、両手両足に激痛が走り
神無を落としてしまった。

「がああああ！」

両手両足から血が出ていた。
何が起きたのか一真には理解できない。
上にいる千歳は楽しそうな声で、

「槍の雨！」

千歳が槍を突き出すと砂漠に何かが突き刺さる。

（魔力の槍・・・まさか、槍の雨って・・・・）

一真は再び千歳を見上げる。
千歳は何度も地上に向かって槍を突き出していた。
それも適当に。
魔力の槍は地面を抉る。もちろん一真も。

「プロテクション」

神無を拾わないで防御魔法を使うが、二発防ぐと壊れてしまう。
そして一真は魔力の槍をもろにくらってしまった。

「はぁっ・・・・はぁっ・・・・あのヤロウ」

《罪人》の攻撃は簡単にオーラを削る。
千歳にオーラを一撃で削られて攻撃を受けた一真は、身体中から血を流して砂漠に倒れた。

「ねぇ、一真。私の物になってよ。それで一緒に行こ――――」

「いい、加減に・・・・黙れよ、ガキが・・・・」

ゆっくりと立ち上がる一真。
そして千歳を睨み付けた。

「まだ私の物に――――」

「そこだ。お前は、根本的に、間違ってる」

「間違ってる？」

「あぁ・・・・」

一真は肩で呼吸をしながら言葉を続ける。

「まず一つ。俺は所有物を得る側だ。誰かの所有物になる側じゃねぇ・・・・そして二つ目に――――」

一真は息を吸って、千歳へむけこう叫んだ。

「所有物が、持ち主の俺に逆らってんじゃねぇぞ!!!!」

とんでもない発言。
それには神無、そして千歳も言葉を失う。

「持ち主に逆らう所有物には今から、お仕置きだ・・・・いいな」

一真はゆっくりとした動きで神無を拾った。
身体中の傷に響かないはずがなく、一真の顔は苦痛に歪む。

［一真、大丈夫なの!?］

「知るか。俺は、イラついてんだ・・・あのヤロウの、俺を所有物にしたい発言でな」

怒る理由はいかがなものか。
ドSの一真には、千歳の発言が耐えきれなかったのだろう。
それをたった今爆発させたのだ。

［呆れるわ］

更に呆れることに、一真のオーラが膨れ上がったのだ。

理由は一真の《罪》に関係があった。
一真の《罪》は《憤怒》。そして今の一真は、理由はどうであれ怒っている。
そのため一真の怒りに《罪》が反応し、オーラが膨れ上がったというわけだ。
デタラメである。

「いいこと教えてやるよ・・・お前は知っているかどうかは知らんがな、《罪人》は《罪人》になってからちょうど６６６日後。つまり一年と十ヶ月と一日で自動的に稀少技能を手に入れる。いい例が相手の魔法を食らう、グラトニーの『暴食の口（イーター）』だ」

『暴食の口』。それは相手の魔法を食べて、その食べた魔法を自分の魔力に変換する稀少技能。

「つまり、俺も稀少技能を持ってるわけだ。俺の稀少技能は『永久凍土（コキュートス）』。一つのキーワードで一段階、最大四段階俺を強化する」

「それで勝てるの？」

「疑ってるな？じゃあ見せてやるよ。カイーナ」

一真がそう発すると魔力のオーラは更に膨れ上がった。

「神無、行くぞ」

一真は千歳へと跳び上がる。
千歳も一真向かう。
そして神無と日本刀のマモンがぶつかり、つばぜり合いとなる。

「ぐっ」

「そんな傷だらけでスゴいね」

一真の両手は千歳の攻撃で力が入るような状況ではない。
それに今の衝撃だけで身体中に激痛が走ったのだ。

「アンテノーラ」

一真は更に一段階自分自身を強化する。

「ぬぉぉぉぉ！！」

身体中から血を流しながら千歳を吹き飛ばす。

「紅之太刀壱式ぃ！」

神無の刀身に魔力が集中する。

「煉刃！」

放たれた刃は、今まで放った煉刃の中でも最大級の大きさ。

「くっ」

千歳が今日初めて顔を歪めた。
一真は刃が消えないうちに次の攻撃の準備をする。

「紅之太刀惨式・天魔裂牙ぁぁぁ！」

衝撃波は動けない千歳を飲み込もうと、大きな口を開けて襲いかかる。

「てやぁぁ！！」

魔力を込めた千歳の一撃は二つの魔法を消し去った。

「はぁ、はぁ、はぁ・・・・」

千歳も肩で呼吸を始めた。
しかし傷はない。一真が非殺傷設定で戦っているからだ。
対して一真はというと、身体中から血を流している。これは千歳が殺傷設定で戦っているから。
どう見ても一真のほうが劣勢である。

「はぁっ・・・・やべぇ・・・・・」

一真の目は虚ろで、息はさっきよりも荒い。
血は止まるどころか増えているように見える。

[当たり前よ。その体で『永久凍土』を使えばそうなることは分かってたでしょ。次の段階には進まないこと。いいわね？]

「多分な・・・・」

「はぁぁっ！」

気づくと千歳は目の前まで迫っていた。

「っ・・・・！」

何度も何度も何度も二つの刃は交差する。
一真が頭を狙えば防がれ、千歳が胸を狙えば弾かれる。
しかし次第に一真が押され始めた。

「神無。あと一段階上げるわ」

「えっ！？ちょっと待ち――――」

「トロメーア」

三段階目。
ここまで来ると一真の体にかかる負担は、なのはのブラスターモードを超える。
なぜ一真がここまでやるのかというと、一真の体の状態と千歳の強さということがあったからだ。
普通なら一段階でなんとか、二段階で余裕に勝てていただろうが一真の体は傷だらけ。
段階を上げるごとにそれは悪化の一途を辿る。
そのためここまでやらなくてはならなかったのだ。

「らぁぁぁ！」

その一撃は千歳を簡単に吹き飛ばした。
一真は吹き飛ばした千歳を追いかけ、二撃目を叩きつける。

「かはっ！」

「紅之太刀壱式・煉刃！」

一真は煉刃を五発放つとすぐにカートリッジロードを行い、リンカーコアの魔力を全て神無の刀身に集める。
刀身からは魔力が溢れ出す。

「死天閃破ぁ！！」

煉刃を超える巨大な漆黒の刃。
それは千歳がいる場所へ向かって落ちていく。
放った一真からはオーラが消え、浮いていることがやっとの状態に見える。

「っ・・・はぁ、はぁ・・・んっ・・・はぁ、はぁ」

ゆっくりと降りて、千歳に近づく。
そこには気を失っている千歳と、その横には赤い宝石「アビス」が転がっていた。

「そういことか・・・あの、ババア・・・」

「一、真？」

気だるそうに千歳は目を開く。
それに一真は気づき、しゃがんで千歳の頬を血だらけの手で撫でた。

「ごめん、ね・・・」

「大丈夫だ、千歳。もう少し、寝てろ」

「うん・・・」

頷くと千歳はゆっくりと目を閉じた。
一真は立ち上がって、なのは達が戦っている方を睨み付けた。

一真は再びオーラを纏う。
体は限界。これ以上は体が壊れるかもしれない。
だがそれ以上に一真は許せなかった。千歳をこんな風に扱ったことを。

「ぶっ殺す・・・・」

一真の顔からは感情がなくなり、瞳はものすごく冷たく異常な殺意が宿っていた。

《一真の部屋》

千歳「イエーイ♪帰ってきたよ～」

アリス「あれって奪還、した？」

なのは「多分、いいんじゃないかな？」

神無「それで、ちぃ・・・・千歳ちゃんは何であんなにソワソワしてるのかしら？」

一真「名前の呼び方戻したのか、ってんなことよりもあいつがソワソワしてる理由はな・・・・そろそろか」

？「うわぁぁぁぁぁ！」

アリス「何この声！？」

一真「今日のゲストだ」

な・ア「「ゲスト！？」」

一真「あぁ、ゲスト」

神無［なるほど、あれね］

ドォン

旭「イタタタ・・・千華のヤツ、って本当に着いた」

一真「今日のゲストは『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　Ｃａｌｉｖｅｒ&ａｍｐ;Ｐｈａｎｔｏｍ』から、神藤旭だ」

千歳「よぉ、旭。久しぶりだな？」

旭「ち、千歳さん！ちょ、何で俺なんですか！？」

千歳「まぁ、気分だ。らぁ！」

旭「ぎゃあああああ！！」

一真「俺も参加する。《罪》解放」

旭「《罪》解放でやらないでぇぇぇ！！」

一・千「喧しい！！」

アリス「あーあ・・・って今思ったんだけど、一真の稀少技能の名前何で『永久凍土』なわけ？普通氷関係でしょ？」

なのは「あれには訳があるみたいだよ。何でもコキュートスで凍ってるサタン（ルシファー）の周りを流れている四つの川の名前をキーワードとして使いたかったから、だって」

神無「なるほど。にしても無茶苦茶ね」

それが俺のクオリティ♪

アリス「勝手に出てくんな！」

すみません。

なのは「それであっちはどなって・・・うわぁ」

一真「くたばりやがったか・・・チッ」

千歳「あたしも《罪》解放して殺りたかったのにな」

神無「でも、《罪》解放したら元に戻るんじゃ・・・」

千歳「ちげぇな。正確には元の性格をベースなのは間違いないが、それに＋今のあたしで《罪》解放状態のあたしが完成するんってわけだ」

一真「つまりあの千歳に、今の残忍性が入るごほぉ」

千歳「次は一真だね♪」

一真「その笑顔で殴らないでぇぇぇぇ！！」

な・神・ア「「「怖っ」」」

なのは「そ、それじゃあお返事コーナーに行こうか」

アリス「ゲスト無視？」

神無「二階堂さんから許可出てるから」

アリス「なるほど」

ＴＯＵＤＡさんへ

千歳「ほら、一真起きて。晶彦君がお歌を送ってくれたよ～」

一真「歌だぁ？」

きのこの～このこ♪元気のこ！エリン～ギ、まいたけ♪ブナシメジ♪

一真「ぎゃあああああ！！耳が、耳がぁぁぁ！！」

千歳「うるさいよ♪」

ドゴッ

なのは「歌でもダメなんだ」

旭「あ、きのこの山が大量に・・・・」

アリス「大丈夫、なはずですよね神無さん？」

神無［えぇ、これは大丈夫よ。チョコだから］

Ｎａｋｉさんへ

旭「前回何したんすか、一真さん？」

一真「ターミネーターと人間をボコっただけだが」

なのは「普通はむりだからね」

旭「それは分かってます」

千歳「私も会いたかったなぁ」

アリス「結構カオスだったよ。恐ろしいくらいに」

神無［あー、アリス。千歳ちゃんは、それくらいじゃ何ともないわよ］

アリス「確かに・・・・」

紅龍さんへ

旭「一真さんと零さんってどういう関係ですか？」

一真「雑魚（零）と神（俺）」

アリス「嘘だっ！」

神無［ひぐらしはいいから。正確には決着をつけることの出来ないライバルみたいなものよ］

千歳「ねぇ、ねぇなのはちゃん」

なのは「何千歳ちゃん？」

千歳「私にもライバルできるかな？」

なのは「ど、どうだろ？できるんじゃないかなぁ・・・・」

シグマさんへ

一真「リボー。しんみりしてんじゃねぇ」

アリス「一真が意外なことを！？」

なのは「明日は雨――――」

神無［まだ続きがあるみたいよ］

一真「テメェがしんみりしてると気持ち悪いんだよ！！」

旭「一真さんらしいっていうか・・・・って千歳さん！？」

千歳「沈めやぁ！！」

一真「ごぼぉ！！」

旭「な、何で？それに《罪》解放止めたんですね」

千歳「あぁ。で、こいつを殴った理由だが、うるさいから」

旭「・・・・つ、次行ってみよう」

灰色の野良猫さんへ

アリス「きゃあああああ！ソラ君の写真だぁ！部屋に飾らなきゃ」

千歳「一真、アリスちゃんどうしたの？」

一真「お前はいなかったから知らねぇのか。あいつ、ソラのファンでなファンクラブの会長なんだよ」

旭「あれはいきすぎなんじゃ・・・・」

神無「あれ、なかなか止まらないのよね」

なのは「どうしようか？このまま続ける？」

一真「あぁ。それとデートなんかさせたら、死ぬぞ。もちろんアリスがな」

U．Tさんへ

なのは「一真君の過去って、クラウドさんと似てるんだ」

一真「らしいな」

千歳「さて、セフィロス。また消してやるよ」

旭「またって？」

神無［前にもセフィロスは殺られてるのよ。で、今日は何をするの？］

千歳「暗黒物質（ダークマター）召喚！」

アリス「それって、あれ？」

千歳「そうだ」

なのは「あれって、何？」

アリス「千歳が前に料理を作るときにたまたま出来た、暗黒物質」

千歳「セフィロスの口へ、転送！」

千歳以外（（（（（（ご愁傷さま））））））

二階堂さんへ

旭「はぁ、何でうちの姉さんは・・・・」

神無「弟も弟であれなのよ。何であんなにひねくれたのかしら?」

一真「んだよ?」

千歳「神無お姉ちゃんを悲しませちゃ、メッだよ?」

一真「いつ俺がそんなことしたよ?」

アリス「悲しませると言うよりは、苦労させてるよね」

なのは「お姉さんなのに呼び捨てだしね・・・・酷いよね」

一真「俺が悪いのか!?」

な・ア「「うん」」

千歳「それで旭君」

旭「なんすか千歳さん・・・・って《罪》解放!?」

千歳「何で生きてるのかな?もう一回、いいよね♪」

旭「ダメってぎゃあああ!!さっきよりごほっ、痛いがぁ!」

アリス「今のうちに作者から読者のみなさんに言うことがあるみたいだよ」

はい、作者の村正です。
ただいま神無とアリスのイメージＣＶを募集しています。
読者の皆様のほうがピッタリなものを選んでくれると思い、こうして募集しました。
締め切りはまだまだですが早い者勝ちです。感想やメッセージでもかまいませんのでよろしくお願いします。
ちなみに発表は第一部終了後となります。
では。

旭「・・・・何で・・・・・」

一真「千歳の《罪》解放状態ってエグいな」

アリス「うん・・・・」

千歳「どうしたの？」

なのは「今は元の千歳ちゃんだね」

神無［オーラがないから、そうね］

千歳「？そうだ旭君、早く起きて。次回予告するよ」

千歳以外（（（（（（鬼だ））））））

神無［千歳ちゃんを助けることが出来た一真は、ラスト達を殺すた

めに動き出す」

なのは「千歳ちゃんが助かったころ、私達は追い詰められていた」

千歳「そのとき新たな力が覚醒する」

アリス「次回、魔法少女リリカルなのは～七つの大罪～」

旭「【希望】」

一同『次回へ、スタンバイレディ！』

収録後

千歳「じゃあ、旭。あっちに送り返してやるよ」

旭「え、どうやってですか？」

千歳は旭の足を持ち、回り始めた。

千歳「そ～らを自由に♪飛びたいか～♪」

一・な・神・ア『はい♪ヒトコプタ～♪』

旭「ぎゃあああああ！！」

終

始まる総力戦！最強の師弟対決！（後書き）

二階堂さん。旭の出演許可ありがとうございました。
許可をもらったのが今月の頭だったのでかなり遅れました。
すみません。
何かあればよろしくお願いします。

希望（前書き）

今回はいつもより短いです。

それにまたやってしまった感が・・・・うわぁぁ（涙）

それでもいいという方はどうぞ

希望

一真は「アビス」を拾い、千歳を抱き上げると神無を振り上げた。

「紅之太刀壱式・煉刃！」

リンカーコアに供給される魔力を刀身へ集め、遠くに見える《堕人》へ放つ。

［もう止めなさい！あんた死ぬわよ！］

「知るかぁ！！あのクソ共、今ここで殺さねぇと気がすまねぇ！！」

限界の体に鞭をうち、一真は歩き始めた。

狙うはラスト達の命と決めて。

なのは達は完全に押されていた。

「どうしたの？もう終わり？」

ラストはいやらしい笑みを浮かべる。

「くっ・・・・」

完全に数が違い過ぎた。

機動六課が十人に対して、ラスト達は《堕人》を含めて何千、いや何万かもしれない。
いくら奇跡の部隊といえど、これには対抗できなかった。

「つまんないぃ。お腹減ったから帰ろうよぉ」

「僕は、ただの人間の分際で《罪人》に抵抗したんだから殺してもいいんじゃないかな？」

「俺はどっちでもいいけどね」

完全に勝てると判断しての会話。
全員がそれを理解しており、悔しくないわけがない。
しかし、勝てないのだ。

「じゃあ殺しちゃ――――」

ドォォォン

その音と共に《堕人》の群れの後ろが吹き飛んだ。
しかもそれが何度も起こる。

「死天閃破ぁぁ！！」

そして巨大な斬撃が《堕人》を消し飛ばしながら、まっすぐラストに向かってきた。

「ふんっ」

ラストはそれをアスモデウスで払うと、斬撃が飛んできた方を見る。

そこには血だらけで千歳を抱いている一真が、こちらへ歩いてくるのが見えた。

「ラストォォ！！」

「あら、ラース。どうしたの？そんなに血だらけで？」

ラストの言葉を無視して一真は跳躍する。
次の瞬間にはラストの前にいた。

「うらぁ！」

一真の一撃をアスモデウスで受け止める。

「らぁっ、らぁっ、うおらぁ！」

四撃目でラストは落ちた。

「はぁっ・・・・はぁっ・・・・くっはぁっ・・・・」

一真の体からは滝のように血が流れている。
誰が見ても危険な状態だ。

「一真君！もう止めて！死んじゃうよ！」

「そうだよ！千歳も喜ばない！」

「るせぇよ・・・・」

その声に寒気を感じた。

顔には感情がなく、目は座っている。

「あれ、昔の一真だよ・・・・」

「昔のって、ラスト達とおったっていう三年間のか？」

はやての問いにアリスは黙って頷いた。

今の一真は怒りで暴走していないのだが、いつするかわからないような暴走危ない状況なのは間違いない。

「カイーナ！アンテノーラ！トロメーラ！」

一真は一気に三段階目まで能力を引き上げる。

同時に一真の顔は苦痛に歪む。

「死になよ先ぱ――――」

「テメェが死ね、クソガキ」

後ろから迫っていたスフィアを神無を一振りして全て消し、煉刃も同時に放つ。

プライドは刃をベリアルで防ぐが、

「ふんっ」

後ろに移動し、神無を振り上げていた。

「レイジングハート」

［ＯＫ、マイマスター］

なのははレイジングハートを構え、フルドライブのエクシードモードに切り替える。
消費魔力が激しいため、使える時間はあまりないのだが、使わないわけにはいかない。

「ブラスター1」

ブラスタービット八基がなのはの周りに出現した。

「なのは!?」

フェイトが叫ぶ。当たり前だ。
ブラスターモードは負担が激しい。その上、一週間前の一真の暴走を止めるために使っている。
こんなに多用していてはなのはの身が持たない。
そう思ったフェイトだったが、なのはの目にはそのような思いは浮かんでいなかった。

「フェイトちゃんが言いたいことは分かるよ。でもね、まだ戦う力は残ってる。デバイスだって、レイジングハートだってまだ壊れてない。なのに、何もしないのは嫌だよ。みんなで一緒に帰ることができる可能性があるなら、私はそれに賭ける!」

「・・・・」

それを聞いてフェイトだけではなく、他のみんなまで黙ってしまった。

「行こう、レイジングハート!」

なのはは戦場へと向かって行った。

「やってくれるじゃない」

一真は返事をしない。
返事に気力を回したくないのだ。
それに限界までもう少しだと、自分でも分かっていた。

「紅之太刀惨式・天魔裂破・・・・」

放った衝撃波に威力はない。
ラストはアスモデウスで衝撃波を簡単に消してしまった。

「はぁっ・・・・はぁっ・・・・」

「終わりですね、先輩」

と左から。

「でもすごいよねぇ。そんなにまでなって、私達と戦おうとするんだからぁ」

と後ろから。

「僕ならめんどくさくて、最初からやらないけどね」

と右から。

「それじゃあ・・・・」

「「「「死（になさい／んで／んじゃえぇ／んでよ）」」」」

四人は同時に一真へ向けて魔法を発動しようとしたが、すぐに中断しその場から離脱した。
直後四人のいたところを閃光が駆け抜ける。

＞なのは、か？＜

念話を使う方が体力を使わないと判断した一真は、それでなのはに話しかける。

「うん。大丈夫、一真君？」

＞死ぬんじゃねぇの。出血多量で＜

そんな事、言われなくても分かっていた。
なのはは血が付いてしまうが、構わず一真を支える。

「あら？逃げ帰ったのかと思ってたわ」

「逃げないよ、私達は。一真君や千歳ちゃん、それに神無ちゃんも。みんなと一緒に帰るんだから！」

「勝ち目がないのによくやるね。僕が壊してあげようか？」

「勝ち目がない？違うよ。ちゃんとある」
なのはのその目には光があった。
「どこにあるんだ？」
「可能性だよ。魔力があれば、私達は戦える・・・・どれだけ差があってもね！」
「それのどこが――――」
「たくっ、お前の負けん気には呆れるな」
「でも、それに助けられてきたのは間違いないだろう？」
「せやなぁ。それにフェイトちゃんの心配性にも」
「酷いよ、はやて。私はみんなが無茶しないようにって・・・・」
「それが心配性だよ、フェイト♪」
ラスト達の後ろには隊長陣とアリスが展開していた。
そして左側には、
「その負けん気はあたし達も受け継いでますよ！」
「あんたの場合は最初からでしょ」
「ティアもだよ」

「違うわよ！」

スターズが。

そして右側には、

「ってことは私達はフェイトさんの心配性？」

「どうかな？もしかしたら両方かも」

「でも、両方だったら心強いね」

「うん」

ライトニングが展開している。

＞お前ら・・・・＜

これを聞いたとき、なのはは帰ったらみんなまとめて“お話”と考えていた。

「それに私もいるよ♪」

一真の腕の中にいた千歳は、するりと抜け隣に立つ。

＞千歳・・・・＜

「もう大丈夫だよ、一真」

＞あぁ＜

なのははラスト達に視線を向け、再び話し出す。

「それにここにいるみんなも。これが全部、勝てる可能性。あなた達に勝つための希望だよ！」

キンッと音が聞こえ、なのはの足下に魔法陣が現れる。
その魔法陣はミッド式でもなければベルカ式でもない。ましてや六芒星の魔法陣でもなく、第四の魔法陣だった。
その魔法陣とは五芒星が描かれた魔法陣であった。

「えっ！？」

なのはも突然の事に驚いている。

「何これ！？」

その魔法陣からはオレンジ色の光がほとばしる。
そしてその光は柱となりなのはと、支えられていた一真を飲み込んだ。

（この光、温かい・・・・）

自分の中に何かが流れ込んでくるのを感じた。
それはとても温かく、心地よいもの。
そして光は消えて、ラスト達が見えてくる

「ふぅ・・・・」

＞・・・・＜

全員の視線が自分に集まっていることに気づき、なのははキョトンとしてしまった。

「え、どうしたの？」

「なのはちゃん、キレイ！」

千歳の言葉で気がついた。自分がオレンジ色のオーラを纏っていることに。

そのオーラからは光の粒がキラキラと落ちていく。

「予想外ね。こんなところで《昇華（ライズ）》する人間が現れるなんて」

ラストが口にした、初めて聞く単語《昇華》。

それが今のなのはの状態らしい。

「帰るわよ。今回はあれの相手をしてる暇なんて、微塵もないの！」

珍しくあのラストが焦っていた。

それだけ《昇華》した存在は脅威らしい。

彼女達は逃げるために魔法陣を展開するが、

「行かせないわよ！」

ヴィータが鉄球を、ティアナとキャロはスフィアを逃げようとしている四人へ追い討ちをかける。

「ストゥラージェスフィア、セット。ファイア！」

それを防ぐようにプライドはスフィアを飛ばす。

放たれた鉄球とスフィアは、お互いの間の空域を覆い尽くす。

そこでお互いの魔法はぶつかり相殺を繰り返し、数を減らしていく。
消し合いを続けた結果、残ったのは黄金のスフィア。
「ゴー」
その合図で残ったスフィアが空を駆ける。
飛んできたスフィアは、横から飛んできた鎖鎌と伸びてきた連結刃で消された。
「ちぃっ！」
「はあぁぁ！」
ソニックムーブで近づいたフェイトの手には、ザンバーフォームのバルディッシュ。
思いっきり振りかぶり、プライドへむけフルスイング。
プライドはプロテクションで受け止めた。
攻撃して一瞬動きを止めたフェイトへ、スロウスが殴りかかる。
「ふっ」
しかし、スロウスの拳はスカッという音が聞こえるくらいキレイに外れた。
さっきまでいた場所にフェイトがいなかった。
正確には自分の位置が離れてしまっていたのだ。
原因は自分に巻き付いている魔力紐にあった。
「スバル！」
その声と共に、スロウスの目の前まで道が伸びてきた。
そこをスバルは駆けてくる。

「リボルバーナックル！！」

オーラの魔力を込めた一撃。
スロウスはそれを右手で受け止め、左手で殴りにいくが当たる寸前で止まった。
腕も魔力紐で縛られていたのだ。しかも縛られているのは左手でだけではない。
スバルの拳を捕まえている右腕に、両足も同じだった。

「うおおぉぉ！」

「ぐっ・・・・」

突然、魔力紐が腐るように消えていく。
拳を受け止められたままで無防備なスバルの腹へ、スロウスの膝蹴りが突き刺さった。

「ごふっ」

「落ちな」

「クラウン・レイス！」

アリスの掌から放たれた直射砲撃。
しかしそれはスロウスのオーラに触れた瞬間、先の魔力紐のように消えてしまった。
いや、腐るようにをつけた方が正解か。
スバルを落とすことを止めて、スロウスはアリスを見る。

「お前と僕は相性が悪いの知ってるだろ。それでもやる？」

「ふんっ、うるさいよ。あんたみたいなニート野郎に勝てないわけがないの！」

「言ってくれるな、捨てられた女のくせ――――」

「黙れぇ！」

硬化させた魔力紐をスロウスの顔面へ伸ばすが、横から現れた鉄槌に遮られた。

「ダメだよぉ、エンヴィー」

「そりゃテメェの行動だ！相手はあたしだろうが！」

ツェアシュテールングスフォルムのグラーフアイゼンを振り上げたヴィータは、グラトニーの頭へふりおろす。

べヘモスで防いだグラトニーは、グラーフアイゼンを押し上げ、

「てやぁ！」

トゲでヴィータを蜂の巣にするために、べヘモスを押し付ける。

防ぐのは間に合わない。

だがヴィータは、グラトニーの後ろから迫ってくる騎士の姿が見えていた。

「紫電一閃！」

雷を纏った刃がグラトニーを襲う。

グラトニーの希少技能『暴食の口』は、純粋な魔力での攻撃のみに

使える技。
紫電一閃のような物理魔法には適応されない。
ではなぜ反応しないのか。
簡単な話だった。オーラがあるのだ。
それで刃を防ぐ。

「残念～」

エリオは足に引っ張られるような感覚を感じ、足元を見ると黒い何かが巻き付いていた。

「これは？」

「あたしよ、坊や」

その声を聞いて、巻き付いているものは鞭型デバイスのアスモデウスと理解した。

＞いい加減に話せ、ババァ！＜

ここにいる全員の頭に一真の声が響く。
エリオの耳にブツンと聞こえると、引っ張られる感覚が消えた。

「ラース！」

＞どうした？帰るんじゃねぇのかよ＜

帰らせようとしないのは一真達であるが、関係ない。
一真はここで彼女達を終わらせるつもりなのだから。血を散らしながら一真はラストへ近づき、

「ふっ！」

神無を左下から右上へと逆袈裟に切り上げる。
ラストはそれを硬化させ防ぐと、槍のように伸ばす。
鞭が狙うは一真の体。
今の一真には更に傷が増えるのはマズイ。
そのため避けようとしたのだが、身体中に激痛が走る。

「があっ！」

「死になさい」

一真に向かったアスモデウスは、彼の体を貫くことはなかった。
間に現れた防御魔法に阻まれたからだ。

「アクセルシューター！」

飛んできた複数の魔力弾が、全方向からラストに襲いかかる。

「くっ・・・・」

アスモデウスをすぐに手元に戻すと、蛇のように動かして全ての魔力弾は消滅させる。
そこへなのははディバインバスターを放つ。

「いただきまぁーすぅ！」

「ダメよ！」

ラストが言うが、それよりも早くグラトニーはなのはのディバインバスターを食べた。が、突然グラトニーに異変が起きた。

「がぁっ・・・・あああああ！！」

苦しみ出したのだ。
原因を知っているのは、さっきグラトニーを止めようとしたラストのみ。
それ以外の誰にもグラトニーが苦しみ出した理由はわからない。

「プライド！」

「はい。来よ、闇の僕。汝らは我が声に従い、我が敵を飲み込め！」

ベリアルからほとばしる光弾が徐々に巨大化していく。

「じゃあね～、お嬢ちゃんたち」

＞マズイ・・・・神無！＜

［・・・・うん］

神無は一瞬躊躇ったがカートリッジロードをした。

「死天・・・・」

「バロムテンペス」

掲げられたベリアルの先の光弾は集まったラスト達を包み込み、更に巨大化を始めた。

「閃破！」

「スターライトブレイカー！」

嫌な予感を感じチャージを終えていたなのはも、同時に集束砲を放つ。

三つの魔法はぶつかり、あたり一面が光で塗りつぶされる。

そして光が消えたとき、ラスト達と《堕人》の群れは消え去っていた。

「あー・・・・無理」

その弱々しい声は全員に聞こえた。

「すまん」

その言葉を最後に一真から魔力のオーラは消え、砂漠へと落ちていく。

『一真（君／さん／神童）！』

砂漠に落ちる前に助けられ、迎えに頼んでいたクロノの次元航行艦によって本局まで運ばれた。

本局で治療し一命は取り止めたが、一週間過ぎようと二週間過ぎようと一真は目を覚まさなかった。

《一真の部屋》

なのは「今回は一真君がお休みです」

神無［さすがに一真でも、あの怪我じゃ出ようとはしないわね］

アリス「というわけで今回は《一真の部屋》ではなくて・・・・」

千歳「名前を変えて、《千歳の独壇場》を始めるよ！」

《千歳の独壇場》

千・ア「「イエーイ！」」

神無［二人とも、帰ってきたときにお仕置きされても知らないわよ］

アリス「大丈夫です。ちゃんと準備してありますから」

なのは「それって、茸？」

アリス「もちろん」

神無［用意周到ね。でも、消されたらどうすんのよ］

千歳「大丈夫♪なんとかなるよ♪」

神無［千歳ちゃんが言うと納得できるわ］

なのは「今日、やっぱり物足りないね。何でだろ？」

千歳「弄られ役がいないから、じゃないかな？」

なのは「弄られ役？」

神・ア「［一真］」

なのは「あぁ」

神無［ホント、馴染んだわねなのはも。一真って言っただけで納得するんだから］

なのは「にゃはははは」

千歳「じゃあお返事コーナー行ってみよう♪」

紅龍さんへ

アリス「はい、千歳」

千歳「んなもん、このあたしに効くかぁ！」

なのは「すごい・・・・一振りで全部消しちゃった」

神無［全部一真宛なんだけどね］

千歳「零。一真が神だってのは間違いだ。正確には神はあたしだ！」

神・な・ア（（（雑魚は訂正しないんだ・・・・））））

月光閃火さんへ

なのは「イメージＣＶの投稿ありがとうございます」

アリス「私のＣＶがどっちになるかはお楽しみに」

千歳「でもどうして作者さんは、こんの募集したのかな？」

神無［さぁ？でも一話目から誰をイメージＣＶにしたらいいか悩んでたみたいよ］

アリス「それで結局自分じゃダメだったと・・・・」

神無［そういうことね］

灰色の野良猫さんへ

アリス「リイン、ナイスショットだよ～」

千歳「私もソラ君と会ってみたいなぁ～」

神無［そういえば、言ったのも来たのも千歳ちゃんがいないときだったからね］

なのは「その時まで楽しみにしておこうよ、千歳ちゃん」

千歳「うん！」

二階堂さんへ

アリス「確かにもとの性格の千歳とはやりにくいね」

千歳「ほぇ？」

なのは「神無ちゃんも驚いた？一真君のあの発言？」

神無［驚いたっていうか、呆れたわよ。あんなこと言うなんて思ってなかったから。それよりも、言われた千歳ちゃんの感想は？］

千歳「・・・・」

アリス「ノーコメントみたいです」

ＴＯＵＤＡさんへ

神無［まぁ変態でいいんじゃない］

アリス「いいんですか、そうあっさり言って」

神無［どうかしら？］

千歳「わぁーい招待券だ♪」

なのは「隆浩君。“お話”しようか？」

神無［なのは、落ち着いて］

なのは「うん、それ無理。スターライトブレイカー！」

アリス「隆浩がどうなるかは無視して、私も行っていい？一真の女装シーンみたいから」

千歳「いいよ♪」

アリス「ありがとう♪」

Ｎａｋｉさんへ

千歳「楽しかったよね」

神無［私は一真と戦ってからノーコメント］

アリス「メカゴ●ラ×１０１でも暴走中の一真を止めるのは不可能ってわかったわね。それを止めるラディも凄いけど」

なのは「シャマル先生の料理どうだった？」

神無［なかったわよ。一真がやられて、Ｎａｋｉさんが千歳にやられたからね］

千歳「イェイ♪」

なのは「結局そうなっちゃったんだ」

アリス「まぁ、やり過ぎってのがあるけどね」

U．Tさんへ

千歳「貴様が生きたい？無理だな。あたしがいるかぎり」

なのは「ときどき無茶苦茶だよね、千歳ちゃんって」

神無［一応“神”だからね。それにしても暗黒物質で死ぬのね］

アリス「あれの毒性ははかりしれないからね」

千歳「食べてみるか？」

な・ア「「結構です」」

シグマさんへ

千歳「何でニヤニヤしてるの？」

神無［多分これもあの問題発言が原因よね］

アリス「多分って言うか絶対それです」

なのは「でも言われた時ってどんな気持ちなんだろ？」

アリス「じゃあもう一回感想を」

千歳「／／／／／／」

神無［今回もノーコメントみたいね］

アリス「でも嬉しかったんだよね」

なのは「あんまりしつこく聞くと・・・・」

アリス「ほらほらぁ、言っちゃいなよ～」

ドゴォ

千歳「殺すよ？」

神無［《罪》解放状態でそれはマズイから、押さえなさい］

千歳「・・・・うん」

なのは「そ、それじゃ犠牲者が増えないうちに次回予告！」

の前に作者登場♪

イメージＣＶ募集の次はアンケートです。

アンケート内容は神童一真、神童神無、楠木千歳、桜ノ宮アリス、ラストの五人が高校生だったらです。

教師とかでも構いませんよ♪

こんな学生だと思うっていうのを簡単でも詳しくでもいいので、メ

ッセージ、感想でよろしくお願いします。

アンケートは何度でも構いません。送ってくださったものはランキングなどにしないで、全て第一部終了後に公開します。

それでは♪

千歳「・・・・あほだな」

アリス「うん。それじゃ改めて次回予告！」

神無［あの戦いから一ヶ月。一真は一向に目を覚まさない］

千歳「そこへユーノさんがやってきて話してくれたのは、《罪人》や《昇華》のこと」

神無［私達の運命はここから転がり始める］

なのは「次回、魔法少女リリカルなのは～七つの大罪～第一部最終話」

一同『【始まる物語】』

一同『次回へ、スタンバイレディ！』

始まる物語

あれから一ヶ月。
一真は本局の医療施設で眠り続けている。
目を覚ます気配は一向にない。

「千歳ちゃんは？」

「まだ部屋から出てこないって」

「そっかぁ・・・・」

機動六課組は、ミッドチルダに帰っていた。
あれからラスト達が現れるということはない。
それよりも、フェイト達が心配しているのは一真と千歳。そしてなのはだった。
理由はそれぞれ。
一真は言わなくてもいいので略。
千歳は、一真が意識不明の責任をすべて抱え込んでしまって、アリスの家の一室に閉じ籠ってしまっている。
アリスが何を言ってもダメな状態だ。
そしてなのははというと、

「ただいま～」

「お帰り、なのはちゃん」
「どうだった？」

「今日も異常なしだったよ」

あの戦いの時、なのはに起きた《昇華》という現象。
アリスも知らないため、週に一度定期検診をうけているというわけだ。

「何やったんやろな、あれ？」

「そうだよね。あれ以来私も変化なしだし・・・・」

「オーラはあったから、私達に近いんだと思うけど」

思うが、オーラの色が違っていた。
自分達のは漆黒のオーラ。そしてなのはの物は、オレンジ色だった。

「そういえば、その解放状態の維持時間は延びた？」

「ちょっとずつだけど、確実に延びてるよ。アリスに頼んで、訓練のメニューを送ってもらってるからね」

「そっか。たまには会いにいかんとな」

「そうだね」

なのは頷くと窓の外の空を見上げた。

場所は変わって地球のアリス家。

「千歳・・・・一真のお見舞いこうよ」

「・・・・・」

千歳がいるのは確かなのだが、中から反応はない。

「・・・・ごはん、ここに置いておくからね」

やはり反応はない。

アリスは部屋のドアの前に料理を置いて、その場から離れた。

（早く目を覚ましてよ、一真。私も寂しいんだから・・・・）

この一ヶ月、アリスはまともに寝ていない。しかも、食事もあまり取れていない。

千歳と一真のことが気になって、こうなってしまったのだ。

「ねぇ、レヴィアタン。どうしたらいいと思う？」

［おそらく彼が目を覚まさないと・・・・］

「だよね・・・・はぁ」

アリスの溜め息は、静かな家にはよく響いた。

更に場所は変わりに本局。

［たくっ。いつまで寝てんのかしらね、このひねくれた弟は・・・・」

一真が眠っているベッドの隣に置いてある神無が、愚痴るようにそう言う。

しかし一真は目を覚まさない。

「入るわね」

その声と共に、病室に一人の老人が入ってきた。

［あ、ミゼットさん」

入ってきたのは三提督の一人、ミゼット・クローベルだった。

「久し振りね、神無ちゃん」

［お久し振りです」

ミゼットはベッドのそばの椅子に座り、眠っている一真を見つめる。

［来てもらったところ悪いですが、一真はまだですよ」

「そうみたいね。本当に寝るのが好きね、この子は」

［はい。困ってます」

ミゼットはふふふと笑い、ゆっくりと立ち上がる。

「そろそろ行くわね」

「ありがとうございました」

「気にしないで。あ、そうだ。近いうちにあの子が――――」

「静かに、寝させろ、ババァ」

久し振りに聞く声が、喋っていたミゼットの声を遮った。

「一真さん、まだ目を覚まさないのかな？」

「そうね・・・・」

スバルとティアナは、デスクワークをしながら会話をしていた。

「あれだけの傷で、体に負担のかかる希少技能使ったんだから長引くのは仕方ないけど・・・確かに心配ね」

二人は、身体中から血を流しながら戦う一真の姿を思い出していた。
そして、力尽きて落下していく姿も・・・・
それ以来千歳が塞ぎ込んでしまっているのも、二人は知っている。

「ま、一真さんが早く目を覚ましてくれることを祈らないとね」

「そうだね」

そんな会話をしていると、放送が流れる。

《スバル・ナカジマ一等陸士、ティアナ・ランスター執務官補佐、エリオ・モンディアル二等陸士、キャロ・ル・ルシエ二等陸士。ブリーフィングルームに集まってください》

「どうしたのかしら？」

「さぁ？」

ブリーフィングルームには隊長陣がすでに集まっていた。

「どうしたんですか？」

FWメンバーを代表してティアナが質問する。

「今から《罪》となのはちゃんのことを、これから説明してもらうんよ」

「誰にですか？」

続けて質問をすると、ウインドウが現れた。

そこに写っていたのは、なのは達の幼なじみで無限書庫司書長、ユーノ・スクライア。

ちなみに本作品、初登場である。

「ユーノさん!?」

〔やぁ。久し振り〕

「少し前に、ユーノ君に頼んでたんよ。それで、どやった?」

〔結果を言えば、簡単にしか調べられなかった。詳しく書いてある物がすなかったんだ。だからそんなに期待しないでほしい〕

そう断り、ユーノの話を続ける。

〔まずは・・・あまり情報がない《昇華》からだね。これは《堕落》とは逆の力が作用してるみたいなんだよ〕

「逆の力?それは《罪》とは違うということか?」

〔うん。《罪》と対となる《美徳》、えっと《信仰》、《節制》、《正義》、《希望》、《分別》、《忍耐》、《慈悲》の七つのどれかを持っていると《昇華》の現象が起こるみたい〕

「私が何の《美徳》を持っているかは・・・・」

〔ごめん。そこまでは僕にも。《昇華》に関してはあまり見つからなくて、ここまでかな。それと《罪》に関してもだけど、みんなが知ってる以上のことは調べられなかった〕

ユーノが画面の向こうで、ごめんと頭を下げた。

「いいよ、ユーノ。忙しいのにそこまで調べてくれたんだから」

「そうだぜ。頭を下げられても――――」

〔メガネ野郎！いるかぁ！？〕

突然画面の向こうで叫び声が聞こえた。

その声は、ここにいる誰もが聞いたことのある声だった。

〔僕はメガネじゃなくて、ユーノ！って、何で君が？〕

〔るせぇ！今から地球に俺を転移しろ！〕

画面に現れた声の主の顔。

それは、本来ならまだ寝ているはずの神童一真だった。

「一真（君／さん／神童）！？」

それは一真が目を覚ました時まで遡る。

「静かに、寝させろ、ババァ」

「［一真！］」

おそらく三提督の一人であるミゼットを、堂々とババァ呼ばわりできるのは管理局で一真だけだろう。

「人が気持ちよく寝てりゃあ、耳元でピーチクパーチクと・・・・」

一真はゆっくりと腕を上げ、酸素マスクを外した。

［み、ミゼットさん。先生を］

「わかったわ」

頼まれたミゼットは、先生を呼びに行くために部屋を出た。
それを確認した一真は、体についているチューブなどを全部外してしまった。

［一真！］

「あれから何日だ？」

［一ヶ月よ］

「ちっ、今度は１５０食食い損ねたか・・・・」

やはり五食計算。
一日も五食も食べてどうするのだろうか。

「今から、ユーノを探す」

［どうしてまた？］

一真は自分の制服に着替えながら、両手両足その他に体がまともに動くかどうか確認する。

結果問題ないと判断した一真は、着替えをさっさと続ける。

「勘だ、勘」

「勘？」

「あぁ。何となく地球に行かないとって気がしてな」

「何となくって・・・・」

着替え終えた一真は神無を手に取ると、部屋を出た。が、目の前にはミゼットとミゼットが呼んできた医者がいた。

「ちっ・・・・」

「君！何を勝手ごっ・・・・」

何かをされた医者は崩れ落ちる。
何かというか一真が、医者の腹を殴って気絶させたのだが。

「一真！」

「あー、すまん。ババァ、何とかしておいてくれ」

そう言い残し一真は走り出した。
向かうはユーノがいるであろう無限書庫。
そして無限書庫に着いた一真は、中に入るなり大きく吸い込むと、

「メガネ野郎！いるかぁ！？」

部屋一杯に響くような大声で叫んだのだ。
いい子も悪い子も、このような場所で叫ぶのはダメだから真似しないように。

「僕はメガネじゃなくて、ユーノ！って、何で君が？」

（よし、いた）

「るせぇ！今から地球に俺を転移しろ！」

ユーノに近づいたところで一真が画面に映り、

〔一真（君／さん／神童）！？〕

と、ここまで本局で起きた出来事である。

「何だ、お前らか・・・・」

さらっと見て、それだけ言う。

一真らしいのだが、他に言葉はないのだろうかと思う。

〔意識不明で本局で眠ってるんじゃ・・・・〕

「さっき起きたところだ」

エリオの言葉に表情変えずに返す一真。

「で、今から俺を地球の海鳴市に送れ」

「だからどうしてさ！？そもそも君はまだ・・・・って何、その笑みは？」

「いいのか？あれを、あそこのあいつに言っても」

一真の笑みはあのドSの笑み。
間近で見たユーノだけではなく、画面越しで見たなのは達も寒気を覚えたとか。

「わ、わかったよ。それじゃ」

「いたぞ！捕まえろ！」

声がした方には何人かの医者。
それを見てユーノは気がついた。一真が脱走してきたのだと。

「ちっ、早くしろ！しねぇと、大声で叫ぶぞ！」

「う、うん！」

一真の足下に、緑のミッド式の魔方陣が出現する。

「転送！」

一真が転送されてしまい、医者達はユーノに狙いを定めた。
もちろん責任転嫁のためである。

「君！何で彼を・・・・」

「何てことを・・・・」

このときユーノは、一真の無茶な頼みはもう聞かないようにしよう

と心に刻んだのであった。

「・・・・」

全員が突然のことにあんぐり。
完全に言葉を失ってしまっていた。

「一真さんらしいですよね」

キャロの一言に全員が同意。
そして過去の一真を知っているなのはは、

「昔と変わってないね」

もちろんそれに隊長陣はうなずく。

「昔とって、一真さんって何をしたんですか？」

「えっとね――――」

スバルに聞かれたなのは達は言っていいものかと悩んだが、興味津々のＦＷ陣に押され過去の一真のことを話した。
ちなみにそれを聞いたスバル達は予想以上の一真の武勇伝（？）に、また言葉を失ったとか。

「ふぅ・・・・・」

［で、来たのはいいけどどうすんのよ？」

「・・・・・・・・」

そう言われて一真は黙ってしまった。

「考えてなかった・・・ま、アリスの家に行くか」

勘で来なければならないと思っていたのだが、何をするためにきたのか一真にはこれからの予定がなかった。
そのため、こっちに来たときの宿であるアリスの家に向かっていた。

＞任務の時もそうだけど、何であんたは勘で動こうとすんの？少しは考えて行動しなさいよ＜

＞しょっちゅう勘で動いてるわけじゃねぇよ＜

＞でも勘で指示出したりしてるわよね＜

＞まぁな＜

武装隊で一真は階級が高いこともあり、隊長になることが多い。
その時、一真はよく勘で戦力配置をするのだが、いまのところ負けなし。

＞思い立ったが吉日って言うだろ？＜

＞あんたの場合は、毎日が吉日でしょうが＜

＞るせぇよ＜

アリスの家に着いた一真は、何も言わず上がり込む。
完全に不法侵入だ。
しかし一真としてはいつものことらしく、冷蔵庫の物色を始めた。
これも真似をしないように。

［やってることは泥棒よ］

「アリスの家だから問題なし」

［通報してやりたいわ］

一応姉と弟の会話だが、そう聞こえない。

「一真？」

「お、アリスか。来てるぞ」

一真は、アリスの家にあったコーラと菓子を食べながら言う。
自分の家と勘違いしている節がある。

「一真・・・一真ぁ・・・・」

一真の名前を呼びながら泣き始めるアリス。

「ちょ、ちょっと待て！泣くな！」

「・・・泣くなって無理でしょ」

神無の言う通りである。

一真だから泣くなとしか言えないのだが。

「泣くなって言われたら・・・無理よぉ」

ボロボロと涙をこぼし続ける。

しばらくして落ち着いたアリスは、千歳のことを話し始めた。

「千歳ね、一真があんなことになってたのは自分のせいだって、部屋に閉じ籠ってるの」

「あの千歳が？」

「うん。今、二階にいるよ」

一真は驚いていた。

千歳がそこまでなっているとは、まったく思っていなかったのだ。

「勘って、これじゃない？」

「かもな」

「勘って、何のこと？」

「いや。目を覚ましたときにな、何となくこっちに来た方がいいなぁって気になってな。医者から逃げてきたわけだ」

「バカ？」

「ヘビ出すぞ」

「ごめんなさい」

泣き崩れたアリスと話していた一真は立ち上がった。
行き先はもちろん千歳のいる部屋。
その部屋の前に着いた一真は、

ドンドンドンドン

壊すんじゃないかと思うような力でドアを叩いた。

「くぉら、超絶甘党クソロリ娘！何立て籠ってやがる！さっさと開けろ！」

無茶苦茶なことを言う一真。
だが、これにここ一ヶ月反応がなかった部屋の中から、

「一、真・・・・？」

「他に誰がいやがる。どいつもこいつも人の名前を疑問形で呼びやがって。次に疑問形で呼んだら、そいつをボコボコにしてやるかな」

何とも恐ろしいことを言う一真だが、疑問形で呼ばれるのは無理もない。
一ヶ月も意識不明で眠っていた人物が、突然現れるのだ。
疑問形以外でどう呼べと。

「つか、んなことはどうでもいいから、さっさとここを開けろ！」

「嫌だ！」

「んだと？」

「嫌だって言ったの！」

それは一真が久しぶりに聞いた、千歳の拒絶の言葉であった。

「そうか・・・じゃあ、こっちも考えがある」

「何するの？」

アリスが聞くと、一真はとてつもなく黒い笑みを浮かべた。

本日二度目の黒い笑みである。

「突貫」

「は？」

一真の足下にはベルカ式の魔方陣。

「まさか・・・」

そのまさかである。

一真は部屋の扉壊す気なのだ。

それも魔法を使って。

「やったら、茸突っ込むよ」

「・・・・・・・・わかった」

アリスが止めていなければ、確実に一真は壊しにかかっていただろう。

「しょうがねぇ、このまま話すか。なぁ、千歳。どうしてお前が責任を感じてんだよ？」

「だって一真に大怪我させちゃったの私なんだよ」

「させたのはな」

きっぱりと言い捨てる一真。

だが、一真の言葉にはまだ続きがある。

「テメェが容赦なく、殺傷設定で人の体を抉ってくれやがったのが始まりな訳だ。だがな、一番の原因はあの状態で俺の希少技能をつかったこと。俺の希少技能はな、体に負担をかける。それも段階を上げれば上げるほど。それの三段階目をずっと使ってみろ。止まる血も止まらなくなるっての」

一真がそこまで言ったところで、ドアがゆっくりと開いた。

そこにはもちろん千歳がたっている。下を向いているため、表情は見えない。

「ん？どうした？」

千歳は顔を上げる。

表情はとてつもない笑顔。
状況を知らない人が見れば、普通の笑顔に見えたかも知れない。
たが、一真やアリスにはそうは見えなかった。まず、目が笑ってないのだから。

「あー、千歳さん？」

「千歳？」

「死ね」

後ろに回していた手には、棍棒に姿を変えたらマモンが握られていた。
千歳はそれを躊躇なく一真へ向けドカドカ。
止めることなくドカドカ。
「ちょ、待て、死ぬ、死ぬから！」

「死ね！死ね！死ね・・死ね・・・死ね・・・・」

一真を殴り続ける千歳の目には涙がたまっていた。

「あー、心配、かけたな」

「うわあああああ！」

この一ヶ月、溜めに溜めた涙が今決壊した。
千歳はずっとがまんしていたのだ。
一真に抱きつき、千歳はしばらく泣き続けた。一真も何も言わず、
千歳の頭を撫で続けた。

さて場所は更に変わり、本局訓練所。

「えっと、こんな感じ、かな？」

と、メイド服に身を包んだ少女が目の前の二人に尋ねた。

「まぁよい。完成とは言わぬが、いいのではないか？」

と、西陣織に身を包み腰まである綺麗な黒髪をした女性が、

「そうなの。ダメダメなのは変わらないの。でもダメダメしては上出来なの」

と千歳よりも小さな女の子が、こくこくと首をふりながら言う。

「ひどっ」

「ひどくないの。現実は厳しいの」

少女の前に立つ二人の姿は小さくなり、リインやアギトと変わらない大きさになる。

二人はユニゾンデバイスだったらしい。

「それより準備はよいのか？明日であろう？お前の兄のところに行くのは？」

「そうなんですけど、お兄ちゃんまだ・・・・」

「そうだったの。しかし、兄がおらずとも大丈夫だよ。ぬしなら」

「はい！」

少女は大きく返事をすると、自分の部屋へ向かった。

こうして彼らの物語は本当の始まりを迎えた。

第一部完

第二部へ・・・・

《一真の部屋》

一真「たった一話で復活だな。で、お前ら。前回勝手に、いろいろとやったらしいな？」

千歳「えっと、その・・・・」

アリス「それは・・・・」

一真「お仕置きだ♪」

千・ア「「うにゃあああああ！」」

神無［あっちは無視して、なのはちゃん。ゲストの紹介、お願いするわ］

なのは「はい。では、今回のゲストは二度目の登場、『魔法少年の物語』よりソラ・フォード君と、ソラ君のユニゾンデバイスのリイン・アインスです」

ソラ「お久しぶりです」

リイン「初めましてだな。創造主ソラのユニゾンデバイスのリイン・アインスだ」

ソラ「あの、神無さん。一真さん達は？」

神無［あそこ］

千歳「ダメダメダメ！そはぁーーー！」

アリス「りゃめ、そこは、ひぅっ・・・・」

リイン「あれは何だ？」

なのは「前回、勝手にコーナーかえちゃったからお仕置きだって」

リイン「しかし、いいのか？女性に対してあれは」

神無［あの三人だから許されることね。一真が他の、例えばなのはとかに同じようなことをしたら・・・・］

なのは「殺す、よ♪」

一真「ふぅ、すっきり。お、ソラ久しぶりだな」

ソラ「はい。お久しぶりです、一真さん」

アリス「ソーラーくぅーん♪」

だきっ

ソラ「あ、アリスさん。恥ずかしいです・・・」

アリス「気にしない気にしない♪」

一真「阿呆が・・・」

千歳「ソラ君とリインさん、だよね。初めまして。楠木千歳です」

ソラ「あ、はい。こちらこそ初めまして。ソラ・フォードです」

リイン「リイン・アインスだ。よろしく」

神無「自己紹介も終わったところで、感想のお返事コーナーいっていい？」

アリス「いいよ♪」

なのは「アリスちゃんは離れようね。ソラ君、顔が真っ赤だから」

アリス「はぁ～い」

灰色の野良猫さんへ

ソラ「一真さん大丈夫なんですか？」

一真「あぁ、一ヶ月も寝てたからな。そもそも骨折してねぇし」

千歳「私が悪いんだもん・・・・」

アリス「あーあ、また鬱モードに」

神無［どうすんのよ一真］

一真「いや、それはな・・・・」

リイン「千歳殿。本来一真殿のために持ってきたケーキだが、食べるか？」

千歳「うん、食べる♪」

なのは「よかった、元気になって。一真君、もうダメだよ」

一真「あ、ああ・・・・（悪いの俺ですか？）」

月光閃火さんへ

なのは「今回もありがとうございます」

一真「しっかし、あんなアンケートしてどうするつもりなんだ？」

神無「さぁ？何となくおもいついたらしいわよ」

一真「本当に適度だな」

ソラ「高校生ってなんですか？」

千歳「おっきくなったら行く学校のことだよ」

リイン「創造主ソラにはまだ先のことですね」

ＴＯＵＤＡさんへ

なのは「ＴＯＵＤＡさん、“お話”しようか・・・・スターライトブレイカー！」

一真「誰が死んだか、このヘタレ狐ぇ！」

ソラ「ダメですよ、隆浩さん。そんなこと言っちゃ。一真さんもです！」

一真「あ、あぁ・・・・」

アリス「だよね～。絶対ダメだよ」

一真「このヤロウ・・・・」

アリス「千歳殿。そのうさビットとは面白いのか？」
千歳「おもしろいよ～。プリキ●アよりもおもしろいよ♪」
神無（なのはちゃんの努力もあるのよね・・・・）

Ｎａｋｉさんへ

一真「プライド含め、ラスト達はしばらく出てこないそうだ。次に出てくるときまで楽しみしててくれ。そして、あの危険な物体。オール消去ぉぉぉぉ！！ぜぇぜぇぜぇ・・・・」
千歳「前も言ったけどうるさいよ♪」
一真「《罪》解放で殴るなぁぁぁぁ！！」
ソラ「僕も気になりました。《昇華》って何ですか？」
なのは「私もよく分からないの。あれから何も起きてないから」
神無［作者いわくネタバレだからここでは詳しいことは言えないって］
リイン「ますます気になるな。先を早く読みたいものだ」

Ｕ．Ｔさんへ

一真「では貴様の望み通り、死天閃ごふぅ！」

千歳「だからうるさいよ、一真♪」

一真「本日二度目ぇぇぇ！！」

ソラ「大丈夫でしょうか、一真さん・・・・」

なのは「大丈夫だよ。あれはお約束、だからね」

ソラ「お約束ですか」

アリス「でも、一真とクラウドってどうしてあんなにやりあってるの？」

神無［一真が先にしかけて、次にクラウドがやり返して、それからこんな感じ］

リイン「なるほど、ライバルか」

な・神・ア「「［それちがう］」」

一真「ソラ、これを・・・・頼む・・・・」

ソラ「あ、はい。えっとアンケートですが、８日の０時をもって締め切るらしいので、よろしくおねがいします。とのことです」

アリス「そして次回は第二部ではなく、《一真の部屋特大号》」

一真「感想コーナーはもちろん、募集したらイメージＣＶやアンケートの結果を発表するぜ」

千歳「楽しみにしててね～」

神無「それじゃあ・・・・」

一同『次回へ、スタンバイレディ！』

始まる物語（後書き）

灰色の野良猫さん、出演依頼ありがとうございました。

第一部は終わりましたが、第二部もよろしくおねがいします。

それではまた。

《一真の部屋・特大号》

一真「一真の部屋～」

神無［特］

千歳「大♪」

アリス「号！」

なのは「第一部終了記念で始まりました《一真の部屋・特大号》。今回は後書きコーナーじゃなくて、一話丸々使って《一真の部屋》をやっていこうと思います」

一真「・・・・ダルッ！」

神無［記念でやろうって言うのにそれはないでしょ］

一真「知るかぁ！もう少しでラスボスってところで呼び出され、何かと思えば《一真の部屋特大号》だぁ？ふざけんなぁ！」

な・神・ア「「［あっそ］」」

千歳「まだかな～」

なのは「どうしたの、千歳ちゃん？」

千歳「今日、注文したＤＶＤ－ＢＯＸが届くんだよ」

なのは「なんか嫌な予感が・・・・」

？「宅配便でーす」

千歳「来た！」

一真「今の声、どっかで聞いたな・・・・」

神無［私も聞いたことが・・・・あ、帰ってきたって何で狐？］

狐「千歳様、それでよろしかったですか？」

千歳「うん♪ありがとね、隆浩君」

アリス「それ、隆浩！？」

隆浩（狐）「ウルサイ！おいらだって人間の姿で来たかったわ！」

神無［というわけで今回のゲスト一組目は『なのはＳＳ・Ｆｒｅｅｄｏｍ』より、安部隆浩です］

なのは「ねぇ、千歳ちゃん。そのＤＶＤ－ＢＯＸのパッケージ見せて？」

千歳「はい」

一同『・・・・・・・』

なのは「隆浩君」

隆浩（狐）「な、何だよ？」

なのは「死ね♪零距離バスター♪」

隆浩（狐）「笑顔でやらないでぇぇぇぇ！！」

千歳「何でなのはちゃん怒ってるの？」

一真「そのパッケージ、うさビットの姿してるのなのはとフェイトだろ？」

アリス「確かに。そういえば神無さん。ゲストが一組目って言ってましたけど、他にも？」

神無［もう一組ね。そろそろ来る頃なんだけど・・・・］

？「うわぁぁぁぁぁぁ！！」

一真「またか・・・・」

アリス「まただね・・・・」

神無［またね・・・・］

ドォォォォン

千華「ひさしぶり～」

旭「またこれかよ・・・・」

神無「二組目は『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　Ｃａｌｉｖｅｒ&ａｍｐ;Ｐｈａｎｔｏｍ』より神藤旭と赤羽千華よ」

千歳「テメェは毎度のように騒がしい登場しやがって・・・・」

旭「ち、千歳さん？」

千歳「壊れろ！」

旭「理不尽だぁぁぁぁぁぁ！！」

一真「なぁ千華」

千華「何、一真さん？」

一真「何であいつは空から？」

千華「来る途中で、ヒトコプター♪」

一・神・ア「「「納得」」」

千・な「「すっきり♪」」

アリス「死屍累々だ・・・・」

千華「旭が作った一部終了記念の全長二メートルのケーキあるけど、食べる？」

千歳「食べる～♪」

神無［この娘なら、一人で全部食べそうね・・・・］

なのは「それじゃ、ケーキを食べながら新しい一真君と神無ちゃんの設定に加え、千歳ちゃんにアリスちゃんの設定を発表します。そこで最初に言っておくことが・・・・」

アリス「どうしたの？」

なのは「一真君の魔導師ランクを少し変えるって作者さんが」

一真「どうして？」

なのは「まぁそれは一真君の設定を見てから。では、どうぞ」

名前／神童（シンドウ）一真（カズマ）
年齢／２１歳
利き腕／左
出身／第９７管理外世界（現地惑星名称「地球」）極東地区　日本・海鳴市
所属／時空管理局本局武装隊
役職・階級／武装隊所属空戦魔導師・一等空佐
魔法術式／近代ベルカ式。《罪》解放時↓六芒星の魔法陣（正式名称無し）
魔導師ランク／総合Ｓ＋ランク
稀少技能／永久凍土（コキュートス）
稀少技能の説明／強化系のの稀少技能で、キーとなる言葉を発すると魔力と身体能力が上昇する。キーとなる言葉は全部で四つあり、四段階上昇する。二段階でなのはのブラスターモードと同等の負担

がかかるため、使用頻度はすくない。
罪／《憤怒》
好き／睡眠、ゲーム、マンガ、辛い食べ物、千歳
嫌い／睡眠を邪魔する存在、茸類、茄子
デバイス／神無（カンナ）

備考
なのは達とは武装隊時代に同じ部隊にいたため面識あり。
性格はめんどくさがりで仕事もサボりたいと思っている。だが、後で色々と言われるのが面倒なのでやることはやる。
寝ることが好きなので暇さえあれば寝ているが、邪魔されるとマジギレする。
ＪＳ事件後、機動六課に行った時にヴィヴィオになつかれ、以来『パパ』と呼ばれている。
五歳の頃、ラストに姉・神童神無を殺されており、三年間復讐のためラスト達と共にラースという名前で行動していた。
しかし、ラストが姉を殺したと知り、アリスと脱走しミゼットに育てられる。
それ以来、ラスト達を殺すことが最大の目的。
小さな頃からミゼットに育てられたためか、ミゼットに対して「ババア」。そしてよく会っていたラルゴとレオーネに対しては「ジジイ」と呼んでいる。
デバイスの神無とは姉弟の関係（詳しくは神無の設定にて）で、それを知っているのは六課のメンバー、千歳、アリス、三提督、ラスト一向。
幼馴染みの千歳を甘党ロリ娘と呼んでいるが、他の女性と接するときと微妙に態度が違う。が、本人はまったく認めてはいない。
ドＳで、スイッチが入ると発言、行動共に危ない。
一応、これだけ聞いていると何でも出来る完璧超人のようだが、茸と茄子。とくに茸が嫌いで形、匂い、更には歌だけで絶叫、発狂、

気絶。食べた日には病院送りになる。

なのは「一真君の魔導師ランクをＳＳＳからＳ＋に変更した理由は、《罪》解放だけでも測定不能で更に稀少技能で上昇するのに基本でＳＳＳランクは高すぎるだろうと。ネタバレになるけど、第二部では更に落とすために一真君にリミッターをかけるって」

千華「それでも《罪》解放したら意味ないわよね」

アリス「うんうん」

きのこ～このこ♪元気のこ～♪エリン～ギ、マイタケ、ブナシメジ♪

一真「ぎゃあああああ！歌うなぁぁぁぁぁ！耳が、耳が腐るぅぅぅぅ！」

バタッ

隆浩「うっしゃあ！死んだぜ！」

旭「歌でこれって・・・・」

アリス「気にしたら負けだよ。って、隆浩もとに戻ったんだ」

隆浩「狐じゃ不便だからな」

なのは「それじゃ次は神無ちゃんだね」

名前／神無（本名：神童神無）
享年／１８歳
正式名称／サタン
待機モード／灰色の結晶の付いたブレスレット

備考
デバイス面／片刃大剣型アームドデバイス。
耐久力は高く結構な重さがあるが、一真は片手で振り回す。形態はフルドライブを含め４つある。
神無／１８歳の時にラストに殺され命を落としている。
しかし三年後の一真の誕生日にラストの魔術により、サタンに定着させられそれ以来サタンの人格として過ごしてきた。
一真と言い争いになることは多いが、姉として結構心配している。
なのは達が過去を知ってから呼び名が変わったが、「神無さん」と呼ばれたり敬語を使われたりしない限りはどうでもよいと思っている。
そのため、一真が自分のことを呼び捨てにするのも気にしてはいない。
ちなみにアリスだけ「神無さん」と呼び、敬語を使っているが何も言わないのは何度も言ったが止めなかったため諦めただけ。

形態説明
ストライクモード
基本形態。大抵はこの形態で戦闘に参加している。
大きさは斬月程度。
振り回しやすさと重さのバランスが一番よい。

ライズモード
ストライクモードより一回り小さく、振り回しやすいが軽くなっているため力で攻めにくい。

振り回しやすいため、連続攻撃系の蒼之太刀は大抵この形態で使用。

ブレイズモード
ストライクモードの刃を魔力刃で覆い、一回り大きくなっている。
振り回しにくいが重さはあるため、力押しにはもってこいの形態。

フルドライブ
神道・神無
形は日本刀となり、原型は残っていない。
振り回しやすさはライズモードよりも上で、重さはブレイズモードより上。

神無［以上が新しい私の設定よ］

アリス「斬月・・・だよね」

千歳「でも日本刀っていいよね～」

隆浩「ち、千歳様？」

千華「目がヤバイことになってるわよ」

千歳「えへ、へへへへ・・・・」

なのは「つ、次はそんな千歳ちゃんの設定です。どうぞ」

名前／楠木千歳
年齢／２１歳
利き腕／左
出身／第９７管理外世界（現地惑星名称「地球」）極東地区　日本・海鳴市
所属／無し
役職・階級／無し
魔法術式／六芒星の魔法陣
魔導師ランク／今のところ不明
罪／《強欲》
好き／甘いもの、可愛いもの、一真、アリス、神無、ぬいぐるみ、リンゴジュース
嫌い／辛いもの、苦いもの（ピーマン等）、幽霊（通常時のみ）
デバイス／マモン

備考
一真の幼馴染みで２１歳なのだが、身長はヴィータよりほんの少し上。某名探偵少年のように「体は子供、中身は大人」ではなく「体は子供、中身も子供」である。
いつもは子供のような性格で、身体能力なども子供のそれとかわらない。
しかし剣、槍、棍棒、籠手、具足を装備すると性格が変わり身体能力だけは一真以上となる。通称バトルモード。ちなみに《罪》解放状態であれば性格のベースは通常時だが、そこにバトルモードの残忍性（？）と身体能力が加わる。
武術、剣術、槍術、棒術は達人の域だが、それはバトルモードと《罪》解放状態のみしか意味のないスキル。
一真の剣術、武術の師匠であるため技術では一真よりも上。
日本刀が好きなのは先の会話でも分かる通りで、性格とこの日本刀好きはとある理由があるのだが、それは第二部で出てくるのでここ

では割愛させていただく。
アリスに教えてもらっているため料理は出来るのだが三回に一度に失敗し、その時には必ず暗黒物質（ダークマター）が出来上がる。
一真のことは好きなのだが、本人の中ではそれが「ｌｏｖｅ」なのか「ｌｉｋｅ」なのかよく分かっていない。だが、気になっているのは確か。
アリスによれば、千歳は一真の正妻らしい。

名前／マモン
待機モード／ペンダント

備考
無定形デバイスなので、レイジングハート等のように決まった形はなく使用者の思ったように形を変えることができる。
耐久力なども本物よりも強くすることは可能。
千歳は大抵、日本刀を基本としている。

千華「で、旭。《罪》解放状態の千歳さんに痛めつけられた感想は？」

旭「もう嫌だ」

千華「え、まだやられたい？千歳さん、もっとしてって」

千歳「それじゃあリクエストに答えて。マモン♪」

旭「え、ちょ、ちょっと！」

一真「千歳、止めてやれ。さっきもやったろ？」

千歳「じゃあ一真だね♪」

一真「は？」

千歳「えいっ♪」

一真「ぎゃあああああ！」

隆浩「いい気味だ一真。だれも千歳様に逆らえないんだからな！」

アリス「あんたが威張ることじゃないよね・・・・」

隆浩「いいんだよ。そんなこと」

千歳「次は隆浩君だからね♪」

隆浩「え？」

なのは「次は・・・・」

アリス「私～。それじゃあ、私の設定にレッツゴー♪」

名前／桜ノ宮アリス
年齢／２１歳

利き腕／右
出身／第９７管理外世界（現地惑星名称「地球」）
所属／なし
役職・階級／なし
魔法術式／六芒星の魔法陣
魔導師ランク／なし
罪／《嫉妬》
稀少技能／不明
好き／一真、千歳、ネコ、犬
嫌い／一真と千歳の敵、へび、爬虫類
デバイス／レヴィアタン

備考
一真がラスト達のもとへ来たときには既にいたため、どういう経緯で《堕落》し《罪人》になり彼女達と行動していたのかは不明。
一真を好きになり、神無の仇を教えた。そのあと一真と共に逃走し、ミゼットに育てられている。
一真に幼馴染みの千歳がいることを知って一時はかなり嫉妬していたのだが、開き直って今は自称一真の愛人を名乗っている。
愛人と名乗っているが、誰よりも一番一真と千歳が上手くいくことを願っているのは当人。
しかし、なかなか素直にならない二人で遊んでいることがしばしば。
今アリスが住んでいる家は、ミゼットが用意したもので一真やミゼットが地球に来たときには宿としている。
あの地下の巨大訓練場は手作り。
料理はそこでき千歳の料理を教えている。
一真からは犬と思われている節があるが、当の本人は知らない。
ヘビ嫌いは一真の茸嫌いと同等で、触れた日には呼吸困難になることがある。

名前／レヴィアタン
待機モード／イヤリング

備考
グローブ型インテリジェントデバイス。
指先から出る魔力紐で戦う。
魔力紐は太さを自由に変えることができ、縛る、硬化させ貫く、切るなど応用がきく。
限界なく延ばすことが出来るが、遠くに延ばすほど操作が難しくなる。
フルドライブ時には爪が現れ、それで攻撃可能。

なのは「と、ここまでが設定の紹介でした」

千歳「アリスちゃん、ケーキ～」

アリス「はいはい～」

千華「すごいわね、これ」

旭「そうだな。ケーキがもう半分って・・・しかも、消えた分の半分は千歳さんの胃の中なんだよな」

神無［千歳ちゃん、甘いもの好きだからね］

なのは「それだからって、あんなに食べるのは無理だよ・・・」

その頃、一真と隆浩はというと・・・・

隆浩「お前のせいで、か弱いおいらまで巻き込まれただろ」

一真「どこがか弱いだ。つか、お前が余計なこと言ったからだろうが。それを俺のせいにしてんじゃねぇよ、マイクロヘタレ狐」

ブチッ

隆浩「誰がマイクロ豆粒チビヘタレ狐だぁぁ！この、変態ペド野郎が！」

ブチッ

一真「ほぅ・・・・そんなに死にてぇか、クソガキ」

一・隆「「ぶっ殺す！」」

ドォン！

なのは「な、何！？」

アリス「あれ、あれ」

なのは「一真君と隆浩君！何してるの！？」

千華「どう見ても、ケンカね」

ドォン、バキィ

千華「ハデにやってわね～」

アリス「千歳、神無さんは！？」

千歳「さっき転送されちゃったよ～。あーんっ・・・・美味しい～♪」

千華「じゃあ旭。止めて来なさい」

旭「何で俺が！？つか、あんな危険地帯に――――」

千華「行かないと・・・・ボソボソ」

旭「行ってきます！」

アリス「何言ったの？」

千華「さぁ？」

旭「えっと二人とも。止め――――」

一・隆「「あ゛？」」

旭（？）「自業自得の二人がなにやってんだよ。ばっかじゃねぇの」

旭「へ？」

ブチン

一真「いま何つった・・・・？」

旭「い、今のは俺じゃなくて・・・・」

隆浩「他に誰がいるんすか？」

旭（？）「うるせぇよ、バカ二人」

旭「まさか・・・・」

一真「調子に乗ってんじゃねぇぞ、二代目杉崎」

隆浩「ヘタレハーレム王には用は無いですから、消えてください」

プツン

旭「俺はあんな奴を目指してねぇぇ！何度言えば分かるんだ！」

一真「めんどくせぇ・・・・まとめて消してやるよ」

隆浩「その言葉、そっくりお前に返してやる！」

旭「消えるのはあんた達だ！」

こうして三人の主人公対決は始まった・・・・

なのは「さっきの声真似、千華ちゃん？」

千華「そうよ。似てた？」

アリス「旭そのものだったけどね・・・・っていうか、それが原因で悪化したんだけど」

千歳「みんな頑張れ～」

アリス「煽ってどうするの！」

なのは「次のコーナーに行きたいけど、一真君がいないから待とうか？」

アリス「そうだね。それまでは見てよっか」

さて、ここからは主人公三人の大規模な喧嘩（殺し合い）をお楽しみください。

「おらぁ！」

振り下ろした神無が地面を抉る。
隆浩と旭はそれをバックステップでかわすが、礫が飛び二人を襲う。
エクスカリバーからカートリッジが二発排出され、

「逆巻け！風王！」

魔力変換で顕現させた風を圧縮、回転させ切り上げる。

「ストライクエア！」

発生した竜巻は礫を切り刻み、そのまま一真と隆浩を巻き込まんとする。
それに対し隆浩は体を回転させ始めた。

「陰陽御剣流二刀流・大竜巻！」

放たれた風の刃は全方位を攻撃。
竜巻だけでなく二人にも襲いかかるが、直撃コースの刃のみを打ち消しながら隆浩へ二人は近づく。

「「まとめて、消えろぉ！！」」

一真は煉刃を、旭は風王一閃を放ちお互いを隆浩ごと狙う。
隆浩は二人の技を避けると、

「フルドライブ！卍・解！剛形・天嵐皇秋月」

持っていた日本の刀は消え、変わりに肩から右手に指先までに銀色の鉄甲が装着される。そして背中から黒い羽根が生え、髪は白銀の長髪へと変わった。
それを見た旭はエクスカリバーをスリープモードにし、手を翳す。

「投影開始！」

旭の稀少技能『無限の剣製』で作り出したのは、一本の日本刀。
その日本刀の逆手で持ち、刀身を地面に向けた。

「卍解！」

そしてそのまま手を離すと、日本刀は地面に吸い込まれるように消えていった。
直後、千本の刃が扇形・天嵐皇秋月と同じように展開する。

「千本桜景厳」

いまの状況では一真に勝ち目はないが、一真も負けるわけにはいかない。

「フルドライブ！」

ベルカ式の魔法陣が一真の足下に現れ、灰色の光が溢れ出す。そしてその光は柱となり、一真を包み込んだ。
柱が消えると中から黒いスーツに黒いコートを羽織り、日本刀となった神無を持った一真が現れた。

「神道・神無！」

くっだらない理由で始まった三つ巴の戦いは、最終局面を迎えようとしていた。

観戦組

なのは「アリスちゃんの入れてくれた紅茶、美味しいね」

千華「あいつらもあんなことしてないで、こっちで喋ってればいいのに」

→原因を作った奴

千歳「アリスちゃん、おかわり～」

アリス「いいけど、千歳何個目？」

千歳「わかんない。それよりも早く早く～」

アリス「はいはい」

なのは（何で千歳ちゃん太らないんだろう・・・羨ましい）

千華「な、なのはさん、どうしたのかしら？」

アリス「さ、さぁ？」

千歳「♪♪～♪♪♪～」

再び三バカ主人公へ

「紅之太刀壱式・煉刃！」

一真の放った一撃は花びらの壁に当たり消える。

直後、桜色の濁流が一真と隆浩へむかう。

「衝撃のファースト・マグナム！」

隆浩は濁流に拳で穴を空け、更に衝撃破で自分の周りから吹き飛ばす。

一真は避けることが出来ず飲み込まれてしまった。

「潰れろ！」

旭は手を握りしめ一真を潰そうとしたが、

バサァ

「んなことで潰れるかよ！」

神無を振り回し桜を吹き飛ばした。
そこへ隆浩が跳び上がり、追い打ちをかける。

「うおおぉぉ！」

「ちっ・・・・」

振り上げられた拳は一真の顔面へ下ろされる。
旭も千本桜を操り、一真へしかける。
一真は隆浩から旭へ視線を変え切っ先を向けた。

「紅之太刀弐式・轟滅点欠！」

足下に出現した魔法陣を蹴り、向かって来る桜色の濁流へ落下を始めた。
落下速度は上がり、濁流を貫き地面にクレーターを作った。

「秋月！ファイナルモード！」

［ＯＫ、ボス！ファイナルシークエンス、スタンバイ！］

隆浩のバリアジャケットが、はやての騎士甲冑に似たものに変わる。
ちなみにスカートではなく、長ズボン。
右手にはシュベルトクロイツ、左手には夜天の書。

「大気に宿る雷の神よ、我がもとに集いその力を示したまえ」

シュベルトクロイツをかかげ、詠唱を始める。

「契約に従い我が前に立ちはだかる愚かな者に裁きの鉄槌を与えた

まえ！」

カートリッジを全て使い、隆浩の魔力は限界まではねあがる。

「来たれ！破壊の雷神！ジガディラス・ウル・ザケルガ！」

隆浩の図上に羽根が生え、人の顔が浮かんでいる巨大な球体が現れた。

そして、凹んでいる球体の中心部にエネルギーが集中する。

「カートリッジフルロード！」

旭はスリープモードにしていエクスカリバーをもう一度スタンバイ。

そして鞘におさめた状態でカートリッジを同じように全てロードする。

「カイーナ！アンテノーラ！」

稀少技能『永久凍土』を使い、自身を二段階強化させる。

「神無！カートリッジフルロード！」

［カートリッジフルロード］

神無の刀身に全ての魔力が集中し、魔力が漏れ出した。

「ジガディラス・・・・」

「エクス・・・・」

「死天・・・・」

三人が大技を放つ準備が整った。

「ファイアァァァァァァ！」

《ＺｅｅｅｅｅｅｅｅｅｅｅｅｅｅｅｅＧａａａａａａａａａ！》

ジガディラスから爆音と共に雷の砲撃が放たれ、

「ガリバァァァァァァ！」

エクスカリバーを鞘から引き抜くと同時に砲撃が放たれ、

「閃破ぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

神無を振り下ろすと漆黒の巨大な刃が放たれた。

三大魔法は同時にぶつかり、爆発すると当たりを光が覆い尽くす。

光が消え、戦っていた三バカは気を失って倒れていた。

このくっだらない戦いは引き分けという結果で終幕した。

誰か勝てや、このボケどもが。

なのは「終わったみたいだよ」

千華「それじゃ回収に行きましょうか」

千歳「そうだな。さっさと連れて来ねぇと次に進めねぇし」

アリス「それまでは私の『星間飛行』を聞いててね♪それじゃ行くよ♪」

♪♪♪～～熱唱中～～♪♪♪

アリス「ふぅ～」

千歳「上手だったよ～」

アリス「ありがとう、千歳♪」

一真「で、次のコーナーって何だ？」

なのは「募集してた一真君達のイメージＣＶと、アンケート結果の発表だよ。それじゃ、まずイメージＣＶからどうぞ！」

神童一真／緑川光（高町恭也、ヒイロ・ユイ、芳野祐介）

神無／遠藤綾（シェリル・ノーム、高良みゆき、絹江・クロスロード）

楠木千歳／堀江由衣（羽入、佐々木まき絵、白河ことり）

桜ノ宮アリス／釘宮理恵（アリサ・バニングス、シャナ、アルフォンス・エルリック）

なのは「以上がイメージＣＶでした」

千華「結構豪華ね」

隆浩「千歳様は特にだな～」

千歳「私は羽入っぽくだって」

一真「そりゃぴったりだ」

神無［私はお姉さんって感じの人ね］

アリス「私はアリサと同じ・・・って名前が近い！」

旭「今さらっすね、それ」

なのは「じゃ次はアンケート『一真、神無、千歳、アリス、ラストが学生か教師だったら』の結果。一真君は、『授業をサボることの多い正義の不良番長』、『授業をサボり、放課後はバイクに乗り回したりケンカしている。しかし仲間のピンチには駆けつける硬派な学生』、『授業中は机に突っ伏しているが、成績上位の心優しい不良少年』の以上です」

隆浩「一つ言えることは、全部不良だな」

神無［まぁそのイメージが強いのは否定できないわね］

千華「しかも絶対に正義の不良・・・・」

一真「まぁいいんじゃねぇの。何となく予想はついてたからな」

なのは「つづいては神無ちゃん。『生徒会長』、『友達の前ではお

茶目な、成績優秀で優等生な生徒会長』、『もちろん一真の姉。真面目でしっかりものだが、意外に乙女な生徒会長』の以上です」

旭「これまた全部生徒会長ですね」

アリス「やっぱり神無さんはそうだよね。昔はどうでした？」

神無［中学のときは生徒会長してたわよ。三年間］

神無以外『あ～、やっぱり』

千歳「神無お姉ちゃんすごいね」

神無［ありがとう千歳ちゃん］

なのは「次は千歳ちゃんだね。『生徒会の副会長』、『普段は可愛がられる無邪気キャラだけど、起こらせると恐い学校の裏番長』、『一真のことがちょっと気になる、天真爛漫な一真のクラスメイト』の以上です」

千歳以外『副会長？』

千歳「どうしたの？」

千歳以外『何でもないです』

アリス「それよりも千歳。一番最後の、あってるなんじゃない？」

千歳「え、えっと、それは、その・・・・」

千華「一真さん。千歳さんのことどう思ってるの？」

一真「幼馴染みの甘党ロリ娘」

な・神・ア・隆・華・旭

『はぁ～』

一真「何だよ！」

旭「いや、すごいなって思って」

ガシィ

旭「ち、千華さん。頭がものすごく痛いんですけど・・・・」

千華「あんたの言うセリフじゃないわよ。この鈍感ハーレムキング！」

グシャア

旭「ぎゃあああああああ！」

なのは「つ、次はアリスちゃんだね。えっと『生徒会の書記』、『昼休みや放課後に体育館のステージを貸し切ってコンサートしてる、学校のアイドル』、『飄々とした振る舞いが売りの一真達の担任。学校の公認の雑貨店を営んでいる』の以上です」

アリス「やったぁ♪アイドルだって、アイドル」

一真「そりゃよかったな。ちなみに飄々って言葉の意味わかるか？」

アリス「さぁ？」

一真「じゃあわかる人」

神・旭・隆「「［［はいっ］］」」

一真「じゃあ教えてやってくれ」

神・旭・隆「「［［『世間ばなれしていてとらえどころがない』］］」」

アリス「世間、ばなれ・・・・？」

一真「らしいな」

アリス「・・・・」

なのは「アリスちゃんが隅っこに！」

千歳「アリスちゃん、元気出して～」

アリス「ありがとう、千歳」

なのは「そして最後は何故かラストさん。『保健の先生で、一真がその餌食に・・・』、『生徒を言葉のの槍でいたぶったり、準備室で生徒を毒牙にかける数学教師』、『持ち前の美貌で男達を虜にしているが一真だけには効かず、故に一真を自分のモノしようと色香を使ってくる先輩』の以上です」

隆浩「どれもこれも本当にありそうだな」

一真「勝手に言ってろ」

隆浩「突然、不機嫌になってどうした？」

神無「ラストが原因よ」

アリス「仇だからね・・・・」

千華「男達を虜にさせてどうすんのかしら？」

千歳「一真はあげないよ・・・・」

ゴゴゴゴゴ

旭「千歳さん、《罪》は解放しちゃダメですって！」

なのは「そ、そうだよ千歳ちゃん。ここは落ち着いて。一真君ならそこにいるから」

一真「呼んだかなのは？って、千歳！？」

隆浩「一真。早く千歳様を、その変態パワーで落ち着かせてこい！」

一真「だから変態じゃねぇって言ってんだろうが！たくっ・・・・千歳」

千歳「一真？」

一真「俺はあいつらのところに行かねぇよ。つか、所有物のお前が、俺をあげるあげないを決めるな」

千歳「一真・・・・」

隆浩「ペド野郎、ペド野郎、ペド野郎、ペド野郎・・・・」

隆・華「「ペド野郎、ペド野郎、ペド野郎、ペド野郎・・・・」」

隆・華・ア「「「ペド野郎、ペド野郎、ペド野郎、ペド野郎・・・・」」」

一真「ほぅ・・・・死ぬ？」

なのは「すっごい笑顔だ・・・・」

神無［スイッチが入ったわね。もう止められないわ］

一真「獄龍破×２１！」

千華「ハーレムキングバリア！」

旭「何でだぁぁぁぁぁぁ！」

隆浩「ナイス、旭先輩。先輩のおかげで俺達助かりました」

アリス「そうだ・・・ひぃっ！ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい！」

千歳「どうしたのアリスちゃん？」

一真「さぁな？」

神無［ヘビね］

なのは「ヘビだね」

千歳「えっと・・・・それじゃあ、お返事コーナー」

一真「強引だな」

ＴＯＵＤＡさんへ

千歳「あたしは初めから女じゃあああ！」

神無「確かに怒るところは正解ね」

千華「言葉づかいは女の子じゃないけど」

一真「誰がダメ人間じゃ！お前も俺と同じ計算してただろうが！」

隆浩「おいらとお前じゃ運動量が違うんだよ！」

旭「二人とも落ち着いて！」

一・隆「「うるせぇよ、ヘタレキング！」」

旭「あぁ？」

アリス「一触即発・・・・」

なのは（この三人が揃ったら危険だ・・・・）

シグマさんへ

一真「リボーの言う通りだな。つか、変に気を使われると何かあるんじゃないかって思うんだよ。あいつの場合」

千歳「ダメだよ一真。ちゃんと、ありがとうって言わなきゃ」

一真「ぐっ・・・・」

神無［言いにくいでしょうね。一真の性格じゃあ］

旭「確かにそんな性格じゃなさそうですもんね」

千華「ほら旭も、私にご主人様になってくれてありがとうございますって言いなさい」

旭「何でそうなるんだ！」

なのは「隆浩君は、私とフェイトちゃんにごめんなさいだね」

隆浩「何で、おいらが？」

ジャキッ

なのは「これ」

隆浩「ごめんなさい。それとレイジングハートをおさめてください」

アリス（うさビット、そんなに嫌だったんだ）

灰色の野良猫さんへ

アリス「ソラく～ん♪また来てね～」

隆・旭・華「「何これ？」」

神無［あの娘、ソラ君のファンクラブ会長で創立者なのよ］

隆・旭・華「「「納得」」」

一真「あいつのアレは異常だよな？」

千歳「そうかな？可愛いと思うよ」

なのは「もしかして千歳ちゃんも？」

千歳「ううん。私は入ってないよ」

アリス「それじゃ千歳にも、会員証を」

一真「渡すな！」

Ｎａｋｉさんへ

神無［ありがと、セラフィム。本当、苦労するわ。私のマスターとしてもだし、弟しても］

一真「苦労かけてるつもりはねぇんだが・・・ってまたかぁ！あ

の腐れメタル！」

なのは「今回は少しの衝撃や魔力を感知すると、中身が辺りに飛び散る細工があるみたいだよ」

旭「あれの中身って何ですか？」

アリス「セラフィム特製茸ドリンク。だからあの中身が散乱したら、みんな茸の臭いまみれ」

なのは「上から落ちてくるってことは、地面に落ちた衝撃で・・・・」

千華「一真さん、私達のために犠牲になって！」

一真「拒否！つーわけで隆浩、手伝――――」

隆浩「拒否。千歳様」

千歳「元気玉ぁ！」

一真「ぶちまける前に消滅を確認。うっしゃあっ！」

紅龍さんへ

一真「どいつもこいつもふざけやがってぇぇぇ！！」

神無［余分に砲撃も確認できたわよ］

千歳「千華、用意はいいか？」

千華「もちろんよ。旭、死ぬ準備はいいわね？」

旭「ちょ、ちょっと！」

千歳「一真・・・・」

千華「旭・・・・」

千・華「「バリアぁぁぁぁぁ！」」

一・旭「「ぎゃあああああああ！」」

隆浩「二人のことは多分忘れない」

アリス「ありがとう一真。ありがとう旭」

なのは「えっと、いいのかな？」

一・旭「「いいわけあるかぁぁぁぁ！」」

U．Tさんへ

千歳「何で謝らないの？」

一真「謝る気が一切ないから。つか、茸突っ込まれたらなおさら謝るか！」

千華「一真さんって、いろんな所にケンカ売ってるわね」

神無「それで自分も被害にあってるのに、なかなか止めようとしないのよね。たしか一番最初って」

隆浩「おいらにだったな。返り討ちにしてやったけど」

アリス「そういうのって、学習能力がないっていうんだよね」

旭「でも俺にはケンカ売ってないですよね」

一真「すっかり忘れてたな。今から売るか？」

なのは「ケンカにならないんだったらいいよ。でもなるんだったら・・・わかってるよね？」

一真「あ、あー、止めとく」

千歳「そろそろ終わりなんだけど、その前に作者さんから一言！」

呼ばれて飛び出てじゃじゃじゃーん！

『魔法少女リリカルなのは～七つの大罪～』の作者こと村正です。

ここまででなんと３０万ＰＶを突破しました。イエーイ♪

みなさん、ここまでありがとうございます。

そして第二部からもよろしくおねがいします。

それでは第二部で会いましょう！

一真「つーわけだ。オリキャラを代表して俺からもよろしく」

なのは「それじゃ次回予告！」

一真「俺が退院して次の日。機動六課に新たにやってきた少女」

神無［その娘は千歳の時と同様の衝撃を六課に与えた］

千歳「そして私とアリスちゃんには、はやてちゃんから嘱託魔導師になってほしいとのお願い」

アリス「だけど千歳はそれを渋る。理由は両親にあった」

な・隆「「次回、魔法少女リリカルなのは～七つの大罪～」」

旭・華「「【始まった物語】」」

一同『次回へ、スタンバイレディ！』

《一真の部屋・特大号》（後書き）

ＴＯＵＤＡさん、二階堂さん。出演許可ありがとうございました。
それと勝手にバトルさせてすみませんでしたぁ！

第二部もよろしくお願いします。
それではまた。

始まった物語（前書き）

第二部の始まりです。

それではどうぞ。

一真の退院（脱走）の翌日。
はやてに頼まれ、千歳とアリスを連れて機動六課隊舎へと来ていた。
本来なら一真はまだ病院なのだが、ミゼットが後ろで手回しをしたらしい。
そして、今一真達はサンルームに集合していた。

「今日はどうしたんですか、はやてさん？」

スバルがそう質問するということは、ＦＷメンバーは知らないと言うことが判明した。
ちなみに一真達三人と一機は、呼ばれただけなのでもちろん知らない。

「今日は新しく来た仲間を紹介します」

「・・・・」

それを聞いて、一真の表情は曇る。
それを見て心配になった千歳は、

「どうしたの、一真？どっか痛いの？」

「いや、そうじゃなくてだな・・・ここにいたら、俺に実害がありそうな気がしてな。今すぐ、ここから逃げてぇんだよ」

「それじゃ入ってきて！」

はやてに促され、壇上には肩までの髪に赤い目の１５、６歳の少女とユニゾンデバイスと思われる二騎が上ってきた。
それを見た一真の表情は引きつる。

「それじゃ、自己紹介してな」

「はい。えっと、初めまして。今日からここ機動六課に転属となった、神童鈴蘭二等陸士です。ご迷惑をかけるかもしれませんが、よろしくお願いします」

「鈴蘭のユニゾンデバイスのみーなじゃ。よろしく頼むよ」

と、着物を着たみーなが。

「同じくユニゾンデバイスのリリンなの。よろしくなの」

と、何故か小さなバットを持ったらリリンが言う。
しかし、ここにいる全員の頭の中には鈴蘭の名字が気になっていた。
その名字は「神童」。そしてもう一人同じ名字を持つ男が、この部隊にはいる。その男は神童一真。

「マジかよ・・・・」

全員の視線が一真へと向かう。
おそらく全員が同じ思考に辿り着いたのだろう。

「ねぇ一真。どういうこと？」

一真に迫るアリス。
その表情は、あの一真に恐怖を感じさせた。

「あー・・・それはだな」

そして一真を見つけた鈴蘭は、今の状況下でおそらく言ってはいけないだろうセリフを言い放った。

「あ！お兄ちゃんだ！」

「あのバカ・・・・・」

『お兄ちゃん！！！！！？』

その叫びが機動六課に木霊した。

「それで、どういう関係なの？」

一真はなのは達に問い詰められていた。

「兄妹です」

「でも、一真に兄弟っていなかったよね？」

そう。千歳の言う通り、一真には姉はいても妹はいない。ではこれはどういうことなのか、となる。

「えっと、お兄ちゃんって呼んでますけど血は繋がってません。拾われたんです、あたし」

完全に予想外の鈴蘭の言葉。
それに付け加えるように、一真は続ける。

「いつだったかな。お前らと会う前だから・・・・１０歳か。任務でとある世界に行った時に、こいつに保護したんだが記憶がなくてな。ババアに預けたんだよ」

「ババアとは誰だ？」

「ミゼットのババアだよ」

全員が目を見開く。あの三提督をババアと呼ぶことに驚いたのだ。

「ダメだよ、一真君。ミゼット提督をそんな風に呼んじゃあ」

「っていわれても、無理だ。そんなことよりも、はやて。千歳とアリスを六課に連れてこさせた理由は何だ？」

「そやったな。二人には嘱託魔導師になってほしいんよ」

一真はやっぱりかと呟く。
予想はしていたらしい。

「新しい分隊を作りたいんやけど、人員が足りんのや」

「それで私と千歳に嘱託魔導師になってほしいんだ？」

はやては頷く。

「私はいいんだけど・・・・千歳が、ね」

「そうだな」

一真とアリスが困った顔になる。
千歳はよくわかっていないらしく、頭の上に?を浮かべている。

「千歳がどうかしたの?」

とフェイトが聞くと、

「いや、千歳が嘱託魔導師になるには親の許可がいるんだが・・・・」

かなり答えにくそうに一真は喋る。

「何だよ?早く言えよ!」

なかなか言おうとしない一真に痺れを切らしたヴィータが、大きな声を出す。
一真はしょうがないと、とうとう白状した。

「こいつの父親、ヤクザの頭なんだよ。で、こいつは次代の頭の第一候補」

一真の言葉は、全員の予想斜め上を行くもの。
事情を知っている三人以外は、目を見開いたまま固まっていた。
当の本人はというと、

「えへへへ」

笑っていた。

「たくっ・・・・それでこいつの親父、魔法のことしってて、更に子離れできねぇ親バカなんだよ。それが嘱託魔導師になってこっちに来るってなったら、何をしでかすか……」

全員が苦笑いを浮かべる。
どうなるか、想像出来たらしい。

「で、どうしたい？千歳。嘱託魔導師になりたくないなら、ならなくていいぞ」

「私は・・・・」

千歳は一度になのは達を見て、もう一度一真を見上げる。

「嘱託魔導師になるよ。もうみんなに迷惑かけたくないもん」

「あとから、ならないって言っても俺は知らねぇからな」

「言わないもん」

「分かった。つーわけで、今からこいつと地球に行ってくる」

「了解や」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「あの、あたしはどうしたらいいんでしょうか？」

「そやな。模擬戦はどうやろ？鈴蘭の実力も分かるし」

「いいね。それじゃあ・・・・スバル、いいかな？」

「はいっ」

「二十分後に訓練所ね」

「早いのではないか？二十分後にと言っていたであろう？」

とみーなが言うように、鈴蘭はすでに訓練所に来てしまっていた。

「そ、そうなんですけど緊張しちゃって・・・・」

「緊張はダメなの。体がカチカチで、上手く動けないの」

「それは分かってるよ。分かってるんだけど、あのスバルさんと模擬戦なんて考えたこともなかったから・・・・」

「そうかもしれんな。でも、ぬしは兄といっしょの場所にいたいから頑張ってきたんじゃろ？」

「はい・・・・」

「だったらこんなところで緊張していたら、それは叶わんよ」

「そう、ですね・・・・がんばります」

「そのいきなの」

鈴蘭が意気込んでいると、突然肩を叩かれた。

「ぎゃっ！」

猫のように飛び退き、その場から離れる。

「あ、えっと、ごめん鈴蘭」

鈴蘭の肩を叩いたのは、これから模擬戦するスバルだった。

「あ、スバルさん。ごめんなさい・・・・」

「あたしは大丈夫だけど、鈴蘭こそ」

「だ、大丈夫です。緊張してたから、ついびっくりしちゃって」

「そっか。えっとみーなとリリンだったよね」

「一応、ミゼットよりも歳上なんじゃが、まぁよいよ。それよりも、この姿は疲れるの。鈴蘭、もういいか？」

「はい」

と鈴蘭が返事をすると、みーなとリリンは俗に言うアウトフレームになる。

本来アウトフレームは魔力の燃費が悪いのだが、みーな達にはこっちの方が楽なようだ。

「やっぱりこっちの姿の方が楽なの」

「そうじゃな」

みーなは和服美人という言葉がぴったりで、西陣織を身に纏っている。

逆にリリンは黒髪をツインテールにしており、黒のワンピースに白いマント。手にはもちろんバット（なぜかミ●ノ製）が握られていた。

「もう来てたんだ。それじゃ、二人には中に入って」

「「はいっ」」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

鈴蘭とスバルが中に入っていくと、なのははみーなとリリンに語りかけた。

「みーなさんとリリンは行かなくていいの？」

「リリンは分からぬがわしが行くと模擬戦程度、一瞬で終わるよ」

それを聴いてなのははギョッとする。

おそらく今言ったことは本当なのだろう。なのははそう直感した。

そんな存在が目の前に立っていることに、なのはは悪寒を感じずにはいられなかった。

「ま、そう固くならんでもよいよ」

「あ、うん。それじゃこっちだよ」

なのはに案内されみーなは歩かず浮いたままふよふよと、リリンはトコトコとついていく。

「準備はいいね？」

なのはが聞くと、画面の向こうにいる二人は元気よく返事をした。

「ルールは《罪》は使用禁止。非殺傷設定はもちろん、カートリッジはマガジンに装填してある分だけ。勝利条件は相手が負けを認めるか、気絶させるか。それじゃ、レディ・・・・ゴー！」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

鈴蘭とスバルの模擬戦が始まったころ、一真と千歳はというと・・・

・

「テメェら、いい加減に死ねぇぇ！」

「うるせぇ、ガキ！」

「お嬢に手を出したテメェを帰すわけにはいかねぇ！」

「俺がいつ千歳に手を出したぁ！」

「みんな頑張れ～♪」

「お嬢の応援だ！期待に答えろ！」

『おぉ！』

「ふざけんなぁぁぁぁ！」

というか一真だけなのだが、一対百、いやそれ以上の人数と殺し合いをしていた。

なぜそうなっているのかというと、一時間ほど前、一真達が地球に戻ってきたあたりまで遡る必要がある。

というわけで回想モードスタート。

「なぁ、千歳」

「ん～？」

「何で、お前の家に帰るのに俺がアイスを買う必要がある？」

「食べたいから！」

（今ここで、こいつをどつきたい・・・・）

地球に着いた二人は、アイスクリームを買うために寄り道をしていた。
もちろん出費は一真持ちで。

＞一真、がまんしなさい＜

＞・・・・っ＜

この後もソフトクリーム、ケーキ、クレープｅｔｃｅｔｃと全て一真持ちで買わされていく。
その度に一真の怒りが溜まっていくのは当たり前。

「次は――――」

「千歳」

一真とは思えないくらい穏やかな声で、千歳の名前を呼ぶ。
表情は笑顔。しかし、目は笑っていない。

「か、一真？」

「いい加減にしような。今日来たのは、食べ歩きじゃねぇんだから」

「はい」

さすがの千歳も、今の一真には勝てないようで素直に従った。

「で、千歳」

「な、何？」

「もう怒ってねぇから、そんな怯えんな。それよりも、行く前に買っておきたいものがあるんだが。いいか？」

「いいけど、何買うの？」

「ちょっとな」

そして買うものを買って一真達は千歳の家の前に着いた。
目の前にはかなりデカイ門がある。おそらくこの辺りで一番大きな家になるだろう。それが千歳の家である。

「最初に聞くが。お前、帰るって連絡したか？」

「うん。一真が買い物してるときに、今から一真と一緒に帰るねって」

「どうりで中から物騒な音声が聞こえてくるわけだ・・・・」

門の奥からは『奴が入ってきたら殺せ』、『どんな方法でもいいから殺れ』、『お嬢に被害は出さず殺れ』などいろいろな声が聞こえてきていた。
一真はため息を吐くと、買ったばかりの木刀を握りしめた。

「さて、入るか」

「うん」

思い切って入った二人。

「ワァオ・・・・」

二人の目の前には、いかつい男の群れ。
彼らの手には拳銃、ナイフ、日本刀、槍ｅｔｃｅｔｃ。
すべての狙いが一真に向いている。

「あー・・・お久しぶりで」

『死ね！』

とみなさんは声を揃えた。

「テメェらが死ねぇぇ！この腐れ人類共がぁぁ！」

とこんな感じで、一真対楠木家のヤクザのみなさんの殺し合いは始まったのであった。
と、ここまでが２０分前の出来事である。

「ちぃっ！」

さっきの千歳の余計な一言で、ヤクザのみなさんのヤル気はＭＡＸ状態。
一真はというと、これからのことを考えるとヤル気はどんどんなくなっていく。

「ちぃっ・・・・」

一番近くにいた男の顔を蹴り、後ろにいた数人も纏めて吹き飛ばす。
蹴った際に、何かが砕けたような音がしたがスルー。

＞後ろ！＜

＞わーってる＜

振り下ろされた棍棒を左に動いて避けると、その男の胸めがけ裏拳。

「ごふぅっ！」

「うぉぉ！」

左右から振り抜かれる刀を、右は拳で叩き落とし、左は木刀で弾き上げる。

動きを止めた一真へ拳銃で集中放火。

「無駄っての」

飛び上がり銃弾を避ける。

目標を失った弾丸は、次の目標へ。つまり、対角線上にいた向かいの男へ当たる。

「死んでは、ねぇな」

当たりどころがたまたまよかったのか、銃弾の当たった男達は死んではいない。

一真としては死なれては困るため、そのほうがよい。

男達は今度は全方位から刀の切っ先を一真へ向けて、走り出した。

もう一度上へ飛ぼうとしたが、よく見ると残っている拳銃組が構えていた。

（転移して、こいつらが同士討ちしてもいいが・・・死なれても困るしな）

そういう考えにいたった一真は動かない。
動かないのを見て好機と考えた男達は、更に走る速さを上げて一真へ刀を刺そうとする。
直前、一真の体を悪寒が駆け抜けた。
それはキレたなのはと胎児した時以上のもの。

「何をしてるの？」

その声は一真の右方向から聞こえた。何となく千歳に似ているが、あのような幼さはない。

「あ、姐さん・・・・」

「お客様に対して失礼のないようにって、いつも言ってなかった？」

その声を聞くだけで冷や汗が止まらない。
男達も同様で、酷い者は涙を浮かべている。
一真が恐怖を振り払いやっとのことで右を見ると、そこには真っ白な着物に赤い帯をつけた女性が立っていた。

「お母さん♪」

「お帰りなさい、千歳」

ここにいる男達を、たった一声で止めた女性。それは千歳の母・楠木千里（センリ）だった。

「一真君と神無ちゃんもいらっしゃい」

「えっと、どうも・・・・」

「お久しぶりです・・・・」

一真でさえ、千里には逆らおうとは思わない。

過去に一度に怒られたことがあり、それがトラウマになっているのだ。

「それじゃ」

「はい」

「それとあなた達は、あとで、ね？」

その言葉にどういう意味が含まれているのか気になったが、一真は聞かなかった。いや、聞けなかった。

余談ではあるが、千歳は千里に怒られたことはない。

それが千歳がいい娘だからなのか、親バカの父親にならってこの一家自体が千歳に甘いのかのどちらかであろう。

後者の確率が高いのは、今のところ間違いはないはずだ。おそらくは。

「ごめんね。いつもはあんな風じゃないんだけど」

さっきの彼らのことだろう。

「傷とかある？」

「あ、大丈夫です」

読者のみなさんは、一真が敬語を使っていることに違和感を覚えたであろう。
これは相手が千里だからである。つまり、千里は一真が敬語を使って話す、数少ない相手なのだ。

「神無ちゃんも元気だった？」

［あ、はい］

「よかった」

千里が神無のことを知っている理由は、もちろんこの一家が魔法を知っているからである。

「一真君、お姉さんに迷惑かけてない？」

「えっと、まぁ・・・・」

そして神無が姉の神童神無だということも、千歳が知る前から話してあった。

［ホントかしら・・・・］

「ふふふ。じゃあ、ちょっと待っててね」

そう言い残し千里は客間から出ていった。

「お母さん、神無お姉ちゃんのこと知ってたの？」

「あぁ。んなことよりも今日一番の問題は、お前の親父にどうやってお前が魔導師になることを納得してもらうか、だ」

「うん。分かってるよ」

千歳がそう頷いた所で客間に、千里とかなりテンションの低いいかつい男が入ってきた。

「ボウズ・・・・」

「ボウズじゃないでしょう?みんなで一真君を襲わせたことをちゃんと謝って」

(やっぱり、この人が黒幕か・・・・)

「は、はい・・・・か、一真、すまん」

千里に言われるがままに一真に謝罪した人物こそ千歳の父親であり、千里の夫であり、そしてここ楠木組の組長の楠木千治(センジ)である。

「それで今日は何のようだ?」

「あー、言いにくいんだかな。千歳を魔導師に――――」

「拒否!」

「まだ全部言ってねぇだろ!」

「聞かんでも、そこまでで分かる。俺の可愛い可愛い千歳を魔導師にしたいんだろう?」

「まぁ・・・・」

「だから拒否！」

一真の予想通り、千治は千歳が魔導師になることを反対した。
しかし、ここには来る前に魔導師になると言った千歳がいる。

「一真君、どういうことか説明してくれる？」

「あ、はい」

千歳が拐われたことから、それ以来千歳が魔法が使えるようになったことなど全て話した。

「そんなことがあったのね・・・・それで千歳はどうしたいの？」

「私は魔導師になりたい。いろんな人に迷惑かけたくないし、それに魔法っておもしろいもん」

「・・・・千里、千歳。部屋から出ていけ。俺は、ボウズと話がある」

「はい。千歳、行きましょ」

「うん」

一真と千治を残して二人は出ていく。
そして部屋には重い空気。

「で、何だよ話って？」

千治は黙って立ち上がり一真の前へとくる。

「ボウズ。歯ぁ、くいしばれ」

「は？」

鈍い音が聞こえたかと思うと、一真は真後ろに吹っ飛ばされ壁に激突した。

「何しやがる、テメェ！」

「お前、約束してたよな。千歳を魔導師にはしないと」

「・・・・」

「だが、お前はそれを破った！」

「千治さん、それは一真だけの責任じゃ――――」

「神無ちゃんは黙っててくれ。これは俺とこのボウズの話だ」

一真は立ち上がって千治を見据える。

「じゃあ千歳を魔導師にさせないつもりか？」

「当たり前だ。約束を守れないような奴のところに、愛娘を任せられるか！」

「うるせぇよ親バカ・・・・千歳は自分で魔導師になりたいって言ってんだ！それを、千歳がやりたいことを父親のテメェは諦めさせるのか！？千歳は納得しねぇぞ！」

「っ・・・・」

お互いにお互いの言うことは分かっているが、認めることができない。

そんな二人のもとへ、部屋の外に出ていた千歳と千里が入ってきた。

「お前ら・・・・」

「千歳、千里さん・・・・」

「大丈夫、一真？」

「あぁ」

一真に近づいた千歳は、心配そうに顔を見上げる。

「外に出ていても全部聞こえてきたわよ。千歳、本人に何も言わないで話をすすめちゃって」

「お父さん！やりすぎだよ！」

「千歳・・・・」

めったに怒らない千歳が怒っている。

それだけ腹が立っているってことだ。

「一真が約束を破ってないよ！魔導師になりたいって言った私のためについて来てくれたのに・・・・・」

「うぅ・・・・・」

「あらあら。千治さん、どうする？千歳があんなにやりたいって言ってるもの、取りあげる？」

「ぐぐ・・・・・・・・分かった！好きにしろ！だかな、ボウズ！これだけは約束しろ！」

「んだよ？」

「次、千歳に何かあったら殺すからな」

「あぁ。分かってる」

ということで、両親からの許可は無事得られた。
が、嘱託魔導師になるための問題はまだあるのだが、それは後々。

《一真の部屋》

一真「始まったぞーいっと」

神無［第二部第一回だってのにヤル気ないわね］

一真「当たり前だ。こんなのにヤル気があってたまるか」

千歳「ダメだよ、一真。ちゃんとやらないと」

一真「へぇへぇ」

なのは「えっと、それじゃ進めるね？」

神無［完全に進行役が板についたわね、なのはちゃん］

アリス「一真があんなだからね」

なのは「えっと、今回から『七つの大罪』の本編から一人ずつ呼んで進行していきたいと思います」

千歳「そうなんだ」

アリス「私達は固定みたいだね」

なのは「それじゃ一回目のゲストは、今回初登場で予想外の設定持ちの神童鈴蘭です」

鈴蘭「えっと、よろしくお願いします」

千歳「よろしくね～」

アリス「ねぇ一真。やっぱりロリ――――」

一真「ほぅ・・・・」

アリス「ごめんなさい！」

鈴蘭「お兄ちゃんとアリスさん、どうしちゃったんですか？」

神無［あれはお約束みたいなものね］

なのは「だから気にしなくていいんだよ」

鈴蘭「は、はぁ。というか、あんなお兄ちゃん初めて見た」

神無［ここじゃ、普通なんだけどね。もう少ししたら、更に違う一真が見られるかもしれないわよ？］

鈴蘭「どういうこと、お姉ちゃん？」

神無［まぁそれは後々］

アリス「一真の説教怖い・・・・」

千歳「私も今回あったから分かるよアリスちゃん」

なのは「鈴蘭は一真君に説教されたことある？」

鈴蘭「はい。あれは・・・思い出したくないです」

千歳「どんなこと言ったの？」

一真「・・・・・・・記憶にねぇな」

神・アリス（（嘘だ・・・・））

なのは「そろそろ感想のお返事コーナーに行こっか」

二階堂さんへ

千歳「やっぱり鈍感ってダメだよね～」

アリス「ここにもいるけどね。二人も」

一真「鈍感ってそんなにいるもんなのか？」

なのは「どうだろ。でも、アリスちゃんが言うからそうなんじゃないかな？」

神無［ひねくれ者とワーカーホリックの二大鈍感が何言ってんのよ・・・・］

鈴蘭「お兄ちゃんとなのはさんもそうなの？」

一・な「「いやいやいや。鈍感じゃないから」」

ＴＯＵＤＡさんへ

鈴蘭「うさビットって面白いんですか？」

千歳「面白いよ。隆浩君、ありがとね～」

アリス「何回見たわけ？」

千歳「十回くらいかな？」

一真「見すぎだろ。壊れんじゃねぇか？」

千歳「大丈夫。一回、他のディスクにダビングしてから見てるから」

鈴蘭「す、スゴいですね・・・・」

なのは「そっかー、はやてちゃんもグルだったんだぁ」

神無［いい、なのはちゃん。こっちのはやてちゃんにお仕置きしても意味ないわよ］

なのは「分かってるよ、それくらい。あはははは～」

神無［分かってないわね・・・・］

Ｎａｋｉさんへ

一真「はっきり言うぞ。俺がどれだけ茸が嫌いだって言ってもな、菓子と茸との判断ぐらいつくわぁぁぁぁぁ！」

千歳「ありがとね、セラフィム♪」

鈴蘭「そういえばお兄ちゃんって、昔から茸大嫌いだったけ」

神無［あたしとミゼットさんがどれだけ叱っても食べなくて、終いには家出しようとしてたわね・・・・］

なのは「茸食べたくないから家出って・・・・」

アリス「理由しょぼっ」

一真「俺にとっちゃ生きるか死ぬかの、大問題じゃ！」

紅龍さんへ

神無［最近、こういう攻撃多いわね～］

ただいま一真は、零の作った茸の歌をヘッドホンで聴いて悶絶中。

鈴蘭「あ、何か来ましたよ？」

アリス「はい、みんな下がって～」

神無［今回はどうなるのかしらね？］

なのは「あ、立った」

一真「俺が・・・・死ぬかぁぁぁぁぁぁぁ！金剛爆流破ぁぁぁぁぁぁ！」

次元を超えて大量の金剛石の矢が飛んでいく。

バタ

千歳「お疲れさま、一真♪」

ラグナシアさんへ

千歳「初めての人だね。読んでくださってありがとうございます♪」

一真「こんな駄文を一気に読んでくれたのか。よかったな、作者」
神無［とても面白いって、なかなかないわよ］
なのは「と、言われてるけど作者さん？」
テメェら言いたい放題言いやがって、覚えてろよ・・・・
アリス「今ここで何かしないんだ・・・・」
鈴蘭「えっと、これからもよろしくお願いします」

シグマさんへ

一真「あの腐れぇぇぇぇぇ！」
神無［日に日に悪化するわね。一真への嫌がらせ］
鈴蘭「銀色の茸って、美味しいのかな？」
アリス「なんとなく毒のイメージね。って、来たよ」
千歳「なのはちゃん、何か作って～」
なのは「それじゃあね・・・・」
一真「あの腐れ二人は直接冥道に送ってやる。冥道残月破（鉄砕牙ｖｅｒ．）！」
冥道の刃が次元を超えて飛んでいった。

鈴蘭「お兄ちゃん、がんばって！」

U．Tさんへ

鈴蘭「お兄ちゃん、何したの？」

一真「獄龍破をやっただけ」

神無［いや。それだけでも充分ヒドイからね］

一真「知るか」

なのは「で、本当に謝る気はないの？」

一真「ねぇよ！」

アリス「鈴蘭。こんな風になっちゃダメだからね」

鈴蘭「大丈夫です。反面教師ですから」

千歳「だって、一真～」

一真「うるせぇよ」

神無「確かに反面教師になるわね。こんなひねくれ者が兄なら」

なのは「そうだよね。だってこんなにいい娘なんだから」

一真「はっ倒すぞテメェら・・・・」

なのは「えっと、一真君が暴走するまえに次回予告！」

一真「テメェ！」

鈴蘭「始まった私とスバルさんの模擬戦」

なのは「予想外の動きを見せる鈴蘭に、スバルは追い詰められていく」

神無「そんな中、新たな闇が動き始める」

一真「次回、魔法少女リリカルなのは～七つの大罪～」

千・ア「「【義妹の実力】」」

一同『次回へ、スタンバイレディ！』

義妹の実力

千治と千里から許可を得た二人は、そのままミッドへ向かおうとしたのだが

「あっちに行ったら千歳とあまり会えなくなるんだろ？だったら今日は泊まっていけ！拒否権はねぇ！」

という千治の提案により、一真と千歳は一泊してから帰ることとなった。

「飲め飲め！がはははは！」

ただいま楠木家に大宴会が催されている真っ最中である。

「おい、親バカ！絶対に、千歳に酒を飲ますなよ！」

「いいじゃねぇか。飲んだとこで何がある？」

「あるんだよ！テメェは知らねぇかもしれねぇがな、あいつ酒飲むと条件無視でバトルモード化なんだよ！」

一真の言葉を聞いて千治は固まった。

「ちょっとまて、ボウズ。バトルモードってあれか？」

「あぁ、あれだ。テメェが護身術だと抜かしやがって千歳に武術だの、剣術だのを覚えさせた際に千歳が作った人格だ」

上の説明だけでは分かりにくいと思うので、こちらで説明しよう。
千歳の使う武術、剣術等は全て護身術として千治が覚えさせたのだ。
しかし、千歳本人は武術などは使いたくはなかったが千治は教えようとするので、いやいや修業を続けいたた。そして武術を使いたくはない千歳の精神が限界を迎えようとしていたとき、自分を守るためにあのバトルモードの人格を作り上げ技術などを全てそこに封じ込めたのだ。が、完全に封じ込めることは出来なかったらしく、日本刀好きだけが残ってしまった。
そのため、性格は完全に真反対となっている。
ちなみに、バトルモードは教えた千治よりも強い。

「マズイ!千里!」

「それが、言いにくいんだけど・・・・」

「「まさか・・・・」」

「そのまさかです」

二人が変な音の聞こえ始めた方を見ると、酒で酔い条件を無視してバトルモード化した千歳が組の男達をばったばったと沈めていた。

「クソ親父・・・・」

「ボウズ・・・・」

「「止めるぞ!」」

こうしてロリコンと親バカの共同戦線が張られた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

〔レディ・・・・ゴー！〕

なのはのその掛け声で、鈴蘭ｖｓスバルの模擬戦は始まった。
今、鈴蘭は非の打ち所のないメイドと化している。つまり、服の襟についた赤いリボンが特徴のメイド服が彼女のバリアジャケットなのだ。
しかし、かなり違和感を覚える。理由は肩から下げたアサルトライフルと、右手の漆黒のガントレットにあった。
一応、両方鈴蘭のデバイスである。

「ふぅ・・・・落ち着いて。よしっ！行くよ、タキオン」

［イエス、プリンセス］

返事したのはガントレット型デバイスのタキオン。
鈴蘭が走り出すと、青い道がこちら伸びてくるのが見えた。
スバルのウイングロードだ。
すぐに鈴蘭はウイングロードの真下へ移動し、アサルトライフル型デバイス・ゼピルムの銃口を上へ向ける。

「ファイアぁ！」

短射モードから連射モードへ切り替えて、引き金を引く。
銃口から放たれた魔力弾は、ウイングロードに穴を開けていく。

「うわっ！」

魔力弾によってウイングロードは、今のままでは使用付加となりスバルは足を止めた。
鈴蘭はスバルのいると思われる場所へ向けゼピルムの引き金を引いた。が、着弾する直前でウイングロードは横から伸びる。
魔力弾は全て避けられた。
ウイングロードは廃墟ビル郡へ向かって伸びていく。
鈴蘭も走ってそれを追う。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「魔力弾でウイングロードを分断か。考えたね」

「確かにそうすりゃ、スバルはあれ以上進めねぇからな」

となのはとヴィータが実況する。
訓練所の外でモニターを通して、二人の模擬戦を見ている。
ここには二人の他にフェイトとシャマルとシャーリー、残りのＦＷ陣、そしてアリスとみーなとリリンがいる。

「あの、みーなさん。鈴蘭のあれって、バリアジャケットですよね」

「それ以外に何がある？」

ティアナの問いにそう返すが、聞きたいことはそこではないようで更に質問を続ける。

「何でメイド服なんですか？」

「それは分からんよ。鈴蘭にでも聞いてみるとよいよ」

と解答を拒否された。

すぐにリリンに聞こうとしたが、

「私も知らないの。だから、聞かないでほしいの」

と釘をさされてしまい、またモニターへ視線を戻した。

そこにはガントレットの甲の部分から魔力刃を伸ばし、スバルと接近戦をしている鈴蘭が映っていた。

「鈴蘭の動き雑だね。特に接近戦が。まるでケンカを見てるみたい」

フェイトの言葉になのはも頷くが、そこでリリンがフォローを入れる。

「それはしょうがないことなの」

「どういうこと、リリン」

「鈴蘭の戦い方は半分が我流、半分が一真が教えたからなの」

その瞬間、全員が納得した。というか、一真の名前が出れば嫌でも納得できると言うものだ。

「接近戦はヴィータちゃんにお願いできる？もし、千歳ちゃんが来たら千歳ちゃんにもお願いはするけど」

「了解だ」

「ありがとう、ヴィータちゃん」

このとき誰も、みーなの表情が一瞬歪んだことを気づくことはなかった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

タキオンの甲の部分から伸びた短い魔法刃で、鈴蘭はスバルの胸を狙う。

それをプロテクションで防ぐが、鈴蘭の左手にはゼピルムが握られており銃口はスバルの腹へつけられていた。

「っ・・・・！」

ゼピルムのモードは先程同様連射モード。

逃げることを遅れたスバルの腹に魔力弾数発が撃ち込まれる。

「かはっ・・・・」

しかしスバルは退かない。

「カートリッジロード」

リボルバーナックルのカートリッジがロードされ、ガンスモークが走る。

「リボルバー・・・・」

「タキオン！」

［プロテクション］

「キャノン！」

鈴蘭の張った紅いプロテクションは一瞬拮抗したものの割れて、スバルの拳は鈴蘭の胸へ吸い込まれる。
鈴蘭の軽い体は、簡単に吹き飛ばされビルに激突。
落下して地面に叩きつけられた。

「動かないけど、気絶したのかな？」

［その可能性は低いかと］

「そう――――っ！」

スバルは突然恐怖を感じた。
何に感じたかはしらないが、足がすくんで動けない。
そんなことをしていると、倒れていた鈴蘭がゆっくり立ち上がる。
が、何かが違う。
そして鈴蘭と目が合う。そこで鈴蘭の表情に気がついた。
笑っていたのだ。子供みたいに楽しそうに。

スバルを見詰める目は鮮やかな赤ではなく、禍々しい紅。

（鈴蘭？）

立ち上がった鈴蘭はこちらへ走ってくる。
ゼピルムから魔力弾が放たれ、スバルは後ろに跳んで下がるが着弾したのはさっきまでいた場所の少し前。
あのまま立っていてもスバルに魔力弾が当たることはなかった。
しかしスバルは避けてしまった。そして今の状況は宙に浮いている。

「しまっ――――」

スバルは気がついたが既に遅い。数発の魔力弾が眼前にあった。

［プロテクション］

マッハキャリバーが間一髪で発動したプロテクションでなんとか防ぎ、ウイングロードで空へと一旦逃げる。

（さっきまでの鈴蘭と違う・・・・）

そんな事を考えていると、突然鈴蘭が目の前に現れた。
普通なら地上から十メートル以上離れているこの場に、飛行魔法のない陸戦魔導師の鈴蘭が来られるはずがない。しかし現れた。
なぜ？
その疑問はすぐに分かった。
銃口の向きと、地面のクレーター。鈴蘭は地面に向かって強力な魔力弾を放ち、その反動で跳び上がって来たのだ。
しかし、鈴蘭はこのままでは移動は出来ない。そこで銃口を後ろへ向ける。

それを見たスバルは構える。

「リボルバー・・・・」

鈴蘭が引き金を引くと同時に、

「シュートッ！」

拳を突き出す。

向かってくる鈴蘭へ向かう打ち出された衝撃波。

鈴蘭はそれを反動の勢いを使いタキオンで衝撃波を打ち消すと、その右手でスバルのバリアジャケットを掴む。

ゼピルムを持ち上げて銃口ゆスバルの顔面へ。

そして引き金を引く――――

「そこまで、なの」

「がっ！」

ことは出来なかった。

後ろに現れたリリンが、ミ●ノのバットで鈴蘭を殴り飛ばしたからだ。

「え、な、何で？」

「打つ、叩く、殴る、砕くが・・・・何とこれ一つで可能なの。驚きの、超特価なの」

「それは全部同じ意味・・・・ってそうじゃなくて。何でここにいるの？」

「問題が起きたからなの。だから、模擬戦は終わりなの」

そう言い、リリンは鈴蘭の飛んでいった方を見た。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

それは鈴蘭の様子が変わった頃に遡る。

鈴蘭の雰囲気が変わったことは、ここにいる全員が気がついた。

「やっぱり、かのう」

「どういうことですか？」

エリオの質問にみーなはめんどくさそうに答えた。

「鈴蘭の欠点みたいなものだよ。あれは」

「欠点、ですか？」

「説明は、気がむいたら一真に聞くとよいよ」

みーなは説明が面倒らしく、すべてをここにいない一真に任した。

それにリリンもコクコクと首を降る。

哀れ、一真。

「それじゃ行くよ、リリン」

そう言いその場を離れようとする二人。

「どこに行くんですか？」

それに気がついたキャロが二人を呼び止める。

「鈴蘭を止めに行くの」

「模擬戦ですよ？」

「それで済むとよいのう？」

その言葉を聞いてなのは達は息をのむ。

「冗談じゃよ。しかし、止めた方がよいのは確かだの」

とても冗談には聞こえない。

それがみーなの話し方だった。

「それじゃ私も――――」

「無理だよ」

アリスが言いきる前に、みーなが遮る。

「何で？」

「今の鈴蘭は、わしらか一真のどちらかかしか止めるのは無理とわかっているからじゃよ。それに力だけじゃ、鈴蘭は止まらんよ」

「そうなの。実証済みなの」

二人はゆっくりとその場を離れた。

――――――――――

「リリン、頼めるか？」

二人は鈴蘭とスバルの戦っている場所の真下にいた。

「だったらあそこまで飛ばしてなの」

「それはよいが、加減はせぬよ？」

「構わないなの。どんとこい、なの」

リリンはピョンとみーなの掌の上に乗る。

「ほれ」

みーなが腕を上げて下ろすと、もうリリンはいなかった。

「さて。わしも行くかの」

鈴蘭が飛んでいくのを見ながら、みーなはそう小さく呟いた。

――――――――――

鈴蘭が落ちてきたのとみーながその場に着いたのは、ほぼ同じころだった。

「あれ？みーなさん、どうしてここに？模擬戦の最中ですよ？」

「模擬戦は終いじゃ」

「どうしてですか？こんなに楽しいのに」

普通の人間なら怖いと感じる笑みを、鈴蘭はみーなへ向ける。
それを見てみーなは小さくため息をつくと、

「しょうがないのう。一真のように言うなれば、お仕置き、かのう」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「いい加減にしろよ！」

「ウルセェ！」

（この酔っ払いが！）

今、一真は酔って暴走している千歳を止めるため奮闘中。
本来ならば千治がいたのだが、

「やっぱり千歳に手をあげるの無理」

と言って攻撃しなかったところを突かれ、早々に脱落してしまったのだ。

（ほんっと、使えねぇ親バカめ！少しはダメージを与えてから落ちやがれ！）

「オラオラオラオラ♪」

「ちくしょう！！」

楽しそうに一真へ攻撃を続ける千歳。目は完全にトロンとなっている。

「気絶させてぇんだが・・・・って千里さん？」

「ふぇ？あ、カズ君らぁ～」

（すっかり忘れてた。この人、酒飲むと子どもっぽくなるんだった・・・・）

一真がそんな事を考えながらしゃがむと、頭上を竹刀が通りすぎる。跳んだ千歳が、一真の顔を狙って振り抜いたものだ。

［ちなみにあんたにとっちゃ悲しい報告だけど。今ここで正気なのは、あんたただ一人よ］

神無の報告を聞いて、一真のこめかみに青筋が浮く。

「ふ、ふ、ふ・・・・」

［か、一真？］

「ふざけんじゃねぇぞぉぉおおぉおおぉぉ！！！！！！！！」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「ん・・・あれ？」

「目、覚めたのね」

「シャマル先生・・・・」

「痛いところとかある？」

「いえ、大丈夫です」

シャマルと会話をしながら、鈴蘭はなぜ自分がここにいるのかを思い出していた。

（確かスバルさんと模擬戦してて・・・あ、そっか。私またあの状態に・・・お兄ちゃんに怒られる）

そう思うと、鈴蘭のテンションは下がり始めた。

「す、鈴蘭？」

「だ、大丈夫です！」

急いでベッドから下りた鈴蘭は、制服の上着を持つと一礼をして部屋から出ていった。

（えっと、これからどうしよう・・・・一回部屋に行って、それからそれから・・・・）

「あ、鈴蘭」

名前を呼ばれ体をビクッとさせた。

「あんた、大丈夫？」

「あ、えっと・・・・」

鈴蘭は目の前の人物の名前を思い出そうとするが、よく考えてみると名前を聞いてなかったことを思い出した。
目の前の人物も名前を言ってなかったことを思い出し、

「あ、そっか。まだ名前、言ってなかったわね。あたしはティアナ・ランスターよ。よろしく」

「神童鈴蘭です。よろしくお願いします、ティアナさん」

二度目の自己紹介なのだが、ツッコミは入れない。
というか入れてはいけない。

「そういえば、みーなさんとリリンが探してたわよ。っていうか、みーなさんにパシられてるんだけどね」

やれやれとティアナが言うが、鈴蘭には届いていない。
顔を真っ青に染めてガタガタ震えていた。

「ち、ちょっと、どうしたのよ！？」

「は、へ、だ、だ、大丈夫でふっ！」

どこをどう見たら大丈夫なのだろうか。

「て、ち、ティアナさん！みーなさんふぁ！？」

「食堂でご飯食べてたわよ・・・・」

「分かりました。あひがとうございまひゅ」

噛み噛みなお礼を言い残し、鈴蘭は食堂へ向かっていた。

（大丈夫かしら？）

手と足を一緒に動かして歩いている鈴蘭を見て、ティアナはそう思った。

――――――――――――

「えっと、ここだよね」

食堂に着いた鈴蘭は恐る恐る中を見た。

中ではテーブル一杯に大盛りの料理の乗った皿を並べ、それを一人で食べている。その隣ではリリンが食べていた。

（今日、何言われるんだろ・・・・でも、しょうがないよね）

覚悟を決めて鈴蘭は食堂へと入る。

「あのみーなさん？」

「鈴蘭か・・・あれのことは何も言わんよ。わしらも予想はしてて、未然に防げなかったからの。一応、一真には報告だけするが・・・」

「やっぱり」

一真に過去説教されたことのある鈴蘭は、それを聞いて更にテンションがさがる。が、どうにもならないと理解して諦めた。

「みーな、止めてくれてありがとうございます」

「構わんよ」

「ありがとうございます」

みーなにお礼を言い、食堂を後にしようとしたが、

「すーずらん！」

「わ、きゃっ！」

目の前に現れたスバルに捕まった。

「す、スバルさん」

「一緒にご飯食べよ♪」

「えっと・・・・」

「鈴蘭さん、食べましょう」

一緒にいたキャロにも言われ鈴蘭は笑顔で、

「はい！」

と返事をした。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「ぜぇ、ぜぇ、ぜぇ・・・やっと、寝たか」

酔った千歳がようやく眠り、一真は解放された。

［お疲れさま、一真］

「あぁ」

気持ち良さそうに眠る千歳を、一真は忌々しそうに睨める。

（このヤロウ・・・起きたらお仕置きだ）

一真が座ってもう一度酒を飲もうとした時だった。

酒で酔っていた男達がケンカを始めたのだ。

そして殴り飛ばされた一人が、一真の目の前にあった料理を吹き飛

ばした。

「う〝おい・・・・」

立ち上がると同時に、飛んできた男の顔を踏みつける。

「テメェら・・・人がやっと休憩して酒が飲めるかと思ったら、次はケンカか。少しは考えろや！！神無、セットアップ！」

［ち、ちょっと一真！］

男達全員が一真を見る。

「死ねぇぇぇ！」

その日、海鳴市では十数台の救急車が一度に確認され、全てが楠木家に向かったとか。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

とある管理外世界。

そこには白衣を着た男が、大量のカプセルの前にたっていた。

そのカプセルの数は千を超える。

「くくくく・・・・」

「はぁ～い、お久しぶり」

暗闇から銀髪の女性が現れた。
その女性はラスト。《罪人》のリーダー的存在である。

「君か・・・何の用だ?」

「特に意味はないわよ。ただ、どうしてるのか気になっただけだから」

「順調だ。君達がスポンサーとなってくれたおかげでな」

「そう。それはよかったわ」

ラストはカプセルの中を除き込み、イヤらしい笑みを浮かべる。
その視線の先にはカプセルの中で眠る子供の姿だった。

「成功したの?」

「試作品が数体だが、完成している。それも出来たばかりだからな。まだまともに動くかどうかもまだわからない」

「そっ。じゃあ、それが終わった教えて。やってもらいたいことがあるから」

「いいだろう。君らには借りがあるからな」

白衣の男はラストと視線を合わせることはなかった。

《一真の部屋》

一真「・・・・・・・・・」

なのは「一真君」

一真「・・・・・・・・・」

神無［一真？］

一真「ＺＺＺＺ・・・・・・」

アリス「寝てる・・・・」

千歳「一真可愛い～」

な・神・ア「「［どこが？］」」

千歳「そうだ。これ飲ましてみようっと♪」

アリス「何それ？」

千歳「身体退行薬。本当は身心退行薬を使いたいんだけど、《一真の部屋》じゃは我慢だね♪」

神無［我慢って、これが《一真の部屋》じゃなかったら使ってたの？］

千歳「うん♪」

なのは「えっと、聞かなかったことにして今回のゲストを紹介しま

す。今回は私の親友で幼なじみの一人の、フェイト・T・ハラオウンちゃんです♪」

フェイト「えっと、よろしく」

アリス「いらっしゃい、フェイト」

なのは「あそこの二人にツッコミはダメだよ」

フェイト「う、うん」

千歳「大・成・功♪一真がちっちゃくなったぁ！」

フェイト「何で！？」

神無「千歳ちゃんの持ってる薬が原因ね」

フェイト「それって大丈夫、なの？」

千歳「大丈夫。一真、一回目じゃないからね」

な・神・ア・フ

（（（（ご愁傷さま））））

幼一真「ん、あぁ・・・？始まってた・・・んじゃこりゃあああぁぁあぁああ！？」

なのは「私達じゃないよ」

ア・フ「「（コクコク）」」

幼一真「千歳ぇ～・・・・」

千歳「てぇへ♪」

幼一真「ぶっ殺す！」

ジャキッ

なのは「したら、“お話し”、だよ？」

フェイト「な、なのは？」

神無「ここじゃこんなのが普通だから、早く慣れることをオススメするわ」

フェイト「無理だよ。今回が初めてなんだから」

アリス「そりゃあね～」

千歳「それじゃ、色々とあるかもしれないけど無視して、お返事コーナーへレッツゴー♪」

來人さんへ

千歳「お母さんは私みたいにならないから安心してね～」

フェイト「それでも怖いよね」

神無「一真が逆らえないから今のところ、ある意味最強の存在ね」

幼一真「伊吹、サンキュー！かなりうめぇぞ、これ♪」

アリス「何か、そのマーボーカレー。見てるだけで暑くなってきた・・・」

なのは「でも一真君は何ともないんだよね。すごい・・・伊吹先輩、たくさんのケーキやシュークリームありがとうございます」

千歳「おいし～♪」

シグマさんへ

幼一真「食うってありか？あの世への道だぞ？」

アリス「まぁ、リボーだから」

神無［リボーだからね］

なのは「リボーさんだから、だけで納得出来る自分が怖い・・・」

フェイト「ロウガさん、シルバーアクセありがとうございます♪」

千歳「きれい～」

アリス「今度のデートのとき付けたら？」

千歳「へ？」

幼一真「ナイフ？どこにあるんだ、そんなもん？」

フェイト「上だよ上！」

幼一真「へ・・・・ぎゃあああぁぁあぁああ！！」

鴨川秘さんへ

なのは「読んでくださってありがとうございます。これからもよろしくお願いしますね」

フェイト「一真ってそんなに弄られてるの？」

神無［結構ね。しかもキノコで］

幼一真「祇帰。お前とソラくらいだ。そうやってフォローしてくれるのは」

アリス「泣かない、泣かない。低反発安眠枕と青椒肉絲を送ってくれたから」

幼一真「鴨川さん、サンキュー！」

千歳「アップルパイ、ありがとう♪アリスちゃん、切って～」

アリス「はいはい」

なのは「これの半分を千歳ちゃんが食べるんだよね・・・・」

フェイト「本当なの、それ？」

なのは「うん。すごいよ、千歳ちゃんは。二メートルのロールケーキのほとんどを食べたから」

フェイト「あははは・・・・」

Ｎａｋｉさんへ

幼一真「できれば、あぁはなってほしくねぇな」

神無［これ以上勝てなくなるのは、あんたにとっては嫌だものね］

幼一真「そうだ・・・またかぁ！」

フェイト「へ、どうしたの一真？」

なのは「えっと、セラフィムからキノコが送られてきたんだよ」

フェイト「そうなんだ」

なのは「今回は猫鍋らしいよ。その中にキノコがあるんだって」

アリス「猫！」

千歳「鍋！」

幼一真「消――――！」

千・ア「「させるかぁぁぁ！」」

幼一真「へぶぅっ・・・・」

千・ア「「可愛い～♪」」

幼一真「キノコだけ消去・・・・完了・・・・」

バタッ

ＴＯＵＤＡさんへ

な・ア・フ「「「一真（君）・・・・」」」

幼一真「そんな目で見るんじゃねぇ！つか、誰が拐うか！保護って言ったろ保護って！」

フェイト「っていう誘拐でしょ」

なのは「うんうん」

幼一真「おい、管理局員！お前らが言えた立場か！？それに、妄想ってなんだよ妄想って！最後に晶彦ぉ！俺は絶対にそんな海には溺れない！ぜぇ、ぜぇ、ぜぇ・・・・」

神無［お疲れさま］

幼一真「まだだぁ。お兄ちゃんと呼ばせてる訳じゃねぇぞ。あれは気づいたら呼んでたんだよ。最後に、誰が変態オブ変態じゃあああ

ああ！この、クソ豆粒マイクロミジンコ狐がぁぁぁぁ！」

パチパチパ

アリス「今日は一真がアウェイな日だね」

千歳「えっと隆浩君。このお守りは・・・・」

フェイト「頑張ってってことだよ、千歳」

千歳「う、うん・・・・」

U．Tさんへ

アリス「私も驚いたよ。何で鈴蘭のこと言ってくれなかったの？」

幼一真「言うのを忘れてただけだ」

アリス「本当？」

幼一真「何でそう疑う？」

千歳「私の家って普通だよね？」

フェイト「あんまりいないと思うよ」

なのは「やっぱり千歳ちゃんって天然だよね」

神無「そんな当たり前のことを今更言うことじゃないけどね」

アリス「で、本当は？」

幼一真「だから、忘れてただけって言ってんだろうが！」

アリス「・・・・」

幼一真「な、何だよ？」

アリス「何だろうね～」

フェイト「ねぇ、一真？」

幼一真「何だよ？」

フェイト「やっぱり一真って、ロリコン？」

幼一真「うるせぇよ、ショタ&ロリコン」

フェイト「殺られたい？」

幼一真「テメェがな・・・・」

ジャキッ

なのは「二人とも、分かってるよね？」

一・フ「「はい、ごめんなさい」」

アリス「あの三人は無視して、次回予告！」

千歳「地球から帰ってきた私は、アリスちゃんとなのはちゃん達に教えてもらいながら嘱託魔導師の試験の勉強を始めた」

アリス「その内容はとてもハード。なかなか体が追い付いていかない」

一真「二人が試験勉強している頃、俺は鈴蘭と訓練を始めていた」

神無「次回、魔法少女リリカルなのは～七つの大罪～」

な・フ「「【試験一週間前】」」

一同『次回へ、スタンバイレディ！』

試験一週間前・前編

「ただいま・・・・・」

「・・・・帰った」

翌日の朝。

苦痛で顔を歪めている千歳と、誰がどう見ても機嫌の悪い一真が帰ってきた。

「おかえり・・・・って、どうしたん二人とも?」

「さあな?俺は寝る」

そう言うと、神無をはやてに渡して部屋へと向かってしまった。

神無に聞けと言うことだろう。

「えっと、神無さん。これは・・・・?」

[説明の前に、千歳ちゃんに水を持ってきてあげてほしいんだけど」

「水?」

そう言われて、千歳が頭を押さえて唸っていることに気がついた。

それを見て、はやては千歳が二日酔いだと気がつき、

「了解や」

このときはやては、早く水を持ってきて神無から説明を聞いた方が

いいような気がしていた。
なぜかは知らないが、そんな気がしていたならなかった。

「まず、千歳ちゃんの許可はもらえたんやね？」

［それはね。問題はそこじゃないのよ］

千歳を部屋へ連れていったあと、はやて達は隊長室に戻ってきていた。

［問題はそのあとにあった宴会よ］

「宴会？」

神無はあの宴会で起きた全ての惨劇をはやてに伝えた。

「それはまた、一真君もご苦労様やな・・・・」

［で、その後始末なんだけど。一真が一睡もしないでしたのよ］

そこまで聞いてはやては悟った。
過去に似たようなことがあり、それに酷似しているということに。

「今すぐみんなに伝えな！」

すぐにはやては全フロアの各部屋に回線を繋ぎ、機動六課の危機を防ぐための連絡を始める。

［みんな。今から言うことをちゃんと聞いてな。一真君が帰ってるんやけど寝――――――］

ドォォン

全てを言い終える前に、寮の方から何かが壊れるような音が。

「「遅かった・・・・」」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「えっ!?一真帰ってるの!?」

「さっき、そこで見かけましたよ。確か、寮の方に向かってたような・・・・」

一緒に朝食をとっていたキャロからその話を聞いたアリスは、流し込むように食べると、

「行ってくる!」

「あ、でもっ・・・・って、聞いてない」

キャロがなにかを言おうとしたときには、アリスはすでに食堂にはいなかった。

本人曰く、一真のためなら身体能力は1．5倍なのだとか。本当かどうかは知らないが。

―――――――――――――

「ふふ～ん♪一真が帰ってる♪一真に会える！」

寮の廊下。
アリスは歌を歌い、スキップで一真の部屋に向かっている。

一真ともう少しで会える。そう思うだけで、彼女のテンションは上昇する一方である。
そして一真の部屋の前に着いたアリスは、どあをノックした。

「一真、いる？」

返事はない。
アリスはノックを繰り返す。
何度も何度も何度も。
そしてドアが吹き飛ぶ。

ドォォン

煙が立ち込めるなか、部屋から銀の眼を光らせてその部屋の主が現れる。
鬼神再臨。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

六課に響くアラート。
理由はただ一つ。

眠りを妨げられ、再臨した鬼神（一真）の暴走であった。

『アリス（ちゃん／さん／桜ノ宮）！』

「ごめんなさい・・・・」

今一真は寮の中。ヴァイス達が何とか持ちこたえているはずだ。
やっとのことで逃げてきたアリスは、なのは達に囲まれていた。

「だって、一真に会えなかったし・・・・」

『だから？』

「・・・ごめんなさい」

「ま、このことは後にしてだな。どうやってあいつを止める？」

とヴィータが聞くが、ここにいる誰もそれに答えることができない。
決定的な打開策を持ち合わせていないのだ。

「千歳さんなら一真さんを止められるんじゃ？」

［無理ね］

エリオの魅力的な提案だが、それを実行できない訳がある。

［だって、二日酔いでダウンしてるから］

「二日酔い、ですか？」

［えぇ。昨日ね・・・・］

はやてに話したことをもう一度彼女達に言う。
聞き終わる頃には、全員が苦笑いを浮かべていた。

「お兄ちゃん・・・・」

「バカなの。死んでも治らないの」

「リリン。それは言い過ぎ」

「それで、結局どうするのじゃ？今のままだと、一真は暴れ続けることは間違いないだろう？」

みーなに言われて全員が思考の海へダイブ。
考えること数秒。スバルがあることを思い付いた。

「一真さんが嫌いな物を食べさせたり、見せたりすれば・・・・」

「バカ。そんなものあるわけ――――」

「「［ある！］」」

神無、アリス、鈴蘭が同時に言う。
全員が予想外だったらしく驚いている。

「あるの？」

「うん。あるよ」

フェイトの質問にアリスが頷く。その目には自信が満ち溢れていた。

「それで、神童の嫌いな物とはなんだ？」

「「［茸］」」

三つの声は再びハモり、その答えを言った。

『茸？』

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「以外だよね。一真さんの嫌いな物が茸だなんて」

「そうですね。でも、食べただけで気絶って本当なんでしょうか？」

スバルとエリオは、一真の嫌いな物である茸を貰うため食堂へ向かっていた。

服装は制服ではなくバリアジャケットを纏っている。理由は簡単。

おそらく、寮にいるだろう寝不足の鬼神がこっちに来ていたらとんでもないことになるからだ。

「どうだろう？」

さきの作戦会議ではこんな会話があった。

「それって本当なのか？」

「はい。お兄ちゃん、ミゼットお婆ちゃんの料理に茸、特に椎茸が入ってると魔法で消そうとしてましたから」

［終いには家出しようとしてたわね・・・・］

そこまで茸が嫌いだとは誰も思っていなかったらしい。

そこで一つの疑問ができた。

「茸を一真に食べさせたらどうなるの？」

「私が生きてる頃はそんなに酷くはなかったんだけど、今は食べさせたりしたら病院送りね」

絶句。

茸一つでそこまでなる人間が存在していいのだろうか。まぁ、存在してるのだからいいのだろうが。

「多分、一真にとっては毒なんじゃない？私はよくわからないけど・・・・」

「じゃあ、作戦はこうやな。まず、スバルとエリオが食堂で茸をもらってくる。それまでは私たちが一真君を押さえとくわ。で、このあとが一番の問題や」

「一真君にどうやって茸を食べさせるか、だよね？はやてちゃん」

「せや」

そう。それが問題なのだ。
暴走中の一真はかなり危ない。今回の暴走があそこまでではないだろうが、危険なのは間違いない。

「あの、部隊長」

「どうしたんや、キャロ？」

「あの時のようにシャマルさんの魔法を使えば・・・・」

『あっ！』

と、こんな感じで作戦は決まった。

「すみませ～ん」

食堂に来た二人は呼ぶが、こんな状況だ。人がいるわけがない。

「誰もいませんね」

「だね。じゃあ、勝手に探してみる？」

「そうですね。ことがことですし」

ことがことと言うが、そんなに大事という訳ではない。
ただ、寝れないというだけの理由で暴れている一真を止めようというだけなのだ。

しかし、それは彼らにとっては驚異でしかない。
一番の理由としては、いつ神無を奪われ獄龍破を放たれるのではないか、というものがある。

「エリオ、あった～？」

「ないです。スバルさんは？」

「こっちもダメ。どこにあるんだろ？」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「何よあれ？」

「さ、さぁ・・・・」

なのは達の前には口から何かを出し、体からは怒りのオーラをだす一真。
その体の後ろには鬼神。

「鬼にしか見えへんよな」

「う、うん」

「キャロ、行くわよ」

「は、はい！」

二人の周りにはスフィアが浮かぶ。

「シュー――――」

「セロ・オスキュラス！」

二人が攻撃をする前に、一真の掌から放たれた砲撃で二人は消えた。

『ティアナ！キャロ！』

セロ・オスキュラスを放った腕を下ろすと、一真は怒りの籠った目をなのは達へ向ける。
そこで、鬼神（一真）は初めて口を開く。

「・・・・スを・・・・」

「え？」

「アリスを・・・・アリスを出せぇぇぇ！」

『へ？』

その言葉に全員が言葉を失う。
完全に予想外だった。

「俺の眠りを妨げたクソヤロウをここに連れてこい！」

彼の言葉通り、初めから狙いはアリス一人。
よけいに反撃するから一真がやり返す。

「それじゃ、アリス」

「ちょ、ちょっと待ってよ！」

「さっさと行けなの」

アリスはリリンに一真の方へ蹴り飛ばされてしまった。

「えっと、一真？」

ニタァと笑い、一真はアリスの肩を掴む。その肩はガタガタと震え始めた。

「お仕置き、な？」

「い、いや・・・・」

「連行」

「いやぁぁぁぁぁぁ！！」

『ご愁傷さま』

その日、アリスへのお仕置きは一真が眠るまで続いた。
余談ではあるが、スバル達が苜を持ってきたのは一真がアリスにお仕置きを始めてからであった。
これまた余談であるが、被害は過去最低で原因を作ったアリス一人とティアナとキャロ、それと一真の部屋のドアのみであった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

次の日。
一真とシグナムを覗いた隊長陣、ＦＷメンバーに千歳とアリス、みーなとリリンが訓練所にいた。
今日から千歳とアリスの試験勉強を始める予定だ。

「じゃあ・・・フェイト、はやて。この二人を頼んだ」

「一真じゃないの？」

「あぁ。お前ら見ただろ？鈴蘭のあれ」

「あれって、鈴蘭の雰囲気が変わったことですか？」

一番それを近くで見たスバルが聞く。

「それだ。どうせそこの二人は説明してねぇだろうから、説明しておいてやる。あれは、簡単に言えば鈴蘭の問題点でな。模擬戦や実戦で「楽しい」って感情が高まるとあんな感じになる。まぁ、一種の興奮状態だと思ってくれ。あの状態になると、けっこう過激になってな。いろいろとやり過ぎるんだよ。それと目の色が変わったのは、あの状態になったときだけな」

「実戦であんな状態って、ヤベェだろ」

それを聞いて一真は思い出し笑いをする。

鈴蘭はというと、しょんぼりしていた。

「今は俺やみーな達が特訓して前ほどあの状態にならないようにしてるが、完璧じゃねぇ。つーわけで、これからそれの特訓だ。じゃ行ってくる」

――――――――――――――

「さて、これから特訓なんだが」

「はいっ！」

向かい合う二人は真剣な顔。

一真の後ろにみーな、鈴蘭の後ろにはリリンが立っている。

「その前にお仕置きだ」

「な、何で？」

「当たり前だろうが。俺がいなくても、あれはやるなって言ったろ。しかも約束まできちんとしてな」

左の手をデコピンの形にして、鈴蘭の額へ向ける。

「そ、それだけは・・・・」

「いやだ。リリン」

「わかったなの」

「リリン！？」

紅いバインドによって、鈴蘭の体は縛られる。

リリンがまともに言うことを聞くということは、彼女自身が面白がっているということだ。

「言い残すことは？」

「ごめんなさぁ～い！」

「許さねぇ」

バチィッ！

魔力で強化させた一撃が鈴蘭の額にジャストミート。

「いったぁぁぁぁあぁぁあぁあい！！」

鈴蘭の沈痛な叫びが、訓練所全体に木霊した。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「それじゃ、何から始めようか？」

「そやなぁ・・・戦闘はそんなに重視せんでもえぇ。問題は、やっぱり儀式魔法かな？」

「だね」

と、二人が何の訓練から始めようか話していると、

「ねぇ、アリスちゃん？儀式魔法って何？」

「そっか。千歳知らないんだったね。どうしようか？」

《いい方法があるぜ》

突然全員の頭の中に一真の声が響く。

念話だ。

《いい方法って何？》

《こんな呪文を知ってるか？リリカル、マジカ――――》

《だめぇぇぇえええぇ！》

一真の声を遮ってなのはの叫び声が全員の頭に聞こえた。

何の叫びなのか？

全員が考えていると、なのは言葉を続ける。

《前にも言ったけど、何でそれを一真君が！？知らないはずだよねぇ！？》

《くくくく・・・俺に不可能はねぇんだよ》

《一真君。“お話し”しようか？》

《やれるもんならやってみろよ、なのは！今日の俺は絶好調だぜぇ！》

絶好調ということは、昨日ぐっすりと眠れたのだろう。
まぁ、その過程で犠牲者が出ているのだが気にしないことに。

《いいよ。私らしいやり方で殺るから・・・・》

どこかで聞いたことのあるようなセリフ。
ヴィータの脳裏には、なのはのバックに炎が見えたらしい。
直後、一真のいる方へ飛んでいくなのはが見えたがスルー。
そして爆音が聞こえ始めた。

「す、スルーでいいよね？」

「う、うん」

と三人がなっとくしようとしたところで、空気をを読まない発言が飛び出す。

「さっき一真の言ってた『リリカル、マジカ』って何？」

正確には『リリカル、マジカル』なのだが、なのはが遮ったことによって最後の『ル』が聞こえなかったようだ。

「正確には『リリカル、マジカル』。これはなのはの儀式魔法の呪文なんだ。でも、何で一真が知ってるんだろ？」

「せやな。あれって、一真君に会う前やろ？」

「うん。だから、知ってるはずがないんだけど・・・・」

疑問が残ってしまったが、今すぐに分かることではないので二人はスルー。

特訓を始めるため、二人は千歳達の方を見た。

「それじゃ始めていこうか」

「「はいっ！」」

こうして試験の特訓が始まった。

まともに特訓が出きるのか不安ではあるが、おそらく問題はないはずだ。たぶん。

《一真の部屋》

一真「今回、全然進まなかったな。予告の半分か？たくっ。何してんだよ」

一真以外『一真（君／あんた）のせい（だよ／よ）！』

一真「何かあったのか？」

千歳「しらばっくれてーーーー」

ガシィ

一真「まぁしらばっくれてもしょうがねぇけどよ、もとはテメェから始まったことだよなぁ？甘党ロリ娘？」

千歳「っ・・・だ、だけどな！」

一真「るせぇよ・・・“お仕置き”だ。いいな？」

千歳「にゃぁあぁあああぁぁ！！！！」

なのは「すごい。バトルモードの千歳ちゃんに勝った」

神無［あの状態の一真は最強だものね］

アリス「たぶん、なのは達三人が本気でやっても勝てないよ」

なのは「思ったんだけど、あの“お仕置き”って何をするの？」

アリス「簡単に言えば、やられて嫌なことを延々と・・・」

神無［千歳ちゃんなら擽られること。アリスなら、延々と蛇やは虫類が周りに群がっている幻を見せられるのよね？］

アリス「うん・・・」

なのは「こわっ・・・・」

神無［えっと、こんな空気を無くすために今回もゲスト呼んでます。今回は鈴蘭のユニゾンデバイスで、六課の最年長。みーなです］

みーな「フム・・・今回はわしだけかの？」

なのは「はい。毎回一人、本編から呼んでます」

みーな「そうか?で、あれは何じゃ?」

神無［現在進行形で、一真の“お仕置き”の真っ最中よ］

みーな「一つ聞くが、そもそも、ここは何じゃ?」

な・神・ア「「［理解してなかった!?］」」

アリス「えっと、ここは後書きコーナーで、感想のお返事や次回予告したりするの」

みーな「そうか」

神無［２０回以上してきて、説明することになるとは思ってもみなかったわ・・・・］

なのは「それだけみーなさんが無関心ってことだね」

一真「ふぅ。終わった、終わった」

千歳「はぁ、はぁ、はぁ・・・・」

一真「今日はお前だったのか、みーな」

みーな「何じゃ?わしだと悪いのかの?」

一真「いいや。そういうわけじゃねぇがな」

なのは「そろそろお返事コーナーに行こうか」

灰色の野良猫さんへ

アリス「ソラ君にお酒をのしたのは誰！？」

一真「誰も知らねぇよ。つか、誰がロリコンじゃあああ！」

神無［怒らない怒らない。ソラがちゃんとフォローしてくれたでしょ］

一真「俺をロリコンって呼ぶ奴は、敵だぁぁ！」

みーな「うるさいよ、一真。少しは静かにの」

なのは「そのお酒はどこから？」

みーな「持ってきてた物だよ。飲むか？」

なのは「結構です」

みーな「千歳は飲むかの？」

千歳「うん。飲――――」

一真「飲ませねぇよ！」

鴨川秘さんへ

な・千・ア「「「うにゃあああああ！」」」

一真「祇帰、ナイスだ。ナイスすぎる！くははははは！」

神無［私が効かないのは分かるけど、何でみーなは効かないのよ？］

みーな「わしがあの程度の幻術、効くわけがないじゃろ」

一真「ま、確かにな。こいつにんなもんが効いたら、天変地異の前触れだろ」

神無［てか、そのムース。みんなでって送られて来なかった？もう半分ないし］

みーな「そうだったかの？」

一真「・・・ほんと食欲はスゲェな」

Ｎａｋｉさんへ

一真「こんなＴ－シャツ、いるかぁぁあぁぁあ！！」

アリス「ぴったりじゃない」

一真「ぶっ殺すぞ！」

みーな「では、このＴ－シャツを送ってはどうかの？」

なのは「『ＹＥＳ！ブラ＆シスコン！』って・・・・」

千歳「でもね、ラディ君に限ってはブラコンもシスコンも言い換えたら『ショタコン』と『ロリコン』だよね」

一・な・神・ア『あー』

千歳「だから『ＹＥＳ！ショタ＆ロリコン！』が、隙間なく書いてあるＴ－シャツをどうぞ」

一・な・神・ア『そのＴ－シャツ、こわっ！』

紅龍さんへ

千歳「どうしたの？こんな美味しそうなケーキなのに」

一真「何か体が、それを食べるなって言ってる・・・・」

アリス「それじゃ切るよ」

なのは「なにこれ・・・・」

神無［キノコね・・・・って、あんたこれが分かったの？］

一真「直感だ」

みーな「いらないなら、わしにくれんかの？」

神無［食べるの！？］

みーな「意外といけるよ」

アリス「まじ・・・・」

U．Tさんへ

なのは「クラウドさんがお酒で酔ったらどうなるんだろ？」

一真「はっちゃけたりな」

アリス「うわっ。全然キャラじゃない」

みーな「何でそんなに避けるのかの？」

神無［酔っぱらうからじゃない？］

千歳「みーなさん、お酒――――」

一真「いい加減にしろぉぉぉぉ！」

シグマさんへ

一真「まぁリボーの言ってることは正解だな。なぁ、お前ら？」

なのは「な、何のことかな・・・・」

千歳「し、知らないよ・・・・」

一真「ほぅ・・・・しらばっくれるか。じゃあ、“お仕――――」

な・千「「ごめんなさい！」」

神無［アリスちゃんはどうなの？］

アリス「どうとは？」

神無［お酒、強いの？］

アリス「普通、じゃないですか？よくわからないですけど。って、みーなさんはいつまでも飲んでるの？」

みーな「なくまるまでまでじゃよ。それ以外に何がある？」

アリス「いえ、何も・・・・」

ＺＥＲＯさんへ

神無［ＺＥＲＯさん、お疲れさま］

一真「ふんっ。管理局員としての自覚だぁ？知るかよ、んなこたぁ。つかゼロ。テメェ、ＫＤＧだろ？俺は反ＫＤＧだからなぁ！テメェの指図なんぞ聞くが！」

神無［・・・あんたねぇ。てか、祐輔。本当に物好きよ。千歳ちゃんの稽古を受けたいなんて］

千歳「そうなの？」

アリス「そうだよ。あんなにキツイの誰が自分から・・・・」

みーな「飽きることなく最後まで読んでくれたか。ありがたいの」

なのは「そうですね。これからもよろしくお願いします」

千歳「そうだ。作者さんからこんな手紙が来てたよ」

一真「あー、『今回は次回予告なし。やる必要ないからな。それと、前後編だから。読者のみなさんよろしくお願いします』だと」

神無「そうなの。じゃあ、いつものあれで締めましょ」

千歳「あれだね。やろやろ♪」

一同『次回へ、スタンバイレディ！』

試験一週間前・後編（前書き）

サブタイトルを間違えていたので直しました。

それでは始まります。

試験一週間前・後編

「まず聞くけど、アリスちゃんはできるんか？」

「うん。一つだけだけどね」

「千歳ちゃんは？」

「私が使えるのは確か、身体強化系の魔法と攻撃魔法が半分ずつくらい、かな？儀式魔法みたいに呪文を使うようなの魔法はないよ」

と聞いて、二人は悩む。

「それじゃまず、アリスちゃん。やってみてくれるか？」

「いいけどこれ、たまにしか使わないから加減できないよ？」

「まぁ、その辺りはなんとかするから」

「うん。でも、離れててね」

三人が頷くとレヴィアタンを起動する。

「太陽も出てるし。よし、いくよレヴィアタン」

［ＹＥＳ］

アリスは目を閉じて、空へ右手の掌を掲げる。

「天より地を見下ろす神よ」

アリスが詠唱を始めると訓練場の空から雲がなくなり、青空と太陽だけになる。
すると、上空に光輝く球体が一つ現れ光を強くしながら急激に膨張を始めた。

「その光で、我が前の穢れを焦がせ！」

球体の膨張は止まるが、光はまだまだ強くなる。

「天照（アマテラス）！」

その言葉と共に球体から地上に向け、全方位へ何本も光が延びる。
光が触れた場所からは炎が上がり、燃え始めた。
光が消えて、辺りを見渡すと大惨事。
アリスはそれを見て

「やっぱりこうなったか・・・・」

と呟いた。

「今のがアリスの儀式魔法・・・・」

「すごいな・・・・」

「これ、当たったらどうなるん？」

「蒸発」

「「「え？」」」

普通の顔でとんでもないことを言い放った。

「だから蒸発するの。まぁ、かすったくらいならそこが削げて燃え始めるけど」

「非殺傷設定じゃないの？」

「それがね。いくら術式を変えても、なぜか非殺傷設定にならないんだよね。不思議なことに」

首をかしげながらそう言うアリス。

作った当人もなぜこのような魔法になったかわかっていない。

「人に向かって使ったことは、もちろんないよな？」

「それがね、あるんだ。ラスト達といるときに。そしたらここまで強力で、ラスト達からも自分達も危ないから使うなって」

さすがの彼女たちでも、あの魔法『天照』には身の危険を感じたらしい。

それはそうだろう。

巻き込まれたら跡形もなく消えてしまうのだから。

それを聞いてフェイト達もあんぐり。

「ちょっとまて。んな危ない魔法。何で作ったんだ？」

いつの間にかバトルモードに変わっていた。

さっきの『天照』を避けるためだろう。

「いや。本当はこんな魔法になるとは思ってなかったんだよね・・・・完全に予想外ってやつなの。あははは・・・・」

苦笑いを浮かべ、頭へ手を持っていく。

「じゃあ次は千歳ちゃんの番やけど、出来る？」

「どうだろうな。難しいかもしれねぇ。出来たとしても、かなり簡単なもんだろ。ま、試験まで一週間だからそれまで頑張ってみる」

「そんなら私が教えてあげるよ」

「それじゃ、頼むな。はやて」

「了解や」

とこんな感じで儀式魔法の問題が解決したころ。

かなりハイテンションな鬼神と、ぶちキレた魔王はというと・・・・

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「落ちろ！」

と、らしくない言葉を放ちバスターを目の前の男へ容赦なく撃つなのは。

その目には一真への怒りが籠っている。いや、怒りを通り越して殺

意へと変わっていた。

「テメェが落ちろ！」

そう言い返し、バスターをぶった切る一真。
その余波のような感じで、煉刃が放たれる。
そして、巻き込まれた感じの鈴蘭達三人は、

「鈴蘭、何とかしろなの」

「無理だから！みーなさん！何とかならないんですか！？」

「ぬしが間に入って、お互いの魔法を食らえば止まるだろうのう」

やる気のない声で、さらりととんでもないことを言ってのける。
その顔に悪気は微塵もない。そもそもそんなものが彼女にあるはずがない。

「そんな危険なことできますか！行くならみーなさんが行ってください！」

「嫌じゃ。ま、この場から退くのが一番じゃの」

そんな会話をしているうちに二人のケンカはヒートアップ。
周りに鈴蘭達がいるなんてことは、すでに頭の中からすっぽ抜けているようだ。
すなわち鈴蘭の特訓など、もう始めることは不可能となっている。

「うらぁっ！」

振り下ろした神無が大地を砕く。
輝は蜘蛛の巣状に広がり、なのはや鈴蘭達がいるところまで伸びていく。

［ちょ、あんた加減しなさいよ！］

「無理～♪」

振り下ろした神無を地面に突き刺し、大量の魔力を流し込む。
ヒビからは灰色の光があふれだす。

「蒼龍破ぁ！」

流し込まれた魔力は龍となって天に登る。
なのはは魔力の奔流をかわしながら、安全地帯へ逃げ込み、

「レイジングハート！」

［カートリッジロード］

狙うは一真の頭。
バスターモードの先の光弾の大きさを、一真の頭の大きさまで収縮させた。

「ディバイン！」

それを見た一真もカートリッジロードを開始。
神無を腰に構えた。
周りではまだ蒼龍破の余波で、所々魔力の柱が立ち上っている。

「バスタァァ！」

「紅之太刀惨式・天魔裂牙！」

2つの魔法がぶつかる。

一瞬だけ拮抗したが、バスターが押し返し始める。

（予想通りだな。くくく・・・・）

イヤらしい笑みを浮かべる一真。

その笑みはバスターと衝撃波の光で、なのはには見えていない。

「行くぜ！爆流・・・・」

キィッン

神無を振り下ろそうとして一真の動きは止まった。

理由は一真の両手両足を見ればすぐに分かる。

バインドだ。

［読まれてたわけね。今回は負け――――］

「んな訳に行くかぁぁぁぁ！」

ここで等々反則技を使ってしまう。

「《罪》解放ぉぉぉぉ！」

［ちょ、あんたぁぁぁ！！］

オーラを纏った一真はバインドを無理矢理引きちぎり、転移魔法で緊急離脱。
地上を離れ、宙に浮いてなのはを見下ろす。

「つーわけで、仕切り直しだな」

「そうだね」

「じゃあ・・・・第二ラウンド始めぇ！」

一真はなのはへ向かって落下を始め、なのはは一真へ向かって飛び上がった。

［お互い苦労するわね、レイジングハート］

［ですね。でも、負けませんよ］

［・・・はぁ。どいつもこいつもバカばっか。いい加減にしてほしいわよ］

そんな呟きはここにいる誰にも届くことなく消えていった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「何やってんだよあいつは・・・・あのバカの挑発に簡単に乗りやがって。ガキかっての。たくっ・・・・」

とヴィータは呟くが、彼女に言われたくない言葉ではある。
ヴィータ自身、よく挑発に乗ってしまうことが多い。
もちろんそれは後ろにいるＦＷメンバーは分かっているのだが、声に出して言おうと思うものなどここにはいない。
一真ならば言っていたのかもしれないが、今いないのでどうしようもない。

「しょうがねぇ。それじゃあ、お前らは二対二で模擬――――」

「ヴィータ！」

「んあ？」

ヴィータが振り向いた先には、こちらへ向かって走ってくるフェイト達がいた。

「どうしたんだ？儀式魔法の練習してたんだろ？」

「それがな・・・・」

はやては一応した練習の内容をすべて話した。
もちろん、アリスの『天照』のことも。

「非殺傷設定に出来ないって、なんつー魔法だよそれ」

「あははは・・・・」

そう言われて苦笑いを浮かべるしかできないアリス。

「それで次は問題はないと思うんだけど、模擬戦をしようと思って」

「いいけどよ、人数はどうすんだよ？」

「大丈夫だよ、ヴィータ。私と千歳が組んでやるから。ね、千歳～♪」

「ね～♪」

「というわけや。そっちは、どうする？」

「じゃあお前ら行け。ちょうどいいだろ。暇だったしな」

と、ＦＷメンバー無視で決まった模擬戦。

ルールはこう。

非殺傷設定でカートリッジの使用は無制限。

《罪》は使用禁止。

勝敗条件は降参か、戦闘不能にするかのどちらか。

――――――――――――――――

「何でこうなるのかしら・・・・」

「でもいい経験になるよ」

「まぁそうだけど」

一応、スバルもティアナも二人と戦ったことはある。

しかし、《罪》をコントロール出来るようにもう一人の自分と戦っていた時のことで、二人の記憶にはない。

「前衛がスバルとエリオなのはいつも通りなんだけど、まずは様子

見。あたし達はあっちの情報がないからね。いい？」

「うん」

「はい」

（あたしの予想だと千歳さんが前衛、アリスさんが後衛だとおもうけど・・・確かめないと）

〔お前ら準備出来たか？〕

「「「「はいっ！」」」」

ウインドウの向こうのヴィータの問いに、４人は頷く。

〔じゃ、はやて頼む〕

〔よし。では、レディーゴー！〕

はやての号令でＦＷ陣対千歳・アリス組の模擬戦は始まった。

―――――――――――――

「はぁっ！」

千歳に向け突き出した拳は、棍棒の姿のマモンで防がれた。
そのままスバルは押し返し、吹き飛ばす。
千歳は、自分が飛ばしたスバルを追うように飛びかかり棍棒を振り下ろした。

［プロテクション］

棍棒が当たる直前、マッハキャリバーがプロテクションでそれを防ぐ。

千歳はそれを壊すためにもう一度振り上げ、思いっきり振り下ろす。

が、プロテクションは壊れなかった。

いや、壊すことが出来なかったが正解だ。

「ぐっ・・・・」

エリオがストラーダで棍棒を受け止めていたのだ。

「タイミング的にはナイスだ。でもよ・・・・」

「私がいることを忘れないでよ、エリオ♪」

後ろに現れたアリスの手のひらには紫色の光弾。

それをエリオに接触させる。

「クラウン・レイ――――」

「ディバインドライバー！」

千歳が意識をそらしたちょっとの間に体勢を直したスバルは、アリスの砲撃よりも先には一撃を撃ち出す。

それに気づいたアリスは標準を変える。

「間に合えっ！」

ギリギリで放ったクラウン・レイスは、ディバインドライバーと相

殺する。

＞スバル！エリオ！手伝うから、そこから離脱しなさい！＜

その念話があったあと、すぐに頭上から橙色の雨。
ティアナのクロスファイアーシュートである。
制御された魔力弾は千歳とアリスにだけ降り注ぐ。

「ちっ。マモン！」

千歳はマモンを盾にして魔力弾を防ぎ、

「このぉっ！」

アリスは魔力紐を操り魔力弾を消していく。
その間に二人は離脱。
そしてティアナ達と合流した。

――――――――――――――――

「どうだった？」

「千歳さんは前衛。アリスさんも前衛だったよ」

「そう・・・でも、アリスさんには気をつけてなさい。あの人、多分どっちも出来るわ」

と、自分の予想を口にするティアナ。

「私もそう思います」

ティアナの言葉にキャロも同意。

「魔力紐だけじゃなくて砲撃魔法使ってたのを覚えてますし、接近戦を少しでですけどやっていたような・・・・」

「確かにそうね。じゃあまず――――」

［上空より魔力反応です！］

クロスミラージュに言われ上を見ると紫色の光。
アリスの砲撃魔法だ。

「みんな！離れて！」

着弾する砲撃。
それを中心にスバルとキャロ、ティアナとエリオの二組に別れてしまう。
それに嫌な予感を感じたティアナは、

「急いで集まって！」

ドォォン！

集まろうとした４人を完全に分断するように、巨大な魔力刃が振り下ろされた。

「くっ・・・・！」

「スバル！」

「キャロ！」

「こっちは大丈夫！」

離されお互いが今の攻撃で舞った砂煙で見えないため、大きな声で無事を確認する。

「す、スバルさん！」

キャロに呼ばれ振り向くと、大鎌を持ったキャロより小柄な人物がいた。

「大丈夫ねぇ・・・・そんなこと言えるの今だけだぞ」

そしてもう一方には・・・・

「大成功だね♪ここまで上手くいくとは、ちょっと怖いけど」

「くっ・・・・」

「分断された・・・・」

そう。完全に二人の作戦通りになっていたのだ。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

場所は変わって森の中。
本来なら一真が鈴蘭の訓練のために来ていた場所。
そこには肩で息をしている二人が、空中でお互いを見ていた。

「あー、いい加減に落ちろや」

「一真君が謝るならね」

「何でだよ？」

「私の詠唱呪文をみんなに言ったことだよ！」

「あんなもんいつかバレるだろうが」

一真の言っていることは正しいのだが、

「あんな風にバラすことないよ！」

「知るかよ！」

やはり一真としか言いようがない。
無茶苦茶である。

「許さないからね・・・・絶対に謝らせる！絶対にね！レイジングハート！」

「了解です、マスター」

なのはのバリアジャケットが、アグレッサーモードからエクシードモードへとなる。

なのはのフルドライブだ。
まさかこの様な理由の戦闘でフルドライブを使うとは。

［マジ？］

「そっちがそうなら、俺もやってやるよ！神無！」

［もう何も言わないわ。勝手にしなさい］

「フルドライブ！」

魔力の柱が出来上がり、その中から黒いスーツに黒いコートを身に纏った一真が現れる。

「神道・神無！」

［・・・・］

完全にだんまりを決め込んだ神無。

「エクセリオンバスター！」

「ギガデス！」

一真の手のひらと、レイジングハートの先端から放たれた砲弾と砲撃は直撃。
光が辺りを包み込む。
直後響き渡る金属音。

「やっぱり・・・・」

「ちっ」

先に動いたのは一真だった。
それを予想していたなのはは、フラッシュムーブで移動しレイジングハートで神無を受け止めた。

「うらぁっ！」

「ぐっ・・・・」

一真はなのはを押し飛ばして、カートリッジロードしながら神無を振り上げる。

「紅之太刀壱式・煉刃！」

放たれたのは巨大な刃。
真っ直ぐなのはへ向かう。

［プロテクション］

先ほど一瞬だけ発動していた《罪》の解放を止めたため、なのはのプロテクションで煉刃は止められた。

「アクセルシューター・・・・シュートッ！」

なのはの操作によって八つの魔力弾は、全方位から向かってくる。

「届くかよ！」

全てを叩き落とし、魔力で足場を作りその上を走ってなのはへ近づく。
この足場を作る方法は、千歳と戦ったときに彼女が二回ほどやって見せた方法だ。
その二回を見ただけで使用しているのは、一真の才能がすごいと言ってもいいだろう。

「いいな、これ。魔法陣で足場を作るより応用がきく」

と言いながら跳ぶと、なのはへ切りかかる。
神無をバックして避けたなのはは、チャージ無しでディバインバスターを発射。
横に跳んで避けるが距離が足りなかったのか、バリアジャケットを掠める。

「ちぃっ・・・・」

立て続けに迫ってくる砲弾。
それを転移魔法を使い空中に逃げると、

「カートリッジフルロード」

[はいはい・・・・]

神無から全てのカートリッジが排出される。

「レイジングハート、カートリッジフルロード」

[カートリッジロード]

同じようにレイジングハートからも、残っているカートリッジが全て排出された。

「死天・・・・」

「スターライト・・・・」

お互いに止めの一撃に魔力を存分に籠める。

「閃破ぁ！」

「ブレイカァァ！」

２つの魔法は同時に放たれ、二人のちょうど間でぶつかった。
そしてまた光で包まれた。
しばらくして光が収まり、二人は気絶していた。
結局なのはは、一真に謝らせるという目的を果たすことは出来なかった。
一体この二人の戦いに意味はあったのだろうか？

［何か予想できたわよ、こんな結果になるってね。たく、何がしたいのよ］

と愚痴るが、それを聞いているものは誰もいない。
虚しい一人言で終わってしまった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

スバルは走っていた。
自分たちの相手の千歳から。
しかし引き離すことが出来ない。自分はローラースケートで、千歳にはそんなものはない。
だから、離そうと思えば離せるはずなのに距離は縮まっていく。

「おいスバル。逃げるだけか？じゃあこっちから行くぞ！」

上から聞こえてくる千歳の声。
空を見上げると空から降ってくる小柄な体躯が見えた。
その手には身の丈以上の大剣が一つ握られている。
スバルは構えて千歳を迎え撃つ。

＞キャロ。いい？＜

＞はい。いつでも行けます！＜

大剣のマモンがスバルに当たる直前、そこからスバルが消えた。
いや、動いたのだ。真後ろに。
そのまま後退を続ける。

＞いまだよ！＜

「なに考えて――――」

突然辺りが暗くなる。
空には巨大な龍がこちらを見ている。その口には火球が一つ。

「マジかよ」

「ブラストレイ！」

放たれた炎は千歳へ向かう。

「マモン！」

［ＯＫ、相棒］

マモンの形は大剣から槍へ変わる。

その矛先は向かってくる炎へ。そしてそれを引く。

「『突き抜ける槍』！」

突き出すと巨大な一撃が炎を貫き、フリードと乗っているキャロに向かう。

隙が出来た今。

スバルは水色の光弾をセットする。

「ディバイン――――」

「負けだよ、スバル」

ここにいるはずのないアリスの声。

そしてスバルの左右には意識がないのに、自分にデバイスを向けているティアナとエリオが立っていた。

「どういう・・・・」

「二人の両手両足を見てみろよ」

千歳に言われ見ると、アリスの魔力紐で縛られていた。
アリスは意識を失った二人を、魔力紐を使いマリオネットのように操っていたのだ。

「そういえばキャロは？」

「ここだ」

千歳の背中には気絶しているキャロがいた。フリードはキャロの肩の上。

「じゃ戻ろっか」

「はいっ！」

模擬戦終了

○千歳・アリスｖｓＦＷ陣●

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

朝練終え、食堂に来ている千歳とアリス。
一真となのは、それにスバルを除いたＦＷ陣は意識を失っているため今ここにはいない。

「いつも思うけど、よくそんなに入るよね・・・・」

二人の目の前には、朝食とは思えないほどの量のスパゲッティ。
よく食べることが出来ると二人は思う。

「あ、いたいた。千歳、アリス。ちょっといいかな？」

「どうしたのフェイトちゃん？」

「食べ終わったら、どちらかの部屋に集まっててほしいんだけどいい？」

「うん。じゃあ、アリスちゃんの部屋にしよっか？」

「うん。じゃあそうしようか」

「それじゃ、すぐに行くから待っててね」

「「うん」」

フェイトが何を考えているか分からない二人だったが、何かあるのだろうと思い少し急いで食べアリスの部屋に向かった。

「何だろうね？」

「嘱託魔導師試験に筆記試験があるって言ってたから、もしかしたらそれの勉強かも」

「どんなことするのかな？」

「さぁ？そんなことよりも、私は勉強はしたくない！」

アリスがこんなことを言うのは理由がある。
一応アリスは千歳と同じ高校に通っていた。その時から勉強は苦手で、テストは赤点ギリギリばかりだったのだ。

「あははは・・・でも、フェイトちゃん来たよ」

「へ？」

部屋の入り口にはすでにフェイトが立っていた。
その手の中には十枚以上のプリントがあった。
完全に予想は当たっていたというわけだ。

「それじゃ勉強を始めようか」

「嫌です」

「ちなみ、二人が満点を取るのが目標だから。っていうか取らないと徹夜だろうが何だろうが、私はするつもりだから。わかった？」

「「え？」」

アリスの言葉をスルーしてのとんでも発言。
二人はその言葉に固まってしまった。

「じゃ、始めようか？」

「「・・・・・・・」」

沈黙、そして、

「「誰か助けてぇぇぇぇぇ！」」

絶叫。

朝昼訓練、それ以外は勉強（徹夜付き）という日程は、試験前日まで続いた。

《一真の部屋》

一真「さて今日も自殺（殺してほしい）志願者が来るらしいぞ」

なのは「それは違うと思うけど・・・・」

神無「というわけで今回のゲストの一組目は本編より、鈴蘭のもう一人のユニゾンデバイスのリリン」

リリン「来てやったからありがたく思うといいの。崇めるといいことがあるの」

アリス「いや、それはないからね」

千歳「そして二組目は・・・・」

？「一真ぁぁぁぁぁぁぁ！」

千歳「『魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　ＺＥＲＯＳＴＯＲＹ―絆（ＫＩＺＵＮＡ）―』より、八神ゼロ・Ｓ・Ａ・ハラオウン君だよ」

アリス「正確にはお仕置きらしいんだけど・・・・」

一真「吹き飛べや！獄龍――――」

ゼロ「茸でも食ってろ！」

一真「嫌あああああああ！」

神無［秒殺］

リリン「なの」

なのは「いつもより早くお約束が・・・・」

千歳「じゃあ一真抜きでお返事コーナーに――――」

一真「まだ、だ・・・・」

一真以外『えっ！？』

神無［一真が耐えてる！いつもなら一発なのに！］

ゼロ「ならもう――――」

一真「消去ぉぉぉぉ！」

ゼロ「消えただと！？」

アリス「ここでは一真が神だから、それが可能なの」

なのは「今日の一真君、いつもより頑張るね」

一真「当たり前だ・・・こいつは俺の敵のＫＤＧ所属だからなぁぁぁぁ！最初からクライマックスだぜ！《罪》解放！そしてカイーナ！アンテノーラ！死ね！このクサレェェェェェ！」

ゼロ「ぎゃあああああああ！」

バキッ、ドゴッ、メキッ、ドスッ

リリン「あれはスルーして、お返事コーナーなの」

鴨川秘さんへ

一真「あんなもん見た後の口直しにはいいな。辛さもこれまたいいし」

神無「よくそんなもん食べられるわよね」

リリン「バカ舌だからしょうがないの」

なのは「祇帰ちゃん、そんなことで許してもらえると思ったら大間違いだよ・・・“お話し”、しようか？」

アリス「だね・・・」

なのは「スターライトブレイカー！」

アリス「イノセンススマッシャー！」

ゼロ「おー、すごいな。って、千歳も凄いな。シフォンケーキ、半

分無い」

千歳「んー！おいしぃ♪ゼロ君も食べる？」

ゼロ「それじゃ、お言葉に甘えて」

ＺＥＲＯさんへ

なのは「一真君のデコピンってそんなに痛いの？」

アリス「うん。魔力の一転集中させてやるから、かなり」

ゼロ「もう一回殺るか。Ｘ・ＢＡＲＲＥＬ展開！」

一真「させてたまるかぁぁぁ！」

千歳「うるさいよ二人とも。だから、お仕置き♪」

一真「《罪》は抑え――――」

千歳「問題無用♪」

一・ゼ「「ぎゃあああああああ！！」」

リリン「自業自得なの。あの世で悔い改めるといいの」

神無「えっと、まだ死んでないからそれはおかしいわよ、リリン」

リリン「じゃあ死ぬといいの。それが最善なの」

神無「むちゃくちゃな・・・・」

二階堂さんへ

なのは「作者さん、お願いがあるんだ」

どうした？

なのは「えっとね・・・・」

一真「だから俺はロリコンじゃねぇと、何度言ったら分かるんだ！マジで一回殺すか？つか、あいつもＫＤＧだったよな！？殺す対象に確定！」

千歳「んなことさせるわけがねぇだろ」

ゼロ「今ここでお前を消す！」

一真「俺は止まらねぇ！千華！」

なのは「旭君」

一・な「「死ね♪」」

一真「《罪》解放！獄龍破！」

なのは「限定《昇華》！スターライトブレイカー！」

アリス「今日の一真、いつもより暴走してない」

リリン「いつも通りに見えるの」

神無［リリンにはそうかもしれないけど、アリスちゃんのいう通りよ。だってＫＤＧ所属が一人来てるから］

アリス「なるほど」

Ｎａｋｉさんへ

一真「んな称号いるかぁぁぁぁ！」

なのは「二号って一号は？」

ゼロ「それは秘密だな。つか言えるわけがねぇ」

リリン「ロリコンとシスコン、ショタコンとブラコンは紙一重なの」

神無［それ違う気がするんだけど・・・・］

アリス「てか、シスコンとブラコンについてあそこまで語るもの？」

千歳「んなことはどうでもいい。反ＫＤＧは消す。死ね！ライザーソード！」

ゼロ「止めないのか？」

一真「あのクソガキ限っては敵だ。だから止める気はない。死ね！

それと忘れてたが、鈴蘭のバリアジャケットがメイドなのは、俺も理由は知らん！つまり俺はかんけぇねぇ！」

リリン「どいつもこいつもバカばっかなの」

灰色の野良猫さんへ

アリス「犯人発見！死ね！イノセンススマッシャー！」

一真「おー、頑張るなファンクラブ会長」

ゼロ「ファンクラブ？」

千歳「千歳ちゃんはねソラ君ファンクラブの会長さんなんだよ」

リリン「といっても会員はまだ二人だけの弱小なの」

なのは「何が弱いのか全くわからないけど・・・・」

神無「まぁ少なくても、ファンクラブはファンクラブだから頑張りなさい。一応応援だけはするから」

一真「応援するようなことかそれ？」

Ｌｉｔｔｌｅさんへ

一真「とうとう来たか」

神無［作者としてもあのネタが分かる人が、こんなに早く現れるとは予想外だったみたいよ］

リリン「崇めるといいの」

なのは「いやいやいや」

ゼロ「なんのことだ？」

アリス「詳しく知りたい人はスニーカー文庫『お・り・が●み』を読んでね。それじゃリリン、Ｌｉｔｔｌｅさんのためにあの一言を」

リリン「オッケーなの。出血大サービスなの」

一真「作者はどういう会話であの言葉が出たか覚えてねぇから、あの一言だけだが許してくれ。じゃあ、ほれ」

リリン「ランディ・ジョンソンなの」

紅龍さんへ

一真「雑魚がいきがりやがって」

なのは「決着がついてないのにそんなこと言って・・・・」

神無［そんな今更のことを言ってどうするのよ］

ゼロ「というか何で決着がついてないんだ？」

アリス「一度あっちで戦った時は結局終わらなくて、こっちに来たときはなのはと私が戦わせなかったんだ」

ゼロ「そういうことか」

千歳「じゃあ次回来る？」

なのは「来たら特別に戦わせてあげるよ。結界を張った特別ステージでね」

一真「来たところでテメェは勝てねぇよ」

U．Tさんへ

一真「殺す（怒）！神無！フルドライブ！」

神無「しょうがないわね・・・・」

一真「冥道残月破（鉄砕牙ｖｅｒ．）！」

千歳「でも、クラウド君には効かないんじゃ？」

一真「あれは冥道そのものだからな、防いだ瞬間飲み込まれるぜ。くくく・・・・」

なのは「あれは反則技だもんね」

ゼロ「たしかに、冥道そのものは防ぎようがないな。というか、そんなものを普通人間に使うか」

一真「使う！」

アリス「断言したよ・・・・」

一真「じゃ、ここにいるクソ野郎に使うか。覚悟はいいな？」

ゼロ「やれるもんならやってみろ！」

一真「いいぜぇ！」

なのは「・・・それじゃ、次回予告しようか」

アリス「始まった嘱託魔導師試験」

千歳「順調に進み、残すは戦闘試験。それの相手は私達がよく知る相手だった」

神無［そんな時、敵はとうとう動き出した］

なのは「次回、魔法少女リリカルなのは～七つの大罪～」

リリン「【嘱託魔導師試験当日】、なの」

な・神・千・ア・リ

『次回へスタンバイレディ（なの）！』

一・ゼ「死ねぇぇぇぇ！」

試験一週間前・後編（後書き）

ＺＥＲＯさん、勝手出演させてすみませんでしたぁ！

ゼロのことで何か問題があれば、一言宜しくお願いします。

次回も宜しくお願いします。

嘱託魔導師試験当日（前書き）

来週、もしかしたら投稿できないかもしれないので急いで書きました。
もしかしたら、変なことになっているかもしれませんので、その時は指摘お願いします。

嘱託魔導師試験当日

今日は嘱託魔導師試験前日。
かなりスパルタな一週間を過ごした千歳とアリスはというと、

「もう無理・・・・」

「ふ、フェイトちゃん・・・・限界、だよ・・・・」

本日最後のプリントをフェイトを渡して、テーブルに突っ伏す二人。

「うん。OKかな」

「「お、終わった～」」

「お疲れ様、二人とも」

体力よりも精神的に限界の二人。
数日前、ここに一真が来ていた。理由は応援のためらしい。
その時一真も同じテストを受けたのだが、点数は百点満点。
千歳やアリスからは思いっきり文句を言われていた。

「じゃあ明日は早いから、私はもう行くね」

「うん。また明日、フェイト」

「・・・・」

フェイトが出ていく頃には千歳はすでに眠っていた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「何で俺なんだよ・・・・たくっ」

部屋着を着た一真は、静かな廊下を歩きながら愚痴を溢していた。
それに、彼の左腕についている待機状態の神無が反応する。

［しょうがないでしょ。あんたしか適役がいなかったんだから。ミゼットさんも、本当ならあんたに頼むことじゃないけどお願いするって頭を下げてたんだから］

「いや。むしろ俺は、あのババアの頼みだから聞きたかねぇんだが・・・・」

［ホント、あんたは面倒ねぇ］

そんな会話を二人（一人と一機なのだが）がしていると、後ろから声をかけられた。

「一真、神無」

「んあ？」

［あぁ、フェイトちゃん。どうしたの？］

「今まで二人と筆記試験のしてたんだ」

「あれか。あんなもん、誰にも出来るだろ」

出来ない者にたいしての嫌みでしかない言葉を、一真はさらりと言ってのける。

「それで何してたの？」

「ゲームしてたらババアから連絡があってな」

「ミゼットさんから？」

「あぁ。あのババアがな、頼みごととか抜かしやがってかなり面倒事を押し付けてきやがったんだよ」

「面倒事って？」

「それはな・・・・」

このあと彼らの会話は一時間続いた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

次の日の朝。

隊長陣にＦＷメンバー、鈴蘭にみーなとリリン、そして今日試験を受ける千歳とアリスは転送ポートの前に集まっていた。

「あれ、一真はどうしたの？まさかまだ寝てるとかじゃないよね・・・」

とアリスは疑う。

一真だがありそうなのだがフェイトがフォローを入れる。

「何か用があるって、朝早くからどこかに行ってたよ」

「ふぅ～ん」

まだ疑っているようだが、これ以上何も言わなかった。

「それじゃ行こうか。千歳ちゃん達も時間に余裕があったほうがええやろ？」

「うん」

全員は転送ポートに乗り、試験会場に向かう。

一応全員気になるのだ。

着いたらすぐに二人は筆記試験の会場に入っていき、六課の面々は別室に向かった。

一応休憩室のようなものだ。

「大丈夫でしょうか？」

心配そうに言うキャロ。

「落ちたらそこまでだったということなの」

リリンが完全にそれをぶったぎる。

「大丈夫だよ。だって私が教えたんだから」

と、自信満々に言うフェイトであった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

会場に入った千歳とアリスは椅子に座り、試験が始まるのを今か今かと待っていた。

するとモニターが現れ、黒髪で黒いバリアジャケットを着た男性がそこに映っていた。

〔初めましてだな。今回君達の試験の教官を務めるクロノ・ハラオウンだ〕

彼の名前を聞いて二人はあることに気がついた。

「ハラオウンって、フェイトちゃんの・・・・」

千歳が聞くとモニターに映るクロノの言いにくそうにして、

〔あぁ、フェイトの兄だ。そんなことよりも、試験を始めるぞ〕

「「はいっ！」」

〔時間は一時間。時間一杯頑張ってくれ。では、始め！〕

その号令と共に二人はペンを取り試験を開始した。
静かな空間に響くペンの走る音。
一応彼女達二人にはフェイトからプレッシャーがかけられていた。
始まる前念話で、

＞もし満点じゃなかったら、わかってるよね＜

という死刑宣告を受けていたのだ。
なので表には出さないが、かなり必死に頑張って試験を受けているのだ。
そして始まって一時間。

〔止め〕

それを聞いて二人からは安堵のため息がこぼれた。

〔実技試験は別会場となっている。ここを出てすぐにあるからすぐに向かってくれ〕

「「はい」」

返事をするとモニターが消え、二人は緊張をといた。

「どうだった、千歳？」

「分かんない。アリスちゃんは？」

「私もだよ。満点じゃなかったらどうなるか、そうぞうしたくない・・・」

「だね・・・・でも次は実技試験だから、頑張ろうよ！」

「オッケー」

とテンションを上げて実技試験の会場に向かう二人であった。

―――――――――――――――

実技試験の会場は森と草原の広がる、広大な世界だった。

〔では二人とも。一応確認のため、氏名と出身世界を頼む〕

「えっと地球出身、楠木千歳です」

「同じく地球出身、桜ノ宮アリスです」

〔ＯＫだ。まずは儀式魔法からだ〕

そう言われて千歳はマモンを、アリスはレヴィアタンを機動させた。

「それじゃあ、あたしからだな」

この一週間で千歳は、儀式魔法を一つだけだが完成させていた。
苦手な儀式魔法を、この短い期間でよく完成させたと思う。

「行くぞ、マモン」

〔了解です、相棒〕

千歳は、マモンをカ●ドキャプターさくらの杖と全く同じ物に変形

させる。

「大地よ泣け！汝の声は我が糧となる！」

千歳はマモンを片手で回し始める。

足下には六芒星の魔方陣が現れた。

「大地よ叫べ！汝の声は我が力となる！」

そして自分の前に両手で持ち、大きく振り上げた。

「クエイク・スパイク！」

マモンを振り下ろし地面にぶつかると、千歳を中心に水面に波紋が広がるように大地からトゲが現れていく。

これが千歳の儀式魔法である。

「成功、だな」

［ご苦労様です、相棒］

「サンキュー」

〔次はアリスか。始めてくれ〕

「はい」

笑顔で返事をしたアリスは、千歳を見る。

「危ないから近くにいてよ、千歳」

「分かった」

アリスの儀式魔法を一度見たことのある千歳は、あれがどのようなものか知っているためアリスの後ろに立つ。
逆に離れている方が危ないのだ。

「レヴィアタン、用意はいい！？」

［問題ありません、マイロード］

「よしっ。天気もいいし、この魔法は太陽があったほうが強いからね！」

アリスは目を閉じ、右手を空へと掲げる。
足下には千歳と同じ六芒星の魔方陣。

「天より地を見下ろす神よ・・・・」

雲は消え天候は快晴。
上空には光輝く球体が現れる。
それは巨大化し、光を増す。

「その光で、我が前の穢れを焦がせ！」

巨大化は止まったが、光はまだまだ増す。

「天照！」

球体から全方位に伸びる光は、周りを蒸発させていく。

本当にデタラメな魔法である。

〔次は最終試験の実戦訓練だが、一時間の休憩をとってからだ。昼食を取ってくれてもかまわない。では一時間後に〕

そう言い残しモニターは消えた。

二人はバリアジャケットを解除すると、その場に座り込んだ。

「お昼だー！」

叫ぶアリス。

休憩となって、さっきよりもテンションが上がっているらしい。

「千歳ちゃん！アリスちゃん！」

突然呼ばれた二人はそちらを見る。

そちらには筆記試験の会場の別室にいたはずのなのはが、こちらに歩いて向かってきていた。

「なのはちゃん？」

「どうしたの？」

「お弁当だよ」

なのはの手には三人分の弁当箱。

二つは千歳とはアリスものだろうが、あと一つは？と二人は考えたがそれはすぐに分かることとなる。

「あっちに二人が戻るより、誰かが持ってきた方が早いと思って」

「そっか。ありがとう、なのはちゃん」

「私の分も持ってきたんだ。一緒に食べよ」

「うん！」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「うぃ～っす」

「君か。どうしたんだ？」

クロノのいる本局のとある部屋。
ここでは先ほどの筆記試験採点をクロノが行っていた。

「俺の出番まで時間があるからな、様子を見に来ただけだ。たくっ、暇だっての」

そんなことを言いながら、彼は結果をのぞきこむ。

「筆記試験は満点か。まぁフェイトのスパルタを一週間受けてりゃそうなるわな」

とこぼし、手に持っていたサイダーを口に含む。

「で、儀式魔法は問題無しか・・・・」

「君の予想だと、実戦訓練はどうなると思う？」

「一発なんじゃねぇ？まぁ本気で潰すけど」

笑みをこぼしてそう言う。

まぁ、勘のいい人はこれが誰だか分かっているだろう。

なのでそろそろバラすとしよう。

「何言ってんだテメェ？」

さあな？

「君こそ何を言ってるんだ、一真？」

「さあ？ま、俺は外で待ってるからな」

「あぁ」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

一時間後。

昼食を食べ終え、なのはは帰っていき千歳とアリスが残された。

〔これから最終試験を始めるが、今からそちらに試験官が行くから少し待っててくれ〕

「試験官？」

「誰だろ？」

もしかしたら知り合いじゃないかと考えていると、二人の前にベルカ式の魔法陣が現れた。

そして、かなり見覚えのある人物が転移してきた。

「「一真！？」」

そう。二人の前に現れたのは、朝からいなかった神童一真であった。

「よう。面倒だからさっさと説明するぞ。今回は変則で二対一でやる。制限時間やカートリッジの制限はねぇから、最初から本気でやれよ？」

「う、うん」

「オッケーだよ、一真」

ちょっと戸惑っているアリスと、ヤル気満々の千歳。

「俺も手加減しねぇからな。つーわけで、始めっぞ。神無！行くぞ」

「いつでもいいわよ」

三人は自分のデバイスを構え、こう叫んだ。

「「「《罪》解放！」」」

三人が魔力のオーラを纏ったことが、最終試験の始まりの合図となった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「始まったね。最終試験」

なのは達はモニターで三人の戦いを見ている。

「やはり魔法があるぶん、楠木でも難しいのだろうな」

シグナムの言う通り、魔法が使えるようになって日の浅い千歳は、一対一になると少し苦戦している。

が、千歳は自分の技術でそれを補っている。

「へぇ～」

「どうしたの、鈴蘭」

「お兄ちゃんがあんな真面目な顔をしてるの、始めてみたから」

「あ、なるほど」

鈴蘭の言葉にすぐに納得のいったスバル。

なのは達もそれを聞いて、笑うのを堪えたりしている。

「一緒に住んでたときとかには見たことは？」

「なかったです。いつも部屋でゲームしてる姿しか見たことなかったから」

一真らしいといえば一真らしい。
それを聞くと苦笑いを浮かべる者もいた。

〔部隊長！〕

突然、別のモニターが現れそこに何か焦っているようなグリフィスが映る。

「どうしたんや、グリフィス君」

〔《堕人》です。場所は廃墟都市群、数は百体ほどです〕

「了解や。ここから向かうわ」

〔分かりました〕

モニターが消え、全員の視線がはやてに向かう。

「今回のラスト達の目的が分からん今、私らに出来るのは《堕人》の殲滅だけや。でも、もしかしたらラスト達の誰かが来てる可能性もある。油断は禁物や」

そこで一旦区切り大きく息を吸い、

「機動六課出動！」

『了解！』

――――――――――――

今、スバル達はビルの上で《堕人》の群れを見下ろしている。

「まさか、これも減らないんじゃ」

「変なこと思い出させないでよ、スバル」

一ヶ月前に倒しても減らない《堕人》の軍団と戦っていた。
倒してもまた現れるのだ。

「鈴蘭さん。みーなさんとリリンは？」

「あの二人は単体でも強いから、別の場所からに攻撃をしかけるみたい」

エリオにそう答える鈴蘭は、二人のいるらしい方向を見つめる。
こうして会話をしている間にも群れは、クラナガンへ進行を続けている。
それでもここで動かないのは、はやてから動けとの指示を待っているのだ。

「そんなに強いんですか、みーなさんとリリンって？私にはリリンが強いようには・・・・」

「私もそう思ってたんだけど前にお兄ちゃん、みーなさんとリリンと一対二で負けてるんだよね」

驚きの真実がここに。
神童一真の敗北。
という記事で号外が書けそうな事実であった。

「ちょ、それ本当なの鈴蘭!?」

肩を掴んで確認するティアナ。
かなり信じがたい事実で、こうなるのは無理はない。
「えっと、はい。私の記憶に間違いがなければ」

と言った所で、

＞ロングアーチから全体へ＜

はやてから念話で連絡が入る。

＞総員攻撃開始！＜

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

小柄な体が木々の間を駆け抜ける。
その上空では一真とアリスが戦闘を続けている。

「くっ・・・ちょっと加減してくれてもいいんじゃない?」

振り下ろされた神無を左手で受け止めたが、その重さに顔を歪める。

「あほ。試験で手を抜いてどうすんだよ」

「一真からまともな言葉が・・・・事件の前触れね」

実際に事件が起きているのだが、はやてがクロノに試験に専念出来るように教えないでくれと、すでに言ってある。
つまり、試験が終わるまで三人には伝わらないのだ。

「獄龍破使って、一撃で落とすぞ」

「私がいるから無理だよ、一真♪」

森から飛び出してきた千歳。
手にはマモンの変形した大鎌があり、それを一真の首へ振り抜く。

「殺す気か！」

当たる寸前、オーラを首へ集中させ刃を防いだ。
そしてオーラを膨らませ、大鎌を弾く。

「お前、これが試験だって分かってるよな？」

「もちろん♪」

「この野郎・・・・おぉっ！？」

「私を忘れないでよ！」

神無を押し上げ一真のバランスを崩したアリスは、左手で顔面を狙って拳を振り下ろす。

当たる直前一真の姿は消える。転移したのだ。
今の魔法を見た瞬間、アリスはある違和感に気がついた。

「速すぎる・・・・」

「どうしたの、アリスちゃん?」

「今の転移魔法、おかしいの」

「ほぅ、気づいたか」

後ろにそのおかしな転移魔法を使った、当の一真がいた。

「この転移魔法はな、短距離移動用に作った特別製の物だ。術の発動まで一秒以下で、戦闘にも使用できり。苦労したぞ。ここまで早くするのは」

完全に無茶苦茶な魔法。
しかし一真ならではの魔法かもしれない。

「ま、んなことより試験の続きだ」

そう言い放つと、一真は魔法で作った足場を走り、二人へ一気に近づく。
振り抜かれた神無はアリスの足へ。

「マモン!」

棍棒に変わったマモンを突きだし、神無を止める。
動きの止まった一真へアリスは手のひらをむけ、

「クラウン・レイス！」

砲撃魔法を放つ。

一瞬遅れて一真も砲撃魔法を放つ。

「イーラ・カンノネッジャメント」

しかし一瞬遅れたことがいけなかったのか、一真の魔法は押し返され始めた。

「くそがっ！」

そう言い、神無を左から右へと振り抜いた。

放たれたのは巨大な斬撃。

その斬撃は砲撃の下を走り、アリスだけに向かう。

アリスだけ？

一真は異変に気がついた。

目の前にいたはずの幼馴染みがいないことに。

「本当に奇襲の好きな奴だな、お前は！」

「てへっ♪」

アリスを落とし砲撃を止めたあと上を見た一真の視線の先には、太陽を背に落ちてくる千歳がいた。

マモンの形は槍。

「『突き抜く槍』！」

矛先からは魔力の槍。
これは一週間前、ブラストレイを貫きキャロとフリードを撃墜した一撃だった。
それをすぐに危険だと感じた一真は、

「神――――」

［カートリッジロード］

一真が言うことが分かっていた神無は、言うより先にはカートリッジをロードした。

「紅之太刀参式・天魔裂破！」

放たれた衝撃破は魔力の槍とぶつかり、すぐに突き破られた。

「嘘だろ！？」

［貫通力があるってことね］

「冷静に分析してる場合か！」

魔力の槍が一真に届く直前に転移。
そして千歳の前に現れた一真は煉刃。
目の前でいきなり放たれた千歳は、刃を防ぐことができずそのまま撃墜。
こうして二人の嘱託魔導師試験は終わった。

〔普通、あそこで転移するか？〕

「負けたくねぇからな」

かなり大人げない返答であった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「ん・・・あれ、ここは・・・・」

真っ白な部屋のベッドの上で目を覚ました千歳。

ここがどこなのか考えるが、その意味がないことに気がついた。

ここは医務室だ。

「たしか負けちゃったんだっけ・・・・」

「あ、千歳」

隣のベッドにはアリスが横になっていた。

「負けちゃったね」

「うん・・・・」

二人が重い空気を作り出し部屋を一杯にするが、それを一人の男がＫＹな言葉でぶったぎる。

「負け犬ども、起きてっか～」

「君はもう少し言葉を選べないのか？」

「だって俺Ｓだから」

そういう意味ではないが、クロノも言っても意味がないと理解しているので何も言わない。

「何、一真？」

さっきの一言で機嫌を悪くしたアリスが、不機嫌な声で聞く。
千歳も同様に不機嫌になっている。

「試験の結果発表だ。つーわけでクロノ」

「あぁ。では結果だが楠木千歳、桜ノ宮アリスの両名とも・・・・・」

（不合格だよね・・・・）

「合格だ」

「ほらやっぱり・・・・って、え？」

不合格だと思っていた二人にとっては、完全に予想外の結果発表だった。
それを聞いて二人は、目を大きく見開いておどろいている。

「どういうこと。私達、負けちゃったんだよ・・・・」

それを聞いて一真はため息を吐き、クロノは笑い始めた。
二人は状況がまったく分かっていない。

「確か、フェイトの時も同じだったな」

とクロノは懐かしそうにいう。

「頭の足りねぇ二人に説明するぞ。筆記試験は満点で、儀式魔法は問題なし。それで最終試験はお前らの戦闘技術を見るだけだ」

「ってことは勝敗は関係ないの！？」

「関係ないよ。まぁ、戦闘は攻撃的だが合格点。これをもって楠木千歳、桜ノ宮アリスをＡＡＡランクの嘱託魔導師として認定する。認定証の交付の時に面接があるが、問題ないだろう」

「「やったぁぁ！」」

重い空気を吹き飛ばし叫ぶ二人。

そこでクロノは言葉を続ける。

「次に、はやてから試験が終わるまで言うなと言われていたので今伝えるぞ。ミッドの廃墟都市群に《堕人》が現れたそうだ。今、彼女達は交戦中みたいだな」

「おい、マジか？」

「僕も一応確認したが、マジだ。だから今から向かってもらう」

それを聞いた二人は急いでベッドから降り、一真の両隣へ。

そして一真の手を握る。

「面接は後日受けられるよう僕が手配しておくから、気兼ねなく暴れてきてくれ」

「ありがとう、クロノ君」

「それじゃ行くぞ」

「「うん♪」」

二人は手の力を更に強くして握る。

一真から離れないように。

一真の足下にベルカ式の魔法陣があられ、三人の姿は消えた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「何だよこいつら？」

「減らない・・・・またか」

なのは達は減らない軍勢に追い詰められていた。

周りから減らしていく作戦だったのだが、中々減らない。

そこで一度集まって一気に殲滅することにしたが、それでも減らないのだ。

「ティア・・・・」

「分かってるわ」

「「《罪》解放！」」

罪を解放した二人は、デバイスを地上の《堕人》へ向ける。

「ディバイン・・・・」

「ファントム・・・・」

通常時の時よりも巨大な光弾をセットし、叫ぶ。

「バスタァァァァ！」

「ブレイザァァァァ！」

二つの砲撃はまっすぐ地上の《堕人》へ。

誰もが直撃と思った瞬間だった。

「はい、ざんねーん♪」

軽い声が聞こえた。

直後、二つの砲撃は消える。

「なっ！？」

砲撃が消えた場所には、忘れたくても忘れられない人物が。

鈴蘭は知らないため、頭上には？マーク。

「元気にしてた？」

「ラスト・・・・」

フェイトの呟いた名前。

本名ではないが、それが彼女の名前である。

「今日は何の用や？」

「怖い顔しないしない。今日はあたしが来たのは、ここにお友達を連れてくるためなんだから」

「お友達、だと？」

「そ、お友達。では登場してもらいましょう！これがあたしのお友達！」

その声を合図となり、一つに固まっている六課メンバーを囲むように、六芒星の魔法陣が出現する。

その数は八。

そして魔法陣の上に出現したのは、黒ずくめの服を来た十代後半と見れる男女四人ずつ。

「最悪なの・・・・」

リリンの言葉は正しい。

百体の《堕人》と、謎の男女。

先に《堕人》と戦い魔力を削っている彼女たちには、かなり分が悪いことは確か。

しかし、ここで引くわけにはいかない。

「みんな、いいね？」

なのはの言葉に全員が力強く頷いた。

「行くよ！」

廃墟都市群戦の第二ラウンドが始まった。

《一真の部屋》

なのは「今日の《一真の部屋》はちょっと特別で、部屋の主の一真君とそのデバイスの神無ちゃんがいません。理由は、前回のゲストの八神ゼロ・Ｓ・Ａ・ハラオウン君と、『魔法少女リリカルなのは　ｔｈｅ・ＦＩＮＡＬＳＴＯＲＹ』の九条零君と戦うため、特別ステージにいます」

アリス「というわけで、特別ステージの方では・・・あぁ、始まってる」

千歳「スゴいね～」

なのは「あれ、非殺傷設定だよね？」

アリス「だといいんだけど、あいつらがそんなことしてると思う？」

なのは「全然」

千歳「みんな頑張れ～」

というわけで特別ステージでは、こんな状況でございます。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

零はエンペラー・セカンドモードを一真に向けて、

零「吹き飛べ！」

対一真用食材を砲撃と共に放つ。

一真「それ用の対策はしてあるんだよ、雑魚がぁ！」

一真はそれに対し目隠しと鼻栓をして、見ないように更には臭いが鼻に入らないようにした状態で、零に向けて煉刃を放った。

零「届くわけないだろ！」

零が後ろに跳んで避けると、ゼロが一真へ攻撃を仕掛ける。

ゼロ「お前が死ねぇ！」

『Ｄ　ｐｒｏｇｒａｍ』を発動し、青い鎧をまとったゼロが剣で一真を狙う。

一真「ちっ・・・《罪》解放！」

動けなかった一真は、当たる直前で《罪》を解放し、ゼロの剣を防ぐ。

零「神童のあれ、やっかいだな」

ゼロ「任せろ。このカートリッジを使う」

ゼロはとあるカートリッジをセットしロード。

ゼロ「このカートリッジは相手のトラウマを作り出す！」

それを聞いた瞬間、神無が焦ったような声を出す。

神無［ちょっとゼロ！マズイわよ、それ！だってこの子のトラウマは、一つしかないんだから！］

零「あいつのトラウマは茸だろ？」

神無［違う！こいつのトラウマは、あたしがラストに殺されたことよ！］

ゼ・零「「え？」」

瞬間、一真は叫び始めた。

一真「あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝！」

一真の足下に現れた六芒星の魔法陣から光が溢れ、それが柱となる。

零「あれって・・・・」

ゼロ「暴走・・・・」

柱が消えて現れた一真のオーラは、おかしな程膨れ上がっていた。

一真《テメェら・・・・今ここで消してやる》

ゼ・零「「上等」」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

な・ア「・・・・・・・・」

千歳「それでは、お返事コーナーです」

紅龍さんへ

なのは「短気は損気だよ、零君」

アリス「本編の行動を見る限り、人のことを言える立場じゃないよね。なのは」

なのは「そ、そんなことないよ。それよりも零君の攻撃、結局は届かなかったね」

アリス「（逃げたね）一真があそこまでするとは、完全に予想外だよ」

なのは「よっぽど負けたくないんだろうね。あそこまで零君に対して、雑魚って言い続けてきたから・・・・」

アリス「バカだ・・・・」

千歳「でも、あの目隠しと鼻栓ってどこから出したのかな？」

な・ア「「さあ？」」

ＺＥＲＯさんへ

アリス「あの変なカートリッジ、祐輔が作ったものだったんだ」

なのは「あれのおかげで、一真君が暴走を始めたんだけどね」

千歳「アリスちゃん。祐輔君達、天照すごいって」

なのは「話の流れを完全に無視・・・・」

アリス「それが千歳だよ」

なのは「何だろう。それで納得できちゃう自分が怖い・・・・」

千歳「どうしたの、二人とも？」

アリス「何でもないよ」

なのは「そ、そう。それじゃ次のお返事にゴー♪」

千歳「うん♪」

Ｎａｋｉさんへ

千歳「セラフィム、ありがとう。大事に使うからね♪」

アリス「そんなもの、何に使うの？」

千歳「ここじゃない別の場所で、一真は今子供なんだよ。でも、まだ幽霊としてもとの一真が出てくるから、それをなくすためにね♪」

アリス「・・・・鬼だ」

なのは「それよりもＮａｋｉさん、セラフィム。誰がその詠唱呪文を口にしていいって言ったのかな。かな・・・・」

千歳「な、なのはちゃん？」

なのは「死んじゃえ♪スターライトブレイカーＥＸ♪」

アリス「お話ですらないんだ。しかもＮａｋｉさん、関係ない――」

ジャキッ

なのは「死ぬ？」

アリス「ごめんなさい」

鴨川秘さんへ

な・ア「「ちっ」」

千歳「今日はなのはちゃんが黒い・・・・」

なのは「お土産・・・・こんなもので許せると?」

アリス「なめられたものね・・・・」

千歳「ん?あれ?ケーキが一杯だ♪一真も一緒に食べよっ♪」

アリス「仔猫に仔犬が・・・・それに一真も♪ふにゃあ~♪」

なのは「あ、ヴィヴィオだ♪ヴィヴィオ~」

ただいま祇帰の魔法により好きなものに囲まれる状態にあります。
効果は三十分。
というわけで三十分後。

千歳「ふぅっ、お腹一杯だよ♪」

アリス「楽しかった♪」

なのは「あれ?ヴィヴィオは?」

ヴィ「ここだよ、ママ」

なのは「ヴィヴィオ~」

ヴィ「ママ~♪」

アリス「というわけで、ここからヴィヴィオも加わります」

ＴＯＵＤＡさんへ

アリス「千歳。今の歌、録音した？」

千歳「もちろん♪マモンできちんと録音したよ♪」

ヴィ「一真パパ、何かしたの？」

なのは「何もしてないよ・・・・多分」

アリス「多分って・・・・あ、サンダーフォースだ」

ヴィ「ママ」

なのは「大丈夫。アリスちゃん、任せていい？」

アリス「もちろん♪転移！場所は、一真のいる特別ステージ！」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

ゼロ「何か来たな？」

零「何だ？」

サンダーフォースに気がつき、攻撃を止める二人。

一真《がぁぁぁぁ！》

暴走第二段階に入っていた一真はそれを一閃。

真っ二つにした。

一真（ぐるう）……

ゼロ「行くぞ、一真！」

零「落ちてもらうぞ、神童」

戦闘再開。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

灰色の野良猫さんへ

アリス「リイン、ナイス！もう一発やっとくかな？」

千歳「ソラ君が関わるとアリスちゃん、性格がちょっと変わるんだ・・・」

なのは「それ、千歳ちゃんが言えた立場じゃ――――」

千歳「え？死にたい？いいよ、私は？」

なのは「千歳ちゃん、落ち着こうね。ほら、《罪》解放は体力使うし・・・・」

アリス（だいぶ千歳も染まってきたなぁ・・・・）

ヴィ「千歳さん、どうしたゃったの？」

千歳「何でもないよ？」

アリス「ほら、目で脅さない」

U．Tさんへ

なのは「ここでのセフィロスさんって、かなり可哀想だよね？」

アリス「まぁ、あそこまで何度もやられたらね。ちょっと同情――」

千歳「する必要はないよ♪」

ヴィ「千歳さん、セフィロスさんのこと嫌い？」

千歳「嫌いっていうか、敵かな？」

アリス「かなり一方的だけどね」

千歳「アリスちゃん。気にしちゃダメだよ、気にしちゃ」

なのは「そういう問題なのかな？」

Ｌｉｔｔｉｅさんへ

なのは「喜んでもらえて何よりです」

ヴィ「あまてらす？」

なのは「アリスちゃんの儀式魔法のことだよ」

アリス「やっぱりそうだよね。千歳の魔法のも非殺傷設定だし・・・・」

千歳「でもあれ、すっごく使いにくいんだよね」

なのは「まぁ千歳ちゃんはフロントアタッカーで近接専門だからだから、しょうがないかなそれは」

アリス「それを言い始めたら一真もなんだけど、魔法の発動までの時間を無理矢理短縮させてるからなぁ・・・・」

ヴィ「スゴいんだね、一真パパって」

アリス「まぁそんな捉え方になるよね」

なのは「そろそろ時間かな。ヴィヴィオ楽しかった？」

ヴィ「うん♪」

千歳「じゃあ次回予告だね」

アリス「《堕人》の群れと謎の八人の攻撃で、更に追い込まれていくなのは達」

なのは「そこに私達を助けるかのように現れた、謎の魔導師達は？」

千歳「次回、魔法少女リリカルなのは～七つの大罪～」

ヴィ「【断罪する者達】」

一同『次回へ、スタンバイレディ！』

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

特別ステージ

ゼロ「本当に反則だな・・・・この暴走」

零「エンペラー、セカンドモード。メテオアロー、チャージ」

一真（ぐう）・・・

チャージを開始したことを見た一真は、頭上で神無を回転させ始める。

ゼロ「させるか！」

一気に懐に入り込み、攻撃を仕掛けるが、

ゼロ「ぐほっ！」

蹴りを入れられ吹き飛ばされた。

零「メテオアロー！」

一真《がぁぁぁぁ！》

砲撃は飲み込まれ、獄龍破は二人の姿を見えなくした。

一真《がぁぁぁあああぁぁ！》

残された一真の叫びだけがその空間に木霊した。

――――終幕――――

嘱託魔導師試験当日（後書き）

ＺＥＲＯさん、紅龍さんいかがでしたでしょうか？

何かあればよろしくお願いします。

それと余り登場させることが出来なくてスミマセンでした。

断罪する者達（前書き）

お待たせしてしまってすみませんでした。
なかなか文章に出来なくて。
頭の中では、情景はあるのに・・・・難しいなぁ。
では、『七つの大罪』はじまります。

断罪する者達

ここはクラナガンのとある部隊隊舎。
そこには六人の男女がいた。
そこへ一人の女性が入ってくる。

「ネム、お茶を用意をしなさい！」

「はいはい」

ネムと呼ばれた女性は立ち上がると、言われた通りにお茶の準備を始めた。
入ってきた彼女の表情は、完全に怒りを表している。

「隊長は今日もか？」

彼が、いや男性用の制服を来ているが彼女だ。彼女が男性ともとれる美形の顔に、苦笑いの表情を浮かべている。

「そのようですね。今日は何を言われたのでしょうか？」

彼女の言葉に賛同し、隣の男性が声をだす。彼は制服ではなく、神父の服を来ている。
彼の手には魔導書がある。彼の愛読書のようだ。

「どうせいつもみたいに、上から小言言われたんじゃない？」

彼女たちの向かいに座っていた男性が話始める。表情は常に笑顔。
前髪が顔の半分を隠しているため分かりにくいが、顔立ちはかなり

整っている。
三人の言葉の内容を聞く限り彼女が怒っているのは、今日だけのことではないらしい。
「お前はどう思う？」
と、隣の青年が話始める。ルックスは誰が見ても中の中。
彼が話しかけたのは目を閉じて、無関心を続けてきた青年。
その青年からとんでもない一言が出てくる。
「いつからいたんだ、忍？」
「ずっといたわ！」
と、忍と呼ばれた青年は大声で返すが他のメンバーも
『あたし（私／俺）も気がつかなかったな（ませんでした）』
「ちょっとそれおかしいだろ！　俺、お前らのすぐ傍にいたじゃん！　てかユゥイ！　お前にいたっては、隣にいたよね！？」
「うるさいですわよ！　薄いの！」
彼女の止めの一言が、忍の胸にグサリと突き刺さった。
「隊長まで！？　つか、薄いって――――」
「うるさいと言ったはずですわよ？」
彼女の隣に魔力の矢が現れる。その狙いは、忍の眉間。

これ以上喋れば、その矢は完全に彼の眉間を貫くだろう。

「はい。すみませんでした」

渋々座るがそこで気がついた。

他の四人のもとにはお茶があるのに、自分のお茶だけがないと。

「ネムさん。俺のお茶は？」

「あ。ごめんね、忍君。いないと思って」

「ネムさんもですか・・・・」

忘れていないだろうと信じていたネムにまで忘れられていた忍は、完全に落ち込んでしまった。

「俺なんか俺なんか俺なんか俺なんか俺なんか俺なんか俺なんか・・・」

忍がそう呟き始めると同時に警報が鳴り響く。アラートだ。

「リオル」

リオルと呼ばれた神父服の男性は、ウインドウを操作して状況の確認をする。

そこに映ったのは廃墟都市群と、そこを闊歩する《堕人》の軍団であった。

「《堕人》です。数としては、百以上・・・・おや？」

「何ですの？」

「すでに機動六課が到着しているようですね」

「我々も行きますわよ！　『断罪の鎌（エクスキューショナー）』、出動します」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

場所は変わって廃墟都市群。

百以上の減らない《堕人》の軍勢に、突如現れたラストが連れてきた八人の男女。

「っ！」

シグナムの懐へ一人の少女が踏み込んでくる。

彼女の手には一本のナイフが握られており、それがシグナムの素肌を傷付けた。

シグナムを傷つけたナイフは、すぐにどこかに転送された。

（何者だ・・・？）

シグナムは、いやここにいる全員がだろうが、彼女たちがおかしいと思い始めていた。

そう思い始めた一番の理由は、彼女たちの目だ。人間とは思えないほど生気が感じられない。

「ふっ！」

「かはっ！」

女はシグナムの腹部へ、掌底を叩き込み吹き飛ばしたあと、狙いをキャロへと変えた。

「ひっ・・・・」

「「キャロ！」」

フェイトとエリオがそれに気がつくが、動けない。

謎の女と男に加え、《堕人》がしかけてくる攻撃に対応しなければならないからだ。

［プロテクション］

ケリュケイオンがキャロを守るために防御魔法を張るが、二発で割れてしまい刃はキャロの頬に傷つけてしまう。

しかし、そこまででそれ以上の攻撃はしないでキャロの血がついたナイフを、先ほどと同じようにどこかへ転送させた。

この時点で全員が切り傷を作られてしまった。

「目的は達成した。撤収」

人間のものとは思えない声が、彼女たちの中から聞こえると一つの巨大な魔法陣が出現した。

「逃がさへんよ！　クラウ・ソラス！」

「ディバインバスター！」

右から桜色、左から白の二色の砲撃が八人を挟み込むように放たれる。が、壁となってせり上がってきた《堕人》によって、彼女たちには届かなかった。

「邪魔！」

スバルはディバインバスターを撃ち、

「だぁ！」

ヴィータは最大サイズのギガントフォルムを振り下ろす。

しかしこれも《堕人》が壁となり、彼女たちを守った。

「行きますわよ！」

突然聞こえてきた、誰の記憶にもない声。

直後、降り注ぐは矢の雨。これも《堕人》に防がれるが、関係ないと言わんばかりの勢いで降り注ぐ。

「ユゥイ！」

その声と共に、辺りに結界が張られる。

この結界は転移魔法を妨害するためのものだったらしく、巨大な魔法陣は消えた。

転移を妨害された八人へ四人の男女がしかける。一人は拳銃で、一人は長刀で、一人はカタールで、小刀で。

八人を四人へ減らし、さらに残った四人へ矢と魔力弾の雨、そして巨大な砲撃が向かう。

「凄い・・・・」

キャロがそう呟いた。今の攻撃は、力押しではあるがとある二人を抜いては誰もがそう思うだろう。

ちなみにその二人とは、六課のナマケモノとその幼馴染みである。

「初めまして、機動六課の皆さま。私（わたくし）、特殊部隊『断罪の鎌』の部隊長のアンナ・シロガネといいます。以後、お見知りおきを」

ドレス型のバリアジャケットを摘まんで広げ、アンナは優雅な動きでお辞儀をする。

「は、はぁ・・・・」

「神童一真はいないのですね」

何故ここで一真の名前が出てくるのかと、はやてが聞こうとしたが、

「まあ、いいですわ。あの八人は我々の部隊が引き受けます。あなた達はそうですね・・・・」

アンナは下を指差す。その先には《堕人》の群れ。

「あれの掃除をお願いできます？　私たちの邪魔にならないように」

ムカっとしたが、おそらく今の自分たちでは勝てないと理解しているため反論出来ない。

そのため、なのは達は納得できないといった表情で《堕人》へ向かっていった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「もうよろしいですか？」

「もちろん。全員に《昇華》の使用許可を出します」

《昇華》とは《美徳》を持っているものが使える能力である。六課では、なのはだけが使用可能な能力だ。

しかし彼女たちは全員が使えると言う。

『《昇華》』

全員の身体を魔力のオーラが包む。その色は《罪人》のように全員が同じ色ではなく、全員がバラバラの色のオーラを纏っている。

＞ネム、ゼロ、忍、リーズはそのまま戦闘を続行。残りの四人は、私達三人が引き受けます＜

＞＞＞了解（した）！＜＜＜

残った四人が向かってくるのを視界にとらえると、弓型アームドデバイス『グラディウス』を構える。

その右にいる前髪の長い男・ユゥイは杖型インテリジェントデバイス『マスカレード』の先を四人へ向けを、左の神父服に身を包んだ男・リオルは閉じていた魔導書を開いた。

「ユゥイ。わかってますわね？」

うなずくとユゥイの姿が消える。幻術だ。そして大量の魔力弾が四人を囲む。
動きを止めた四人の額へ向けて、アンナは矢を放った。綺麗に吸い込まれていく矢だったが、ギリギリで避けられた。

「シュート！」

どこからか聞こえたユゥイのそれを合図に、すべての魔力弾が全方位から包むように放たれた。

「フォトンレイ！」

更に巨大な光の球体が四人のいた場所を包み、一気に収縮。あの四人を潰しにかかった。
今の攻撃が原因で発生した煙で、四人の姿は見えなくなった。

「これだけで終わりってことはありませんわよね」

「おそらくは・・・・っと、来ましたよ」

煙の中から四人が飛び出してきた。ほとんど無傷で。

「ちょっと厄介な相手ですわね・・・・」

そう呟きアンナ達は攻撃を再開した。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

ゼロは拳銃型デバイスインテリジェント『ケロベロス』の銃口を彼女たちに向け、何度も引き金をひく。打ち出された魔力弾はすべて、彼女たちが張ったプロテクションに弾かれた。
それを見たネムは怪訝な表情を浮かべた。

「どうかしたか、ネム？」

「何でもないわ。行くわよ」

リーズはカタール型アームドデバイス『レスターヴァ』を、ネムは長刀型アームドデバイス『三日月宗近（ミカヅキムネチカ）』を構え空を駆ける。

「はぁっ！」

リーズはカタールを装備した右手を、目の前の男の胸へ突き出した。
ここで一つ説明。
カタールは通常の短剣とは握りが変わっており刀身と直角鍔とは平行になっているため、握ると刀身が拳の先に来る造りとなっている。従って、あたかも拳で殴りつけるように腕を真っ直ぐ突き出せば、それだけで相手を突き刺すことが出来る。
つまり殴る力が強ければ、威力はそれだけ強くなると言うことだ。

「なっ！？」

しかしそれは男の服ををかすっただけ。
攻撃直後のリーズへ、男はどこからともなく現れた二丁拳銃の銃口を、彼女の腹へ向ける。

「ふっ！」

その二丁拳銃の引き金をひくことは出来なかった。
彼へ向けて鎌が飛んできたからだ。正確には鎖鎌。

「助かった、薄――――忍！」

「今、絶対に『薄い』って言おうとしたよな！？　そうだよな！？」

戦闘中でもツッコミを忘れない忍。流石と言うべきなのだろうか。
だがそれが隙となり、背後を取られる。

「排除」

デバイスを装備した拳が忍の脳天へ振り下ろされる。

「しまっ――――」

ガキンと金属がぶつかる音が響いた。

「ダメよ、忍君。戦闘中にツッコミは」

「すみません、ネムさん」

自分の相手を退けたネムが、背後から忍を狙っていた女の拳を防いだ。長刀を振り上げ拳を上へ弾くと、その流れのまま振り下ろす。
しかし三日月宗近と女の間にはプロテクションが展開されており、刃は彼女へは届かない。

「くっ・・・・」

女の後ろから男が一人飛び出してくる。手には斧があり、すでに振り上げられている。あとは振り下ろすだけで、ネムの体は真っ二つになるだろう。

ネムはすぐさま離脱しようとしだが、刀身を女に握られていた。

「排除・・・・」

その言葉と共に振り下ろされる斧。ネムは目を閉じたが、痛みは来ない。死んでいない。

「えっ？」

ネムが恐る恐る目を開けると、見たことのない少女が日本刀で斧を受けとめ、女の顔へ膝蹴りを決めていた。

「軽すぎだ・・・・アリス！」

「りょーかい♪」

伸びてきた魔力紐が二人の体を縛り上げ、

「でりゃあああ！」

投げ飛ばした。

「大丈夫、だよな？」

「え、ええ。ありがとう」

「じゃあいいな。そんじゃ続き、始めるぞ」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「大丈夫ですか、主はやて？」

シグナムは伸ばしていたレヴァンティンを戻しながら、はやてへ訪ねた。

「うん。それよりも他のみんなは？」

見渡すとなのは達は息切れをしており、《罪》を解放しているフェイト、スバル、ティアナの三人のオーラも小さくなっている。解放の限界が近くなっているのだろう。

唯一息切れをしてないないのは、みーなだけ。彼女はふよふよと浮かんでいる。しかし、ただ浮かんでいるのではない。

巨大な魔獣を召喚して、それに《堕人》を食べさせていた。

「タキオン！」

［ＯＫ、プリンセス］

黒い籠手から一発の薬莢が排出された。

「ヘルズ・・・・」

腕を振り上げ、思いっきり振り下ろす。

「ブリンガァ！」

ドォン！

黒一色だった地上に道が出来る。これが鈴蘭の魔法の一つ『ヘルズブリンガー』である。

この魔法はタキオンに集中させた魔力を、圧力として相手に叩きつけるものだ。

「はぁ、はぁ、はぁ」

だがすぐに白だった部分は真っ黒に染まる。

「くそっ・・・・」

＞あー・・・聞こえてるよな？＜

念話だ。それも六課のナマケモノから。

＞単刀直入に言うぞ～。死にたくない奴は、そこから離れろ。死にたいならいいけどな＜

その言葉を聞いて、鈴蘭以外の全員が一真のやろうとしていることを理解した。

「全員、緊急離脱！　何がなんでも、ここから離れるんや！」

飛べないフォワード陣を、隊長達が連れて一気に離れる。

「スバルさん、ありがとうございます」

「いいよ。それよりも早く逃げなきゃ」

「あの、何で逃げるんですか？」

「鈴蘭、知らないの！？」

「えっと、はい・・・・」

スバルにとっては驚きだった。妹である鈴蘭が、あの機動六課を一発で落とすことの出来る魔法を知らないのだから。

「ここまで来れば大丈夫かな」

ウイングロードを走ってついた先は、ビルより高い空の上。なのは達も同じような高さまで来ていた。

（ここまでする魔法って・・・お兄ちゃんならやりそうだけど）

「来たわね・・・・」

ティアナの見つめる先には巨大な球体。それは高速で回転しながら進み、《堕人》を消していく。

「あれって・・・・」

「一真さんの魔法で、獄龍破っていう魔法だよ」

「・・・・」

あれを見た鈴蘭は苦笑いを浮かべるしか出来なかった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「な、何ですの、あれは！？」

アンナも獄龍破を視線の先に確認した。見たこともないものに、彼女は声を荒げる。

「わかりませんが、このままだと巻き込まれることは確実ですね」

「そんなことを言ってる場合ではありませんわよ！」

アンナの言う通りである。獄龍破の進むスピードはかなりのもの。急いで逃げなければ、確実に追い付かれてしまう。

「ユゥイは！？」

＞もう逃げた＜

と、彼から薄情な念話が入る。

＞ユゥゥゥイィィィィィ！！！！！！＜

そう叫ぶが、既に彼は念話を切っていた。

そんなことをしている間に、獄龍破は近づいていた。

「隊長、急ぎますよ」

「そうでしたわね」

二人は急上昇を始めるが、獄龍破が迫るスピードも速い。
そして巻き込まれるか巻き込まれないか、ギリギリのところまで来たときだった。
二人の体に魔力紐が巻きつく。

「これは・・・・って、きゃっ！」

二人は一気に持ち上げられ、獄龍破の射程から逃れることが出来た。

「ふぅ・・・・ギリギリだったね」

魔力紐の出所は、自分の記憶にはない女性。その隣にも見たことない、小学生くらいの女の子がいる。

「あなた達は・・・・」

「説明はあと。で、怪我は？」

「えっと、ありませんわ。ありがとうございます」

「良かった」

「たくっ・・・・後であいつを殺しておくか」

そんな物騒なことを簡単に言う少女の手には、小学生が持つには

ゴツ過ぎる日本刀が握られていた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

獄龍破が消えたあと、しばらく見ていたが《堕人》は現れず、謎の男女八人も消えていた。

一応、ことが終わったと認識した六課部隊長のはやてと、『断罪の鎌』の隊長アンナの話し合いにより全員が六課隊舎へ集まることとなった。

「寝るか」

「まちぃ！」

部屋に戻って寝ようとした一真の肩を、はやてが掴んだ。

理由はもちろんあれ（獄龍破）である。

「あんだよ」

振り向いた一真の表情は怒り。

しかし今回はこんなことでは挫けない。

「ちょっとお話があるんやけど、ええよな？」

「早く終わるならな」

「ＯＫ。千歳ちゃん、アリスちゃん、お願いや」

「わーった」

「オッケー♪」

魔力紐で一真の体を縛り、千歳が首根っこを掴んで引きずっていった。

それにはやても着いていこうとしたが、

「八神部隊長。ちょっといいかしら？」

ネムに呼び止められた。

「え、うん。なのはちゃん。私の変わりに、一真のお説教に行ってくれるか？」

「いいよ。いつか、必ずしようと思ってたから」

そんなことを言うなのはの顔には黒い笑みが浮かんでいた。

「そ、そか・・・・頑張ってな」

「うん♪」

ちょっと心配になったはやてであった。

「それで、えと・・・・」

「ネムです。ネム・ユース、階級は二等空尉です」

「ネムさんか。それで、どうしたんや？」

「一応、見てほしいものが。もちろん、他の皆さんにも」

そう言ってネムが映し出したのは、さっきの廃墟都市群での戦闘の映像だった。

映っているのはゼロの魔力弾を、プロテクションを張り防いでいる四人の姿。

ネムはそこで一時停止をして、振り替える。

「分かった？」

と聞くが誰も頷かない。誰も分かっていないのだ。

「ネムさん。この映像のどこに問題が？　あたしは、特に問題ないと思うんですけど・・・・」

「そう・・・アンナ達はどう？」

ティアナから視線を、自分の部隊の仲間に移す。が、そちらも同じような表情をしていた。

「説明すると、彼女達はデバイスは使ってないの」

予想外の言葉に全員が言葉を失ってしまった。

彼女達は人間じゃないとかなら、はやて達なら今までの経験上信じられたかもしれない。しかし、デバイスを使っていないということは経験はない。

つまり耐性がないのだ。

「それ、おかしくないか」

『誰っ!?　てか、いつからいたの!?』

「六課の皆さんもですかぁ!?」

やはり影の薄い忍は、はやて達にも認識されてなかったようだ。

だが、これくらいでは何ともない忍である。

「一応自己紹介。俺は風切忍だ」

「それで何がおかしいの、忍君?」

「ネムさん、デバイスを使っていないっていいましたけど、あいつら使ってましたよね」

「使ってたけど、彼女達はセットアップしないでデバイスを使用してたわ」

セットアップしないでデバイスを使用なんて、あり得ないことであった。

しかし、そのあり得ないことをやってのける彼女達は一体。

「まぁそれについては私達が調べますわ」

「えっと、アンナさん。一つよろしいですか?」

「何ですの、八神さん?」

「今さら何ですが、『断罪の鎌』のことを教えてくれませんか?」

それを聞いたアンナは、ネム達六人を整列させる。

「私達、『断罪の鎌』は対《罪人》の部隊ですの。上が《罪人》の存在を確認はしていましたが、公に公開していなかった《罪人》に対しての対抗手段と言うことです」

「でも、どうやって彼女達と？　《罪》があるから、普通の魔導師じゃ」

「それは分かっていますわ。対抗手段としては二つ。一つは、《罪人》になること。そしてもう一つは、私達《聖人（ライザー）》ですの」

初めて聞く言葉に困惑するはやて達。そこへフェイトが質問を投げ掛けた。

「あの、『聖人』っていうのは一体・・・・」

「『聖人』とは、『七つの美徳』。つまり、《信仰》《節制》《正義》《希望》《分別》《忍耐》《慈悲》。この七つのうち一つを持つものが《昇華》した状態のことですわ。貴女方に分かりやすく言えば、《罪》を持つものが《堕落》して《罪人》なるのと同じということですわね」

そこまでなのはのことを思い出した。彼女も一度《昇華》している。

「そういえば、六課にも《昇華》してる人が一人いまして」

「オーラの色は？」

「確かオレンジ・・・・」

「《希望》か。あたしと同じだな」

と、男子用の制服を着た女性が話始めた。

「あたしはリーズ・ファウルス。ここに所属しているが、聖王教会の騎士だ」

それを聞いてシグナムが反応した。

全員がそうなることは予想していたらしく、ため息をはいた。

「私も聖王教会の騎士で、ヴォルケンリッターの将のシグナムだ。一度手合わせしてみたいな」

「そうだな」

意気投合し、固い握手を交わした二人であった。

「バトルマニア・・・・」

「あははは・・・・」

ヴィータのその呟きは、当の本人には聞こえてはいなかったが、その方がヴィータにとってはよかったのだろう。

「そうそう。すっかり言い忘れてましたが、あなた達機動六課はこの件から手を退いてもらいます」

「な、何でですの?」

「当たり前のことですわよ。あなた達は「アビス」回収の任務中にたまたま巻き込まれただけ」

「だけど、いずれはあいつらと戦うことになってるぜ」

「おチビさんの言う通りですが、だから何ですの？」

「なっ！？」

「そんなこと関係ありませんわ。あなた達はこれ以上、《罪人》に対して関与しないということで――――」

「ふざけたこと抜かしてんじゃねぇぞ、クソ女（アマ）」

アンナの言葉を遮り、一真が現れた。その表情は、説教される前よりも不機嫌な顔をしている。

「神童一真・・・・」

「何でテメェが俺の名前知ってんだ？　どこかで会った顔でも・・・・ねぇな」

「・・・・っ」

アンナが一瞬見せた表情に怒りが混じっていたが、それに気づくものはいなかった。

「えっと、一真さん」

「あんだよ、エリオ？」

「千歳さん達に説教されてたんじゃ・・・・」

「あんなもん説教されて反省する奴にするもんだ。つまり、俺は反省するわけがない」

そう言われてエリオは納得しかけたが、よくよく考えてみれば無茶苦茶な理論であった。

しかし、それを言っても一真は認めないだろうと察し、エリオは諦めた。

「勝手に訳のわからねぇことをいってんじゃねぇよ。もう上には申請して、関わることの許可はもらってんだ」

「そんなことといつの間に・・・・」

「階級にものを言わせて、無理矢理な」

勝手に何をしたんだと言おうとしたが、結果としては助かったので文句は言えない。

ホント、無茶苦茶である。

「つか、お前」

「俺か？」

「そう。前髪のお前」

「前髪って・・・・」

「お前、どっかで会ったか？」

『は？』

全員が全く同じ反応をした。ということは、会ったことはないということだ。

「いや会ったことはないはずだぞ」

「ならいいんだが・・・・あぁ！　思い出した。確か一ヶ月前にアルプトラオムで会った、プライドのガキに似てるんだ。テメェの顔」

「今何て言った？」

「だからプライドのガキに――――」

「それについて詳しく教えろ！」

一真の肩を思いっきり掴んで叫ぶユゥイ。

同じ部隊の六人も、初めて見たという感じでユゥイを見ている。

「ユゥイ、止めろ」

ゼロがユゥイの腕を掴んで一真から離そうとするが、

「離せ！」

突き飛ばされた。

「がはっ！」

「イテェだろうが、クソが」

「テメェ・・・・」

「つか、お願いする立場がそんな態度はおかしいだろうよ。せめて土下座しながら、『お願いします。こんなダメな自分にそのことを詳しく教えてください、一真様』ってやらないと」

（いやいやいや。何でだよ）

全員が心の中で全く同タイミングでツッコミを入れた。

［あんた、それ絶対におかしいわよ］

「おかしくねぇよ。俺に教えてくれって言ってんだからよ」

「ふざけるな！　さっさと教えろ！」

「めんどくせぇ奴・・・そうだな。俺に模擬戦で勝ったら、“多分”。うん“多分”教えてやるんじゃないかな」

教えるつもりは全くないのだが、ユゥイはそれに気がつかないで承諾してしまった。

こうして一真ｖｓユゥイの模擬戦は決まった。決まってしまった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「フム。上出来だ」

白衣を着た男の後ろに、あの八人が整列している。

「ありがとうございます、主」

「では、あれの収集は頼めるかラスト？」

「もちろん。今すぐがいい？」

「いや。これが完成したあとで構わない」

「そう。なら、また呼んでね～」

そう言い残して、彼女は消えた。

「スカリエッティ。お前の戦闘機人の研究資料は、有効に使わせてもらう。くくくく・・・・」

彼の笑い声が、その空間に響き続けた。

《一真の部屋》

一真「あー、始まっ――――」

ゼロ「一真ぁぁぁぁぁ！」

一真「るせぇんだよ、クソが！」

ゼロ「ぐはっ」

神無［顔を踏みつけるのは止めなさいよ］

一真「知るか」

なのは「というわけで、前々回からのゲストの八神ゼロ・Ａ・Ｓ・ハラオウン君と」

千歳「本当に来やがったか・・・・」

ナナキ「ゴメンね、千歳」

千歳「問題ねぇ。ここで徹底的に潰すからよ」

セフィロス
「やってみるがいい、こむす――――」

千歳「誰が小娘だ、このドクサレが！　無明神風流奥義・四神同時発動！　最終奥義・黄龍！」

青龍、朱雀、白虎、玄武、黄龍の五体がセフィロスへ向かう。

セフィロス
「無駄だ。スーパーノ――――」

千歳「させる分けねぇだろ！　もう一発！」

セフィロス
「ウボァァァ！」

千歳「これでいいんだよな、ナナキ？」

ナナキ「うん。あの死体はオイラが持って帰るから」

千歳「あぁ、頼んだ」

アリス「二組目は『魔法少女リリカルなのは～片翼の天使が導いた世界～』よりナナキと、千歳の敵のセフィロスだよ」

一真「お前ら、この空間で」

千歳「あたし達に」

一・千「「勝てると思ってんのか？」」

なのは「まぁ、ここじゃああの二人は神だからね」

アリス「一真は分かるんだけど、何で千歳もなんだろって気がするけど」

ナナキ「それは気にしちゃダメなんじゃないかな？」

な・ア「「確かに・・・・・」」

ゼロ「クソ・・・・なら、この改良版のカートリッジを――――」

な・ア「「ゼロ（君）」」

ゼロ「な、何だよ？」

ジャキッ

アリス「そんなもの、ここで使わせるわけないじゃん。暴走されたら困るし」

なのは「というわけで死・・・・“お話し”しようか？」

ゼロ「今、絶対に死ねって言おうとしたよな！？」

なのは「うるさい！」

アリス「死ね！」

ゼロ「ぎゃあああああ！」

セフィロス

「まだだ。私は――――」

千歳「まだ死に足りないか？　それなら、原子も残さず消してやるよ」

神無［千歳ちゃん。一応ゲストなんだから、最後まで喋らせてあげなさいよ］

千歳「こいつにそんな権利は――――」

セフィロス

「八刀一閃」
（※本来、技名を言うことはありませんが、言わないと分からないのでセリフにしました　ｂｙ作者）

ナナキ「律儀にそこまで書くんだ・・・・」

千歳「テメェにあたしのセリフを遮る権利もねぇんだよ！　１００倍ビッグバンかめはめ波！」

セフィロス
「アボァァァァ！」

神無［このままじゃ、いつになってもお返事コーナーにいけないので、強制的にお返事コーナー開始！］

ＺＥＲＯさんへ

千歳「ありがとう、祐輔君♪」

アリス「かなり苦労したんだよ、あれ。とくに筆記試験・・・・」

ゼロ「まぁ、教えたのがフェイトだからな。そりゃ苦労するだろう」

ナナキ「一真はどうだったの？」

一真「俺は、訓練校に行ったからんなもんやってねぇが、これくらいは勉強しなくても出来るだろ」

神無［それは言っちゃ・・・・ってやっぱり］

千歳「ふざけんなよ！」

一真「ごふっ！」

なのは「私が教えてあげればよかったかな・・・・」

全員（それも危ないような・・・・）

灰色の野良猫さんへ

一真「一応、俺にも非殺傷設定に出来ない魔法あるぞ」

アリス「何？」

一真「冥道残月破」

神無「確かにあれは非殺傷設定にしようがないわね」

ゼロ「でも。そんな非殺傷設定に出来ない魔法なんて、どうやって作ったんだ」

一真「俺のは漫画を見てて作ったんだが、アリスの場合は・・・・」

アリス「何となく」

なのは「何となくで作れちゃうアリスちゃんが凄いよ」

千歳「私にも出来るかな？」

ナナキ「作らない方がいいような・・・・」

セフィロス
「貴様に無理だ、幼女」

千歳「たった今出来た。メテオ！」

セフィロス
「ほごぉぉあああ！」

Ｎａｋｉさんへ

ブチィ！

一真「はぁ～い。皆さん、今から起こることは見ても忘れるように」

千・ア・ゼ・ナ
『はぁ～い（分かった）』

なのは「フルドライブ！　ブラスター３！　《昇華》！」

一真「さて、俺も。《罪》解放！　行くぞ！」

なのは「スターライトブレイカーＥＸ！」

一真「冥道獄龍破（幻想殺し付き）！」

神無「あれ、Ｎａｋｉさんとか巻き込まないわよね」

ナナキ「どうだろ・・・・」

アリス「てか神無さん、ラディの心配しないんだ」

ゼロ「なぁ千歳。あの冥道獄龍破って、獄龍破とどう違うんだ」

千歳「何でも、獄龍破と冥道獄龍破を一つにした魔法らしいよ」

ゼロ「・・・・こわっ」

鴨川秘さんへ

一真「茸を俺より先に発見して食べる犬か。ナイスだ！」

千・ゼ「「チッ」」

アリス「ねぇ一真～。私が世話をしてもいい？」

一真「いいけど、殺すなよ？　殺したら・・・・分かってるよな？」

アリス「はい・・・・」

なのは「でも、これからみんなどうするんだろうね」

神無「確かに。この犬で一真の弱点はなくなったような・・・・」

ナナキ「クラウドもこれで諦めるかな？」

セフィロス
「そんなもの、初めから奴の口の中にに転送すればいい話だろう」

神・な「［あ！］」

一真「名前はそうだな・・・・キョンで」

神・千・な・ア・ゼ・ナ
『それはダメだから！』

シグマさんへ

一真「食うなら茸を全部って・・・・おお、早速食べてるな」

なのは「ダメだよ！　それ松茸が入ってるんだから！」

一真「やれ！　そのまま食ってしまえ！」

チャキッ

千歳「止めようか？」

一真「はい。おい、キョン。止めろ」

キョン「クゥン」

アリス「でも、凄いよね。毒キノコだけ食べるって」

神無［シャマルさんの料理も食べられるみたいよ］

ゼロ「マジかよ！」

ナナキ「シャマルさんの料理ってそんなに酷いの！？」

千歳「はい、セフィロス」

セフィロス
「がふっ！」

千歳「ね」

ナナキ「う、うん・・・・」

紅龍さんへ

一真「ちっ、死んでなかったのかあのグズ」

ゼロ「零って言ったか？　あいつが死んでたら、俺も生きてないぞ」

一真「あっそ」

ナナキ「暴走第二段階って、意識ないんだよね？」

アリス「うん。だから、第二段階でやったことに対して怒りにくいんだよね」

千歳「あたしは関係ないがな」

なのは「それは千歳ちゃんだけだよ」

神無［一応忠告。リミッター一つあけたくらいじゃ、二段階は難しいかもしれないわよ］

U．Tさんへ

千歳「まだヤル気か？　今日だけでもう何回目だ？」

ナナキ「そうだよ。もう諦めたら？」

セフィロス
「それは出来ない相だ――――」

千歳「メテオ！」

セフィロス
「ウボァァァ！」

神無［何となく可哀想だけど、千歳ちゃんに喧嘩を売ったのが運のつきね］

一真「さて、クラウド。テメェとも決着を付けねぇとなぁ？」

ゼロ「まだついてなかったのか？」

アリス「長いよね～」

一真「つーわけで、今度そっちに行かせてもらうぜ。もちろんキョンも連れて！」

キョン「ワン！」

なのは「だから、その名前変えてあげようよ・・・・」

ラグナシアさんへ

アリス「もしかしたら行けるかもよ？」

一真「無理だろ。爆流破あるし」

アリス「そうだった」

千歳「ここで知らない人のためには簡単な説明。爆流破って言うのは、相手の放った魔法を自分の魔法で押し返す技。つまり、相手は二人分の魔法を受けることになるってわけだよ」

ゼロ「反則だよな、それ」

なのは「そりゃまあ・・・私も喰らったことがあるからね」

ナナキ「でもその魔法が効果あるのって、魔力での魔法だけだよね」

神無「まあね。でも爆流破を使うような状況は少ないから」

ナナキ「そういえばそうだね」

ＴＯＵＤＡさんへ

一真「知るか。俺は負けたくねぇ」

ナナキ「でも試験官だよね？」

一真「知らん」

神無「無駄よ。かなりの負けず嫌いだから」

キョン「ワン！」

ゼロ「何くわえてんだ？」

千歳「キノコマンだって」

なのは「食べて大丈夫なの？」

アリス「どうだろ？　でも、何か危ないような・・・・」

一真「大丈夫だよな？」

キョン「ワン！　ワン！」

千歳「本当かな？」

なのは「それじゃ次回予告」

一真「始まった俺ｖｓユゥイの模擬戦」

アリス「やる気のない一真は、ユゥイにだんだん追いつめられていく」

千歳「ユゥイ君がそこまで熱くなるのには、一つの理由があった」

神・な「［次回、魔法少女リリカルなのは～七つの大罪～］」

ゼ・ナ「「【姉弟と兄弟】」」

一同『次回へ、スタンバイレディ！』

ナナキ「そういえばセフィロスは？」

一真「あそこで死んでるぞ」

神無［南無］

断罪する者達（後書き）

ＺＥＲＯさん、Ｕ．Ｔさん、いかがでしたでしょうか？
長らくお待たせしてしまってすみませんでした。
何かいたらない点があれば、一言よろしくお願いします。
それではまた。

次は今月中に更新できたらいいなぁ～

機動六課訓練所上空。そこには一真とユゥイが向かい合って浮いている。

「で、ルールは？」

「非殺傷設定だったら、何でもいいんじゃね」

「だな」

[何でもありって・・・・模擬戦が終わって、この訓練場が消滅しましたは無しよ]

「善処する」

「善処するって、あんたね～」

神無を肩に担ぎ、アクビをする一真。模擬戦をしようと言った本人が、一番やる気がないのはどうだろうか。

＞始めていいか？＜

＞オーケーや＜

「つーわけだ。聞こえたな？」

「あぁ」

二人は大きく息を吸い込んで叫んだ。

「《罪》解放！」

「《昇華》！」

すぐに一真はユゥイへ向かって神無を振り下ろした。

しかしユゥイの姿は消える。姿を消す幻術を使ったのだ。直後、一真は大量の魔力弾に囲まれた。

「めんどくせぇ。蒼龍破！」

灰色の雷が魔力弾を残さずかき消した。そこへ、間髪入れず第二破が一真を襲う。

「ちぃっ」

防ぐことが出来ないと判断した一真は、足下に六芒星の魔法陣を展開する。

使う魔法は一真特製の転移魔法。この転移魔法の特長は、発動までの時間がおそろしく短いこと。

そのためこういう場面で使うと効果的な魔法だ。

「なっ！？」

「ちなみにテメェがどこにいるかも分かってるぞ」

一真は神無の切っ先を真下に向けた状態で現れて、そのまま落下を始めた。

すぐに聞こえた金属音。それと共にユゥイの姿が現れた。

「ぐうっ・・・・」

「やっぱりそこにいやがったか。俺の勘ってよく当たるな」

一真は分かっていたわけではない。さっき言った言葉は適当である。

［たくっあんたは・・・・・］

キィン

「あ？」

一真の体はバインドで縛られた。その間にユゥイは離脱し、距離を取る。

「めんどくせぇんだよ！」

バインドを引きちぎると、足場を作り空を駆ける。

「イーラ・カンノネッジャメント！」

砲撃が狙うのはユゥイの顔が、プロテクションで阻まれた。

「がっ！」

直後、一真の背中に激痛が走る。

「なっ！」

何度も何度も一真の体に何かがあたるが、その姿は目に映らない。

「ぐっ・・・・神無！」

［無理よ。探査しても反応がないの］

（転移してもあっちの姿が見えねぇんじゃな、出てきたところを狙い撃ちにっ・・・・くそ。つか、何で俺が防戦一方なんだよ！　俺は、）

「Ｍじゃねぇぇ！　Ｓだ！」

訳のわからない叫び。同時に一真が纏うオーラが膨れ上がる。

「は？」

「紅之太刀弐式・轟滅点欠！」

神無を両手で持ち切っ先をユゥイに向けると、背後に現れた魔法陣を蹴って彼へ突進を始めた。

一真がユゥイへ向かう速度は次第に速くなる。

後ろの方で聞こえてくる爆発音。おそらく、一真を止めるために使った魔力弾か何かなのだろうが、ぶつかり合って爆発したのだろう。

「プロテクション！」

神無の刃とぶつかり、一真は止まる。

「いいのか？」

「どういう意味だ？」

「動いてなくていいのか、って聴いてるんだよ」

「いいんじゃね？」

その言葉を残して一真は消えた。そしてプロテクションへ当たる

「紅之太刀壱式・煉刃！」

放たれた刃は真っ直ぐユゥイへ向かうが、彼は動かない。そしてユゥイの体は縦に真っ二つになって、霧のように消えてしまった。

「ちっ・・・幻術か。そして、こいつらも」

一真を囲むように七人のユゥイが現れた。

（こん中の一人が本物か、それとも全員幻術か・・・まっいいか。どっちだろうと）

「まとめて吹っ飛ばせば、考えなくてすむしな」

「あんた、何をする気よ？」

「何だろうな？　ククク・・・」

神無の刀身に魔力が集まり、カートリッジが二つ排出された。

「金剛槍破！」

体を一回転させて、全方位に金剛石、いわゆるダイヤモンドの槍を飛ばす。

そしてすべてのユゥイは消えた。一真の考えの後者が正解だったようだ。

「ふぅ・・・で、テメェは何であんなクソガキのことを知りてぇんだ？」

「さあなっ！」

どこからともなく響くユゥイの声に、真下から上がってくる巨大な砲撃。それは簡単に一真を飲み込んだ。

「んなもんが・・・届くかぁ！」

弾ける光の柱。

大きさは変わらないが、色が濃くなったオーラを纏った一真が現れた。

「蒼龍破！」

本日二発目の蒼龍破。それは一発目よりも太く、数の多い。

雷はビルを破壊し、地面には穴を作る。

「ワンパターンだな」

「るせぇよ」

ユゥイは姿を消したままで、現れようとはしない。
一真は神無を構え直し、目を細めた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「よかったね、アンナさん。一真の狙いがユゥイさんに向いて」

二人の模擬戦を見ていると、突然千歳がそう呟いた。

「どういうことですの、楠木さん？」

「だって一真、すっごく怒ってたよ。たぶん、あのままだったらアンナさん達全員と模擬戦をしてたんじゃないかな？　それも始めから容赦なく、勝敗がついても攻撃を止めず、アンナさん達が再起不能になるまで・・・・」

「なぜ、そう言えるんですか？」

笑顔を曇らせてリオルが聞く。

「だって、一真が怒ってる原因はアンナさんの言葉だから」

千歳の言葉の意味が分からない六人を無視して、千歳は続ける。

「私の口からは、何で一真が怒っているかは言えないけど・・・・」

「ふん。話しになりませんわ」

「どうだろうな。あんな奴でも、やらなきゃならないことだってあるんだぜ」

「ヴィータにしてはいい言葉だな」

「一言余計だ、シグナム」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「クソが・・・こそこそしてんじゃねぇよ」

「どう言われようが、これが俺の戦い方だ」

ユゥイは相変わらず姿を現さず、自分の分身を何体も出したり、見えない攻撃を続けている。

一真は完全に防戦一方となり、プロテクションを全方位に張り防いでいる。

自分の戦いが出来ていないのだ。

「この辺り一帯、まとめて吹き飛ばせねぇかな」

「何言ってんのよ、あんたは!?」

恐ろしいことを真顔で呟く一真に、神無はツッコミを入れるが一真は真剣に思考を巡らせている。

つまり、今なら本気でやりかねないのだ。

「冥道残月破使いてぇ・・・・」

＞［いやいやいやいや！］＜

神無、そして六課からツッコミが入る。

あの魔法は、アリスの『天照』同様に非殺傷設定にできない魔法である。

「まぁ使いはしねぇけど・・・・ヤバイな」

一真の張っている防御魔法にヒビが入り始めた。限界が来ようとしている。

一真はプロテクションを解いて、下へ向かって急降下を始めた。

「逃げるのか！？」

「んなわけねぇだろ、グズ！」

地面に着いた一真は、振り向くと同時に神無を振り抜く。

「紅之太刀壱式・煉刃！」

先に放ったものよりも一回り巨大な刃。

それに何かが当り爆発していく。

「紅之太刀参式・天魔裂破！」

狙ったのは一真の真後ろにあるビル。狙った理由は完全に勘。

「なっ！？」

崩れるビルから影が一つ。ユゥイだ。

「もう逃がさねぇよ！」

転移で一気に近づいた一真はユゥイの頭を、後ろから鷲掴みにして再び急降下。

「落ちやがれ！」

「ぐっ・・・・」

地面に叩きつけるではなく、ビルへ向けてユゥイを投げつけた。
追い討ちをかけるように、煉刃を彼の落ちた場所へ三発。

「神無」

［まだね。まだ、彼の魔力の反応はあるわ］

「ちっ・・・・さっさと落ちたら楽――――」

「寝言は・・・・寝て言えよ！」

瓦礫の中からユゥイは現れる。バリアジャケットや顔は汚れているがそれだけ。
傷は一つもない。纏っている茶色のオーラが、彼を守ったのだ。
そして再び二人の視線が交差する。

「もう消えさせねぇ！」

転移で近づいた一真は、神無を下から上へと切り上げる。
ユゥイはそれをマスカレードで防ぎ、足で踏みつけた。

「テメェ・・・・うらぁっ！」

力任せに振り上げて、神無からユゥイの足を退かす。そして、バランスを崩したユゥイの胸へ突き出した。
その狙いは寸分の狂いもなく、正確にユゥイの心臓を狙っている。

「はっ」

ユゥイはマスカレードで神無を弾き上げると、それを一真の首へ突きつける。
首を傾けることによってそれを避けた一真は、右足だけで跳び上がり後ろ回し蹴り。
一真の足を左手で受け止めて、脇腹を殴った。

「ぐふっ・・・・っのぉ！」

残っている右足で地面を蹴って、体を回転させ足で脳天を狙う。

「がっ！」

「落ち・・・・ろぉぉぉぉ！」

地面へ向けてまっ逆さまに落ちていくユゥイだった。が、途中で体勢を直した。

「もう一回聞くぞ。何でテメェは、あのクソガキのことを知りてぇ

んだ？　テメェと何か関係あんのか？」

「・・・・」

ユゥイは黙ったまま、一真から視線を外そうとはしない。
そしてゆっくりと口を開く。

「それを言う前に聞くが、そいつは俺の顔に似てたんだな？」

「あぁ。結構似てたな」

「そうか・・・・なら、プライドは俺の弟だ。十年前に行方不明になってたあいつが、今《罪人》に関係しているってことを聞いた。だから、俺はあいつの情報が欲しいんだよ」

「・・・・あっそ。俺にとっちゃ心底どうでもいいことだな」

聞いたくせに、聞いた本人はどうでも良さそうな返事。

「俺にとってはどうでもよくないんだよ！」

大声で一真に向けて叫ぶユゥイ。
それだけ弟のことが知りたいのだ。

「俺も聞きたいことがある」

「あんだよ？」

「何であんな嘘をついたんだ？」

「何のことだ？」

「あんたが一ヶ月間入院してたのは知ってる。そんなあんたが、退院してから一週間程度しか経ってないのに、申請しても通るわけないだろ？　それに俺達『断罪の鎌』がいるんだ。絶対に一週間じゃ、申請は通らない」

「そうだな・・・・」

一真の声が、一気に低くなる。機嫌が悪くなった証拠だ。

「何であんたはそんな嘘までついて、あいつらと戦おうとしたんだ？　あんた達は、ただ任務中に巻き込まれただけだろ」

「・・・ただ巻き込まれただけだと？」

一真の纏っているオーラが、また膨れ上がり始めた。

「ふざけたこと抜かしてんじゃねぇぞ！　このクソがぁぁぁぁ！」

魔法陣を蹴って一気に近づくと、一真は神無を力任せに振り下ろす。

ユゥイはそれをプロテクションで防ぐが、そこへ何度も何度も神無が振り下ろされる。

「だってそうだろ？　怒ることじゃないはず――――」

「テメェには、自分の前から大切な人がいなくなるってことがどんなことか、分からねぇだろ！」

「俺だって弟がいなくなってるんだ！　分からないわけないだろ！」

プロテクションが割れて、神無の刃がユゥイの顔を襲う。

神無を殴って軌道をずらして、裏拳で一真を殴った。だが、一真は微動だにしない。

「じゃあ言い換えてやる。テメェは、大切な人を殺されたことはあんのかよ！？　自分を大切に育ててくれて、いつかちゃんと恩返しをしようと思っていた人を！」

「がっ！」

一真の拳がユゥイの顔面にめり込んだ。

ふっ飛んでビルに叩きつけられる。しかし、それだけでは一真はおさまらない。

「俺はな大切な人を殺された。凄く大切で大好きだった人を！」

カートリッジロードをして、天魔裂破を放つ。

「それだけでも殺した奴が憎くて憎くて、そいつをこの手で殺したいほど憎い・・・・」

憎しみと、それに呼応する魔力によってこの辺りの大気が震えている。

「そんな相手と、何も知らないで三年間も一緒に行動してたんだ！」

一真へ向かってくる十発のスフィア。全てを一振りで破壊すると、後ろに向けて柄を突き出す。

「っつ！」

「それがどれだけ憎くいか・・・・悔しいか・・・・それを・・・・それをテメェに分かるのかよ！」

柄で鳩尾を殴られ動けないユゥイへ、一真はゼロ距離で煉刃をぶつけた。

この距離なら魔力のオーラがあっても、ユゥイにダメージはあるはずだ。

「そんな相手を・・・・仇を・・・・この憎しみをぶつける存在を！」

もう一度煉刃を放つため、振り上げた神無からは魔力が溢れ出す。

その魔力量は模擬戦に使うような物ではない。むしろ、実戦向きの魔力量だ。

「突然出てきた貴様らに・・・・」

口調が変わった。今まで一真は、『貴様』という言葉は使ったことはない。

「はいそうですかと、簡単に任せられるかぁぁぁぁ！！！！」

振り下ろされた神無。今日一番の大きさの刃は、ユゥイへと突き刺さる。

「はぁ、はぁ、はぁ・・・・」

［一真・・・・］

一真が語った、自分の心の声。それはいつも一緒にいる神無でさえ、こんな言葉は一度も聞いたことがなかった。

「俺だって・・・・」

煉刃が消え、さらに巨大なオーラを纏っているユゥイが言葉を紡ぐ。

「俺だって、たった一人の大切な弟を・・・・」

マスカレードの先には巨大な魔力弾。

「お前みたいな憎しみの塊のような奴に、殺されてたまるかぁぁぁ！　マスカレード！」

［いつでも行けます、マスター］

「レイヴン・ライザァァァ！」

放たれ閃光は、一真を完璧に捉える。

「クソがぁ・・・・んなこと、知るかぁぁ！　神無！」

一真の姿が魔力の柱の中に消える。

スーツ姿で現れた一真。フルドライブの『神道・神無』を発動したのだ。

同時に砲撃は折れてビルに当たる。

「もうウゼェ・・・死ねよ、テメェ。自分で死ねないなら、俺が手伝ってやるからよぉ！」

一真の口から発せられる、おそろしい程低い声。そして開いた瞳孔。

その瞳が映すのは、目の前にいるユゥイだけ。完全に模擬だということは、彼らの頭の中から消え去っている。

「上等だ。やってみろ！」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「私、初めて聞いた・・・・」

「うん」

さっき一真が叫んだ心の内。自分自身の心の闇。

それは幼馴染みの千歳や、一緒に逃亡生活を過ごしたことのあるアリスでさえ知らないこと。

「あれが君が言っていたことか？」

リーズの問いに千歳は無言で頷く。

「二人とも、本当に知らなかったの？」

なのはが聞くと、千歳は首を横に振って答える。

「知らないよ・・・だって、一真。帰ってきてから、その間のこととか聞いてもはぐらかされてたし・・・」

「そっか」

しかしそれよりも驚いたのは、一真があそこまで声に出して感情を、憎しみを剥き出しにしたこと。

あんな一真を、彼女たちは初めて見たのだ。

「行きますわよ・・・」

アンナ達は、二人の模擬戦へ介入しようと動き出すが、

「行かせないよ・・・絶対に、あの二人の邪魔はさせない」

悲しい顔を浮かべる千歳とアリスが、六人の前に立つ。

「何でだよ！　あのままじゃ、どっちも落ちるだろ！？」

「そうなるんだったら、私達が止めるよ。でもね、あんた達には絶対にさせない」

「・・・いいですわ。そんなに邪魔がしたい――――」

「死ぬ覚悟が出来てるならいいよ？　相手をしてあげる」

アリスの冷たい一言に、口を塞ぐ。

彼女の手には、すでにフルドライブと化したレヴィアタンが装着されていた。

「ほら？　邪魔するなら私達を倒すんでしょ？　いいよ、来なさい」

「っ・・・・」

「今の二人を邪魔していい人は、ここにはいないよ・・・・」

千歳が呟いたその言葉は、隣にいたアリスの耳にだけ届いた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「はぁっ！」

高速機動でユゥイへ攻撃を仕掛ける一真。それに対しユゥイは、魔力弾で応戦。

「ふっ！」

向かってきた魔力弾を全て叩き落とし、龍を顕現させ神無の刀身に纏わせる。

「見せてやるよ！　これが本当の獄龍破だ！」

「ちょ、あんた！」

神無の切っ先には灰色の魔力球。それを一度振り上げて、魔力球を投げつけるように振り下ろす。

「獄龍破！」

いつも使うものとは違い、チャージ無しで放たれた獄龍破。
魔力球は巨大な竜巻となって、ユゥイを飲み込もうとする。
だが、ユゥイは先に放った砲撃を撃ち獄龍破を吹き飛ばした。すぐにユゥイは一真を探すが、もういない。

「いつまで探してやがる」

「くっ！」

すでに一真は、ユゥイの目の前に転移していた。そこへ魔力弾が降り注ぐ。

「言ったろ？　ワンパターンだって」

「蒼之太刀弐式・崩天魔突！」

プロテクションを使わなかった一真に、すべての魔力弾が直撃するが無視して神無を構える。

「なっ！？」

一度目の突きでユゥイの体は浮き上がり、そこへ数十の突きを叩き込んだ。

「ぐっ・・・・一つだけ言ってやる」

「何だ？」

マスカレードでの突きを避け、神無で叩くと右手でユゥイの腹を殴る。が、左手で腕を掴まれ、防がれた。

「復讐なんて虚しいだけだ！」

マスカレードで一真の脇腹を殴り、そのまま吹き飛ばす。

一真はビルに直撃。煙で見えなくなるが、そこから漆黒の刃が姿を現した。

「うるせぇ！　じゃあ貴様は、そのクソガキを、弟を俺に殺されたら俺を憎まねぇのか！？」

漆黒の刃を横への移動で避けると、魔力弾を再び向けると同時に姿を消した。

「そりゃ、憎いさ！　探して見つけたら、お前に殺されたんだから！　だがな、憎しみと復讐は別だ！」

「貴様に何が分かる！　大切な人を殺されたこともない、貴様に！」

ビルが吹き飛ぶ。いや、あとかたもなく消滅した。

「うぉぉぉぉぉ！」

カートリッジは四発排出。

切っ先を天に向ける。その刃には、魔力で顕現した三匹の黒龍が巻き付く。

それは一つとなり、巨大な魔力刃となった。

「死天龍封刃（シテンリュウホウジン）！」

文字通り、龍を封じ込めた刃が出来上がった。それを十字に振るう。

大地に残る二本の傷。それが、この魔法の強大さを物語る。

「はぁっ、はぁっ、はぁっ・・・・・」

ボロボロになったユゥイが姿を現した。

直撃はしたが、ユゥイは落ちなかったようだ。

「・・・・」

一真がユゥイを見つめる瞳には、殺気が満ち溢れている。

「何だ。まだ死ねんでねぇのか・・・・」

そう言った一真が見つめているのは、ユゥイの喉元。

［一真！　止めなさい！　あんた、彼を本気で殺す気なの！？］

「当たり前だ」

いくら非殺傷設定だといっても、神無はアームドデバイス。肉体にダメージを与えることは可能である。

そして一真の狙いは喉元の頸動脈。それが当たれば、ほぼ確実にユゥイは死ぬ。

「つーわけで、さよならだ。貴様は弟に会えないで」

一真の姿が消える。同時にユゥイは幻術で消えようとするが、間に合わない。

「死ぬんだよ」

ユゥイの喉元に添えられた刃が、引き抜かれた。が、血は出ない。なぜなら、そこにいたはずのユゥイの姿がなかったからだ。

「ふぅ・・・ギリギリセーフ。大丈夫・・・だよね？」

「え、あ、うん・・・」

下を見ると、アリスと魔力紐の絡まったユゥイがいた。

「アリス。何でそいつを助けた・・・」

「だって、殺しそうだったから・・・」

一真に言い返すが、その声は恐怖で震えている。それだけ今の一真は恐ろしいのだ。

「だから何だ。そいつを早く渡せ」

「嫌だ！」

「なら貴様ごと切る」

急降下を始めた一真。狙いは言った通り、ユゥイとそれを渡さないアリス。

［いい加減に――――］

「止まって！」

間に飛び出してきたのは、見覚えのある小さな体。

「千歳・・・・何だよ？」

その手に握られている太刀を、一真に向けて言う。

「これ以上はダメだよ、一真」

「・・・・貴様も邪魔するのか」

「邪魔するよ。今の一真は、憎しみを向ける相手を間違ってるもん。私は復讐がダメとか言わない。でもね、ユゥイさんは復讐する相手じゃないんだよ」

「んなこと分かってる」

「だったら何で！？」

「そいつは、俺の今までをたった一言で否定しやがった！　復讐を目標として生きてきた、俺を全部！　それが許せねぇ！」

「そっか・・・・でもね、一真。私は今の一真を師匠として、幼馴染みとして許すことはできない」

「そうかよ・・・・じゃあ、切る」

一真は千歳に向けて神無を一気に振り下ろした。
だが刃は千歳に当たる寸での所で止まった。一真が自分で止めたのだ。

「一真？」

見上げた一真の瞳には水が溜まっていた。

「くっ・・・・うぅ・・・」

その水は一真の頬を伝い、千歳の顔へ。
それは一真が久しぶりに見せた涙で、泣き顔。

「うぅ・・・・あぁぁぁぁ！」

千歳はゆっくりと黙って一真を抱き締める。
一真のその声は、暫く訓練場に響いていた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「一真君」

「つまらないですわね」

「どういうことですか？」

意味の分からないアンナの一言に、鈴蘭が聞く。

「神童一真のことですわ。あのようなことで、感情を暴走させるなんて弱者のすることです」

「アンナさ――――」

「タキオン！」

［ＯＫ、プリンセス］

機械音が聞こえた直後、アンナの体は吹っ飛んだ。

理由は簡単。鈴蘭がアンナを殴ったから。

「す、鈴蘭！！」

スバルが鈴蘭を羽交い締めにして止める。

「な、何ですのあなたは！？」

「お兄ちゃんは弱くない！　弱いのは、お前の方だ！　人のことをそうやってバカにする、お前のほうが弱い！」

「私が弱い？　何を言って――――」

「はい、終わり」

「むぐっ！？　ふご、ふが！　ふがふご！」

ネムはアンナの口を塞いで、引きずり始めた。

アンナの顔が青白くなっていくのが見えたが、全員が無視した。

「忍君、ゼロ君。ユゥイ君をお願い」

「はい」

「分かった」

「すみませんでした。隊長が失礼なことを言ってしまって」

笑顔を張り付けた顔で、リオルが言う。

「今日はこの辺りで。では、またいつか」

そう言い残し、リオルとリーズは帰っていった。

「もう来るな！」

七人が帰った後、六課総出で塩を撒いていた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「どうかしら？」

「間もなく完成する」

「そう。なら、“あれ”の回収を始めてもいいのね？」

「もちろんだ」

「そ。じゃあ始めるわ」

ラストはそう言い残して消えた。
それを確認した白衣の男は、振り返りカプセルを見る。

「間もなくだ・・・間もなく、完成する」

カプセルの中にはなのは、フェイト、はやて達六課のメンバーが目を閉じて浮かんでいた。

数日後、全てが動き出す。

《一真の部屋》

一真「クソみたいに機嫌が悪いから、今日は帰りたいんだが」

千歳「それは分かるんだけど、お願い」

なのは「それに、今日もゲストいるんだよ」

一真「・・・・・・・さっさとしろ」

神無「今回のゲストは前回同様八神ゼロ・S・A・ハラオウンとゼロと同作品の出演キャラの森羅祐輔よ」

ゼロ「一真、死ねぇぇぇ！」

一真「テメェは聞いてなかったのか？　俺は機嫌がかなり悪いんだ」

アリス「えっと、ゼロ。機嫌が悪いときの一真、手加減しないから・・・その」

一真「死ね」

ゼロ「ぎゃあああ！　頭！　頭をはなせぇぇ！　砕けるぅぅぅ！」

一真「砕けろ！」

祐輔「グシャアとか聞こえたけど、みなさんは忘れてくださいね」

な・千・ア「「「はぁ～い」」」

神無「それだけで隠すこのできる惨事じゃないでしょ、あれ。人の頭、つぶしてるのよ？」

祐輔「いいんですよ、神無さん。彼、ＫＤＧですから」

なのは「その理屈はおかしいような・・・・」

千歳「同じＫＤＧだから助けたほうがいいんだけど、今日だけは・・・」

神無「はっきり言って今日は」

な・千・ア「「「やりにくいんだよね～」」」

祐輔「そうなんですか？」

アリス「だって弄られ役の一真、かなり起こってるから・・・・」

神無［だから今回はちょっと早いけど、感想コーナーよ］

ゼロ「ギブキブキブ！」

一真「嫌だ。絶対に止めない」

ゼロ「頭が！　頭がぁぁぁ！」

ヒョウガさんへ

アリス「ありがとうございます♪」

千歳「ちゃんと作者さんに、更新頑張るように言っておくからね」

神無［絶対に脅迫よね、それ］

なのは「でも今、なかなか更新が出来ないみたいだよ」

祐輔「どうしてですか？」

なのは「寮生活になかなか慣れないから、それで」

一同『なるほど』

鴨川秘さんへ

一真「・・・さて。死のうか？　つか、死ねや」

なのは「あれ？　今日は叫ばないんだ」

アリス「機嫌が悪いから・・・じゃないかな？」

祐輔「でも、キョンってすごいですね」

ゼロ「確かにな。人間が食べられないもの食べるんだから」

アリス「まぁ一真が食べてる激辛系の裏メニューも、人間が食べるものじゃないけど」

千歳「あれはダメだよ！　お腹壊しちゃう！」

神無「ま、あれを食べることの出来るのは一真だけしか見たことないわね」

一真「獄龍破」

一真以外『秕さん、南無』

ＺＥＲＯさんへ

一真「祐輔、手伝え」

祐輔「ＯＫ！　アルトリア、クー！」

ゼロ「やられてたまるか。ＫＩＺＵ――――」

一真「紅之太刀壱式・煉刃！」

祐輔「エクスカリバー＆ａｍｐ；ゲイボルク！」

ゼロ「ぎゃあああああ！」

千歳「タルトおいしー♪」

なのは「あれ？　私の目がおかしくなった？　三十が十になってる」

アリス「もう、そんなに食べたの！？」

千歳「うん♪」

神無［恐るべし、千歳ちゃんの胃袋・・・・］

Ｎａｋｉさんへ

なのは「よしっ」

一真「おい、ラン。あのクソガキも置いていけ。デバイスのやったことは、全部持ち主の責任だ」

神無［また無茶苦茶な・・・・］

アリス「本当に行っちゃったんだ、冥界」

祐輔「どんなところ何ですかね？　鬼が結構いるみたいですけど」

一真「行ってみるか？」

祐輔「遠慮しときます」

一真「そういえば次回なんだよな？」

なのは「予定では」

一真「よし、楽しみにしてろよクソガキ。テメェの命は、次回で終わる」

U．Tさんへ

アリス「ドラクエか～。ちなみに作者はFF派みたいだよ」

一真「どーでもいい情報だな」

千歳「クラウド君。キョンはすごいんだよ。ねー」

キョン「クゥン」

なのは「あの魔法ってなんなんだろうね？」

神無［さ、さぁ？］

祐輔「何をかくしてるんですか、神無さん？」

神無（言えないわよ。あんな非常識な魔法の存在。一真も気づいてないみたいだし・・・・）

一真「どうした、神無？」

神無［え、あ、いや、何でもないわよ］

一真「あっそう」

灰色の野良猫さんへ

なのは「まぁ、あの人たちが六課にはいるわけじゃないんだけどね」

神無［入ったら大惨事よね。一真と鈴蘭は、嫌いみたいだし］

祐輔「『断罪の鎌』の隊長、殴ってましたからね」

アリス「一真はユゥイとあれだし」

千歳「出会ったら一触即発だね」

ゼロ「それは言えてるな」

なのは「でも、そんなの前にもあったような・・・・」

一真「《一真の部屋・特大号》の時じゃねぇか？」

神・な・千・ア『ああ！　あれね！』

ラグナシアさんへ

一真「無理だな。今の俺には茸を食べてくれる犬・キョンがいるからな！」

キョン「ワン！」

アリス「うわっ、全然あわない」

なのは「まぁ、一真君が犬を飼ってるってイメージないからね」

祐輔「思ったんですけど爆流破だけじゃなくて、獄龍破とかにも警戒した方がいいんじゃないですか？」

ゼロ「でも警戒したところでどうにかなるものか、あの二つは？」

千歳「大丈夫。獄龍破は打ち返したらいいし、爆流破は爆流破で返せばいいんだよ♪」

神無［獄龍破を打ち返したり、爆流破を使える人が少ないんだけど・・・］

アリス「確かに」

なのは「というわけで、今回のお返事コーナーは終了。このまま次回予告にいくよ」

一真「俺とユゥイの模擬戦から数日後、ミッドチルダ全体で異変が起きていた」

神無［その異変とは、デバイスの大量紛失］

なのは「そしてそれは私たちにも」

千・ア「「次回、魔法少女リリカルなのは～七つの大罪～」」

ゼ・祐「「【予兆。そして・・・・】」」

一同『次回へ、スタンバイレディ！』

姉弟と兄弟（後書き）

いかがでしたでしょうか、ＺＥＲＯさん？

何かありましたら一言よろしくお願いします。

えと、次回の後書きのゲストは『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～償いの槍～』より、ラディ一向です。お楽しみに～。

ではまた。

予兆、そして・・・・

「一真君・・・・」

「お兄ちゃん」

なのはや鈴蘭が駆け寄るが、一真は見ようともしない。
俯いたままだ。

「行こ、一真」

千歳に促されるように歩いていく一真。その背中はここにいる誰よりも小さくて、そして弱く見えた。

「みんな。今はそっとしておいてあげて。お願い・・・・」

アリスにの言葉を聞いて、近寄っていたなのは達はゆっくりと離れる。
言いたいこともあったのだが、今の一真にはどんな言葉も凶器でしかない。そしてその凶器は、彼の心を深く抉ってしまう可能性がある。
だから彼女達は一真から離れた。このままじゃ、何かを言って、一真を傷つけてしまいそうで。

「う、うん・・・・」

なのは達は、千歳に支えられて歩いていく一真の背中を見送った。
憎しみを抱えすぎて重くなりすぎた、その小さな背中を。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「ぷはっ、はぁはぁはぁ・・・・何をしますの、ネム！」

「あれ以上言ってたら、あの娘からもう一発・・・・もしかしたら二発喰らってたわよ」

「何を言ってますの。そんなことをしたら――――」

「いや。いろんな意味でそれが正解でしょ」

アンナの言葉を遮って忍が言う。

珍しく誰も驚かない。全員が奇跡的に忍の存在に気づいていたということだ。

「どういうことですの、忍？　あの場では、あの娘（むすめ）が正しいとは？」

「・・・・・・・・マジで分かってないんスか、隊長」

「早く言いなさい！　薄いの！」

言葉と言う凶器が突き刺さるが、忍はへこたれない。

「ぐっ・・・・つまりですね――――」

「簡単に言えばですね、あの場での隊長の発言は彼を侮辱しているんですよ。詳しいことを知らない我々が、あのようなことを言って

はならないんです」

「ッ・・・・帰りますわよ！」

踵をかえして歩き出すアンナ。その表情には、怒りが籠っていた。

「そういえば、何で隊長はあいつにこだわるんだ？」

小さな声でユゥイが聞くが、誰もが首をかしげる。その中、ゼロが口を開いた。

「よくは知らないが、隊長と神童一真は知り合いらしい。詳しいことを知らないがな」

アンナと一真。二人の中に何があったのか。それを知っているのは、アンナだけである。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「ねぇ一真」

千歳の声にも全く反応しようとはしない。いや、したくないのだろう。

「今日はもう寝よ？　疲れたでしょ」

「・・・・・・・・」

脱け殻と言っていいほど動こうとはしない一真は、座ったまま視線を千歳に向けた。
その瞳に力はない。

「千歳・・・・」

「何？　何か欲しい――――」

「神無と出てってくれ・・・・」

「でも・・・・」

今の一真は何を仕出かすか分からない。だから千歳は、一真と一緒に来たのだ。

「出ていけって言ってんのが、聞こえねぇのか！」

［一真！　千歳ちゃんは――――］

「いいよ。行こう」

出ていくとき、小さく「すまん」と聞こえた。
今の一真の精一杯の謝罪だった。

［ゴメンね、千歳ちゃん］

「大丈夫だよ、神無お姉ちゃん。それに、今の一真は一人になりたいんだよ」

千歳は一真の部屋の入り口を見たあと、再び歩き始める。

「あれ、千歳さん？」

「あ、ティアナちゃん」

「一真さんと一緒だったんじゃないんですか？」

［そうなんだけど、私と一緒に出ていけって］

「そうですか。そう言えば、試験は・・・・」

「うかったよ♪　アリスちゃんもね♪」

笑顔でＶサインを決める千歳。

「おめでとうございます、千歳さん」

「ありがとう、ティアナちゃん♪　そうだ。なのはちゃん達、どこにいるか知ってる？」

「えっと・・・・八神部隊長のとこだと思いますけど」

「そっか。じゃ、またね」

トコトコと効果音の付きそうな走りで、千歳は神無とともに去っていった。

ちなみに余談だが、千歳は機動六課内ではマスコットとして、今では写真まで売られている。

その写真はＦＷメンバーも持っており・・・・

「千歳さん、可愛いなぁ・・・・」

とまぁ、こんな感じである。

―――――――――――――

「失礼しま～す♪」

そう言って隊長室へ入ったが、なのははおろか、はやてもいなかった。

「あれ？　いない？」

［どこいったのかしら？　ティアナちゃんの話だと、ここらしんだけど］

「それじゃ、念話で聞いてみるね」

［そうね。お願い］

＞なのはちゃん。聞こえる？＜

＞あれ、千歳ちゃん？＜

一真と一緒にいるはずの千歳から連絡が入り、なのはは少し驚いていた。

驚く理由としては、一真の世話をしていて千歳は、念話をしてくることはないと思っていたからだ。

＞どうしたの？　それに一真君は？＜

＞一真に、神無お姉ちゃんと一緒に出ていけって言われて出てきたんだけど、やることがなくて・・・それでなのはちゃん達どこにいるのかなって＜

＞そっか。今、みんなで訓練場にいるんの。千歳も来る？＜

＞うん♪　すぐ行くね＜

なのはとの念話を終えた千歳は、笑顔で真っ直ぐ訓練場に向かう。なぜかその笑顔は、マスコットとは思えぬほど黒かったと、神無は後々語ることとなる。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「どうしたの、なのは？」

「千歳ちゃんも来るんだって」

「そっか。じゃあ、チームどうしよ――――」

「千歳が来るって、ほ、本当？」

何かに怯えるように、アリスは声を震わせている。今の会話上、アリスが怯えている相手は千歳しかいないのだが。なのは達からし

たら、なぜ彼女が千歳に怯えているのか全く分からない。

「桜ノ宮？」

「み、みんな逃げるよ・・・・」

「何でだよ？　千歳が来るんだったら――――」

「だから、今の千歳が危ないから逃げようって言ってるの！」

一切、アリスの言っていることが理解できない一同。

「だって今の千歳は――――」

「私がどうしたの、アリスちゃん？」

噂をすれば何とやら。

笑顔の千歳が、神無を持って立っていた。

それを見て固まったのは、初めから怯えていたアリスだけではない。なのは達も固まってしまっていた。

千歳の放つ真っ黒なオーラを感じてしまって。

「い、いや、何でも・・・・」

＞アリス！　こりゃどういうことだ！？　何で千歳は怒ってんだよ！＜

＞そうだよ！＜

＞何であんなに怒ってるん！？＜

＞えっと、その・・・・八つ当たり＜

＞＞＞＞＞八つ当たり！？＜＜＜＜＜

＞うん。私達が逃げてきてミゼットさんに保護されたあと、暫く小学三年から中三までに通ってたんだ。小学校に入ったときの一真って、憎しみの塊みたいな――――＜

「早くしよ。しないと・・・・・」

チャキ

「分かってる？」

《罪》を解放し、刀に変形させたマモンの刃を６人に向ける。

『はいっ！』

「じゃあね。私ｖｓみんなで、ルールは非殺傷設定なら何でもありでいいよね」

見えないプレッシャーを放つ千歳に、ハイとしか言えない。

言わなかったらどうなるのか、考えたくもない。

「じゃあ始めよっか？　神無お姉ちゃんは、私を手伝ってね？」

［えぇ・・・・］

その日、小さな鬼母神によって隊長陣とアリスは落ちた。圧倒的

な暴力によって。理由も分からないまま。

「ねぇ、まだ立てるよね」

「いや、もう・・・・無理」

「千歳ちゃん、堪忍や・・・・」

「千歳、また今度に・・・・」

「楠木・・・・少しは加減を・・・・」

「立てねぇ・・・・」

「も、もう無理だよ・・・・」

「千歳ちゃん、もう止めてあげたら?」

と、六人と一機が言うが千歳は、

「何で? 早く立たないと・・・・どうされたい?」

立とうが寝ていようが地獄。この模擬戦は始まった時点で、終わりはなかった。

ご愁傷さま。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

あの模擬戦から数日後。
いつも通りとはいかないが、一真も復帰していた。

「で、今日は何だよ？」

サンルームには隊長陣など主要メンバーを含め、デバイスを持っている六課の局員が集まっていた。

「今日集まってもらったのは、今ミッドで起きてる異常事態についてや」

「異常事態、ですか？」

ティアナの言葉に、はやては頷いて言葉を続ける。

「せや。今ミッドで、デバイスがなくなるという事が起きてるんよ。管理局で報告されているだけでも７０件以上。ミッド市民からの報告だと、その倍以上」

異常事態ということを言葉であったが、軽く考えていたなのは達は衝撃を受けた。
デバイスがなくなるということは、魔法を使って仕事をしている彼女達にとっては致命的なことである。　そんなに驚異に感じてない人物もいたりするのだが。

「ま、そういう訳やからみんな気を付けてな」

――――――――――――――――

「デバイスがなくなるかぁ・・・・」

「かなり不味いわよ、それ」

「そうですよね。デバイスがないと、僕たちお仕事出来ませんし」

「でも、一真さんと千歳さんは・・・・」

「「「あぁ・・・・」」」

と、そんな会話をしながらスバル達は、廊下をあるいている。

「まぁ、あの二人は例外ね。デバイスなくても、体があれば何とかなりそうだし」

「でも、よく考えたらスバルさんとティアさん、それにフェイトさんもデバイスがなくても大丈夫ですよね」

「何で？」

「《罪》を解放したら、デバイスがなくても魔法使ってましたよね」

「「・・・・・・・」」

言われて二人は記憶の中を探す。探して探して、二人は思い出した。

「そういえば、そうだね」

「でもあの時は暴走してたわよ」

そう。二人の記憶にあるのは、初めて《罪》を解放し暴走していたときのもののみ。
二人にとっては、あまり思い出したくない記憶である。

「ま、気を付けないとね」

「そうですね」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「思ったんだけど一真って、神無さんがいなくなったらどうするんだろ？」

アリスの何気ない一言が、なのはとフェイトと鈴蘭を凍らせた。
一番想像したくなかったことを、彼女がさらりと言ってしまったからだ。

「そんなことになったら、次は本当に六課が危ないよ！」

「そうだよ！　そういうことは言わないで！」

「もしも、それをお兄ちゃんが聞いてたらどう――――」

「もう、おせぇよ。バカが」

「「「「へ？」」」」

その声を聞いて振り向くと、そこには額に怒りのマークを浮かべた一真が立っていた。

「つーわけ、アリス」

「は、はひ！」

「お仕置きな」

「いいいいいやぁぁぁぁぁ！　誰かぁぁぁぁぁたぁぁすううけぇぇてぇぇ！」

そう叫ぶが誰にも助けられることなく、そのままアリスは一真に引きずられて、どこかへ行ってしまった。

そして残された三人はというと。

（（（合掌））））

手と手を合わせて、アリスの無事を祈っていた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「どうしたの」

「いや。何でもないんじゃが・・・・」

隊舎の屋上でみーなは、目を細めて遠くの空を見つめている。

「嘘なの。みーながそんな目をしている時は、必ず何かがあるときなの」

「そうかの」

リリンを横目で見ると、軽く笑いまた空を見る。

「鈴蘭はまだ大丈夫かの？」

リリンはそれに対してコクコクと頷いた。

「それより、話をはぐらかすななの。ちゃんと言えなの」

「そうじゃな・・・明日。明日から面倒なことが、起きそうな気がするのう」

「そうか、なの」

「さて、腹が減ったの。食堂でも行くよ」

そう言いみーなは、ふよふよと隊舎に入っていく。リリンはトコトコとついていった。

そして次の日。みーなの言った通りに、面倒なことが起きた。

それは管理局設立以来、始めて起きたことである。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「いない・・・・」

朝、目を覚まして一番に気がついたのは、神無がいないことだった。

「・・・・マジか」

そう。昨日、はやてが言ったことが現実になってしまったのだ。

「ヤバイな」

一真は制服に着替えると、神無を探すために部屋を出た。

そこで一真の目に飛び込んできたのは、自分のデバイスを探している六課局員達だった。

その中には、なのはやフェイトを含めた隊長陣に鈴蘭をＦＷメンバー五人がいた。

「あ、一真」

「フェイト。お前もか」

「ってことは、一真も神無が？」

「あぁ。昨日、寝る前には机の上にあったんだがな。起きたら消えてた」

「そうだなんだ。でもおかしいよね、これ」

「確かにな」

フェイトの言う通り、昨日まであったものが突然なくなったことは、異常である。それも、これだけの数が一晩でなくなっている。

「だけど、千歳とアリスだけはなくなってないみたいだよ」

「本当か？」

「うん」

「何であいつらだけ、なくなってないんだ？」

「でもね、リイン達ユニゾンデバイスはいるんだよ」

「それまた訳わかんねぇな。まぁ、いいか。俺はこっ――――」

突然、六課中に鳴り響いた警報。

一真とフェイトは同時に走りだし、向かったのはブリーフィングルーム。

「はやて！」

「何が起きた、狸？」

「先ずはみんなが集まってからや」

「ダルい。通信で知らせろ」

一真はそう言って、残りの全員に通信回線を繋げる。

〔はやてちゃん、何が起きてるの！？〕

「アンノウンがミッド市街に出現したんや」

「《堕人》じゃねぇんだな？」

はやては黙って頷く。

「じゃあ何だ？」

「分からん。一応、姿は人みたいやけど、人やない」

〔人だけど人じゃない・・・・〕

「あのときの八人かな？」

フェイトが言っているのは、嘱託魔導師試験の日にラストが連れてきた謎の八人のことである。

「それかどうかは分からん。でも、もしかしたら同じかもしれへん」

〔でもよ、はやて。あたし達デバイスないぞ〕

ヴィータの言う通り、今デバイスを持っているのは千歳とアリスのみ。

他のメンバーは、デバイスが紛失中である。

「そのへんは問題ない。千歳ちゃんとアリスちゃん、《罪》の使える四人と、みーなさんとリリンとザフィーラ中心に特別編成を組むつもりや」

〔今回は、しょうがないからの〕

〔ありがたく思うといいの。お供えものがあると、もっといいの〕

『誰がするか！』

全員がツッコミを入れるのも、当たり前なのだがリリンは動じない。

〔すみません。リリンは無視してください〕

「まぁええ。それじゃ、今から発表する組みに別れて、出動や」

『了解』

「うぃ」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

フェイト・エリオ・キャロ・みーな・リリン

彼女達が街に出ると、見たこともない光景がひろがっていた。

「これは・・・・」

同じような黒服に身を包んだ子供や大人が、人を襲い、建物を破壊していた。

「エリオ、キャロ、リリンは市民の誘導を！」

「「はいっ！」」

「分かったなの」

返事をして走っていく三人を確認した後、すぐにアンノウンを見る。

「それでわしは何をすればよいのじゃ？」

「私とアンノウンの迎撃です。といっても気絶程度ですよ」

「分かっておるよ」

そう言ったみーなの足下な魔法陣が現れると、巨大なミミズのような生き物が召喚された。それには口しかついていない。

「さて、どうするかの」

それを見たフェイトは、分かってるのかと言いそうになったが、言うのを止めた。

今はそれよりも目の前のことだと、フェイト頭の中を切り替える。

「《罪》解放！」

（今の状況で使える魔法は少ないけど、やるしかない！）

フェイト、スバル、ティアナは、出撃前に一真から、デバイスなし

で魔法を使う方法を聞いていた。

『《罪》解放状態だと、デバイスなしで魔法を使える。まぁ、魔力消費が通常の三倍以上になるがな。そんなことよりも、デバイスがないということは、代わりに何かを使って魔力を魔法に変えなきゃならねぇ。その代わりってのは脳だ――――』

（だから自分の魔法をちゃんと思い出して・・・・）

「フォトンランサー！　セット！」

フェイトの周りに魔力の槍が出現する。

（一真の言ってた通り、魔力の消費が激しい・・・・でもっ！）

「ファイアァ！」

いつもよりは数が少ないが、それはアンノウンへと真っ直ぐ向かう。

しかし、何の動作もなく張られた防御魔法によって、槍は防がれる。

「そんなもの、遊びに等しいよ」

体を鞭のようにして、ミミズは防御魔法へ体を叩きつける。

「もう一回！」

再び放たれた槍は今度こそ、アンノウンへ命中する。

「目標捕捉。発射っ」

降り注ぐ魔力の雨。

しかし、フェイトは走り出した。ブリッツアクションで魔力弾を避けながら、アンノウンの群れへ近づいていき、跳びあがる。

「トライデントスマッシャー！」

三つに分かれた砲撃が、三ヶ所に突き刺さりアンノウンを吹き飛ばす。

同時に、みーなの従えるミミズが地面から飛び出してくる。それに巻き込まれたアンノウンは、上空に巻き上げられた。

「発射」

再び放たれた大量の魔力弾は、フェイトのみに集中。

「くっ・・・・」

魔力消費が激しいため使いたくない飛行魔法で、魔力弾を回避する。

「はぁはぁ・・・・」

（ここまで魔力消費が激しいなんて・・・・）

「プラズマスマッシャー！」

アンノウンを吹き飛ばすために放たれた、一筋の金色の閃光。

下ではみーなのミミズが暴れているため、防御魔法を使えない。

「プラズマスマッシャー」

直撃するかと思われたフェイトの直射型砲撃は、無機質な声とともに放たれた砲撃により打ち消された。

そしてその砲撃は、紛れもなく自分の放ったプラズマスマッシャーであった。

「えっ!?」

砲撃が飛んできた先。そこには、もう一人の自分。そしていないはずのエリオとキャロが、自分を見ていた。

「何で・・・・」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

なのは・スバル・ティアナ・ザフィーラ・ヴィータ組

「なのはさんとヴィータさんが、誘導をしてくれてるからいいけど・・・・」

「問題はあたし達ね・・・・」

デバイス無しの《罪人》である一真とフェイトにくらべて、二人の魔力は少ない。

いくら《罪》を解放しても、解放の持続時間が短いのだ。

「っ・・・はっ！」

突き出されたポールスピアを左手で捌き、右の拳を人型アンノウンの腹へと突きつける。
魔力を込めた一撃は強大で、後ろにいたアンノウンも吹き飛ばす。

「クロスファイアー・・・・」

発生した魔力弾の数はやはりすくない。
魔力消費を押さえるためだろう。

「シュートッ！」

「鋼の軛ぃぃ！」

上からは魔力弾、地上からは魔力の刺がアンノウンを襲う。

「ティアナ！　あわせて！」

「わかったわ！」

スバルは左の掌の先に光球をセット。
ティアナはクロスミラージュの代わりに、銃の形にして手を構えその先に魔力弾を同じようにセット。

「「ディバイン・・・・」」

二人の光球は光を増し、さらに巨大になる。
それを認識したアンノウンは邪魔をしようとするが、

「邪魔をさせるかぁぁ！」

ザフィーラにより、不可能となった。

「やれ！」

「「ブレイカァァァ！」」

打ち出された二色の砲撃。それはアンノウンを巻き込んで、一気に突き進む。

アンノウンも防御魔法を使い、威力を殺そうとするが止まらない。

「いっけぇ！」

光が消えて砲撃の抜けた後が見えてきた。

「あれだけやってまだ減らないか・・・・」

ザフィーラの言う通り、砲撃げ吹き飛ばしたにも関わらず、アンノウンはまだまだいる。

それに吹き飛ばしたアンノウンも、すでに立ち上がろうとしているもの目に映る。

「スバル。まだ解放状態、維持できるわよね？」

「まだ大丈夫だよ。でも・・・・」

言いたいことはすぐに理解できた。

この数だ。全てを倒すまで、解放を維持できるのかということだ。

「そんなこと気にしてる場合じゃないでしょ」

魔力弾を操作して、全てをアンノウンの顔に直撃させる。

「ティアナな言う通りだな」

ザフィーラは、回し蹴りで一人を蹴り飛ばすと、後ろに立っていた二人の頭を掴み、地面へ叩きつける。

「リボルバーーーーー」

「「「ディバインバスターー」」」

聞こえてきた三種類の声と一つの言葉。

そして向かってくる三色の砲撃。

「避けろ！」

全員が飛行魔法でその場から離れる。

そして見えてきた姿に、三人は驚愕した。

「ウソ・・・・」

目に映ったのはスバル、ティアナ、なのは、ヴィータのもう一人の自分達であった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

一真・千歳・アリス・シグナム・鈴蘭組

「たくっ、めんどくせぇんだよ！」

魔力を込めた拳で、アンノウンの顔面を殴り飛ばす。

「何、こいつら？　かなり気持ち悪いんだけど」

アリスは伸ばした魔力紐でアンノウンを操り、アンノウンを攻撃する。

「みんな無表情だね～」

狼牙棒に変えたマモンを地面と平行に持ち、体を一回転。

すると、周りにいたアンノウンが全て吹き飛ぶ。

「そんなこと言ってる場合じゃないよ。こいつらが出てくる場所、探さないと」

「獄龍破が出来たら、かなり楽に一掃できるんだがな」

確かにそれが使うことができれば、こうして一真がまともに対処していることはないだろう。

しかし、今は手元に神無はいない。だから彼は、自分の性格に合わないことをしているのだ。

「でもそんなことやったら、この辺り消えるよ」

操っていたアンノウンを投げ飛ばすと、魔力紐を硬化させて関節に突き刺している。
これはかなり効果的だ。
関節が動かなくなれば、どんな生き物もロボットも動くことができなくなる。

「私出来るよ」

「よし、千歳。やっちまえ」

「でも、魔力消費すごいから使わない」

他の組は苦戦しているのに、この組の三人だけは余裕の会話をしている。
いつかやられてもおかしくないと思うが、規格外が二人いるのでそれがないのである。多分。

「使え！」

「嫌だよ～だ！」

「使えって言ってんだろうが！」

理不尽な理由で放たれた砲撃は、一直線に千歳へと向かい、

「嫌だ！」

それに対抗するためにマモンを太刀へと変えて、魔力の刃を飛ばす。
そして二人の頭の中からアンノウンの存在が、綺麗に消えて喧嘩

を始めてしまった。

「・・・やばいなぁ、これ」

完全にアンノウンが二人の喧嘩に捲き込まれ、どんどん数を減らしていく。

だがそれ以上に、二人の喧嘩によって破壊された建物被害が大きい。

ドォン！

「へ？」

一真の砲撃で、アリスの立っている横の地面が爆発。

二人の頭の中から消えているのは、アンノウンだけではなくアリスも消えていた。

「・・・ヤバッ！」

アリスは喧嘩真っ最中の二人を止めるべく走り出した。

「あれを使ったら早く終わるだろうが！」

「でも周りに被害が出ちゃうんだよ！」

しゃがんだ一真は、左足を伸ばして一回転。

それを跳んでかわした千歳は、太刀から槍へと変形させて一真の足を狙う。

「んな危ねぇもん・・・・」

槍を掴むとそのまま振り回し、

「向けてんじゃねぇよ！」

「きゃあ！」

投げ飛ばすと同時に砲撃で千歳を狙い撃つ。

「無駄だよ～だ！」

それをマモンで叩き落とすと、足場を蹴って一真へ突撃。
叩き落とした砲撃は、もちろん地上のアンノウンへと当たる。

「『突き抜ける槍』！」

槍型のマモンを前後させることによって打ち出された、貫通力の高い魔力の槍。
今の状況では、打ち消すのは不可能と判断した一真は、短距離高速転移魔法を発動。転移先は千歳の真後ろ。
ちなみに、避けられ目標を失った魔力の槍は、これももちろん地上のアンノウンへ直撃し吹き飛ばす。

「吹き飛べ」

千歳の後頭部に添えられた左手の掌には、砲撃を放つための光球が。

「一真がね！」

添えられている左手の手首を掴み、一真を一回転。
投げ飛ばした一真へ太刀を振り抜く。

「風の傷！」

放たれた衝撃波は、体勢を直しきれていない一真を、簡単に飲み込む。

「らぁ！」

魔力のオーラを膨張。それで、千歳の攻撃を弾いた。

「いい加減に、使いやがれぇぇぇ！！」

「嫌だって言ってるの！」

「止まれぇぇぇ！」

千歳を狙った極大の魔力弾。
一真を狙った巨大な刃。
その二人を止めるために放たれた砲撃。
全てが交差する瞬間、いつもなら左手首から聞こえてくる声が、別の場所から響いた。

「紅之太刀参式・天魔裂破！」

突然飛んできた、新たな攻撃。それが三つの魔法を一瞬にして消してしまった。

「は？」

当たりを覆っていた爆煙が消えて、さきの魔法を放った主が現れる。

「・・・・」

「何で・・・・」

一真は完全に言葉を失い、千歳はそう呟いただけで同じように黙ってしまう。

「な、何？」

「そうか。アリスちゃんは私の本当の顔、知らないもね」

「何で、私の名――――」

「どういうことだ・・・・」

アリスの言葉を遮って、一真が呟く。

「何であんたがここにいるんだよ!?　“姉さん”！」

そう。ラストに殺され、一真のデバイスとなっている神無が、無いはずの肉体を持って立っていた。

生きていた頃と寸分違わぬその姿で、三人の、一真の目の前に。

《一真の部屋》

一真「おっしゃぁぁぁ！　始まったぜぇぇぇ！」

アリス「テンション高っ！」

千歳「今回のゲストが彼だからね～。ちなみに今回から暫く、神無お姉ちゃんはお休みです」

なのは「それじゃ今回のゲスト。二回目の登場です。『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～償いの槍～』より主人公のラディオン・メイフィルス君とそのデバイス兼飼い主のセラフィム、そしてラン・メフィスちゃんです」

ラン「初めまして」

セラフィム
［ペットがいつもすみません］

ラディ「俺はペットじゃねぇぇぇぇ！！！！」

一真「誰が喋っていいと言った！　この家畜！」

ラディ「ぶほぉっ！」

千歳「続いてぇ、マモン！」

マモン［ＯＫ］

ラディ「ろ、狼牙棒はマズイですって！」

千歳「潰れちゃえ♪」

ラディ「ぎゃあああ！」

一真「次はテメェだな、クソメタル」

セラフィム
［忘れたんですか？　私には最強の能力があるんですよ？］

一真「テメェも忘れたか？　ここでは俺が神なんだぞ？　ということは、俺はどんな能力でも手にはいるんだよ」

セラフィム
［あ、あなたまさか！？］

一真「そのまさかだ。歯食いしばれよ、最強（最弱）。俺の最弱（最強）はちっとばかし響くぞ」

アリス「幻想殺し（イマジンブレイカー）ね。わからない人は、『とある魔術の禁書目録』を読んでね」

一真「うらぁぁぁ！」

バキッ、メキッ、ガコン

ラン「すごいですわね、お二人とも」

なのは「今日は一段とね。特にに一真君が、張り切ってるかな」

一真「あはははは」

セラフィム
「ちょっ、神、そろそろ・・・・」

一真「黙れ！」

千歳「えへへへへ！」

ラディ「ち、千歳さん・・・・もう・・・・」

千歳「今日はハンバーグかなぁ？」

アリス「さすがにあれは・・・・」

ラン「行ってきますわね」

なのは「止めてくれるのかな？」

アリス「いや。何か嫌な予感が・・・・」

ラン「一真さん、千歳さん。少しお話が」

一真「何だ？」

千歳「今、ちょっと忙しいんだけど・・・・」

ラン「すぐ済みますので」

ラディ「ランが・・・・」

セラフィム

［天使に見えます］

ラン「ラディが来る前に『一真は人のことガキって言ってるけど、自分の精神年齢もガキだよな』と、セラフィムも『千歳さんは、小さくて可愛いから何でも許されるって絶対思ってますよね』って言ってましたわ」

一・千「「ほう／へぇ」」

ラ・セ「［ちょっとおおおお！］」

一真「もう一回・・・・」

千歳「あの世に・・・・」

一・千「「行きやがれぇぇぇ！！」」

ラ・セ「［ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁ！！！！］」

アリス「そ、そろそろ感想コーナーにね」

なのは「そ、そうだね。行こうか」

鴨川秘さんへ

アリス「そうだね。一真、たまに崩れるときあるから」

なのは「ダイエット・・・・」

ラン「なのはさん、少し怖いですわ」

アリス「散々お土産食べて、体重――――」

なのは「お話し、する？」

アリス「すみませんでしたぁ！」

千歳「芋羊羹だぁ♪」

一真「フム・・・もう少し辛いほうが」

ラン「お二人は？」

一・千「「あそこ」」

な・ア・ラ「「「・・・・・」」」

モザイクがかかっております。食事中の方、すみません。

Ｎａｋｉさんへ

一真「目的は達成されたな」

千歳「でも、まだ足りないよね・・・天生牙使おうか？」

ラン「セラフィムにはタイム風呂敷ですわね」

なのは「鬼だ・・・」

一真「やれ」

千歳「えいっ！」

ラディ「はっ！　戻ってきたのか」

セラフィム
「見たいですね」

一真「でもな」

千歳「またあっちに行くんだよ♪」

ラディ「また殺られてたまるか！　セラフィム！」

セラフィム
「言われなくても！　メカゴジラ×２０！」

一真「デュエルマスタ●ズの全ドラゴン&フェニックス召喚」

ラ・セ「［へ？］」

ドラゴン&フェニックスズ
『がぁぁぁあああぁぁあ！！！！！！』

千歳「殺っちゃえ！」

アリス「二人を殺るためだけに、ここまでやる？」

ＺＥＲＯ

一真「やり過ぎ・・・か？」

アリス「当たり前」

なのは「ユゥイさん、かなりボロボロだったよ」

一真「そりゃ殺す気でやったからな。ボロボロなのは当たり前だ」

ラン「まだ殺す「気」ですけど」

な・ア「「確かに・・・・」」

アリス「一真も千歳も、ラディとセラフィムに対しては「殺す」だったもんね」

千歳「何かあるの？」

なのは「いや、何も・・・・」

一真「もう一回生き返らせるか」

千歳「だね～」

な・千・ア・ラ

（（（（鬼夫婦））））

バルディッシュさんへ

一真「フム・・・・その質問が来たか」

なのは「作者さんもいつか来るんじゃないか、って思ってみたいだよ」

ラディ「で、結局のところどうなんだ？」

千歳「えっとね、作者さんからだと『ネタバレってわけじゃないけど、本編で出すからその質問はそれまでのお楽しみに』」

アリス「という訳なのでバルディッシュさん、すみませんがそれまで待っていてください」

セラフィム
［面白くないですね～］

ラン「作者を脅して――――」

一真「あいつ、逃げるの速いから無駄だと思うぞ」

セラフィム
［面白くないですね～］

神崎はやてさんへ

アリス「とうとう一真に憧れる人が現れちゃった・・・・」

一真「いいことだ。敬え、リオス」

ラディ「憧れとは別だろ、それ」

一真「るせぇよ、ミジンコ以下。つか、テメェも主人の俺を崇拝しろ」

ラディ「誰がするか！」

セラフィム
［憧れるなら私にしなさい］

なのは「それも危ないよ」

千歳「苺のケーキだって♪」

ラン「はい、千歳さん」

千歳「ありがと、ランちゃん♪」

アリス「千歳はいつも通りだね。いいんだけど・・・・」

千歳「美味しい～♪」

ラン「ですわね～♪」

U．Tさんへ

なのは「切り捨てるって、クラウドさん・・・・」

一真「切り捨てるだけじゃ足りねぇ。やるならメテオで潰せ」

アリス「っていうか、生きてるってなんのこと？」

一真「さぁな？　俺にもよく分からん。んなことより、クラウド。テメェが死ね！」

ラン「何をするんです？」

一真「ボルメテウス・ホワイト・ドラゴン召喚！　ボルメテウス・ホワイト・フレア！」

巨大な火球が時空を超えて飛んでいく。

一真「ちなみに、それ。防御魔法を焼くから」

千歳「ところで、何で生きてるのかな？」

ラディ「いやいやいや！」

セラフィム
［もう壊されるのは勘弁です！］

ラン「帰るとき不便ですものね」

千歳「問題ないよ。はい、一真」

アリス「何でまた天生牙？」

一真「じゃあもう一回行ってこい。冥道残月破！」

ラ・セ「［ちょ、まっ――――］」

なのは「二人がいなくなったところで、次回予告！」
一真「その前に、募集だ。第二部のイメージＯＰとイメージＥＤを募集したいと思う。今のところ締め切りはなしだから、感想、メッセージでもじゃんじゃん送ってくれ。じゃあ、改めて次回予告だ」

千歳「突然あらわれた、生きていた頃の神無お姉ちゃん」
アリス「何がなんだか理解できていない私達に、いきなり襲いかかってくる」

なのは「同じ頃。フェイトちゃん達は、あらわれたもう一人の自分に戸惑いをかくせないでいた」

一真「次回、魔法少女リリカルなのは～七つの大罪～」

ラン「【落ちるミッドチルダ】」

一同『次回へ、スタンバイレディ！』

予兆、そして・・・・（後書き）

Ｎａｋｉさんいかがでしたでしょうか？
何かいたらない点がありましたら、よろしくお願いします。

それではまた。

落ちるミッドチルダ・前編（前書き）

気づいたら一週間・・・・新生活に慣れたと思っていたのに、まだまだのようで思うように書けません。
読んでくださっている皆さん、遅れてしまってすみません。
それでは、七つの大罪始まります。

「どういうことだよ・・・・」

一真と神無はお互いを見つめ合う。
神無が死んだことを知っている一真は神無を睨んで、神無はただただ笑顔を浮かべて。

「どういうことだって聞いてんだよ！」

「さぁ？　自分で考えなさい、一真」

「ふざけてんじゃねぇぞぉ！」

一真は怒りを爆発させ、神無へ突っ込む。

「ダメ、一真！」

「千歳、行くよ！」

一真を止めるため、二人は動こうとしたが妨害が入る。

「えっ！？」

「鈴蘭と、シグナム？」

二人を止めるために現れたのは、誘導をしているはずの二人。
どこからどうみても鈴蘭とシグナムなのだが、どこかおかしい。
それに、紛失中のデバイスを持って。

「くっ・・・・」

「アリスちゃん！」

「もち！」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「ホント、あんたはキレやすいわね」

「黙れ！」

神無はサタンを一真へ振り下ろす。その刃に一切の躊躇はない。

サタンを受け止めた一真は、神無を見る。

「どうしたのよ、一真？」

「何で・・・・何で、俺を！？」

「簡単に言えば、あんたの敵だから。理解できた？」

「・・・・・・・・」

それを聞いたとき、一真は自分の中で何かが壊れる音を聞いた気がした。

それが何なのか、一真にも理解は出来なかったが。

「どうしたの？　反撃してこないの？」

「・・・・・・・・・」

一真は声を発しない。

魔力のオーラも縮小を始めた。

そんな一真を見て神無はため息をはくと、掴まれているサタンを持ち上げる。

「そう・・・じゃあ、落ちなさい」

残酷に振り下ろされる刃。それは薄くなったオーラと一真を、まとめて切り裂いた。

吹き出し、舞う鮮血。落ちていく一真。

それを見下ろす神無の表情が一瞬曇ったような気がしたが、次の瞬間には恐ろしく冷たい無表情になっていた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「くっ・・・シグナム、ちゃん！」

千歳が名前を呼ぶが、彼女の姿をした存在は返事をしない。

「はやく一真のとこに・・・・」

今の一真が危ないことは、千歳にも分かった。

だから早く行きたいのだが、目の前の彼女が先へ進ませてくれない。
そして彼女の視界に飛び込んでくる、見たくもない最悪の光景。
一真が切られ落下していく、その光景が。

「あ・・・あ・・・・あああああ！」

叫ぶ千歳。
一ヶ月前の光景が、千歳の脳裏に甦る。二度と見たくないと思っていた光景が、再現されてしまった。

「一真ぁぁぁぁぁ！」

「紫電――――」

「させるか！」

伸びてきた魔力紐がレヴァンティンを縛り上げる。

「千歳！　行って！」

落下していく一真を追いかけて、千歳を限界の限り速く空を駆ける。

（速く、もっと速く！　そうしないと、一真が！）

最悪の結末が、脳裏にこびりついて離れない。
急ぐ千歳を邪魔するように魔力弾と、アンノウン数体が姿を現した。

「マモン、フルドライブ！　童子切安綱！」

マモンが天下五剣が一つ、『童子切安綱』の形をとる。
『童子切安綱』とは、日本の国宝に指定されている日本刀の一つである。
そしてバリアジャケットは、水色の着物に変わった。

「邪魔！」

マモンのフルドライブ『童子切安綱』の特徴は、軽さと研ぎ澄まされた切れ味。
一真の使用する『神道・神無』とは、また違ったベクトルで極めてある。
それを構え、アンノウンと魔力弾を通りすぎる。
直後魔力弾は爆発。アンノウンは肘、膝、手首、足首から血を流し、その場で動かなくなった。正確には、間接を切られたため動けなくなったのだ。

（間に合って！）

一真が地面に激突まで、あと十数メートル。
千歳もぐんぐんと、一真との距離を縮める。
そして、

「はぁ、はぁ、はぁ・・・間に合った・・・・」

ギリギリで一真を助けることが出来た。が、安心は出来ない。
出血が激しく、一真の意識はない。

「ナイスキャッチよ、千歳ちゃん」

「くっ・・・・」

上空にいる神無を見上げ、睨めつける。
しかし千歳は睨むことしかできない。意識を失った一真を抱えたままでは、千歳はいつも通りの戦いはできない。

「何で・・・何で一真を切ったの!?　神無お姉ちゃん!」

「一真にも言ったけど、今は敵だから。それ以外に何があるのよ?
邪魔するものは殺せって、命令にしたがっただけ」

「納得できない!」

「納得できなくても、これが現実よ。これもね」

気づくと全方位が、アンノウンに囲まれていた。

「殺しちゃダメよ」

「輪!」

安綱の刃を地面と平行にして、体を一回転。
衝撃は波紋のように広がり、アンノウンを吹き飛ばしていく。

＞引くよ、千歳＜

＞うん＜

「使いたくないけど、やるしかないよね。九頭鬼(クズキ)流一之太刀・轟魔

！」

刃が触れた地面が陥没を始める。その陥没は広がっていき、千歳の立っている場所だけを残して、半径五百メートルの地面が無くなった。

「やるじゃない！」

「ぐぅっ・・・・」

（早く一真の治療をしないと、また・・・・もしかしたら！）

「邪魔を・・・・」

「えっ！？」

「しないでぇぇぇ！」

千歳は受け止めたサタンと、それを握っている神無を吹き飛ばす。

「千歳！」

「アリスちゃん。一真をお願い」

「千歳はどうするの？」

「ここに残って戦うよ。一真とアリスちゃんには、絶対に近づかせないから」

「でも・・・・」

「いいから！　早く！」

「わかった・・・絶対に追い付いてよ！」

千歳は黙って頷いて、まだ大量にいるあのアンノウンの軍団、そして神無を見詰める。

「マモン。本気で行くよ」

［ＯＫです。やりたい放題やってください］

「もちろん！」

こうして千歳の孤独な戦いが始まった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「あれは何じゃ？　主の姉妹か？」

「いえ。それはありえません」

フェイトの脳裏に一瞬、アリシアという可能性も浮かんだが、すぐに消した。

なぜならアリシアは既に亡くなっており、その遺体は自分の目の前で母のプレシア・テスタロッサと共に、虚数空間に落ちていったのだから。

それにあそこにいる自分の隣にいる、エリオとキャロの様子もおかしい。

「でも捕まえます。そうすれば、彼女達が何者か分かるはずですから」

「それには賛成じゃな」

「「ソニックムーブ」」

もう一人のフェイトとエリオの口から、発せられた言葉。

それはデバイスのＡＩが発する機械音と、ほぼ同じ。フェイトには、人間の声とは思えなかった。

「来ますよ！」

自分の目の前に現れたもう一人の自分の手には、朝から姿の見えなかった自分のデバイスの、バルディッシュが握られていた。

「え！」

「ハーケンセイバー」

鎌の形状となったバルディッシュを振り上げた自分が、目の前に現れた。

「くっ・・・・」

オーラを膨らませ、バルディッシュの魔力刃を弾く。

「はぁっ！」

フェイトの拳は、もう一人の自分の鳩尾に吸い込まれた。

格闘は戦闘で使うことのないフェイトが、相手を殴ることは珍しい。

（一真に言われて、千歳に教わって正解だったかな？）

『なのはやはやては、たぶん無理だから、お前にしか言わねぇが。千歳に言って、殴り方でも教わっとけ。いつか、うん。たぶん、いつか役に立つかもしれねぇから』

という、訳のわからないアドバイスをもらっていた。

そのいつかが、今日来たのだ。

（付け焼き刃だから、そんなに効果的じゃないけど、魔法と組み合わせれば行ける！）

「かはっ・・・・」

「ふっ！」

魔力を籠めた一撃が、もう一人の自分の顔に突き刺さる。

一瞬顔を歪めるフェイト。殴っている相手の顔が、自分と瓜二つなのが理由だろう。

「フォトンランサー。ゲットセット」

もう一人の自分の周りに現れた、五つのフォトンランサー。その全てがフェイトに向いている。

それに気づいたフェイトは、再びオーラを膨らませる。
しかし彼女は忘れていた。敵はもう一人のいたことを。

「きゃっ！」

強くはないが、フェイトの集中力を奪う衝撃。それが彼女の背中を襲う。

「なっ！？」

振り向くと、視線の先にはキャロ。

「ファイア！」

放たれた魔力の槍。

「プラズマスマッシャー！」

同時にフェイトは、零距離で砲撃を発射。
お互いの魔法は、ほんとんど同時に当たった。

「くっ・・・・・」

「・・・・」

目の前にいるもう一人の自分は、砲撃魔法が直撃したにもかかわらず、顔一つ変えない。まるで、痛みを感じていないかのように。
このときフェイトは思った。このままじゃ、自分達が負ける、と。

「みーなさん！」

「分かっておる。こやつらは何かおかしい。まるで人形じゃ」

みーなも彼女たちの異常には気がついているようで、かなり相手にしたくなさそうにしている。

そんな彼女と相手をしているのは、もう一人のフェイトと共にいたエリオ。

「サンダー」

「レイジ！」

バルディッシュとストラーダ放たれた雷は、二人を包む。

「くっ・・・・」

「面倒じゃの・・・・」

オーラを纏っているフェイトに、目に見えるようなダメージは見えない。

同じようにみーなも、少し顔を歪めた程度でダメージはない。

しかし、痛みを感じていないらしい彼女違い、二人の体は痛みを感じてる。

いつか痛みで動けなくなる可能性があるのだ。

「面倒じゃが、やるかの」

そう言ってみーなは構る。右手の人差し指と中指を揃えてのばし、エリオの両肘に突き刺す。

「ん？　こやつ・・・・・」

動きを止めたみーなへ、もう一人のフェイトが襲いかかる。

「ふんっ」

同じように、バルディッシュを持っている左手の間接を、指で貫いた。

「やはり・・・・主ら・・・・・」

みーなは何かに気づいたらしい。

「撤収」

キャロの声を聞いて、二人は頷いた。直後、二人の足下には魔方陣が出現し三人は消えた。

「どうしたんですか？」

「奴らの間接・・・・骨じゃなかったの。あれはおそらく金属・・・・」

「金属・・・・もしかして」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「どうしてあたし達が・・・・」

自分達と瓜二つの存在が、自分達の目の前にいる。
唯一違う点と言えば、彼女達の手にはデバイスが持っているということ。それも、朝から探している自分達のデバイスを。

「それにデバイスも。あれ、どう見てもあたし達のデバイスよね？」

「呆けている場合ではないぞ！」

気づくともう一人のティアナと、なのはの周りには光球が浮いている。
あれはどう見ても、自分達の魔法。

「アクセルシューター」

「クロスファイアーシュート」

いつもなら自分が使っている魔法が、自分を襲う。
かなり嫌な光景である。
三人はその場から離れ、三方向から攻撃を仕掛ける。
しかし、魔力弾の雨から避けることに集中していた三人は、四人が二人になっていたことに気がつかなかった。

「ギガントシュラーク」

ギガントフォームのグラーフアイゼンを、スバルとティアナへ向け振り下ろす。

「ぐぐっ・・・・」

「重い・・・・」

二人はオーラを集中させて、潰されまいと抵抗をするが、ほとんど意味をなさない。

そこへ追い討ちをかけるように、声が聞こえてきた。

「カートリッジロード」

グラーフアイゼンの大きさが、さらに巨大となり二人を押し潰さんとする。

「このっ・・・・」

スバルは、グラーフアイゼンを受け止めている両手のうち右手を外し、腰だめに持っていく。

その右手の先には、圧縮された光弾がセットされている。

「ディバインバスタァァァ！」

それを見て、ティアナは左手を銃の形にしてグラーフアイゼンへ向ける。

「ディバインバスター！」

二色の同じ魔法が、巨大な大槌をゆっくりと押し返し始めた。

そこへ、もう一人のスバルが向かってくる。

動けない二人の邪魔をするために。

「リボルバーーーーー」

「させん！」

もう一人のスバルの拳が届く寸前で、ザフィーラが拳を掴み、そのまま投げて、二人から遠ざける。

「こちらは任せろ」

そう言い、ザフィーラは自身が投げたもう一人のスバルへ向かって、一人走っていった。

これで一人減ったが、まだ三人いる。

その内二人は、ロングレンジからの攻撃が可能。そして今は、ディバインバスターでグラーフアイゼンを押し上げている最中で、行動不能。

不利な状況には変わりないのだ。

＞ティア、いい？＜

＞・・・・わかったわ＜

二人は、念話で二人にしか分からない会話をする。

「はぁっ」

息を吐き、左手を突き出す。

直後、持ち上がる速度が上がり始めた。したことは簡単。左手でもディバインバスターを放ったのだ。

三つの砲撃は、グラーフアイゼンを一気に持ち上げるが、突如スピードが落ちる。砲撃も二つに減った。

「ディバイン・・・・・」

「ファントム・・・・・」

グラーフアイゼンの下から聞こえてきたスバルの声とは別の場所から、ティアナの声も同時に響く。

「ブレイカァァァ！」

二つの砲撃が一つになり、巨大な奔流へと変わる。
それは一気にグラーフアイゼンを持ち上げ、そのままヴィータを飲み込んだ。

「ブレイザァァァ！」

誰もいないところから打ち出された魔法は、もう一人のティアナへ向かう。
しかしそれは、なのはの砲撃で簡単に押し返される。そして着弾。
だが、誰もいなかった。
負けると分かっていたティアナは、砲撃を囮にしていた。
狙いは初めからこちら。
降り注ぐオレンジの雨。ティアナの魔力弾の雨だ

「ディバインシューター」

カートリッジを三つ排出すると共に、撃ち出された桜色の魔力弾。
数総二十発程度。数、込められた魔力共に劣るものの、相殺させるには充分。

（あれだけで、何をする気なの？）

彼女が行ったのは、ティアナの魔力弾を全て消すことではなく、自分たちに直撃しそうな物だけを消すこと。

「うそっ！？」

驚きを隠せないでいるティアナへ、もう一人のティアナが話しかける。

「この姿では初めまして。マイマスター」

「は？　あたしにはあんたみたいな同じ声で同じ姿、さらには魔力光や使う魔法まで同じ知り合いはいないわよ」

「そうですか・・・ですが、あなたに言っておきます。私のマイマスターはもうあなた、ティアナ・ランスターではないと」

「さっきから、あんたの言ってる意味が分かんないんだけど」

「では、一言で説明しましょう」

隣にいたなのはが、初めて口を開いた。

「私達デバイスは、新たなマスターの命の下、あなた方を全て排除します」

もう一人のティアナは、クロスミラージュの銃口をティアナへ向ける。

「ちょっと、待ちなさいよ！　今、あんた達、自分のことデバイス

って・・・まさか！？」

「もう遅いですよ。それに動かないでくださいね」

「え？」

「あなたには人質がいるんです」

モニターが現れ、映し出されたのは本物のなのは達や、逃げる人達。

そしてレイジングハートを掲げたなのは。

彼女達の意図は、すぐに理解できた。

「あんた達！」

「あなた達が死ねば、街の方々は助けますよ？　自分が助かりたいならいいですが」

「くっ・・・・」

「では、さようなら。元マイマスター、ティアナ・ランスター」

ゆっくりと引かれる引き金。

「ティア！」

その声が聞こえると、ティアナの視界から二人の姿が消えた。

いや、見えなくなったのだ。スバルが目の前に立ったから。

「がっ！」

「スバル！」

崩れ落ちるスバル。

「やはり、オーラを貫けました。魔力密度を濃くして、正解でしたね」

背中からは血が溢れる。それは止まること来なく、制服を染めていく。

「スバル！　スバル！」

「では、次は本当にあなたです」

「いいや、お前だよ」

突然、もう一人のティアナとなのはの首に添えられた小刀。

「こういう時にだけ、影が薄いのが役立つんだよね～」

聞き覚えのある声で、愚痴のような自慢が聞こえてきた。

こんな愚痴を言いそうな知っている人物と言えば、たった一人しかいない。

「えっと、忍さん？」

そう。《断罪の鎌》のメンバーが一人、風切忍が二人の後ろに立っていた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「はあ、はあ、はあ・・・・まだ、だよね」

たった一人で戦い続ける千歳の立つ後ろには、両肘と両膝の間接を切られ、動くことができなくなったアンノウンが倒れている。

まさに一騎当千という言葉は、今の彼女を体現していた。

しかし、まだ彼女の目の前にはアンノウンの軍団がいる。

「頑張るわね、千歳ちゃん」

「神無お姉ちゃん、うるさい！」

叫び、立ち止まっていた千歳は走り出す。

飛びかかってくる三体のアンノウン。千歳はジャンプすると、一体を踏み台にして蹴り落とす。

そして残った二体のうち、片方を殴りもう片方は倒れている者と同じように、間接を切った。

「はあっ！」

着地した千歳は止まらない。落とした二体の間接を切り、魔力の刃を放つ。薄く研ぎ澄まされた刃は、簡単にアンノウンを二つにしていく。

しばらくそのような戦いを繰り返して、残ったのは神無と千歳。

それ以外のアンノウンは、全て倒れている。

動こうとしているが、倒れたままでいる。

「一対一・・・始めましょうか、千歳ちゃん」

「絶対に一真に謝らせるから。土下座で」

一真を支えてきた者同士の戦いが始まる。
それも、最悪の形で。

《一真の部屋》

一真「今回も前後編か」

アリス「ページ数少ないのによくやるよね」

うるせぇよ。ただでさえシーンの少ないお前らを、さらに空気にするぞ。

アリス「ごめんなさい」

一真「消すか・・・」

千歳「えっと、どうしようか？」

なのは「一応、ゲスト来てるから紹介するね。再び登場、八神ゼロ・A・S・ハラオウン君です」

ゼロ「戻ってきたぜ！」

一真「誰が戻ってきていいと言いやがった！　死ねぇ！」

ゼロ「千歳ちゃん、ケーキ上げる」

千歳「オッケーだよ、ゼロ君♪　一真、ゼロ君をやっちゃダメだよ♪」

なのは「賄賂・・・・」

アリス「セコッ」

一真「アホばっか・・・・」

ゼロ「千歳ちゃん。はい、ケーキ」

千歳「ありがとう♪　ぱくっ・・・・」

一真「どうした？」

千歳「カラァァァァイ！」

アリス「あぁ。そういうことか。ゼロ、ご愁傷さま」

ゼロ「え？」

千歳「死ね・・・死ねぇぇぇぇ！」

ゼロ「ちょ、えっ、ぎゃあああああ！」

なのは「千歳ちゃん、辛いものダメだからね。あの二人はほっておいて、お返事コーナー！」

バルディッシュさんへ

一真「フム。事件の予測か・・・・どうだ、ダメ作者？」

ノーコメントと言わせてもらおう。読者の皆さんの楽しみだからな。

アリス「もしかして図星だったり・・・・」

なのは「どうかな・・・・」

ゼロ「でも、あいつらの仕業ってのは・・・・」

千歳「作者さんから、これ以上詮索を続けると、出番無くすぞって」

な・ア「「ごめんなさい！」」

一真「ちっ・・・・」

ゼロ「俺は問題ないよな」

千歳「ＺＥＲＯさんに頼んでみようかなって言ってたよ」

ゼロ「ごめんなさい」

鴨川秘さんへ

一真「んなこと言われてもなぁ」

なのは「そうだよね」

アリス「灰央（カイエ）。一真のこと様を付けて呼ばなくても・・・・」

ゼロ「思ったんだが、何で彼女はあそこまで一真に？」

アリス「もしかして一真のこと・・・・」

千歳「へぇ～・・・・祇帰ちゃん、分かってるよね？」

ゼロ「あのオーラと笑顔が怖い・・・・」

Ｎａｋｉさんへ

千歳「帰ってきたんだ」

一真「チッ・・・やっぱり原子残さず焼いた方が、地球のためか？」

アリス「いやいや。それ、二酸化炭素でるから意味がないと」

な・ゼ「「ツッコミ入れるの、そこ！？」」

一真「それよか、千歳。八つ当たりはホドホドにってよ」

千歳「じゃあＮａｋｉさんが、変わりに八つ当たりの相手になってね♪」

なのは「それもどうかと・・・・」

灰色の野良猫さんへ

千歳「アリスちゃん、クローン作れないんだって」

アリス「せっかく髪の毛、取ってきたのに」

ゼロ「こわっ」

一真「でもエヴ○みたいなのなら、出来るみたいだぞ」

アリス「嫌だ！　ソラ君の可愛さがなくなるなら、諦める！」

なのは「ていうか、クローンって違法だよ」

ＺＥＲＯさんへ

千歳「・・・・」

ゼロ「どうしたんだ、千歳ちゃん？　俺の顔に何かついてる？」

千歳「ゼロ君見てたら、さっきのことを思い出してきちゃったな・・・・よし、殺ろう」

ゼロ「そんな軽いノリで殺られてたまりますか！」

一真「今日のあいつには、逆らわない方がいいかもな」

アリス「だよね・・・・」

なのは「ゼロ君、自業自得だよ」

紅龍さんへ

一真「フム・・・・人外か」

アリス「いろんな意味、今更感が」

千歳「今まで、色々なことやって来たもんね」

なのは「暴走とかがいい例だよね」

一真「まったく自覚がねぇんだが」

ゼロ「本人はそんなもんだ」

一真「まぁいいや。一応殺っとくか。獄龍破！」

U．Tさんへ

一真「ふん！　ジェットイーア〇ル召喚！　シールド追加！　ボルフェウス・ヘ〇ン召喚！　効果でラストバイオレン〇発動！　テメェのクリーチャー破壊して、トドメだ！」

千歳「スゴいね～」

アリス「こんなに仲が悪かったら、共同戦線とかなったらどうするんだろ？」

なのは「戦いながら喧嘩？」

ゼロ「こいつならやりそうだな」

な・ア「「確かに・・・・・」」

シグマさんへ

千歳「デバイスがなくっても問題ないよね？」

一真「まぁ、確かにな。つか、知りたいことか。そこの人外野郎を次元から消滅させる方法。またはあのヤンデレをけしかけさせる方法だな」

アリス「思ったけど一真って、まともに人の名前呼ばないよね」

なのは「そうだよね。ゼロ君の名前もそうだし、ラディ君や零くんも」

一真「呼ぶに値しねぇから」

ゼロ「ほう・・・そういうことか」

一真「何だ？　何か文句でもあんのか、ゴミ」

ゼロ「ロリコンに言われたくねぇよ」

一・ゼ「「・・・・」」

アリス「なのは、急いで締めて！」

なのは「う、うん！　それじゃ、」

な・ア「「次回へ、スタンバイレディ！」」

一・ゼ「「死ねぇぇぇ！」」

千歳「頑張れ～」

落ちるミッドチルダ・中編（前書き）

はい、すみません。
後編で終わらせようと思ったら、まさかの中編・・・・
い、痛い！　石を投げないで！

と、とりあえず落ちるミッドチルダ・中編、始まります。

アリスは、自分のできる限りの速さで六課の隊舎に向かっていた。

「くっ・・・急いで一真を運んで、千歳の所に！」

一真の胸からは、止まることなくまだ出血している。

顔色もどんどん悪くなっていく。

「姉さん・・・・」

一真のその呟きはアリスにも聞こえた。

「どうしてこんなことに・・・・」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「はぁっ！」

神無の頭部へ、まっすぐに振り下ろされる安綱。

神無はそれをいなすと、サタンの切っ先で千歳の額を狙う。

しかし神無は、サタンで簡単にマモンを防ぎ吹き飛ばす。

「軽いわね、千歳ちゃん」

「くっ・・・九頭鬼流一乃太刀・轟魔！」

力を一点に集中させて、神無ごとビルの屋上の床を抜く。

「まだっ！」

（一真、借りるよ！）

「カートリッジロード」

［カートリッジロード］

「紅之太刀壱式・・・・」

落ちていった神無に追い討ちをかけるべく、マモンを振り下ろす。

「煉刃！」

放たれた刃は穴に吸い込まれていく。

「なっ！？」

千歳は直後に、その場から離脱。

そして穴から魔力の刃に持ち上げられて、千歳の刃が出現した。

「危ない、危ない。もう少しで落とされることだったわ」

（嘘だ・・・そんなことない）

「それよりも千歳ちゃん。せっかくのフルドライブが泣くわよ」

そう。今の神無は、フルドライブを使用していない。
それでフルドライブを使用している千歳を、完全に圧倒している。

「くっ・・・・・」

「来ないなら行くわよ、千歳ちゃん！」

あの千歳が苦戦を強いられる。
それだけ、今の神無が強いということを示していた。

「・・・・」

（一真・・・・神無お姉ちゃん・・・・）

「考え事してると、切っちゃうわよ！」

「ぐっ・・・・・」

千歳は受け止めたサタンの重さに、一歩後ずさる。
踏ん張って押されまいとする千歳に対し、神無はサタンの構えを変えた。

「えっ！？」

後ろに飛ばされまいと踏ん張っていた千歳に、下から上へ切り上げる。
突然、力のベクトルを変えられた千歳は対応できず、そのまま打ち上げられた。

「紅之太刀弐式・轟滅点欠！」

切っ先を千歳に向けて、突進してくる神無。

［プロテクション］

何とかマモンの張ったプロテクションで、突進は止めることができた。が、脇腹に何かが直撃した。

「え？」

横を向くと、立っていたのは無表情の鈴蘭が立っていた。
脇腹には、ライフル型デバイスのゼピルムの銃口が。

「鈴蘭、ちゃん？」

「違います。私の名はタキオンです。楠木千歳」

千歳には、その名前に聞き覚えがあった。

「その名前、鈴蘭ちゃんの・・・・」

「鈴蘭は私の元マスターです」

「元って一体――――」

パキンという音を聞いて、視線を神無に戻す。
サタンの切っ先と接触している部分を中心に、プロテクションにヒビが入っていた。

「よそ見してると、貫くわよ」

「こっのぉ！」

千歳はオーラを一気に膨らませて、二人を吹き飛ばす。

「はぁ、はぁ、はぁ・・・・」

「そういえば、そのオーラ。そんなことも出来たわね」

完全に余裕の表情で、千歳を見下ろしていた。
その隣には、鈴蘭の姿をしたタキオンが立っている。

「マモン」

［言いたいことは分かっていますが、あれの使用は賛成できません。
今の状態では、勝つのはほとんど不可能です］

「でも！」

［あなたも分かってるはずです］

「くっ・・・・」

「マモンも大変ね」

二人の会話に割って入ってくる神無。
それを千歳は睨み付けた。

「千歳ちゃんの我が儘に答えるのは」

［そんなことはありません。それよりも私は、弟である神童一真を裏切ったあなたを、許すことはできません］

「マモン・・・・」

「そう・・・・」

一瞬だけ苦しそうな表情になったのを、千歳は見た。

（今の顔・・・・）

「タキオン！」

「分かっています」

タキオンはゼピルムを使い、魔力弾の連射を始めた。

すべての弾が千歳へ向かうが、千歳狙いではない。着弾したのは千歳の周り。

「っ・・・・！」

辺りは煙幕に包まれる。

千歳の視界を奪うことが、二人の狙いだったのだ。

［来ます］

「どこ！？」

［9時の方向］

言われそちらを見るが、神無は来ない。見えるのは相変わらず。

「忘れてない？　一真の作った、短距離高速転移魔法のこと」

［相棒！］

二種類の声の直後、背中から腹へ冷たい感覚が駆け抜けた。

「え？」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「で、この娘君のお姉さんか妹さん？」

「違います！　あたしには兄しかいませんから。というか、そいつらはデバイスです。あたしの姿をしているのは、あたしのデバイスのクロスミラージュ。なのはさんの姿をしているのは、多分なのはさんのデバイスのレイジングハートです！」

「何かめんどいな。ま、いっか。君は、その娘を連れて行って。この二人の相手は、俺がするから」

ティアナは一瞬考えたが、スバルの状態を考えたら忍の言っていることが正解だ。

「・・・お願いします」

「行かせるわけがないでしょう」

「させるわけがないだろう」

いつの間にかティアナとの間に、後ろにいたはずの忍が立っていた。

「ここまで気づかれないって、ホントに俺って影薄いな・・・・泣けてくる」

自虐的になっているが、すぐに立ち直り顔を上げる。

「さて・・・いっちょやりますか」

持っていた小刀となっている黒影を、赤い棒に変える。

外見だけでは、ただの棒にしか見えない。

「行くぞ！」

突然忍の姿が目の前から消えた。

これは彼が『縮地』という歩法を使ったからだ。

縮地。それは進行方向の空間を縮めて、高速移動を可能にする歩法だ。

そして次の瞬間には、ティアナの姿をしたクロスミラージュの前にいた。

「俺に追いつけるか？」

「簡単です」

「へ？」

忍が突き出した棒は簡単に掴まれ、クロスミラージュの銃口が忍の額へ、レイジングハートの先が脇腹へ向けられた。

「ヤベッ！」

突然棒の一部が折れ、忍は跳び上がる。
この棒の正体は、三節棍だった。
いきなりのことで、二人の反応が遅れ忍に反応できない。

「ふっ！」

反応できないで止まっているクロスミラージュの頬へ、忍の蹴りが決まる。
その隣のなのはの姿をしたレイジングハートへは、顔面へ拳を叩き込む。
着地した忍は一旦距離を取る。

(少しは痛そうな顔してくれないか、こいつら。ダメージがあるのか、全然分からないんだよな)

「抵抗するんですね」

「当たり前だろ。えーと、レイジングハートだったか?」

「はい」

「お前のマスターだって、絶対に抵抗するはずだぞ」

「元マスターでしたらね」

そう言って二人は、デバイスを空へ向ける。

「何をする気だ？」

「あなたにも選択してもらいます」

「は？」

クロスミラージュが手をかざし、そこに現れたのは先にティアナに見せた映像だった。

「あなたが動けば、ここに移る人達を射ちます。ですがあなたが射たれれば、犠牲はあなただけですみます。あなたはどちらを選びますか、風切忍」

「・・・そうだな。俺が選ぶのは・・・・」

ニヤリと笑みを浮かべ忍は、前屈みになり地を蹴り走り始めた。

「両方だ！」

「無駄ですよ」

忍が動くと共に、魔力弾がいっせいに放たれた。

忍はそれを一瞥しただけで、迎撃には向かわず目の前の二人へ向かう。

「どうかな？　ウチの部隊には、こういうのを迎撃するのが得意な人材がいるんだよ！」

二人が射った魔力弾は、降ってきた魔力の槍と魔力弾によって、全弾破壊された。

「ほらなっ！」

忍はクロスミラージュへ三節棍で突き飛ばした後、レイジングハートの脇腹を叩く。

体勢を崩したレイジングハートへ、忍は太刀へと変えた黒影を突き刺そうとした時だった。

〔聞こえているかな、ミッドチルダの諸君〕

空に巨大なモニター。そして、そこに映っていたのは白衣の男

「あいつ、どこかで・・・・」

「マスター」

「あいつが！？」

「成功したようですね」

（成功？）

モニターに映る男は笑みを浮かべ、言葉を続ける。

〔そして我らに抵抗している者も聞いてもらおう。地上本部は、我が手に落ちた！〕

「なっ！？　地上本部が・・・・」

〔抵抗している者たちには、速やかに投降しろ。そうしないならば、死んでもらう。こいつみたいにな〕

後ろに一人の管理局員が、無表情の男に連れられてやってくる。

〔や、やめ、止めてくれ！〕

〔やれ〕

次の瞬間に連れられてきた男は、モニターから外れた。つまり、殺されたのだ。

〔分かっただろ？　まぁ、悪いようにはしないさ〕

「お前らぁ・・・・」

「さて。どうしますか、風切忍？」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「何じゃあれは？」

フェイトとみーなは、アリスから連絡を受けて千歳の元へ向かっていた。

その最中に、巨大なモニターが現れたのだ。

「私にも・・・・」

〔聞こえているかな、ミッドチルダの諸君〕

モニターの奥に現れた男の顔を見た瞬間、フェイトの表情は驚きに変わる。

「うそ・・・・どうして・・・・・」

「何じゃ。主はあやつが、誰か知っているのか？」

「はい。彼は超広域指名手配されていて、一級捜索指定の次元犯罪者のフィール・スレインです」

〔そして我らに抵抗している者も聞いてもらおう。地上本部は、我が手に落ちた！〕

リオールの言葉に、フェイトは目を見開いた。

「ウソ・・・・」

〔抵抗している者たちには、速やかに投降しろ。そうしないならば、死んでもらう。こいつみたいにな〕

〔や、やめ、止めてくれ！〕

〔やれ〕

フェイトは目を閉じ、見ないようにする。

「酷いことするのう」

「くっ・・・急ぎましょう、みーなさん」

「そうじゃったな」

二人は再び走り出す。一人で戦っている千歳の元へ。
最悪の光景が待っているとも知らないで。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「な、なにこれ・・・・」

六課に戻ってきたアリスのが最初に見たのは、燃える隊舎だった。
そしてその隊舎の前に立っているのは、はやてとシャマル。その手には今朝紛失したはずの、それぞれのデバイスがあった。

「・・・もしかして、あの二人も」

＞アリスちゃん、聞こえるか？＜

＞はやて？　今どこにいるの？　それに隊舎が・・・・＜

＞突然襲ってきたんよ。私や、シャマルと同じ顔をしたアンノウンが＜

＞やっぱり。ってことは、今隊舎の前にいるのは・・・・＜

＞私やない。アンノウンや＜

予想通り。

だが、これで一真の処置ができなくなった。

「どうしよう・・・・」

アリスは一真を見る。

さっきよりも顔色が悪くなっている。

薄く開いた瞳は虚ろで、焦点は合っていない。

「ねえ、さん・・・・」

アリスが再び六課に視線を戻すと、さっきいた二人の姿が消えていた。

（マズイ！　どこ!?）

「誰を探しているんですか?」

聞こえてきたのはシャマルの声。

だがその声に生気はない。機械的すぎる。

「いつから気づいてたの?」

「あなたがここに来たときからです」

（ずっとバレてたんだ・・・・）

「それでどうしますか、桜ノ宮アリス。私たちとしては、マスターの言っていた通り投降してほしいのですが」

「そうしたら一真は助けてくれる？」

「それはできません」

即答だった。

考える素振りを一つも見せなかった。それだけは、初めから決めていたことなのだろう。

「じゃあ交渉決裂ね。私は一真の治療がしたいの！」

「そうですか」

表面では余裕を見せているが、内心アリスは焦っていた。

今の状態では、一真を庇いながら戦わなければならないのだから。

「ですが、させませんよ。あなた達には、ここで死んでもらいますから。シュベルトクロイツ」

そう呼ばれたアンノウンは、黙ったまま頷き手に持っていたシュベルトクロイツを空へ掲げる。

「レヴィアタン！」

［ＯＫ］

魔力紐を硬化させて、アンノウンの体に向けて伸ばす。

しかしそれは、どこからともなく現れたアンノウンが掴んで、止めた。

「くっ・・・・」

魔力紐を切って離脱をするが、状況は悪化しただけ。

（早くしないと、一真が死んじゃうのに・・・・）

そんなことを考えている間にも、シュベルトクロイツの先に光が集まっていく。

「クラウン・レイス！」

掌から放たれた砲撃は、真っ直ぐはやての姿をしたアンノウンへ飛んでいく。

しかしこれもあっさりと、先ほどのアンノウンが止める。

「残念。それは囮だよ！」

そう言うアリスの足下には魔方陣。転移魔法を使い、ここから離脱しようとしている。

だが、それに気がつかない彼女たちではない。

「逃がしはしませんよ」

「え？」

張られた結界と共に、魔方陣は消える。

「うそっ、何で？」

「この結界です。それではさよならです、桜ノ宮アリス。そして神童一真」

しかしその魔法は放たれることはなかった。なぜなら、アンノウン四体は光の柱に飲まれた。

「さっきから驚くことばかりなんだけど、今度は何！？　新手！？」

「違いますよ、桜ノ宮アリスさん」

目の前に現れたのは、見覚えのある神父服を来ている男だった。

「あんたって確か、《断罪の鎌（エクスキューショナー）》の・・・・」

「はい。リオル・サイファーです」

「どうしてここに？」

「『六課の隊舎が燃えている』、という連絡を受けて来たらあなたがピンチだったので助けた、というわけですよ」

それを聞いて、アリスは半眼になってリオルを見詰める。

（本当なの？　何か、すっごいタイミングよかったんだけど。もしかしてこいつ、タイミング見計らっていたとか・・・・）

「それよりも、今彼女たちはあの柱の中から出ることはできません。

退くなら今です」

「でも結界が・・・・」

「それならもう壊しましたよ」

言われてアリスは辺りを見たが、結界らしきものは見当たらない。

「彼の手当ても必要のようですし、急ぎましょう」

「うん」

（一真。もう少しだから、待ってて）

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「え？」

千歳が自分の腹部に視線をやると、そこからは日本刀の刀身が生えていた。

直後、冷たい感覚が激痛に変わる。

「あぁぁあぁぁあぁぁあああぁ！」

後ろに立っている神無が、小さな体から刃を抜くとバタリと倒れた。

［相棒！］

「はーっ、はーっ、はーっ、はーっ・・・・んっはあっ」

激痛で息ができないでいる千歳に、神無とタキオンはゆっくりと近づいていく。

「もう終わりですか？」

「ええ。それじゃ、マモンは貰って――――」

「あげ、ない・・・・」

重傷を負いながらも、千歳はタキオンを支えにして立ち上がる。その瞳はまだ死んではないない。

「絶対に、マモンは、あげない！」

激痛が身体中に走っているにも関わらず、千歳はマモンを再び構える。

「そんなボロボロで、どうするつもりなの？　千歳ちゃん？」

「戦う、よ」

「その体でですか？」

「がっ！！」

タキオンは立ち上がった千歳の腹を、思いっきり蹴りとばした。

蹴られた千歳は、激しい痛みにより立ち上がろうにも、立ち上がることができない。

「かはっ・・・・」

「やっぱりダメみたいね」

「うるさい・・・・」

顔を上げて睨み付けるが、今の千歳にはそれしか出来ない。
戦いたくても、たってマモンを構えることが出来ない。

「じゃあマモンだけ残して・・・・っ！」

言葉を発するのを中断して、二人は飛び上がった。
何かが来るのが分かり、逃げるかのように。
そして地響きが聞こえてきた。

「な、何？」

地面を食い破ってそれは現れた。

「み、み、ず？」

「あんなものと一緒にしないで欲しいのう」

ふよふよと千歳の隣に、西陣を身に纏ったみーなが降り立つ。

「千歳！」

駆け寄ってきたフェイトは、千歳を抱き上げた。
その体はとても軽く、グッタリとしている。

「フェイト、ちゃん・・・・来てくれたんだ・・・・」

「喋っちゃダメ！　大ケガなんだから！」

「主は、千歳を連れていくといいよ」

「みーなさんは？」

「ここで、あの二人の相手をする」

その声には何故か怒気が含まれており、視線は真っ直ぐ鈴蘭の姿をしているタキオンへ向けられていた。

「分かりました・・・・」

「・・・・」

すでに千歳は、喋ることも更には瞼を開くことも出来なくなっていた。

「急ぐから傷に響くかもしれないけど、少しの間だから我慢してね」

その言葉に反応したのかどうか分からないが、千歳はゆっくりと頷いた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「フム。ぬし、鈴蘭ではないのう」

「よく分かりましたね、みーな」

「わしの主の姿を真似るとはの・・・・許さんぞ」

「へぇ。みーなさんでも怒るんだ」

鈴蘭姿をした存在の隣に立っていた女性が、楽しそうに言う。
その言葉を聞いて、みーなは目を細めた。

「ぬしの声、どこかで聞いたことがある気がすんじゃが・・・・どっかで会ったかの？」

「そりゃ聞いたことがあるでしょう。だって私、神無よ」

「そうか。どおりで・・・・で、どういうつもりじゃ？　その様子じゃと、わしらの敵のようじゃが」

「敵のようではなくて、敵よ。この刃で一真と、千歳を切ったもの」

「・・・・ならばわしも全力で行かせてもらうかの」

みーなの後ろから、六ぴきの巨大なミミズが飛び出してきた。

「後悔しても、わしは知らぬぞ」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「どうかしら？」

「もうすぐで、ここのシステムの書き換えは終わる」

「早いのね」

ラストは何が楽しいのか、笑いながらそう言う。

「それさえ終われば、次は本局。すでに、攻め入る準備も整っているからな」

フィールの隣に浮かぶモニターには、ざっと二百はいると思われるアンノウンが映っていた。

「今の管理局は、デバイスが無く何も出来ない無能集団」

「それを圧倒的な力で潰す・・・・あたしとしては、面白くないわねぇ。でも、神無ちゃんがラースやマモンを切る場面は、楽しかったわ」

「確か、姉弟だったか・・・・まぁ、関係ないことだが」

手を動かしながら喋るフィールの表情は、子供みたいに楽しそうな笑みだった。

そしてそれを、ラストは嫌らしい笑みを浮かべて見つめていた。

《一真の部屋》

一真「・・・・・」

千歳「えへへへ～♪　かぁずまぁ～♪」

一真「・・・・・・・・殺してください・・・・殺してください・・・殺してください！」

ゼロ「えーっと・・・・俺のせい？」

アリス「確実にね。てか、あんなもん千歳に飲ませるなぁ！　飲ませるなら、私に飲ませろ！」

なのは「アリスちゃん、心の声が思いっきり出てるから。そこは隠そうね」

ゼロ「あんなものだって知らなかったから」

なのは「現状を理解できない読者の皆さんのために、説明します。えっと今回、ゼロ君はお土産としてストロベリージュースに媚薬が入ってて、それを飲んだ千歳は・・・・」

アリス「一真にデレデレになっちゃったわけ。あんな千歳に、耐性がないからなぁ一真」

ゼロ「だからあそこまで弱ってるのか」

千歳「ねぇ、一真ぁ。もっと、ギューってして♪」

一真「誰か、殺して。いや、マジで。お願いします！」

なのは「えーっと・・・お返事コーナー！！」

Ｎａｋｉさんへ

アリス「一応、千歳宛にラディの等身大サンドバッグが来てるんだけど、今はいらないよね・・・・・・・しょうがない。ゼロへの鬱憤をこれで晴らすか」

ゼロ「鬱憤って、まさか・・・・」

アリス「本来ゼロが喰らうはずだった、天照！」

光線が当たった瞬間、サンドバッグは蒸発してしまった。

なのは「他にも来てるみたいだよ。アリスちゃん宛には、アメリカンショートヘアの仔猫。千歳ちゃん宛には、更にはマカロンだって」

アリス「か・・・・」

ゼロ「か？」

アリス「可愛いぃ！」

なのは「えっと、千歳ちゃん・・・・マカロ――――」

千歳「一真、あーん♪」

そこには千歳にされるがままの一真がいた。

なのは「えっとその、一真君、千歳ちゃんがんばって！」

ＺＥＲＯさんへ

アリス「一真にとってはまだ、あのホワイトカレーの方がよかったんじゃ・・・・・」

なのは「そうかも・・・・・」

ゼロ「祐輔！　お前のせいで、一真が精神的にヤバイぞ！」

なのは「そうだ。本編からゲスト呼んでたんだ。というわけで、本編からのゲスト。風切忍君です！」

忍「いや、最初からずっといたからね！　つか、地味言うな！　それに、あれなんだ？」

アリス「原因はこれを読んだら分かるよ」

忍「・・・なるほど。でも、嬉しいんじゃ」

ゼロ「耐性がないらしいから」

一真「いい加減に離れてくれ・・・・」

千歳「だって一真から離れたくないもん♪」

一真「・・・・・・・・」

鴨川秘さんへ

なのは「えっとお土産が来てるけど、これって・・・・」

アリス「今の一真には、最悪ね」

千歳「一真。あーん」

一真「・・・・」

千歳「一真もやって♪」

ゼロ「不幸と幸せが同時に・・・・いや、不幸だけか？」

アリス「幸せなのは千歳だけ・・・・」

忍「そうだ、千歳ちゃん。祇帰に恋心はないみたいだぞ」

千歳「そっか～♪　でも今はどうでもいいんだよ♪」

一真「・・・・・・・・おい、なのは。全力のＳＬＢ、俺に射ってくれ」

なのは「え、でも・・・・」

一真「いや、マジで。本当にお願いします！　もう何でもするから！」

一同『うわぁ・・・・』

千歳「一真ぁ♪　こっち見て♪」

一真「なのは！　いや、もう誰でもいいから、俺を殺れ！」

千歳「一真に攻撃したら許さないよ！」

U．Tさんへ

一真「何でこう言うときに、テメェは殺らねぇんだよ！　許さねぇ！　ド○バロム、アルフ○ディオス、キングアルカデ○アス、クイーンア○カディアスの順に召喚！　一斉攻撃！」

千歳「一真、かっこいい！　頑張れ！」

なのは「八つ当たりだ」

アリス「クラウド関係ないのに」

ゼロ「いや。マジで今回はスマン・・・・」

一真「もう・・・限界」

パキン

忍「何か、壊れるような音が・・・・」

一真「あはははははは！」

千歳以外『壊れた！』

千歳「どうしたの、一真？」

一真「いや、何でもないぞ千歳。それよりもほら、あーん」

千歳「うん♪　あーん♪」

アリス「なのは、早く！」

なのは「うん！　じゃあ次回へ・・・・・」

な・ア・ゼ・忍

『スタンバイレディ！』

「というわけです。ご理解いただけましたか？」

モニターが消えてお互いは、お互いを見る。

表情を変えること無く、ティアナの姿をしたクロスミラージュが言葉を紡いだ。

「私達の目的は、六課の殲滅とミッドチルダの制圧。あなた達《断罪の鎌（エクスキューショナー）》は、私達の殲滅対象にはなっていません。なので投降さえしてくだされば、身の安全は保証します」

（嘘くせぇ・・・ああいうのって、生きていても下働きさせられそうな感じがするんだよな。てか、あいつのこと思い出したぞ。次元犯罪者のフィールじゃねぇか・・・）

忍は過去に見た指名手配者リストにあった、彼の顔と名前を思い出していた。

（というか、投降したらウチの隊長に殺される。絶対に殺される。てか、死んだ方がマシだと思うようなことをされそうだ。つまり、返事は始めから決まってたってわけだ）

「どうしますか、風切忍？」

「断る」

ひらがなでは四文字、漢字を使えば二文字、又は三文字の言葉で即答。

つまり、忍は投降を拒否したというわけだ。

「そうですか。残念です」

そう言ってダガーモードに変え、こちらへ走ってくる。

「本当に残念かよ！」

小太刀に変形させた黒影で一撃目を外して、二撃目をしゃがんで避けると右足で蹴りを入れる。

浮き上がったクロスミラージュの体を無視して、忍が狙うのは、なのはの姿をしているレイジングハート。

「ふっ！」

真っ直ぐ突っ込んでくる忍へ杖が、後ろにはいつの間にかオレンジの魔力弾が迫っていた。

完全に挟み撃ち。だが、忍に避ける手段がないわけではない。

振り下ろされる杖、そして魔力弾の軌道上から彼の姿が消えた。

正確には移動したのだ。

「同士討ちしてろ」

忍が次に現れたのは、さっきまでいた場所からはるか一キロ先。

縮地は、進行方向の空間を縮めて走る歩法。それを何度か使用すれば、短時間でそこまで移動することは可能である。

（一旦引いて、隊長に報告したほうがいいかもな）

現れた忍の姿は再び消える。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「先ほどの魔力弾・・・・忍の向かった方から来ましたわね」

「言われてみれば・・・・てか、何をそこまで怒ってるんですか？」

冷や汗を流しながら、ユゥイはアンナを見る。

「何で私(わたくし)が、忍のミスをガバーしなければなりませんの！？　帰ってきたらお仕置きですわ！」

（忍・・・まだ帰ってくるな。死ぬぞ）

ユゥイが心配するがすでに彼は、こちらに向かって走っていた。

そもそも彼女達に、そんな話をしている場合ではない。二人は、大量のアンノウンに囲まれているのだから。

「ユゥイ！」

「分かってますよ！」

その言葉と共に、ユゥイの数が一人、また一人と増えていき最終的には本人を含め十人にとなった。

ユゥイの幻術は《断罪の鎌》の中でも、彼の右に出るものはいない。

アンナでも幻術を使わせたら、彼には勝てないのだ。

そして今、彼の使用した幻術は質量のある幻術。つまり、攻撃を受けても簡単に消えることはない。
それと同時に、百を超える魔力弾が出現。

「シュート！」

全ての魔力弾はアンノウンに向かう。
だがそれは、

「なっ！？」

伸びてきた何かによって、全て叩き落とされてしまった。

「残念♪　それはさせないわよ。せっかく作ったのに、壊されちゃあね～」

空を見上げると、鞭型デバイスを持った女性が立っていた。
彼女の名はラスト。
この騒動を起こしたフィールのスポンサーであり、一真の殺すべき相手であり、《断罪の鎌》の宿敵でもある女性。

「何故ここにいますの？」

「私たちが彼のスポンサーだから。それにさっきも言ったじゃない。その子達を、壊されたくないって」

「くっ・・・ユゥイ！　あの女を、今すぐ消しますわよ！　さっさと準備なさい！」

「は、はい！」

二人はデバイスを、アンノウンからラストへ向ける。

「あら？」

「ヴォルティスアロー！」

魔力の矢と砲撃が一つになり、たった一人のラストを襲う。

相手が並みの魔導師ならば、確実にオーバーキルだがラストは違う。

「無駄よ♪」

簡単に弾かれ、ラストに届くことはなかった。

「ふぅ。あぶないわね、アンナちゃん」

「黙りなさい・・・・」

「酷いわねぇ。実の“お母さん”に、そんなことを言っちゃダメじゃない♪」

「黙りなさい、この愚か者！　その声で私の名を呼ぶなぁぁ！」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「ヌルイの主（ぬし）ら・・・・」

ミッドチルダのとある区画で行われている、二対一の戦い。みーなｖｓ神無とタキオンの戦いは、今まで以上の被害を周りにもたらしていた。
そして、異常なまでに圧倒的な戦いが行われていた。

「くっ・・・・」

「完璧に不利、ですね」

無傷のまま、ミミズのような魔獣を使役するみーなと、バリアジャケットは裂けボロボロな二人。
肩で息をしている二人に比べ、みーなは余裕。

「わしを怒らせたんじゃ。それだけの報いを受けてもらわねばな」

「完全に手加減されてるわね、あれ・・・・って、どこに――――」

「どこを見ておる、小娘」

神無は現れたみーなに顔を捕まれ、

「ほれ」

タキオンへ投げ付けた。それも異常な速度で。
それを受け止めたタキオンも、ビルに叩きつけられた。
そして魔獣を、二人が叩きつけられたビルに突っ込む。

「紅之太刀壱式・煉刃！」

魔力の刃が魔獣を真っ二つにして、奥からさらにボロボロになった二人が現れた。

「そうでなくてはの。まだ壊れないと、祈ることじゃの」

そう言うみーなの手には、巨大な魔力の塊が浮いていた。

「ほんと規格外ね、あの人は・・・・」

「そうですね」

神無の手には、フルドライブを発動させ、日本刀の形になっているサタンがあった。

「ふん」

手首を動かしただけで、巨大な魔力の塊は二人へ落ちていく。

これに対して、二人も抵抗しないわけではない。

「死天・・・・」

「ヘルズ・・・・」

振り上げられた刀身と右腕を、同時に振り下ろす。

「閃破！」

「ブリンガー！」

漆黒の刃と魔力の圧力は、魔力の塊と一瞬だけ拮抗したがすぐに

押し潰された。
しかし、二人にはその一瞬だけあればよかった。

「ん・・・・そこか？」

二人が現れたと同時に突き出された二本の指は、タキオンの腹部へ刺さる。

「ずれたか・・・・関節を狙ったはずじゃが。まあ、よいよ。次は外さぬから、待っておれ」

足場を蹴った次の瞬間には、みーなは二人の目の前に。
この時点で１つの魂とＡＩは悟った。最初からこの戦闘に、自分達の勝ちは無かったのだと。
行き着く先はどうやっても、負けというゴールだけだと。
それだけ目の前の存在は圧倒的だった。

「落ちよ、人形」

本来なら突き刺さっていた腕は、空を切る。目標が消えたから当たり前だ。

「ほんとめんどくさいな・・・・・」

「・・・・」

「そんな目で睨まないでよ、大食い魔神」

「スロウス・・・・」

彼の両脇には、さっきまでみーなの目の前にいた二人。
彼がここに来たのは、二人を助けるため・・・・いや、回収するためである。

「へぇ、久しぶりなのに覚えててくれたんだ・・・・」

「貴様らを忘れるわけがなかろう」

「まあいいや。僕はこの二人の回収に来ただけだから、帰るよ」

「変えれることができると思っているのかの？」

「もちろん」

直後、スロウスの背後にパクッリと空間に穴が開いた。

「行かせぬ」

「またね、大食い魔神」

そう言い残し、スロウスは穴の中に消えていった。そして、その穴も。

「あやつらが関わってるとは、面倒じゃのう・・・・」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

＞ヴィータちゃん、そっちの避難は？＜

＞終わったぞ。そっちはどうだ？＜

＞うん。こっちも大丈夫＜

住民の避難が、ようやく終ったなのははヴィータと念話で会話をしていた。

＞でも、あいつら何なんだ？　とつぜん攻撃しやがって＜

＞そうだよね＜

＞お前お得意のお話も、あいつらには無駄そうだしな＜

＞うん・・・・＜

なのはが歩き出そうとしたときだった。

何かがビルを突き抜けて、なのはの目の前に落ちてきた。

「え！？」

それはすぐさま立ち上がり、瓦礫の中から姿を現す。

「あ、アンナさん？」

「高町なのは・・・・くっ！　今すぐここから離れなさい！」

「でも、その傷。手当てしないと・・・・」

「そんな暇ありませんわ。早くここから・・・・ちっ！」

舌打ちをして、なのはを押し飛ばす。

すぐあとに何かが爆発。

「ギリギリ、でしたわね・・・・」

「うそ・・・・」

なのはが見たのは、さっきまで二人がいた位置に出来上がっていた、巨大なクレーターだった。

「これって・・・・」

「奴ですわ」

アンナは顔を上げてそれを見上げた。

「あらあら、巻き込んじゃったわね～、なのはちゃん」

「ラスト・・・・」

「でもね、今は邪魔なのよね。母子水入らずにしてほしいのよ。分かる、なのはちゃん？」

「母子って・・・・」

「余計なことを！　早く消えなさい！」

放たれた一本の矢は、ラストの胸に吸い込まれていく。

一ミリもずれることなく、心臓を貫こうとしている。

（母子って、もしかしてこの二人・・・・）

「そうそう、なのはちゃん。あなたに、面白いことを教えてあげるわ」

魔力の矢が向かってきているのに、ラストは余裕の表情で、なのはに語りかけた。

「ラースと千歳ちゃんが落ちたわよ。神無ちゃんの手によってね」

「え！？」

あり得ないことを突きつけられたなのはは、動きが止まる。

なのはの頭の中では、何でデバイスの神無が、そして一真と千歳がどうして、この二つがグルグルと回り続けている。

「行きたいのなら、行くといいわよ。あたしは止めないわ」

アンナの放った矢は、ラストに当たる直前で消えてなくなった。

二人を見下ろすラストには、なのはの行動を止める様子はない。

「行きなさい、高町なのは。ラストは、私の獲物です。誰にも渡しませんわよ」

「は、はい・・・・」

なのはは、一真達がいるはずの場所へ向かった。

もう誰もいない、戦場の後へ。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「ありがとう、リオル」

「どういたしまして。では、彼を早く」

「うん」

はやて達のいるはずの場所へ、ようやく着いたアリス。
そこは聖王教会であった。

「はやて！」

「アリスちゃん。それに一真のこれは・・・・」

「説明はあと！　早く！　早く、一真を！」

「了解や」

二人は運ばれていく一真を見送ったあと、歩き始めた。

「はやて。何があったの？」

「私とシャマルと同じ姿をした誰かが、みんなが出ていって戦力の減った六課に攻め込んできたんや。デバイスがなくても、交戦はしたんやけど・・・・」

「全く歯が立たなかった、って訳だね」

アリスの言葉に、はやては黙って頷くだけ。それ以外に喋ろうとはしない。

「そっか・・・・」

「そっちは何があったん？」

「神無さん・・・・」

「え？」

「神無さんが敵になって、私達に攻撃してきた・・・・」

「ちょう待ち、アリスちゃん。それおかしいことあらへんか？」

「うん・・・・」

はやてはすぐに、アリスの言葉のおかしい点に気がついた。

神無が攻撃してきたという所だ。

今の神無は魂だけで、デバイスに定着させられている。つまり、攻撃が出来るはずがないのだ。

「私たちが見た神無さんには、ちゃんとした体があったの。過去に一真が見せてくれた、生きていた頃と全く変わらない体が・・・・」

「どういうことや？」

「分からない。でも、あいつらの親玉が何かしたのかも」

「親玉？」

「さっき、モニターが空に現れてこいつが」

アリスが見せたのは、モニターに映ったフィールの姿。
はやても彼のことを知っていたようで、驚きで目を見開いた。

「何でこの――――」

「はやて！」

その声に二人は振り向く。
振り向いた先には、千歳を抱き抱えたフェイトが立っていた。
抱き抱えられている千歳のバリアジャケットは、血で染まり変色している。

「千歳・・・・千歳！」

「ゴメン、私が着いたときにはもう・・・・」

「何で・・・・どうして・・・・」

突如アリスは倒れる。
敵に回った神無と、神無に切られた一真。そして千歳の重傷。三つの精神的なショックが、アリスの許容量を超えたのだ。

「フェイトちゃんは、千歳ちゃんを。アリスちゃんは、私が連れていくから」

「うん」

アリスを背負い、医務室に向かうはやて。

（最悪や・・・・）

デバイスもなく、一足先にスバルも運び込まれた今、機動六課の戦力は完全に半分以下。

地上本部も落ちて、完全に管理局の敗北。それは誰にも分かりきっていることだった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「どうしたの、アンナちゃん？　全然届かないわよ？」

「ぐっ・・・・」

アンナの放つ矢は、ラストの鞭に叩き落とされるか、直前に消えてなくなるかのどちらか。

魔力を無駄撃ちしているだけの状態が、さっきからずっと続いていた。

「そろそろ諦めたらどうかしら？　今のあなたなら、新しいラースになれるわよ」

「うるさいですわ、この愚か者！」

再び放たれた矢の数は、十。しかしこれも、全て叩き落とされた。

「愚か者って、本当に親不孝者ね」

「カートリッジロード！」

［カートリッジロード！］

グラディウスからカートリッジが排出されると、巨大な一本の矢が出来上がった。

その矢には、とてつもないほどの魔力が凝縮されている。

「へぇ、スゴいじゃない」

「光迅閃（コウジンセン）！」

魔力が凝縮された矢は一気に加速し、高速から音速へ、音速から光速へ。

光の速さで、ラストへと迫る。

「それも、無駄よ♪」

余裕の声。

矢はまた、当たる直前で消失。

彼女が防御魔法を使ったようには見えない。

（いったい何が起きてますの・・・・）

「気になる？　何で、あたしに当たる前で、矢が消えるのか」

「・・・・」

「これよ」

ラストの胸の前に現れたのは、小さな穴。

その中は真っ暗で、何も見えない。

「全部この中に入っていったの。だから、あたしに当たらないって訳なのよ」

つまり、遠距離攻撃はほとんど彼女には届かないというわけになる。

アンナの攻撃方法は、弓型デバイス『グラディウス』による、遠距離攻撃がメイン。つまり、彼女の攻撃は届かないのだ。

「というわけで、お遊びもここまでね」

「お遊び・・・・」

「そっ。じゃあね、愛娘のアンナちゃん♪」

そう言い残し、彼女は背後に現れた穴の中へ消えていった。

「ぐ・・・お遊び・・・・」

この後、アンナはユゥイが来るまで立ち尽くしていた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「クロノ君、今の本当か！？」

〔ああ。僕が出る直前に、本局は・・・・堕ちた。それに、ここに来るまでに僕の船以外全て・・・・〕

「マズイ」

〔どうした、はやて？〕

「あそこは無事だと思って、こっちの人たちを本局に避難させたんよ」

〔っ・・・・最悪だな〕

「うん・・・・完全に裏目に出た」

〔そうだな。僕も何とかしたいが、デュランダルは今手元にない〕

「そか・・・・」

〔すまない〕

「クロノの責任じゃあらへんよ」

はやても、自分に何もできないことが悔しかった。

〔・・・・僕もそちらへ急ぐ。もう少し待っていてくれ、はやて〕

はやてが黙ってうなずくと、モニターは閉じられた。

「こんなときに何もできへん・・・・また私は・・・・」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「みーなさん！」

「なのは、か。どうしたんじゃ？」

「一真君や千歳ちゃんは！？」

「わしが来たときには、一真はおらなんだ。じゃが、千歳は小娘に刺されておった」

「小娘にって・・・・」

「あの声は、おそらく神無じゃろ」

今の言葉で、さっきラストが言っていたことが、本当だと証明された。

「それで千歳ちゃんは？」

「フェイトが連れていった。わしはここで、小娘二人と戦っておったところじゃ」

（二人？）

「じゃが、スロウスのおかげで止めは、刺すことは出来なかったがの」

「そうですか」

（そう言えばアンナさん、大丈夫かな・・・・）

そんなことを考えていると、

「高町なのは」

「アンナさん！」

声のした方には、さっき別れたアンナがいた。

その後ろには、ユゥイを含めた《断罪の鎌》のメンバーも揃っていた。

「ラストは？」

「どこかに行きましたわ。私との戦闘は、お遊びだったようです」

その声には怒気が含まれていた。

それを感じたらしい忍が、話題を変える。

「そ、それよりもいいのか？　六課の隊舎襲われたんだろ？」

「それどういう――――」

「本当ですよ。私が行ったときには、アンノウンがすでにいました。六課の皆さんは、すでにいませんでしたが。それどアリスさんと、怪我をしていました一真さんは聖王教会へ護衛しながら、私がお連れしました」

それを聞いてなのははホッとしたが、他のメンバーの姿が脳裏を過る。

「みーなさん、行きましょう」

「そうじゃな。鈴蘭のことも心配じゃ・・・・」

「私達も同行しますわ。無防備なあなた方に、死なれては困りますもの」

9人が、聖王教会に向かおうとしたときだった。

また空に、巨大なモニターが現れる。そこに映っているのは、先ほど動揺首謀者のフィール。

「今度は何だ?」

〔いまだに抵抗を続けている機動六課、そして《断罪の鎌》。その根性は、称賛にあたいする。だが、それもそこまでだ。お前たちは本局へ住民を避難させたようだが、本局も我が手に落ちた〕

「そんな!」

〔お前たちがやったことは、全て無意味だったと言うわけだ。さて、今から掃除を始める。ミッドチルダの掃除を〕

空には百体以上のアンノウンが出現する。
その中には、ティアナやなのはの姿をしているもの見える。
そしてその手にあるのは、見覚えのあるデバイス。

〔もう一度言う。これが最後だ。投降しろ。そうすれば、お前たちは我が手駒として生きることができる〕

この言葉に対し、一番最初に声を発したのは、なのはではなくアンナだった。

「ふん！　調子に乗るのも、大概にしなさい愚か者！　私たちが投降などするはずがないでしょう！」

〔そうか。では、貴様らこど掃除を始めるとしよう〕

そう言い残し、フィールは消える。

「マズイわね・・・この数の攻撃から逃げるのは・・・」

「忍なら、出来るかもしれないな」

「どういう意味だ、ゼロ！」

「喧嘩してる場合じゃないだろう、二人とも。今の問題は、私たちがここから無事に逃げ切ることだ」

リーズの言う通りである。しかし、数に差がありすぎる。

「ユゥイ。何とかしなさい」

「いや、無理ですって。あの数の無差別攻撃をどうにかしろって言うのが、無茶苦茶すぎます」

「使えませんわね」

「ヒドッ！」

こんな時に、漫才を繰り返している彼女たちを尻目に、みーなはすでに移動を始めていた。

「みーなさん！　どこに！？」

「逃げるんじゃよ。それ以外に何がある？　そんな漫才を見ていても、逃げるのが遅れるだけじゃからの」

「漫才・・・・」

すごい形相でアンナが、みーなを睨み付けるが、そんな視線はどこ吹く風で、この場から離れていく。

「くっ・・・・我々も、急ぎますわよ」

彼女たちが走り出すと同時に、フィールの言ったミッドチルダの掃除。つまり、ミッドチルダへの無差別攻撃が始まった。

簡単に破壊されていく、クラナガンの街。

「来ますわよ！」

「マスカレード！」

「ケロベロス！」

「グラディウス！」

ユゥイ、ゼロ、アンナはそれぞれのデバイスを空に向ける。
降ってくる攻撃を迎撃するために、魔力弾や魔力の矢を放つが、いくら撃ってもキリがない。

「このままじゃ持ちませんわね・・・・身動きもとれませんし」

全員が最悪の結果を想像していると、降ってくる攻撃が止んだ。
それも、ここ一帯への攻撃が全て。

「何が起きたの？」

その問いへの返答は、意外なところから返ってきた。

「魔力を一点に吸収させているだけじゃよ」

「どういうことですの？」

「あれじゃ」

みーなの指差す先には、中に浮かぶ小さな魔力の塊が一つ。
そこに向かって、全方位から光が集まっている。

「あれは空気中の魔力、体から出た魔力を全て集める。つまり、あれが有る限り誰も魔法は使えんよ」

完全に規格外の魔法。
ここまで異常な魔法を使えた人物が、いままでいただろうか。
「何か納得いきませんが、今のうちですわ！　行きますわよ！」
走り始めたなのは達。
そんな中、なのははみーなを見つめていた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

〔はやて、到着した。怪我人から僕の船へ運んでくれ〕
「了解や」
運び出されていく怪我人達。その中でも一真と千歳、そしてスバルの怪我が酷い。
現状では、三人の怪我はちゃんとした治療ができないのだ。
「はやてちゃん！」
「なのはちゃんに、みーなさん。それに、《断罪の鎌》の・・・・」
「お久しぶりですわね、八神はやて」
「アンナ・シロガネさん。どうして、ここに？」
「私達が――――」

「はい、ストップ。ユゥイ君、説明お願い」

「あ、あぁ」

ネムはアンナの口を塞ぎ、そのままユゥイへパス。

このままアンナに喋らせると、ややこしいことになると考えたのだろう。

「えっと、俺たちの部署地上本部にあるんですけど、今あんな状況で・・・だから、途中にあった高町一尉とここに来たって訳です。それで、これから・・・・」

「私たちも、クロノ提督の次元航行艦で避難します。悪く言えば、ミッドを見捨てて逃げると言うことなんですが・・・・」

「まぁ、そうですわね」

「アンナ！」

ネムのからすり抜けたアンナは、その言葉を肯定する。

「ですが、今はしょうがないと言えますわね。今の私たちでは、勝算があるとも言えませんわ。それで、どこに行くんですの？」

「それは・・・・地球です」

《一真の部屋》

千歳「うぅ・・・・あう・・・・・」

一真「やっと、効果が切れたか・・・・」

ゼロ「まだだ、一真！　こんどはツンデレカレーと、ヤンデレカレーだ！　これを千歳ちゃんとアリス」

ブチン・・・・

なのは「か、一真君」

一真「おい、ゴミクズ」

ゼロ「誰がゴミクーーーーー」

一真「俺はな、自分の所有物を弄られんのが、一番腹が立つんだよ！　つまりだな、俺の所有物に手を出してんじゃねぇぇぇぇ！」

千・ア「「一真・・・・」」

なのは「久しぶりに聞いたなぁ」

ゼロ「ちょ、お前・・・・何だよそのぶっそうな刀！？」

一真「風の傷！　金剛槍破！　冥道残月破（鉄砕牙ｖｅｒ．）！　蒼龍破！　冥道残月破（天生牙ｖｅｒ．）！　獄龍破！　爆砕牙！」

ゼロ「ぎゃあぁぁぁぁぁあ！！」

アリス「犬夜叉技のオンパレード♪」

千歳「やっちゃえ♪」

なのは「このままじゃ進まないかもしれないので、前回に引き続き忍くん、召喚♪」

忍「一真の奴、キレてるなぁ」

なのは「前回のことがあったからね」

忍「あぁ、納得」

なのは「それじゃ今回も、後ろはスルーでお返事コーナーだよ」

U．Tさんへ

一真「テメェも死ねや！　冥道残月破！」

アリス「あ、またいつも通りに・・・・」

ゼロ「やっと終わって――――」

一真「ねぇんだよ！　月牙天衝！　超究武神覇残！　ｅｔｃ」

ゼロ「がぁあぁぁああ！」

千歳「一真、絶好調だね♪」

なのは「千歳ちゃん、もう少し媚薬が残ってるかな・・・・」

忍「いつもみたいに、一真を殺ろうとしないから、ありえるかもな」

一真「死ね！　死ね！　死ねぇぇぇぇ！」

紅龍さんへ

一真「また死にてぇみてぇだな・・・テメェにも冥道残月破！」

なのは「一真君の不幸って、そんなにいいことなの？」

アリス「悪いことだよ！」

千歳「そうだよ！　ゼロ君の不幸はいいことだけどね♪」

忍「絶対媚薬残ってるよな、千歳ちゃん」

ゼロ「だ、誰か治療を・・・」

鴨川秘さんへ

千歳「かーずま♪」

アリス「これ飲もうか？」

一真「止め、ちょ、おい！　それ何歳のガリバー飴んぐっ・・・」

なのは「あ、ちっちゃくなっちゃった」

一真（５）「テメェら！　ふざけんなぁ！」

千・ア「「可愛い♪」」

一真（５）「えっと、解毒剤は・・・・」

忍「すまん、一真。脅されて、捨てた」

一真（５）「この薄いのぉぉ！」

忍「俺も命は欲しいから」

ゼロ「・・・・」

チーン

ＺＥＲＯさんへ

一真「祐輔。あのゴミは死んだぞ」

ゼロ「誰が死ぬかぁぁぁ！」

なのは「生きてたんだ」

忍「勝手に殺してやるなよ」

千歳「じゃあ私が止めを・・・・」

アリス「いや、それはさすがに止めてあげよう――――」

一真「卍解！　大紅蓮氷輪丸！　そして、一生凍ってろ！」

ゼロ「かずっ・・・・・」

ゼロは凍ってしまった。

ＴＯＵＤＡさんへ

一真（５）「だから、テメェのどこがか弱い子羊だよ」

忍「つか、俺は学でも昆布でもねぇ！　し・の・ぶだぁぁ！」

アリス「前回、一真があんなこと言ったせいで、あんなの飛んできたよ！」

なのは「えっと、この凍ってるゼロ君で防いじゃう？」

一真（５）「お前、鬼か？」

千歳「あたしに任せろ。一真に攻撃してんじゃねぇよ！　爆流破！」

一真（５）「・・・・こういう時はありがたいな」

Ｎａｋｉさんへ

アリス「確かにデジャヴだね」

一真（５）「クソガキ・・・・テメェのせいで俺は、俺はぁぁぁぁ

！」

千歳「どうしたの、一真？」

一真（５）「精神的に汚されたんだよ・・・・もう、死にたいくらいに・・・・」

ゼロ「ふっ・・・かつだ」

忍「溶けたのか、氷」

なのは「結構早かったね」

ゼロ「あれ？　俺の扱い酷くない？」

一真（５）「いいんだよ。それよりも、結構前に募集していた第二期のイメージＯＰとＥＤが決定したぞ」

なのは「じゃあ発表します。イメージＯＰは喜多修平の『Ｂｒｅａｋｉｎ'　ｔｈｒｏｕｇｈ』、イメージＥＤはＦＬＯＷの『Ｒｅａｌｉｚｅ』です」

アリス「ありがとうね」

千歳「それじゃ次回は番外編。『夏だ！海だ！全員集合！』です」

忍「本編とは全く空気が違うから、読むときは注意してくれよ」

一真（５）「じゃあ次回へ・・・・」

一同『スタンバイレディィ！』

番外編1【夏だ！海だ！全員集合！】（前書き）

今回は番外編で、海でのお話を。
ちなみに、本編の空気をぶったぎっていかせていただくので、ご了承を。

「おい。時間系列おかしいだろ。それにリアルだって――――」

六課のナマケモノが何かを言っているが、大人、いや、作者の都合でセリフのカット。というわけで、始まります。

番外編1【夏だ！海だ！全員集合！】

ここは機動六課隊舎のサンルーム。そこには隊長陣にＦＷメンバー、シャマルにザフィーラ、ヴィヴィオ。一真に千歳、アリスに鈴蘭、そしてユニゾンデバイス組も集まっていた。

「今日から四日間、みんなで海にいこうと思います！」

その発表を聞いて、集まっていたなのは達のテンションは、一気に上がる。

だが、その中には反対する者もいた。こいつだ。

「めんどくせぇ・・・・んな所に行くなら、部屋でゲームをしてたほうが有意義だ」

「海だよ？　一真は行きたくないの？」

「もち」

「もしかして、泳げねぇんじゃ――――」

「んなわけねぇだろ、チビ」

「テメェ！」

「まぁまぁ。それで、何で一真は行きたくないの？」

フェイトの問いに、一真は誰にもわかるように、たった一言言い放った。

「その、行くという行動事態めんどくさいからだ」

《完全なダメ人間だ・・・・》

全員の考えが、一真の一言で1つになった。

「それ以外に理由がねぇ。つか、わざわざ海に行かなくても、水風呂にでも入ってりゃいいだろうが」

と、言ってのけるしまつである。まぁ、一真らしいと言えば、一真らしいのだが。

「でも、お兄ちゃん。みんなで――――」

「わしも一真と同意見じゃの」

「え？」

ここでとんでもない壁が、突如出来上がってしまった。

「み、みーなさん！？」

「わしの場合は一真と違って、海に興味がないというのが正解なんじゃが」

これまた厄介な相手だった。

海に興味がない者を、どうやって説得しようというのだ。

一種の諦めの空気が漂うなか、幼い声が響く。

「じゃあ、ゲームで決めようよ！」

千歳である。

その顔は笑顔のまま。

「ゲームねぇ。みーな、どうする？」

「わしは構わんよ。負けるつもりはないしのう」

「だそうだ。で、内容は？」

「麻雀♪」

「え？」

「どうしたの？　変更はなしだからね♪」

そのまま引きずられて去っていく、千歳達三人。

その一真の顔は、勝てないと悟っているようなひょうじょうであった。

「こりゃ、一真とみーなの負けね」

「どういうことですか」

「聞くけどスバル。みんなでウノや、トランプしてるときに一真を誘っても、やろうとする？」

「えっと・・・ないですね」

「そういうこと。つまりね、一真はトランプにウノ、将棋やチェスに麻雀をやると絶対に勝てないの。将棋やチェスをすれば王将、キング以外全部とられて負けるし、トランプやウノでは運がかなり悪い。麻雀では、飛ばされるの。それに麻雀だと、千歳は異常なまでに強い・・・あれは強いなんてモノじゃないね。ま、テレビゲームやトレーティングカードゲームは、だと一真は強いんだけどね」

それを聞いたなのはたちは、苦笑いを浮かべるしかなった。

「フェイトさん」

「何、キャロ？」

「ショーギやチェスって何ですか？」

「そっか、知らなかったね。将棋って言うのはね」

フェイトがミッドメンバーに将棋やチェスのことを説明しているうちに、沈んだ空気の一真が帰ってきた。

「・・・・」

「これで一真もみーなさんも、海に行けるね♪」

「負けたのは初めてじゃのう・・・・」

ちなみに隣には、少し遠い目をしたみーなが立っていた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

場所は変わって、ここは《断罪の鎌（エクスキューショナー）》部隊の部屋。
ここでも全員が集まって、何かの話をしていた。

「それで何なの、アンナ？　話があるんでしょ？」

「もう決定事項ですけど、今日から四日間休暇で海に行きますわよ！」

「「「「は？」」」」

「えっと、どうして海なのでしょうか？」

「簡単ですわ」

リオルの問いに、アンナは胸を張って、高々と言い放った。

「私が行きたいからですわ！」

『・・・・』

完全なる沈黙が、この部屋を支配する。

「というわけで、今から行きますわよ！　さっさと準備をしなさいな！」

すでに準備万端のアンナを見て、全員が盛大なため息を、同時に吐いたのであった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

ただいま、機動六課ご一行は海に向け、バスに揺られて移動中。
その中一名だけ、おかしな姿をしている者がいる。

「おい、千歳。いい加減に、この縄をほどいてくれねぇか？」

「だって一真、ほどいたら逃げるもん」

［それはあり得るわね］

千歳の言葉を、一真のデバイス兼姉である神無が肯定する。

「俺信用のな。しょうがねぇ・・・・寝る――――」

「ダメ！」

「いや、何で！？　寝る権利、俺にねぇの？」

『当たり前』

全員一致の答え。
今話は、一真のアウェイのようである。

「何が当たり前だ！　ふざけんなよ！　こんなバインド、引きちぎって――――」

「ごめんね、一真君」

「なのは、お前何・・・・きゃあああぁあ〝あ〝！」

叫び、そのまま一真は気絶してしまった。
一真が何を見たのか、読者の皆さんはお分かりだろう。
一真にとっての毒物、キノコだ。

「これで静かになったなの」

「ちょっと、やりすぎじゃないかな・・・・お兄ちゃん、悪いことしてないし」

「このバカには、ちょうど言い薬なの」

「あははは・・・・」

そんなこんなで、バスに揺られること数十分。
目的地の海へと着いた。
そして事件（？）は一真たち・・・・いや、一真がバスを降りた瞬間に起きた。

「やっと着いたか・・・・・」

「着きましたわ！」

「着いたわね♪」

気絶していたため、バスから最後に降りてきた一真が、そう言っ

たのと同時に左右から聞き覚えのある声で、似たようなセリフが聞こえてきた。

もちろんそれには、前にいた一真を置いて行こうとしていた、薄情と言ってもいいようなのは達も気づいた様で・・・・。

『え？』

「「「ん？」」」

さてここで、作者から読者のみなさんへ質問だ。

左右から聞こえてきた声の主が誰なのか、セリフだけで推理できただろうか？

わかった人も、いるかどうかわからない人も、答えをどうぞ。

「何でテメェラがここにいる」

確実に不機嫌となった、さっきまで気絶をしていた一真。

それに対し、右の声の主は・・・・、

「休暇ですわ。そもそも、そのセリフは私（わたくし）のものですわよ、神童一真！」

さらに左にいる声の主は・・・・、

「いたら悪いのかしら？　来たいから来たのよ、ラースにアンナちゃん♪」

これ以上、答えを引き延ばすのはよくないので、言うことにする。

右にいる声の主は、《断罪の鎌（エクスキューショナー）》の隊長アンナ・シロガネ。そして、左にいる声の主は、《罪人》で一真の殺す仇でもあるラスト。

ここに、ある意味揃ってはいけない三人が揃ってしまったのである。
それに気づいたなのは達の顔は、思いっきりひきつっている。これからどんな大惨事が起きるのだろう、と諦めているのかもしれない。

「あれ、六課の皆さん」

「へぇ、あなた達も来てたんだぁ」

彼女達の後ろから、ぞろぞろと出てくる部下や仲間達も、状況を知った。
つまり、状況は悪化したと言っていい。

「神無・・・・」

「あんたまさか、ここでやる気!?」

「見て分からないか？　それ以外に何がある？」

「あんたここに、何をするために来たのよ？」

「俺は、最初から来る気は全くなかったんだが」

「だったら、早く帰りなさいな」

「あぁ？」

「いや、隊長。あいつを挑発するのは――――」

「黙りなさい、ウスィの」

「ヒドッ！　隊長でも言って良い――――」

「黙れと言っているでしょう？」

「あらあら、アンナちゃん。ダメよ、仲間に矢なんか向けちゃ。あたしは、あなたをそんな子に育てたつもりはないわ」

「育てられたつもりも、私には微塵もありませんわ」

「まぁ確かにそうよね」

「いつまでくっちゃべってんだ、クソババア！　さっさと切られろ！」

「それはできない相談よ、ラース」

「では、私の矢で貫かれなさい！」

「それも出来ないわね～」

とこんな感じで、しばらく地の文を挟まなくても、このままいけるんじゃないかと思うような言い合いが続き・・・そしてとうとう始まってしまった。

本気での三つ巴の殺し合いが。

『うわぁ・・・・』

「このままじゃ辺り一帯が、完璧な更地になりますね・・・・間違いなく」

涼しい笑顔で、起こりうる可能性のあることを、さらりと言ってしまうリオル。
それを聞いて六課と《断罪の鎌》のメンバーの顔から、サァッと血の気が引いていく。

「おい、お前ら・・・・」

「何だよ？」

スロウスに言われ、それに喧嘩腰で返すヴィータ。

「あれ、誰か止めてこいよ。死人が出るぞ」

これまたありそうなことを、表情変えずに言ってしまう。
それに対して、ヴィータは、

「テメェが止めてこいよ！」

「めんどくさい・・・・」

「テメェ！」

「はいはい、ヴィータ。そこまでや。せっかくの旅行を無駄にするのは、ヴィータもいややろ？　それにあんたらや、《断罪の鎌》のみんなもそうやろ？」

二組ともはやてに賛成らしく、黙って頷いた。

「というわけで、この旅行中は敵味方関係なし。それもええね？」

「いいよぉ。ねぇ、みんなぁ？」

「僕は構いませんよ。ねぇ？」

プライドは笑みを浮かべて、反対側に立っているユゥイを見る。

「俺に言われても困る。ネム。副隊長のあんたが決めてくれ」

「そうねぇ・・・・私はいいのだけど・・・・ねぇ」

ネムが言いたいことは、全員が理解できた。

そう、こいつらだ。

「紅之太刀壱式・煉刃！」

「届きませんわよ！」

魔力の刃は、アンナの放った矢にぶつかり相殺。

術後硬直で動きの止まっている二人へ、ラストは攻撃を仕掛ける。

「千歳ちゃん、止めるんや！」

「ＯＫ♪」

跳び上がった千歳は、鞭型デバイスのアスモデウスを叩き落として、そこで三人の動きは止まった。

「邪魔すんじゃねぇよ、千歳」

「そうですわよ！　そいつをここで落とすのですから！」

「ふふふ・・・出来るわけないでしょ」

下ろしていた武器を、再び構える三人へ千歳は笑顔を向ける。

とてつもなく冷めた笑顔を。

「やればいいじゃねぇか。だけどよ、その前にあたしが殺すぞ、お前ら。いや、アリスの天照でもいいな」

それを聞いた瞬間、一真とラストは顔の色と、態度を変えた。百八十度真反対に。

「よし、ラスト。言わなくても分かってるな？」

「もちろん、わかってるわよ。ねぇ、アンナちゃん♪」

「いや。私には全く訳が――――ひっ！」

アンナが悲鳴をあげた理由はただ一つ。

一真とラストが、真顔で迫ってきたからである。

「な、何ですの！？」

「あいつに天照を、絶対に使わせるわけにはいかねぇんだよ！」

「あの娘のあの魔法は、非殺傷設定に出来ないし、この辺り一帯が蒸発するの。意味、分かるわね？」

それを聞いて、アンナも同じように顔を青くした。

「「「どうしたら許してもらえるのでしょうか？」」」

さっきまで戦っていた三人は、千歳の前に正座をして許してもらおうとしていた。

「・・・・今回だけは敵味方関係なし。それが条件だ」

「ちなみに出来ないって言ったら・・・・どうなるんだ？」

「あれ」

千歳はまっすぐアリスを指差した。つまり、天照を使うと言うことといっているのだ。

ま、簡単に言えば脅迫の真っ最中。

「で、その条件飲めるのか、飲めないのか？　どっち何だ？」

「「「飲みます」」」

というわけで、今回だけは敵味方関係なしで旅行を楽しむ、と言う契約が交わされた。

契約書まで書いた。

こうして、彼女達のバカンスは始まった。

――――――――――――――――

「たくっ・・・・行きたくもねぇ所に来れば、合いたくもねぇ奴に会う。ロクなことがねぇな」

部屋分けの結果、エリオと同じ部屋になった一真は、二人でその部屋へ向かっていた。

「それにしても、すごい偶然ですよね」

「誰かが仕組んでるんじゃねぇかと、俺は考えるな」

「それは無理ですよ」

内心エリオは、誰でもいいから助けてほしかった。

なぜなら、一真の無茶苦茶な発言の全てにに、ツッコミを入れる自信がなかったからだ。

「そうそう、エリオ」

「何ですか？」

「部屋に着いたら、俺は寝るからな。起こすんじゃねぇぞ」

「え、でも千歳さんやアリスさんに、絶対に来るようにって、言われてたんじゃ・・・・」

「知らん。というか、あいつらは、俺が行かなくてもあっちから勝手に来る」

「どういう――――」

「そのまんまだ。つか、そろそろ来る」

「え？」

突如後ろから、走ってくる足音。
そして・・・・、

「ぐぼぉほ！」

ドロップキックが、一真の背中に突き刺さった。

「イェイ♪」

「・・・・えーと・・・・・」

綺麗に、一真の上へ着地を決めた千歳は、ブイサインを作る。

「あれ？　一真は？」

［千歳ちゃん、下よ。下］

「あ！」

「テメェ・・・・ドロップキックを、あんな低空飛行でやるんじゃねぇよ。腰がイテェ・・・・」

「てへっ」

千歳は某主人公の妹のような仕草をして、誤魔化そうとしたが、

「何がてへっ、だ！　ふざけんじゃねぇぞ！　つか、水着に着替えてから集合じゃなかったのか？」

「え？　もう着てるよ」

そう言われ、一真とエリオは千歳の服装を見るが、来るときと変わらない。

だが、そこで一真はあることに気がついた。

というか、千歳が見た目は子供、中身も子供という設定を思い出したのだ。

「お前、まさか。その服の下に水着、着てるんじゃないだろうな？」

「正解だよ、一真♪」

「・・・・小学生かお前は」

完全にエリオを蚊帳の外に、二人の会話は続いていた。

「はぁ・・・・しょうがねぇ。エリオ」

「はい？」

「さっさと着替えるぞ」

「あ、はい」

その後、自分達の部屋に着いた一真とエリオは、千歳を外に待たせ着替えた。

部屋の中では、神無がいることで恥ずかしがり、なかなか着替えようとしないエリオがいた。

そんなエリオを無理矢理諦めさせて、着替えを促す一真と神無が

いたとか。
そして、また場所は変わり浜辺。
そこに今回だけ協定を結んだ機動六課、《断罪の鎌》、ラスト達の三組がいた。

「はい、そこ睨みあわない！」

はやてからそう注意を受けるが、例の三人は聞く耳もたない。持つわけがない。というか、そんなことがあれば奇跡でしかない。
それは分かっていたらしく、一度言っただけで諦めた。

「えっと、さっきも言ったように今回は敵味方関係なし。まぁ、仲良くなれともいわないけどね」

「まぁ、そういうことや。今日は絶対に戦闘は禁止。破ったら・・・・」

「あたしと」

「わたしが」

「「本気で潰すから」」

敵に回したら最悪の女と、非殺傷設定に出来ない魔法を持つ女の組み合わせ。
これほど敵に回したくないコンビは、そうそういないだろうと思う。というか、いてほしくはない。
例の三人もにらみ合いを止めていた。

「つーわけで、解散だな。あー、ダルい」

スロウスは、そう言うとパラソルのある日陰に行って寝転んだ。
名前の通り、やる気がない。

「じゃあ一真、行こう♪」

「そうだよ、一真♪　ま、行かないって言っても、レヴィアタンの魔力紐で引きずって行くけどね♪」

「拒否権は？」

「「何それ？　美味しいの？」」

真顔で言ってのける、正妻と愛人。
一真はそれを聞いて諦めたのか、されるがままに引きずられて行くのであった。
さて、他のメンバーはと言うと・・・・。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「なのはママ、フェイトママ。あっちで、砂のお城作ろう」

「いいよ、ヴィヴィオ」

「じゃあ行こっか」

「うん♪」

久しぶりに登場のヴィヴィオ。
大好きなママ二人と、初めての海ということで、テンションはうなぎ登りの真っ最中である。

「大食い魔神、勝負だよぉ。あれでぇ！」

グラトニーの指差す先には、『一時間で大盛ラーメン六杯で、全額タダ』の文字が。
それに食い付き、

「いいじゃろ・・・叩き潰してやるかの。覚悟しておくとよいよ」

「それはこっちのセリフだよぉ♪」

こうして二人の大食い対決は始まった。しかし、勝敗条件は、一体何なのだろうか？　気になる物だ。

「リリン！」

「何なの？」

こちらではヴィータがリリンに絡んでいた。

「泳ぎで勝負しようぜ！」

「・・・ガキなの」

その一言がヴィータをキレさせた。

「誰がガキだ！　お前もそうだろうが！」

「中身の問題なの。それくらい理解しろなの、ガキ」

「テメェ・・・・アイゼン！」

［ｊａ］

振り下ろされたグラーフアイゼンを、リリンはミズ〇のバットで防ぐ。

だが、今回は戦闘は禁止。喧嘩も戦闘の内。

「ヴィータぁ～」

「リリン？　何してるの？」

二人の背後に立つのは、鬼を背負ったはやてと鈴蘭。

「は、はやて・・・・」

「・・・・ヴィータ。タイミング合わせろなの」

「あ、あぁ・・・・・」

「「逃がすかぁ！」」

・・・・見なかったことにしよう。

続いてはこちら。

「久しぶりだね、兄さん」

「あ、あぁ・・・・・」

太極の力を所有した兄弟が、この海で再会を果たしていた。

「いいのか？　こんな所で再会しても？」

「知らないよ、僕は。でも、番外編だからいいんじゃない？」

そういうことを、さらりと言わないでほしい。いや、マジで。

「ウルサイよ、家畜。嫌なら土下座でもして、頼みなよ」

・・・・容赦ないな。

「お前、誰に向かって・・・・・」

「気にしないことを、僕はおすすめするよ」

「そ、そうか・・・・」

これを最後に二人は黙ってしまったので、他の人たちを見るとしよう。

「忍！　どこにいますの!?　さっさと出てきなさい！　さもないと、あなたの存在を記憶から消しますわよ！」

「名前を呼ばれたときから、ずっと隣にいるんですけど。てか、存在を記憶から消すって、器用なことできますね!?」

「うるさいですわよ、薄いの」

「俺は薄くねぇ！　てか、何ですか隊長？」

ふてくされたように聞き返す忍。

それに対してアンナはスルーして、返答する。

「喉が乾きましたの。今すぐジュースを買ってきなさい」

「自分で――――」

「早く行きなさい、忍。あなたは影が薄いことしか特徴が無いのですから、これくらいしなさいな」

「ヒドッ！　いくらなんでも、それは酷い！」

「だから、さっさと行きなさい。でなければ、分かってますわよね？」

出現した魔力の矢の狙いは、いつも通り忍。

つまりこれは死か、パシりかという至極簡単な選択肢。

これには忍も迷わず、

「買ってきます！」

この後忍は、《断罪の鎌》の他のメンバーからも、パシりにされるのであった。

悲しくもそれが忍の運命である。

頑張れ忍。いつか、みんなを見返す日が・・・来るわけないか。

うん、絶対に。

「作者ぁぁぁ！」

スルーだな、スルー。

「はぁっ！」

「ふんっ！」

声を聞いただけでは決闘しているように聞こえるが、やっているのはビーチバレーである。

シグナム＆amp;リーズvsリオル＆amp;ゼロで、只今の得点、10対0でシグナム＆amp;リーズ組の圧勝中。

「強いですね。ここまで圧倒的だと、心が折れそうです」

「全くそうは聞こえないんだが」

「そうですか。ですが、本当に彼女たちは強いですね？」

「あぁ」

彼らの目の前には、いつも以上に無防備な姿の女騎士が二人。

その姿はこの二人に対しての効果は全くのゼロだが、周りの一般男子には効果抜群である。

「あの二人は気づいてないんでしょうか？」

「たぶんな」

二人の声が聞こえたようだが、内容まで聞こえていなかったため、

首をかしげている。
罪な二人だ。
そしてフォワードメンバーはというと、

「こらスバル！　こっちに海水を飛ばすな！」

十メートル先を泳いでいるスバルは、浜辺にいる三人へばた足だけで水を飛ばす。
どんな脚力だ。まぁ戦闘機人という物を考慮すれば・・・・いや、それでも問題があるか。

「そんなに力を入れてるつもりないよ～！」

本人に自覚がないのは考えものだな、と作者は思う。

「たくっ・・・・」

「あ、エリオ君。そこに穴開けて」

「うん。ここ、かな？」

ティアナの目の前では楽しそうに、砂で城を作っている二人。
見えている限り、かなりのレベルの城が出来そうな感じだ。

「てか、すごいメンバーよね。これ」

ティアナは苦笑いを浮かべ、辺りを見回す。
番外編だから出来た光景であって、本編ならまずあり得ない光景である。

「そうですよね。それに、あの三人対して一番効果があったのが、アリスさんの天照だって言うのが、僕は驚きです」

「非殺傷設定にできない魔法を向けられるって聞いたら、誰でも嫌だよ」

キャロの言う通り、当たれば死ぬなんて魔法は、誰でも当たりたくはない。

ザパァッ

「え？」

突然聞こえてきた海の割れる音に、ティアナ達はそちらを向いた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「久しぶりだっだが、あたしの勝ちだな」

「ふざけんなよ・・・・」

何が行われているのかと言うと、一真と千歳が神無とマモンを使い、どっちがより長い距離海を割ることができるのかと言う、訳の分からんことを競っているのだ。

「こんなことに、私を使うのはちょっと勘弁してほしいんだけど・・・」

「もう一回やるか？」

「当たり前だ！」

［って、全然聞いてないわね］

と、こんな感じで時間は過ぎていった。

そして夜。場所は宴会場へと切り替わる。

もちろん、ここでも本編では絶対にあり得ない組合せの宴会が、現在進行形で行われている。いや、これは宴会というよりも、一種の惨劇に近いのかもしれない。

「今ここで正気なのって・・・俺たちだけか？」

「そうなんじゃないかなぁ？　でも、みんなお酒に弱いよねぇ」

「酒を飲んでも、飲まれるな・・・その通りじゃのう」

「こんなの水同然なの。酒とは言わないの」

「それはお前たちだけだろう」

「みんな楽しそうだね～」

今現状で正気を保っているのは、一真にグラトニーにゼロ、そしてみーなにリリンにヴィヴィオだけであり、他のメンバーはもう出来上がってしまっている。

「一真さん」

「な、何だお前か」

「酷いじゃない。そんな化物を見るような反応。私、傷ついちゃったわ。どうしてくれるのよ」

「無表情でそんなこと言われても、全くそう見えねぇよ。それに、お前。俺が歳上で上司ってこと、完全に忘れてるだろ」

さて、これが誰なのか分かった方がいるだろうか？

まぁいないだろう。酒のせいで、完全にキャラが壊れているのだからな。

「そう、まぁいいわ。じゃあ、一真さん」

「んだよ？」

「戦争を、しましょう」

このセリフで分かった方は、何人かいるだろう。まぁ、中の人を考えればわかるか。

そう、スバル・ナカジマである。

「いや、もう脈絡ねぇからなそれ。つか、その大量の文房具どこから出した？」

「そんな小さなことを考えていると、あなたの大事なとこも――――」

「それ以上は言わせねぇ！　絶対に言わせるか！」

と、こんな感じで他のメンバーも、完全にキャラ崩壊を起こしているというわけだ。

「すごいね、お酒ってぇ」

「ああ。今回はテメェに同意だ。スバルのキャラがあそこまで壊れるとは、俺も完璧に予想外だった。って、今度はあのウスィのに絡んで罵詈雑言を・・・・」

「こちらの隊長たちも、完全に酔い潰れているようだな」

「しょうがねぇ。俺達は俺達で、飯を楽しむか」

「一真パパ～！　こっちこっち～！」

「今行くから、待ってろ！」

一真は、なぜこうなったのか理由をしっていた。性格には、原因をしっていた。

「シャマルの野郎・・・・今度見つけたら、たたっきる」

「まぁ、原因はあの人って言うのが可能性としては高いけど、断言はできないでしょ？」

「いや、あいつだ。つか、あいつ以外の誰がいる。普通の酒やジュースを、全てあの異常なアルコール度数の酒に変える奴が！」

「まぁ、そうなんだけど・・・・」

「お姉ちゃん・・・・」

「・・・・」

「隊長と部下の間柄も、酒で崩壊中か・・・・」

ちなみに今のは、はやてとティアナだ。

「なははははは！　少年！　元気かい！」

「た、隊長・・・・」

「元気いいねぇ～、お嬢ちゃん。何かいいことでもあったのかい？」

キャラ崩壊したアンナに、さらに絡むキャラ崩壊中のユゥイ。

「一真。一つ聞くがの」

「何だよ？」

「こやつらを運ぶのは、誰の仕事じゃ？」

「・・・・・・・」

「まぁ、もちろん。わしはやらぬがの」

「私もやるわけかないの」

「んなこと予想通りだっての。おい、暴食娘にゼロ・・・・だったか？　こいつら運ぶのは・・・・っていねぇ！？」

［ちょっと前にどっか行ったわよ］

「・・・・」

ブチィッ

「あのクソ供がぁぁぁぁ！」

とうとうキレた、一真君。
さて、これからこの旅行どうなるか。
作者もビックリ、番外編２へ続く。

《一真の部屋》

一真「あー、始まったか。えー、今回は番外編ということで、俺たちの泊まってるホテルで行うことになってる」

ゼロ「今回だけはメンバー入れ替えのようだな」

グラトニー
「そうだねぇ」

ヴィヴィオ
「今回は私もいるよ～」

一真「いつもの三人は酔っぱらって、完全に使い物にならねぇからな」

ゼロ「今回は新しく決まったイメージＣＶの発表らしい」

ヴィヴィオ
「でも、みんなのじゃないんだよね？」

ゼロ「確かな」

グラトニー
「本当にダメ作者だねぇ」

一真「んなの、今に始まったことじゃねぇからほっといて、さっさと発表するぞ」

みーな／小清水亜美（緋鞠、紅月カレン、ホロ）
リリン／真堂圭（静水久、劉備玄徳、杏）
アンナ・シロガネ／松岡由貴（鶴屋さん、井上織姫、エイミィ・リミエッタ）
ネム・ユース／喜多村英梨（轟八千代、阿良々木火憐、ユイ）
風切忍／神谷浩史（阿良々木暦、音無結弦、相馬博臣）
ユゥイ・ラズ・ホローライト／櫻井孝宏（クラウド・ストライフ、忍野メメ、渋谷有利）
リオル・サイファー／小野大輔（古泉一樹、佐藤潤、ヴェロッサ・アコース）
リーズ・ファウルス／沢城みゆき（神原駿河、岩沢、山下サトル）
ゼロ・ディーラ／鈴木省吾（ヴィンセント・ヴァレンタイン）
グラトニー／井口裕香（インデックス、阿良々木月火、梅ノ森千世）
プライド／緒方恵美（直井文人、月城雪兎、武藤遊戯）
楠木千治／三宅健太（瀬戸豪三朗、クラウス、スカー）

一真「こんな感じだが・・・化物語組が多いな。千歳とスバルを入れたら、ほとんどのキャラが揃うぞ」

ゼロ「まぁ、化物語を見たことによって、決まった者もあるようだからな。俺に至っては、イメージとなったキャラの中の人と、同じらしい」

グラトニー
「そうだぁ。ダメ作者からお知らせがあるみたいだよぉ。ヴィヴィオちゃん、お願いねぇ」

ヴィヴィオ
「うん。えっと『ただいまよりまだイメージＣＶの決まっていない神童鈴蘭、ラスト、スロウス、楠木千里のイメージＣＶを募集しようと思います。感想やメッセージなどで、どんどん送ってください』だって」

グラトニー
「他人任せにもほとがあるよねぇ。ウチの作者ってぇ」

スバル「何してるの？」

スバル以外
『え？』

スバル「楽しそうなことしてるじゃない・・・ふぅん」

一真「まだ酔っぱらったままかよ！」

ゼロ「忍！」

忍「呼ばれなくても分かってる。ほら、こっちこっち」

スバル「何よゴミ・・・・いえ、忍さん」

忍「さりげなくゴミって言おうとしたよな!?」

スバル「何のことかしら？　そんなことよりも――――」

ヴィヴィオ
「忍お兄ちゃん、酔ってなかったんだね」

一真「みたいだな。だからゼロも――――」

ゼロ「いや。ただ、呼んだら面白いことになると思っただけだ」

グラトニー
「クールだけど、分かってるねぇ。じゃあそろそろお返事コーナーに行こぉ！」

灰色の野良猫さんへ

一真「まぁ、ソラみたいなのだったらな」

ゼロ「だが、そんな魔導師がたくさんいないのが現実だ」

グラトニー
「だから簡単に落とせたんだよねぇ」

一真「そういや、お前は落とした側だったな」

ヴィヴィオ
「何のお話ししてるの？」

ゼロ「あまり聞かない方がいい話だ」

ヴィヴィオ
「そうなんだ・・・・」

二階堂さんへ

ヴィヴィオ
「何で、旭お兄ちゃん怒ってるの？」

一真「あいつの言ってることを聞く限りでは、俺が切られのが原因かもな」

ゼロ「それで大丈夫なのか？」

一真「知らん。話が番外編になっちまったから、斜めにバッサリとやられたことしか分からん」

グラトニー
「でも生きてるんだよねぇ。ゴキブリみたいだよぉ」

ヴィヴィオ
「一真パパはゴキブリじゃないよ！」

一真「ヴィヴィオ・・・・・」

ヴィヴィオ
「怪獣さんだよ！」

一真「怪獣・・・・」

ゼ・グ「「あぁ・・・・・」」

U．Tさんへ

ゼロ「いい加減に止めてはどうだ？」

ヴィヴィオ
「そうだよ。喧嘩はよくないよ！」

一真「そう言われてもな・・・・もう飛んできたし。グラトニー。今回はテメェに任す」

グラトニー
「ＯＫ！　頂きますぅ！」

一真「・・・・あれを食べるか。すげぇな、おい」

ゼロ「雑食にもほどがある」

ヴィヴィオ
「好き嫌いがないって、いいことだよね」

一真「あいつの場合は、それ以前の問題だがな」

鴨川秘さんへ

一真「まぁ、無人の場所に行ったら俺達の治療ができねぇからな」

ゼロ「忍を呼んでくるか。忍！」

忍＞今は呼ぶな！　不味いことになるから！＜

ゼロ「そうか・・・ならば、俺が渡しておこう」

ヴィヴィオ
「スイカバー美味しいね♪」

グラトニー
「そうだね、ヴィヴィオちゃん♪」

一真「このチケット、渡したら面倒なことになりそうだな・・・・」

ゼロ「そうか？　そんなことはないと思うぞ」

一真「あるんだよ・・・・はぁ」

紅龍さんへ

一真「これも食べろ」

グラトニー
「いいのぉ！？」

一真「あぁ」

グラトニー
「いっただきますぅ！」

ゼロ「自分が魔力を使いたくないためだけに、グラトニーを使っているな」

ヴィヴィオ
「一真パパの不幸って美味しいの？」

一真「美味しくてたまるか。あの野郎・・・・どうやって殺せるかな。九条、殺せたらやっといてくれ」

ゼロ「また人任せだな。自分でしたらどうだ？」

一真「うるせぇよ」

ＺＥＲＯさんへ

ヴィヴィオ
「祐輔さん、今日のゲストじゃなかったの？」

一真「あぁ。そうだったんだが、今回はこのホテルでやってるからな。あいつは今ごろスタジオで、寂しく一人だ」

ゼロ「そういえば、彼はＫＤＧなのだろう」

一真「あぁ。で、あのゴミクズが反ＫＤＧに。ま、謝る気は全くないがな」

ヴィヴィオ
「ゼロさん、一真パパに何したの？」

一真「それはだな・・・・・・・・・いや、止めよう。思い出したくもない」

グラトニー
「聞きたいなぁ・・・・そうだ、ベヘモスで殴ったら――――」

ゼロ「間違いなく死ぬな。そんな巨大な鉄槌で殴れば。喋る喋らない以前に・・・・」

ＮＫさんへ

ゼロ「確かに、お前とあの娘なら管理局次元航行艦隊を、確実に落とせそうだな」

一真「違う違う。落とすんじゃなくて、消すんだよ。冥道に」

ゼロ「どう違うんだ、それは？」

グラトニー
「私なら食べるかなぁ？」

ヴィヴィオ
「あんなもの食べたら、お腹壊しちゃうよ！」

グラトニー
「大丈夫だよぉ。私、鉄食べたくらいじゃお腹壊さないからぁ」

一・ゼ「「自慢じゃないな、それ」」

グラトニー
「あのね、三人ともぉ。悪い知らせなんだけどぉ。誰も入れないように張っていた結界、もう壊れそうなんだぁ」

グラトニー以外
「「「え？」」」

グラトニー
「だから早く逃げないとぉ、みんなが入ってきちゃうよぉ」

ゼロ「そうだな。じゃあ番外編らしく、いつもとは違う終わり方で終わるか」

ヴィヴィオ
「じゃあ一真パパ、お願い♪」

一真「じゃあ、何かいいことあったら、いいんじゃねぇか？　以上神童一真と」

ヴィヴィオ
「高町ヴィヴィオと」

ゼロ「ゼロ・ディーラと」

グラトニー
「グラトニーがお送りしましたぁ！」

バリィン

グラトニー
「あ、壊れた」

一真「ヤベェ、逃げるぞ！」

ゼロ「ヴィヴィオ、こっちに」

ヴィヴィオ
「うん！」

一真「行くぞ。転移！」

ヒュンッ

番外編1【夏だ！海だ！全員集合！】（後書き）

中途半端に終わってしまってすみません。
続きはそうですね・・・本編をしばらく投稿した後になりますね。
それではイメージＣＶの方もよろしくお願いします。
それではまた。

敗北と一時の休息

これ以上、俺は何を頑張ればいいんだ？
これから、俺は何のためにこの力を使えばいいんだ？
大切な人に拒絶されて・・・・。
もう考えたくない、目を覚ましたくない。でも、いつかは現実を、悪夢を見ることになる。
なら、忘れよう。全部。今までのことを何もかも。
そうすれば俺は悪夢を見ても、何も感じなくなる。
悪夢を見ても、“僕”は何も思い出さなくなる。
だけど、全てを忘れるには時間がいる。だから、それまでおやすみ、“僕”。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「ん・・・・」

とある部屋の、とあるベッドの上でアリスは目を覚ました。

（ここって・・・どこだっけ？　見たことある天井なんだけど・・・）

体を起こして、辺りを見回したが、やはり思い出せない。
思い出せないかわりに、なぜ自分がここにいるのか、改めて考えることにした。

（確か、逃げてきた聖王教会で血まみれの千歳を・・・・）

「千歳！　そうだ、千歳は!?　それに一真だって！」

二人の怪我を思い出したアリスは、ベッドから飛び下り部屋から出た。

「アリス!?　あんた、もう大丈夫なの!?」

「大丈夫だけど・・・・それよりも、どうしてアリサが?」

「どうしてって・・・・ここあたしの家よ」

「えっ!?」

アリスが見覚えがあると思うのも、あたりまえのこと。
アリスの眠っていたこの部屋は、なのは達の幼馴染みであるアリサのお屋敷の一室だったのだから。

「地球に来たんだ・・・・」

「聞いたわよ、あんた達。かなりひどい状況みたいね」

「うん・・・それよりもなのは達は!?」

「たぶん、前に会議室に使ってた部屋じゃない?　あそこなら、大人数でも入ることが出来るし」

「ありがと、アリサ」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

ここははやてとリインとスターズ隊長陣にライトニング隊長陣、そして《断罪の鎌》の隊長のアンナと副隊長のネムが集まっている、会議室として使っている一室。

そこは重い空気が漂っていた。

「最悪、やな」

地球に来たのは、昨日のこと。

来るとすぐに、アリサに頼み特殊な事情でも診てくれる医者。つまり、アリサの家が関わっている病院に、三人は入院している。

そこで聞いた三人の状況は、はやての言った通りに最悪だった。

まず、スバル。彼女は、体質上、表面的な傷はそれほど深くはなかった。だが、攻撃での衝撃が内臓を傷つけていた。意識を取り戻しても、しばらくは戦闘のような激しい運動はできない。

次は、一真と千歳。二人とも傷が深く、出血も多すぎる。病院に来たときは動いていたが、もしかしたら心停止を起こしていた可能性もあるということらしい。

「しかし、あの神童があそこまで・・・・」

「そうだな。あたしらは、その場にいなかったから知らねぇし」

「私達(わたくし)も、それについて聞きたいですわね。それに、アンノウンが一体何なのかも。誰かそれを知りませんの？」

そうアンナが聞くが、誰も説明が出来ない。
ここにいる六課のメンバーの中で唯一戦闘を行い、血まみれの千歳を聖王教会まで運んだフェイトでも、それを詳しく説明することは出来ない。
千歳を切った人物が、本当にあそこにいた二人のウチの、どちらかなのか分からないのだから。

「あの～、いいかな？」

そんな会話に割り込んできた人物が一人。それも今まで、ここにはいなかった人物。

「アリス！？」

「やっほ～・・・・って言うのはおかしいよね」

いつの間にか入ってきたのか、彼女はドアのところに立っていた。

「もういいの？」

「たぶん・・・・」

曖昧な返事で返すアリス。
本人にも、よく分かっていないようだ。

「えっと、それで・・・・話、聞いてたんだけど。一真を切った人なら、私わかるよ・・・・私、切られる瞬間見てたから」

「ホント、アリスちゃん！？」

「うん・・・・」

「それで、誰なの？　彼を切ったのは」

「それは・・・・」

そこまで言って、アリスは言葉を詰まらせてしまった。

これが千歳であっても、言いにくいことだろう。

「・・・・・・・・神無さん」

予想外の答えに、六課のメンバーは目を見開いて黙ってしまう。

「ちょ、待てよ！　それって、おかしいだろ！」

「そうだよ。だって、神無は・・・・」

「うん。今は、一真のデバイス。でも、本当なの。私と千歳の目の前で、神無さんは躊躇なく、切った・・・・」

完全に言葉を失ってしまう。だが、それは一真の過去を知っている、彼女達だけ。

アンナとネムは、完全に蚊帳の外。

「一体、何の話をしていますの？　その神無という方が、神童一真を切ったということはわかりましたけど、それ以外はさっぱりですわ。その神無という方が何者なのかを、全て教えてもらえますか？」

「それは・・・・私の口からは無理です。一真君のくちからやないと・・・・」

「何ですの、その説明は！　全然、納得いきませんわ　今、神童一真は病院で眠っているのですわよ！　知っているのはあなた達だけ！　あなた達にはそれを説明するむがっ！　んーんーんー！」

かなり遅いが、ネムが手で口と鼻を塞いで、アンナの声を止めた。

「えっと、その神無って人は神童一佐と関係がある人、って解釈でいいのよね？」

アリスは黙って頷くだけ。他のことは何も言わなかった。

正確には余計なことを、彼女達に言わないように黙ったが、正解だ。

「ぷはっ・・・・ネム。覚えておきなさいな・・・・ふぅ」

乱れた服を直しながら、ネムを睨む。

すぐに、アリスの方を向き直ったアンナは、

「正直納得いきませんが、ネムに邪魔されそうですし、今は諦めますわ。しかし、これだけではあのアンノウンが何者なのか、まったく分かりませんわね」

「それは私にも・・・・神無さん達は、何も言ってなかったから」

申し訳なさそうに顔が下を向くが、アリスが悪いわけではない。

アンナもそれは分かっているため、強くはでない。

「そうだ。一真と千歳は？」

「それが・・・・」

言いにくそうに話始めたはやてから、二人の容態を聞いたアリスは、また意識が飛びかけた。

無理もない。大切な二人なのだから。

「大丈夫ですか、アリスちゃん？」

「う、うん・・・・はやてちゃん。今から行きたい場所があるんだけど、一緒に来てくれる？　他のみんなも？」

「ええよ。しばらくは、忙しくなることは少ないだろうし」

他の五人も賛成のようだ。

「それは私たちも含まれているの、桜ノ宮さん？」

「あなた達は・・・・好きにしてくださいって言うのが適当かな」

苦笑を浮かべ、二人にそう告げる。

「分かりましたわ。では、着いていきます」

それを聞いたとき、ここにいる全員がやっぱりと思ったというのは、どうでもいい余談である。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「で、何だよ話って？」

場所は変わって、ティアナの部屋。
ここにはティアナの呼び出しをくらった、アギトがいた。

「一つ聞くけど。あんた、体におかしいところとかないわよね？」

「何言ってんだ？」

「いいからあたしの質問に、さっさと答えなさい！」

ティアナからの見えない圧力。それを至近距離で受けたアギトは、少し後ずさる。

「な、ないぞ。今だって、検査を受けてきたばっかりなんだからよ」

「そう・・・・」

「どうしたんだよ、ティアナ？」

「ちょっと、ね・・・・」

ティアナがアギトを呼んで、わざわざそんなことを聞いたのには理由があった。
その理由とは、ミッドでの戦闘の時に、自分と同じ姿をしたクロスミラージュと、なのはの姿をしたレイジングハートの言っていた内容である。

（部隊長達に報告しないといけないのよね。でも、あの二人の口から聞いただけで、確証はないし・・・・）

「ティアナ？」

「あ、うん。もういいわよ、アギト。ありがとう」

「そうか。じゃ、またな」

アギトが出ていきため息を吐くと、次に頭の中に浮かんできたのは、スバルのこと。

一真と千歳をふくめ、三人の容態は地球へ来ている六課と《断罪の鎌》の隊員には説明してある。

「スバル・・・・」

スバルの容態は、三人の中では一番軽い。しかし、あの傷は自分を庇って出来たもの。

「ティアさん。入ってもいいですか？」

部屋の外から聞こえてきたのは、同じＦＷメンバーのキャロの声。

「いいわよ」

入ってきたのは、キャロだけじゃなくエリオと鈴蘭もいた。

「どうしたのよ、三人とも？」

「えっと、病院にいきませんか？」

「病院って、スバルの？」
「はい」
鈴蘭の口から出た、お見舞いの誘い。
「そうね・・・あのバカには、お礼を言わなきゃいけないし」
ベッドから立ち上がると、ティアナは三人に笑顔を向けた。
「じゃあ、行きましょうか。で、どこの病院か知ってるんでしょうね？」
ティアナのその言葉に、石のように固まる三人であった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

とある場所に向かっている八人。リインは今は、アリサの家で留守番中。
「それで、どこに向かってんだよ？　さっき、電話は関係あるのか？」
「うん。ちなみに、行き先は、着いてからのお楽しみ♪」
意味ありげな笑みを浮かべるアリスに、嫌な予感しかしない七人

であった。
そして歩くこと一時間。アリスは、とある門の前で足を止めた。
「ここは？」
「千歳の実家」
シグナムの問いに、アリスは速答。
その言葉を聞いて、ここがどういう場所なのか気がついた、六課の隊長陣。またもや、蚊帳の外のアンナとネム。
「二人のために説明すると、ここは千歳の実家であって、ここ一帯を占めている極道一家『楠木組』の総本山」
そんな説明をしている最中にも、門の内側から何やら聞こえてくる男達の声。
「それじゃあ、入――――」
「「「まったぁ！」」」
門を開けようとしたアリスを、なのは達三人が止める。
「ちょ、ちょう待ち」
「そ、そうだよ、アリス」
「こ、心の準備がまだ・・・・」
完全に怯えきっている三人に比べ、慣れているアリスは別として

も他の四人は、かなり涼しい顔をしていた。

「そんなんじゃいつになっても入れないから、一気に行くよ」

「「「ちょ――――」」」

まだ何かを言おうとしていた三人を無視して、門を開けるアリス。

そして、

『お久しぶりです、アリスのお嬢！』

強面の男達が並んで、そう叫んだ。

「「「「ひっ！」」」」

涙目で怯える三人＋ネムに、

「うるさいですわね・・・殺っても構いませんわよね？」

そう呟くアンナ。

本来なら、近くにいる七人にしか聞こえない声なのであろうが、

『殺る』という言葉に敏感なヤクザの皆さんは、

「姉ちゃん、今なんて言ったよ？」

ばっちり聞こえていた。　そして構えるのは、ナイフやら金属バットやらの凶器。一体、どこから出したのだろうと思える物まで、

彼らは取り出していた。

「えーと、これは・・・・」

「アンナ！」

「知りませんわ。あちらが勝手に反応して、こちらに凶器を向けているんですもの。私に非はありませんわ」

まさに女版一真。

これが、二人が相容れない理由の一つかもしれない。

「テメェら、殺っちまえ！」

『おぉ！』

殺る気満々の彼らだが、彼らが動くことはなかった。

理由は一つ。この組、最強の人物が、一真に敬語を使わせる人物が笑顔で現れたからだ。

「何をしているの？」

見えないプレッシャーが、なのは達までも包む。

「姐さん・・・・これは・・・・」

「言い訳はしない。私、言ったはずなんだけど、もう忘れたの？お客様に対して失礼のないように。そう、何度も何度も言ってきたはずなのだけど？」

ヤクザの皆さんの表情は、恐怖一色。

それだけ、着物を着ている女性が怖いのだ。

「桜ノ宮さん、彼女は？」

「千歳のお母さんの千里さん。で、この組最強の人」

「ということは、あの方が組長なのか？」

そう言われたら、シグナムのような勘違いをする人は、多くいるだろうがそれは間違いだ。

「違うよ。組長は、千歳のお父さん。でも、あんな怖い人に勝てる人が存在すると思う？」

少し考えたあと、全員が首を横に振る。

あのアンナでさえ、勝つのは不可能と判断した、千歳の母・千里。

「あなた達はあとで、分かってますね？」

顔を青くして固まるヤクザの皆さんを無視して、千里は八人を見る。

そしてこちらも、全員が固まる。蛇に睨まれた蛙のごとく。

「いらっしゃい、アリスちゃん。それに、アリスちゃんのお友だちも」

さっきとは違い、優しい笑みを浮かべる千里。

誰もが別人と思うだろう。

「今日は、千歳はいないのね」

「実は、そのことを伝えるために来たんです」

「そう・・・まぁ、こんな所じゃあれだから、中に入って」

千里は、この時点で千歳がいない理由に気づいたかもしれない。
そう思ったアリスだった。

―――――――――――――

八人が通されたのは、軽く百人は入るんじゃないかと思われる、巨大な大広間。

「落ち着かない・・・・」

「だよね。こんなに広いのに、私たちだけって」

「すげぇなぁ、千歳って」

「楠木がというよりも、楠木の両親がだが」

「うるせぇよ」

「あなた達は慣れているみたいね？」

「そりゃあ、私は何度か来てるし・・・・」

「私の実家に帰ればこれくらいの部屋、普通ですわよ」

軽い自慢をするアンナを、横目で見詰める七人。
アンナもそれには気がついていないようであった。

そんな会話をしている内に、人相のかなり悪い人登場。

「「「「ひぃっ！」」」」

先ほどと同じように怯える四人。
今回はそれにヴィータも加わる。

「久しぶりじゃのう、アリス」

「はい。お久しぶりです」

またもやおいてけぼりをくらう、後ろの面々。

「そうだ、紹介するね。この人は、千歳のお父さんの千治さん。ちなみここの組長さんだけど、実質二番目」

「おい、アリス。どういう意味じゃい！？」

「どういう意味でしょうか？　考えてみてください」

笑顔で誤魔化すアリスを、千治はジトっと睨むが意味はなし。
諦めた千治は、しょうがなく話題を変えた。

「そうじゃ、アリス。後ろの小娘達は――――」

「誰が小娘ですの、この愚か者！　私の名前は、アンナ・シロガネです！　ちゃんと覚えておきなさい！」

「シロガネ・・・どっかで聞いたような・・・まぁええぇ。そんなことよりも、威勢がいいのう。じゃが、俺にそんな態度を取ると

どうなるか分かってやっとるんじゃな？」

立ち上がり、ナイフをアンナに向けようとしたが、

「じゃあ千治さん。千治さんは、私との約束を破るってことがどういうことか、分かってるの？」

後ろから聞こえてきた、千里の恐ろしく冷たい声。それを聞いた千治は、氷のように固まってしまった。

その声は、さっき外で聞いた声よりも恐ろしい。

「言ったはずよね？　いいお客様に、そんなことはしてはいけないと。毎日毎日毎日毎日」

笑みを浮かべて、背後から千治に近づいていく。

「は、はい！」

「どうしたものかしら？　どうしたら、私の言っていることをちゃんと理解してくれるのかしら？　ねぇ、千治さん？」

アリスが言っていた、『実質、二番目』という意味が、理解できた瞬間であった。

あれでは、威厳もあったものではない。

「すみませんでしたぁ！」

「いつもそうよね。謝っても、次の日には同じことを。少しは痛い目にあったほうが、いいのかも」

アリス達は、恐怖で声が出せない。
千治には向かっていったアンナも、顔を青くして体を震わせている。

「まぁ、それは後にしましょう。今は、アリスちゃん達がいるのだから。ねぇ？」

体を起こした千治の体は、まだ震えていた。

「い、一応紹介しますね。私の右にいるのが高町なのはちゃん。そして、左側がフェイト・T・ハラオウンちゃん。で、その隣が八神はやてちゃん。後ろの右からシグナムにヴィータ。そして、アンナ・シロガネさんにネム・ユースさん」

「えっと、アリスちゃんに説明してもらってるかもしれないけど、千歳の母の千里です。こちらこそよろしくね」

優しい笑顔に戻っていたが、千治を再び睨み付ける。

「千治さん、あなたも言いなさい」

「はい。みなさん、よろしくお願いします」

あいさつ言うよりも、土下座。よほど、今の千里が怖いのだ。

「そ、それで今日は何のようじゃい？　というか、千歳は！？　俺の可愛い、可愛い千歳はどこじゃあぁぁ！！！？」

親バカ発動。
立ち上がってそんなことを、そんなこと叫ぶ千治。

「今日は、そのことで来たんです」

「・・・・そうか」

アリスはできる限り、詳しく分かりやすく説明した。
自分達に起きたこと。一真と千歳が切られたこと。

「という訳なんです」

「あのボウズ・・・・また俺との約束破りおったな」

ドスの効いた声でそう言う千治だったが、

「私との約束を破る人に、そんなことを言う資格はないはずなのだけど」

「ぐっ・・・・」

グサリと突き刺さる一言に、千治はぐらつく。

「まぁ、今回はフィールというのが原因らしいからの。特別に・・・・何もなしじゃ」

本来なら一真に対して、何かをしたいのだろうが必ず千歳と千里は、一真の味方につく。
そうなれば、自分に勝ち目はなくなる。今のうちに、一真のことを許しておこうというわけである。

「しばらくはこっちにいるんでしょ？」

「はい。あっちに戻っても戦えません、足手まといにしかなりませんから」

「それなら、私たちも頼りなさいね。力になるから」

「はい」

話しも終わり、帰るために立ち上がった時だった。

＞アリスさん！　それに他の皆さんも聞こえますか！？＜

エリオからの念話。

その声には、急いで伝えなければという意志が見えた。

＞どうしたの、エリオ？＜

＞今、僕達病院にいるんですけど・・・一真さんが目を覚ましました！＜

＞エリオ、本当！？＜

＞はい！　たった今、目を覚ましました！＜

＞分かった。今からすぐに行く！＜

早く一真に会いたいアリスは、念話を切るなりたった一人、走って出ていってしまった。

「アリスちゃん！」

「何かあったの？」

「神童君が目を覚ましたらしいんです」

「そう。なら、急いで行ってらっしゃい」

残された七人もお辞儀をして、一真達の入院している病院へ向かっていった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

八人が出ていった後、千治と千里はまだ大広間に残っていた。

「あ！」

「どうしたの、千治さん？」

「アリスに千歳の入院してる病院の場所、聞くの忘れておったわ！」

「はぁ・・・・」

千里の口から出たのは、かなり重いため息。

「千里さん」

その声と共に襖が開き、一人の老人が現れた。

「お母様。いつ、こちらに？」

「ついさっきじゃよ」

その老人は千治の母親で、千歳の祖母。

「それよりも、千治の脳は死んでも治らんからの。一番はほっておくことじゃ」

「言ってくれるじゃねぇか、婆さん」

横目で自分の母親を睨むが、本人は無視。

「話は変わるが、面白いことになっておるようじゃの。何でも千歳やその友人が、あっちから逃げてきたとか」

「聞いてたのか」

「もちろんじゃよ。千歳が目を覚ましたら、その友人とわしのところに来るように伝えるように。よいの？」

「わかった」

そう言い残して、祖母は大広間から出ていった。

「じゃあ、千治さん。分かってるわね？」

「いや、ちょ・・・・」

「問答無用♪」

その日、千治は生きていることを数十回も後悔したとか。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「エリオ！」

「こっちです」

エリオの話によると、目を覚ました一真は、まだ眠っている二人とはまた別の個室に移された。

その個室の前に着くと、ティアナとキャロが立っていた。

「アリスさん・・・・」

「ティアナ。どうしたの？」

「中で何があっても、絶対に落ち着いていてくださいね」

アリスにはティアナの言っていることが、全く分からないでいた。

「どういうことなんだ、ティアナ？」

「それは・・・あたしの口からは・・・・」

答えを渋るティアナ。

訳の分からないまま入り口を開けて病室に入ると、鈴蘭が立って

いた。
涙を流しながら。
「あ、アリスさん・・・・お兄ちゃん・・・・お兄ちゃんが・・・・」
「一真がどうしたの!?」
鈴蘭が立っているのは、一真のいると思われるベッドの前。
鈴蘭に近づくと、必然的にアリスの視界に一真が入ってくる。
「一真・・・・？」
アリスはすぐに感じた。今、目の前にいる一真に違和感を。
ベッドの上の一真は、ゆっくりと顔を動かしてアリス認識。
そして信じられない一言を言い放った。
「一真って、“僕”ですか？　それにあなたは、誰ですか？」
「え・・・・」
一真は記憶を失っていた。現実から逃げるために、自ら記憶を封じ込めて。
《一真の部屋》
なのは「えっと、今回はスタジオに戻ってきての集録です。ゲストの祐輔君もいるんですが・・・・とってもやり難いです」
一真「初めまして、みなさん。神童一真です。よろしくお願いしま

す」

アリス「いつもじゃ見れない、爽やかな笑顔だ・・・・」

千歳「・・・・・・・」

祐輔「どうしたの、千歳ちゃん？」

千歳「一真が・・・・怖い」

アリス「今度はこっちかぁ・・・・」

祐輔「せっかく、このジュース持ってきたのに・・・・」

一真「美味しそうですね、そのジュース」

祐輔「飲む？」

一真「いいんですか？」

祐輔「うん」

一真「ありがとうございます」

なのは「あれは・・・・怖いね」

アリス「確かに・・・・千歳が怖がるのも分かるような。って、一真の片目何か模様が・・・・ギアス！？」

一真「何ですか、これ？」

なのは「いつもなら、すぐに理解して悪用するはずなのに、記憶がなかったらこうなるんだ」

千歳「嫌だ、こんなの一真じゃないよ・・・・」

祐輔「あ、アレ？」

千歳「ど、どうしたの、祐輔君？」

祐輔「本当なら、好きな人にキスするはずなんだけど・・・・あぁ、記憶がないから」

アリス「何で記憶があるときに、それを持ってこないの！？」

なのは「アリスちゃん、少し自重しようね」

千歳「一真が怖いから、早くお返事コーナー！」

バルディッシュさんへ

一真「反ＫＤＧですか。確か、僕とアリスさんもそうでしたよね？」

アリス「そうだよ。で、千歳と祐輔は敵のＫＤ・・・Ｇ・・・・」

なのは「どうしたの、アリスちゃん？」

アリス「いや。ただ、後ろからものすごい殺気が・・・・」

千歳「アリスちゃん、何で一真と腕を組む必要があるのかな？　かな？」

祐輔「千歳ちゃん、怖い――――」

千歳「黙ろうか、祐輔君」

祐輔「はいっ！」

千歳「そして、アリスちゃんは死のうか？」

アリス「いやぁあぁぁぁ！」

鴨川秘さんへ

バタッ

一真「どうしちゃったんですか、みなさん？」

祐輔「祇帰の呪いだよ。それよりも、一真って愛されてるね」

一真「ありがとうございます、祇帰さん。お土産も、こんなにたくさん」

祐輔「でも確かこの別荘って、竜宮城の逆バージョンだよね。大丈夫なのかな？」

一真「どうでしょうか？　その辺りは、祇帰さんに聞いてみないと」

祐輔「っていうか、魔法もたくさん。全部グラトニー宛」

一真「魔法って美味しいんでしょうか？」

祐輔「さぁ？」

ＺＥＲＯさんへ

祐輔「本当に、酔っぱらった人たちはどうするの？」

一真「僕に聞かれても・・・・番外編の僕なら、記憶もありますしそっちに聞いたら」

祐輔「いや。それ、一真だから」

一真「あ、そうでしたね」

なのは「イタタタ・・・・」

アリス「容赦ないなぁ、もう」

千歳「憂さ晴らし、死ね祐輔！」

祐輔「何で、僕！？」

千歳「一真が、あれだから」

祐輔「理不尽！　ぐふっ・・・・」

紅龍さんへ

一真「九条君の言ってる、僕の思惑通りって、何かしたんですか？」

アリス「そこも覚えてない・・・・って、当たり前のことか」

なのは「えっと、前回一真君はこんなことを・・・・」

一真「ああ！　ごめんなさい、紅龍さん！　僕のせいで、こんなことに！」

千歳「いつもなら、絶対に謝らないのに・・・・やっぱり怖い」

祐輔「記憶がなくなると、こうも性格変わるんだ・・・・百八十度真反対」

千歳「土下座でも何でもするから、早く元に戻ってほしい。アリスちゃん。ドラゴンボ〇ルを、今すぐ持ってきて」

アリス「いや、無理だから。そんなもの、存在しないから」

ＮＫさんへ

千歳「ダメだよ、セラフィム～♪　嘘でも、そんなこといっちゃあ♪　鉄屑にしちゃうよ♪」

なのは「アリスちゃんの笑顔が、ものすごく怖い・・・・」

アリス「千里さんの娘ってことを、実感させられる笑顔だ・・・・」

祐輔「千里さんって、千歳ちゃんのお母さんだよね？　そんなに怖いの？」

アリス「もとの一真が、敬語を使うくらいに」

一真「思ったんですが、セラフィムさん。千里さんに説教してもらったら、性格もよくなるんじゃないですか？」

一真以外
『あぁ～』

一真「というわけでラディ君、どうですか？　お勧めしますけど？」

千歳「何だろう？　気のせいかな？」

アリス「気のせいじゃないと思う。私も思ったから」

なのは「記憶がなくなった一真君って」

祐輔「いつもとは逆のベクトルで、黒い・・・・」

一真「どうかしたんですか？」

なのは「な、何でもないよ」

アリス「それよりも、次回予告だね」

一真「？」

アリス「記憶を失った一真が、目を覚ましてから数日。一真の記憶が戻る気配はない」

一真「戻らない記憶に、苛立ちを隠せなくなっていく僕ら」

なのは「そんな一真君の前に現れたのは、一人の老人だった」

千歳「次回、魔法少女リリカルなのは～七つの大罪～」

祐輔「【逃げた記憶】」

一同『次回へ、スタンバイレディ！』

逃げた記憶・前編（前書き）

最近、前後編の回数が増えてきた。
はい、すみません。なかなか進めないもので。
今回もそんな感じで、なかなか進めないままの前編です。
それではどうぞ。

「一真って、“僕”ですか？　それにあなたは、誰ですか？」

ベッドの上の一真は、まっすぐアリスを見てそう言った。

「え・・・・」

その言葉を最後に二人の間を、沈黙が支配する。

病室に響くのは、鈴蘭の泣く声だけ。

「じょ、冗談、だよね・・・・いつもみたいな冗談だよね！」

そう叫ぶが、一真は目を伏せて小さな声で一言、「ごめんなさい」と言うだけだった。

「嫌・・・・嫌だ・・・・いやぁぁぁああ！」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「嫌・・・・嫌だ・・・・いやぁぁぁああ！」

「な、何ですの！？」

まだ外にいたなのは達は、中から響いたアリスの声を聞いた。

「アリスちゃんの声！？」

「アリス！」

「桜ノ宮！」

中に入って彼女たちが見たのは、泣いている鈴蘭と床に座り込んで小さく「嫌だ」と、呟き続けているアリス。

そして、うつ向いてベッドの上にいる一真だった。

「一真、君？」

「何があったん？」

そう聞くはやての視界の端では、アリスと鈴蘭を移動させているシグナムと、ＦＷメンバーの姿。

「・・・ごめんなさい」

その言葉だけで、全員が違和感を感じた。

「一真・・・どうしたんだよ、その言葉使い？　それに、いつもならそんなに簡単に謝ったりしないだろ、お前」

「すみません・・・僕が、悪いんです。僕が、全部忘れてしまったから・・・」

空気が固まった。

今の一真のしゃべり方、そしてその内容。そして・・・一真自身が、自分を“僕”と呼んだこと。

「忘れた？　何を言ってますの、神童一真？」

「・・・・ごめんなさい」

「ぐっ・・・・私(わたくし)が聞いているのは、そんなことではありませんわ！　早く言いなさい！　忘れてないと！　早く！　今すぐ、言いなさい！　神童一真ぁ！」

「アンナ！」

ネムに呼ばれて、アンナは我に返った。
そのアンナの目に映ったのは、うつむいている一真。

「もういいですわ。神童一真。あなたには失望しました。行きますわよ、ネム！」

そう言い残し、アンナは出ていってしまった。
重い空気が漂う中、ネムが一真へ話しかける。

「神童君、ごめんなさい。いつものアンナは、あんなじゃないんだけど・・・・それだけは、分かってあげてほしいの」

「はい」

一真の小さな返事を確認してから、はやて達の方を見る。

「八神さん」

「うん・・・・アンナさんをお願いします。ネムさん」

「はい。では、また」

ネムが出ていくと、今度ははやてが口を開いた。

「一真」

「はい」

「今からいくつか質問するから、ちゃんと答えてくれる？」

「分かりました」

フェイトが聞いたのは、三つ。

自分の名前。姉の名前。そして、千歳の存在。

そして、それに対しての一真の答えはこうだった。

「さっきの女の人、アンナさんでしたっけ。彼女が、僕のこと神童一真って呼んでましたよね」

「千歳さんって方は、僕の知り合いなんですか？」

「すみません・・・分かりません」

一真が自分の名前を言えるのは、何となく分かっていた。あれだけアンナが、一真の名前を呼んでいたのだから。

二つ目の質問、千歳のことは聞き返した。だが、いつもの一真のことだ。これも冗談かもしれない。

最後の質問。これだけはフェイトは、冗談でも記憶がないふりをする筈がないと、思っていた。しかし、一真の様子は変わらず。

「本当、みてぇだな・・・・」

「うん・・・ごめんね、起きたばかりなのに」

「大丈夫ですよ」

「そうだ。自己紹介しておくね。私は高町なのは」

「フェイト・T・ハラオウンです」

「八神はやてや。よろしゅうな」

「あたしはヴィータだ」

「えっとなのはさんにフェイトさん、はやてさんにヴィータさんですね。よろしくお願いします」

今まで暗い顔をしていた一真が、やっと見せた笑顔。
それを見れて、なのはたちもホッとしていた。

「それじゃ、私たちもこれで」

「明日も来るね」

「はい」

―――――――――――――――

病院からの帰り道。なのは達の足取りは重い。
あの後、一真は数日様子を見て問題がなければ退院。そしてアリスと鈴蘭だが。アリスはしばらく入院、鈴蘭は一日だけ病院にいることになった。。
状況はどんどん酷くなっていく。

「一真君達、大丈夫かな？」

なのはがそう呟いたが、誰も答えはしない。答えることができない。
彼女達は、その問いに対する答えを持ってはいないのだから。持っているのは、一真達だけ。
そのまま彼女達は、一言も会話を交わすことなくアリサの家へ歩いた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「ネム・・・・」

「どうしたの、アンナ？」

もうすぐでアリサの家という所で、アンナは後ろにいるネムの名を呼んだ。

「今から、ここを中心に半径五キロ結界を張りなさい」

「・・・わかったわ。終わったら、教えなさいね」

アンナは黙ったまま頷いたまま、そこから動くことはなかった。
ネムも結界を張ると、アンナの顔を見ることなく、そのままアンナを追い越してアリサの家へと歩いていった。

「グラディウス、いいですわね？」

アンナとその愛機・グラディウスしかいない、結界の中。
アンナはセットアップして、弓となったグラディウスを構える。

「ふざけるんじゃありませんわよ、神童・・・一真ぁぁぁぁぁ！」

全方位に向けて顕現された、大量の魔力の矢。
それを、一気に発射。

「はぁああっ！」

アンナはしばらくの間、全方位に向けて矢を放つという行動を、何度も繰り返した。
一真にぶつけることの出来ない怒りを、すべて晴らすかのように。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

あれから数日。
検査も終わり、一真の退院の日。
記憶喪失については、頭部に外傷はなかったので、精神的ショッ

クが原因だろうということであった。
残りの三人だが、いまだ入院している。
千歳は峠は過ぎて、目を覚ますまで時間を待つだけ。　ズバリは二日前に目を覚ましたばかりで、まだ病院のベッドの上にいる。
そしてアリスはというと、意識はあるのだが反応がない。なのは達がどんなに話しかけても、どんな反応も返ってこない。三人の中では、一番重症かもしれない。

「なのはさん、ここは？　凄く大きな家ですけど・・・・もしかしてなのはさんの？」

今いるのは、アリサの家の門の前。

「違うよ。ここは私達の友達の家。それで、今私達の住んでる場所」

「私達って僕も、ですか？」

「うん。ちょっと、わけありでね」

そう言ったなのはの表情は、辛そうな顔をしていた。
記憶を失っている一真でも、それを感じ取ったのか。何も聞かないでいた。

「ここで立ち話もなんだから、入ろっか。みんなも待ってるし」

「はい」

今日退院する一真を迎えに行ったのは、隣にいるなのはだけ。それには理由があるが、一真には内緒にしてある。
そしてその理由というのは。

「ただいま～」

「えっと・・・・お邪魔し――――」

パンッ、パンッ

二人が入ると同時に響いた、複数の破裂音。

玄関には、クラッカーを持ったフェイト達がいた。

『一真（君／さん）、退院おめでとう（ございます）！』

「・・・えっと、ありがとうございます」

いつもの一真なら、こんな礼儀正しいお礼など言わない。確実にだ。

だが、今は記憶喪失で性格が百八十度変わってしまっている状態。

一度も病院に行ってなかったアリサやすずか、二階で見下ろしている《断罪の鎌》のメンバーは聞いていただけ。その変わりようを目の前にして、驚きを隠せないでいた。

「あ、あんた。本当に一真？」

「はい。えっと僕、皆さんのこと忘れちゃってるみたいで・・・・ごめんなさい」

一気に空気が重くなる。　今までの一真ならば、空気を読まない発言で凍らせたりぶち壊したりしていたのだが、今の一真はどうやっても重い空気を作り出してしまう。

何とも厄介な特性を身に付けてしまった。

「いいんだよ、一真君。謝らなくても。ゆっくりと思い出していけばいいんだから。ね？」

「そうよ、一真。だから、もっと明るく。いいわね？」

「はい」

アリサとすずかの励ましで、一真の表情は明るくはなった。しかし、それは表情だけで、纏っている雰囲気は重いまま。本質は変わっていないということだ。

それはここにいる全員が、分かっていることだが、何も言わないでいた。

「じゃあいこか、みんな？」

「だね。こっちだよ、一真」

「あ、はい」

フェイトに連れられ一真が入ったのは、アリサの家にある大広間の一つ。

そこにあったのは、テーブルの上に乗っている豪華なご馳走の数々。

「うわぁ・・・・」

そして入り口の真反対の位置にある壁には、

『一真退院おめでとう！』

と書かれた段幕がはられまている。

つまりこれは、

「一真君の退院祝いパーティの始まりや！」

再び鳴らされたクラッカー。

それがパーティの始まりの合図となった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「・・・・」

「どうしたのかしら？　うかない顔をして？」

「ラストか・・・・なかなか見つからないのだよ。人形どもに探させているのだが。さすがはロストロギアと、言ったところか」

二人が眺めるモニターに写っているのは、真っ黒な本が五冊。

「『ネクロノミコン』。『ルルイエテキスト』。『ナコト写本』。『エイボンの書』。そして『屍食経典儀』。全てS級ロストロギア。これらの共通点は・・・・あれね」

ラストの表情は、とても楽しそうだった。

「そうだ。私はあの力を手に入れる。そうして、神となる」

「神ねぇ。楽しみにしているわよ、フィール」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

とある次元。
ここには、フィールによって送り込まれた女子高校生ほどの神無と、鈴蘭の姿をしたタキオンがいた。

「・・・・」

「どうかしましたか、神童神無？」

「・・・・何でもないわ。それよりも、気づいてる？」

「はい。先程からずっと、ですが」

足を止めて、二人は周りを見渡す。
視界の中に突然現れたのは、ピンク色の羽を持った百五十センチほどの甲殻類。

「虫？」

「みたいね。この虫、探し物に関係のある魔獣みたいね。名前は・・・・ミ＝ゴ。主が私の中に入れた情報に、その名前があるわ」

「ということは、今回は当たりのようですね」

二人の手に、自分達の本体のデバイスが現れる。

それを見たミ＝ゴ達も構える。

「紅之太刀壱式・煉刃」

サタンから放たれた巨大か魔力の刃は、地面に傷をつけながらミ＝ゴの群を、一気に駆け抜ける。

「ヘルズブリンガー」

タキオンは、腕を横に振り魔力の圧力でなぎ払う。

だが、それだけではまだ終わらない。空を飛び、まだ生き残っているミ＝ゴがいた。

「残りは私に任せなさい」

「分かりました。では、お願いします」

自分達の方へ向かってくるミ＝ゴ達を無視して、神無はサタンを回転させ始めた。

サタンの切っ先には、高密度の魔力の塊。それは高速回転をしながら空気中の魔力を吸収し、巨大化を始める。

「着ますよ、神童神無」

「分かってるわよ」

ミ＝ゴと神無の距離は、残りの七メートルほど。

「吹き飛びなさい。獄龍破！」

放たれた魔力の塊は、残っていたミ＝ゴを一気に飲み込み、獄龍破は消滅。
地面に更に巨大な傷をつけた。

「これで掃除は終わり・・・・じゃないわね」

神無の言う通り、ミ＝ゴはまだ二人の視界の中にいた。
いや、それでは語弊がある。正しくは再び現れた、だ。

「あの生物の群を消さなければ、ロストロギアにはたどり着けないということですか・・・・」

「じゃあ、さっさと消すわよ」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

一真の退院祝いパーティの行われている、バニングス邸の大広間。
その中ではまだ、いつものような酔っぱらいは現れてはいない。
さて、このパーティで分かったことが一つ。それは一真の食欲である。

「んぐ・・・おいしいですね」

笑顔で話す一真の目の前には、山のように盛られた料理の数々。

「お、お兄ちゃん・・・・何か前よりも、食べてるような」

そう。一真の食べる量が、記憶を失う前よりも増えているのだ。

「みーなといい勝負なの」

「それはないよ、リリン」

リリンを全く見ないでの、鈴蘭のツッコミ。

そんな鈴蘭に、ずっと口を動かしていた一真は気がつく。

「えっと、君は確かあの時・・・・」

あの時というのは、おそらく一真が目を覚ました日のことだろう。

あの日から今日までずっと、一真と鈴蘭の二人は会っていない。

つまり、今日が記憶喪失の一真との、二度目の邂逅となる。

「神童鈴蘭・・・・お兄ちゃんの妹です」

「僕の妹・・・・ごめん。まだ、僕――――」

「いいんだよ、お兄ちゃん。そんなに急がなくても。ちゃんと待ってるから。お兄ちゃんが思い出すの。それに今日は、お兄ちゃんが主役のパーティなんだから、そんな顔しないで。ね？」

「うん」

さて、こんな楽しい楽しいパーティーの中。まったく楽しそうでない者が、たった一人いた。

言わなくても読者の皆さんなら、すでにお分かりであろう。アンナ・シロガネである。

一真の座っている位置から一番遠い場所に座り、一真を思いっき

り睨んでいる。
そんなアンナから、危険を察知して忍達はすでに退散済み。
だが、まだ近くにいるものが一人。

「あ、アンナ・・・・」

彼女の補佐役のネム・ユースである。

「何ですの、ネム？　今私、機嫌が悪いので簡潔に済ませてほしいのですが」

「機嫌が悪いのって、彼が記憶喪失になってるからでしょ？　まぁ、それだけじゃないかも――――」

「うるさいですわよ、ネム！」

図星らしく、言い当てられたアンナはテーブルを思いっきり叩き、立ち上がる。

「アンナ、落ち着いて」

「・・・・」

ネムを睨んでいたアンナは、ゆっくりと座る。
近寄りがたい雰囲気は、さっきよりも大きくなっている。

「・・・ふぅ。ネム、コーヒーを」

「わかったわ」

二人がそんな会話をしている最中、最も早く逃げていたユゥイと忍の二人はというと・・・・

「ユゥイさん！」

「ん？」

今日のパーティーは、バイキング方式となっているため、料理を物色していたユゥイは突然呼ばれ振り向く。

そこにいたのは、機動六課が誇るツンデレ。ティアナ・ランスター。

ものスゴく真面目な顔で、ユゥイに迫っていた。告白でもするのだろうか。まぁ、違うのはわかっているが。

「えっと・・・・ごめん。名前、何だっけ？」

「ティアナ・ランスターです」

「うん、ランスターね。それで、どうしたんだ？」

「私に幻術を教えてほしいんです」

「幻術を？　どうしてまた？」

「私も幻術を使うんですけど、衝撃に弱くてほとんど時間稼ぎが出来ないんです」

「なるほど・・・・」

そこまで聞いて、ティアナが自分に幻術を教えてほしいと、頼ん

できた理由を理解した。

「それで俺に頼んできたわけだ」

「はい」

力強い返事。

だが、ユゥイにはあるもんだいがあった。ユゥイの使う幻術は、管理局内でもトップクラス。ユゥイ自信も、それなりに使える方だと思っている。

が、人に教えることが苦手なのだ。

それをティアナにつたえたのだが、

「かまいません」

ということだ。

そんなティアナに、ユゥイは簡単に折れた。

そもそも。この会話を聞いていたなのはが、ちゃっかり念話でユゥイを脅していた。

ユゥイとしても、なのはの砲撃は食らいたくはない。いや、誰でもか。

「わかったよ。でも、今言ったようにうまく教えられないから、その辺は頑張ってくれ」

「ありがとうございます！」

こんな感じでユゥイが、ティアナとうまく行っている時、薄い忍はというとライトニングの二人と楽しく食事をしていた。

「ウメェ・・・・こんなの初めて食ったぞ！」

初めて食べた、豪華な料理にテンション上がりまくりの忍。
少しは場の空気を読んだ方がいいのだが、今の忍には無理な話。
ちなみにその食べる速度は、今の一真と同等かそれ以上。

「忍さん」

「ん・・・・どうした、チビッコ？」

一応、忍の言っていることは確かなのだが、カチンと来た二人。
というわけで、アイコンタクトで意思疎通をしたのち、

「忍さんって、いつも僕らも気がつかないくらい影薄いですけど・・・・」

「何でそうなっちゃったんですか？」

かわいい顔と、目の笑ってない笑顔で問い詰める二人。
もう怒り全快という感じだ。

「うぅ・・・・」

さすがに、エリオとキャロには強く出ることができない、ヘタレな忍。

「げ、原因としては、地球でいう忍者の修行が・・・・何でこんなこと暴露してんだぁぁぁぁ！」

涙を流しながら走っていく忍の背中を、してやったりという顔で

見る二人がいた。
つか、黒くないかこの二人。

「こら、シャマル！　何してのや！」

突然聞こえたはやての怒声。

「は、はやてちゃん！　これは、その・・・・」

何があったのかというと、シャマルがお酒を仕込もうとしたのだ。
いつものことだが、今回ばかりははやても取っ捕まえて、凝らしめてやろうと決めていたらしい。

「言い訳は聞かんぞ、シャマル」

「そうだぜ～。今日こそは、分かってるよなぁ？」

「えーと・・・・えいっ！」

「「「なっ！？」」」

「なのは！」

シャマルが、アルコール度数が異常値の酒を飲ませたのは、近くにフェイト共に立っていたなのは。

「な、なのはさん！」

「んぐ・・・・」

酒を飲まされたなのははというと、一気に顔を赤くして・・・・

バタン

ぶっ倒れた。

「なのはぁ！」

倒れたなのはを見て、思いっきり卒倒するフェイト。

『・・・・』

「確保ぉぉぉ！」

倒れたなのは以外で、シャマルを追いかけ始める。

フェイトに至っては、もう怒りで目やオーラがすごいことに。

「たく。何やってんだか・・・・」

「アリサさん」

「うーん・・・あんたから、さんを付けて呼ばれるのって何か慣れないのよね」

「あ、ごめんなさい」

「まぁいいんだけど」

「そういえば、すずかさんは？」

アリサと一緒のイメージの強いすずかが、彼女の隣にいないというのは一真でも違和感を感じたらしい。

「すずかなら、あそこでリーズと話してるわよ。何か意気投合しちゃったみたいでね」

というわけで、蚊帳の外に追いやられたアリサは一人でここに来たというわけだ。

「で。あんたは楽しんでる？」

「あ、はい。お陰さまで」

―くくくく・・・・―

「え？」

突然頭の中に響いた、謎の笑い声。
その声は、とても自分の声に似ていた。

「どうしたの？」

「いえ、何で――――」

―何がお陰さまだ。現実から逃げた野郎がよぉ―

「っ！」

―まぁ今のテメェに、何言っても意味はねぇんだけどなぁ。くくくく―

幻聴とは思えないほど、その声ははっきりと聞こえる。

「あんた、顔色悪いわよ？　大丈夫なの？」

「は、はい・・・・」

―俺様の声に驚いて、震えている奴が大丈夫な分けねぇだろうが。んなことよりもだ。ちょっと、面貸せよ―

「えっ！？」

その言葉を聞くとすぐに、一真は体から力が抜けていくのがわかった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

目を覚ますと、一真はアパートの一室に立ち尽くしていた。

「ここは・・・・」

部屋の中を見渡してみるが、そこは一真の記憶にはない場所。

「でも・・・・懐かしい」

「そりゃそうだろうよ」

後ろから聞こえてきた、さっきと同じ声。
振り返ると、真っ赤な瞳に白髪の自分が立っていた。

「だってこの風景は、テメェとテメェの姉貴が住んでいたアパートなんだからな。くくくく・・・・・」

「僕と僕の姉さんが・・・・ところで、あなたは？」
「俺様か？　俺様は、テメェだよ。それ以外に何見える。で、ここはテメェの心の中。つまり、このアパートはテメェの心の風景ってわけだ。記憶を封じ込めたくせに、ここは忘れることができねぇか・・・・」

もう一人の自分は、部屋の中を見ながら言う。

「まぁ、当たり前のことだわなぁ。くくくく・・・・・」

「・・・・」

「さて。俺様が記憶のねぇテメェの前にわざわざ現れた理由だが・・・体を貸してもらう」

「え？　それは――――」

「本当に面倒だな、記憶のねぇテメェはよぉ」

もう一人の一真は一真の言葉を遮り、めんどくさそうにそう言う。

「つまり、しばらくテメェは俺様と入れ替わって、ここで寝てろ意味だ」

再び一真は、意識を失った。今度は、体を無理矢理奪われるという形で。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「一真！」

隣に立っていた一真が、いきなり倒れた。
アリサの声に、この場にいた全員が一真の元へ駆け寄る。

「シャマル！　早く一真を！」

「ちょっと待って・・・・」

一真に近寄って、シャマルを診断を始める。が、倒れていた一真は、何事も無かったかように立ち上がった。

「ふぅ・・・・」

「一真君？」

さっきまでとは違う雰囲気を纏っている一真に、シャマルは戸惑いを隠せない。

「くくくく・・・・」

その笑い声を聞いただけで、全員が警戒する。《断罪の鎌》のメ

ンバーに至っては、全員がデバイスを構えた。
それだけ効果が、今の笑いにはあった。

「誰だテメェ？」

「神童一尉ではなさそうですね」

「くくくく・・・・いいねぇ、その顔。その顔を俺様好みの、恐怖や絶望で歪めてみたくなる。そう思わないか。なぁ、なのはぁ？」

楽しそうに顔を歪めて、一真は。いや、一真らしき者はなのはに同意を求める。
さかし、なのはは首を横に降る。

「で、あなたは誰ですの？」

「くくくく・・・・そういやぁ、テメェらとは始めましてだったなぁ。つーわけで自己紹介だ。俺様は神童一真。それ以外の何者でもねぇよ」

一真はもう一度、あの不適な笑みを浮かべた。

《一真の部屋》

一真「皆さん、こんにちは。もしかしたら、こんばんわ。神童一真です」

一真以外
『爽やかだな～』

なのは「ねぇ、千歳ちゃん。記憶のない一真君に、もう慣れ――――」

千歳「全然！」

アリス「力強い返事だ」

一真「えっと、その・・・ごめんなさい」

千歳「うぅ～～～～」

アリス「まぁ一真が全部悪い訳じゃないからね。千歳もそれは分かってるから、手を出せないんだ」

なのは「そんな千歳ちゃんに、嬉しいゲストだよ」

千歳「本当！？」

なのは「うん。じゃあ本日のゲストの一人目。本編から、千歳ちゃんのお母さんの楠木千里さんです！」

千里「よろしくね」

千歳「お母さん、いらっしゃい♪」

千里「千歳。元気だった？」

千歳「うん♪」

アリス「さっきまで、元気じゃなかったのに・・・・」

なのは「さすが、親子だね。じゃあ、次のゲスト。記憶があるときは一真君の敵。でも今回は、千里さんの説教を受けに来たセラフィムと・・・・」

アリス「まるで、その巻き添えを喰らうためにやって来たラディだよ！」

ラディ「誰が、巻き添えを喰らうためか！　って、セラフィム！早く来い！」

セラフィム
［嫌です！　ラディは、私が嫌いなんですか！？］

ラディ「・・・・・・・・・・・・どうだろう？」

セラフィム
［そこは否定してくださいよ！］

一真「えっと、それじゃあ千里さん。お願いします」

千里「セラフィムちゃんってのは、あなたね？」

セラフィム
［い、いやです・・・・こうなったら、《一方通行》の力を］

千歳「ダメだよ、セラフィム。ちゃんと、お母さんのお話を聞かないと♪」

セラフィム

［ラディ！　助け――――］

一真「えっと、始めましてじゃないんですよね？」

ラディ「一真が記憶を失う前に、何度か」

一真「それじゃこれからもよろしくお願いしますね、ラディ君」

ラディ「あぁ。よろしく、一真」

なのは「何か、絶対にあり得ない友情が・・・・」

千里「それじゃあ行こうか、セラフィムちゃん」

セラフィム
［いやぁぁぁぁ！］

千歳「それじゃあ、最後のゲストの紹介だね。名前はお母さんと同じ。でも、性格は真反対（？）。秋雨千里ちゃんです！」

千里「お邪魔しま～す♪」

アリス「で、来て早々、何探してるの？」

千里「千里さんは？　ちなみに私じゃないわよ」

千歳「お母さんなら、あそこだよ」

千里（母）「ここに書いてあるかぎりだと、ラディ君苦労してるのね」

セラフィム
［そ、それは・・・えっと不可抗力という――――」

千里（母）「違うわよね？　映像もあるんだけど、それだと楽しんでやってない？　ラディ君が、ボロボロになるの分かってて」

セラフィム
［ですが、これはラディが！」

千里（母）「言い分けは見苦しいわよ、セラフィムちゃん。それにラディ君は、あそこまでされる必用、ないわよね？」

ラディ「千里さん、強っ！」

千里「笑顔だけど、目が笑ってない・・・・」

一真「あれが千里さん・・・・」

ラディ「そうだ、一真。これお土産」

一真「ありがと・・・・」

バタン

千歳「一真！　・・・・ラディ君、死のうか？」

ラディ「え、あ！　ちょっと！　いやぁぁぁぁぁ！」

なのは「えーと・・・お返事コーナーいくよ！」

バルディッシュさんへ

ラディ「何かいっぱい来た！」

なのは「本当なら一真君あてなんだけど、今は無理だから・・・・
千歳ちゃん、お願い！」

千歳「ＯＫ♪　じゃあ、行くよ！　爆流破！」

千里「でもまぁ、自分の記憶から逃げるのは、誉められたものじゃ
ないわね」

アリス「そうなんだけど、一真って神無さんのことだと、かなり脆
いから・・・・」

ラディ「あー、何となく分かる気がする」

一真「？」

紅龍さんへ

アリス「今の一真が怖い人、あそこにもいたんだ」

千里「あそこにもって、他にもいるの？」

なのは「千歳ちゃんだよ」

千歳「今の一真、一真じゃないもん」

ラディ「そうですか？　俺は、こっちの一真のほうが仲良くできそうですけど」

一真「えっと、僕としては早く記憶を戻したいんですが」

ラディ「俺としては、遠慮してほしいな・・・・」

鴨川秘さんへ

千歳「ナイスだよ、祇帰ちゃん！　というわけで、一真この記憶の戻る薬を早く！」

なのは「わぁ、元気いっぱいだ・・・・」

一真「あ、はい・・・・」

ラディ「止めろ！　一真！」

アリス「ラディは黙ろうね～♪」

一真「んぐ・・・・ははは！　俺様、復活だぜ！　つーわけで、クソガキ！　死ねやぁぁぁぁ！」

ラディ「ぎゃあああああ！」

千里「本日二度目ね。何て言うか、絶好調過ぎる・・・・」

アリス「あれこそ、一真だね！」

NKさんへ

一真「ははははは！　楽しいな、クソガキぃ♪」

ラディ「ぐ・・・こうなったら、これだ！」

一真「ぎゃあああああ！」

なのは「キノコ、出したんだ」

一真「えっと・・・何があったんですか？」

アリス「今のキノコで、薬の効果が・・・・」

千歳「ラディ君・・・なにやってるの。折角、一真が怖くなくなったのに！　死んじゃえぇぇ！」

ラディ「血涙!?　って、ぎゃあああああぁぁぁぁぁ！」

千里「そう言えば、千里さんの方は？」

セラフィム
［ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい］

千里（母）「だめよ。これくらいじゃ、セラフィムちゃん。またラディ君に、苦労をかけそうだから」

千里「かっこいい・・・・」

な・ア
「「どこが？」」

來人さんへ

一真「えっと・・・・」

千歳「一真はコメントしにくいよね。これには」

アリス「そうだよね。でも、ジンの言ってることは正しいよ。アンナのことも」

千里「あの性格、何かわけありそうよ。何となくとしか、言いようがないけど」

なのは「たしか、アンナさんってラストと親子だったけど、もしかしてそれ？」

一・な・千・里
『さあ？』

千里（母）「誰にでも、いろいろあるのね」

ラディ「そうだな・・・・って、千里さん。セラフィムは？」

千里（母）「ナイショ」

麗×零さんへ

千里「千里さん！」

千里（母）「どうしたの？」

千里「どうやったら、あんな風にお説教できるんですか？」

千里（母）「そうねぇ。一番いいのは、相手の弱みを握ることかしら。で、相手が言い訳してもそれを聞いちゃダメよ。表情は笑顔。でも、表だけ。いい？　そうそう。相手が何か言おうとしても、最後まで言わせないのもいいかもね」

アリス「あの血が・・・・」

なのは「千歳ちゃんの中にも・・・・」

ラディ「将来が、色々な意味で楽しみだ・・・・」

千歳「そんなに褒めないでよ～。えへへへ」

一真「誉めてないですよ、千歳さん」

U．Tさんへ

アリス「まぁ、ザックスの言う通りかな」

なのは「確かに元の一真君って、思い立ったが吉日が毎日だから」

一真「前の僕って、そんなだったんですか？」

ラディ「俺もそれで、結構殺されかけたな」

千里「それは嫌ね」

一真「えっと、ごめんなさい、ラディ君」

千歳「お母さん。お母さんって、前の一真と今の一真どっちがいい？」

千里（母）「今の一真君も元の一真も、どっちも一真君だからどっちも好きかな」

一同『おお！』

ＴＯＵＤＡさんへ

千歳「隆浩、ダメだよ。そんなことしたら、男としての人生、終わらせるよ♪」

一真「ち、千歳さん・・・・」

アリス「あそこで、千里さんばりのオーラを出している人は無視して」

千里（母）「どういうことかしら、アリスちゃん？　ちょっとお話

しましょうか？」

アリス「いやぁぁぁぁ！」

なのは「え、えとあの隆浩君が一真君の心配！？　槍でも振るんじゃ！？」

千里「槍じゃないけど、かわりに魔法が来たわよ」

千歳「そんじゃあ、あたしが・・・・」

セラフィム
［いえ。私に任せてください！］

ラディ「セラフィム！？」

セラフィム
「行きますよ、ラディ！　ラディブレイカー！」

ラディ「ぎゃあああああ！」

千里（母）「反省してないのね、セラフィムちゃん」

セラフィム
［え？］

千里（母）「行きましょうか？」

セラフィム
［助けてぇぇぇぇ！］

一同『ご愁傷さま』

近代哲学の祖の片割れさんへ

一真「そうなんですよね。あれがあると、完全に別次元ですから」

アリス「それについても、作者は試行錯誤してるみたいだよ」

なのは「でも、どうするんだろ？」

千歳「もしかして全員が《罪人》に？」

ラディ「エリオとキャロは、俺が命に変えても《堕落》なんてさせるか！」

千里「ブラ＆ａｍｐ；シスコンは黙ってなさい」

ラディ「ふごっ！」

なのは「と、ここで鈴蘭のイメージＣＶが決まりましたので、発表します！」

神童鈴蘭／伊藤かな恵（赤井林檎、佐天涙子、芹沢文乃）

一真「では、次回予告・・・と行きたいんですが」

なのは「まだ半分にも至ってないらしく、今回も無しです」

千歳「というわけで、締めるよ～。次回へ！」

一同『スタンバイレディ！』

説教組

千里（母）「次は何がいいかしら？」

ア・セ「［ごめんなさい。反省しますから、もう止めてくだ――――］」

千里（母）「そういう子は反省しないの。だから・・・・」

ア・セ「［いやぁぁぁぁ！］」

「くくくく・・・・どうした？　そんな、信じられねぇって顔して。俺様が神童一真だと、何か問題でもあんのかぁ？」

「当たり前だ。ここにいる全員の知ってる神童と、お前とじゃ全然違うからな」

いつの間にか帰ってきていた忍が、いつもと様子の違う“一真”に向けそう言う。

「まぁ、そうだろうな。俺様は神童一真だが、テメェらの知ってる神童一真とは全くの別人だ」

その言葉を聞いたとき、フェイトはあることを思い出した。
それは自分の《罪》をコントロールするために、自分の心の中に行った時に出会った、もう一人の自分。
あれは自分であって、自分ではなかった。

「つまり俺様は――――」

「《罪》で作られた、もう一人の一真・・・・」

「正解だ。くくくく・・・・つまり、俺様があいつの《罪》その物ってわけだな」

“一真”はフェイトを見て、そう言う。
なぜか楽しそうな表情の“一真”。

「でも一真さんって、自分の《罪》を制御してましたよね。なのに、もう一人の一真さんがいるんですか？」

「そうだよ。だって、制御するにはもう一人の自分を――――」

「何を勘違いしてんだ、テメェらは。俺様が消える分けねぇだろうが・・・・くくくく、そういうことか。

フェイトにティアナは、もう一人の自分は自分と一つになれば、そいつは消えてなくなると思ってんだな。そりゃ、大間違いだ」

“一真”の予想外の一言に、フェイトとティアナは言葉を失う。今まで、もう一人の自分は消えてしまったのだと、そう思っていたからだ。

「それって、どういう――――」

「俺様は言うつもりはねぇ。いつか、知る日が来るだろうから、それまで待ってろ」

フェイトだけではなく、他の皆も聞きたかったらしいのだが、今の一言が効果的だった。

“一真”が言う気がないと分かり、全員が黙ってしまう。

「じゃあ、私も聞かせてもらう」

「何だ、シグナム？」

「なぜ、お前は表に出てきた？」

「そうだったな・・・・さて、何だったかな？」

『はぁっ!?』

やはり、裏だろうが一真は一真だった。完全に行動が、思い付きだけで動いている。

「まぁ、んなのは冗談だ、くくくく・・・まず一つは、俺様の所有物どもの所に行きてぇっていうのがある。そして、もう一つはテメェらに話がある」

所有物という言葉に、何人か疑問を持ったが何も言わなかった。というか、ツッコミを入れたらダメだと感じた。

「まぁ、話っていうのもおかしいかもしれねぇな」

「どういうことですか?」

「テメェら、一真のことどう思ってる?」

“一真”の口からは出た、予想していなかった質問。

「いや、こう言った方がいいな。一真を強いと思っているか?強いっていうは、魔法や力じゃねぇぞ。俺が言ってるのは、器じゃなく中身だ」

「・・・それってどういうことや?」

「そのままの意味だ。さっさと答えろ」

「えと・・・強いんじゃ・・・」

「テメェらもか？」

はやてから視線を外して、他の六課のメンバーも、縦に首を振っていた。

「そうか・・・。じゃあテメェらは、何時まで経ってもあいつの支えになんのは、無理だな。

まぁ、仲間だとは思ってるだろうが、そこまでだ。くくくく・・・・」

「なっ！？」

「驚くようなことじゃねぇだろくくくく・・・・テメェらは、あいつのことを分かってねぇんだからな」

笑う“一真”の足下には、六芒星の魔方陣が。

「何であなたに――――」

「そんなことをってか、フェイト？　くくくく・・・・言ったろ？俺様は一真だが、テメェらの知ってる一真とは別人だって。言い換えれば俺様は一真とは別人だが、一真本人ってわけだ。

つまり、一番そんなことを言える立場にいるんだよ。まぁ、俺様の言ったことが分からねぇなら、鈴蘭に聞くといい。でも、それだと一真のことを分かった“つもり”になるだけ。それでテメェらが満足なら、俺様はいいがな」

そう言い残し、一真は光の中に消えた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

“一真”がいなくなった、一真の退院お祝いパーティ会場。

そこには、“一真”が出てくるまでとはうって変わって、思い空気が充満していた。

「今のもう一人の一真君の口ぶりだと、一真君は・・・・」

弱い・・・誰の耳にも、“一真”はそう言っていたように聞こえた。

（お兄ちゃん・・・・）

「・・・・らん」

（お兄ちゃんは・・・・いつも・・・・）

「鈴・・・・」

（そんなことしなくても、大丈夫なのに・・・・）

「鈴蘭！」

「は、はい！」

「あんたなら、一真さんの――――」

「え、えっと、ごめんなさい！　私から・・・・何も言えません・・・」

ティアナの声を遮って、鈴蘭は叫んだ。
それで全員から注目されるのは当たり前。
全員から黙って視線を向けられているのに、耐えられなくり鈴蘭は、走って部屋から出ていってしまった。

「しかし、鈴蘭から話を聞くのは間違っているのは、正しいな。それでは奴の言っていた通り、神童のことを知ったことにはならいからな・・・・」

シグナムの言葉を最後に、また静かになってしまう。
そんな空気に耐えられなくなったのか、リーズが口を開いた。

「思ったんだが、彼はどこに行ったんだ？　確か、所有物の所と言っていたが」

リーズに聞かれ、全員がクエッションマークを浮かべる。
一真を知っている六課のメンバーでも、所有物が一体何なのか、知るよしもない。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

ここは、一真が入院していた病院。
今は重体で眠っている千歳と、一真の記憶喪失で倒れたアリスが入院している。

その病院の廊下に六芒星の魔方陣が、突然出現した。
そして光と共に、“一真”がそこへ現れた。

「・・・・」

しばらく歩き、“一真”は足を止めてそこに書いてある名前に、目を向ける。

「まず、ここだな」

そこに書いてあるのは、『桜ノ宮アリス』。
彼女の様子を見ること。それが、“一真”がここへ来た理由の一つ。
中へ入ると、アリスはまだ眠っていた。

「・・・・めんどくせぇ奴だな、こいつも」

アリスを見下ろして、そう呟く。

「早く目を覚ませよ・・・・あいつが元に戻るには、テメェも必要なんだからよ」

聞こえていないのは、彼にも分かっているのだろうが、それだけに言い残し部屋の入口へと向かう。

「・・・ずま・・・・・」

「・・・・」

呼ばれたような気がして、アリスを見るが、まだ目を覚ましてい

なかった。
おそらく寝言。だが、一真は笑みを浮かべて、部屋から出ていった。
次に向かうのは、千歳の眠っている病室。
(たくっ・・・あいつじゃねぇんだから、俺様がここまでする理由はねぇんだが。まぁ、あいつの一部だからな。考えや行動が、あいつと似てくるんだろうな)
そんなことを考えているうちに、もう千歳のいる病室の前。
千歳の病室とアリスの病室は、あまり離れていないため、秒単位で移動ができる。
「・・・・」
しばらく無言で病室の入り口を眺めた後、ゆっくりと扉を開けた。
殺風景の病室。
無言のまま病室へ入り、ベッドの傍の椅子に座った。
「俺様としては、テメェが落とされたのは予想外だったな。
それほど神無のヤロウが強いのか、それとも相手が神無で無意識に手を抜いたのか・・・まぁ、テメェが目を覚まさねぇと、分からねぇんだが」
“一真”は立ち上がり、眠っている千歳の髪に手を伸ばす。
いつもはツインテールになっている髪。それを、優しく撫でる。
「・・・・」
端から見れば無表情だが、ほんの少し笑っている。

そんな表情を、“一真”は浮かべていた。

コンコン

そんな音が扉の方から聞こえた後、次の客が病室へ入ってきた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「えっと、アンナさん」

「この辺りでいいですわね」

「私達だけを呼び出して、どうしたんだ？」

一時的にお開きとなったパーティー会場から、アンナはなのはとリーズを呼び出していた。

「まず、高町なのは。あなた、過去に一度だけ《昇華（ライズ）》したのでしたわね？」

「あ、はい」

なのはが《昇華》したのは、アルプトラオムでの戦闘の時だけ。あれ以来なのはは《昇華》していない。再び《昇華》する兆しもない。

「でもその一度だけ。で、間違いありませんわね？」

「あ、はい。私も何で《昇華》したのか・・・・」

「一度だけでは、その力があなたに定着しなかった。そういうことになりますわ。
リーズ。話しは、理解できましたわね？」

「彼女が《昇華》したが、一度しか使用していないと言うことだけしか、理解できていないぞ」

当たり前の返答だろう。
あれだけの会話で、これからやろうとしていることを全て理解しろと言うのは、無理な話だ。

「高町なのはのオーラは、オレンジ。つまり、あなたと同じ《美徳》を持っている。
だから、あなたが高町なのはに《美徳》の魔力を彼女に流し込み、きっかけを与えるんですの」

「それ、荒療治すぎないか？」

「問題ありませんわよ。流し込むのは、ほんの少し。きっかけとして、《美徳》の魔力を流し込むだけでので」

当事者のなのはを置いて、話しは勝手に進んでいく。

「あ、あの・・・・私の――――」

意思は、と続けようとしたなのはだったが、

「じゃあ始めますわよ」

その言葉と共に、リーズは《美徳》を解放。

その状態でリーズは、なのはの手を取った。直後、一瞬だけなのはの体をオレンジの光が包むが、それだけ。

「何も変わってないような・・・・」

「そうだろう。私が流し込んだ魔力は、ほんの少しだからな。何も変化ないと感じるのは、当たり前だ」

「ですが、それでいいのですわ。私がしたかったのは、ただのきっかけ作り。

無駄に魔力を流し込み、暴走されても困りますし」

「はぁ・・・・でも、どうして？」

なのはがそう聞くのも無理もない。

この行為に、彼女達にメリットはない。

「どうして？　当たり前でしょう？　あなたには早く、《聖人》として覚醒してもらわなければならないのですから」

「・・・・あっ！」

それを聞いて、なのはは気がついた。

現状で戦力として戦えるのは、バットを振り回しているリリンを含めても１１人。

こんな状況でもしも総攻撃を受けたら、確実に数で負けてしまう。

そこで、少しでも戦力を増やそうと考えたアンナは、一度だけ《

昇華》したことのあるなのはに目をつけたのだ。

「というわけですの。一応言っておきますが、あなたがいつ《聖人》として覚醒するかは、私達にもわかりませんの。ですが、あなたの中にある《美徳》を忘れないこと。いいですわね？」

そう言い残し、なのはをそこに残して二人は去っていた。

「珍しいな、隊長」

「何がですの？」

「自分に特がないのに――――」

「無いわけじゃありませんわよ。今の私達には、彼女に言ったように、戦力というメリットがあるりますのよ。それをみすみす見逃す、私ではありませんわ！」

「・・・・」

それを聞いたリーズは、そんなことを堂々と言われても、などと思った。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「千歳ぇ～～～！」

「静かにね、千治さん」

入ってきたのは騒ぐ千治と、それを注意する千里。
千歳の両親の登場だ。

「・・・・・」

「・・・・・」

「ボウズ！　何でテメェが、ここにいるんじゃい！」

「騒がしいのが来たな・・・・・」

「千治さん。帰ったら、分かってる？」

「・・・・・・・・・はい」

千里の怖い説教が行われることが、今確定。
だが、それにめげないで千治は“一真”を睨む。

「クソ親父とあんたか・・・・・」

今の一言で、二人は一真の様子が、いつもと違うことに気がついた。
一真なら、千里のことを千里さんとは呼ぶが、あんたとは呼ばない。

「誰じゃ、お前？」

「俺様か？　見ての通りだろ。神童一真だ」

「違うわ・・・・一真君は、俺様とは言わないもの」

千里の一言に驚いたような顔をしたが、すぐに表情を笑みに変える。

その笑みは、眠っている千歳達に向けていた物ではなく、なのは達に向けていた不適な笑み。

これには、二人も警戒する。

「くくくく・・・・そりゃ、言わねぇよ。さて、クソオヤジの質問だが、俺様がここにいんのは見舞いだ。ただそれだけ」

「ふん。俺は、どこの馬の骨とも分からん奴に、可愛い可愛い千歳の見舞いを許した覚えはないわい！」

「・・・・そうかよ」

それだけ言うと、“一真”は立ち上がり歩き始めた。この部屋から立ち去るために。

そして扉を開けようとした時だった。“一真”が扉に触れるより先に、扉が勝手に開いた。

病室の外にいた、老人によって。

「・・・・」

「ほぅ・・・・お前さんもおったのか」

「誰だ、あんた？」

「婆さん、来たのか？」

「孫の見舞いに来て、何か問題でもあるのか？」

「孫？」

少し考えた“一真”だったが、すぐに答えに辿り着いた。

「千歳の婆さんか。まぁ、そんなことよりそこを退けてくれねぇか。俺様は帰――――」

「ちょっと待ちなさいな」

「何だ？」

「お前さんと話をしたいのだがのう・・・・」

「俺様と？」

「いや、正確にはお前さんの中で眠っておる、お前さんとじゃな」

――――――――――――――――

「ここでいいかの」

“一真”と千歳の祖母は、病院の中庭に来ていた。

「で、話って何だ？」

「じゃから、お前さんの中で眠っておるお前さんと話をしたいと言ったろう？」
「・・・・わかった」
“一真”が目を閉じて数秒。
再び目を開くと、その瞳は全くの別人のような物をしていた。
つまり、“一真”から一真に戻ったというわけだ。
「あれ・・・・ここは」
「病院の中庭じゃよ」
「え？」
突然話しかけられ、驚く。
知らない人物から、いきなり話しかけられたらそうなるのは、当たり前だ。
「えっと、あなたは・・・・」
「楠木千那（センナ）。それが、ワシの名前じゃ」
（楠木・・・・どこかで聞いたような・・・・）
千那は名を名乗ると、真っ直ぐ一真の瞳を見続ける。
「なるほどのう。今のお前さんは、お前さんであるがお前さんではない・・・・」
「僕は僕ですよ」

「そうなんじゃが・・・ぬぅ・・・何と言ったらいいのかのう。何かが抜け落ちている、と言ったら正解かの？」

「！？」

「やはり」

会って数分。

それだけで、一真は今の自分の状況を言い当てられた。

「どうして分かったのか、という顔じゃな。理由は・・・まぁ、何となくじゃな」

「はぁ・・・それで、お話とは？」

「おぉ、そうじゃった。話というよりも、お前さんに伝えなければならんことじゃが」

千那は表情を変えて、一真に伝えなければならないことを、話始めた。

「近い将来、お前さんは大切な“もの”を失う」

「近い将来・・・ですか」

「うん。じゃが、それがいつで、その大切な“もの”が何なのか。そこまでは、ワシにも分からんがのう」

そこまで言って、千那の表情は元に戻っていた。

そして息を吐いて、再び口を開く。

「これを、今のお前さんに言っていいのか分からんが、一応でも覚えておくとよいよ」

「あ、はい。でも、何でそんなことが・・・・」

「魔法じゃよ、魔法」

「魔法、ですか・・・・」

頷いた千那は、ゆっくりと立ち上がる。

「それじゃ、ワシは孫の見舞いに行く。またの」

「はい。ありがとうございました」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「・・・・」

楠木家の庭。

そこに千歳は立っていた。

「お母さーん！　お父さーん！」

両親を呼ぶが、返事は帰ってこない。それどころか、自分以外の人間の気配がない。

「誰もいないの？」

不安になってきた千歳が、もう一度叫ぼうとした。が、いきなり声をかけられた。

「当たり前だろ。ここはあたしらの中なんだから。いたら、ゾッとする」

現れたのはもう一人の千歳。だが目はつり上がり、言葉遣いは真反対。

俗に言う、バトルモードの千歳である。

一瞬誰と思ったが、すぐに理解した。

「こうやって、お互いを認識すのは初めてだな」

「う、うん・・・・でも、どうしてこんなところに？」

「それは・・・・あいつが説明してくれるだろ」

二人が向いた先には、紫色の瞳に金色の髪をした、三人目の千歳が立っていた。

「ふふふ・・・・初めまして二人とも」

「誰？」

「こいつはあたしらの・・・・いや、お前の《罪》で作られた三人目の“楠木千歳”だ」

「そ。よろしくね～」

笑顔で手を振る“千歳”。知らない人物がこの笑顔を見たならば、いつもの千歳と同じ笑顔だと言うだろう。

しかし、笑顔の質は全く。千歳の笑みは『無邪気』。“千歳”の笑みは『邪気』がある。

「こうやって、同じ顔が三人いると変な感じだな」

「だね～」

「・・・・」

それは本人だからだ、と言いそうになったが、千歳は飲み込んだ。

「で、あたし達をここに連れてきたのお前だろ？」

「うん。そうだよ～」

「何で私たちを？」

「それはもちろん、千歳に私たちの力を渡すため？」

「いや、疑問形で言われても・・・・って、私に？」

「うん♪」

“千歳”はゆっくりと千歳に近づき、指を突きつける。

「気づいてる？」

「え？」

「あんたは、一度も自分の力で戦ってないってこと」

「そんなこと――――」

「ない？　あるんだよ」

“千歳”は千歳の言葉を遮り、そのまま話を続けた。

「私達はあんたであって、あんたでない。それは、あんたにだって分かるよね？」

一真は全て千歳だと、いつも言っているが実は違う。

千歳とバトルモードの千歳と“千歳”。

どれも千歳だが、それは千歳という存在を構成している、一部でしかない。

だから三人とも千歳だが、全くの別人というわけだ。

それはここにいる三人が、理解している当たり前のことだった。

「戦闘の時は大抵、バトルモードって呼ばれてるあの娘。《罪》を解放したら、三分の一はあんたでも残りは私とあの娘の力。

１００％あんたの力っていうのは、あんたの中には１つもないんだよ」

「・・・・」

“千歳”の言う通りだった。

その通りすぎて、千歳も言い返すことができない。

「言いたいことは分かった。けどよ、どうやって千歳に力を渡すんだ？」

「簡単。千歳には、これから私達と戦ってもらうから」

「え！？」

完全に予想外だった言葉。

「む、無理だよ！　私には戦える力はないし、それに二人を一度になんて・・・・」

「聞くけど、自分の力で一真の支えになりたくないの？　一真は多分、千歳のことを支えと思ってるよ。それに答えられる？」

「・・・・・・・・」

再び黙ってしまい、俯いてしまう千歳。

そこへ“千歳”はさらに追い討ちをかける。

「無理だよね。自分自身の力じゃないんだから。アリスに、一真の隣取られるかもね～。

千歳はそれでいいなら私は何も言わないけど、そうなったら私は許さないよ。

一真は、私の物なんだからね！」

「・・・・」

「おい。言い過ぎだ――――」

「言い過ぎじゃないよ。本当のことだからね～」

千歳なら、おそらくここまで追い討ちはかけたりしない。

だが、彼女は《罪》で作られた“千歳”。千歳とは全く違う。が、

“千歳”は千歳。

千歳の性格はよく知っていた。

「それに、千歳ならね――――」

「やるよ・・・二人に勝って、自分の力で一真を支える！

一真の隣で、私が守る！」

「ほらね～。予想通り♪」

「本当かよ・・・・」

ジト目で“千歳”を睨むが、完全に無視。

「でも、さっきも言ったけど私二人同時は、絶対に無理だよ」

「大丈夫大丈夫」

そう言いながら、“千歳”はバトルモードの千歳へ近づいていく。

「ちょっと、ごめんね～」

「え？　何を――――」

言い終える前に、“千歳”はバトルモードの千歳の額に触れる。

するとバトルモードの千歳は光となって消え、“千歳”に吸い込まれた。と、同時に“千歳”の姿が変わる。
瞳は紫と黒のオッドアイ、髪の毛は黒のメッシュが入った。

「「よし」」

手を開いたり閉じたりして、体の感覚を確かめる。
問題はなかったらしく、顔を上げて千歳を見据える。

「「これなら、二人同時だけど一人。問題ないよね？」」

「なるほど・・・・」

同じ声なのだが、バトルモードと“千歳”の声がダブる。
フュ○ジョンという言葉が、千歳の脳裏を過ったがすぐに消した。

「考えたね」

“千歳”はマモンを、日本刀に変えて構える。

「「じゃあ、始めようか。千歳」」

千歳も同じように日本刀に変え、マモンを構えた。

「うん」

駆け出す二人。
こうして千歳ｖｓ“千歳”＆ａｍｐ；千歳が始まった。

《一真の部屋》

一真「くははははは！　戻ったぜ！　戻ってきたぜぇ！　俺、参上！」

千歳「イェーイ♪」

アリス「えーと、読者の皆さん。何故一真が元通りなのか、理由が聞きたい人もいるでしょう。理由は簡単。前回同様、薬のおかげで『一時的』に戻ってるんです」

なのは「で、千歳ちゃんも一真君の記憶が戻ってるから、テンションが高いんだよね」

千里「ツッコミ・・・絶対に追い付かないわよね」

アリス「だから、今回はツッコミ役を呼んでるんだよ。薄さで言えば世界一。いても全く気づかれない、可哀想なツッコミ役。風切忍です！」

・・・・・・・

なのは「あれ？　出てこないね」

千里「もしかして、来てない？」

アリス「来てるは――――」

忍「さっきから隣にいるんですけどぉぉぉ！　つか、連れてきたのお前だろ桜ノ宮！」

アリス「・・・・・・・・あぁ！　そうだった、そうだった。ごめんね」

忍「それに、僕の紹介文おかしくない！？　絶対にバカにしてるよね！」

千里「うるさいわよ、ウスィの！」

忍「お前に言われたくないよ！」

一真「やかましい！」

忍「ごふぅっ！」

千歳「黙らないと、切り落とすよ♪」

忍「どの部位をですか！？」

なのは「このままじゃ進まないから・・・・いいよね」

アリス「な、何が？」

なのは「みんな、静かにしないと」

ジャキッ

なのは「ＳＬＢで消し飛ばすよ？」

一・千・里・忍

『すみませんでしたぁ！』

なのは「じゃ、お返事コーナーだね♪」

アリス「な、なのは・・・・」

バルディッシュさんへ

一真「んなもん、今の俺に効くかぁぁぁぁ！
爆・流・破ぁ！」

なのは「うわぁ・・・・」

アリス「絶好調すぎる・・・・」

一真「くくくく！　わはははは！」

千歳「一真だ・・・一真が帰ってきたぁ！」

忍「楠木がおかしいぞ、おい」

千里「まぁ今まで、一真さん記憶喪失だったから・・・でもあれは」

な・ア・忍・里
『ヤバイ・・・・』

月光閃火さんへ

忍「月（記憶喪失時）とスッポン（記憶アリ）か」

千歳「違うよ！」

アリス「千歳が、一真を・・・・」

千歳「月（真人間）とスッポン（ダメ人間）だよ！」

一真「ほう・・・千歳ぇ。今日は、特別コースだぁ」

千歳「いやぁぁぁぁ！」

千里「記憶がある時の一真さんが優しいって、どこが？」

なのは「うーん・・・然り気無くだからね。どこがって言われたら、答えにくいね」

千里「ふぅーん」

灰色の野良猫さんへ

アリス「そうなんだよね。一真は神無さん絡みだと、一気に脆くなっちゃうから・・・・」

なのは「昔からなの？」

アリス「うん」

千里「まったくそうは見えないんだけど、私の目が悪いのかしら？」

忍「いや、大丈夫だと思うぞ」

千歳「も、もう、らめぇ・・・・・」

一真「拒否する！」

アリス「あははは・・・・」

なのは「えっと、ソラ君達は次回登場になります。楽しみにしておいてください」

鴨川秘さんへ

千歳「はぁ・・・・はぁ・・・・・祇帰さん、ありがとう！」

アリス「ありがとうって・・・・・」

一真「さて。これを使うか」

なのは「みんな！」

一真以外

『了解！』

一真「んだよ？」

忍「使わせるかぁぁ！」

一真「近づいたら、お前らに当てるぞ」

千里「どうしよう・・・・」

千歳「大丈夫だよ。一真、止めないと茸を口中に転送するよ♪」

一真「そうなったら、また記憶喪失になるかもなぁ」

千歳「ごめんなさい！」

アリス「千歳が・・・・くっ、ごめん一真！」

一真「茸はぁぁぁぁ！」

バタッ

アリス「ふぅ・・・・」

麗×零

千里「千歳さん。効果的な、人の殴りかた教えてほしいんですけど」

千歳「そうだな・・・・強いて言うなら、相手が油断してるときだな。例えば、一真！」

一真「んごほぉっ！」

千歳「名前を呼ばれて、返事してるときだな。ちなみに、狙うのは腹だ。それも至近距離で」

忍「そのためだけに神童・・・・哀れだ」

アリス「まぁ、一番殴りやすいからね」

なのは「でも・・・・」

な・ア・忍
『哀れだ・・・・』

ＮＫさんへ

なのは「一真君」

一真「ん？」

なのは「一真君は千里さんに勝てる？」

一真「無理。昔に説教されてな、それ以来トラウマでな・・・・」

なのは「そうなんだ」

千里「せっかく教えてもらったけど、私には無理だったなぁ」

アリス「やっぱりあれは、楠木家の女の人だけが――――」

千歳「へぇ・・・・アリスちゃん、ちょっとお話ししようか？」

アリス「その笑顔嫌ぁぁぁ！」

なのは「アリスちゃん・・・・」

忍「あの笑顔は、確かに怖いな」

一真「ラン！　あれは、カッコイイじゃないぞ！
実際に体験してみろ！　恐怖が刻まれる！」

忍「らしいな・・・・」

來人さんへ

一真「ジン。テメェも、千里さんの説教受けてみろ！　つか、受けろや！」

なのは「何でそう、記憶がなくてもあっても、説教をすすめるのかな？」

アリス「仲間がほしいんじゃないかな？　怒られたって――――」

一真「あぁ？」

アリス「ごめんなさい！」

忍「楠木は怒られたことあるのか？」

千歳「あるよ・・・・すっごく怖い」

千里「あれは、見てるほうはいいけど、体験したくないわね」

なのは「だよね」

一真「ぜってぇに、あいつに体験させてやる！」

アリス「何か一真が熱くなってるけど、ほっといて次回予告♪」

なのは「始まった千歳ちゃんｖｓ“千歳”ちゃん。
その戦いは、最初から千歳ちゃんの劣勢で始まった」

一真「そのころ別行動を取っていたクロノは、とあるロストロギアと接触していた」

千・ア「「次回、魔法少女リリカルなのは～七つの大罪～」」

里・忍「「【力】」」

一同『次回へ、スタンバイレディ！』

逃げた記憶・後編（後書き）

えーと、今回ツッコミがあると思うかもしれませんが、できれば無しでお願いします。

それと次回の後書きのゲストは、『魔法少年の物語～奇跡の神子～』一行です。

それでは次回。楽しみにしていてください。

力

「「はぁっ！」」

「ぐっ」

“千歳”の一撃に、千歳は簡単に吹き飛ぶ。
マモンでギリギリ防いだため外傷は無いが、衝撃で受けたダメージはある。

「「紅之太刀壱式・煉刃！」」

放たれ刃は、動けない千歳へ一直線に進む。
だが千歳も、黙ってやられるわけにはいかない。

「九頭鬼流一乃太刀・轟魔！」

魔力の込められた、一撃。
タイミングよく振り下ろし、向かってくる刃を叩き落とす。

「「いちいちそんなことをしてたんじゃ、対処できないよ～」」

「えっ！？」

声が聞こえてきたのは、自分の後ろから。
“千歳”の気配に、千歳は気づくことが出来なかった。
後ろに回っていた“千歳”は、マモンを振り下ろしている最中。
それを見た千歳は、防ごうとしないで、一気に“千歳”の懐へ潜り込んだ。

「てりやぁ！」

いつの間にかマモンは、日本刀から鉄槌と変わっていた。
それを“千歳”へ叩きつける。

（これなら・・・・）

そこで千歳は気がついた。
鉄槌は当たっておらず、“千歳”が掴んで止めていた。

「「ザンネ～ン♪」」

千歳をマモンごと持ち上げて、投げ飛ばす。それに一瞬で追い付き、籠手にマモンを装着。

「「うらぁっ！」」

「っ！！」

殴られた千歳は、まっ逆さまに落下していく。
頭から落下してく千歳を、“千歳”は追いかける。

「ぐっ・・・・」

態勢を直しながら、魔力をマモンに込める。

（イメージは・・・・出来た！　後は振り抜くだけ！）

魔力で足場を作り、その上に下りた千歳は、日本刀に戻したマモ

ンを振り抜いた。

「月牙・・・・天衝ぉ！」

「「ちょ、それ、版権――――」」

言い終える前に直撃。

“千歳”のいた場所を、煙が漂う。

「「げほっげほっ・・・・危ない技を・・・・・」」

その声は、煙の中から聞こえてきた。

煙が晴れ、“千歳”の姿が見えてくる。

全くの無傷。

「「って、いない！？」」

千歳がいたはずの場所に、その姿はない。

「・・・・ち・轟魔！」

「「へぇ・・・・・」」

すぐそこまでマモンは迫っているが、“千歳”は余裕の顔でそれを眺めている。

「「それも届かないんだなぁ」」

二人しかいない空間に響く金属音。

千歳の一撃は、あっさりと受け止められていた。

それを押し返して、自分も飛び上がる。

「「ふっ」」

下から上へ切り上げる。
これを防ごうとしたが、弾き上げられた。
下りてくる刃。それに間に合わず、千歳は切られた。

「ぐっ・・・・かぁっ」

いきなり受けた、腹への衝撃。そのまま一気に加速して、地面に叩きつけられた。

「「・・・・うーん。ダメだったのかな?」」

千歳を吹き飛ばした、槍の姿をしているマモンで肩を叩きながら、彼女のいる場所を見下ろす。

「「んなわけねぇだろうが。あいつのこと、分かっててこんなこと始めたんだろ?」」

表に出てきたのは、バトルモードの千歳。
“千歳”の中で、今の戦いをずっと見ていた。

「「ま、そうなんだけどね~」」

“千歳”がそこまで言ったところで、千歳の埋まっている瓦礫の山が爆発した。

「もっかい・・・・月牙ぁ――――」

「「紅之太刀壱式・煉刃！」」

「天衝ぉ！」

ほぼ同時に放たれた、二つの魔力の刃。
それはぶつかることなくすれ違い、目標へと進んでいく。

「はぁっ！」

「「ふんっ」」

お互いに相手の技を叩き落とすと、千歳は飛び上がり、“千歳”は急降下する。

「てやぁっ！」

「「はっ！」」

交錯する二本の刀。
お互いがお互いを弾き飛ばし、再び近づく。
千歳がマモンを持っている方の腕を突き出せば、“千歳”はそれを弾き軌道を変える。
“千歳”がマモンを振り抜けば、千歳はそれ刀身を立て、ギリギリで防ぐ。
一瞬でも気を抜けば、その時点でやられる攻防が続く。

「このぉっ」

「「っ・・・・」」

その攻防、素人が見ればほぼ互角と言うかもしれない。だが、それは間違いだ。
千歳はほとんど攻めてはいない。言い換えれば、ほとんど防御に徹している。
徹しているというよりも、防御しかできない。
理由は簡単。攻めに転じたら、間違いなくこちらが崩されるとわかっているからだ。

「「攻撃しないと、勝てな――――」」

「うるさい！」

千歳は待っている。攻撃が出来る一瞬が来ることをを。
しかし、それはホンの一瞬。千歳がそれを、見極めることが出来るかどうか、本人でも分からない。
だから、集中して待っている。

「「ふぅーん・・・・」」

直後“千歳”の動きが変わった。
攻撃や武器が変わったのではなく、スピードが変わった。

「え！？」

ゆっくりと早くなっていく“千歳”の攻撃。
それに千歳はだんだん追い付けなくなり、防御を崩され始めた。

「ぐ・・・・」

「「ほらほら。急がないと間に合わないよ～？」」

“千歳”のその言葉から、ちょうど十度打ち合った時点で、千歳は追い付けなくなった。

「「ふっ」」

「ぐぅっ・・・・」

ギリギリ間に合った防御。そのまま、吹き飛ばされた。

「はぁ・・・はぁ・・・・」

間に合わなければ、頭と体が切り離されていた。

「「やっぱり、止～めた」」

「・・・・？」

「「何がって顔してるね～。それは、あんたに力を渡すのだよ」」

「どういうこと？」

「「私は、《強欲》って罪そのもの。つまりね、あんたを見てて、あんたの体、楠木千歳という存在・・・そして、神童一真が欲しくなったの」」

突然の心変わりの告白。

千歳は驚愕の色を隠せない。

「何で・・・・」

「「《強欲》だから。それだけ」」

至極簡単な理由だった。だけど、彼女にとってはそれだけで十分。

「「だから、早く負けて。ていうか、負けろ！」」

初めてオーラを纏い、魔力の足場を蹴る。

「いっ・・・・」

さっきまでとは違い、千歳の防御は一撃で崩される。
このままでは、戻ってくる刀を防げないと感じた千歳は、

「マモン！」

日本刀から槍へと変形させ、その柄で受け止めた。

「「へぇ」」

受け止めた刀を、払いのけると槍の矛先を“千歳”へ向ける。

「『突き抜ける槍』！」

槍を突き出すことにより、撃ち出される魔力の槍。　これの特徴は、異常なまでに特化された貫通力。
それを知らないものであれば防ぐなり、弾くなりしたかもしれない。

だが相手は“千歳”。
“千歳”は千歳ではない。だが“千歳”は千歳である。
つまり、この技を知らないわけではないだ。
しゃがんで避けた“千歳”は、その低い体勢のまま再び駆ける。
一瞬遅れて、千歳も駆け始めた。

「・・・・い」

「「ん？」」

「あげないって言ったの！」

二人はもう一度刃を交える。

「私も、楠木千歳って存在も・・・・それに、一真も！
私、子供だから我が儘で、欲張りなんだよ！
だからね、あなたから全部もらう！
自分を守る力、みんなを・・・・大切な人を守る力を、全部！」

それを聞いて、“千歳”は笑みを浮かべた。
嫌らしく、嬉しそうで、楽しそうな笑みを。

「「いいね～、その《強欲》。じゃあ、改めて始めようか？　奪い合いをさ！」」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「どこ行っちゃったんだろ、なのは？」

フェイトは、突然部屋からいなくなったなのはを探して、屋敷の中を歩いていた。

「ここでもな――――」

「フェイトちゃん」

「なのは。どこにいたの？　突然いなくなっちゃうから、探したんだよ？」

「ご、ごめん。ちょっと部屋にね・・・・」

嘘だ。

本当はさっきまで、アンナとリーズと一緒にいた。

「そうなんだ」

「うん。ごめんね、フェイトちゃん」

「大丈夫だよ。それより、戻ろ。はやて達も心配してたよ」

「そっか。それじゃ早く戻ろうか」

パーティー会場となっている大広間へ帰るため、二人が足を進めた時だった。

〔フェイトちゃん、なのはちゃん！〕

突然、フェイトの携帯が鳴った。
ディスプレイには、義姉のエイミィの名が。
「エイミィ？　どうし――――」
【フェイトちゃん！　クロノ君が・・・・クロノ君が・・・・】
「落ち着いて、エイミィ。クロノがどうかしたの？」
〔クロノ君が・・・・行方不明になったって！〕
驚愕の知らせに、フェイトは思考が停止した。
「フェイトちゃん？　クロノ君がどうしたの？」
怪訝な顔をしたなのはがそう聞くが、今のフェイトの耳には、全く届いていない。
「ど、いう・・・・こと？」
「さっき、一緒に行っている局員の人から連絡があって、情報を集めに行った次元世界で・・・・」
「そんな・・・・」
◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

それは数時間前のこと。
第１６９管理外世界アーカム。
クロノは途中見つけた、管理局のものらしき次元航行艦を追って、
そこへ来ていた。

「何でこんな辺境に？」

モニターに写る、アーカムの景色。
崩れた遺跡と、暗い空。そして、葉のない林。
完全にこの世界は、亡んでいた。

「魔力反応は？」

「待ってください・・・あ、ありました。数は二つ」

「二つか・・・よし、僕が行く」

「ですが！」

「大丈夫だ。すぐに戻る」

その言葉が、彼らの聞いたクロノの最後の言葉だった。
アーカムに降りたクロノは、さっき見つけた二つの魔力反応のあった場所へ、向かって歩いていた。

「何もないな・・・」

それがアーカムを歩いたら、クロノの感想だった。

「ここか・・・魔力反応があったのは」

クロノが足を止めたのは、遺跡の中心にある、巨大な城の入り口の前。

「よし・・・・」

踏み込んだその城。そこは闇の支配する城。

クロノは感じていた。ここには、得体の知れない何かがあることを。

（デバイスのない今、ここに来たのは失敗だったか？）

そんなことを考えてはいるが、クロノの歩みは止まらない。

いや、止められないのかもしれない。

何かに導かれるように、ゆっくりと城の奥へ奥へ進んでいく。

「気持ち悪いな。吐きそうだ」

誰も側にいない。だから、気を紛らせるための独り言。

その独り言は響き、城の闇に吸い込まれていく。

「どこだ？」

ここで魔力反応を確認しただけで、詳しい場所は分からない。

（デュランダルがあれば、分かったかも知れないが）

導かれるようにして辿り着いたのは、いかにも何かいると言っているような、巨大な扉。

額から吹き出る脂汗の量も、気持ち悪さもここが一番だった。

「ここが、一番奥らしいな・・・・」

「先を超されましたか」

「そのようですね、バルディッシュ」

後ろから聞こえてきた、二つの声。
振り向くと、なのはとフェイトが立っていた。
だが、クロノはすぐに気がついた。二人がなのはとフェイトではなく、全くの別人。
ミッドと本局を襲った、例のアンノウンだと理解していた。

（マズイな・・・・）

「ここに何があってきたんだ？」

「それは私たちの質問でもあります」

「く・・・魔力反応を追って来た。それだけだ」

今のクロノの言葉には、一つも嘘はない。
だが、彼女たちは無表情。疑われているのか、そうでないのか。
全く読めない。

「そうですか。分かりました」

なのはの姿をしたそれは、アクセルモードのレイジングハートを、
クロノへと向ける。

「では、死んでください。クロノ・ハラオウン。アクセルシューター」

「フォトンランサー。ゲットセット」

見覚えのある魔法が、着々と準備されていく。

「くっ・・・・」

「シュート」

「ファイア」

「そぉぉぉぉ！」

二種類の魔力弾が、クロノに直撃するまで、残り十数センチというところ。

そこで変化の無かったこの環境が、自ら変化を起こした。

「えっ！？」

クロノが背をつけていた巨大な扉が、勝手に開き始めたのだ。

背をつけていたクロノは、髪を引かれるように、後ろへ倒れていく。

二つの魔法は、倒れていくクロノの上を通りすぎて行った。

しかし、今のクロノはそんなことは、どうでもよかった。

「何だ・・・・これは・・・・・？」

巨大な扉の中の風景。

それは、亡んだ世界の遺跡の中とは思えないくらい、綺麗に残っていた。
この部屋だけ、時間から切り離されたかのように。

「祭壇？　それに、何で灯りが？」

「やはり、ここでしたか」

「どういうことだ？」

「あなたが知る必要は、全くと言っていいほどありません」

「今度こそ、終わりか・・・・」

レイジングハートの先の魔力の塊は、だんだん大きさを増していく。

「ディバインバスター！」

放たれた砲撃。
今度こそと思われたが、今度は何かに阻まれた。
ソニックムーブで、クロノの後ろに回っていたフェイトらしき者は、死角からザンバーフォームのバルディッシュを振るうが、

「！？」

ガキンッという音が聞こえ、魔力刃を見ると、それもクロノに届いてはいなかった。

「何故？」

クロノが魔法を使っていないことは、二人にもわかっていた。
だが、クロノには何も届かない。まるで、クロノを守っているかのように。
クロノ自身も、何が起きているのか、全く理解は出来ていない。

―・・・ケタ―

「え？」

クロノの頭の中に、いきなり聞こえてきた謎の声。
―見ツケタ・・・・我ガヨリシロ―

「誰だ！」

―我ヲ受ケ入レヨ、我が依リ代ロ―

その声の直後、祭壇から迸る光。その中から、一冊の漆黒の本が現れた。

「本・・・・」

「ネクロノミコン」

聞いたことのない名前に首をかしげたが、すぐに立ち上がって走り出す。
このままここにいたら危険だ、とクロノ頭の中でアラームが、大音量で鳴り響いている。
もう少しで、この部屋から出られる。そう思ったときだった。
ゴンという音と共に、額に痛みが走る。

「な、何だ？　壁？」

手で確かめるが、確かにそこには見えない壁がある。
そんなことをしている間に、ネクロノミコンと呼ばれたその本は、クロノの後ろまで迫っていた。

―我ヲ読メ・・・・ソシテ、我ヲ受ケ入レヨ―

「嫌だ・・・・・」

勝手に動き始める右手。
ゆっくりと開いたネクロノミコンへ近づき、触れた。

「がぁっ！」

（頭に・・・僕の中に・・・・何かが・・・・ぐあぁ！）

そこでクロノ意識はなくなった。

―――――――――――――――

光が再び迸る。
クロノのいた場所を中心に、漆黒の光が部屋の中を包み込んだ。

「最悪の状況ですね」

光が収まり、立っていたクロノは既に、クロノではなかった。

おそらく、ネクロノミコンに支配されたのだろう。

《・・・・》

漆黒のローブを被っているため、彼の表情は伺えない。

《フム・・・悪くはないな》

体の感覚を確かめた直後、五角形の中に目の模様のある魔法陣らしきものが、彼の足元に現れた。

「行かせません」

全く同時に放たれたディバインバスターと、サンダースマッシャー。

だがそれは、彼が腕を振るうだけで、跡形もなくかき消えた。

首を動かして二人を見るが、ただそれだけ。

興味を示すことなく、彼は消えた。

この数分後、エイミィヘクロノ行方不明の連絡があった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「「うぉおおぉお！！」」

マモンの刀身から伸びた、巨大な魔力刃。

それを左から右へ、一気に振り抜かれるそれは、途中で何かに当たり止まった。

「っ・・・・」

その止まった位置には、

「のぉぉぉ！」

巨大な魔力刃を、一本の大剣だけで受け止めている、小柄な影があった。。

「「吹き飛べ！」」

魔力刃が弾ける。

“千歳”の言った通り、触れていた千歳は吹き飛んだ。

「きゃあ！」

飛んでいく千歳に追い討ちをかけるように、もう一度魔力刃を構成。

今度は上から下へ、マモンを振るう。

「マモン！」

日本刀の形をしていたマモンは、形を変えて千歳を包み込む。

直後、魔力刃が直撃した。

「ぐうっ・・・・」

中から、千歳の耐えるような声が聞こえてきた。

「「面白いことするね～」」

そう思っているのは“千歳”だけで、千歳は思ってはない。
あの防御方、千歳に対して直接的なダメージはないが、激しい衝撃が小さな体を襲っていた。
マモンの繭が消え、中から千歳が現れる。傷は増えていないが、体はボロボロだった。

「はぁ・・・はぁ・・・・」

堪えられない痛みでないが、痛みは痛み。
確実に千歳を蝕んでいる。

「「ふんっ！」」

この短時間で距離を詰めていた“千歳”は、千歳へ思いっきり斬りかかる。
それも防いだ千歳は、

「マモン！」

再び変形させる。
千歳がマモンを、何に変形させたのかというと。

「「へ・・・・わっ！」」

自分の顔へ向かって伸びてきた、それをギリギリでかわした。

「チッ・・・・」

「「チッって、あんたねぇ！」」

“千歳”の顔を襲ったのは、大鎌へ変形したマモンの切っ先。
それに気を取られていた“千歳”は、自分の腕が上がっていることに、気づくことに遅れた。

「ここっ！」

一瞬の隙で振り抜かれた大鎌。
それが今まで届かなかった一撃を、“千歳”に届けることに成功した。

「「ぐっ・・・・」」

「次っ！」

飛び上がった千歳は、大鎌を振り下ろすが、二撃目がそう簡単に届くはずがない。

「「調子に乗んなよ、ガキが」」

口調が変わった。
バトルモードの意識が、表面に出てきたのだ。

「なっ！？」

大鎌が届く寸前、“千歳”はマモンを一振りした。
その一振りで。たった一振りで千歳と“千歳”の距離は、一気に開いた。
簡単に言えば、千歳がまた吹き飛ばされたということだ。
千歳はキョトンとしていた。

何が起こったか、彼女にも理解できていない。

「「おらっ！」」

「ぐふっ」

峰打ちで千歳の腹を叩き、彼女を打ち上げる。

“千歳”も飛び上がり、蹴る、殴る、斬る。

“千歳”により暴力の蹂躙は続く。

「「落ちろ！」」

「ごっ・・・・つか、まえた・・・・」

「「っ・・・・離せ！」」

「拒否！」

痛みで顔を歪めながら、千歳は笑う。

落ち始めていた千歳は、“千歳”の腕を掴むことで落下しないですんだ。

「うぉぉぉ！」

千歳の伸ばした腕は、“千歳”の顔へ吸い込まれていく。

「「いい加減に――――」」

「落ちろ！」

上下は入れ替わり、もう一度千歳が殴り付けた。

「「ぎっ」」

落下を始めた“千歳”。　それに向けて、大剣と化したマモンの切っ先を向ける。

「貫け！」

さっき“千歳”がやったのことを真似して、魔力刃を伸ばした。真っ直ぐ伸びていく刃が“千歳”の体を、貫こうとした直前で、

「「・・・轟魔！」」

“千歳”がマモンの刃を、向かってきた魔力刃と交わらせた。すると、魔力刃はバリンとガラスが割れるように砕けた。

「ウソ・・・・」

「「ウソじゃねぇんだよ、千歳。現実だ」」

肩を上下させて呼吸をする千歳に対して、“千歳”は奪い合いを始めた時と、ほとんど変わらない。

この奪い合いは、最初から差があった。ありすぎた。

どれだけ千歳が頑張ろうと、埋まることのない差が。

千歳にもそれが分かっていた。分かっていたけど、千歳は、“千歳”に立ち向かわなければならない。

「はぁ・・・・はぁ・・・・はぁ・・・・マモン！」

大剣から槍へ変形。
左手に持ったマモンの柄から、刃へと流れていく。
「『降り注ぐ槍！』」

何度も何度も槍を持っている左腕を、突き出して引いてを繰り返す。
繰り返す度に、地面や楠木家に穴が開いていく。
だが、一ヶ所だけ無傷な地面があった。“千歳”の立っている場所だ。

「「甘い！」」

一度跳び上がっただけで、千歳の所まで辿り着く。

「「甘すぎだ」」

“千歳”の両手には、一本ずつ棍棒が握られていた。

「「おらっ」」

「ごっ・・・・」

一撃目で千歳の胸を。
二撃目で横腹んフルスイング。

「ぐふぉっ・・・・」

飛んでいきそうになる千歳の頭を、ガシッと掴むと、視線を真下の地面に向けた。
そして急降下。

痛みで意識が朦朧としている千歳は、何が起きているのか把握出来ていない。

「「ふんっ！」」

持っていた千歳の頭を、その勢いのまま、思いっきり地面へ叩きつけた。

「・・・・」

千歳は動かない。指一つ動かさないで、倒れている。
そして“千歳”は、そんな千歳をただ見下ろしていた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

千歳が“千歳”と、自分の中で戦っている頃の外の世界。
一真は病院からのアリサの家への道を、全力で走っていた。

（急いで帰らないと。なのはさん達、心配してる・・・・ん？）

一真はたまたま、その異変に気がついた。
空に、黒装束の男が立っている。

（何、あれ？）

だが、次の瞬間には消えていた。
それはまるで、見間違えとも思えるように。

（何だったんだ、今の？）

だが考えても答えが出てくるはずもなく、すぐに走り出した。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

《・・・・》

彼は海鳴市の上空に、一人立っていた。

彼のいる場所から町を見れば、おそらく絶景なのかもしれない。

だが彼は、それを無感動で無表情で見下ろしていた。

《この町を使うか・・・・》

彼の目的は、どこの町でもよかった。しかし、彼はここを選んだ。

ここを彼が選んだ理由。それは、この町の風景が、依り代となった男の記憶にあった。ただそれだけの理由。

《・・・・》

ネクロノミコンを拡げ、彼は始める。目的を達成させるために、必要な行為を。

《そうだな・・・・まずは、この魔力の高い人間の集まっている、あそこからだ》

彼が見下ろしているのは、なのは達のいるバニングス邸。
まだまだ今日は終わらない。

《一真の部屋》

千歳「イェーイ♪」

アリス「・・・・」

一真「えっと・・・・どうなさったんですか？」

なのは「千歳ちゃんは今回メインだったし、アリスちゃんは出番無かったから・・・・」

一真「なるほど・・・・そ、そういえば今日もゲストの方が来てくださってるんですよね？」

なのは「そうだよ。今日は『魔法少年の物語～奇跡の神子～』より、ソラ・フォード君とリインフォースさんです」

ソラ「こんにちわ～」

リイン「失礼する」

一真「初めまして。僕の記憶がないからそうなんですけど、お二人とも顔見知りなんですよね？」

ソラ「はい」

リイン「しかし、ここまで性格が違うのか。実際会ってみると、驚

きだな」

アリス「ソォォラァァくぅぅん！」

なのは「切り替え早いね」

アリス「久しぶりだよぉぉ」

ソラ「わ、わ、アリスさん。恥ずかしいですよ！　それに胸が・・・・」

アリス「当ててるんだよ～♪」

千歳「いつもならここで一真が止めるんだけど、今はね・・・・」

リイン「大丈夫だ。アリス、離れろ」

アリス「拒否！」

リイン「そうか・・・・なら、これをプレゼントしよう」

アリス「へ・・・・ヘビィィイヤァァァァ！」

なのは「げ、幻術かぁ～。嫌だね、ヘビは」

一真「えっと・・・・お、お返事コーナです！」

U．Tさんへ

千歳「クラウド・・・・死ぬ？　てか、死ねぇぇ！」

ソラ「千歳ちゃんどうしちゃったんですか？」

リイン「泣いているようだが」

アリス「記憶がない一真が、千歳は怖いんだよ。だから、千歳の中で一真が記憶を失って喜ぶ人は――――」

千歳「敵だァァァ！　獄龍破ぁぁ！」

なのは「愛されてるね～」

一真「そ、そうでしょうか・・・・」

紅龍さんへ

千歳「ここにもいたか、敵が」

なのは「あははは・・・・」

アリス「今の現状・・・・戦力１１人は厳しすぎるよね」

ソラ「そうですね。それに、今回の最後にも敵らしい人が現れましたし」

一真「ですね。すごく強そうでした」

リイン「だが、お前達なら大丈夫だろう。私はそう信じてるぞ」

バルディッシュさんへ

千歳「そうなんだけどね～。強いんだよ、もう一人の私って」

ソラ「アリスさんは、もう一人の自分と会ったことは？」

アリス「あるよ。全く別人だったけど。初めて会ったときは、驚いたなぁ」

リイン「主ソラに、もう一人の自分がいたらどんなだろうな？」

一真「あまり想像できないですね。ソラ君に、僕らみたいな、もう一人の自分がいるなんて」

アリス「なのはなら、絶対にいる――――」

なのは「どういこうとかな、アリスちゃん？」

アリス「ごめんなさい！」

麗×零さんへ

アリス「前回千歳が教えた殴り方。ちゃんと、使ってるんだ」

千歳「ありがと～、千里ちゃん♪」

ソラ「でも、暴力はダメですよ！」

一真「そうですよ！　前回、体が痛かったんですよ！」

な・リ「「いや。それを一真（君）が言ったらダメだろ（でしょ）」」

一真「？」

鴨川秒さんへ

千歳「何で作ってくれなかったのぉぉぉ！」

アリス「だから、材料が無かったんでしょ」

なのは「だから、睨んじゃダメ」

ソラ「そんなに戻ってほしいんですね、記憶」

リイン「そのようだな。一真、頑張れよ」

一真「あ、はい。千歳さん、僕がんばりますから」

千歳「だ、大丈夫だよ。秒さんにさっき、元気玉投げといたから」

千歳以外

『オイ！』

ＮＫさんへ

なのは「ラン。そういう発言は止めようね。それだと、ラディ君までドMになっちゃうから」

アリス「もしかして一真って、ラディがドMだって直感して、あんな風に虐めてるのかな？」

リイン「そういえば一真はドSだったな」

一真「そ、そうなんですか？」

な・千・ア・リ
『間違いなく、ドS！』

ソラ「SとかMって何ですか？」

ソラ以外
『何だろうね（な／でしょうね）？』

なのは「そうだNKさん。ウチの作者さんも、ややこしいって思ってるみたいだよ」

千歳「バカだ・・・・」

アリス「あ、そろそろ次回予告だ・・・・」

ソラ「そうですね・・・・って、アリスさん！？」

アリス「このまま、ソラ君を養子に・・・・」

一真「させるかぁ！」

一同『あれ？』

一真「今僕、何て？」

なのは「多分、無意識なんだろうね」

千歳「一真だぁ～・・・・録音すればよかった！」

リイン「涙を流して公開することか？」

千歳「そうだよ！」

なのは「えーと、千歳ちゃんをほっといて次回予告！」

なのは「クロノ君の行方不明の連絡。それを聞いた私達は、動揺を隠せない」

一真「そんな中、突然現れた新たな襲撃者。それは僕らにとって、最悪の状況だった」

千歳「そして私ｖｓ私の奪い合いは、まだまだ続いていた。私が一方的に攻撃を受けながら」

アリス「次回、魔法少女リリカルなのは～七つの大罪～」

ソ・リ

「「【悪化】」」

一同『次回へ、スタンバイレディ！』

悪化・前編（前書き）

予定していた所まで行けなかった・・・・何でかなぁ？
そんな嘆きはいりませんよね～。
では【悪化・前編】、始まります！

悪化・前編

「フェイトちゃん。今の話、ホンマか？」

フェイトは黙って頷く。

フェイトが話したのは、クロノが行方不明になったというもの。

それには、全員が動揺を隠せないでいた。

「次元航行中に、管理局の次元航行艦を発見したみたい。それを追って、第１６９管理外世界で・・・・」

そこでフェイトは黙ってしまう。それ以上、言葉を続けられなくなった。

その眼には、涙が浮かんでいた。

「・・・・っ」

誰も喋らない、動かない。

そんな中、たった一人だけが動いた。みーなだ。

「・・・・」

ふよふよと移動し、窓から外を見る。

「みーな、どうしたなの？」

「外に何かいるのう。それも、とんでもない魔力を持った何かが」

それを聞いて、全員が窓に集まる。が、。

「いますわね・・・・」

「人みたいやな」

「浮いてるってことは、魔導師でいいのかな？　みーなさんとリリンはどう思う？」

「それは、わしには判断できんよ」

「同感なの」

そう言ったのは各部隊の隊長達と、みーなにリリン。そして、鈴蘭。

しかし、他のメンバーはというと、

「人・・・・あたしには、そんなの見えませんけど。ねぇ？」

ティアナが同意を求めたのは、隣にいたエリオとキャロ。

「はい・・・・っ！」

直後、二人は自分の体を抱えて膝から崩れ落ちた。

「エリオ！　キャロ！」

フェイトが駆け寄って二人を抱き抱えると、真っ青な顔で、気を失っていた。

それは二人だけの症状ではなかった。

はやて以外の六課メンバー、そしてアンナとネム以外の《断罪の

鎌》のメンバーも、同じように崩れ落ちた。

「ぐっ・・・・」

「何だこれは・・・・!?」

「気分が、悪いですね・・・・」

「《昇華》しなさい！　《罪》が使えるものは、《罪》の発動を！」

アンナの号令で、使えるものは皆、魔力のオーラを身に纏う。

その判断は正しかったようで、フェイトとティアナ、《断罪の鎌》のメンバーは回復した。

「何が起きてるのか、全く分かんないけど、なのはとその子達を運んだ方がいいわよね」

全員が体調不良を起こす大騒ぎの中、アリサとすずかは、何ともないらしかった。

「二人は大丈夫なの？」

「うん。大丈夫だよ。フェイトちゃんは？」

「私は、何とか・・・・でも」

その後に続く言葉は、言わなくてもすずかにはわかっていた。

「安心して。みんなは、私達が診てるから」

「お願いすずか、アリサ」

「うん」

「任しときなさい」

抱えていたエリオとキャロをすずかに預け、フェイトは立ち上がる。

「おそらく、この症状はあれの発する魔力に当てられたのが、原因ですわね。

私と八神はやてが無事なのは、おそらく魔力値の問題でしょう。一定以上魔力があれば、耐えることが出来るようですわ。私と八神はやてのランクは、オーバーSランク。それくらいなければ、ならないのだと思います」

それをあの一瞬で判断したアンナは、《罪》の解放と、《昇華》を命じたのだ。

「ということは解決方法は簡単。話が通じるなら、魔力の放出を止めてもらうか、この場から離れてもらうのどちらかや。

もし、話が通じないなら――――」

「全力で叩く、ですよね？」

鈴蘭の一言に、全員の視線が彼女に集まる。

「いや、それはダメや・・・って、大丈夫なんか？」

「え？　あ、はい。何ともありませんけど？」

「鈴蘭ちゃん」

「何ですか？」

「魔力値、測ったことある？」

「はい。確か・・・・Ｂランク程だったような」

アンナの言う一定以上、つまりＳランク以上はいるということになる。

だが、彼女の魔力値はＢランク程。

それはおかしな事だった。

「・・・・」

「今はそれはいいんじゃないですか？　今の問題は、八神部隊長達が見たって言う、外にいる人ですよ」

「ランスターの言う通りだ、隊長。行こう」

「私に命令しないでくださいな」

某仮面ライダーと似たような台詞を言い、アンナは出ていった。

「それじゃ、私達も行くよ。はやてと鈴蘭は、アリサ達と一緒に、みんなをお願い」

「了解や」

「はい！」

走って出ていく１０人と、それをふよふよと追って行くみーな。
この時は、誰も予想していなかった。これから起こる、最悪の結末を。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

地面に叩きつけられ、全く動かない千歳。

「・・・・」

「「終わり、みてぇだな」」

“千歳”は千歳の髪を掴んで、無理矢理持ち上げる。
千歳の体からは力が抜けきっていて、されるがままの状態。

「「じゃ、取り込む――――」」

突然、腹の辺りに感じた鋭い傷み。視線を下ろすと、“千歳”の腹にカタールが、深々と突き刺さっていた。

「「なっ・・・・」」

「痛いから、離してっ！」

カタールの姿のマモンを抜くと、籠手に変えて、髪の毛を掴んでいる腕を殴り付けた。
だが、まだ“千歳”は離さない。

「離せぇ！」

二撃目。
ボキッ、という鈍い音が響いた。
「「わあああぁぁあぁぁ！！」」
左手を折られ、激痛で叫ぶ“千歳”。
千歳方も、叩きつけられたことによって、身体中が軋んでいた。
そんな体に鞭を打って、左手を後ろに引き構える。
狙いは、たった今千歳が作った、“千歳”の腹の傷。
「いっけぇぇ」
「「ゴフッ・・・っのぉ！」」
横腹へ叩き込まれた、右足での強烈な一撃。
「！！！！」
口は開いているが、声が出ていない。あまりの痛みで、千歳声を出せないでいた。
「「もう一発だ！」」
そこで“千歳”は気がついた。右足に向けて、千歳が拳をぶつけようとしていることに。
「「チッ・・・・」」
バックステップで、“千歳”はその場から離脱。

それを追うように、千歳の持っていたマモンは、槍となり一気に伸びる。

（届け・・・届け・・・・）

伸びる速度は加速していく。しかし、槍は地面に平行に伸びていくだけ。

それに気がついた“千歳”は、上に跳んだ。

「曲がれぇぇぇ！」

「「はっ！？」」

予想外のことが起きた。

真っ直ぐにしか伸びなかった槍が、９０。に曲がり、また追いかけてきた。

「「チィッ！」」

向かってくる槍を、おれていない方の手で掴み、振り上げ、

「きゃあっ！」

叩きつける。

それを二度、三度繰り返し、空高く放り投げた。

「「終われ、千歳。紅之太刀壱式・煉刃！」」

放たれた刃は、確実に千歳を捕らえた。はずだった。

迸る魔力の光。

中から現れたのは、水色の浴衣に着替えた千歳だった。

「フルドライブ、童子切安綱」

「「・・・・」」

フルドライブ発動時の魔力放出で、“千歳”の攻撃を防ごうとしたのだろう。だが、間に合わなかった。その結果が、左腕を滴る血であった。

(左手、やっちゃったかぁ・・・マズイなぁ。利き手だし)

腕に走る鋭い傷みに顔を歪めながら、マモンを腰に添える。

「「これで、お互いに利き手を失ったな」」

これは千歳にとっては、最悪だった。

「関係ないよ!」

強がるが、全く関係ないことはない。

千歳が“千歳”と戦うのに、利き手が使えないのは、本当にマズイことだった。

「「そうかよ!」」

“千歳”は縮地を使い、千歳の目の前に出現。右手は頭上にあり、その手には日本刀の姿をしたマモン。

千歳はそれを受け止めたが、傷に響いた。

安綱の刀身支えていた左腕に激痛が走る。

「つぅっ・・・・」

腕から力が抜けて、安綱を落としそうになったが、何とか持ちこたえた。

しかしその一瞬で、二撃目が叩き込まれ、左腕から完全に力が抜ける。

しかし、それがよかった。安綱の切っ先が地面を向いたことにより、マモンが滑り落ち始めた。

「「えっ！？」」

いきなりのことで“千歳”は対応できず、そのままマモンは滑り体勢は崩れた。

大きな隙に、千歳は確実に食らいつく。

「はぁっ！」

下から上へ切り上げ、その流れのまま、

「九頭鬼流一乃太刀・轟魔！」

右腕を振り下ろす。

利き腕でない分、今の一撃の威力は落ちるが、それで十分すぎた。

「いっけぇぇ！」

止めと言わんばかりの勢いで、安綱は“千歳”を貫く。

「「ぐふっ・・・・」」

“千歳”の傷口から溢れ出す、光の粉。
その光の粉は、千歳へと流れ込んでいく。

「千歳ぇ・・・・」

バトルモードの“千歳”を、奪うことに成功。
その証拠に“千歳”の瞳の色は両方とも紫に、髪の毛は黒が抜けてもとの金一色に戻っていた。
これでバトルモードの技術や知識は、千歳の物となった。
残るは、目の前にいる《罪》の“千歳”だけ。

「・・・許さないよ、千歳。私から奪うなんて・・・・許さない！」

“千歳”が初めて、オーラを纏う。それは巨大で、異常な圧迫感。
だが、それでも千歳は引かない。

「奪い合いだからね・・・・」

安綱の刀身に、魔力を流し込む。
目的は“千歳”のオーラを切り、刃を届かせること。

「九頭鬼流二乃太刀・閃迅（センシン）！」

何度も何度も、“千歳”を切りつける。
その速さは、徐々に速くなっていく。

「ここっ！」

ガキンと、金属音が響いて千歳の手の動きは止まった。
“千歳”がマモンを突きだし、安綱を止めていた。だが今の千歳は、それだけでは止まらない。

「はっ」

マモンを叩き落とした千歳は、“千歳”に蹴りを入れて吹き飛ばす。

「「風の傷！」」

同時に放たれた衝撃波は、二人の間で激突した。
一瞬の拮抗。
すぐに千歳の放ったものは、押し返され始めた。
だが、それは千歳にとっては予想通り。

「爆流破ぁ！」

千歳の再び放った衝撃波は、押し返されたものも巻き込んで、巨大な竜巻を作り上げた。

「無・・・駄ぁ！」

縦一閃。
大剣で真っ二つにされた竜巻は、この場から消失。

「？」

“千歳”の纏っているオーラが、全てマモンの刀身に集中する。

「突き抜けろ！」

振り下ろされたマモンから、魔力が放出。
それは束となって、千歳に襲いかかった。

「マモン。システム《グリード》、発動」

その言葉の直後、向かってくる砲撃は光の粉となって、安綱に吸収された。

「システム《グリード》。あなたは私でもあるんだから、何なのか知ってるよね？」

「フルドライブ時のみ発動可能な、マモンを魔力収集装置にして、魔力を集めるシステム。
これが発動したら空気中や、自分以外が放出した魔力を、発動を止めるまでリンカーコアに流し込み続ける」

「そう。だから、まず一対一じゃないと使えない。
それに下手したら限界以上の魔力がリンカーコアに集まって、二度と魔法が使えなくなっちゃうかもしれない・・・こんな会話をしてる最中でもマモンは、魔力を集めて私のリンカーコアにそれを、ずっと流し込んでる」

つまり、もう“千歳”の魔法は千歳に届かない。

「これが本当の終わり・・・・」

ゆっくりと構えた安綱の刀身からは、収まりきらない魔力が、大量に溢れだしていた。

“千歳”も日本刀に戻したマモンを、黙って構える。
そして全く同時に走りだし、

「「九頭鬼流三乃太刀・飛燕！」」

全く同時に刀は抜かれる。
二人の位置は入れ替わる。

「・・・・」

「・・・・」

そして支配するのは静寂。

「ははっ・・・・いい《強欲》だよ、千歳」

「えっ？」

声がして振り返る。
千歳の視線の先では、“千歳”の足が光の粉となって消え始めていた。

「今回はあんたの勝ちだよ、千歳」

「本・・・・当に？」

「あんたは・・・・たくっ。まぁいいよ。
私は今から、あんたの力。それを後悔しないようにね、千歳」

「後悔？　何で？」

「さあ？　さて、そろそろかな。
私が消えたら、あんたは目を覚ますから。一真によろしくね～」

不思議な言葉を残して、“千歳”は消えていった。
こうして奪い合いは、千歳の勝利で終わった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

海鳴市上空。
そこにはフェイトたちと、ローブを被った男が対峙していた。

「そこの男！　今すぐ、魔力の放出を止めなさい！」
反応は帰ってこない。

「無視とはいい度胸です――――」

《そちらから来たか・・・手間が省けたな》

そう聞こえた後、目の前の男は消えた。
次の瞬間聞こえたのは、何かが地面に叩きつけられる音。
吹き飛ばされたのは、今男がいる場所にいたはずの、リーズだった。

《まずは、今の男からか・・・》

今の一言が聞こえたのだろう。
瓦礫が吹き飛ぶ。

「誰が男か！　私は、女だ！」

《どちらでもいい。我が糧となれ》

男は、周りにいるフェイト達を無視して、リーズへ向かう。
その手には紫色の雷。

「リーズ、逃げなさい！」

「無理っ――――」

止めを指すために、その拳は振り下ろされたはずだった。

「あっぶね～・・・僕の仲間に、何してくれてるんだ！」

蹴って軌道と変え、再び男の体に蹴り入れる。
頭と胸と腹に一撃ずつ。

「リーズ！　突き刺せ！」

「あ、あぁ」

一瞬遅れて、カタール型デバイス・レスターヴァを、男の胸へ突き立て、

「なっ！？」

られなかなった。
刃はローブより先に進まない。進めることが出来ないでいた。
それを見て呆然としている二人を無視して、男は次の行動に移った。

《邪魔だ・・・・》

「ぎっ」

やられたことを、全く同じように忍にやり返していた。

「トライデントスマッシャー！」

「ディバインバスター！」

「レイヴン・ライザー！」

とっさのことで動けなかったフェイト達も、ようなく行動を起こす。

同時に放たれた三種の砲撃。だが、それは男が手を振るっただけで霧散した。

「固まってる場合ではありませんわよ！
ゼロ！　合わせなさい！」

「あぁ。ケロベロス！」

［いつでも行けます、相棒］

アンナの矢と、ゼロの弾丸。
その二つが男を、全方位から囲いこむ。

「「ファイア！」」

全ての弾が、男に叩き込まれる。その一体が煙に包まれた。
すぐに魔法陣が四方にセットされた。

「オーラコル・クロス！」

それぞれの魔法陣が、対面している魔法陣へ光を放出。
そして、

「これで、最後です！」

頭上に現れた巨大な魔法。そこから止めをさすように、大量の魔力が降り注いだ。

「これなら――――」

「まだじゃよ・・・・」

光の柱が消え、そこにあったのは今の攻撃で出来た、巨大なクレーターだけ。
男の姿はない。
殺傷設定でないのに何故？
答えはすぐに出た。

《邪魔だ、と言ったはずだが・・・・聞こえなかったのか、人間？》

その声は、どこからともなく聞こえてきた。
しかし、その姿は見えない。

「いっ！」

上空には十を超える球体が、円を描いて浮いていた。

「マスカレード。あれ、何だ？」

［魔力の塊です。が、推定魔力値は、オーバーSランク］

「マジ！？」

あんなものが高速で向かってきたら、マズイの一言ではすまされない。

マスカレードの説明を聞いて、真っ先に動いたのは、地上にいた忍だった。

「黒影！」

鎖鎌に変型させた黒影を、一気に伸ばして球体を狙う。

「待って、忍君！」

ネムが制止を呼び掛けるが、忍は止まらない。止められない。

全ての球体を、鎖鎌で破壊していった。

「何も起きないぞ？」

［忍。あれを］

「ん？」

黒影の示す先。

そこにはあり得ない光景が広がっていた。

ボロボロになり、立ち上がることのできないアンナ達の姿が、忍の目の前にあった。

「嘘だろ・・・・さっきまで」

そしてあの男は、リーズに喉を掴み止めをさそうとしていた。

「止めろぉぉぉぉ！」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「何が、起きてるんだ？」

忍が球体を壊した直後、それは起きた。

突然、全員が仲間割れを始めていた。

《お互いがお互いを、我だと認識してるのだ》

リーズの目の前に現れた男は、ゆっくりと近づいてくる。

その手には、開いた本が一冊。

「幻術・・・・」

《では、蒐集を始めるか》

「させんよ」

横から突き出た腕が、男を殴り飛ばした。

「小娘。ここは、わしがやる。ぬしは、あやつらを正気に戻してこい」

「だが・・・・」

「わしが負けるわけなかろう。早く行け」

「わかった」

リーズが飛んでいくが振り返らず、男のいるほうを見続ける。
その瞳は、いつものヤル気のない瞳ではない。

「さて・・・・久しいの、ネクロノミコン。四、五世紀ぶりくらいか？」

《いや、六世紀だ。お前はまだ、あのような甘く弱い主に付いているのか？》

大気が震える。
異常なまでの魔力と殺気。それが、みーなを中心にに広がる。

「抜かせ・・・・ぬしは、ここで壊れてもらうよ」

《出来るものならな》

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

（何だろ・・・・嫌な予感がする）

アリサ宅の門の前まで着いた一真は、屋敷とは反対の空を見上げていた。
今の一真には見えていないが、そこには結界がある。そして、その中ではフェイト達が、突如現れた黒いローブの男と戦っていた。
（このままじゃ、また失って・・・・“また”？“また”って、どうして思ったんだろ？）
記憶のない一真は、過去に大切な人を奪われている何て、思いもしなかった。
いきなり、背筋に悪寒が走る。
なぜかは分からないが、恐怖を感じていた。
（は、早く帰ろう）
一真が恐怖を感じた調度その時、みーなが殺気を放った瞬間と、全く同じタイミングであった。
「ただいま帰りましたって、あれ？」
玄関を入った一真は、異様に静かなことに気がついた。
パーティーが開かれているのなら、もっと賑やかでもいいはずだ。
でも、屋敷の中はそんな賑やかな声はなく、ただ静寂。
（何かあったのかな？）
いつまでも玄関にいるわけにもいかず、一真は中に入る。
目指すのは、パーティーが行われていた、あの部屋。
朝、ここふ来たときの記憶を辿りながら、間違えないように進ん

でいく。

「えっと、確かここをみ――――」

「一真君？」

「お兄ちゃん？」

誰もいないと思っていたのに呼び止められ、驚いて動けなくなる一真。

警察に見つかった、泥棒のようである。

「あ、怪しい者じゃ――――」

「お兄ちゃん？　何してるの？」

「え、あ・・・・鈴蘭ちゃん。それに、はやてさん。ただいま帰りました」

「あ・・・・」

「どうかしました？」

「あ、いや」

「元に戻っている」、と言いかけたのだろう。だが、はやてはそれを飲み込んだ。

今の一真に、余計なことを言うのはためらわれた。

「それよりも、どこに行ってたんや？　心配したんよ」

「すみません。えっと、病院に・・・・」

気づいたら、というのが抜けているのだが、余計なことは言わないほうがいい。そう思った一真だった。

それを聞いたはやても、“一真”の言っていた所有物が何なのか、見当がついたらしい。

これも言わないが。というよりも、言えない。

「えっと、他の皆さんは？」

「それが・・・・」

二人は、今の一真が理解できる範囲で、今起きていることを話した。

もちろん魔法のことも、魔導師のことも含めて。

「・・・ということなんや。いきなりで、理解出来たか分からへんけど」

「えっと、大丈夫です。多分」

そう言うが、一真は信じきれてなかった。

あなたは本当は魔法使いです。そんなことを言われ、信じろという方が無理な話だ。

「お兄ちゃん」

「どうしたの、鈴蘭ちゃん？」

「体、何ともない？　気持ち悪くなったりしてない？」

「うん、大丈夫。でも、それが――――」

「さっき説明したときに、魔力に当てられて、なのはちゃん達が倒れたって言ったやろ。でもな、一定以上の魔力値がある人間は、何ともないみたいなんよ」

「つまり僕には、一定以上の魔力があるってことですね」

「せや。そして私にも・・・・」

一真には、今のはやてが悔しそうに見えていた。

「とっ、いつまでも、ここで話してる場合じゃないですよ」

「そやったな。アリサちゃん達の手伝いに行かんと」

「僕も行きます」

なのは達のいる部屋に、はやてと歩き始めた一真。

何ともないように装っているが、その裏ではなかなか消えてくれない嫌な予感が、不安で仕方がなかった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「マスター」

「レイジングハートにバルディッシュ。どうだった？　ネクロノミコンは、あったか？」

フィールは、二人の方を見ようとはせず。背中を向けたまま、報告に耳を傾ける。

「すみません。取り逃がしてしまいました」

「取り逃がした？　どういうことだ？」

「私達を追って、そこに来ていたクロノ・ハラオウンの体を奪い、その場からどこかへと転移しました」

「そうか・・・まぁいい」

フィールの目の前には、四冊の本が並んでいた。
全てがロスト・ロギアで、とある目的のために存在している。
そして、一つのウインドウが開いていた。そこには、異形の生物が写っていた。

「へぇ。そんなのが、あんたの目的なのね」

「主にその言葉使いは、何とかなりませんか？　神童神無」

「無理ね」

「それよりも、何だそれは？」

いつの間にか、そこには他のデバイス達が集まっていた。

「ほらタキオン。アイゼンだって、あたしと同じよ」

「ふむ。前の主に似てしまったのだろうな」

レヴァンティンの言葉を聞いて、タキオンは納得した。

「で、それは何だ？」

もう一度、ヴィータの姿をしたグラーフアイゼンが、フィールへ聞く。

「これか。これは、クトゥルーという神だ」

他の者は神と聞いて、珍しい物を見るような目で、クトゥルーの写真を見ていた。

だが、神無だけは違った。あれがどんな神で、どこにいるか知っているようだった。

「どうした、神無？」

フィールに呼ばれ、ハッとなる。

「何でもないわ」

「そうか。さて、クラールヴィント。マッハキャリバー、クロスミラージュ、ストラーダ、ケリュケイオンの様子はどうだい？」

新たにウインドウが開く。そこには、シャマルの姿をしたクラールヴィントが写っていた。

〔動作確認を含めれば、あと二日です。それだけあれば、完全に仕上がります〕

「そうか。では、出発は三日後だ」

「どこに行くのですか、マイマスター？」

「いい質問だ、レイジングハート。我らが行くのは・・・・」

巨大なウインドウが開き、そこにはここにいる全てのデバイスが、一度は行ったことのある次元世界が写っていた。

そしてそこは、彼女の出身世界でもある。

「地球だ！」

《一真の部屋》

一真「みなさん、こんばんは。神童一真です。って皆さん、どうしてそんなに身構えてるんです？」

なのは「だって、ねぇ」

千歳「今日のゲストが、ねぇ」

アリス「あの人だから、ねぇ」

な・千・ア

「「「ねぇ」」」

一真「えーと、後ろの方々は無視ということで。今日のゲストは『蒼い硝子と夕暮れの約束と三つの約束』より霧方祇帰（キリカタシキ）さんと、三度目の登場の秋雨千里さんです」

千里「今回もよろしく～、って何これ？」

一真「これはですね・・・・」

祇帰「今回のゲストが、私だからだろ？」

一真「まぁ・・・そうです」

祇帰「そうか。そうだ、千歳。土産を持ってきた」

千歳「な、何？」

祇帰「これだ」

千里「何、その玉？　もしかして、薬か何か？」

千歳「薬！？　今すぐ、それを一真に！」

なのは「なるほど。あの薬なんだ」

アリス「でもさ、私は嫌な予感がするんだけど・・・気のせいかな？」

一真「くくくく・・・久しぶりだなぁ、なのは？　テメェらとは初めましてか、所有物の二人？」

な・千・祇

「「「所有物ぅ！？」」」

アリス「いい・・・・」

千歳「誰！？」

千里「祇帰さん、あれって黒い一真さんですよ」

祇帰「帰ったら、問いただしてみるか」

なのは「どうしようか、これ？」

黒一「じゃあ、適当に進めりゃあいいんじゃねぇか？」

なのは「適当にって・・・・というか、アリスちゃんどうしちゃったの？」

アリス「所有物だって・・・・子宮に来ちゃう♪」

千里「何言ってるんですか！」

黒一「返事のコーナーだ～」

バルディッシュさんへ

アリス「あれって器の問題じゃないよね？」

黒一「かもしれねぇ。まぁ、俺様には分からねぇけどなぁ・・・・くくくく」

なのは「その笑い方、何とかならないかな？」

祇帰「無理なんじゃないか？　多分」

千歳「シルフ。ありがとう～。私頑張ったよ～」

千里「頑張る、じゃないんだ・・・・」

千歳「今回で終わったからね」

千里「なるほど」

U．Tさんへ

千歳「大成功♪」

黒一「あれ、直撃したってのか。いいねぇ・・・・ナイスじゃねぇか、千歳ぇ」

千里「あ、誉めるんだ」

アリス「クラウドの言う通り、不味いことになってるみたいなんだよね。これがまた」

祇帰「でも、今ここでその戦闘に参加してるものは、一人もいないんだな」

なのは「まぁ、私は倒れてるし、一真君は記憶喪失。千歳ちゃんはまだ病院で、アリスちゃんに至っては眠ってるから」

黒一「使えねぇ奴らだな、テメェらは」

な・ア「「一真（君）には言われたくない！？」」

鴨川秘さんへ

祇帰「黒い一真が出てきたのは、材料間違えたからか・・・・すまない、千歳」

千歳「いいよぉ・・・・全力で消すから♪　というわけで、シン・ベルワン・バオウ・ザゲルガぁぁぁ！」

黒一「ホント、容赦ねぇな、あいつのことになるとよぉ。まぁ、愛されてんだろう。くくくく」

千里「というか、よくそんな物食べられますよね？　見てるだけで、こっちが熱くなってくる」

なのは「食べたことあるけど、あれは食べ物じゃなかったなぁ・・・・」

アリス「あれの舌は、バカだから」

な・里「「納得」」

ＮＫさんへ

千歳「性格は・・・・どうなるの？」

黒一「変わるだろうな。まぁ、そうなってもテメェはテメェだ」

千歳「へっ！？」

黒一「つまり、一生俺様の所有物ってこったな。あいつもそうなんじゃねぇかぁ。くくくく」

千歳「・・・・」

アリス「あ、フリーズした。千歳って、ストレートには弱いからね」

祇帰「黒い一真は、普段の一真が言えないことを、さらっと言ってしまうみたいだな」

アリス「私は大丈夫だけどね！」

祇帰「それは胸を張って言うことか？」

千里「あの黒いの、どれだけ強いの？　今回は、ほとんど戦ってなかったけど」

なのは「みーなさんと知り合いみたいだから、多分スゴく強いんじゃないかな。まぁそれは、次回をお楽しみに」

麗×零さんへ

千歳「今回頑張った、千歳です！」

祇帰「確かに。しかし、あのシステムを初めから使っていたら、簡単に勝てたんじゃないか？」

千歳「無理なんだよ。あれ、使うタイミング間違えたらこっちが負けちゃうから」

祇帰「そうなのか」

千里「アリスさん、ちょっと」

アリス「どうしたの、千里？」

千里「えっと、その・・・好きな人に思いを伝えるには・・・」

アリス「ストレートに言うしかないよ。お手本を見せてあげる！一真」

黒一「あぁ？」

アリス「愛してる♪」

黒一「・・・所有物でいいな？」

アリス「はい・・・ヤバイ、逝きそう」

なのは「規制に引っ掛かるから、そんなこと言っちゃダメ！」

灰色の野良猫さんへ

アリス「ソラ君と久しぶりに会えてよかったよぉ～」

千歳「嬉しそうだったもんね、アリスちゃん」

なのは「リインの言う通り、記憶喪失の一真君もあれだけど・・・・」

黒一「何だ、なのは？　言いてぇことがあんなら、言えよ。あぁ、そうか。リリカルマジカル――――」

なのは「死ねよ」

祇帰「なのは、口調がおかしいことになってるぞ」

なのは「っていうか、世界が消えちゃえ！」

千里「ダメだって！」

アリス「『無』って何！？　そんなのヤダ！　私もなのはちゃんに加勢する！」

千歳「あ、アリスちゃん！　何言ってるの！？　一真、次回予告お願い！」

黒一「うい。次回【悪化・後編】」

千・祇・里

「「「次回へ、スタンバイレディ！」」」

なのは「スターライトブレイカー！」

アリス「イノセンススマッシャー！」

一・千「「爆流破！」」

な・ア「「いやぁぁぁぁ！」」

――――――終幕――――――

悪化・後編（前書き）

とあるキャラがありえないことに・・・どうしようか、ただいま悩んでおります。
そんな愚痴はいらない？
ですよね。では、【悪化・後編】はじまります。

悪化・後編

千歳の意識は、一気に覚醒した。ぼんやりとした感覚もなく、すっきりとしている。

「ここ、どこ？」

一番最初に、視界に入ってきたのは、知らない真っ白な天井。
そして次に視界に入ってきたのは、自分が横になっているベッドの傍にいる、千治と千里の姿だった。

「千歳・・・・」

「お父さん・・・・お母さん」

「千歳ぇっ！」

「千歳っ！」

涙を流しながら、千歳に抱きつこうとする千治。

「千治さん、ストップ」

「な、何じゃい！？」

「その勢いで抱きついたら、千歳の傷が開くのだけど？」

「うぅ・・・・」

「だから今は、先生を呼んで来てください」

「分かった」

渋々承諾して、千治は病室から出ていった。

するとタイミングをはかったように、マモンが話始めた。

[相棒、よろしいですか？]

「マモン？」

[つい先程から、アリサさんの家の近くで魔力反応を、複数確認しました。一つを除き、それ以外はフェイトさん達だと思われます]

「そっか・・・・あ」

そこまで話して、千歳は千里と自分の状況を思い出した。

完全に、これからフェイト達のもとへ駆けつけることだけを考えて、マモンと会話をしていた。

「えっと、その・・・・」

「その子の名前、マモンって言うのね？」

「う、うん」

「初めまして、マモン。千歳の母の千里です。よろしくね？」

[初めまして。相棒のデバイスの、マモンといいます]

千歳の頭の中は、大量のクエスチョンマークで、いっぱいいっぱいになっていた。

（怒られない？　どうして？）

「で、本題なんだけど。これからも千歳をよろしくね」

「それは私ではなく、彼に言ったほうがいいのではないでしょうか」

「そうなんだけど・・・それはまだ。この子と、あの子が自分の気持ちに気がついた時に、ちゃんと言うつもり」

「そうですか」

もう千歳には、何が何なのか理解不能。

誰かに説明を求めたが、説明をしてくれる人はいない。そして、理解が出来ないまま、話は進んでいく。

「じゃあ、千歳」

「な、何？」

「行きたいんでしょ？」

「それは・・・うん、行きたい！」

「なら、早く行きなさい。千治さんや先生は、私が脅し・・・誤魔化すから」

とんでもないことを、一瞬口走った千里だったが。千歳はまった

く、ツッコミを入れようとしていない。
気がついていないのか、母の言葉だからスルーなのか。
どちらもな気がするが。

「ありがとう、お母さん」

ベッドから下りた千歳は、マモンを手に取り、窓へ向かう。

「マモン。セットアップ！」

［スタンバイレディ、セットアップ］

千歳の姿が光の中に消えた。
次に現れた時には、病人服ではなく、バリアジャケットを身に纏っていた。

「お母さん」

「ん？」

「行ってきます！」

笑顔でそう叫ぶ千歳に、

「うん。行ってらっしゃい」

千里も笑顔でそう言った。
その笑顔に見送られ、千歳は窓から飛び下りた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

地面から這い出た、巨大な七匹のミミズのような魔獣。その全てが、目の前のたった一人の男に向かって突っ込む。
だが、七匹が頭をぶつけ合っただけで、男・ネクロノミコンはいなくなっていた。
次に現れたのは、はるか上空。手は空へ掲げられている。
その手のひらには、魔力の塊。大きさは民家が一つ、余裕で入るほど。

「ちぃっ」

「沈め」

投げつけられた魔力の塊の向かう先は、七匹の魔獣。
みーなと七匹の魔獣までの距離は、一キロ程度。一瞬で追い付くような距離ではない。
だが、みーなは一瞬で近づいた。魔法を一切使わず、それをやってのけた。

「自ら、死にに行ったか」

「阿呆が」

ガバッ、と開けた口。そこへ魔力の塊は吸い込まれていく。

「んく・・・久しぶりに、他人の魔力を食べたの。あの暴食娘と同じじゃから、本当はしたくないのじゃが・・・」

みーなの周りに、大小様々な大きさの魔力弾が、構成されていく。

「行け！」

その号令で、全ての魔力弾が一斉に放たれた。
だがそれは、腕を一振りするだけで、一つ残らず消え去った。
だがそれは、全て囮。

《ん？》

先の瞬間移動で、ネクロノミコンの目の前まで移動したみーなは、手加減なしで殴った。
しかし、それで目の前の男はびくともしない。

《その程度か・・・・》

「やはり、のう・・・・さて、まずはその防御壁を腐らせるとするか」

みーなは、魔力を右腕に集中。紫色の魔力の光が、腕を包んだ。

《・・・《怠惰》か》

黙って振り上げられる拳。
そして飛んできたのは、足だった。
これにはネクロノミコンも対応が遅る。とみーなも思ったのだろうが、それは甘い考えだった。

「！」

フェイントをかけたつもりだったが、全く意味がなかった。
防御壁。つまりバリアは、常に男の周りに張られているのだ。

「ちっ・・・・」

もう一度、右腕に魔力を集中させた。目的は、先程ネクロノミコンの言った《怠惰》と呼ばれる魔法を、目の前の男に使うため。

それを一気に突き出す。

そこでネクロノミコンは、その日、初めての動きを見せた。

それは回避行動。

《その腕は、非常に厄介だ》

体を半身にして、みーなの一撃ゅ避けたネクロノミコンは、掌に魔力を凝縮。

一本の両刃の剣を出来上がった。

《切り落とすとするか》

腰だめに剣を構え、振り抜く。

「？・・・・っ！」

何も見えない。だが、みーなはその場から、急いで離れた。

剣を振り抜いた位で届くような位置に、みーなは立っていたわけではない。

それなのにみーなは動いた。動かなかったら、何かマズイことになる。

そう思った瞬間に、みーなは動いていた。

直後、地面が抉れた。

「厄介じゃの・・・・」

―――――――――――

みーながネクロノミコンと戦っている頃。リーズは同士討ちをしているフェイト達を止めるため、彼女達のもとへ来ていたのだが。

「これは・・・どうやって止めたらいいんだ？」

それに困っていた。

被害を受けないように、離れた場所で見ている。はっきり言えば、近づけないのだ。

「比較的、やりやすそうなのからだな・・・」

そう考えた結果、顔が真っ先に浮かんだのは、あの男だった。

リーズはゆっくりと近づいて、この場にいる全員に聞こえるような大声で、こう叫ぶ。

「こぉぉのっ、うっっすいぃぃのぉぉぉぉ！」

木霊する、リーズの大声。

幻術に捕われている彼に声が届くか、リーズも賭けであった。

「ダメだっ――――」

「誰が薄いかぁぁぁぁ！！」

賭けは成功した。

薄いと呼ばれた男、風切忍は、幻術から帰ってきた。怒りで。

「リーズ！　僕は薄くない・・・・って、リーズ！？」

驚く忍を、リーズは何だと言った顔で返す。しかし、忍が驚くのも無理はない。

幻術で、自分以外はあの男にやられているという幻覚を、無理矢理見せられていたのだから。

それをリーズの口から聞いた忍は、

「ホントかよ・・・・」

「あぁ。後ろを見れば、信じられる」

彼女言う通り、後ろを振り向くとアンナ達が、同士討ちをしていた。

「ＯＫ、理解した。それで、僕はどうしたらいい？」

「お前だけは、あの言葉で充分と感じていたからよかったが、他のみんなはわからない」

「酷くないか、僕だけ！」

ツッコミを入れるが、リーズはスルー。

「一応魔法か、魔力を込めて一撃を与えるか。どちらかが、有効かもしれないな」

「それは、まぁ・・・・」

「というわけで、お前は隊長を頼む」

「は？」

とんでもない言葉に、忍は聞き返した。だが、これまたスルー。

リーズは、そそくさとフェイト達のもとへ向かっていった。

「・・・覚えてろよ、リーズ！」

渋々、アンナをもとに戻すために動く、忍であった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「・・・・」

看病の途中、一真はボーッと立ち尽くして。

（何だろ？　さっきよりも嫌な予感が・・・気のせいかな？）

「一真君？」

「あっ、はい？」

「どうかした？　体調が悪いの？」

「いえ。大丈夫ですよ」

すずかにはそう返した。

気分が悪いわけではない。ただ、嫌な予感がするだけ。

そしてその予感は、時間が経つにつれて強くなってきている。

それを言うつもりは、一真にはなかった。

「心配することはないの。記憶を失っても、一真は一真なの。体調が悪くなるなんて、万に一つもないの」

「リリン！」

「あははは・・・・」

リリンの言葉に、苦笑いを浮かべるしかできなかった。

「話しをしてる暇なんてないわよ。一真。これ、運ぶの手伝って。隣の部屋に持っていくから」

「わかりました」

「はやてちゃんは、シグナムさん達といてあげて」

「でも、手伝わんと・・・・」

「大丈夫ですよ、八神部隊長。家族なんですから、一緒にいてあげてください」

「そうそう。一真にリリンも使うから、人手は足りてるわ。だから、あんたは心配しないでいいのよ。わかった？」

「ありがと、みんな」

その言葉を聞いた後、五人は部屋を後にした。

「さて。次は、なのは達ね」

なのは達がいるのは、シグナム達のいる部屋の隣。

看病の道具を運ぶのに、それほど苦労はない。

「その前に、一真」

「何ですか、アリサさん？」

突然アリサに呼ばれて、訳がわからない一真。

「あんた。本当に何ともないの？」

「え？」

「そうだよ、お兄ちゃん。さっきから変な顔したりして・・・・もしかして、傷が開いたの？」

「違いますよ。ただ・・・・」

「ただ？」

そこで、一真は言葉を詰まらせてしまった。

嫌な予感がするだけ、とはとても言いにくい。

―本当に面倒だな、テメェはよぉ。くくく・・・・・―

頭の中に響いたのは、もう一人の自分の声。

二度目のことで、もう驚きはしなかった。

―いいじゃねぇか、言っても。この嫌な予感が何なのか、テメェには分かんねぇんだ。勿論、俺様にもサッパリだ―

（自信を持って言われても・・・・）

―確かにそうだ。まぁ、このまま悩んでいても、何も変わらねぇ。でも、誰かに言ったらスッキリする可能性だって、あるかもしれねぇんだ。それにだ、こいつらが信じられねぇって訳じゃねぇだろ？―

（うん・・・・）

全員が自分を見てる、という居心地の悪さを感じながら、一真は口を開いた。

「体調が悪いのでなくて、さっきからずっと嫌な予感がするだけなんです。

でも、時間が経つにつれて強くなってきているみたいで、それが気持ち悪くて・・・・」

「そうだったんだ。今も、そうなの？」

「はい」

「そっか」

「お兄ちゃんの嫌な予感って、よく当たるんだよね・・・・」

鈴蘭の一言を聞いて、一真の顔に影が差す。

そこへリリンが、

「そんな当たるかどうかわからないもの信じて、どうするなの。バカかお前はなの」

フォローかどうかも分からない一言を、ぶつけた。

それを聞いて、鈴蘭が怒らないわけがない。

「リリ～ン！」

逃げていくリリンと、それを追いかけていく鈴蘭。

「兄弟みたいだよね」

「確かに。あんた達は、先に入ってて。あたしは、あの二人を捕まえてくるから」

「うん」

「分かりました」

走っていくアリサを見送って、二人はなのは達のいる部屋に入っていった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「いや、何で矢をこっちに！？」

「うるさいですわよ、忍！　さっさと殺されなさい！」

「理不尽だ！」

叫びながら、アンナの攻撃から逃げ続ける忍。
アンナが怒っている理由は、忍に助けられたのが気にくわない。
ただそれだけだった。
忍の言ったように、理不尽きわまりないことこの上ない。無さすぎる。

「うぉっ」

いつもなら、お約束なので忍を助けることのない、《断罪の鎌》のメンバーだが。今回は違った。

「止めなさい、アンナ」

ネムに頭を叩かれ、アンナは止まった。

「邪魔をしないでくださいな、ネム。今、このゴミを――――」

「状況を考えなさいよ」

そう。今は、ネクロノミコンとの戦闘中。
忍程度を殺るために、全力を注いでいる場合ではない。

「・・・・」

「どうしまた、忍？」

「いや。何か、ムカつくことを言われた気がした」

空を睨んでいる忍は、全員がスルー。フェイトとティアナも、見

習ってスルー。
全員の視線は、みーなとネクロノミコンの戦いに集中する。

「何あれ・・・・」

そう呟いたティアナ。
他の全員は、絶句していた。
二人のレベルが違いすぎることに。

「あんなのの中に入るのか？」

「もちろんですわ」

「うん・・・・」

ユゥイの言葉に答えたのは、たったの二人。
フェイトとアンナだけだった。

「腰抜けは、そこで突っ立ってなさい」

そう言い残し、アンナは一人で飛んでいく。

「フェイトさん・・・・」

「大丈夫だよ、ティアナ。ティアナは無理しなくていいから。ね」

フェイトもアンナを追って、みーなのもとへ向かった。

「トライデント」

「デカディメント」

フェイトの腕には環状魔方陣が、グラディウスには魔力が集中する。

突き出される左腕。

「スマッシャァァァ！」

弾かれる弦。

「アロォォォ！」

三矛の砲撃と、身の丈ほどの巨大な矢は狙い通りに、後ろから真っ直ぐ男を目指す。

みーなもそれに気づき、

「ふんっ」

「ぐっ・・・・」

回し蹴りを決めて、男を二人の魔法のもとへ蹴り飛ばす。

そして、すぐさま離脱。

《あの人間共か・・・・》

ネクロノミコンの手には、まだあの剣、みーながマズイと直感した剣が、そこにあった。

「そのっ――――」

みーなが叫ぶより早く、ネクロノミコンは剣を振るう。

目的は魔法を消すことではなく、魔法ごとフェイトとアンナを吹き飛ばすため。

《今は邪魔だ。寝ていろ、小娘共》

殺す気はないよう力を押さえているようだ。

それでも全員が、その一撃の異常さを、直感で感じ取った。

「逃げろ！」

みーなの声の直後、フェイトとアンナの姿が消える。

「はあっ、はあっ・・・・隊長、ハラオウン執務管。大丈夫か？」

「えっ・・・・」

「忍？」

二人をギリギリで助けていたのは、縮地で移動してきた忍だった。

「ユゥイ！　ランスター！　やれ！」

それを合図に、二本の魔力の柱が現れた。

それは一つとなり、ネクロノミコンをあっさりと飲み込んだ。

「ありがとう、忍」

「いえ」

礼を言うフェイトに対してアンナは、

「ちっ・・・・」

失礼すぎた。

「アンナ！」

「いいんだよ。いつものことだから。それよりも今は、あいつだ」

さっき、魔力の滝に飲み込まれたはずの男は、無傷で立っていた。
非殺傷設定と言っても、あれはイレギュラー過ぎる。

《・・・・一人ずつは面倒だな。全員まとめて糧としよう》

そう言って、手に持っていた魔導書を開いた。
それと共に、企画外なほど巨大な魔方陣が現れた。
《闇の淵で、永久（とわ）の眠りに堕ちよ》

魔方陣から溢れる光は、強さを増していく。

《破滅の――――》

「ケロベロス、カートリッジロード！」

［カートリッジロード］

吐き出された、四発分の薬莢。

「サタンバースト！」

ネクロノミコンの魔法の発動を、阻止するために放たれた巨大な魔力弾。
男はそれを一別しただけで、何もしようとはしない。

《破滅の夢に、飲まれて消えろ》

何もしないで詠唱を唱え続ける。
つまり危険な魔法だと、認識されていないということだ。
そして着弾。
爆発。
辺りが煙で包まれる。

《ウンターガング・トラオム》

響く男の声。
魔方陣の端から壁が出来始める。魔方陣の上にいる物を覆うように。

「くっ・・・・」

離脱不可能。
そんな時だった。
全員の頭の中に声が聞こえてきた。

＞みんな！　空に向かって攻撃して！＜

それは幼い少女声だったが、全員が聞き覚えがあった。

＞千歳！？＜

＞千歳さん！＜

＞あなた、入院してたんじゃありませんの！？＜

＞そのことは後だよ！　早く、そのドームが塞がっちゃう前に！＜

何をするつもりか、誰にも分かるはずがない。

だが、それに賭けるしかないのだ。

「トライデント」

「ファントム」

「デカディメント」

「レイヴン」

「サタン」

「ネメシス」

フェイト、ティアナ、アンナ、ユゥイ、ゼロ、リオル。その６人が、千歳の言う通りに魔法の準備をする。

「忍君、リーズ。私達は、あの男に少しでもダメージを」

「あぁ」

「了解だ」

「わしも手伝うよ」

ネム、忍、リーズ、そしてみーなの四人はネクロノミコンへと向かう。

「行ける！？」

フェイトの言葉に、全員が頷く。

「せーの！」

その掛け声を合図に、

「スマッシャー！」

「ブレイザー！」

「アロー！」

「バースト！」

「ライト！」

ほぼ同時に魔法が、全て空へと昇っていく。

「マモン！　システム《グリード》、発動！」

その声の後、五つの魔法は突如消える。同時に、壁も薄くなった。

しかし消えては無くならない。

壁はドームとなり、収縮を始めた。

「何が起きてるのよ、これ!?」

「魔力がすわれてるのか?」

全員の体からこぼれる光。それは全て、ネクロノミコンの手にある魔導書に集まっていく。

「千歳っ!」

「九頭鬼流一乃太刀! 轟魔!」

ドームにヒビが入り、ガラスのように砕けちった。

ドームを壊した張本人の千歳は、すぐさまネクロノミコンを発見。

次の瞬間には消えてしまっていた。

そして現れたのは、男の目の前。最初に動いていたネム達よりも早く、そこにいた。

「吹き飛べ!」

《ぬうっ!?》

ネクロノミコンの顔面に叩きつけられた、千歳の掌。それだけで、男の体は地面に向け吹き飛ぶ。

「マモン!」

「OK、相棒」

大剣から槍へ。マモンの姿が変わる。

「『突き抜ける槍』！」

突き出された槍から放たれた一撃は、地面に堕ちたネクロノミコンへ向かう。

「ふぅ・・・・」

今の一連の出来事に、全員が唖然。

入院していたはずの千歳が突然現れて、全部持っていったのだ。

「千歳ちゃん・・・体はもういいの？」

「うん♪　大丈夫だよ」

ネムの問いに笑顔で答える。それは、大ケガで眠っていた者のそれではなかった。

「あれ？」

「どうした、ランスター？」

「ユゥイさんも知ってると思いますけど、《罪人》って瞳が銀色になるんですよ」

「あぁ」

「でも千歳さんの瞳、真っ赤なんです」

ティアナに言われて、千歳の瞳に注目する。

「あ。本当だ」

千歳の瞳は、綺麗な赤をしていた。
それは、人が作り出せるようなものではなく、綺麗すぎて気持ちが悪いと言えるような色。

「千歳・・・・」

「どうしたの、みーなさん？」

「ぬし、《罪》を受け入れたか？」

「うん。でも大丈夫だよ。ちゃんと、勝ったから」

「そうか。まぁよいよ。ぬしが自分で選んで、《罪》を自分の物としたのだからな」

「？」

みーなの不思議な言葉に千歳は、首をかしげるだけ。意味を読み取ることはできなかった。

《予想外だった・・・・貴様らに、そのように踏み外した存在がいるとは》

ネクロノミコンの声に、全員が再び構える。
だが、千歳だけは違った。

「ん？」

＞どうしたの千歳？＜

＞あの人の声、どこかで聞いたことがある気がして・・・気のせいかな？＜

＞それは気になるね。千歳いい？＜

＞ＯＫだよ。確かめよう＜

千歳が気になった声。そのことを全員に伝え、全員で確かめにかかることになった。

「クロスファイヤーシュート！」

さっきの千歳の攻撃をもろにくらって、まだたっているネクロノミコン。

そこに向けて、魔力弾が放たれる。

《無駄だ・・・》

そこでネクロノミコンは気がついた。魔力弾が、自分を狙っていないことに。

全て男の周りに着弾する。

「はぁぁぁ！」

大剣となったマモンの刀身から伸びた魔力刃と、

「うらぁぁ！」

鎖鎌となった黒影を伸ばして男を狙う。
それに気がつかないネクロノミコンではない。真上に跳び上がり、両側からの攻撃を避ける。
だがそこにも、待ち構えている者がいた。
ネムだ。
手には日本刀型デバイスの三日月宗近（ミカヅキムネチカ）。その刀身は氷を纏っている。

「絶対氷結！　氷華一閃！」

振り下ろされるは氷点下の刃。当たれば凍傷は間違いない。
男はそれを掴んで止めた。

「！？」

男の触れているところから、何かが侵食を始めた。

「離せ！」

もちろんそんな要望を聞くわけがなく、侵食は進んでいく。
だがそれはチャンスだった。

「嫌がってるんだ。離してやれ」

近づいてきていたゼロが、ネクロノミコンの手に向けて連射する。

《ふんっ》

「きゃっ！」

向かってくる弾丸を認識したネクロノミコンは、掴んでいた宗近もろともネムを、そちらへ投げ飛ばした。
ネムにそれを防ぐ術はない。ただ、直撃を待つだけ。なのだが、一行に痛みはない。
「大丈夫、ネムさん？」
「千歳ちゃん・・・・ありがとう」
「どういたしまして♪　ネムさん。ここから、あそこに攻撃できる？」
「出来るわ」
「じゃあ、行くよ！　月牙天衝！」
「凍牙閃刃！」
魔力と氷。二種類の刃が駆ける。
それが直撃する直前で、ネクロノミコンは宙返り。
「落ちろぉぉ！」
その最中に上から降ってくるリーズ。
突き出された右手には、レスターヴァが装備されていた。
それを見ても焦ることなく、
「ぐふっ・・・・！」
ネクロノミコンはリーズに蹴りを入れ、視界から外す。

「かかりましたわね」

聞こえてきたアンナの声。蹴り飛ばされリーズの後ろから魔力の矢と、光の束が迫ってきていた。

男はそれ腕を振るうだけで消し去るが、ネクロノミコンは何かに気がついた。

《幻術。ということは、下か・・・・》

それは正解だった。

先に降ってきた魔法と、全く同じものが上ってきていた。

「バレた!?」

ユゥイの驚愕の声。

バレないと思っていたのだろう。

＞構わん。続けろ！＜

直後。全員の頭の中に響くみーなの声に、後押しされ魔法は消えることなく、ネクロノミコンを飲み込もうとする。

《愚策だな。人間ども》

腕を突き出す。

それだけで二つの魔法は割れた。

《むっ！》

「気を取られ過ぎじゃよ」

千歳にされたように、フードごと顔を掴まれる。

「いい加減、顔を見せよ！」

投げ飛ばすと同時に、フードが取れる。

《やってくれるな・・・・》

その素顔。

全員が言葉を失う。

誰一人として、喋ることができない。

髪は銀髪て、瞳は紫。だが、見た目は六課と《断罪の鎌》のメンバーを、ここまで連れてきてくれた人。

そして、さっき行方不明になったはずの人物。

「クロノ・・・・」

そう。クロノ・ハラオウン。

それが男の正体だった。

《一真の部屋》

千歳「本編、ふっかぁーつ♪」

アリス「いいなぁ・・・・」

一真「そういえばアリスさんは、まだ意識不明でしたね」

アリス「そうなんだよ～。だから、みんなの記憶から消えてないか心配で・・・・」

なのは「アリスちゃん。作者さんから、手紙が来てるよ」

アリス「早く読んで！」

なのは「えーと、『アリスには悪いが、お前が出てくるのはまだまだ先になる。つかな、アリスの存在――――』」

アリス「今から殺しに行ってくる・・・・」

一真「でもそれじゃあ、続けられないんじゃ」

千歳「それはそだよね。どうする、アリスちゃん？」

アリス「ちっ・・・・なのは、進めていいよ」

なのは「う、うん。今回のゲストは、久しぶりの登場。ゼロ君です」

ゼロ「えーと、どうしたんだ？」

一真「出番がないから、それで」

ゼロ「そいうことか。そうだ、一真」

一真「何ですか？」

ゼロ「3分だけだが、記憶が戻る薬だ」

千歳「調子に乗ってるのかな？」

ゼロ「え？」

アリス「一真はウルトラマ●？　ねぇ？　そう言いたいの？　ねぇ？」

ゼロ「いや、そうじゃなくて・・・・」

なのは「というか、ゼロ君はマズイんじゃないのかな？」

ゼロ「え？」

一真「ハロー、ゴミクズ君。時間がねぇからな。さっさと殺るぞ」

ゼロ「え、あ、ちょっと待て！　薬を持ってきたのは俺だぞ！」

一真「それとこれとは、全くの別だ！　つーわけで、死ねやぁぁぁ！」

なのは「それじゃ、後ろは無視でいいかな？」

千・ア「「もちろんでーす♪」」

なのは「では、お返事コーナー♪」

鴨川秘さんへ

千歳「作者さん、そこまで考えてるかな？」

アリス「絶対に、それはないと思う・・・・」

なのは「プロットとか無しで、思い付きで書いてるらしいし」

ゼロ「はぁはぁ・・・・あの野郎。やりたい放題しやがって・・・・・」

一真「ごめんなさい、ゼロさん。えっと、その」

ゼロ「いや。大丈夫だ」

千歳「大丈夫じゃないんだよ。今、新しい薬が届いたから♪」

ゼロ「嘘だ！」

アリス「ホント♪　もう飲ませたから♪」

一真「というわけで、第二ラウンドだなぁ」

ゼロ「いやぁぁぁぁ！」

バルディッシュさんへ

なのは「あれ、どういう意味なの？」

千歳「分かんない。でも、いつか分かるから大丈夫だよ」

アリス「そうだといいんだけど、ね」

ゼロ「ん？　何か知ってるのか？」

アリス「さぁ？」

一真「あいつらは、無駄に遠回しに言うからな。
ま、一番は千歳みたく気にしないことだ」

千歳「イェーイ♪」

なのは「千歳ちゃんの場合、それは違うんじゃない」

一・ゼ「「そうかもな」」

Ｎ・Ｋさんへ

一真「ありゃもう、幻術使いとかいうレベルじゃねぇな」

アリス「１ｖｓ１１で、あそこまでっておかしいでしょ」

なのは「あんな幻術が使えるのも、いろいろとおかしい気がするけど」

ゼロ「あれはバグキャラでいいんだよな」

ゼロ以外
『多分』

千歳「空気が重いからテンションあげるよ～。セラフィム、ランチ

ゃん。ありがとね～」

一真「相変わらずで悪かったな！　死ねやぁぁぁ！」

なのは「うん。いつも通りだ」

麗×零さんへ

ゼロ「あれ、聞いた人が間違いだな。千里はご愁傷さまというか」

アリス「えーい♪」

ゼロ「がふっ！」

アリス「人の想いを笑うなぁぁぁ！！」

なのは「そんな素晴らしい戦いはないよ」

一真「らしいな。千歳、感想」

千歳「あんなの人じゃない！　何、あれ？　動きとか、もう超人だよ！　バグキャラだよ！　ラカ●さんだよ！」

一真「やかましい！」

千歳「うるさい！」

一真「ごぶっ！」

灰色の野良猫さんへ

ゼロ「あいつって、無差別攻撃でも効果あるのか？」

千歳「無いと思うよ～。ていうか、あそこまでやって意味がないと、絶対にないよ」

アリス「一真は、鈴蘭と一緒に住んでたんだよね」

一真「一緒にって言うのもおかしいがな。一応、俺も鈴蘭もミゼットのババアに食わしてもらってたから」

なのは「だったら、知ってる？」

一真「どうだろうな。つか、知ってても言えるか。ネタバレになんだろうがよ」

なのは「確かにそうだよね」

一真「というわけで、考えてみてくれ」

千歳「じゃあ次回予告だね♪」

一真「明らかになったネクロノミコンの正体」

なのは「それは夢だと思いたい現実」

アリス「そんな現実は、一真も襲う」

千歳「次回、魔法少女リリカルなのは～七つの大罪～」

ゼロ「【悪夢】」

一同『次回へ、スタンバイレディ！』

悪化・後編（後書き）

今回も読んでくださいましてありがとうございます。
さて、次回の後書きコーナーのゲストは、あのか弱いチート兄弟の阿部兄弟です。
では次回も楽しみに。
それではまた。

悪夢

「ウソ・・・何で？」

フードの下から現れたクロノの顔。

それがクロノだという証拠はない。だが、クロノではないという証拠もない。

フェイトは頭では、それをちゃんと理解していた。

でも理解しているだけで、冷静ではいられない。

「クロノ！」

《クロノ？　あぁ、この体の主のことか》

「体の主？　どういうことなの？」

ネムが聞くと、かわりにみーなが答えた。

「簡単な話じゃよ。わしの言っているネクロノミコンとは、あの手にある魔導書の名前。

あの魔導書の意思は、人間の体に取りつき支配するんじゃ」

それを聞いた時、フェイトはある事例を思い出していた。

それは１２年前の闇の書事件でのこと。

闇の書の意思は、はやての意思を飲み込んで暴走していた。

《つまり我が自らこの体を手放すか、この体の主の意識が戻るかしない限り、この体の主導権は戻らない。

まぁ、どちらもあり得ないことだがな》

クロノの声で、無表情で話すネクロノミコン。
誰も動けないフェイト達。ネクロノミコンは、彼女たちに狙いを定め動き始める。

《諦めよ、人間共。そして糧となれ》

腕に籠められた、凝縮された魔力。
ネクロノミコンはそれを砲撃として放出する。

「爆流破！」

千歳の魔法が、ネクロノミコンの魔法を押し返し始める。
だが、それはほんの一瞬。

《ぬんっ！》

ネクロノミコンが魔力を少し増やしただけで、千歳の魔法を押し返す。

「ぐっ・・・フルドライブ！」

千歳のバリアジャケットが浴衣へ。大剣が日本刀へ。

「こっのぉぉ！　もう一発！　爆流破！」

二発目。
それが効いたようで、千歳の魔法は一気にネクロノミコンの魔法を飲み込んだ。
二人分の魔力がネクロノミコンへ襲いかかる。

「はぁ・・・・はぁ・・・・キツッ」

「あなた・・・・・」

『何者ですの？』と聞こうとして、飲み込んだ。
今千歳がやってのけたことは、他の誰にも出来ないこと。

《咎人（トガビト）に、ここまでされるとは思わなかったな》

やはり無傷。
どれだけ攻撃しても、ネクロノミコンは届いていない。

「今日はよく喋るの。何かいいことでもあったか？」

《もちろんだ。我が宿願が、今日叶う。さすれば、我らが神が蘇る！》

ネクロノミコンの足下に現れた、巨大な魔方陣。
空気中の魔力が、ネクロノミコンの頭上に集まっていく。

「させません！」

リオルが魔導書を開き、ゼロがケロベロスを構える。

「待って！」

静止を叫ぶフェイト。
当たり前のことだ。
どのような姿だろうが、自分の兄が攻撃されるのは嫌なもの。

それが目の前で行われようとしているのだ。声が出ないわけがない。

「言いたいことはわかるけど、今は止めないと私達がやられるのよ」

「わかってる・・・・でも」

ネムの言葉は正しい。　それは分かっていても、やはり攻撃させたくはない。

だが、そんなことをしている間にも、魔力は集まっていく。

「いい加減に諦めなさい！　私（ワタクシ）も攻撃をしたくはないですの。ですが、今は戦い！　そこは区別をしなさい！」

「っ・・・・」

区別など無理だった。

どれだけ腕を動かそうとも、足を動かそうとも動かない。

動かせない。

「マモン・・・・システム『グリード』発動」

［ダメです。あの量の魔力を吸収すれば、相棒のリンカーコアがもちません］

「関係ない！　早く！」

［出来ません］

フェイトも千歳も動かない。

だが、ティアナは違った。手の形を銃に。人差し指をネクロノミコンへ向ける。

「ユゥイさん」

「あぁ。準備できてる」

二人の《罪》と《美徳》のオーラが、一気に膨れ上がる。

「「ディバイン・・・・」」

「ティアナ！」

「ユゥイ。お前、何する気だ」

「「バスター！」」

二色の砲撃はネクロノミコンの頭上へ向かう。

魔力の塊を消滅させるために、二人は放った。

《堕ちろ》

バスターが届くまで、あと半分。

魔力の塊は投げられた。

バスターは塊に飲み込まれ、さらに巨大化。落ちてくるスピードも速くなった。

「フェイトちゃん！　ティアナちゃん！」

千歳に腕を引っ張られたような気がした直後、意識を失った。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「ん・・・・」

意識を取り戻したフェイト。
目の前の惨状に、言葉を失ってしまった。
今まであった建物が一つ残らず消滅して、更地になっていた。
結界の中だからよかったが、これが結界の外だったらゾッとする。
そしてもう一つ。

「千歳！」

自分の目の前に倒れている千歳を見つけた。が、様子がおかしい。

「千歳。千歳、起き・・て・・・・」

うつ伏せだった千歳を抱き上げたフェイトは、生暖かい液体に気がついた。

「え・・・・血？」

千歳の腹部から大量出血。
完全に塞がっていなかった傷が、今の攻撃で開いたのだ。

《その咎人はもう使い物にならないようだな。都合がいい》

聞こえてきたクロノの声。
声のした方を見るとネクロノミコンと、その手に首を捕まれたリオル。

そしてリオルの胸からは、リンカーコアが取り出されていた。

「蒐集、するの？」

《そうだ。我が目的には、大量の魔力が必要だからな。これで、三人目だ》

「三人？」

手に捕まれているのはリオルだけ。では残りの二人は？

答えはすぐに見つかった。

ネクロノミコンの足下に、倒れているリーズと忍の姿があった。

「そんな・・・・」

《次は、貴様の隣で眠っている娘だ》

隣。

そこには気絶しているティアナがいた。

「させないわよ！」

ネクロノミコンの後ろに迫っていたネム。

完全に死角から飛んできたネムに、一瞬だけ反応が遅れる。

遅れたが、的確にネムの手首に手刀を落とし、宗近を手放させる。

「っ！」

丸腰となったネムを上から蹴り落とし、踏みつけた。

《焦るな、女》

「ぐ・・・・」

《では、蒐集開始だ》

光始める魔導書。

すると、リンカーコアも光始めた。

「があぁぁぁぁぁ！」

リンカーコアから魔力を、強制的に吸い出されていくリオル。

それを行うクロノの体を奪ったネクロノミコン。

それを見ていることしか出来ない、フェイトとネム。

フェイトの腕中でぐったりと眠っている千歳。

悪夢だった。

この悪夢から覚めてほしい。フェイトはそう思った。

だが、その術を誰も持ち合わせていない。

ギリッと、

＞フェイト・・・・＜

＞みーなさん。どこに？＜

＞どこかだよ。それよりも、わしの話を聞け。わしとユニゾンするぞ＜

完全に予想外の言葉だった。

＞私、ユニゾン適性――――＜

＞問題ない。わしとリリンは特別じゃよ。今からそこに行く＜

＞今すぐ？＜

どこかにいると言ったが、近くにいるような気配はない。

「フェイト」

「え？」

いつの間にか隣にいたみーな。その姿は、リリンと同じ３０ｃｍの小人だった。

「早くするぞ。千歳も危ないからの。それに、主の兄も救うのじゃろ？」

「・・・はい！」

抱えていた千歳を地面に寝かせ、フェイトは立ち上がる。

「「ユニゾン・イン！！」」

一つになる二人。

フェイトの髪の色は銀髪に、瞳は黒と銀のオッドアイに。

ユニゾンが終わるとすぐに、地面を蹴ってネクロノミコンへ近づく。

その速さはソニックムーブ以上。

「スタンインパクト！」

魔力変換で作り出した雷を、左手に纏い殴り付ける。

《ぬっ》

ネムを拾い上げようとしていたネクロノミコンは、素早く体を起こした。

そして迫ってくるフェイトの腕を掴み、捻り、叩きつける。

「かはっ！」

肺から全ての空気が押し出される。

《・・・・そういうことか。みーなとユニゾンしたらしいが、無駄だ》

地面とフェイトの間に爪先を入れ掬い上げると、掌を向ける。

掌には魔力弾。

それを打ち出す。

一発。十発。二十発。

全てがフェイトの体へ直撃。

＞ぐっ・・・・フェイト＜

「大丈・・・・夫」

着地したフェイトは、自分の周りに魔力弾を形勢。

「ファイ・・・・」

そこでフェイトは固まった。撃てなかった。
撃つことが出来なかった。
さっきは勢いで動けたが、今回は違った。ネクロノミコンの体がクロノと、また認識してしまったのだ。

＞何をしておる！＜

「だって！」

《やはりな。貴様がみーなとユニゾンしようが、その力を使いこなすのは不可能だ。
それに、この体は貴様の兄。攻撃ができるはずがない》

いつの間にか目の前に移動していたネクロノミコン。

「あ・・・・あ・・・・・」

《貴様からだ。魔力を頂くぞ、女》

近づいてくる手。
この場から逃げなければ。そう思うが、足は動いてはくれない。

「何をしていますの、フェイト・T・ハラオウン！」

二人の間を通りすぎる一本の矢。
直後に感じる浮遊感。

「大丈夫か？」

「ユゥイ・・・・」

パシィっと、乾いた音が聞こえた。

「っ！」

「死ぬつもりですの!?」

「違う！」

「では動かなかったのは？　体を動かせなかった、というのは無しですわよ」

下ではネムとゼロが、劣勢ながらも戦っているのが見えた。

「それは・・・・」

「それは？」

いくら考えても、フェイトの頭に答えは浮かんでこない。

「はぁ・・・これ以上は時間の無駄ですわね。ユゥイ。楠木千歳とティアナ・ランスターはあなたに任せます。
それと楠木千歳の治療はできますわね？」

「応急措置程度なら」

「構いませんわ。フェイト・Ｔ・ハラオウン」

「何かな？」

「次は助けはしません。それを覚えておきなさい。いいですわね」

それだけ言うと、ネクロノミコンへ向け急降下していく。

ユゥイも千歳とティアナのもとへ、急いで向かった。

＞フェイト・・・・整理は出来たか？＜

「まだ・・・・でも、やらないと。クロノを助けてあげないと」

＞そのためには武器じゃの。まず、利き手に魔力を集めることからじゃ＜

「利き手・・・・」

フェイトの左手に、オーラの魔力が集まっていく。　それだけでも、異常な魔力の量がそこにある。

＞次はそれに形を与える。簡単なのは、主のデバイスを想像するとよいの＜

「私のデバイス」

フェイトが想像したのは、サイズフォームのバルディッシュの姿。

魔力もそれに影響され、フェイトの想像したバルディッシュの姿となった。

＞《罪》の魔力は、使う者の思った通りに姿を変えることができる。覚えておくとよいよ＜

「うん・・・・」

魔力で作り上げたバルディッシュを振り上げる。
狙いは、ネクロノミコン。

「ハーケンセイバー！」

バルディッシュ（仮）から飛ばされた魔力刃は、回転しながらネクロノミコンへ向かう。
同時にフェイトも動き始める。
ハーケンセイバーを握りつぶした、ネクロノミコンの懐へ潜り込み、

（ゴメン、クロノ）

斜めに切り上げる。
だが、何かに阻まれ届かない。
だが諦めない。

「もう一回！」

再び構え、攻撃へ。
しかし、ネクロノミコンがそれを許してくれるはずがない。
フェイトの顔面へ、垂直に落とされる拳。
そこへ滑り込むように、日本刀の刃が姿を現した。

「ぐっ！」

拳を受け止め、衝撃で宗近の刀身が撓む。

「フェイトさん、今！」

「スタンインパクト！」

吸い込まれるようにクロノの、ネクロノミコンの顔へ、雷の拳が叩き込まれた。

＞魔力の制御はわしがやる。一ヶ所に集めるんじゃ＜

言われた通りに、フェイトは魔力を拳の先へ集める。

直後聞こえてきたのは、バキンッという音。

「ゼロ！　合わせなさい！」

「了解だ」

＞フェイト・T・ハラオウン。いいですわね？＜

＞うん！＜

フェイト位置から、アンナとゼロが魔力を溜めているのが見えた。

「はぁぁぁぁぁ！」

バキンという音が、再び聞こえてきた。

見ると、クロノの体にヒビが入っている。

（えっ！？）

＞どけなさい！＜

戸惑いながらも、フェイトはその場から離れる。

＞奇妙じゃの・・・・＜

みーなの言葉と同じことを、フェイトは考えていた。
なぜクロノにヒビが入ったのか。
それが不思議で仕方がなかった。

「デカディメントアロー！」

「サタンバースト！」

矢と魔力弾。
ネクロノミコンは避けることをしないで、直撃。
クロノの体は、砕けて消えた。

「なっ！？」

「砕けただと？」

「偽物！？」

＞・・・やられたのう＜

「どういうことですの！？」

＞あれは、魔力で作られた変わり身じゃよ＜

「じゃあ、本体は！？」

《ここだ》

ユゥイがいるはずの方向から、ネクロノミコンの声は聞こえてきた。

ネクロノミコンはティアナと千歳を抱え、倒れるユゥイの隣にいる。

《人形を動かしながら行動するのは、面倒だった。だが、貴様らが騙されていてくれたおかげで、蒐集がはかどった。礼として、この娘二人の蒐集の場面を見せてやる》

バインドが施され、二人の体が宙に浮かぶ。

そして胸から現れた二人のリンカーコア。

「止めて！」

フェイトが叫ぶが、無情にも蒐集は行われる。

「「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」」

二人の絶叫。

特に傷が開いた千歳にとっては、危ない。

「千歳が死んじゃう！」

動こうとしたが、いつの間にか自分達にもバインドで縛られていた。

「何これ？」

「えっ・・・・・」

この場にいたネクロノミコン以外の全員が、その声に驚く。
ここに来ることが出来ないはずの一真が、そこにいた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

十数分前
一真は部屋から追い出されていた。
理由は、着替えをさせるから。

「はぁ・・・・いつまで記憶喪失なのかな」

―さぁな。でもいいんじゃねぇのか？　このままでもよぉ。くくくく―

（ダメだよ。このままじゃ、みなさんに迷惑がかかるから。
でもどうしたら・・・・）

―まぁ、じっくり頑張れ。俺様から言うのは、それだけだな―

もう一人の自分はそう言っているが、一真は焦っていた。
原因は、あの嫌な予感。
思い出さないと、大切な何かを失ってしまう気がしていたから。

「そうするよ」

ドアにもたれ、窓から外を見上げる。
澄んだ青い空が見えた。

「っ！」

息が詰まるような気持ちの悪さが、一真を襲う。

「がっ！」

―またか・・・・―

今までで一番強いその予感に、一真は崩れ落ちる。

「行かなきゃ・・・・」

気持ちの悪さに耐え立ち上がった一真は、ゆっくりと歩き始める。
ただ、自分の直感で歩いていく。
自分が行かなければならない場所へ。

―――――――――――――

「ここ、だよね」

一真がたどり着いたのは、普通の住宅街。
何も起きていない。
フェイト達の姿も見えない。
だが、直感は言っている。
ここであっていると。

「でも・・・・っ！　ぐあっ！」

更に強くなった予感。
激しい頭痛と吐き気。

「何で・・・・がぁぁっ！　あ？」

突如収まっていく頭痛と吐き気。
体を起こして周りを見渡すと、住宅街は更地となっていた。

「ここって・・・・あれは？」

視界に入ってきたのは、フェイトに、アンナとネムとゼロ。
それと相対する、見たことのない男。
そして、その男に抱えられていく女の子二人だった。

「・・・・」

「「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」」

二人の絶叫が、この場に響き渡る。
それを見ていた一真は、無意識に呟いていた。

「何、これ？」

周りの音が消えていく。
周りが見えなくなっていく。
唯一見えているのは、男の目の前に浮いている小柄な女の子。

（あの子・・・・どこかで？）

ズキンッ
さっきとは違う傷み。
まるで内側から何かが、無理矢理出てこようとしているような。
そんな傷み。

「ぐぅっ・・・・・！」

「一真ぁ！」

「嫌だ・・・出てくるな・・・出てくるな！　出てくるなぁぁぁぁ！　あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

一真の頭の中に流れ込んでくる、大量の記憶。
その記憶は、一真自身が封じ込んでいたもの。
ラスト達と過ごした三年間。
アリスとの逃亡生活。
神無と過ごしてきた今まで。
そして、

「千歳ぇぇぇぇぇ！」

千歳との楽しかった記憶。
全ての記憶が蘇る。
楽しかった記憶も、封じたままにしておきたい記憶も。

「あぁぁぁぁ・・・・はぁはぁ・・・・《罪》、解放！」

一真の体を包む魔力のオーラ。
一瞬だけ縛られ動けないフェイト達を見るが、すぐに空へ向ける。

「フェイト・・・・」

「一真。記憶が・・・・」

「戻ったよ。思い出したくもなかったのにな」

殺気を籠めて睨み付けるが、ネクロノミコンは動じない。
千歳とティアナから蒐集を続けている。

「なぁ・・・・もう止めろよ」

《・・・・》

「止めろって言ってんのが、聞こえねぇのか！？」

《・・・・》

ネクロノミコンは反応しない。

「うぉぉぉ！」

飛び上がった一真は、まっすぐにネクロノミコンに殴りかかる。
その単調すぎる攻撃が届くはずもなく、

《目障りだ、人間》

手首を捕まれ、簡単に放り投げられた。
だが、一真は諦めない。
転移魔法を使い、ネクロノミコンの目の前へ。

《邪魔だと――――》

「落ちやがれぇぇぇ！」

突き出された拳は、ネクロノミコンの顔を捉える。
殴られ吹き飛ばされたネクロノミコンは、地面に叩きつけられる。
一回、二回とバウンドして動かなくなる。

「ぐっ・・・・」

落下する直前で、二人をキャッチ。
ティアナは規則正しく呼吸をしている。それに対して千歳は虫の息。
いつ呼吸が止まってもおかしくない。

「おい、千歳！　千歳！」

地上に下りたところで呼び掛けるが、返事はない。
意識も戻らない。

「頼むから目を覚ましてくれよ！　千歳ぇぇぇ！」

千歳の顔に落ちる雫。

「またかよ・・・また俺は失うのか？　嫌だ・・・嫌だ・・・・
あの時みたいな思いをするのは。姉さんを殺された時のようなことは嫌だ！」

瓦礫から体を起こして、ゆっくりと向かってくるネクロノミコン。
その体には傷はない。

「なぁ！　俺が何をした！　何で大切な人ばかり奪われねぇといけねぇんだよ！」

《・・・・》

そこが一真の限界だった。
膨れ上がったオーラは、柱となる。これは暴走するときの前兆。

「ああぁぁあぁぁぁぁああああ！」

魔力の柱の中に、叫び声だけを残して一真は消える。
その世界に訴えるような、悲痛な叫び声だけを残して。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

（憎い）

決壊したように流れ込んでくる、『憎い』という感情。
それに共鳴し、《罪》の力は増幅していく。

―くくく・・・・いいぜぇ、一真ぁ！　俺様を受け入れろ！　俺様の力を！　全て！―

「がぁああぁぁぁあ゛あ゛ぁ゛ぁ゛！　ぎえでなぐなれぇぇぇぇ！」

柱は膨張を始め、弾けた。

「・・・・・・・」

中から現れた一真の姿は、見間違えるほど変貌していた。
断髪だった髪の毛は背中の中程まで伸び、銀色だった瞳は漆黒に。
怒りと憎しみと悲しみに染まっていた表情は、全て削ぎ落としたかのように無。

「・・・・フェイト」

抑揚のない声。
声にすら感情は感じられない。

「な、何？」

「千歳を、頼む」

いつの間にか千歳は一真の腕の中から、フェイトの腕の中に移動していた。

「う、うん・・・・」

返事を返した次の瞬間には一真は消えていて、

「消えろ」

《ぐっ！》

ネクロノミコンを殴り付けていた。

「・・・・・・・」

始まる死闘。
それは片方が倒れるまで、絶対に終わらない。

《一真の部屋》

一真「完・全・復・活！」

千歳「イェーイ♪」

アリス「本編じゃ、とんでもないことになってるんだけど」

なのは「そうだね。それに何て言うか、タイミングがよすぎる・・・・偶々なんだけど」

千歳「というわけでゲスト紹介♪　今回は久々の登場。『なのはＳＳ・ｆｒｅｅｄｏｍ』より、阿倍隆浩君と弟の晶彦君です」

隆浩「ロリコン変態！」

晶彦「ペドナマケモノ！」

隆・晶「「死ね！」」

一真「テメェらが・・・・げっ！」

隆浩「チッ。やっぱり勘づかれたか・・・・だが、撃つ！」

晶彦「ファイアァァァ！」

千歳「今回だけはさせないよ！　マモン！」

アリス「待ちに待ってたから、すぐに記憶喪失は嫌だもんね」

隆浩「千歳様！　何で！？」

千歳「何でかな？　よく考えてみれば、すぐに分かるよ」

なのは「狼牙棒って。そこまでやる？」

一真「千歳・・・・」

隆浩「ぎゃあああぁぁぁ・・・・」

千歳「次は――――」

晶彦「ごめんなさい！　僕、兄ちゃんに無理矢理やらされてて・・・・本当はやりたくないのに」

千歳「そうなの？」

晶彦「はい」

一・な・ア

（（（絶対に嘘だ））））

隆浩「晶彦・・・お前・・・・」

千歳「喋っていいって言ってないよ？」

隆浩「ぐぼへっ！」

アリス「今回ばかりは隆浩が哀れすぎる」

一真「そうか？　そのまま死ねばいいだろ」

なのは「やっぱり。でも、隆浩君のためにも早く次のコーナーに行った方がいいよね」

アリス「たぶん・・・・」

晶彦「まだ早いと思うよ。もう少し痛ぶって・・・・」

一・千「獄龍――――」

な・ア「「お返事コーナー！！」」

バルディッシュさんへ

なのは「バルディッシュさんの言う通りだったね」

晶彦「でも、フェイト姉ちゃんも攻撃してたよ」

アリス「それでも無意識に手加減してるはずだよ」

隆浩「やっぱり甘いな。攻撃してくるんだから、本気でいかないと。オイラだって晶彦が敵になったとき、手加減はしてないぞ」

一真「俺もそうだな。そもそもしてて負けたら、本末転倒だ」

千歳「その割りには、神無お姉ちゃんが敵になったときは、あっさりとやられたよね？」

一真「・・・・・・・・うるさい！」

隆浩「やっぱり変態だな。ロリコンでシスコンは救いようがない」

一真「黙れ、クソマメ狐。捕まって剥製にでもなってろ」

一・隆「「あ〝ぁ〝？」」

鴨川秘さんへ

一真「記憶を元に戻す薬か・・・一応保管しておくか」

千歳「それはそうなんだけど、これ飲め♪　隆浩君も♪」

一・隆「「へ？」」

ボンっ！

晶彦「兄ちゃん！？」

アリス「どうなるか想像できるような」

なのは「たぶん、あれだよね。子供になる」

一・隆（幼）「「なんじゃこりゃあああ！」」

千歳「一真どうなっちゃったのかな？」

千歳以外
『今までの流れを無視した！？』

なのは「え、えっと、でもパワーアップしたのかな？　ネクロノミコンを殴ってたし」

アリス「そ、そうだね。次回が楽しみだよ」

隆浩（幼）「オイラ達は無視ですか！？」

一真（幼）「少しは弄れぇぇぇ！」

晶彦「はい、静かにねボクたち」

一・隆（幼）「ふざけんなぁぁぁぁ！！」

U．Tさんへ

千歳「また死にたいみたいだね～。スーパーノヴァ！」

なのは「人の技をコピーって、あり？」

アリス「気にしちゃダメだよ、なのは。ここでは普通だから」

一真（幼）「無事に生還か・・・・無理なんじゃねぇか？」

隆浩（幼）「ありそうなのは、力に耐えられなくてポックリと行ったりな」

晶彦「ねぇ、二人とも。そんなこと言ってると後ろ」

隆浩（幼）「後ろ？」

一真（幼）「死神が出るわけでもねぇだろ？」

晶彦「出たんだよ、死神」

フェイト「お話、しようか？」

一・隆（幼）「いやぁぁぁぁああ！」

な・ア・晶

「「「御愁傷様、二人とも」」」

麗×零さんへ

千歳「どっちで試そうかなぁ？」

一真（幼）「そんなもんを試そうとすんな！」

隆浩（幼）「いやだ！　絶対に死ぬ！」

なのは「確かにカッコいいと言えば、カッコいいかな」

晶彦「そんなこと言ってると、ユーノ兄ちゃんが泣いちゃうんじゃない？」

なのは「え。どうしてユーノ君が泣いちゃうの？」

アリス「・・・・ダメだこりゃ」

なのは「ねぇ、どうして？　ねぇってば！」

千歳「Ｘバーナー！」

一真（幼）「爆流破！」

隆浩（幼）「ナイスだ、ナマケモノ！」

一真（幼）「・・・・転移」

隆浩（幼）「何ぎゃあああわぁあ！」

ＮＫさんへ

一同『・・・・』

一真（幼）「面白くねぇな、クソガキ」

アリス「というか、真面目すぎるね」

なのは「でも、コメントは間違ってないよ」

千歳「そうなんだよ。システム《グリード》無かったら、多分あの結界は壊せなかったし」

隆浩（幼）「あの酢昆布だったか？　本当に薄いな」

なのは「でもまぁ、それが忍くんの武器なんだから」

晶彦「でも、あそこまで薄いと引くよ」

忍〔僕は、好きで薄くなったんじゃ――――〕

アンナ〔うるさいですわよ、薄いの！　叫んでる暇があったら、さっさと仕事を終わらせなさい！〕

ブツッ

一真（幼）「気にしないことにするか・・・・」

ＴＯＵＤＡさんへ

千歳「恋する・・・・」

アリス「あー、また」

隆浩（幼）「でもそうだろ？　千歳様って――――」

なのは「はい。それ以上は言わないようにね」

一真（幼）「昼ドラ以上のドロドロでも、まぁいいんじゃねぇか？」

晶彦「じゃあ、一真さんはアッシュが勝ってもいいの？　間違えでも勝っちゃうかもしれないよ」

一真（幼）「ごめんなさい。千歳で、いや千歳がいいです！　つーわけで、ＴＯＵＤＡさんへ獄龍破！」

アリス「あーあ。今ので千歳が・・・・」

千歳「私がいい・・・・一真が私がいいって・・・・」

なのは「完全に許容量超えちゃったんだ」

一真（幼）「よくわかんねぇが、次回予告だな」

阿倍兄弟「「鈍感だな～」」

アリス「記憶を取り戻した一真は怒り、そして《罪》の力を爆発させた」

なのは「一真君とネクロノミコンの力は、ほぼ互角。時間が経つにつれ、その戦いは激しさを増していく」

一真（幼）「終わらない死闘。その結末は」

隆浩「次回、魔法少女リリカルなのは～七つの大罪～」

晶彦「【ａｄｅｓｐｅｒａｔｅ　ｓｔｒｕｇｇｌｅ】」

一同『次回へ、スタンバイレディ！』

悪夢（後書き）

いかがでしたでしょうか？
次の更新はテストのため遅れます。すみません。

そして次回の後書きコーナーは神藤旭達、『魔法少女リリカルなのはＣＰ』からの皆さんです。
それではまた。

a desperate struggle（前書き）

お待たせしました。
書いてて気がついたんですが、まだ一真の退院パーティが行われた日なんですよね。
誰か気がついていた方いますか？
なかなか終わらない1日。
いつになったら終わるのか。
はぁ・・・・では、始まります。

a desperate struggle

振り下ろされる、一真の左脚。
それを横に移動して避ける。
代償として、地面に一本の巨大な傷が出来上がる。

《消えろ》

突き出される右の掌。
その掌から放たれたのは、強大な魔力が込められた砲撃。
それが、攻撃直後で動けない一真を襲う。
だが、一真はそれを殴って曲げる。

「ぐふっ・・・・」

直後一真の体が、くの字に曲がった。

「・・・・捕まえた」

自分を殴っている拳を掴んで急上昇。
そして急降下。
地面へ叩きつける。
ネクロノミコンを中心に、蜘蛛の巣状にヒビが広がっていく。

「羅號（ラゴウ）・・・・」

仰向けになっているネクロノミコンの顎に突き刺さる、魔力のこもった一撃。　クロノの体は地面を滑っていく。

《レイン・スウォーム》

一真へ降り注ぐ魔力の雨。
それを放ったのは、今殴り飛ばされたはずのネクロノミコン。

「邪魔だ」

魔力で造ったサタンを、右から左へ振り抜く。
霧散する魔力。
すぐさまサタンを逆手に構え、

「ふんっ！」

ネクロノミコンへ、思いっきり投げつけた。
それを裏拳で砕くと、一真へと真っ直ぐ向かう。
一真も地面を蹴って飛び上がると、向かってくるネクロノミコンへ飛んでいく。

「死天――――」

《レイヴン・ライザー》

聞き覚えのある名と、見覚えのある砲撃。
魔力光の色はネクロノミコンの物だが、ユゥイの砲撃魔法で間違いなかった。
ユゥイと違う点があるとすれば、魔力量の違い。
そのおかげで、壁が迫ってくるように見える。
それを確認した一真は、腕に集中していた魔力を増幅。そして凝縮させた。

「閃破」

振るわれた腕から放たれた、漆黒の刃。
ぶつかる魔法は、二人の間で相殺。

《・・・貴様、本当に人間か？》

「だったら何だ？」

《それだと色々とおかしいな。今、貴様から溢れる魔力の質・・・・
人間のそれには感じられない。
堕天した者達に酷似している。いや、それと同じだ》

「だからどうしたよ」

いつの間にか一真の手には、千歳のデバイスのマモンが握られていた。

「マモン、手伝え」

［了解です、神童一真］

直後、マモンは片刃の大剣へと姿を変える。
振り下ろされたマモン。
生み出された衝撃波は、空を走る。
それに対し、ネクロノミコンは腕を一振り。
直後、これまた見覚えのある現象が起きた。それは、一真や千歳が使う爆流破と同じ竜巻が巻き起こっていた。

「面倒だな・・・・」

そう呟く一真だったが、焦った様子は見受けられない。
マモンの刀身を撫でた後、向かってくる竜巻を切った。すると、竜巻は形を保てなく崩壊。マモンに吸い込まれていく。

「マモン。もつな？」

［出来れば、五分以内に放出していただければ・・・・］

「わかった」

一真が行ったのは、自分の放った魔力と、ネクロノミコンをマモンの刀身に纏わせるというもの。
これならば、リンカーコアには魔力は流れ込まないため、負担は一切ない。
だが、その魔力を纏っているデバイス自身。一真とネクロノミコンの膨大な魔力を纏っている。そのためタイムリミットがある。
マモンの場合は五分が限界。それ以上は、マモン事態がもたなくなってしまう。

「ふんっ」

十字に振り抜かれるマモン。
振り抜かれた後には、十字を描くように魔力の短剣が並ぶ。その数、４８本。
それを打ち出すために、もう一度振るう。

《ちっ》

向かってくる短剣を一掃するため腕を振るうが、

《ん？》

意志があるかのように動き、その一撃を避ける。

《面倒だ・・・・っ！》

転移魔法で近づいた一真は、顔面へ向け蹴り上げる。
それをギリギリで受け止め、動けない一真を殴りつけた。

「ぶっ」

踏ん張る。
飛ばされないように、片足で踏ん張るがすぐに、限界が来た。
だが、ただでは飛ばされない。

「紅之太刀惨式・天魔裂牙！」

マモンが纏う魔力を全て使い放たれた一撃。
それは獣のように牙をむき、ネクロノミコンを飲み込もうとする。
同時に浮いていた全ての短剣が、一気に突撃を始めた。
一真は地面に叩きつけられ、ネクロノミコンの姿は爆煙の中へ消えた。
静けさを取り戻す戦場。
それもつかの間。
一真は自分に被さっている瓦礫を吹き飛ばし、ネクロノミコンは爆煙を払いのけて、再び姿を現す。
今の一撃で漸く、ネクロノミコンの体に傷が付いた。

「ちっ・・・・」

だが、決定的なダメージではない。

《・・・・》

二人の目と目が合う。

直後、二人は消失。

戦場には音が響き始めた。

それは一真とネクロノミコンがぶつかる音。

一度目に聞こえると大気が震え、二度目に聞こえると大地が抉れる。

どちらかが吹き飛ばされて姿を見せても、すぐにその姿は消える。

その音が何度聞こえただろうか。突然轟音を響かせ、二人の姿が現れた。

「かはっ！」

結界の中心に出来上がったクレーター。

その真ん中には、ネクロノミコンに喉を捕まれ地面に張り付けられている、一真の姿があった。

《ここまでだ。人間にしてはよくやった方だ》

空いている左手に集まる魔力。

そこだけ歪んで見えるのは、気のせいではないだろう。

《果てよ、人げ――――》

「全力で・・・・拒否、させてもらう」

一真の体から放出された、異常なまでの量の魔力。

それに吹き飛ばされる寸前、ネクロノミコンはその場から離れる。
仕切り直し。

「マモン。サタンのフルドライブは記憶してるな？」

［もちろんです］

すぐにマモンの姿は片刃の大剣から、漆黒の日本刀へ。サタンの、神無のフルドライブ、神道・神無へと姿を変えた。
それを握る一真は、魔力を籠めてマモンを振る。
それも一回ではなく、五回。その回数分だけ刃は放たれる。

《ちぃ・・・・》

この刃は受けるのは得策ではない。そう感じたネクロノミコン。
全てを避けるために、浮上する。

《！》

地上にいたはずの一真が、ネクロノミコンの移動した先にいた。

「ふんっ」

魔力を籠めて、全力で殴り付ける。
本来なら防ぐことができるはずの一撃を、ネクロノミコンは防ぐことが出来なかった。
一瞬だけ間に合わなかったのだ。
地面に叩きつけられたネクロノミコン。一真は彼を殺意を籠め、睨み付けていた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

上空で行われている二人の戦い。
それに誰も入り込む隙はなかった。入り込んだ時点で、確実に死ぬと感じていた。

「あれ、神童君なの？」

フェイトも答えにくかった。
一度だけ見たことのある一真の暴走。その時は、あのように容姿が変わることはなかった。
だが今回は違う。一目見ただけでは一真と分からないほど、姿は変わってしまっている。

＞先代・・・・＜

「みーな？」

＞何でもないよ。それよりも、ユニゾンは解除する。よいの？＜

聞いたみーなだったが、フェイトが答える前に解除。

「隊長。私達はどうする？」

「悔しいですけど、ユゥイ達を回収してここから離脱します。フェイト・T・ハラオウン。いいですわね？」

「・・・・残る」

「何言ってるの!?」

「だって、クロノがっ・・・・・」

倒れるフェイト。

「世話が焼けるのう。小娘」

「小娘ではありませんわ。あなたこそ、ユニゾンデバイスの――――」

「力量を弁えぬと死ぬぞ、小娘」

異常なまでの緊張感と恐怖が、四人を包む。

「っ!」

四人は動けない。

指一つ動かすことが出来なくなった。

「さて、これからじゃが・・・・わしは残る。で、主らは、フェイト達を連れて帰れ」

「それは俺たちだけじゃなく、あなたもだろう?」

「わしはユニゾンデバイスじゃぞ。その対象がちゃんと、あそこにおる」

みーなは今戦っている一真を指差した。

「それなら私達でも――――」

「無理じゃよ。まぁ、ユニゾンした瞬間、存在ごと死んでもいいのなら構わぬがな」

「それってどういう・・・・」

「誰の記憶にも残らず、存在していたという証も残さずこの世から消えて“無くなる”、ということじゃよ。まぁ《罪人》か、それに準ずる存在なら別じゃがの」

とんでもないことを、表情を変えず説明する。

そんなみーなが怖かった。

「で、わかったかの？」

「分からないって言ったら、どうするつもりなんだ？　私達を殺すのか？」

「極端すぎじゃ。まぁ、分かるように“説得”して送るまでの話よ」

“説得”という言葉に引っ掛かりを覚えたが、抵抗する気は初めからなかった。

ここで自分達が出来ることは、何一つないのだから。

「ネム、ゼロ、リーズ。忍達を回収して、ここから撤収します」

「「「了解」」」

「そうそう、小娘。帰る前に、伝言を頼まれてほしいんじゃが」

「何ですの？」

「リリンは知っておるの？」

そう言われ、アンナの脳裏にはいつも鈴蘭とみーなと一緒にいる、ミ●ノ製のバットを持った少女の姿が思い出される。

一度だけ話したことがあった。が、言われたことや話したかたから、ムカつく小娘として記憶していた。

そんなことを思い出しながら、アンナは頷く。

「ではの、『先代が見つかった』。そう伝えてほしいのじゃよ。くれぐれも、他の誰にも聞こえぬように。

とくに、鈴蘭にはの」

「それだけでいいんですの？」

「うむ。それだけで、リリンは理解するはずだからの」

「・・・分かりましたわ」

そう返事をして去っていくアンナに背を向け、みーなは一真のもとへ向かう。

今の戦場では、見るものによっては音しか聞こえない、と答えるものもいただろう。

だが、みーなには一真とネクロノミコンが見えていた。

異常とも言える速さで動きながら、死闘を行っている二人の姿が。

「・・・やれやれじゃのう」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「ぐふっ！」

腹を蹴り上げられ、上昇を始めた一真の体。
ネクロノミコンも追いかけ、跳び上がる。
一真はすぐさま転移して、ネクロノミコンのもとへ。
構えていた一真は、ネクロノミコンの胴を二つにするようにマモンを振り抜く。
それを予測していたかのようなタイミングで、振り上げられた脚。
マモンは弾かれ、一真の手から離れていく。

「イーラ・・・・」

一真の右手の掌に集まっていく、空気中の魔力。
右手のそこだけが歪んで見える。１０人中１０人が、そう答えたかもしれない。
いや、間違いなく答えただろう。
それだけそこは異質だった。

「カンノネッジャメント」

放たれる砲撃。それはほぼゼロ距離で撃ち出された。
二人を包む爆煙が発生する。
そこから先に姿を表したのはネクロノミコン。

《ぐぅ・・・・》

その表情は、今の一撃を喰らったことによって歪んでいた。

「ほぅ・・・珍しいこともあるものじゃのう、ネクロノミコン」

《貴様・・・・》

そこにいたのは、小人の姿のままのみーな。

《何をしにきた？　その姿のままで戦えまい》

「忘れたか？　わしは融合騎じゃぞ」

何かを答えようとしたネクロノミコンを邪魔するように、魔力弾の雨が降り注ぐ。

「話している余裕があるのか？」

《罪》の魔力でされた生成された槍。それを持って、一真は魔力弾と共に落下してくる。

「はぁ・・・・」

盛大にため息をついたみーなは、光の玉となり一真と一つとなった。

＞力に飲まれてどうする。この戯けが＜

一真の頭の中に直接響くみーなの声。

だが、一真には届かない。届いていたとしても、一真は答えない。

今の一真には、楠木千歳という大切な人を傷つけた、ネクロノミコンという存在しか見えていなかった。

みーながため息をついた理由は、それが分かっていたから。

「ふんっ」

投げられた槍は、目標であるネクロノミコンを貫くため、加速しながら突き進む。

しかし、その攻撃は一直線過ぎた。

ネクロノミコンの一撃で破壊された。それに隠れていており、見えていなかった二発目。

それも難なく破壊して、気配を探る。すでに、さっきの場所にいないのは分かっていた。

《・・・・》

一真の気配はすぐに見つかった。

後ろから高速で突進してくる。

それでもネクロノミコンは焦らない。振り替えることなく、その場で宙返り。

突進を避けられた一真は、止まることができずネクロノミコンの下を通過してしまった。

「っ・・・・」

急停止して見上げれば、魔導書を開き、攻撃の準備をしているネクロノミコンの姿が見えた。

一真はすぐさま方向を変え急上昇。

それでもネクロノミコンが準備完了するほうが、はるかに早かった。

《スターライト・・・・》

その名を聞いて、一真は止まる。というよりも、急上昇を続けるのは危険であった。
そして再び方向を変える。
ネクロノミコンの前にある魔力弾は、なのはのそれよりも巨大すぎた。

《ブレイカー》

淡々と告げられた魔法名と言う死刑宣告。
放たれた漆黒の砲撃。
その魔力量は、一真一人に向けられるには多すぎ、異常すぎた。
それを回避するため、全力で空を飛ぶ一真。
それでも逃げ切れない。
そう一真も感じた瞬間、体の下に現れる魔方陣。
それは一真が展開したものではない。

＞世話が焼けるのう＜

そう。この魔方陣は、一真とユニゾンしているみーなが、独断で展開したもの。
そして一真の姿は、漆黒の砲撃の射程内から消え去った。

「紅之太刀壱式・・・・」

次に現れたのは、攻撃最中のネクロノミコンの頭上。
一真の手には、弾き飛ばされたはずのマモンが。
今転移した時に回収し、ここに現れたと言うわけだ。

「煉刃」

通常時よりも巨大な魔力の刃が、ネクロノミコンへ向け降ってくる。
攻撃中のネクロノミコンは隙だらけ。の、はずだった。

《無駄だ、人間》

まるで後ろに何があるのか、わかっているのかのような口振り。
スターライトブレイカーはすでに消えていた。
だが、あの強大な一撃は更地だった地面に巨大な傷を。結界には直撃しないでも、余波だけでヒビが入っていた。
動こうと思えばいつでも動けるはずなのに、ネクロノミコンは動かない。

「ん？」

一真の放った魔力の刃は、ネクロノミコンまであと数センチという所で何かに当たり、砕けて消えた。

《言ったろう。無駄だ、と》

「ふざけるな・・・・死天」

マモンの刀身に巻き付くように顕現した、三匹の黒き龍。
それが一つとなり、漆黒の魔力刃が形成される。

「龍封刃」

空高く伸びた魔力刃。
ネクロノミコンへ降り下ろされていく魔力刃は、結界を切り裂い

ていく。
この魔法に対してネクロノミコンは動いた。
魔力刃の軌道は縦一閃。
そのすぐ隣を飛び、一真へ近づいていく。

「落ちろ、ゴミ」

突然止まる魔力刃。
そこでネクロノミコンは気がついた。自分のいる位置と、魔力刃の位置に。
だがすでに遅い。
魔力刃はすぐそこまで迫っていた。

《っ！》

魔力刃を叩きつけられて吹き飛ばされる。
向かう先は戦場と外の境界となっている、ヒビの入っている結界。
直撃する直前でネクロノミコンは止まる。

「ちっ・・・・」

ネクロノミコンも黙って一真を見据える。
一真の中にいるみーなだけは、

＞結界も、そろそろ限界かの・・・・さて、どうするか＜

壊れていく結界を見ていた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

『・・・・・・・・！』

闇の中、クロノは誰かの声を聞いたような気がした。
だが闇の中にいるのはクロノ一人。気のせいだと瞼を下ろす。

『・・・・さい・・ター！』

さっきよりも近くで聞こえてきた。
声の主はおそらく女性。
目を開き見渡すが、やはりそのような影は見当たらない。
探すのを諦め、もう一度瞼を下ろそうとしたときだった。

『起きてくださいマスター！』

三度目。今度ははっきりと聞こえた女性の声。

「誰かいるのか？」

『よかった』

安堵の声と共に、クロノの目の前に光が集まり、その姿を現した。
髪はセミロングで色は銀、瞳は深紅。服装はフリルのついた、真っ黒なドレス。
その容姿は１０人に聞いたら１０人が美少女というだろう。

「君は・・・・」

『私はネクロノミコンの管制人格、アル・アジフといいます。アルとお呼びください、マスター』

自分の事をマスターと呼ぶ、ネクロノミコンの管制人格のアル・アジフ。
その表情はすぐに曇った。
『ごめんなさい』
「突然謝られても困るんだが・・・・」
『本来ネクロノミコンの蒐集プログラムは、私が押さえておかなければいけなかったんです。ですが、今の蒐集プログラムは魔力を蒐集したことによって――――』
「管制人格である君よりも、ネクロノミコンに対して影響力を持っている。ってことか」
『はい。ですから、私はとっさにマスターの意思を、蒐集プログラムの届かない奥深くに連れてくるのが精一杯でした』
「そうか。じゃあ、今僕の体を使っている蒐集プログラムは、何をしているんだ?」
その質問に、アルは答えづらそうに口を開いた。
『マスターの記憶を手繰り、今は地球の海鳴市という場所で蒐集と戦闘を行っています。ですが・・・・』
「どうしたんだ?」
『マスターはこの方々のこと、ご存知ですよね?』

と言ってアルが見せた写真にはフェイト、ティアナ、一真、千歳、みーな、そして《断罪の鎌》のメンバーの姿が写っていた。

「あぁ」

『現状で五人の方が蒐集されました』

写真の中から消えるティアナ、千歳、忍、リオル、ユゥイの姿。

この五人がネクロノミコンに蒐集されている。

『そして今、彼が』

ズームされる一真の顔。

『彼が、今我々と戦っています』

そこまで聞いて、クロノは不思議に思った。

自分が地球を出発した時点では千歳は戦闘での負傷で入院中。一真に至っては記憶喪失だったはずと。

「そとの様子は見たいんだが、出来るか？」

『それは何とか』

アルがクロノの額に触れる。

するとネクロノミコンの蒐集プログラムが見ている外の様子が、クロノの瞳に写った。

「これが、神童か？」

クロノが見たのは、全くの別人のようになった一真。

おそらく、最初に元の姿を見せられていなければ、一真とは考えるのは不可能だっただろう。

「嫌な予感しかしないな・・・・アル」

『何ですか、マスター？』

「外で起こっていたことを、順に僕に説明してくれないか」

『はい・・・・』

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

バニングス邸でユゥイ達の看病を終えたアンナ達は、はやて達に状況説明を行っていた。

「という訳ですわ。最初に言っておきますが、あの場に行こうと思わないように。神童一真の邪魔になるだけですわよ」

動こうとしていたはやてと鈴蘭は、アンナに釘を挿され動けなかった。

そこへアンナは追い討ちをかける。

「今の神童一真は楠木千歳を蒐集され、虫の息となった場所に遭遇し、私にはよくわかりませんがおそらく《罪》の力を暴走させていますわ。

それも、私達が全く太刀打ち出来なかったネクロノミコンに、一撃を入れることが出来るまでに。

ここにあなた達が割り込めると思いで？」

そこまで言われて、悔しそうにしていた。

「ねぇ、アンナさん。千歳、傷が開いたのよね？」

「えぇ。ネクロノミコンの広域魔法が原因で・・・・私はその時気絶してましたから、よく知りませんけど」

「そう・・・まぁいいわ」

アリサはまた考えるようにうつ向いてしまった。

「あ、そういえばアンナ」

「何ですの？」

「あなた、彼女から何言われてたの？」

「彼女から・・・あぁ、そうですわ。神童鈴蘭。あの小娘。リリンとか言いましたわね。どこにいますの？」

「リリンなら――――」

「ずっとここにいるの。さっさと気付けなの。この鈍感、なの」

殺してやろうかと考えたが、立ち上がりリリンの元へと向かう。

「あなたに伝言がありますの。着いてきてくださいな。神童鈴蘭には聞かしてはいけないようなので」

そう言うと、リリンは黙ってアンナと部屋を出ていった。

それは珍しく、リリンの性格からしてあり得ないことだ。彼女はそうそう素直に動きはしないのだから。

「それで何なの？」

「・・・ここならいいですわね」

二人がいるのは、あっちからの声も、こちらからの声も聞こえない位置。

そこまで来て、アンナはみーなからの伝言を声に出した。

「あの着物を着た女からの伝言ですわ。『先代が見つかった』」

「・・・それは本当にみーなからで間違いない？」

「えぇ。彼女の口から聞きましたもの」

「わかった、なの」

それだけ言って、リリンはトコトコ歩いて行く。

「これで私の仕事は終わりですわね」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「・・・・」

「アリサちゃん？」

すずかが名前を呼ぶが、アリサは反応しない。

それだけ深く思考しているということになる。

（やっぱりおかしい・・・・アンナさんの言ってた通りだと・・・・）

突然立ち上がったアリサは、真っ直ぐある所へ向かう。

あるところとは、千歳の眠っている部屋。千歳だけは個室にしていたから、どの部屋かは覚えていた。

（あたしの目がおかしくなかったら、千歳の体には傷はなかった・・・・入院の原因となったっていう刺傷も）

千歳の服を着替えさせたのはアリサ。

だからアリサは、千歳の体に傷がないことを知っていた。

（一応、もう一回確かめておく必要がありそうね）

そんなことを考えながら扉を開けたアリサは、部屋の中を見て絶句した。

ベッドはもぬけの殻。

そして部屋に備え付けてある窓は全開で、カーテンが風に揺れてる。

「・・・・」

千歳の姿は部屋のどこにもなかった。この部屋から脱走していた。

《一真の部屋》

なのは「突然だけど一真君！」

一真「な、何だよ？」

なのは「千歳ちゃんのこと、どう思ってる？」

一真「は？」

アリス「だからなのはは、一真が千歳のことを女の子としてどう思ってるか、知りたいんだと思うよ」

一真「・・・・・・・・」

アリス「一真？」

なのは「一真君？」

一真「うーむ・・・・特にねぇ」

千歳「へぇ・・・・そっかぁ」

一真「え、ちょっ、千歳！？」

千歳「何かね、ムカムカするんだよ。たぶん、一真をボッコボコにすればスッキリするかな。じゃあ、マモン」

マモン［お、ＯＫ、相棒］

一真「ち、千歳さん・・・・って、ぎゃあぁあああぁ！」

なのは「私達が原因なんだけど、いいよね？」

アリス「大丈夫大丈夫♪　それじゃ今回のゲストの紹介」

なのは「今回は『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　Ｃａｌｉｖｅｒ&ａｍｐ;Ｐｈａｎｔｏｍ』より神藤昶君、赤羽千華ちゃん、リセ・インヴァース、シン・ルークスです」

千華「お久～♪」

リセ「お邪魔します」

シン「失礼する」

昶「今回は無事に――――」

アリス「幽霊だ！」

昶「俺は死んでねぇぇぇぇぇ！」

アリス「千華は久しぶり♪　リセとシンは、こっちは初めてだね」

リセ「はい。ですから、よろしくおねがいします」

アリス「うん。で、注意事項」

シン「注意事項？　そんなものがあるのか？」

なのは「そう。普通にしてるぶんにはいいんだけど、千歳ちゃんを絶対に敵に回さないこと」

千華「回したりしたら、ああなるわよ♪」

千歳「次、狼牙棒。今日の晩御飯は、ハンバーグだね♪」

一真「た、たす・・・けごぼふぅっ！」

千歳「えい♪　えい♪」

昶「一真ぁぁぁぁ！　あんたら鬼か！？」

千歳「うるさいよ、昶君。千華ちゃ～ん。千華ちゃんも晩御飯はハンバーグがいい？　それとも焼き肉？」

千華「焼き肉でお願い」

千歳「わかった。というわけで、次は昶君ね♪」

千華「あんな感じ」

リセ「あははは・・・」

シン「完全に巻き込まれたな」

アリス「そしてもう一つ。ここでのなのはは、本編よりも黒――」

ヒュンッ

なのは「何訳の分からないこと言ってるのかな～。私は黒くないよ、アリスちゃん♪

※副音声（お話しする？　いいよ、私は。でも、手加減って言葉知らないから、どうなってもゴメンね♪　あはははは♪）」

アリス「そ、そうだよね。なのはは黒くないよね。あはははは・・・・」

シン「自業自得だ。少しは言葉を――――」

なのは「テメェは何を言ってるのかな？　吹き飛びたいなら、そう言ってくれないと分からねぇよ？」

リセ「な、なのはさん。そろそろ・・・じゃないと時間が」

なのは「そうだね。あっちは、千歳ちゃんに任せておいて私達はお返事コーナーに行こう♪　いいよね、みんな？」

ア・華・リ・シ
『はいっ！』

バルディッシュさんへ

なのは「クロノ君から、ネクロノミコンの意思を引き剥がす方法かぁ・・・・」

シン「色々と考えてくれたようだが、この答えあの中にあるのか？」

アリス「さぁ？　どうだろうね。でも、そのため鍵はちゃんとあるらしいよ」

千華「鍵・・・・そうだ、アッキー君は？」

昶「その名前で俺を思い出すなぁぁぁぁ！」

千歳「何で逃げるかなぁ？　あんなふうになれば楽だよ」

リセ「ここに来たときの昶さんって、いつもあんな感じで？」

な・ア・華

『うん。いつもあんな感じ』

鴨川秒さんへ

一真「え、エリクサーだ・・・・ぷはっ！　復活だぁ！　さ～て、千歳ぇ。お仕置きの時間だぜぇ」

千歳「い、いや・・・・」

一真「問答無用じゃぁぁぁぁ！」

千歳「うにゃあぁぁあぁぁぁぁ！」

アリス「はい。後ろは無視してね。それにしても、祇帰からのお土産を残しておいて正解だったね」

リセ「色んなお菓子がありますね。これなんか美味しそうですよ、旭さん」

昶「・・・・ん？　これ、生八つ橋か」

なのは「それは・・・いや、何でもないよ」

昶「いや、何か食べたく――――」

千華「食べなさいよ」

昶「でもな――――」

シン「お前に拒否権は無いようだぞ。周りを見てみろ」

昶「え？」

な・ア・華・リ
『じーーーーーー・・・・』

昶「くっ・・・食えばいいんだろ！　食えば！」

パクっ

昶「かっっっっらぁぁぁぁぁぁ！」

NKさんへ

ブッチィッ

一真「ラディくぅん。そんなぁに、死にてぇかぁ。いいぜぇ。ぶっっっ殺してやるからよぉぉぉぉぉ！」

アリス「あーあ。ま、今回も無視無視」

昶「あの暴走ってちゃんと意識あるみたいだけど、大丈夫なのか？」

なのは「どうだろ？　私達はその場にいないし、一真君は・・・・あんなだし」

一真「獄龍破ぁぁ！」

リセ「自分の分身を造って、それを動かす。それって凄いことですよね」

シン「凄いことと言うよりも、あり得ないだろう。おそらく奴だからこそ出来る芸当だな」

千歳「ねー、千華ちゃん」

千華「何？」

千歳「昶君がクロノ君みたいになったら、どうするの？」

千華「間違いなく殺るわね。躊躇はないわ」

昶「いや、躊躇しろよ」

二階堂さんへ

リセ「旭さんってロリコンだったんですか！？」

千華「そうよ。だから今日は、千歳さんをお持ち帰りするために来たらしいわ。ねぇ？」

昶「ちげぇよ！」

一真「ほぅ。昶ぁ。テメェも死にてぇか・・・くははははは！死ねやぁぁあぁぁあぁ！！」

昶「ぎゃあぁああ！」

なのは「作者さんとしても、あそこまで強くなると予想してなかったみたいだよ」

シン「あれだけやって無傷だからな。おそらく防御壁を張っているのだろうが」

千歳「私の一撃でもダメだったからね。どうしたら届くんだろ？」

なのは「確かなことは、今のところ対抗できるのが一真君だけってことかな」

麗×零さんへ

アリス「私としては、一真にはそんな風になってほしくないな」

千歳「同じだよ。もう一真には、そんなことしてほしくないもん」

千華「あんたら同じＫＤＧでしょ。何でそんなに仲が悪いのよ？」

一真「あのゴミクズが、最初に喧嘩を売ってきたのが悪い！」

シン「喧嘩を売ったのは一真からじゃないのか？　俺にはそうしか思えないんだが」

昶「というか、確実にお前だろ」

リセ「そんなこと言ったら・・・やっぱり」

一真「テメェら。あれの味方するなら、ぶっ殺すぞ」

なのは「はぁ・・・一真君。そろそろ静かにね♪　じゃないと、消すよ」

一真「・・・・・・・・はい」

灰色の野良猫さんへ

一真「《罪》の魔力を使って武器を造るのは、いろいろと条件がいるんだよ。だから、そう簡単に出来ることじゃねぇんだよ」

リセ「みーなさんとユニゾンや、一真さんのように暴走するのも条件の一つなんですね」

一真「そういうことになるな」

昶「ネクロノミコンかぁ・・・俺、勝てるかな？」

アリス「無理なんじゃない？　だって、十一人で倒せなかったんだ

から」

なのは「一応、今の一真ってネクロノミコンの力は、ほぼ同じなんだよね」

千華「でもネクロノミコンって、クロノの体使ってるんでしょ？体もつの？」

千歳「どうかなあ？　ネクロノミコンが魔法で、クロノ君の体を強化させてたら別だよね」

シン「だが、そうしないと無理だろ。クロノよりも、確実にネクロノミコンの方が強いのだから」

千歳「そうだね」

ＴＯＵＤＡさんへ

一真「ちっ、ミスったか」

アリス「ほぼ全滅にまで追い込んだ一撃って、元気玉に似てるよね」

千歳「私にも使えるよ、元気玉！」

昶「使うのとは全く別ですよね。確実に」

シン「そんな余計なことは言わない方がいいんじゃないか？　さっきの一真の時と――――」

千歳「えいっ♪」

ザシュッ

昶「ぎゃあああぁあぁああ！」

リセ「この写真の一真さん、可愛いですね」

千華「いい写真手に入れたわ。これを・・・・」

一真「あのクソ狐ぇぇぇ！」

アリス「はい、どうどう」

なのは「そろそろ次回予告だね」

千歳「今日はありがとね、みんな♪」

千華「いいのよ。旭の死体が出来上がらなかったのが、残念でしょうがないけど」

昶「うぉい！」

なのは「いつも貰ってばかりだから、お土産として私とアリスちゃんの合作ケーキ」

リセ「ありがとうございます」

アリス「昶のより上手にできてないけど」

シン「問題ない。千華よりも――――」

千華「ふんっ！」

シン「ごふっ」

一真「じゃあ次回予告だ」

なのは「終わることのない戦いを続ける、一真君とネクロノミコン」

アリス「その戦いは、結界より外へと広がっていく」

一真「その頃クロノは、闇の中で出会ったアルと準備を始めていた」

昶・華「「次回、魔法少女リリカルなのは～七つの大罪～」」

シ・リ「「【届く声】」」

一同『次回へ、スタンバイレディ！』

a desperate struggle（後書き）

二階堂さん。いかがでしたでしょうか？
リセとシンのセリフが、少ないような気がしてならない自分ですが・・・・。
次回は、『魔法少女リリカルなのは～償いの槍～』よりラディ一向と、もう一方。
誰が来るのか、次回までのお楽しみに～。
それではまた。

届く声

闇の中で出会った、ネクロノミコンの管制人格、アル・アジフ。
彼女から聞いた、外での出来事。
それはクロノの想像を超えていた。

「・・・・それは、間違いないないんだな？」

『はい。今話したことは間違いなく、外で起きました』

「ここを出たら、みんなに謝らないとな」

すぐに頭を切り換え、クロノは言葉を続ける。

「そのために、体を返して貰わないとな」

『そのことなんですが、今はまだ不可能です。蒐集プログラムの力が強すぎます。
今表に出ていくと、蒐集プログラムの影響を受ける可能性があります』

「受けるとどうなるんだ？」

『過去にあった例だと、蒐集プログラムに飲み込まれ消滅した、ということもあります』

「そうか・・・・」

そう言われ、クロノの思考の海へ。

そしてすぐに浮上。

「外に声は届かないのか？」

『それも難しいかと。彼に声を届かせるなら、表に近い位置にまで行く必要があります。
ですが、そこが蒐集プログラムの力の範囲内である、とい可能性もありますので・・・・』

「打つ手無し、か・・・・」

『すみません、マスター』

「気にしなくていいさ。君が悪い訳じゃない」

アルを慰めるようにそう言いながら、外の光景に目をやる。

「神童にかけるしかないか」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

一歩踏み込んで、右から左へ左腕を動かす。
それだけで衝撃波が産み出された。
それに対抗するため、一真もマモンを振るう。
ぶつかる衝撃波と魔力の刃。その余波は広がり、更に結界を壊していく。

「ちっ・・・・っ！？」

すでに動いていたネクロノミコンは、自分の手を媒体にして伸ばした魔力刃の先を向け、

《沈め、人間》

腕を突きだす。が、魔力刃は一真に当たる直前、砕けて散っていく。

まるで枯れ葉が砕けるように。

《今のは《怠惰（スロウス）》か・・・・》

ネクロノミコンの出したその名が、一真の感情を呼び起こし、

「その名前を、出すなぁぁぁぁ！！」

爆発させた。

一真の感情に呼応し、オーラが形を持ち始める。

それは上半身しかない、巨大な人型。

その人型は十秒ほどで完成し、質量を持った。

「紅之太刀壱式・煉刃！」

一真の後ろに浮かぶそれも、全く同じ動作をし、同じ魔法を放つ。

まるで一真がもう一人いるかのように。

《くだらんな》

左足だけで跳び上がり、魔力を込めた回し蹴り。その一撃だけで、二つの魔力の刃は止められた。

そして、上げられている足を一真へ向け何度も突き出す。

「ん？」

一真の顔に一筋の傷が出来上がっていた。
それが予兆。
傷は一つ、二つとだんだん増えていき、直後身体中から血が吹き出す。

「っ！？」

今の攻撃で均衡は、ネクロノミコンの優位へと傾く。
が、それも一瞬だけ。
全ての傷が、流れていた血も傷の痕も残さず消えていた。
まるで何事もなかったかのように。
これにはネクロノミコンも驚きを隠せない。

《貴様。何をした？》

「・・・・」

一真は答えない。答える気がないらしく、

「死ね」

さっき以上に、感情を失ったように見える一真の表情。
ネクロノミコンへと伸びていく、巨大な人型の腕。　掴もうとした瞬間、壊れないにしても何かに弾かれてしまう。
弾かれたことによって、大きすぎる隙を作ってしまった。
それを狙ってネクロノミコンは、腕と腕の間を飛んで一真へと近づく。

「ゴミが・・・・」

ネクロノミコンは、らしくもなく焦っていた。
先に起きた、一真の傷が全て消えるという現象が、ネクロノミコンを焦らせている原因だった。

《!?》

だからこそ、今目の前で起きていることを、ネクロノミコンは予想できていなかった。
弾かれたことによって出来た隙で、動くことが出来ないはずの一真が、動いているという現状が。

「紅之太刀弐式・轟点滅欠」

後ろの人型が、一真をネクロノミコンへ投げつける。
マモンの切っ先は、もちろん目の前の目標に向けている。
ネクロノミコンはここで漸く冷静に戻ることができた。つまり、先の現象について考えることを止めたのだ。
右手に魔力を込め、その手でマモンの刀身に触れる。
そして右側へ、軽く押す。
それだけで刃の軌道は、ネクロノミコンからずれる。
それにより、今度こそ一真に隙が出来上がった。

《ふっ》

ネクロノミコンの拳が、がら空きの一真の鳩尾を貫く。

「ぎ・・・・っ」

一真の体がくの字に曲がったのと同時に、人型が動き始める。

狙いを定めると、ゆっくりとだが左腕を引いていく。
ネクロノミコンは離脱しようとするが、一真から離れることができない。一真が、両手でネクロノミコンの手を掴んでいたからだ。
高い位置から、ネクロノミコンの顔面目掛け、殴り下ろす。
本来なら吹き飛んでもおかしくないのだが、一真が掴んでいるため、まだ同じ場所にいる。

「もう一発だ」

籠手へと変形していたマモンを装備し、人型が拳を叩き込んだ場所に、二発目を入れる。
今度は一真から離れ、吹き飛ぶ。
すぐさまマモンを籠手から日本刀へ。
一真から溢れ出る魔力が、マモンの刀身を包み込む。
その魔力は、マモンが振るわれることによって、巨大な刃を形作る。

「紅之太刀壱式・煉刃」

それは、結界へ向け飛んでいくネクロノミコンを、真っ直ぐ追いかける。
二人の間に障害物はゼロ。
そのため閃破の威力は、全くも落ちない。

《・・・・》

魔力の刃が出現したと同時に、ネクロノミコンは行動を始めていた。
一真が、自分に対して追い討ちをかけることを、殴られ飛ばされたときから予想していた。

だから、彼は焦らない。

《ディバイン・・・・》

手にあった魔導書を浮かばせ、代わりに魔力を集中。
手首には環状魔方陣が出現した。

《バスター》

両手から放たれた二本の砲撃は、一つとなって、巨大な砲撃を作る。
先に放ったＳＬＢには劣るが、これだけでも十分威力がある。
そして衝突。
一真とネクロノミコン。
フェイト達を圧倒する男と、それと互角に戦う男。そんな二人の魔法がが衝突したことで、とてつもない余波が、衝撃波が広がっていく。
ぶつかった二つの魔法は相殺。
太陽の光に反射して光ながら、雨のように降り注ぐ、結界の破片。
その中で、今度は二人がぶつかる。

「はっ」

ネクロノミコンを、右肩から斜めに切るように、マモンで切りつけた。
だがマモンの刃は、ネクロノミコンの周りにある何かを、勢いよく滑らせただけ。
人型の巨大な刀も同様。
なのだが、ネクロノミコンはクロノの顔を歪ませる。
それを見た一真は、マモンを腰に構えた。

させまいと、一真の顔へ掌底を打ち込む。たが、それは空振り。
一真は高速短距離転移を使い、ネクロノミコンの後ろに回り込んでいた。
足場を作り深く踏み込んで、マモンを素早く抜刀。

「死天刀牙」

魔力で強化された体と、魔力を纏うマモン。その二つが合わさり放たれた居合い抜き。
それはネクロノミコンの使っているクロノの体を、腰から下を切り落とすように振り抜かれる。

《っ・・・・》

前に跳ぶことによって、それを避ける。反応が一瞬でも遅れていれば、クロノの体は上半身と下半身に別れていた。
人型はすでに消えているため、追い討ちは出来ない。
その隙に、ネクロノミコンは一真から距離をとる。

《本当に面倒だ》

腕を掲げ、掌を空に向ける。
掌の中には小さな魔力の球。それは一気に巨大化していく。
この魔法は、結界の中を一瞬で更地に変えた物。
そんな物を、結界の外で放とうとしていた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

ネクロノミコンは、その魔法の準備は終わっていた。
周りの空間が、歪んで見えるほどの異常な量の魔力が、その球に

は込められている。
そして一真は、そんな異常な魔力の塊を、
「マモン。耐えられるな？」
大量の魔力を、マモンに送り込んでいた。
［おそらくは］
同じように異常な魔力で、対抗しようとしていた。
これもまた、空間が歪んで見えていた。
先の煉刃とバスターがぶつかっただけでも、結界の端から端まで届くような、とんでもない余波を作り出したのだ。
空間を歪がませるほどの魔力を持った、バカみたいな魔法が、今度は結界の外で衝突しようとしている。
それも、地上からそれほど離れていない位置で。
その時の余波が及ぼす被害なんて、誰も考えたくはない。
大切なものを傷つけた存在を、どんなことをしてでも、殺そうとしている一真。
魔力を蒐集するためならば、どんなことでもしてしまうネクロノミコン。
そんな二人に、被害のことを考えるような頭はなかった。
しかし、この戦場にはもう一人いる。一真とユニゾンしているみーなだ。
「マズイの・・・・一真の魂と先代の融合が早すぎる」
＞どういうことなの？＜
みーなに聞こえてきたのは、ここにはいないリリンの声。
その声は、いつもより真面目。

「言葉通りじゃよ。ついさっき、《怠惰》を使った。意味が分かるの？」

＞一真が覚醒したのはいつなの？＜

「１０分は経っておるかの。じゃが、そのくらいじゃ」

＞いくら不完全だとしても、それは早すぎるなの＜

「それともう一つ。結界が壊れた。先代の魔力を、鈴蘭が感じればわしらは命令違反じゃ」

＞・・・急いで行くから、一人でガンバレなの＜

「軽々しく行ってくれるよ、主は」

目を閉じて、腕を広げるみーな。もう一度、瞼を上げると瞳の色は赤から紅に。

「これ以上、手を焼かせてくれるな一真、先代」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

《消え失せろ》

「それは貴様だ」

二人は、ほぼ同時に動いた。

ネクロノミコンが魔力の球を投げつけると、それを打ち返すかの

ように、一真は右から左へマモンを振るう。
次の瞬間には全方向へ、音速で衝撃波が広がっていく。

《ふっ》

「！」

光の中、一真に見えてきたのは靴の裏。
それをしゃがんで避けた直後、

「ぎっ！」

顎に一撃をくらう。
それが致命的な一瞬を作り上げた。
胸ぐらを掴まれ、そのまま持ち上げられる。
そこで一真は、ようやくネクロノミコンの姿を確認できた。

《本当の終わりだ》

一真からの蒐集。
それが出来れば、ネクロノミコンの目的の達成は、一気に楽になる。
それを実行するため一真に触れ、弾かれた。

《っ！？》

ゆっくりと顔を上げる一真。
その瞳は黒ではなく深紅。そして、一真の雰囲気が変わる。
それの雰囲気は、今までの一真の纏っていたものとは全く別のもの。

「・・・・」

《誰だ、貴様は？》

「・・・・」

一真は答えない。

ゆくっりと上げられた顔は、ある一点を除いて変わってはいなかった。

その一点とは、瞳の色。

一真がこの姿になって今まで、瞳の色は髪の色と同じ黒。

そして今は紅。

鈴蘭やみーなと同じ色だった。

黙ったままマモンを振り上げ、同じ速さで振り下ろす。

その速さは、速いと言えるようなものではなく、子供でも止めようとすれば止められる程度のもの。

たったそれだけなのだが、ネクロノミコンは一真の目の前という位置から、急いで離脱した。

その後に聞こえてきたのは、巨大な何かが叩きつけられる音。

光が消え、見えるようになった風景。それはグチャグチャになった街並み。それと、地面の陥没によって出来上がった一つの巨大な線だった。

「次は外さんぞ」

そう言って、もう一度同じ動作を行う一真。だが、今度は速さが段違いだった。

真上を向いていた切っ先が、次の瞬間には真下を向いている。そんな速さ。

軌道がわかっていても、避けることが出来ない。それが、この一撃。
そんな一撃に、目の前の男は反応していた。
《貴様、先の人間ではないな？》
「俺が人間？　魔導書にはそう見えているのか。抜かせ。俺はま――――」
「一真ぁっ！」
辺りに響く声。
その声は、一真の声を遮り全員に届いた。
沈みかけていた一真の意識にも。
「千歳・・・・」
楠木千歳。
こんな所にいられるはずのない彼女が、この戦場に立っていた。
◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆
千歳は目を覚ました。
その光景には見覚えがあった。
「確か、アリサちゃんの家・・・・」
そこで、千歳は今日のことを思い出す。が、途中からの記憶がない。

（確か、あのでっかい魔法くらってから記憶がないような・・・・）

そこで千歳は、違和感に気がついた。あんな魔法を受け、体が傷だらけで痛みがあるはずなのに、

「痛くない」

触ったり、自分で見たりして確認するが、傷が一つもない。神無に刺された、腹の傷も痕を残さないで消え去っていた。

「どうして？」

考えに考えるが、千歳に答えがわからない。そもそもそんなもの、千歳が持っているはずがない。

そこで千歳は、答えを考えるのを止めた。

（そういえばあの時・・・あの声）

千歳は蒐集の時、激痛で一瞬だけだが意識を取り戻していた。その時に、千歳は聞いていた。

大切な幼馴染みの、一真の声を。

そこで千歳の頭は、一つの結論に辿り着いた。

（一真は、あそこにいる）

それは勘でしかない。だが、その勘はあっている。そう思っていた。と、同時に、千歳は行動を起こす。

ベッドから下り、病院から出ていくときと同じように、部屋の窓を開ける。

「ごめんね」

自分をここへ運んでくれたであろうフェイト達に謝り、千歳はバニングス邸から脱走した。

「えっと、どこだっけ？」

千歳は迷っていた。

病院からはマモンがいたから、あの場所まで来れたのだ。

だが今回は違う。あの場所まで、自力で行かなければならない。

あまり知らない、バニングス邸周辺を歩いて。

だから迷っていた。

「こっちかな・・・・」

勘で進んでいくが――――数分後。

さっきの分岐点に戻ってきていた。さっきから千歳は、この辺りをグルグル回っている。

リングワンダリング。

人が方向感覚を失い、無意識の内に、円を描くように歩くことを言う。

今の千歳は、その状態に陥ってしまっていた。

「ここ、さっきも・・・・・」

「何してるなの？」

「え？」

突然声をかけられた千歳は振り向く。

「リリンちゃん？」

「他に誰がいるなの。それよりも、どうしてここにいるなの？　傷はどうしたなの？」

「一真の所に行きたいんだけど、迷っちゃって。傷は、消えちゃってたんだ。私にもよく分からないけど」

それを聞いたリリンは、千歳の体を上から下へ見ていく。

「なるほどなの」

「どうしたの？」

「今からお前の体について、私がちゃんと説明してやるなの。だからしっかり聞けなの」

「う、うん」

「お前、《罪》は受け入れたなの？」

「うん。もう、全部私だよ」

自分の中で起きた、あの戦い。千歳はそのことをちゃんと覚えていた。

忘れるなんて無理だった。全て千歳なのだから。

「やっぱりなの。お前は悪魔になったなの」

「悪魔って、あの地獄にいるっていうあの？」

リリンは黙って頷く。

「《罪》を受け入れるということは、《罪》を象徴する悪魔を受け入れるということなの。悪魔と一つになるということなの」

千歳は、消える直前にいっていた“千歳”の、最後の言葉を思い出していた。

『私は今から、あんたの力。それを後悔しないようにね、千歳』

（そういうことだったんだ。でもね・・・・）

「驚かないなの？」

「驚いてるよ。ショックだってある。でもね、嬉しいのが一番かな。だって、一真を戦いの中でも、ちゃんと支えることができるから」

「そうなの。じゃあ、ちょっとこっちに来いなの」

「え？」

「いいから早くなの」

言われるがまま、千歳はリリンへ近づく。

「ユニゾンインなの」

その言葉と共にリリンの姿は消え、光となって千歳の中へと消えていった。

「え、え？」

＞何を驚いてるなの？＜

「だ、だってユニゾンには適正がないとダメって・・・・」

＞そのことなら、気にすることはないなの。条件を満たしていれば、私は誰とでもユニゾン出来るなの＜

「そうなんだ」

＞それじゃ、ナビゲーとしてやるから、さっさと連れてけなの＜

「でも私、一真の所に――――」

＞問題ないなの。私の生きたい場所も、お前と同じなの＜

＞マズイなの＜

「どういうこと？」

＞あの二人、結界の外でバカみたいな魔法を使おうとしてるなの＜

「それって、マズイよ！」

＞だからそう言ってるなの＜

分かっているはずのリリンの声に、焦った様子は全くない。

いつも通りの淡々とした声だった。

＞久しぶりにやるかなの＜

千歳の足下に出現する、六芒星の魔法陣。これは千歳の物ではない。

＞囲め、なの＜

二人の魔法がぶつかり合う直前、世界の色が変わる。

「きゃっ」

目の前が真っ白に染まる。

そして光が消え、目を開けるとネクロノミコンが劣勢になっていた。

「・・・誰あれ？」

千歳の目に写っているの一真。だが、そうは見えていなかった。

「あんなの一真じゃないよ」

＞当たり前なの。今の一真は、半分くらい先代と一つになってるなの。だから、意識もあるかどうかも不明なの＜

「先代？」

リリンは答えない。
これに対しては、リリンは答えたくないらしい。
千歳もそれを理解して話を変える。

「リリン・・・・今の一真に、私の声届くかな？」

＞それはやってみないことには、誰にも分からないなの＜

「うん・・・・やってみる」

一真は今、立ち止まってネクロノミコンと何か話している。

（今なら行ける・・・・）

「すぅ・・・・」

息を吸って、

「一真ぁっ！」

一真に届くように叫ぶ。
そしてその声、

「千歳・・・・」

ちゃんと一真に届いていた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

今のたった一言が一真の意識。そして、

「千歳っ！」

感情も呼び起こしていた。

おそらく千歳の声でなかったら、そこまで影響を与えることは出来なかっただろう。

《あの娘・・・・》

自分の手で落としたはずの相手が、立っていることに納得いっていない。

そんなネクロノミコンそっちのけで、地上の千歳のもとへ向かう。

自分の目の前にいる千歳は、あの時のボロボロの姿ではなかった。

傷はなく、まったくの無傷。

「お前、何でここに・・・・つか、傷はどうしたんだよ?」

＞治ったんじゃよ。それしかなかろう＜

「治ったって・・・・それにみーな。お前、いつから」

＞やっぱり気づいておらんかったか。っ・・・・来るぞ＜

みーなの声に、二人はその場から飛び退く。

＞話くらい、ゆっくりさせろなの＜

さっき二人のいた場所にクレーターが出来上がっていた。その中心にはネクロノミコンが立っている。

（ちっ。何がどうなってんだよ）

何もかもが理解不能で、一真の頭は全く追い付いていなかった。

＞さて。今主が気になるのは、千歳の傷が治っているということじゃろ？＜

＞当たり前だ＜

一応ネクロノミコンの存在も頭の中にあるが、それよりも千歳だった。

一真の記憶にあるのは、入院してもおかしくない傷を追った、千歳の姿。

＞えっとね。私、悪魔になったんだ＜

＞お前・・・それ、意味がわかって言ってるのか？＜

何かを知っているかのような、その口ぶり。

そこへリリンが口を出す。

＞嘘じゃないなの。千歳は人間じゃなくて悪魔なの。これは、覆しようのない現実なの＜

一真の顔が歪む。

そして念話が全員の頭の中に響いた。

＞ふざけたこと抜かしてんじゃねぇぞ！　悪魔になるってことは、世界から――――＜

《よそ見していていいのか、人間？》

「ちっ」

突き出された拳は、一真の顔をとらえる。

「こっのぉ！」

真横から飛び出してきた千歳は、ネクロノミコンの顔面を掴んで投げ飛ばした。

「一真」

「・・・・」

「何を言っても、一真は納得しないかもしれないけど、これだけは聞いて」

一真は黙ったまま、千歳を見つめる。

「私は、悪魔になったけど後悔してないよ。後悔することなんて、一つもない」

「・・・・」

＞どうするなの？＜

一真が何も言わないのは、千歳が本心で後悔してないと分かったから。

「今は何も言わねぇ。それでいいな、千歳？」

本心としては納得していない。だが、それを今言ってもらちが明かない。

「うん。私もそれで構わないよ」

千歳もそう考えたようで、二人の意見はまとまった。

「ほれ、千歳」

「えっ、わわっ！」

投げ渡されたのは、刀のままのマモン。慌てないはずがない。

［心配しましたよ、相棒。もう大丈夫なんですね？］

「マモン。うん、もう大丈夫。傷も治っちゃったから」

「さて、みーな。ありゃ、クロノじゃねぇな？」

＞もちろんじゃ。体はクロノとかいう奴の物じゃが今はネクロノミコンに、体を支配されておる＜

「助ける方法はあるの？」

＞わからないなの＜

見下ろす二人と、見上げる一人。
その視線はお互いを見据える。

「じゃあ、無理矢理引き剥がすか」

＞ふむ。今のところ、それが一番かの。主らはどう思う？＜

普通ならば、方法が分からないなら、慎重にと言うものがいるはず。
だが、メンバーが悪かった。

「私もいいよ。やられた分、やり返さないと気がすまないし♪」

＞やられたら十倍返しなの＜

全員が一真の提案に賛成してしまった。

「マモン。双剣に」

［ＯＫ、相棒］

日本刀から姿を変え、片方を一真へ渡す。

「みーな」

足元へ出現した魔方陣。
直後、そこに一真の姿はなく、

「はぁっ！」

ネクロノミコンの顔に、右足で蹴りを入れようとしていた。
それをバク転で避けるが、その先には千歳。

「九頭鬼流一乃太刀！　轟魔！」

魔力を帯びた刃が、容赦なく振り下ろされる。
そこには、クロノの体だからという情けは、どこにも見当たらない。
同時に、上から一真も降ってくる。

《ちっ・・・・》

すでに地面についていた腕をバネのように使い、さっきまでいた方向へ飛ぶ。
出来上がった二つの巨大なへこみ。

「外したか」

「惜しかったね」

強悪と凶悪の戦いは今、始まったばかり。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「あの二人、僕を殺す気か？」

中で見ていたクロノの感想。至極当たり前の物。

『あの方は・・・・』

「どうしたんだ、アル？」

アルの目が追っているのは、一真と共に戦っている千歳の姿。

『マスター。もしかしたらマスターの体から、ネクロノミコンの蒐集プログラムを、切り離すことができるかもしれません』

「本当か！？」

『はい。ですが、そのためには蒐集プログラムが魔力を使い、ネクロノミコンへの影響を減らすことが大切です。
それまで、彼らが持つか』

「・・・あの二人にかけるしかないな」

『はい』

《一真の部屋》

一真「・・・・・」

なのは「えっと・・・・一真君、何であんなにイライラしてるの？」

アリス「たぶん、あれ」

隆浩（幼）「千歳お姉ちゃん、つぎはこれ～」

千歳「桃太郎だね。むかーしむかし・・・・」

アリス「隆浩、もといタッ君に、千歳を独占されてるのが気にくわないんじゃ――――」

ガシィッ

一真「んなわけねぇだろうが」

アリス「痛い痛い！　頭が痛い！」

なのは「何と言うか、またタイミングが悪いんだよね、今回のゲスト」

一真「誰だよ？」

なのは「えっと、それがね・・・・」

アリス「痛いって言ってるのが聞こえないの！？」

一真「うるせぇよ、クズ」

アリス「いだぁあああぁあ！」

タッ君「女の子いじめちゃダメなんだよ、一真お兄ちゃん」

一真「・・・・」

アリス「笑顔だ！」

なのは「目が全然笑ってないけど、スゴく笑顔だ！」

千歳「そうだよ一真。タッ君の言う通りだよ」

ブチィッ

一真「くははははは！　あーはっはっはっは！　なのは、さっさとゲストを呼べ！」

アリス「危険だ」

なのは「早くしないと一真の怒りの矛先が、私たちに向きそうだからゲスト紹介。今日のゲストは『魔法少女リリカルなのは～償いの槍～』よりセラフィム、ラン・メフィスちゃん、ますたーさん。それとごめんなさい。ラディオン・メルフィス君です」

ラディ「何で謝られたの俺？」

一真「よぉ、クソガキぃ。今日は来てくれてありがとうぅ」

ラディ「か、一真？　目が笑って――――」

一真「はい、どーん♪」

ラディ「へぶぅ！」

ラン「今回はどうしたんですの？」

アリス「あれ」

千歳「はい、タッ君。あーん」

タッ君「あーん♪」

千歳「おいしいね～」

タッ君「うん♪　はい、千歳お姉ちゃん。あーん♪」

千歳「あーん♪」

　ブチ、ブチィッ

一真「死ね♪　死ね♪　死ね♪」

セラ［あの子は一体・・・・］

なのは「隆浩君。薬でちっちゃくなってるんだけど、千歳ちゃんを独占してるね」

ますたー「嫉妬って訳ね」

アリス「それにさすがの一真でも、隆浩があんなちっちゃな子供だと、手を出すことが出来なくて」

セラ［だからラディが、とばっちりを一人で受けているんですね］

な・ア「「うん」」

ますたー「一真。ラディ殴り終わったら、あたしに渡して♪」

一真「いつになるか分からんがなぁ」

ますたー「いいわよ♪」

千歳「そろそろかな。タッ君、これ読んで」

タッ君「うん。えっと、お返事コーナー始まりましゅ！」

一真「あははははは♪」

ラディ「ごふっ、へぶぅ、がほっ」

バルディッシュさんへ

アリス「たぶんクロノ体は持つと思うよ」

なのは「そうだね。ネクロノミコンとしても、宿主がないとダメだから」

ラン「そんな設定、ここでバラしていいんですの？」

セラ［大丈夫ですよ、ラン。ツッコミ役は、あそこで遊んでますから］

ラディ「ごほっ・・・・これが、ぐがっ、遊んでるように、へぼっ、見えるのか！？」

ますたー「うーん・・・・まだね。もう少しボコボコのほうが・・・・」

タッ君「仲良しさんだね」

ラディ「師匠は少し黙っててぇ！」

タッ君「うっ・・・怒られた・・・・」

千歳「大丈夫だよ」

麗×零さんへ

アリス「千歳の脱走なんて、今に始まったことじゃないからね」

なのは「そういえば、嘱託魔導師試験の勉強の時も、うまく逃げ出してたよね。フェイトちゃんを怒らせたんだっけ？」

千歳「それほどでも～」

セラ［そしてクロノさんですが、テンプレと予想されてますけど、本当にその通りに？］

タッ君「作者さんは・・・・・・千歳お姉ちゃん、読めない」

千歳「何で読み仮名かいてあげないかな。えっと、『今、どうするかは思案中です。なので皆さん、お楽しみに』だって」

ラン「逃げましたわね」

一真「麗×零さん、ナイスだ！　あいつの敵は俺の敵だぁぁぁ！」

ラディ「俺は味方――――」

一真「うるせぇぇぇ！　テメェは敵だ！」

ラディ「理不尽すぎるぅぅぅ！！」

ますたー「今だ！　ラディ！　今、治してあげるから！」

ＮＫさんへ

ラディ「何で獄龍破をくらった上に、殴られ続けないといけないんだよ・・・・」

一真「全てはあのクソ狐が悪い」

なのは「びっくりなことに、前回の伏線今のところ回収するつもり、一切ないみたいなんだよね」

セラ［ということは、先代の意味は分からないと？］

アリス「そうだね。これまた作者もビックリみたいだよ」

ラン「適当すぎますわよ、それ。というわけで、ラディ。彼女にお礼は言ったんですの？」

ラディ「当たり前だろ。というかこいつに手当てされているとき、何度も何度も、天国にいきそうになったけど」

千歳「それってダメっだったてこと？」

ラディ「違う違う。嬉しかったんだよ。こいつに手当てされるなんて、幸せすぎるだろ？」

ますたー「ラディ・・・・」

タッ君「ラブラブだね～」

一真「ヤバイ。これ以上喋らせるな！　次だ次！」

鴨川秘さんへ

なのは「予想できないか・・・ある意味スゴいね」

アリス「作者がバカだから、その頭を読めないんじゃない？」

ますたー「はい、ラディ♪」

ラディ「お、ありがとな。ん～。お前に食べさせてもらうと・・・・」

千歳「音声遮断成功♪　あれ以上喋らせると、被害が広がるからね～」

タッ君「おいしい～♪」

セラ［タッ君も喜んでますね］

ラン「というか、こちらに来たことによって、二人の対策が・・・・

被害がなくていいですけど」

一真「よし、もう一回殴るか」

ＴＯＵＤＡさんへ

タッ君「絶対に答えてね。一真お兄ちゃんは、千歳お姉ちゃんのことどう思ってるの？」

一真「お前には関係ねぇよ」

アリス「おお、タッ君がスゴいことを」

ラディ「俺達も気になるな。何て言うか？」

タッ君「言わないと、これ食べさせちゃうよ？」

一真「ぐっ・・・・・」

ますたー「どうするのかしらね？　きのこ、ダメなんでしょ」

ラン「完全に脅してますわよ、あの子」

一真「・・・・嫌いじゃ・・・・・ない・・・・・」

セラ［デレた！　デレましたよ！］

千歳「うぁ・・・・一真・・・・」

一真「・・・・俺を見るなぁぁぁぁぁぁ！」

アリス「一真が暴走した！　みんな急いで次回予告！」

なのは「えっと次回は一週年記念として、《一真の部屋・超超特大号》をやります」

千歳「何をやるのか決まってないけど、みんな楽しみにしててね～」

タッ君「それじゃあ、次回へ～」

一同『スタンバイレディ！』

一真「獄龍破ぁぁぁぁ！」

祝・一周年記念！！！（前書き）

ちょっと早いですが、一周年記念の外伝です。
楽しんでいただければさいわいです。
それでははじまりです。

祝・一周年記念!!!

千歳「獄龍破ぁ！」

ドォーーン

一真「開始早々何しやがる！　ぶっ殺す気か!?」

千歳「普通に始まった、全然面白くないでしょ?」

アリス「その基準で、そんな大技を使うのは止めて！」

神無「あたしがいない間に千歳ちゃん、過激になったわね」

一真「は?」

千歳「へ?」

アリス「え?」

神無「幽霊じゃないわよ?」

一・千・ア「「「神無（お姉ちゃん／さん）!?」」」

神無「久しぶりね」

一真「久しぶりって、どういうことですか!?」

アリス「一真。口調がおかしくなってるから」

なのは「ごめんごめん。神無ちゃんのこと、言い忘れてた」

一真「いや、軽すぎだぞ！　んな重大なこと、普通言い忘れるか？」

神無「それよりも、最初の一撃に巻き込まれた二人に気づいてる？」

昶「な、何で・・・・」

ラディ「俺達だけ・・・・」

一真「くぉら、千歳ぇ！　昶が巻き込まれただろうが！」

ラディ「俺は！？　俺には何にもないの！？」

セラ［ラディに対しては、いつも通りなんですね］

ラン［それがラディですわ］

なのは「さて千歳ちゃんの獄龍破で始まりました、一周年記念の《一真の部屋・超超特大号》」

神無「今回はスタジオを飛び出して、別の次元に行く予定よ」

千・ア・ラ・セ

「「「「［イェェェイ♪］」」」」

主人公・Ｓ「「「ちょっと待てぇぇ！」」」」

アリス「どうしたの、三人共」

ラディ「その話、今初めて聞いたんだけど！」

ラン「私達は皆が、このことを知ってましたわよ」

昶「何で俺達だけ知らないんだ！」

なのは「あ、ごめん。言い忘れてた」

一真「またかよ！　お前、何かおかしくないか！？」

なのは「全然おかしくないよ」

一真「ウソつけぇ！」

千歳「うるさいなぁ・・・セラフィム。お願いできる？」

セラ［もちろんです。ＧＯ！　メカゴジラ！］

メカゴジラ－ｓ［ガアァァアアォア！！］

千歳「踏み潰しちゃえ♪」

主人公－ｓ「「「ぎゃあぁぁぁぁぁあ！」」」

アリス「転送！」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

第１９管理世界マーレパラディーゾ

「ここマーレパラディーゾは、海の幸で有名な世界です！」

「というわけで今回は、山の幸の手作り料理早食い競争～♪」

何がというわけなのか全く分からないが、神無はなのはの言葉に続ける。

そして当然、その矛盾ありまくりのセリフに、ツッコミが入る。

入らないわけがない。

「何で海の幸で有名な世界で、山の幸を食わんといかんのだ！」

「海の幸を食わせてくださいよ！」

「しかも早食いって。味わうことできないんすか！？」

上から順に一真、ラディ、昶。

さすがは我らが主人公'ｓ。ボケに対して、反応が早い。

「ちなみに、三人が食べる料理はそれぞれ、縁の深い三人に事前に作ってもらったわ」

「縁の」

「深い」

「三人？」

（（（嫌な予感しかしない・・・・））））

三人の背中を走る、嫌な悪寒。その正体は、すぐに告げられるこ

とになる。

「まず神藤昶さんが食べるのは、赤羽千華さんの作った山菜炒飯ですわ」

「何であいつに作らせたんだぁ！」

「そしてラディが食べるのは、シャマル先生の作った豚骨ラーメンです」

「何で山の幸で豚骨ラーメン！？」

「最後に一真が食べるのは、私が作った松茸ごはんだよ」

「イヤァァァァ！！　きのこ近づけないでぇぇぇぇ！」

三者三様の反応を示す。

一真にいたっては、拒絶反応だ。

「ちなみに最下位は、女体化だよ。女装じゃなくで女・体・化♪」

「「！？」」

女体化という罰ゲームに、体を固まらせる二人。

何かとは言わないが、トラウマがあるようだ。

「そして私達は、そんな三人の目の前で海の幸の会席料理を食べます」

「・・・・何で今回、こんな理不尽なんだ？」

アリスの言葉よりも、理不尽さに疑問を抱く一真。

「いつもの罰が当たった、っていうのはおかしいよな。俺と昶は、いつもここでは弄られ役だから・・・・」

そう。

ラディの言う通り、一真だけはここでは神。普通なら、一真がここまで盛大に弄られることはない。

「あれ？　俺、分かった気がする」

「どういうことだよ？」

「昶さんは気が付いたようですね。そうですわ。今日の皆様は、超超弄られ役。《超超一真の部屋》ということで、そこまでランクアップしていますの」

「「「何だそりゃあぁぁぁ！」」」

[制限時間は一応無しですが、食べなかったら最下位とか関係なしで女体化ですから]

完全に無視。

ツッコミを無かったことのように、セラフィムは進めていく。

「じゃあ、始め！」

強制的に始まった、山の幸手料理早食い競争。

三人が女体化を逃れるために食べ始めたのだが、

「きのこ怖いきのこ怖いきのこ怖いきのこ怖いきのこ怖いきのこ怖いきのこ怖いきのこ怖い」

拒絶反応で手を着けない一真に、

「うぉぉおおぉぉ！」

「うわぁぁあぁぁあぁあ！」

血涙を流しながらも、料理を流し込んでいく二人。

この二人は尊敬したい。

「すごいね、あの二人。なのは、お醤油取って」

「そうだね。血涙流してるから。はい、アリスちゃん」

名物の海の幸を食べているなのは達。

これは確かに理不尽だ。誰が見ても、そう言うだろう。

状況が分かっていれば、だが。

「一真はどうしてるの？　キノコ食べてる？」

［あれです］

セラフィムの示す先。そこでは、

「あは、あひ、ほほほ！」

血を吐きながら、キノコ料理を食べている一真の姿があった。

それほど女体化が嫌なのだろう。

「一真っ！」

その光景を見た神無の瞳に、涙が溢れていた。

どうしたというのだろうか？

「神無さん！？　どうしたんですの！？」

「一真が・・・・一真が・・・・一真がキノコを食べてる！」

一真がキノコを食べている。それが余程嬉しかったのだろう。

キノコを食べたくなくて家出するほどのなのだがら、この反応はある意味で正解なのか？

［軽く壊れてますけど・・・・］

確かに壊れている。どうみても軽くではないが。

「でもあれ、何かおかしくない？」

「「「「［え！？］」」」」

アリスに言われ、海の幸料理を食べていた全員が、一真に視線を向ける。

キノコ料理を食べ続けていた一真は、

一真《がぁあああぁあぁ！》

『暴走したぁ！』

「しかも第二段階！」

一気に第二段階まで。

キノコを食べ、限界がきた時のみ一段階飛び越え、一真は暴走してしまう。

それを見ても、全く焦らない者がたった一人。

「大丈夫。私に任せて♪」

《ぐるぅ・・・・》

「かーずま♪」

《がぁあああぁ！》

千歳を認識できていないため、威嚇するために吼えるが、全く怯まない。

「いい加減にしろ！」

《こぱっ！》

千歳に殴られ、奇声を上げてぶっ倒れてしまう。

さて、他の二人はというと、

「ここは誰！？　私はどこ！？　そして、あなた達は俺！？」

「ら、ラディの記憶と言語機能に障害が！」

「はぁっ、はぁっ・・・・お花畑で姉さんと会った！」

「昶は臨死体験・・・・何、この３つの料理。怖すぎる・・・・」

アリスの言う通り、怖すぎた。存在が恐怖でしかないこの料理。
そんな物があってよいのだろうか。だが、あるのだからしょうがない。

「それで結果は？」

「一目瞭然で一真ね。一応二人は完食してるから」

一真の皿には、まだ半分残っている。暴走したため、食べることができなかったらしい。

「というわけで、罰を受けるのは一真さんですわね♪　千歳さん、お願いしますわ♪」

「はぁーい♪」

意識のない一真の襟を掴み、引きずって行く千歳。
テンションは高め。
一真の女体化が楽しみでそうなっている。

「一真の女体化・・・・あたしも興味があるわね」

という神無だったが、

「あれはトラウマ物だぞ」

「俺達は、女体化がそのまま身近にいるからなぁ」

昶とラディは、自分にも起きたことを思い出していた。

［一応、性格はそのままで行くようですね。もしかしたら、分裂したりして・・・面白いですね］

「そろそろかな？　千歳ちゃーん。どお！？」

「バッチリ～♪　じゃあ、行こうか」

聞こえてきたのは、楽しくてしょうがないというような声。

それを聞いて、全員の期待が高まる。

「嫌だ！　離せ！　俺は行きたくない！」

「一真改め、一美ちゃんの登場♪」

喋り方からして一真なのだろうが、近づいてくる声は完全な女の物。

そして現れたのは、巫女装束に身を包んだ、大和撫子のような女性。

『！？』

その姿に、全員が絶句。

「綺麗で長い黒髪を先の方で纏めて、更に巫女服を着せてみました～。どうかなあ？」

「み、見るな・・・見るなぁぁぁぁ！」

顔を真っ赤にして、両手で赤い袴を着かんで叫ぶ一真。
それほど恥ずかしいのだ。

「はぁはぁはぁはぁはぁはぁ・・・・」

「アリスさん、息荒いけど大丈夫？」

アリスの様子がおかしいことに、ラディィが気づいて聞くが、

「大丈夫じゃない・・・・無さすぎる。一真が女の子に・・・・ヤバイヤバイヤバイ・・・・」

一真が女体化したことが、アリスとって刺激が強すぎたのだ。
その結果がこれだ。

「様子がヘンですよ」

「ダメ・・・・イク、イ――――」

「自主きせぇぇぃ！」

「がっ！」

サタンで殴られ、アリスは気絶。神無、ナイスだ。ナイスすぎる。

「アリスさんって、あんなのだったか？　そういえば前にこっちの後書きで、一真が照れた時も・・・・」

「最近、エスカレートしてきたんだよ」

「一美ちゃんが魅力的だったんだよ♪」

「誰が一美じゃあ！　俺は男で、名前は一真だぁ！」
その体でその喋り方は、全く似合わない。違和感だらけだ。
そんな一真を凝視する二人。

「「じー・・・・」」

「な、何だよ？」

「「千歳ちゃん（さん）！　一美ちゃん（さん）の身体データを！」」

「あ、はい♪」

それを見た瞬間、二人の顔は真っ青に。

神童一美
２１歳
１６３ｃｍ
Ｂ・８８／Ｗ・５７／Ｈ・８３

「一美ちゃん・・・・」

「一美さん・・・・」

ドスの効いた声が、低く響く。
さすがの一真も、それには後ずさる。

「な、何だよ？」

「「女の敵！」」

「いや、ちょ、ぎゃぁぁぁ！」

「ご愁傷さま一真。いや、一美」

合掌。

昶は不幸な一真に手を合わせていた。

「神無さん、これからどうするんですか？」

「そうね・・・一応ホテルは予約してあるから、そこに行きましょ」

舞台は、ホテルへと変わる。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「第一回、ツッコミをしていけないホテル～！」

どこかのテレビ番組のようなゲームが始まる。

「「「唐突すぎだぁ！！」」」

早速ツッコミを入れた三人に、

「一美～♪」

［昶さん～］

「ラディ～、ＯＵＴですわ♪」

「獄龍破！」

直後、神無による制裁。

抵抗できる訳がなく、あっさりと飲まれた。

「「「ぎゃあああぁぁああ！」」」

「と、ツッコミを入れるとこんな感じの罰が、誰かから執行されます。だから、ツッコミは入れないように」

ツッコミを入れることが存在意義の三人には、地獄のようなルールのゲーム。

三人は生きて生還できるのだろうか。

「なのは先輩、ルールは、ゲームを始める前に、お願いします・・・・」

「というか、それが、普通だろうが・・・・」

「そうです。何が何でも、無茶苦茶すぎ・・・・」

と三人が抗議をするが、

「・・・・」

［どうしました、神無さん？］

無視して進んでいく。

「やっぱ、一美だと無意識に手加減してるわね。というわけで、千歳ちゃん。分裂、お願いするわ」

「OK、神無お姉ちゃん♪　えいっ♪」

ここまで来ると何でもありだ。

一美の姿が白煙の中に消える。

「うぉ！」

「一真が分裂するとどうなるんだ？　俺の場合は――――」

「昶さんはどうなると思います？」

ラディの言葉に被せ、ランが話始める。

「一真と同じ性格だったりな」

そう言った直後、

「それは心外ね、神藤くん・・・・あんなゴミクズと一緒にしないでほしいわ」

さっきの声で、とんでもないセリフが聞こえてきた。

もちろんそれに、ツッコミを入れない訳がなく。

「誰がゴミかぁぁぁ！」

「「一真〜、ＯＵＴ〜」」

祀とラディから宣言され、セラフィムが動き始める。

セラ［メカゴジラ！　アブソリュートゼロ、発射です！］

一真「爆流――――」

「塵となって散りなさい。あら、上手いこと言えたわね」

「言えてねぇよ！　つか、下らねぇよそのギャグ！」

今度は祀が、その声の餌食となる。

「祀君、ＯＵＴ〜♪」

「ディバインバスター！」

「「ぎぃぃぃやぁぁぁぁ！」」

先の制裁を受けなかった一真も巻き込んで、バスターは二人を吹き飛ばした。

「というわけで、今回からの《一真の部屋》新レギュラーの、神童一美です」

「初めまして、でいいのよね？　上手くできるか分からないけど、私なりにやらせてもらうわ」

一真から分離したはずなのだが、全く似ていない。
さすがは女体化。

「以外と礼儀正しいんだな。一真から分裂したから――――」

「喋らないでほしいのよ、ラディ君。二酸化炭素しか排出しないから。それだから温暖化温暖化言われるの。分かってる？　できたら、二酸化炭素を吸って、酸素を出してくれないかしら？」

地球のため、人間に光合成をしろと言っていた。

「俺はごふっ！」

ツッコミを入れかけたラディを、一真が殴って止める。
必要以上に強く殴って。

＞喋るな！　喋ったらあいつらの思う壺だ！＜

＞！？＜

そう言われ、ラディはハッとなる。

＞今は耐えるんだ、ラディ。いつか、反撃のチャンスがくる、はずだ！＜

この状況の中、おそらく仲間意識が芽生えたのだろう。
奇跡でしかなかった。

「色々会ったけど、そろそろご飯にしない？　みんなもお腹へった

でしょ？」

神無の言葉に全員が賛成。

「そうですわね」

並べられた料理は、海の幸の料理よりも豪華だった。

［おいしそうですね～］

「それじゃあ、頂きます！」

『頂きます！』

全員が食事を始める。そんな中、全く動こうとしない者が二人。

一真と一美の両名だった。

「どうしたの、二人とも？」

「大したことじゃないわ、姉さん。ただね・・・・」

「この味噌汁の中に、キノコが存在しているんだよ」

二人はまだ蓋を開けてはいない。だが、キノコの存在だけは認識していた。

どれだけキノコが嫌いなのだ。

「まだ開けてもないのに、それ分かるの？」

「「分かる（わ）」」

なのはの問いに、二人は声を揃えて即答。

「ほんとだ、あった」

「さすがは、元々一人の二人だ」

「こんなのと一緒にするな、クソガキ」

「こんなのと一緒にしないでほしいわ、童貞」

本の少し違う言い回しが、ラディを抉る。容赦なく抉る。

「しくしくしく・・・・」

ラディを簡単に傷つけた二人を見て昶は、

「やっぱり。二人は似てないようで似てるな」

「どこが？」

「一真のS性が別のところに出てるんだ。一真が肉体的ダメージなら、一美は精神的ダメージ」

「確かにそうかもしれませんわね」

そこまで言われても、

「だから、こんなシスコンと一緒にしないでと言ったでしょう」

一美は納得はしない。
それには理由あった。

「テメェもだろうが！」

「違うわ。私はブラコンよ。しかも超ブラコン」

予想外の発言。そして兄は、また予想外の人物。

「お兄ちゃんって誰？」

「彼よ。ねぇ、お兄ちゃん？」

千歳の問いに答えながら、その人物に向け笑みを向ける。
全員の視線はそちらに向かう。

「お兄ちゃん？」

「一真君が」

「お兄ちゃんですの！？」

「似合わない！　似合わなさすぎがっ！」

「お兄ちゃんをバカにすると、殺すわよ粗大ゴミ」

再び一美の言葉が、ラディを抉る。軽くいじけ始めていた。

「弟がシスコンで、妹がブラコン・・・ちょっとショックよ」

「でも大丈夫ですよ。ウチの姉はね・・・・」

「お願いします。お兄ちゃんは止めてください。いや、マジで」

土下座をしてまで頼む一真。そんな兄の姿を、楽しそうに見下ろす一美。

「いやよ。あなたにとって、それが嫌なことなんだから。これは愛よ。私からお兄ちゃんへの愛」

「愛が歪みすぎで、怖いわ！」

本当に怖い。
ここまで歪めるのはなぜなんだろうか。
そんなことよりも、ツッコミはちゃんとカウントされる。

「一真～、ＯＵＴよ～」

「九頭鬼流一乃太刀・轟魔！」

「ごぉぉ！」

マモンが頭にめり込む。
これは痛い。

「最終兵器だ・・・・」

「喋ること喋ることボケって、俺達にとって天敵すぎる」

ツッコミ属性持ちの彼らには、凶悪すぎる存在であった。
一美最強説、ここに爆誕。

「なのはさん。そろそろどうでしょうか？」

全員が食べ終わりかけようとしている今、セラフィムが声を出した。

「そうだね。アリスちゃん、ランちゃん。準備するから手伝って」

なのはに言われ、三人は立ち上がって大広間を出て行く。

「何するの、姉さん？」

「カラオケ大会よ」

それを聞いて、また三人は悪寒を感じていた。

「これも嫌な予感しかない・・・・」

「あぁ。三対六人＋一機の、紅白歌合戦だったりな」

嫌に具体的な予感。
それを言ってから、更に悪寒が強くなった。

「紅白カラオケ歌合戦～！」

「ルールは簡単。私達六人＋一機と、一真君達三人で歌で勝負をします」

なのはの説明したルール。それは、今一真の言ったことと全く同じ。

「「「やっぱりそれかよ！」」」

「三人共、ＯＵＴよ。というわけで、私があなた達に罰ゲームを執行するわ。というわけでお兄ちゃん、神藤君、ラディ君。これを食べなさい」

「何だこれ？」

一真が受け取ったのは、一つの缶詰。

「缶詰みたいだけど・・・開けてみるか」

警戒せずに、ラディはその缶詰に手をかける。

「ダメだっ！　その缶詰、開けたらダメだ！　それは――――」

昶の制止も間に合わず、ラディはその缶詰を開けてしまう。
そして、その缶詰の中から漂うのは異常な悪臭。

「「「くっせぇぇぇぇ！」」」

これが昶が、開けることを止めさせようと理由だった。

「シュールストレミング。スウェーデンで食べられている、塩漬けしたニシンの缶詰よ。世界一臭い食べ物ね。ちなみに私くらいになると、それを食べた後のお兄ちゃんとのキスさえ、躊躇うことはないわ。ちゃんと受け入れてあげる」

「お前の愛が重すぎる！」

「一真君、ＯＵＴ～」

「一真さん。今回は二回分の罰ゲームです」

「何でだよ！」

「１ページ前で一美さんにツッコミを入れていたのに、罰の執行を忘れていましたので。というわけで、今回はこれを飲んでもらいます」

誰も言わなかったことを、よくカウントしていると思う。

「っ！　む、無理だ！　そんな茸１００％のジュースなんて！」

「出してないのによく分かりましたわね。ですが、飲んでいただきます。千歳さん、お願いしますわ♪」

いつの間にか、一真の後ろに立っていた千歳。

一真の顔に手を伸ばし、

「はい一真。あーん♪」

無理矢理口を開けさせる。

「いふぁい！　いふぁいふぁりゃ、ふぇほはにゃへ！（訳・痛い！痛いから、手を話せ！）」

なかなか開けようとしない口を、無理矢理開けようとしているため、かなりの力がかかっているようだ。
あの一真の目から涙が出ている。

「えいっ♪」

コップ一杯分のジュースが、一気に流し込まれる。

「がっ！」

飲み込んだ直後、一真は倒れ痙攣を始めた。
目は白眼をむき、口からは泡を吹いている。

「あの痙攣、ヤバくないか？」

「大丈夫。一真があの程度のことで――――」

［生命反応が消えました。心臓、完全に止まってますね］

セラフィムによる、一真の死亡宣告。
たしかに、一真はピクリともしない。

「「「「「一真ぁぁぁぁぁ！」」」」」

「一真、一真ぁ！　死んじゃ嫌だよ！」

泣きながら一真を揺するが、やはり反応は帰ってこない。
まるで屍のようだではなく、屍だ。

一美「お兄ちゃん・・・・」

「・・・ゴメン、一真。ゴメン。だから、今すぐ生き返らせてあげる！　なのはちゃん、あれを！」

「はい、これ」

「その古い刀で、何をするんですの？」

ランに聞かれても、無視してその刀を鞘から抜く。

「天生牙！　えいっ！」

そして一真の上を振るう。すると、死んでいたはずの一真が飛び起きた。

「はっ！　何で寝てたんだ、俺？」

死ぬ直前の記憶はないらしい。
都合がいい頭だ。

「「一真ぁ！」」

「うわっ！」

「あの刀は一体・・・・」

一真を蘇らせたその刀に、興味を持ったセラフィム。
それに答えたのは神無だった。

「あの刀は天生牙。あれ一振りで、百人を生き返らせることのでき

る妖刀よ。だから、一真一人を蘇らせるのは、簡単なことなの」

「あれを使えるのは私にお兄ちゃん、姉さんに神藤くん。そして、その小娘だけよ」

一美の言葉の違和感に、神無が気がつく。

「何で千歳ちゃんだけ・・・・」

「簡単な話よ。私はお兄ちゃんラヴなのよ。つまり、私とお兄ちゃんのあいの邪魔をする存在は、全て敵なの。たとえ幼馴染みでもね」

ブラコン恐るべし。

千歳を怖がるどころか、挑発している。

「そうなんだぁ・・・・えへへへぇ」

それに対して千歳は笑顔で返す。

見るもの全てが恐怖を抱くような、黒すぎる笑顔で。

「よく分からんが雰囲気的にマズイ気がするから、なのは進めろ」

一真でもヤバイと感じたのだろう。

おそらくその判断は間違いではない。

「う、うん。それじゃあ最初は神無ちゃんから。歌は『シンジ〇ミル』」

なのはも一真に従い、カラオケ大会を進める。

「では、行くわよ」

意気込んで、ステージに上っていく神無。
それを見てラディが一言。

「神無さんって、歌上手いのか？」

「そうだな。その辺、神無さんはどうなんだ？」

「さぁな。聞いたことねぇし」

ラディと昶に聞かれるが、一真としてはそれしか答えることが出来ない。
それも無理もない。生きている頃の神無と、カラオケに行ったことがないのだから。

「あたしの歌を聞けぇぇ！」

「「「それちがぁぁぁう！」」」

「～～♪　～～♪」

三人のツッコミは、やはりスルー。

「神無ちゃんで、『シンジテミ○』でした～」

歌い終えて下りてくる神無へ、三人を除いた全員が拍手を贈る。

「今、声違わなかったか？」

気がついてはいけないことに、一真は気がついていた。
だがそれは一真だけではない。
「確実に違ってたよな」
昶も。そしてラディも。
「あれって、マクロ――――」
「蒼龍破！」
全てを言われる前に、三人へ攻撃。
「「「もう止めてぇぇぇぇ！」」」
「神無お姉ちゃんの点数は９５点。かなり高いね～」
「これ、勝てるのか？」
復活した昶がそう呟くが、聞いているものはいない。
聞こえていたのだとしてもスルーだ。
「じゃあ、次は一美ちゃんで『ｓｔａｐｌ○　ｓｔａｂｌｅ』だよ」
「じゃあ、皆さん。戦争をしましょう」
「何だこれ？　歌う前に、セリフを入れないとダメなのか？」
疑問をぶつける一真だったが、それがいけなかった。

「私にはツッコミを入れてくれないのね、お兄ちゃん。さすがは、シスコンだわ」

「テメェ、何を言ってやがる！　はっ！」

気づいた時にはもう遅い。さすがは、最終兵器一美。

「～～♪　～～♪」

歌い終えると、無言で下りてくる一美。

「お上手ですね～」

「一真さんへの思いが、詰まってますわね～♪」

それを聞いて、一真は顔を思いっきり歪めた。
それほど嫌なのだろう。

「確かに詰まりまくりだね。特に最後とか」

アリスに言われ、更に一真の顔は歪んでいく。
体なんかは震えている。

「だね。そして一美ちゃんの点数は８９点」

「さすが姉さん。勝てないわ」

「次はラディよ。歌は『Ｎｏ　ｂｕ○ｓ！』。じゃあセリフと共にお願い！」

神無に促されラディィは恥ずかしそうに、

「えーと、その幻想をぶち殺す！」

「「似合いません（わ）ね～」」

「～～♪　～～♪」

「カッコいい歌、ありがとうございました～」

「やっぱり似合わねぇな。あのクソガキにはよ」

「点数は、８５点。やっぱり勝つの無理だよな、これ？」

「諦めたらそこで試合終了、って言うじゃない神藤君」

「いや。これは数で圧倒的に負けてるからな」

「気にしたら負けだよ。というわけで、次はランで『Ｌ○ｓｔ　ｖｉｓｉｏｎ　ｆｏｒ　ｌａｓｔ』です」

やはりそこは、誰もが気づく。気がつかない訳がない。

一真は何も言わないが、ここにいる全員にバレバレだ。

「うぇっ・・・ランの点数は８８点。高いな」

「次はセラフィムだね。歌は『Ｈ○ＬＰ－Ｈｅｌｌ　ｓｉｄｅ－』だよ」

セラフィムは、ターミネーターの体を動かし、ラディを指差すと決め台詞を一言。

［死になさい、ブタロウ！］

「何で俺を見たぁ！」

ちゃんとこのツッコミも、誰かにカウントされています。はい。

［～～♪　～～♪］

「というわけで、クソガキ。お前の名前は今日からブタロウだ」

さっきの名前に食いついたのは、やはり一真。

「絶対嫌だよ！」

［私はいい名前だと思うんですが・・・・］

「お前が考えた名前だからなぁ！」

まぁ、確かにラディの言う通りではあるのだが、認めてしまえばいいのにと思う。

「私は聞いた瞬間、その名前に痺れたわよ。昇天しそうになったわ」

ラディ弄りに、天敵である最終兵器一美も、遅れて食いついたぁ！

彼女ならこれは、当然のことだろう。

「驚きだ！」

「点数は９０点。ブタロウはどう思う？　あなたは使い手でしょう」

「だからブタロウじゃない！」

そろそろ定着しつつある、ラディの新たな名前『ブタロウ』。

「次は昶さんですわ」

「俺か」

「歌は『ＣＨＡＮ〇Ｅ！』ですわ」

「行くぞ。卍！　解！」

「卍解したら、更に鈍感になるのね」

一美はその単語さえも、ツッコミを入れさせる道具にしてしまう。

そしてそれに引っ掛かったのは、

「どんな卍解なの、それ？」

なんとアリスだった。

「「アリス（さん）、ＯＵＴ～」」

お返しにと、一真とラディにカウントされてしまうアリスだった。

「～～♪　～～♪」

「昶らしい歌だな」

珍しくまともに感想を言う一真。

「そう言われると、何か照れるな」

そう言われ、昶はニヤケている。

「点数は９０点よ。昶、うまいじゃない」

「俺たちの中では最高点か・・・・」

「今のところだけどね」

「白組で、残りは俺だけどな・・・・ダメだろこれ」

「次は私だね。歌は映画のＥＤの『Ｍｙ　ｗｉｓ○　Ｍｙ　ｌｏｖｅ』にするよ」

見ていない方はＤＶＤをどうぞ。

「ここでとうとう持ち歌ですわね」

「全力全壊で行くよ」

字が違うが、もうそこには誰もツッコミを入れることはない。

なぜなら、これが正解となりつつあるから。

かわりに一真が、

「いや。それじゃなくて、リリカルマジカ――――」

光の中に消えた。

「〜〜♪　〜〜♪」

「さすが、なのはちゃんだね♪　上手だったよ〜」

「ありがとう、千歳ちゃん」

「魔王が歌う歌じゃねぇな」

笑顔で放たれる集束砲。

「ぎっ――――」

一真が光の中に消えたのは、これで三度目。

一真も一真で、なのは弄りを止めれば、こんなことにはならないのに。

「「一真ぁぁぁぁ！！」」

「なのはちゃんの点数は９８点。本日最高点だよ♪」

「これを超えられるか。次はアリスさんですね。歌は『恋愛〇ーキュレーション』です」

マイクを受け取り、立ち上がるアリス。

「どんな歌なの？」

「聞いてみれば分かるよ。というわけで、下手だったらごめんなさい」

「何で謝ったんだ？」

「これがセリフだからだよ。知りたきゃ、化●語のＤＶＤでも見てろ」

ＤＶＤプレイヤーを渡して、ＤＶＤを流し始める。

「～～♪　～～♪」

「これも一真さんへですのね」

「お前も以外にハーレムじゃないのか？」

とうとう気がついてしまったその事実。

「確かにね。でも、昶には負けるんじゃない？」

事実なのだが、やはりハーレム王を目指す男には、誰も勝つことは出来ない。

「あの女も、私の敵になるのね。いいわ、戦争よ・・・・」

その後ろでは一美が、黒いオーラを出していた。

「一真も大変だな」

「それじゃ紅組最後は私、楠木千歳で『ｓｕｇａｒ　ｓｗ○ｅｔ　ｎｉｇｈｔｍａｒｅ』」

「・・・・」

歌詞の内容を知っている一真は、完全に黙ってしまう。

「どうしたの一真君？」

「何でもねぇよ」

「ラディ。俺にも見せてくれ」

昶も気になったのか、ラディと共に化物●のＤＶＤを見始めた。

「みんな抱きしめて！　銀河の果てまで！」

『それ違う！　やり直し！』

千歳のボケは一美以外を巻き込んだ。

さすがは千歳。最終兵器以上の成果を出してしまった。

「私と小娘以外、ＯＵＴ～」

「私達まで巻き込むとは・・・・」

「やりますわね、千歳さん」

一体何がやるのだろうか？　説明してほしい。

「じゃあ改めて。昶君、前振りお願い」

「了解です。では。お前は何でも知ってるな？」

「何でもは知らないよ。知ってることだけ」

「・・・やっぱり、千歳と合わねぇセリフだ」

これは頭の良いキャラのセリフだな、と誰もが感じた。

「～～♪　～～♪」

「・・・ムカつくわね、小娘」

更に禍々しいオーラを、体から放ち始める一美。

マジで怖いから止めてほしい。

「お上手でしたわ～♪」

「本当に重いんだけど。色々と」

「三人分だからなあ」

千歳、アリス、一美の三人から。昶ほどではないが、これは重い。

「点数は、何と９７点！」

なのはと一点差。

イメージＣＶ様々である。

「ウチの作者。絶対に勝たせる気ないよな！？」

「たぶんな。で、一真。お前、最後だけど何を歌うんだ？」

「そうだな・・・じゃあ『〇オリア』か」

「じゃあ、あのセリフしかないな」

「だな。というわけで、一真。頼んだぞ」

その時、選曲を間違えたと思ったが、すでに遅い。
遅すぎる。

「・・・・・・俺が、ガンダ●だ！」

恥ずかしいな、おい。

「お兄ちゃん、ナイスよ」

その一言が、一真の心を簡単に真っ二つにした。

「いっそ殺してぇぇぇぇ！」

「録音したから♪」

「そんなに俺をいじめて楽しいかぁぁぁぁ！」

「当たり前のこと聞いてどうするんですか」

「それより早く歌いなさい」

瞳に涙を浮かべ、ステージに向かう。

一真「～～♪　～～♪」

「大トリ、ありがとう。一真君♪」

「この歌。誰に対してなのかしらね？　千歳ちゃんに？」

「・・・・知らん」

図星だ。

「図星だな」

「そうだろうな」

昶とラディも同じ考えのようだ。

「貴様ら黙れぇぇぇ！」

「そして一真さんの点数は８９点ですわ。紅白歌合戦は、紅組の圧倒的勝――――」

「そんなことよりも、みんなに報告があるのだけれど。私と小娘以外は罰があるのよ」

そう。ツッコミを入れてはいけないというルールは、まだ生きている。

そして千歳と一美以外は、全員がツッコミを入れているのだ。

「そうなんだよね。みんな、私にツッコミを入れたから」

「確かにそうでしたわ・・・・」

＞昶・・・分かってるな？＜

＞あぁ。ラディは、後ろにいろよ＜

＞あ、あぁ・・・・＜

＞＞魔法攻撃が来たら、爆流破で・・・・＜＜

そんな策を練るが、お仕置きは攻撃魔法ではない。

「普通の攻撃魔法だと、返されるかもしれないからね。今回のお仕置きは、幻術による精神攻撃」

「私の眼を見なさい！」

幻術の世界に引き込まれ、全員が意識を失った。

「成功だね、一美ちゃん♪」

「そうね、“お義姉ちゃん”」

この言葉で分かる通り、今までのは演技。

千歳もそれは理解していたようだ。

「今のところは、今まで通りでね？」

「構わないわ。さすがに超ブラコンの私でも、元はお兄ちゃんと一つ。
嫌いになるのは無理だったみたい」

「今日はこれでお開きかな。おやすみ、一美ちゃん」

「えぇ、お義姉ちゃん」

倒れている一真達をほっといて部屋から出ていく。
今回はこれにてお開き。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

《お返事コーナー》

一真「あー、ひでぇ目にあった。何だよ幻術って！　キノコ畑に放り出される幻覚見たぞ！」

昶「俺、虫が大量に入った水槽に突っ込まれた・・・・」

ラディ「俺は、エリオとキャロから罵倒をな・・・・」

一美「案外好評だったみたいね、あの幻術」

主人公-ｓ「「「どこがた！」」」

なのは「三人ともＯＵＴ～」

ラン「また幻術ですわね。今度は何にしましょうか？」

セラ［そうですね。キノコ料理を延々と食べさせられる・・・・」

一真「それ、そっちでシャマルにされたからいい。やらない。やりたくない。止めてください！　あんな毒物、俺に摂取させないでください！　お願いします！」

神無「そこまでならなくても、もうやらないわよ。これ以上やると、全然進まなくなるから」

一真「脅してんじゃねぇよ！」

アリス「無いと分かってからの切り替え、早すぎだよね」

一美「さすがは私のお兄ちゃん。惚れ直したわ」

一美以外

『どこにそんな要素が！？』

一美「あなた達のような愚民どもには、一生分からないわ。ちなみにこの愚民には、お兄ちゃんも入っているわ」

一真「普通は抜けよ！」

なのは「と、とにかくお返事コーナー、始めるよ」

バルディッシュさんへ

一真「う～ん・・・・」

昶「どうしたんだよ、一真？」

一真「俺が言おうとしたセリフって、何だ？　全く記憶にねぇんだが」

アリス「そういえば、あの時の一真って様子おかしかったよね？」

千歳「うん。一真じゃない誰かが、一真の体を使ってるみたいだった」

一美「お兄ちゃんを使うなんて、いい度胸じゃない・・・ふふふ」

ラン「一真さんのことになると、黒すぎですわよ」

神無「それにしてもあんた達。魔法を使う戦いでコンビ組むの、初めてなのにあの動き凄いわよ」

セラ［まさに愛の力ですよ］

ラディ「そうなのか？　俺には全く違うように――――」

ラン「そうですわよ。正にラディとますたーのよう」

ラディ「な、何か照れる。あいつと・・・・」

キュピィィィン

一真、千歳、神無、なのはは合体技を閃いた。

神無「惚！」

なのは「気！」

千歳「撲！」

一真「滅！」

一・千・神・な

「「「「ラディブレイク！」」」」

効果は読んで時のごとく。

セラ［ラディに振って正解でしたね］

ラン「そうですわね」

昶「南無、ラディ・・・・」

麗×零さんへ

千歳「悪魔になったんだよね～。実感ないんだけど・・・・」

セラ［角が生えたり、羽が生えたりはしてませんね。変わったのは瞳の色だけでしっけ？］

ラン「そうでしたわね。綺麗な色ですわ～」

なのは「そのセリフ懐かしいなぁ。あの模擬戦の時のやつだよね」

一真「俺は今すぐ、そのセリフを言わせることが出来るぞ」

昶「それ、俺も出来るんじゃないかな？」

一真「じゃあやるぞ、昶」

昶「あ、ああ・・・・」

一美「私もやるわ。楽しそうだから」

ラディ「何するんだよお前ら？」

一・昶・美「「リリカルマジカ――――」」

なのは「二人とも。少し、頭冷やそうか？　クロスファイアーシュート」

神無「何やってんのよ、あんた達」

アリス「いつものことですよ、神無さん」

神無「そうだけど・・・・」

なのは「もう一発、なの」

鴨川秘さんへ

一美「愛なら負けないわよ。お兄ちゃんは私の物なんだから」

アリス「正妻と愛人に断りもなく何を言ってるの、一美？」

千歳「正妻とか愛人は抜きにして、今の私は一真の一番の支えなんだよ！」

なのは「珍しい。千歳ちゃんが、あそこまで言うなんて・・・・」

セラ［修羅場ですね～。見ている方は楽しいんですよね］

一真「さて、巻き込まれるのは嫌だからな。この無料券で、マッサージにでも行くか？」

ラン「行かせませんわよ、一真さん。あなたには、あそこに行ってもらいますわ♪」

昶「そうだぞ、一真。逃がすわけないだろ」

一真「おい、ク――――」

ラディ「嫌だ。だから早く行って、一人で巻き込まれてこい！」

千・ア・美「「「一真（お兄ちゃん）！　誰が一番か、今ここで選んで！」」」

一真「テメェら、ぜってぇぶっ殺す！」

千・ア・美「「「そんなことよりも、早く決めて！」」」

神無「どうなっても、一番は決まってるのよね。三人とも、それ分

かってて行かせたでしょ」

昶・ラ・ラ「「「もちろんです（わ）」」」

なのは「あははは・・・・」

灰色の野良猫さんへ

アリス「さすがソラ君♪」

千歳「確かに３０分も持てば、全然いいほうだよ」

昶「俺達、そんなに持つか？　俺は飛べないから・・・・」

ラディ「俺は防御魔法ダメだからなぁ・・・・」

昶・ラ「「はぁ・・・・」」

神無「そういえばそうだったわね」

一真「たぶん俺も無理だぞ」

ラン「そうなんですの？」

一真「あぁ。あの時の俺、色々と異常みたいだからな」

セラ「鬼霊の時のラディもそうでしたね。一体どっちが強いのか・・・・」

一真「人を食おうとするやつと、戦いたくねぇ」

一美「異常なお兄ちゃん・・・・想像しただけで、ヤバイくらいに興奮してきたわ。そんなお兄ちゃんに押し倒されたい・・・・それが私の夢よ」

一真「そんな夢があってたまるかぁぁぁぁ！！」

ＴＯＵＤＡさんへ

昶「あれが隆浩・・・・全然想像できないな」

一真「おい、昶。今すぐサンドバックになれ」

昶「いや、ちょ、何でぇぇぇぇぇ！」

アリス「前回のこと思い出したんだ」

一美「あぁ、あれね。分裂する前の記憶はちゃんとあるから、何があったかはわかるわ」

ラン「それにしても、ＴＯＵＤＡさんの言う通りですわ」

セラ［おそらく、誰もが思ってることですね］

セ・ラ「［だから今すぐ結婚を］」

神無「そういうことを直球でいったら千歳ちゃんが・・・・」

千歳「けけけ結婚・・・・あぅ～・・・・・」

神無「やっぱりオーバーヒートしたわね」

ブチィッ

ラディ「な、なのはさん？　な、何でそんな笑顔で？」

なのは「今なら一真君の気持ち、よく分かるなぁ。子供の隆浩くんには、手を出せないよ。だからね、ラディ・・・・ふふふなの♪」

ラディ「いや、目が笑ってませんからね！」

なのは「恋人のいるやつなんて死ね、なの♪」

ラディ「それただの私え――――」

セラ［やっぱりラディはこうでないと、ラディじゃないですね］

一真「昶ぁ、まだ生きてるよなぁ？」

昶「もう、じぬ・・・・」

なのは「あはは、あはは、あははは♪」

ラディ「・・・・」

ＮＫさんへ

アリス「悪魔化・・・・したいんだけどなぁ。う～ん・・・・」

ラン「どうしたんですの、アリスさん？」

アリス「《罪》を受け入れるのはちょっと・・・・だから、千歳はすごいなぁって思うよ」

セラ［何か訳ありですね。詳しくは聞かない方がいいですね］

一真「何で今回は、ここまで俺と千歳のあ、愛だ何だ言われてんだよ？」

昶「そりゃあそこまでされたら、誰でも言うだろ」

ラディ「色々言ってるわりには、相思相愛・・・・って一真に千歳さん？　何、その鈍器？」

一真「簡単だ、ラディ」

千歳「ラディ君の息の根を、止めるための道具だよ。だから、動かないでね」

ラディ「い、嫌だ！」

一真「一美、捕まえろぉ！！」

一美「任せてお兄ちゃん！　ラディ君。私が褒められ、いえお兄ちゃんのために捕まりなさい！」

ラディ「今、何か言い直したよねぇ！？　それに、今までにないく

らい目が輝いてる！」

神無「何してるんだが・・・・って、なのはちゃん？　何でレイジングハート構えてるの？」

なのは「えっと、私も参加しようかなぁって」

神無「完全に殺す気よね、それ」

昶「神無さん、そろそろ時間ですよ」

神無「じゃあ次回予告かしら。一真、千歳ちゃん！　やるなら後にしなさい」

一真「ちっ・・・・」

ラディ「結局やられるのか・・・・」

ラン「というわけで次回予告ですわ」

一真「俺と千歳。クロノからネクロノミコンを引き剥がすため、攻撃を続ける」

千歳「どれだけ攻撃しても、引き剥がれるような様子はない」

一美「悪戦苦闘するお兄ちゃん達。そこへ聞こえてきたのは、謎の声」

アリス「その声は教えてくれる。クロノからネクロノミコンを引き剥がす方法を」

神・な・昶「「「次回、魔法少女リリカルなのは～七つの大罪～」」」

ラ・ラ・セ「「「【見つかる光】」」」

一同『次回へ、スタンバイレディ！』

祝・一周年記念!!!（後書き）

というわけで、「小説家になろう」で書き初めて一周年。
皆さんの応援で、一年書き続けることができました。
これからも精進していきますので、応援よろしくお願いします。

見つかる光（前書き）

一ヶ月お待たせしました。
新しく始めたオリジナルを書きながら、こちらを書いていたりしてましたので。
遅れてしまってすみません。

では、七つの大罪始まります。

予告を変更しました。

見つかる光

「クロノ君の体が魔導書に囚われていて、一真君の暴走・・・・聞いているだけやと、最悪の状況やな」

ネムから聞いた報告に、眉毛を潜めるはやて。

頭を回転させ策を練るが、デバイスの無い自分達は、動くことは出来ない。

《断罪の鎌（エクスキューショナー）》もそう。半数は意識不明。残りのアンナ達も、残りの魔力は少ない。

全員が戦える状況ではないということだ。

「ホント何してるんやろ、私・・・・」

自分の部隊の仲間が戦っているのに、部隊長である自分は、そこに赴くことが出来ない。

それが悔しくて、悔しくてたまらない。

「はやて！」

息を切らしてリビングに入ってきたのは、さっき出ていったアリス。

「バニングスさん？」

「千歳が脱走したわ」

「何やて？」

「今、千歳の部屋に行ったらもぬけの殻だった。部屋の窓が開いてたから、多分そこから・・・・」

「でも彼女は大ケガを――――」

「ケガなんて、1つも見当たらなかったわよ。さっき着替えさせたのはあたしだけど、掠り傷も、入院の原因になったっていう大ケガの痕もね」

二人にとってはあり得ない話だった。

千歳の腹部か、見たことも無い量の血が流れているのを、その目で確認しているのだから。

「・・・多分、あそこや」

「はやて?」

「はやてさん?」

「千歳が今おるんは、多分あそこ・・・・一真君の場所や」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

二人の立っている場所を中心に、半径一キロに降り注ぐ魔力弾の雨。

その場から動かさず、確実に落とすために、広範囲に降らせていた。

「「邪っ魔ぁっ!」」

その雨はすぐに止む。
二人が全方位に向け放った、魔力の放出がその雨を止めた。
その魔力はの波動は、ネクロノミコンも襲う。が、波動では全く届かない。
それは分かりきっていた。

「うっらぁぁ！」

《罪》の魔力で作り上げた槍を、心臓めがけ投擲。
非殺傷設定などあるわけがないので、それが当たれば死は免れない。

《っ・・・・》

それを突き刺さる直前で掴み、握りつぶす。
すぐに一真に背を向け、拳を突き出した。

「くぅっ！」

そこにいたのは千歳。
得意の不意打ちを狙っていたようだが、ネクロノミコンは気がついていた。
それを刀身で受けた千歳は、少し後ずさる。

「紅之太刀壱式・煉刃！」

聞こえてきた名前。
本来なら魔力の刃が飛んでくるはず。だが来ない。
代わりに来たのは、魔力に包まれた本物の刃。
刀身の周りにある魔力は、放たれるはずだった物。

「落ちろぉ、ゴミっ！」

《落ちるのは貴様だ、人間》

「がっ・・・・！」

膝が一真の腹部に叩き込まれ、上から押さえ込む力が無くなる。
それと同時に一真の頭を掴んだまま、急降下を始める。

「みーなぁ！」

＞主の考えておることは分かっておるよ＜

急降下していく一真の手元が一瞬光る。が、落下速度が遅くなるわけでも、ネクロノミコンから逃れるわけでもない。

＞タイミング合わせて、その場から転移しろなの＜

＞だったら早くしろ！　もう少しで地面だ！＜

＞言われなくても！＜

落ちていく二人を追う影が見えた。
千歳だ。
その手には、日本刀となったマモン。

「九頭鬼流一乃太刀・轟魔ぁ！」

日本刀の刃が当たる寸前で、一真の姿が消えた。
そして聞こえてきたのは、何かが割れて砕ける音。

「きゃっ」

弾かれるマモン。
ネクロノミコンに傷は与えられない。
体を捻り、体制を変え、足の側面で千歳を叩き落とす。

「何してくれてやがんだっ！」

突如現れた一真は、すでに左手の拳は引いていた。その手首には、三重の環状魔方陣が。

一真の身体中から吹き出す魔力が、吸い寄せられるように左手に集まっていく。

＞一真っ！　魔力を押さえよ！＜

みーなが叫んだ理由は、一真の周りにあった。
一真の周りの空間が歪んで、軋んで、ヒビが入っていた。
今の一真は不安定な状態。簡単にさっきの状態にいつ戻ってもおかしくない。

「砕けろっ！」

突き出された拳と同時に、集まっていた魔力は一気に解放された。
自由となった魔力は、一気に広がっていく。

《なっ！？》

ネクロノミコンはその魔法を見て驚いた。その魔法は、魔法では

なかったからだ。
例えるなら爆発。
その爆発、ただの爆発。近くにいれば、千歳も巻き込まれていただろう。

＞主は何をしておる、一真？＜

一真は答えないで、前だけを見ている。
爆風はもう止んだはずなのに、一真の長い髪が揺れている。すぐにみーなは気がついた。

＞意識をしっかり保て。千歳まで巻き込むのか、主は？＜

「！　千歳っ！」

＞大丈夫だよ、一真。それよりも、ネクロノミコンは！？＜

＞今ので見失っ・・・・来た！＜

光の中からその姿が現れた。
頭から血を流し、服は所々破れている。

《・・・・》

それでも表情は変わらない。無表情のまま。
だが、確実にダメージは与えることができていた。

「テメェとしても、今のは予想外だったか？」

《笑わせるな、人間。今の貴様が、我に届くはずもなかろう。あの

娘なら、可能性はあるがな・・・・》

それは一真にも分かっていた。

今の二人にはには、差がありすぎた。それでも一真は、引き下がるつもりはなかった。

「だから何だ・・・・テメェはここで、廃棄処分決定だな。カイーナ！」

それは一真の身体強化の稀少能力（レアスキル）、永久凍土（コキュートス）の一段階を発動させるためのキーワード。

アルプトラオムでの一件以来、一度も使うことはなかった。が、ここで使うことにしたのは、使わなければネクロノミコンに食らいつけないと、直感したからだ。

そして一真の直感はよく当たる。

「うぉらぁっ！」

渾身の力で叩き込まれた拳は、当たる直前で止まる。

《無駄だ。何度言ったら分かる？》

「一生分からねぇよ！　アンテノーラ！」

第二段階へ以降。ヒビの入るような音は聞こえるがまだ。

そうなれば一真の頭は、単純な結論に達する。

「トロメ――――」

「九頭鬼流一乃太刀・轟魔！」

振り下ろされたマモンは、ネクロノミコンの背中へ。これも、触れる直前で止まってしまう。

＞それ以上はダメだよ、一真。分かってるんだから＜

＞千歳・・・・＜

一真が何をするか分かっていた。
だから千歳は動いた。

《邪魔だ、貴様ら》

二人の頭を掴むと同時に、魔力を放出。
首が後ろに、勢いよく曲がる。

「がっ・・・・」

「こふっ・・・・」

完全に体勢を崩された二人。そこへネクロノミコンの追撃。
今の一真達に、それを避ける術はない。
千歳をまっすぐ蹴り飛ばすと、１８０度向きを変えて

《ふっ》

叩き付けるように、一真の首に足を振り下ろした。
ネクロノミコンの目の前から消えた一真の姿。地上から聞こえてきた、何かが叩きつけられる音。

《『突き抜ける槍』》

腕を突き出して引く。

打ち出された魔力の槍。それは、地上で動かない一真へ、一直線に落ちていく。

「マモン！」

［スタンバイＯＫです、相棒］

高速で向かってくる千歳。その手には、フルドライブのマモンが。

「システム《グリード》、発動！」

周りの魔力を全て、無制限に吸収し続けるシステム《グリード》。発動と共に、一真へと向かう魔力の槍は分解され、マモンへ吸収される。

「マモン！　一旦解除して！」

［了解です］

システム《グリード》を止めると、集めた魔力だけを刀身に流し込む。

「紅之太刀壱式・煉刃！」

取り込んだ魔力だけ使ったはずなのだが、それでも刃の大きさはいつも以上。

あの槍一つに、それだけの魔力が込められていたということにな

る。
そんな一撃でも、ネクロノミコンはあっさりと弾く。
「くっ・・・・・」
《いい加減に諦めたらどうだ》
「そうりゃあ、無理な相談だな」
横から飛び出てきた拳。
それがネクロノミコンの頬を打ち抜く。
「もう一発！」
今度は腹。
「落ちろ！　ゴミがぁ！」
最後に後頭部に上から一撃。
「やられたら、百倍返し！　つーわけで、一万倍返し！」
その宣言通り、大量の魔力を右手の掌に集める。出来上がったのは、巨大すぎる魔力球。
「賛成！」
一真に習って、千歳もマモンに魔力を一気に注ぐ。
「カートリッジロード！」

［カートリッジロード。相棒。思いっきりやってください］

「もちろん！」

二人には躊躇はない。

やられた分を何倍にもして、やり返したいだけ。

クロノの体を取り返すのは二の次。

「確か、こうだったな・・・・ディバイン」

「九頭鬼流一乃太刀追の式」

「バスタァァ！」

「轟魔飛連！」

拳によって打ち出された砲撃と、マモンから放たれた二対の刃。

さっきと立場が、完全に入れ替わっている。

《使うしかないか・・・・》

開いた魔導書のページが光り出す。それは蒐集した魔力を使うということ。

《噴吼・・・・》

ネクロノミコンの体も、魔導書と同じ光りを放つ。

《燼滅》

右から左へ振られた右手。投げられたのは炎の玉。
それは一瞬で巨大化。周りの酸素を消費しながら、高速で飛んでいく。
三つの魔法がぶつかるのと同じタイミングで、それは地上に現れた。

「九頭鬼流体術一乃型」

左足で踏み込んで、低い体勢のままネクロノミコンの懐へ、一瞬のうちに潜り込む。

「尖針蜂拳（センシンホウケン）！」

《がっ》

籠手となったマモンに覆われた千歳の拳は、ネクロノミコンの腹へ突き刺さる。

＞千歳！　そっから離れろ！＜

一真に言われ、すぐに離脱を始める。
空からは押し負けた炎の玉が、二人の魔法と共に落ちてきていた。

＞任せろなの＜

走っている千歳の足下に現れたのは、リリンの魔方陣。
次の瞬間には、一真の隣まで移動していた。

「あんなもん喰らって動けねぇよな。動けたら、本当の化け物だぞ」

「そうだよね。でもクロノ君の体だから、動くのは難しいと思うけど・・・・」

クロノの体は爆発の中に消えていて、二人からは見ることは出来ない。が、目の前の光景に変化が起きた。

爆発が収縮していく。全てが中心に集まり、きれいさっぱりなくなった。

残ったのは出来上がったクレーター。そして、

「マジかよ・・・・」

「ははは・・・・」

引きつった笑みしか浮かばない。理由は簡単。

そのクレーターの中心には、煤けたネクロノミコンが立って、二人を見上げていたからだ。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「・・・来ちゃったかぁ」

何もない真っ白な世界。そこにアリスは立っていた。

「そんな嫌な顔しなくてもいいじゃないか、アリス」

「嫌な顔ぐらいするよ。あんたに会いたくなんかないんだから」

アリスの目の前に現れたのは、もう一人のアリス。

つまり、《罪》によって作り出されたアリスだ。

「それはショックだな。ボクは、一応君の一部なんだから」

「・・・まず、そのしゃべり方がムカツク。私の顔で、そのしゃべり方が」

「無茶苦茶言わないでよ。ボクは君で、君はボクなんだから。それよりも、ボクが君を呼んだ理由分かる？」

「嫌がらせ」

思考時間ゼロの即答だった。

「そんなことで、わざわざ呼ばないよ。そこまでボクのこと嫌い？」

「当たり前よ。嫌いじゃないわけがない」

“アリス”は何も言わない。アリスの返答がこうであることが、初めから分かっていたようだ。

「まあいいよ。で、本題に入ろうか。内容は、一真のことだよ」

それを聞いたアリスの顔から、嫌悪の表情が消えた。

「どういうこと？」

「一真が先代の魂を持ってることが、さっき分かったんだよ。多分、覚醒したんじゃないかな」

「ということは・・・・」

「そう。予定通りに、ことが進んでいるってことになるね。ん？嬉しくないのかい？」

「当たり前だよ・・・だって私、一真と千歳を騙してるんだから。嬉しくないよ」

騙している。その言葉に“アリス”も反応する。

沈黙する二人。

「あんたはどうなの？　まさか嬉しいとか言わないよね」

「言わないよ。ボクだって、一真が好きだからね。でもしょうがないんだよ。今を逃したら、次に先代の魂に会えるのか分からない。それに、これはボクらだけの願いじゃない。何代も前から続く、何人もの《罪人》達の願いだ」

そう言われアリスは何も言えなくなる。

「君にはそれが分かってない」

「っ・・・！　黙れぇぇ！」

レヴィアタンを装着したアリスは、魔力紐を一気に伸ばし、“アリス”を縛り上げる。

彼女は抵抗することなく、あっさりと縛られた。

「何が分かってないだ・・・分かってるから、こんなに苦しんでるのに！　ふざけるなっ！」

「それでどうするつもりだい？　このまま君は、ボクを倒して悪魔

になるのかな？」

それを聞いて、拘束が緩む。

“アリス”にはこうなることが初めからわかっていて、抵抗しなかったのだ。

「やっぱり。君には《罪》を受けいるのは無理だ。ま、君に限ったことじゃないけど。怖いんだろ？」

「怖くなんか――――」

「だったら、ボクを倒すといい。まぁそれが出来たのなら、今の今まで人間なんてことはなかったんだろうけどね」

“アリス”の言う通り、アリスは人間。その証拠が、今目の前にいる。

彼女がここにいるかぎり、アリスは悪魔になることはない。

「まぁボクが今、一真の次に気にしているのは千歳さ」

「千歳？」

「うん。あの娘は危うすぎるんだ。一真のこととなると、躊躇がなくなる」

「何が言いたいの？」

「簡単なことだ。あの娘はいつか悪魔になる。もしかしたら、もうなっているかもしれないってこと。詳しいことは、ボクにも分からないけど」

そこまで言われ、アリスはハッとする。過去の千歳の行動に、思い当たるものがたくさんあった。

「君でもこれは分かるだろう」

これにはアリスも黙って頷くしかない。

「一応、それだけは君が確かめてくれ。というわけで、話しはこれでおしまいだよ」

ゆっくりと消えていく“アリス”の体。

真っ白な世界に、彼女の声だけが響く。

「君の体はもう大丈夫。そろそろ、目を覚ますことできるから。それじゃあまたね、アリス」

「・・・私はもう会いたくないよ、“アリス”」

その呟きは響いて消えた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

＞おい、みーな。こいつ、本当に魔導書か！？＜

＞その問いには肯定しか返せぬよ。昔から、奴はあんなのじゃ＜

＞マジかよ・・・・っ！＜

向かってくる魔力弾。それを確認した一真は、急いで魔方陣を展

開。
その場から転移する。
先の攻撃を受け、二人を蒐集対象から殲滅対象に切り替えたネクロノミコンは、動くことなく無差別攻撃を始めていた。
＞ちっ・・・・千歳！　合わせろ！＜
＞うん！＜
一真は一気に突っ込んでいく。それは狙ってください、と言っているようなもの。
辺りを高速で飛んでいた魔力弾が、全て一真へと向かう。
「死天・・・・」
手刀を作りそこへ、大技を放つための魔力を溜め込んでいく。
ネクロノミコンは、すぐさま大量の魔力弾を自分の前に集め、全てを一つの巨大な魔力弾を作り上げた。
《ディバイン・・・・！？》
形を失う魔力弾。
漂っていた魔力弾も姿を消している。
《小娘・・・・貴様か！》
そう。こんなことが出来るのは千歳だけ。
＞ナイスだ！＜

障害は無くなりネクロノミコンの傍へ、簡単に近づくことができた。
手刀に溜め込んだ魔力は、ネクロノミコンでさえ放つ物だと思っていた。

「ぶっ飛べ！　このっ・・・・在庫処分品がぁぁ！」

一真は手刀から拳へ。
それはネクロノミコンの右頬へと、真っ直ぐ吸い込まれていく。
鈍い音が聞こえ、足は地面から離れ飛んでいく。

「ちっ・・・・」

ネクロノミコンの飛んでいった先を、ずっと見つめる一真。
その顔は険しい。

「千歳ぇっ！」

「大丈夫！」

槍となったマモンの刃には、今までネクロノミコンから吸収した大量の魔力が、すべて込められている。
そのためか、収まりきらない魔力が溢れ出ている。

「貫け！　破滅槍！」

投げられた槍はネクロノミコンがいる場所へ、音速を超え突き進む。
そして着弾。したが、何も起きない。声も聞こえてこない。

「がっ・・・・・！」

「一真っ！？」

《いつまでも、あそこにいるわけがないだろう》

ネクロノミコンは一真の目の前にいた。その手は、一真の喉を掴んでいる。

「そりゃ・・・・そう、だ・・・・でもな。俺も、いつまでも、捕まってられるか！」

浮いている足を後ろに振り蹴ろうとしたが、

「かはっ・・・・・」

喉を捕まれたまま、地面にめり込むくらいの力で、思いっきり叩きつけられた。

それでも一真は、目の前の敵を睨み続ける。殺気を込めて。

《その程度の殺気で何ができる》

「バカか、テメェは・・・・千歳が、いるから、これでも押さえてんだよ・・・・」

痛みと息苦しさで、言葉は途切れ途切れ。それでも挑発は止めない。

それにこの発言は、本当のことだ。今、ネクロノミコンに向けている殺気は過去にラストに向けた殺気よりも、遥かに弱いもの。

その理由は千歳を怯えさせたくないから。

「テメェに、聞きたいことが、ある・・・・その体、どうするつもりだ？」

《愚問だな。使えるまで我が依り代として使い、使えなくなったら捨てるまでだ》

「確かに・・・・愚問だ！」

自分の上にいるネクロノミコンを、膝で蹴り上げる。
飛ばした先には、既に千歳が構えていた。

「九頭鬼流一乃太刀・轟魔！」

魔力を込めた一撃は、ネクロノミコンの背中を直撃。何もかもが間に合わず、その体で受けることとなった。
そしてそれが隙となる。
その隙をこの二人は逃さない。

「九頭鬼流三乃太刀・飛燕（ヒエン）！」

落下していくネクロノミコンを高速で追いかけ、一閃。
すぐにリリンがマモンだけを、一真の手の中に転移。
大量の魔力を一気に流し込み始める。

「っ・・・・！？」

一瞬胸の辺りに走った痛み。それは今まで、一度も感じたことがないもの。
それでも一真は、魔力を注ぐことを止めない。

そして魔力が限界まで溜まったマモンを、

「死天閃破ぁっ！」

縦一閃に振り下ろす。

ネクロノミコンに向け飛んでいくそれは、その体を突き抜けた。

「はぁ、はぁ、はぁ・・・・これでどうだ？」

＞まだじゃの・・・・のう、リリン？＜

＞そうなの。これで終わったら、あいつらしくないなの＜

「マジかよ・・・・千歳、お前まだやれるか？」

「うん。何か魔力が減らないんだよね」

（やっぱりか・・・っと、それよりもあいつ。千歳は動けたとしても、そろそろ俺が限界なんだけどよ。ちゃんとしたデバイスがない分、魔力の消費が激しいし。それに俺が落ちたら・・・・）

いくら攻撃を受けても、ネクロノミコンは落ちない。

だがこちらは違う。いつかは一真が落ち、千歳も落ちる可能性もある。

一真はそれを危惧していた。

「さて、どう――――」

＞外にいる方々、聞こえますか！？　聞こえたら返事をお願いします！＜

聞こえてきたのは、聞き覚えのない声。

「誰？」

＞私はネクロノミコンの管制人格、アル・アジフといいます＜

「管制人格だぁ！？　どういうこった？　今、目の前で戦ってるのは管制人格じゃねぇのか？」

＞それは、ネクロノミコンの蒐集プログラム。魔力を蒐集したことで、ネクロノミコンを完全に支配しています＜

ネクロノミコンの両手に、魔力の槍が握られている。
狙いは一真。どちらを狙えば、すぐに崩れるかネクロノミコンは見抜いていた。

《果てろ》

投げ出されたその槍は、一真だけを狙って向かってくる。

「ちっ・・・・」

左に転がってそれを避けると、直ぐに飛び上がる。
一真は左から。千歳は右から。

＞それでアルと言ったのう。用件は何じゃ？＜

＞あ、はい。マスターを助けるために、皆さんが戦ってくださっているのは知っています。そこで頼みがあるんです＜

＞頼み？　何？＜

＞蒐集プログラムに、魔力を消費させるように仕掛けてください＜

一真の膝を受け止めたネクロノミコンは、足を掴んで、

「ぬぉっ！」

「きゃっ！」

千歳へ向けて振り回す。

＞そうして下されば、私とマスターが中から何とかします＜

＞外に声を出せるなら、そっちでやればいいの＜

＞それが出来ていたら苦労しません。今だって、蒐集プログラムの魔力が減ったことで、漸く声が届いたんですから＜

一緒に落ちていく二人。

それでも焦らない。一真は千歳の襟を掴んで、

「行ってこいっ！」

全力でネクロノミコンに投げつける。

＞で、つまりだ。あの野郎から、魔力を奪っちまえばクロノは助かんだな！？＜

＞はいっ！＜

「つーわけだ！　千歳！」

「ＯＫだよ！」

一真の両手の掌には、バスケットボール程の魔力球。

「消し飛べやっ」

狙いはネクロノミコンの顔。

首を動かしてそれを避けると、向かってくる千歳へ、

《ディバインバスター》

「それ、待ってたよ！」

マモンの刀身を中心にして、魔力が渦を巻いている。

それを見て一真はすぐさま、同じように魔力球をバスターに向け投げる。何度も投げ続ける。

「爆っ・・・・」

向かってくるそれに向け、マモンを振り下ろす。

「流破ぁっ！」

千歳とネクロノミコン、そして少しだけだが一真の魔力。

それが全て竜巻となり、ネクロノミコンに向かって流れ込んでいく。

《無駄だ、小娘》

いつの間にかネクロノミコンの手に握られていた、一振りの両刃の大剣。

「あの構え・・・おいおい、マジかよ！」

ネクロノミコンの構えは、ついさっきの千歳と同じもの。

《爆流破》

更に巨大化する竜巻は、千歳へと舞い戻る。

「千歳ぇっ！」

「大丈夫！　マモン！　システム《グリード》、発動っ！」

辺り一体の魔力の吸収が始まった。

「くっ・・・魔力が多すぎ」

竜巻は消えてなくなったが、問題があった。

一気に取り込んだ魔力量が多すぎ、千歳の体は悲鳴を上げていたのだ。

これが何度も続けば、いくら悪魔だと言っても、千歳の体は絶対にもたない。

「クソッタレが・・・っ！？」

《どこを見ている、人間？》

簡単に殴り飛ばされた。千歳も動こうとしたが、思うように動けていない。

体にかかった負担が大きいのだ。

―くくくく・・・・数時間ぶりだなぁ、一真ぁ―

（なっ・・・テメェ！？　何で出てきてやがる！）

聞こえてきた声は、一真が聞きたくなかった声。

《罪》で作られた、“一真”の声だった。

―苦戦してるみてぇだけどよぉ、手ぇ貸してやろうかぁ？―

“一真”のその言葉、一真にとって予想外で過ぎた。

（どういうことだよ）

―つまりはだ、さっきの状態になれって言ってんだよ―

「なっ！？」

《一真の部屋》

一美「流石本編ね。前回との温度差が激しいわ」

なのは「まぁ番外編だしね」

一真「・・・何でもう違和感なしで、あいつは溶け込んでるんだ

？」

アリス「そりゃ、前回あれだけ一緒にいたらね～」

千歳「ねぇ、一真。八つ裂きにしていい？」

一真「そしてお前は、何でそこまで猟奇的？」

千歳「だって、あの存在が気にくわないから」

一美「それはこっちの台詞よ。あなたのような合法ロリがいるから、シスコンでロリコンの人間が騒ぎだして、世界が汚れていくのよ」

千歳「悪いのはシスコンで、ロリコンが悪い訳じゃないよ！」

一真「お前らぁ、絶対に俺に喧嘩売ってるだろ！　なぁ、売ってるよなぁ！？」

アリス「一真。ほら落ち着いて。血圧上がるよ」

一真「これが落ち着いていられるかぁ！　ふざけんなよ、クズどもがぁぁぁぁ！」

一美「はぅっ・・・・」

なのは「一美？」

一美「お兄ちゃんに罵られて、濡れちゃった・・・・」

アリス「一美一人で、どれだけ引き出しがあるの！？」

一美「ブラコンでドSで、お兄ちゃん限定のドMね。といってもこれだけじゃないわよ」

千歳「まだあるんだ・・・・」

一美「ふふふ・・・・怖じけついたのかしら？」

一・千・ア・な

「「「「はい、怖いです。色々な意味で」」」」

一美「いいことね。そして私を奉り崇めなさい」

一真「それはチゲェからな！」

千歳「・・・・なのはちゃん、アリスちゃん。先進まないし、勝手に始めようか？」

アリス「それには同感ね。なのは、お願い」

なのは「うん。それじゃお返事コーナーです」

鴨川秘さんへ

アリス「そうだよ！　あれは質問だよ！」

一真「うるせぇ！　そんなことどうでもいい！　一番の問題は、あの菌類が俺の中に入ったってことだ！（※キノコを作っている農家の皆さん、すみません）」

なのは「やっぱりそこなんだ」

一美「確かにあれは嫌ね・・・菌が私の中を這いずり回るなんて、考えただけで死にそうだわ」

千歳「そんな一真には私の作ったハンバーグと、祇帰ちゃんの送ってくれた激辛タンドリーチキンだよ」

一真「タンドリーチキンは分かるけど、お前の作ったハンバーグというのが、全く理解できない」

アリス「一真の胃、大丈夫かなぁ」

なのは「千歳ちゃんの料理って、そんなになの？」

一美「形があればまだマシね。酷いときは、ダークマターだから」

千歳「えいっ♪」

一真「ぎゃあああぁあああぁあ！」

バルディッシュさんへ

一真「フム。ゲッターロボは見たことねぇな」

なのは「珍しいね。一真君が見たことないなんて」

アリス「確かに。どうしたの？」

一美「お兄ちゃんはロボットアニメが、よく分からないけれど苦手みたいよ。だからエヴ●でさえ、見たことはないの」

一真「ライ●バレルとか、００（ダブル●ー）なら見たことあるんだけどな」

千歳「・・・・」

アリス「どうしたの、千歳？」

千歳「トランザム！」

一・ア・な「「「へっ！？」」」

千歳「ライザァァァ・・・・ソォォォド！」

一真「しかも俺だけぇぇぇ！？」

なのは「何でいきなり！？」

千歳「ん～・・・・何となくかな？」

一美「お兄ちゃんの懐抱・・・・そこでお兄ちゃんと既成事実・・・・よし！」

アリス「いやいやいや！」

一真「早く・・・・治療を・・・・」

麗×零さんへ

一美「いいわね、ゼロ。そのまま私の下僕になりなさい、ゴミムシ。いえ、水虫以下」

一真「そうだな。なっちまえ、グズ。その方が、テメェのこれからの人生も安泰だ」

アリス「うわぁ・・・・二人とも絶好調だ」

千歳「ねぇ。みんなが怖いものって何？」

一真「俺は言わなくても分かるだろ」

一美「私はお兄ちゃんと同じものだから、言わないわ」

アリス「私はは虫類・・・・」

一真「ほれ、ヘビ」

アリス「いやぁぁぁああ！」

なのは「私はお母さん・・・・あ、ちょっとごめんね。え、お母さん？　な、何？　失礼なこと？　い、言ってないよ・・・・」

一美「あらあら。楽しいことになってるわね」

アリス「で、千歳は？」

千歳「ゆ、幽霊・・・あれはちょっと」

一美「一つになってもそこは変わらないのね」

千歳「うるさいなぁ。いいんだよ、それは。文句言うなら、消すよ？」

一真「言ったの一美だからな！　俺関係ないからな！」

千歳「問答無用！」

一真「理不尽だぁぁぁ！」

灰色の野良猫さんへ

一真「ソラ。それは気にしたらダメだ」

アリス「ダメだよ、ソラ君！　女体化したらダメ！　ソラ君はそのままで十分なんだから！」

一美「私はあったことがないから、お兄ちゃんの記憶便りなんだけども・・・あの子は可愛いわね。剥製にしても」

なのは「それはもっとダメだからね。殺人だから」

千歳「一真を殺るのは？」

なのは「うーん・・・どうだろう」

一真「いやそこは――――」

一美「大丈夫よ。私が殺してあげるから」

アリス「それって解決してないよね」

一真「ソラ。残酷なのは作者だけじゃねぇよ。周りの奴らだって、いろいろと残酷だ」

NKさんへ

一真「クソガキの惚気話だけは、確実に阻止しねぇと大惨事だからな」

千歳「そうだよ。聞いてるだけで、こっちが恥ずかしくなっちゃうもん」

アリス「そうかなぁ？　私は何ともないけど・・・あんた達がおかしいんじゃない？」

一・千「「おかしいのはそっち！」」

一美「あの時はお兄ちゃん達が、あのブタロウ用の技を閃いてくれたから助かったわね」

なのは「あぁ、ブタロウってラディ君のこと。一美ちゃんには、それが定着してるんだ」

一真「でもあの技、神無いないと使えねぇからな。三人用も閃かね

ぇと」

千歳「そうだね・・・・」

アリス「あのお話、また聞けないんだ・・・・もう一回聞きたいのに」

一美「そこには尊敬できるわ、桜ノ宮さん」

ＴＯＵＤＡさんへ

一美「雌豚はあなたよ。あなたに出来るの？　お兄ちゃんの匂いだけで、言葉だけで、髪の毛だけでイクことが！」

一真「お前の神経、どうなってんだ？」

アリス「というか、少し自重しないと」

千歳「大丈夫・・・私が潰すから。こうやって！」

なのは「何、その仮面！？」

一真「ここで虚（ホロ●）化すんじゃない！　そしてアッシュ！お前と愛の巣とやらに行くことは、絶対にねぇからなぁぁぁぁ！」

一美「じゃあ、私と――――」

一真「それもねぇ！」

千歳「みんなめんどくさいなぁ・・・・殺そうかな？」

アリス「何で今日はそんなに猟奇的！？」

なのは「どうしてだろう・・・・」

千歳「まいっか。みんな、次回予告しよう♪　時間だしさ」

一美「情緒不安定なのかしら？」

一真「はい、黙れ。そして次回予告だ」

なのは「“一真”君が提案した、二度目の暴走。それは一真君にとって、受け入れがたい提案」

アリス「千歳のシステム《グリード》で、魔力の吸収が間に合わないのは、誰が見ても明らか」

一美「そこで下した、お兄ちゃんの決断は。そしてその結果は？」

一真「次回、魔法少女リリカルなのは～七つの大罪～」

千歳「【気付いた大切な物】」

一同『次回へ、スタンバイレディ！』

気付いた大切な物・前編（前書き）

えっと、予定を百八十度変更したらかなり変わってしまいました。
やっぱりプロットは、考えた方がいいのかなぁ・・・と思うこの頃ですが。作り方がわからない。
っと、愚痴るのはここまでで、『魔法少女リリカルなのは～七つの大罪～』、始まります。

“一真”の提案。
それを一真は、了承したくなかった。
もう一度あの状態になって、自分を抑えることが出来る自信が、一真にはなかったからだ。

―どうする、一真ぁ？―

（テメェだけは、ぜってぇに受け入れたりしねぇ！　いいなっ！）

それが一真の決断だった。

＞何しておる。目の前を見んか＜

「ちっ・・・・」

千歳を無視して、一真へと向かってくるネクロノミコン。
それをギリギリで避けたはずだったが、体がいきなり引っ張られた。

「！・・・・テメェ！　離せっ！」

ネクロノミコンは一真を離さないで、加速しながら飛び続ける。

「一真をっ・・・・」

高速で飛ぶネクロノミコンに、千歳は漸く追い付いた。
本来ならば追い付くのは不可能だが、吸収した膨大な量の魔力を、

推進力として使えば別。

「離せぇっ！」

吸収した魔力の残っている分をマモンへ。そして轟魔を、ネクロノミコンへ叩き込む。が、刃を簡単に捕まれてしまった。

腕を引いて、千歳とネクロノミコンは距離は、一気に近づいてしまう。

「この野郎がっ！」

一真が何をしても、千歳からネクロノミコンは離れない。

千歳も抵抗するが、それも意味をなさない。

ネクロノミコンは二人を捕まえたまま急上昇、そして急降下。

魔力弾ごと二人を、地面に向け投げつけた。

響く爆音と、立ち上る爆煙。

「かはっ・・・・」

（マジかよ、ヤベェ・・・・今ので、一気に限界来ちまった・・・・体、動かねぇ）

休みなく戦い続けた一真の体には、受けたダメージ以外にも、自らの放った魔法の反動も蓄積されていた。

それが今の一撃で爆発したというわけだ。

「みーな・・・・俺の体、無理矢理動かせるか?」

＞無理じゃな。動かせたとしても、主の体じゃ。戦うのは無理だよ＜

「ちっ・・・・・」

どうやっても動かない体。どれだけ力を込めても、腕一つ動かない。

「一真・・・・リリン、ユニゾン解除して」

珍しく言われた通りに行動するリリンに、今の戦況を見れば可笑しな判断をした千歳。

一真は嫌な予感がしてならなかった。

「お前、何するつもりだよ?」

「リリン、みーなさん。一真と一緒に、ここから離脱して」

「ちょっと待て千歳・・・・テメェ、何考えてやがる!」

千歳は答えない。

変わりに一真を中心に、巨大な六芒星の魔方陣が。

それは光始め、一真達の体を包む。

「おい、千歳! リリン! 転移魔法を止めろ! 止めろって言ってんのが、テメェらには聞こえねぇのか!」

出せる限りの声で避けんでも、リリンは魔法を止めようとしない。

「ごめん、一真。それと、――――」

最後の言葉は、ちゃんと一真に届いていた。直後、視界は光で一杯なった。

そして、光景は一変。そこは、バニングス邸の玄関の前。

＞リリン、鈴蘭を呼んで来い＜

黙って頷いて、バニングス邸へと入っていく。

「みーなっ！　何してやがる！　早く、あそこに！　千歳の場所に、俺を連れて行けぇ！」

＞それは無理じゃよ＜

「うるせぇぇ！　さっさと転移――――」

＞主が行って何になるんじゃ。その動けぬ体で＜

「っ・・・・千歳ぇぇぇぇぇ！」

その日、地球から千歳とネクロノミコンの反応は消えた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「シャーリー。まだ見つからへん？」

あれから数日。

今あるだけの機材で、千歳とネクロノミコンを捜索していた。

この事は千歳の両親にも、はやて達が伝えていた。

「すみません。まだ見つかりません」

「そか・・・・忍君達の方も、まだ見つからんみたいやし」

「そうですね。それに、一真さんも」

あの日から誰も一真と会っていない。

正確には、一真が誰とも会おうとしない。

「せやな・・・・今の一真に、私は何て声をかけたらいいか分からん」

「私もです・・・・」

「神無さんだけやなく、千歳ちゃんも・・・・大切な人がいなくなる時の気持ちは、私にも分かる」

はやては過去に、家族である守護騎士達を、目の前で失うという体験をしている。

少なからずでも、一真の気持ちは理解できている。

はやてはそう思っていた。

「八神部隊長」

「グリフィス君？　どうしたんや？」

「八神部隊長達にお客様です」

「私らに？　誰や？」

「楠木千里という方です」

「千歳ちゃんのお母さん・・・・わかった、すぐ行く」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「・・・・」

―いつまでそうしてるつもりだ、テメェはよぉ―

「うるせぇよ・・・・」

ここ数日一真はずっと、虚空を眺めているだけ。それだけをして過ごしている。

その間、一真が思い出していたのは、千歳の最後の言葉。

一真だけに聞こえたその言葉。

『ごめん、一真。それと、好きだよ』

それだけが一真の頭の中で、ずっと再生されていた。

「・・・何でだろうなぁ」

―何のことだぁ?―

「大切な物は、何で俺の手から落ちていくんだろうな。千歳も、姉さんも・・・ちゃんと掴んでるはずなのに。離さないように、しっかりと掴んでるはずなのに・・・なぁ? 俺があそこでお前を受け入れてたら、こんなことにならなかったのか?」

―それは分からねぇな。俺様は、未来予知が出来るわけでもねぇしよぉ。まぁ、あの場面でテメェが退場することには、ならなかっただろうな―

「そうか・・・・」

それだけを言うと、また一真は虚空を見つめ始める。
その一真の姿は頼りなく、今にでも消えてしまいそうに見えた。

―少しは部屋から出たらどうよ？―

「・・・出たところで何がある？　答えてみろよ。なぁ？　答えろよ・・・・・」

―俺様に当たるんじゃねぇよ―

「そうだな・・・・テメェに当たった所で、どうなるわけでもねぇし」

ゆっくりと立ち上がった一真は、この部屋の窓を開けた。
そこから見えるのは海鳴市の街並み。

―死ぬわけじゃねぇだろうな？―

「・・・・それもいいかもな」

―おいおい、止めろよ―

「冗談だよ・・・・千歳がいなくなって、俺の目に写る景色全部が、一瞬で色褪せた。千歳がいなくなっただけでだ・・・・その意味、テメェに分かるか？」

―どうだろうなぁ？―

「それだけ俺の中で千歳は大切で、離したくなくて、一緒にいたかったらしい・・・・もう、無理だけどな」

窓から離れ、ゆっくりとドアへ歩いていく。

―どこ行くんだ？　外には行かないんだろ？―

「・・・・何のことだ？」

―おい、マジかよ・・・・―

ついさっき自分が言った言葉を、今の一真は記憶していなかった。

それほど一真の状態は危うい。危うすぎる。

―これ、ヤバイんじゃねぇかぁ？―

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「ごめんなさいね。急に押し掛けちゃって」

会議室として使っている部屋に通された千里は、隊長陣と退院したアリス達にそう言った。

「いえ。私たちこそ、千歳ちゃんのことで謝らないと――――」

「いいの、それは。あの娘が決めたことだもの。面倒だとすれば、主人が暴れていることくらい」

ある意味で笑い事ではないが、千里にとっては笑い事なのだろう。

だとしても、彼女達の気は晴れない。

「ですが・・・・」

「じゃ、気持ちだけ受け取っておくわ。それでいい？」

納得出来ていないが、はやて達は、はいと頷いた。

それを確認した千里は、懐から数十枚のチケットの束を取り出し、机の上に置く。

「これは？」

「島根に行くための飛行機のチケット。これだけあれば足りるかしら？」

突然出されたチケットを見て、全員が固まる。

いきなり過ぎて、誰も状況を理解できていないらしいようで、アリスとヴィータにいたってはチケットと千里を交互に見ている。

「そうじゃなくて、千里さん」

「何、アリスちゃん？」

「突然何で島根に？　理由が分からないんですけど・・・・」

「それが私にも分からないの。ただ、お義母様からの指示で、あなた達を連れていくように言われてて」

それはとてもおかしな話だった。アリスも含め、そのお母様とは誰も面識はない。

なのに今の話だと、あちらは彼女達のことを知っているように聞

こえた。

「なのは。あたし達、千歳の婆ちゃんに会ったことあるか？」

「確か、なかったはず・・・・」

「あら、そうなの。私、てっきり会ったことがあるのかと・・・・」

千里もそう聞いて、ちょっと驚いていた。

「楠木さん。よろしいですか？」

「えっと、シグナムさんだっわね。どうしたの？」

「楠の・・・・千歳のお婆様とは、どのような方なのですか？　もしかして、魔法に精通している、とか？」

「そうね。私も詳しいことは分からないけど、あなた達のすんでいる世界に、お知り合いがいたはず。名前は確か・・・・ミゼット、と言っていたかしら？」

「それは本当ですか！？」

「えぇ。私の記憶が間違いでなければね」

フェイトが念を押して聞いたが、千里は否定しなかった。

ミゼット。彼女は一真とアリス、そして鈴蘭の親代わりで、管理局では伝説の三提督の一人として、今も管理局を支えている。

「ミゼット提督と・・・・凄い繋がりやな」

「そうだね。ビックリしたよ・・・・ん？」

どこからともなく鳴り響く、携帯の着信音。

はやて達は自分の携帯を確かめるが、どの携帯も鳴っていない。

しかし、携帯の音は、この部屋の中から聞こえてくる。

「ごめんなさい、私だったわ」

携帯を取り出して、耳に付けた。

その姿を見た彼女達は、その姿に違和感を感じた。簡単に言えば、

（（（（（（（（（似合わない）））））））））

和服美人の彼女に、携帯を使っている姿は、ミスマッチ過ぎる光景だった。

それも恐ろしいくらいに。

「あ、はい・・・・はい、分かりました」

そこまで話した千里は、携帯の通話ボタンをもう一度押して、机の上に置いた。

「お義母様、よろしいですよ」

『そうか。さて聞こえるかの、機動六課の娘さん方』

電話の向こうから聞こえてきたのは、千歳の祖母、楠木千那の声だった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

アリスの家から出た一真は、当てもなく街を歩いていた。
その足取りは頼りなく、フラフラと歩き続けている。

―少しは気分転換になったんじゃねぇかぁ？―

どれだけ歩いたところで、一真の心は晴れない。晴れるわけがない。
一真の心を晴れにする千歳が、傍に立っていないのだから。

「・・・・」

足を止めて辺りを見渡す。雲一つない空であろうと、一真には曇り空。

（ならねぇよ・・・・）

またゆっくりと足を進める。何も考えないで、真っ直ぐに。
そんな彼を見た四人の青年達が、前から笑いながら歩いてくる。

「いってぇぇぇ！」

避けることは出来る余裕は、この道にはある。
それなのに男達は、避けないで進んで来て、自らぶつかりに来た。

「あぁ・・・・いたのか」

それだけ呟いて、歩き出そうとするが、

「待てよ！」

肩を掴んで止められた。

「こいつ痛がってるだろ。どうしてくれんだよ？」

「イテェよぉ！　あ、これ折れてるんじゃね？」

「マジかよ！　おい、どうしてくれんだ！？」

「・・・・知らねぇよ」

「金だよ。治療費だせよ！」

無茶苦茶だ。

自らぶつかりに来て折れていたとしたら、完全に自業自得。治療費を請求するのはお門違いだ。

なのにそれを請求してくる。

当たり前だが、一真がそんなお金を払うわけがない。相手にするわけもない。

「早く出せよ！」

なかなか出さない一真に痺れを切らした一人が、殴りかかってきた。

いつもなら殴られる前に殴ったり、避けたりするが、何もなく殴られてしまう。

倒れた一真を殴って、蹴ってやりたい放題。

―おいおい・・・・変わった方がいいんじゃねぇか？―

（変わらなくていい・・・・どうせ財布はねぇしなぁ・・・・）

―・・・・―

手を伸し、一人の足を掴んで、

「なっ！？」

「死ねっ」

引きずり込んで、顔面に一発、二発、三発と殴り一人は気絶。
やり過ぎ感は否めないが、やった本人は何も感じていない。

突然の反撃に、男達は怯む。立ち上がると同時に、もう一人の足も引っ掻けて転けさせる。

「な、何だよ・・・・」

何も言わず、その場から去ろうとする。
だが、まだ一真はそこから動くことができなかった。

「こ、このぉっ！」

不意打ちに、残っている男の一人が後頭部めがけ、

「ぐふっ！」

殴ることは出来なかった。
声がした瞬間に反応していた一真の脚が、男の腹に突き刺さっていた。

（気分転換になったらいいけどな・・・・）

そんなことを考えながら、男達を殴り続ける。

数分後。必要以上に殴られ、気を失っている男達と立ち尽くす一真、という光景がそこにあった。

（やっぱり気晴らしにはならねぇか・・・・）

倒れている男達には見向きもせず、足を動かし始める。

―どこに行くんだぁ？　いくとこなんて、テメェにはねぇだろぉ―

（知らん・・・・）

そう言って、ずっと歩き続けた一真の目の前には、千歳の実家の門があった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

『ん？　聞こえておらんか、八神はやてとやら？　他の誰でもいいんじゃがの』

「あ、はい聞こえてます！　それで、どちら様で・・・・」

『千歳の祖母の千那じゃ。それよりも早速本題に入りたいんじゃが、よいかのう？　お前さん達も、わしが島根を来いと言った理由が知りたいじゃろうから』

こっちの様子が見えているかのように話す千那に、戸惑いを隠せ

ない。だが、電話の主はそんなことを気にしていない。
どんどん話を進めていく。

『わしが島根に来いと言ったのはの、お前さん達に渡したいものがあっての。少し前から、千里さんに頼んでおったんじゃよ』

「渡したいもの・・・・それって――――」

『新しいデバイスじゃよ。機動六課と、《断罪の鎌（エクスキューショナー）》のお前さん達のためのな』

新しいデバイス。その単語は、今の彼女達にとって魅力的過ぎる言葉だった。
だが、鵜呑みに出来ない。

「なぜ、我々にデバイスを？」

『お前さん達、今持ってないんじゃろ？　だからじゃよ』

それはシグナムの問いに一番簡潔で、分かりやすい答え。
それでも、彼女達は納得できない。

『まぁいい。詳しいことは、こっちに来てから話すことにしようか。それとのう、そっちにおる神童一真に伝言を頼みたいんじゃが、いいかのう？』

「はい。それは構いませんけど・・・・」

『千歳は生きておるよ。地球での』

「ちょっ、それ、どういうことだよ!?」

ヴィータが声をそう言うのには、訳がある。

自分達がいくら探しても、なかなか見つからない。なのに、千那は千歳の居場所を知っている。それが信じられないから。

『これに関しても、今は話せんよ。島根に来たら、すべて話すからの。じゃ、千里さん。頼んだよ』

「はい」

ほぼ一方的な会話だけで、その電話は切れた。

携帯に手を伸ばしてしまうと、

「ごめんなさいね。お義母様って、いつもあんな感じだから。それでどうする？　出発は明後日だけど・・・・」

それに対してのはやて達の返答は、

「もちろん、行かせてもらいます」

それが彼女答え。全員の答えでもあった。

ちなみにこれは余談になるが、伝言を伝えようとした彼女達が一真の不在をしるのは、十数分後のこと。

《一真の部屋》

一美「・・・・いいのかしらね。今回、私たち三人なのだけど？」

なのは「そうだよね。千歳ちゃんはしばらくお休みで、一真君は出

たくないらしいから」

アリス「ねぇ、何で一真達は休めたのに、私入院しても休めないの？」

一美「そういうことは、作者に言いなさい。そんなことより、お兄ちゃんはいないのだから《一真の部屋》じゃおかしいわよね。というわけで、今回はこうよ」

《一美の城》

アリス「前にこんなことをした千歳は、確かお仕置きを受けてたわよ」

一美「お仕置き・・・・興奮するわね」

なのは「一美ちゃんは一美ちゃんだね・・・・どうする？　今日はこのまま三人で――――」

一美「大丈夫よ。今日は本編からゲストを呼んでるから。だから、出てきなさい」

鈴蘭「えっと、お久しぶりです。神童鈴蘭です」

アリス「ちょっと質問なんだけど、一美との関係はどうなるの？」

鈴蘭「一応お姉ちゃんになるのかな？　お兄ちゃんと分離したんだから」

一美「そうなるのかしらね。私としても嬉しいわ。こんな、調教し

がいのある妹が出来て」

鈴蘭「ひぃっ・・・・」

なのは「怖がらせない怖がらせない」

アリス「てか、姉としてそれはどうなの」

鈴蘭「し、しないよね。調教とか、しないよね？　お姉ちゃん」

一美「冗談よ。っていうのが冗談」

鈴蘭「ひっ！　（涙）」

アリス「表情を変えないで、よくそんなこと言えるよね」

一美「それが一美ちゃんクオリティー」

なのは「にゃははは・・・・（汗）」

鈴蘭「そ、それでどこまでが、本当？」

一美「何いってるの？　そんなことするわけないじゃない。こんな可愛い妹に。ねぇ？」

鈴蘭「可愛い・・・・ありがとう、お姉ちゃん」

一美「っ・・・・」

なのは「どうしたの、一美ちゃん？」

一美「鈴蘭の瞳が、私には眩しすぎるわ」

な・ア「「・・・・・」」

鈴蘭「？　どういうこと、お姉ちゃん？」

一美「な、何でもないわ。それよりも返事のコーナーよ」

アリス「逃げたよ」

なのは「逃げたね」

鈴蘭「？」

バルディッシュさんへ

なのは「どうなの二人とも？」

一美「その認識で間違いないわね。そのためには、小娘がやったように《罪》を認めるんだけではなく、受け入れることができないとダメなのだけど」

鈴蘭「《罪》を認めるのと、《罪》を受け入れるってどう違うの？」

アリス「えっと、とある人が自分への好意を受け入れて両思いになる、っていうのが《罪》を受け入れる。好意は認めるけど、好きになれないっていうのが《罪》を認める。下手な説明だったけど、理解してくれた？」

鈴蘭「あ、はい」

一美「・・・・下手くそね」

アリス「うるさいなぁ」

なのは「喧嘩はダメだよ」

一美「する気はないわ。ただ遊んでいるだけよ」

鈴蘭「それもどうなの・・・・」

なのは「気にしちゃダメだよ。一美ちゃんって、いつもあんなだから」

鈴蘭「あ、はい・・・・お兄ちゃん、頑張って」

鴨川秘さんへ

一美「なっ・・・・この人形、出来は最高ね。これでオ――――」

な・ア・鈴「「「自主規制！」」」

一美「・・・・わかったわよ」

アリス「えっと、私がというよりも《罪》の私がだからね。ボクっ娘なのは」

鈴蘭「それにしても、今回は前回のフラグを全部折りましたね」

なのは「そうなんだよね。これからどうするんだろ？」

アリス「それは作者のみ知る、だね」

一美「言い換えれば、後先を考えないっていうのが一番かしら？」

鈴蘭「それは言わない方がいいんじゃないかな・・・・たぶん」

なのは「そうだよ。作者さん、泣いちゃうんじゃ・・・・」

アリス「泣くわけないよ。あんなのが」

一美「そうよ。だから、あなた達も、好き放題言いなさい」

鈴蘭「私はいいかな」

なのは「私も遠慮するよ」

一美「そう。まぁいいわ。それに今日は、そろそろ時間のようだし」

アリス「そうだね。じゃあ閉めるよ。次回へ」

一同『スタンバイレディ！』

気付いた大切な物・後編

「えっと、いいんですか？　しばらくは安静のはずじゃあ・・・・」

「大丈夫大丈夫。私の体、普通の人と比べてかなり丈夫だから。もしかしたら、一真さんより丈夫だかも」

一真が楠木家の門の前に着いた頃、バニングス邸の庭では、鈴蘭とスバルが向かい合って立っていた。

その傍らには残りのＦＷメンバーであるティアナ、エリオ、キャロの三人と鈴蘭のユニゾンデバイスのみーなとリリンもいる。

「本当に大丈夫なんですか？」

「大丈夫よ。スバルの言う通り、その娘の体はちょっとばかし特別だから」

「そうですか・・・・」

「でも、なのはさん達に見つかったら・・・・」　エリオの一言に、ユニゾンデバイス組以外の表情が凍りつく。

特にスターズ二人は震えている。

「何じゃ？　見つかったら何かあるのか？」

「えっと、それが――――」

「魔法でのお仕置きなの？」

また二人だけが、体をビクンとさせた。

それほど嫌な思いで、思い出したくない記憶があるのだ。

「・・・・リリン」

「はぁ。仕方ないなの」

めんどくさそうに魔方陣を展開させ、広域結界を張る。

「これならバレないなの」

結界がバレたら全く意味がないのだが、誰もそれを指摘しない。
誰もそこに気がついていない節がある。

「じゃ、始めようか、鈴蘭！」

「はいっ！」

同時に駆け出す。
先に仕掛けたのは鈴蘭。
素早く繰り出した拳は、スバルに当たる直前で開かれた。
そしてパンッ、という音が聞こえた。

「っ！」

直後、スバルの腹に重い一撃が叩き込まれた。すぐさま、鈴蘭から距離を取る。

「猫騙しって・・・・」

「お兄ちゃんからの教えなんですよ。『勝つために、自分ができる

ことは何でもやれ』っていうのが」

「なるほど。一真さんらしいね」

次に仕掛けたのはスバルから。

開いていた間を詰めて、ストレートを打ち込む。

それを、体を回転させて避けた鈴蘭はスバルへ体を向け、二歩目でジャンプ。

上から下へ、拳を打ち出す。

「っ・・・・！」

腕を交差させて受け止めると、すぐに鈴蘭の手首を掴んだ。

そして手首を支点に、鈴蘭の体を一回転。地面を叩きつけられた。

「かはっ・・・・」

背中から地面に落ちた鈴蘭の肺から、空気が押し出される。

今の一連の鈴蘭の動きは、組手ではなく喧嘩をしているよう。

それはここにいる全員が、思っていること。まぁ、師匠が師匠なのだから仕方ないことではあるのだが。

「のぉっ！」

倒れた鈴蘭は、スバルの足首を掴んで引っ張る。

入れ替わり鈴蘭は上に、スバルが下に。

しかも鈴蘭はマウントポジションにいる。

「ふんっ！」

両手を合わせ、ハンマーのように振り下ろす。

「がっ・・・・」

「もう一ぱ――――」

「させるかぁっ！」

無理矢理押し退け飛び起きると、すぐに鈴蘭へと向かう。

倒れている鈴蘭が、再び動き出すより早く。

「くっ・・・・」

鈴蘭も動き出すが、スバルが早い。

一瞬だけスバルの動きを止める方々が、脳裏を過るがすぐに片隅に追いやった。

おそらく、こんな方法を思い付くのは一真や千歳、そして一真に戦い方を、喧嘩を教わった鈴蘭くらいだろう。

そんなことをしている内に、スバルの足が近づいてくるのが分かった。

「ぶふっ！」

頬を思いっきり蹴られ、鈴蘭の体は宙を舞う。

やり過ぎたかなと思ったが、それは杞憂で終わった。

腕をバネとして着地した鈴蘭は、顔を上げてスバルを見た。

その瞬間、スバルの背筋に悪寒が走る。その原因は、鈴蘭の表情。

黒だったはずの瞳は綺麗すぎる赤に。そして、楽しそうな笑顔。

しかしそれは、ここにいるものに恐怖を抱かせる笑顔。

「あはっ♪」

笑顔で向かってくる鈴蘭だが、スバルは足が動かない。いや、正確には恐怖で動かすことが出来ない。

そんなことを気にしない鈴蘭は、スバルへと手を伸ばす。

「退け」

いつの間にかみーなが目の前にいた。

「みーなさん・・・・」

「今日は一段と早かったの・・・・」

そう呟いたみーなは、鈴蘭の頭を鷲掴み、

「ふんっ」

放り投げた。

だが、猫のように回転して、四つん這いで着地。

そこを狙って、ミ●ノ製のバットが振るわれた。

ジャストミート。放物線を描いて、鈴蘭はさらに飛んでいく。

「上出来じゃ、リリン。スバル、主はここから引け。はっきり言って邪魔じゃからの」

「えっ!?」

「主では、今の鈴蘭の相手にはならんよ。いくら《罪人》であっても、主は主。変わるのは魔力や魔力耐性であって、根本的な所は何

も変わらん。そうじゃろ？」

「それは・・・・」

そこまで言われて、スバルは何も言えなくなる。

みーなの言っていることは、紛れもなく本当のこと。それはスバルだけではなく、ティアナも感じていることだった。

そんなスバルから視線を外して、笑顔で走ってくる鈴蘭に目を向けた。

「今度はお仕置きでもするかの・・・・」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「・・・・」

楠木家の門を潜った一真は、組員に囲まれていた。

その全員が、一真に対して凶器を向けている。

「テメェ、どの面下げて来やがった！」

そう怒鳴っても、一真からの反応は返ってこないない。いつもなら悪態の一つくらいはあるのだが、それすらもない。

見たことのない気味の悪い一真の姿に、全員が戸惑っていた。

その一真はというと、男達の存在を一応認識はしているものの、全く見ていない。

一真の視線はその奥の、楠木家その物に注がれていた。

「・・・・」

他のことは完全に無視して、そこだけを目指して歩き出す。

「待ちやがれ！」

その言葉は届いたのか、足を止めてそちらを見る。
男を見る瞳には、いつもの覇気はどこにも見当たらない。それが更に、男達に恐怖を与えた。
男を一瞥すると、また歩き出す。

「こ、このぉっ！」

一人が動いた。ナイフの切っ先を一真に向けて、走り始めた。
それに一真は、おそらくだが気がついていない。

―はぁ・・・世話が焼ける奴だな、こいつはよぉ―

突然動いた右手は、ナイフを持っている男の腕を捻り上げた。
そこでようやく男の存在に気づいた。

「いたのか・・・・」

そう言うと、手を離す。反撃も何もしないで。
いつもならあり得ない。あり得なさすぎる。

「邪魔しないでくれ・・・・たぶん、手加減できないからお前らを・・・殺しちまう」

たんたんと言われたその一言に、嘘は見られない。
だが、その一言がいけなかった。男達に火をつけてしまった。
全員が一斉に、一真へ襲いかかる。

「止めんか、このアホども！」

響き渡る怒声。同時に、全員の動きが止まる。
その声の主は、楠木組組長、楠木千治。

「だけど、頭ぁ！」

「だけどじゃないわい！　さっさと、戻らんかい！」

渋々戻っていく男達。
それを全く気にしないで、一真は千治に向かって歩き始める。

「俺に話しがあるんじゃろ？」

「・・・どうだろうな」

「まぁええわい。入れ」

「わかった・・・・」

一真が通されたのはいつもの大広間ではなく、こじんまりとした個室。
二人にとっては、ちょうどいい部屋だ。

「俺に、謝りにでも来たのかの？」

「わかんねぇ。散歩してて、気づいたら門の前にいた」

「・・・おいおい」

この時、一真の顔を見た千治は思った。
自分よりも、目の前の青年の方が危ないと。
あれだけ暴れまわった自分なんて、まだマシだと。

「そもそも謝ってどうなる？　それで千歳が帰ってくるなら、死ぬほど謝ってやるよ」

「・・・・・・・は？　ボウズ。何を勘違いしとるんじゃ？」

「何のことだ？」

「まさか、千里から何も聞いておらんのか、ボウズ？」

「千里さん？　俺は、あの人と会ってないぞ」

やっぱりか、と呟いきため息をついた千治は、呆れた顔で一真を見る。

「最初に聞くがのう、千歳は死んだと思っておるんじゃないじゃろうな？　そう思っておるなら、それは間違いじゃぞ」

「？　言ってる意味が分からねぇんだが？」

「婆さんから聞いただけで、俺にも詳しいことは知らんが、千歳は生きておるんじゃと。それも地球での」

「婆さんはちょっと特殊な力を持っててのう、それで千歳の姿を見たらしい」

「・・・本当か？　ウソじゃねぇんだな？」

その問いかけに、千治は黙ってうなずいた。

「ははっ・・ははははは・・・・」

「ボウズ？」

あの千歳との別れ。

その時から千歳は、もうこの世にいないものだと思って、ここ数日過ごしてきた。

泣くことも、叫ぶこともしないで。

しかしその言葉は、一真の中で溜められていたものを、一気に決壊させた。

「生きてる・・・・千歳は、生きてる・・・・」

それは千治が初めて見た、一真の涙だった。

「・・・・おい」

しばらくして聞こえてきた地を這うような、恐ろしく低い声。

それは間違いなく、目の前から青年の口から出てきた声だ。

そう断言できる理由は、千治は一言も発していないから。

「今見たこと、忘れろ・・・・」

「無理じゃな。千里が帰ってきたら、言ってやらんとな。ボウズが

――――」

「よし、殺そう」

握りしめた拳には、大量の魔力が宿る。
そのノリは、すでにいつも通りの一真。
千歳が生きている。それが、一真に自分を取り戻させた。

「吹っ飛べや、この親バカがぁ！」

「テメェ程度のボウズが、俺に勝てるわけがないじゃろうが！」

なぜか始まった殴り合い。それは千里が帰ってくるまで続いた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

着物の襟を掴もうとした腕は、対象を失い空を切る。
不満そうな顔を作る鈴蘭だが、みーなは相手にしない。すぐに、攻撃へと転じる。

「いい加減に、せんかっ！」

その拳は、鈴蘭の頬を打ち抜く。

「ぶっ！」

脚は浮き上がり、飛んでいく。
そんな状態でも、鈴蘭は笑っていた。楽しそうに。

「楽しいっ！　みーなさんも、そう思うよね！？　そうだよね！？」

「少し、黙れ」

追い付いたみーなは、再び拳を振り上げる。今度の狙いは鼻。

「がっ・・・・」

その声は鈴蘭ではなく、みーなの口から漏れた。

みーなの体は鈴蘭から離れ、地面へ落ちた。鈴蘭に殴られ、叩き落とされたのだ。

「くっ」

「はぁっ！」

足を伸ばした状態で、縦に一回転。鈴蘭の踵が、みーなへ降ってくる。

「させるわけがないなの」

タイミングよく入ってきたリリンのバットが、上手く鈴蘭を打ち返す。

「みーな」

「言われんでも、分かっておる」

全力でリリンを、鈴蘭へ投げつけた。

リリンが何をするのか、端にいるスバル達にも分かった。リリンの武器は、ミズ●製の金属バット。そしてリリンの口癖は、

『打つ、叩く、殴る、砕くが・・・何とこれ一つで可能なの。驚きの、超特価なの』

全て同じ意味、とはツッコミを入れてはいけない。必ずリリンはスルーするから。

「砕けろなの」

金属バットを、野球選手顔負けの綺麗なフォームで、全力のフルスイング。

当たれば骨折は確実。

鈴蘭はそれを、片手で受け止め振り回す。

「なっ、なの」

リリンの手は、バットのグリップから離れてしまう。

「返すね、リリン」

そう言ってバットを、投げ返す。それも全力で。

リリンのような小さな子供に、受け止められるはずがない。

バットはリリンの頭に直撃。鮮血が舞う・・・はずだった。

「痛いなの」

それだけだった。

確かに直撃した。それはここにいる全員が目にしたこと。

だが、リリンの頭からは出血はない。それどころか、傷や痣が一つもできていない。

それにはさすがの鈴蘭も、驚かないわけがない。それが彼女の見せた隙。
先の衝撃的な光景があったにも関わらず、一人だけ動いていた。
「調子に乗りすぎじゃよ」
その一人は鈴蘭の頭を掴んで、無理矢理地面に押し付ける。
「このっ！」
「お遊びはここで終わり。これからはお仕――――」
「まだだよ、みーなさんっ！」
突然感じた魔力。
自分が押さえつけている、鈴蘭から感じた。
「ちぃっ」
それは鈴蘭が、魔法を使おうとしている証拠。しかも、準備は終わっていると確信した。
＞みーなさんっ！　離れて！＜
念話と同時に、視界の端に二つの光が見えた。
「「ディバイン・・・・」」
すぐにみーなは、その場から飛び退く。

「ドライバー！」

「ブレイザー！」

二つの砲撃は1つの巨大な柱となり、地上の鈴蘭へ降り注ぐ。
鈴蘭の姿が光に消えた瞬間、柱が跡形もなく消失。
「えっ！？」

「何よ今の！？」

「鈴蘭の魔法じゃよ」

「魔法！？　今のがですか！？」

「今のが魔法・・・あり得ないわよ」

魔法の正体は分からないが、《罪》解放状態のスバルとティアナ、二人分の魔法を一撃で消し去った。
それだけの力があると言うことを示していた。

「礼は言うよ。あれが当たっていれば、わしも危なかったからの」

みーなが危ないと感じる魔法。それが、今鈴蘭が放った魔法。
怖い。二人は鈴蘭が怖いと思った。

「・・・下がれ。やはり、主らには無理じゃよ」

「大丈夫です・・・・」

「それに、あたし達は二人分じゃなくて、四人分の気持ちで動いて

ますから」

四人分。それはスバルとティアナ、そしてエリオとキャロのＦＷメンバーのこと。

全員が、鈴蘭を止めたいと思っていた。

「どうしたの？」

「「っ！？」」

いつの間にか、鈴蘭は目の前に立っていた。

「来ないなら、行くよ！」

握りしめた拳。それを突き出す。

「このぉっ！」

ぶつかるスバルと鈴蘭の拳。衝撃が一気に広がっていく。

すぐにスバルは、顔に向けて足を上げた。

「無駄ぁっ！」

鈴蘭はそれを、同じように足を上げて止めた。

「くっ・・・・」

すぐに退こうとするが、動けない。気づけば、鈴蘭に服を掴まれていた。

「これで逃げられないよね、スバルさん♪　それに、ティアナさんも射てないよね？」

鈴蘭の言う通り、ティアナは魔法を使うのは、かなり難しい。
理由としては二つ。二人の距離が近すぎるということと、スバルが鈴蘭の盾になるような位置にいるということ。

「じゃあ、私の――――」

「負けだ、このドアホがっ！」

スバルの視界から鈴蘭の姿が消えた。それと入れ替わるように、あり得ない人物の姿が、そこにはあった。

「一真、さん？」

「あんだよ？　俺がここにいたら、おかしいか？」

「そうじゃなくて・・・・」

言えるわけがない。今まであんなだったのにどうして、なんて。

「・・・ま、いいか。俺にはやることがあるしな」

一真が見つめる先には、立ち上がろうとしている鈴蘭の姿がある。
彼のやること。それは、今スバル達がしてきた、鈴蘭を止めると言う――――

「お仕置きだ、鈴蘭」

違った。さすがは一真、としか言えない発言。
スバルも、ティアナも苦笑いを浮かべる。

「絶対に――――」

「テメェに拒否権なんぞある分けねぇだろうが！」

瞬間移動と言ってもいいだろう。すでに一真は、鈴蘭を殴り付けていた。

「ぐっ！」

「ほれ、もう一発！」

今度は腹。
ここ数日の鬱憤を晴らすかのように、鈴蘭を殴り付ける。
何も知らない人がこの状況を見れば、絶対に警察を呼ばれるだろう、この光景。

「このぉっ！」

反撃しようと拳を作るが、すぐに手首を掴まれてしまう。

「めんどくせぇから、さっさと終わらすが、その前にテメェに言っておくことがある。テメェのはただの暴走だ。喧嘩でさえねぇ。そんなのが俺に届くと思ったら、大間違いだ！　このアホがっ！」

魔力を籠めた、全力の一撃が鈴蘭の頬に叩き込まれた。
足から力が抜けて、崩れ落ちていく鈴蘭の体。

「さて、行くとこあるから、後始末頼んだぞ」

そう告げた一真は、結界を素手で壊し、バニングス邸の中に消えていった。

「・・・・」

「えっと鈴蘭、連れていこうか」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「くぉら、狸！　どこじゃあ！」

大声で、屋敷を駆け回る一真。迷惑極まりないが、誰も文句は言わない。

もしかしたら、言えないのかもしれないが。

というか、念話を使えば早いのだが、今の一真にそんな考えに行き着かない。

「ちくしょう・・・どこ行きやがった。一応、これもやってみるか」

そう呟いた一真は、大きく息を吸い込んで、

「リリカル、マジカ――――」

「死ね、なの♪」

物騒な言葉が聞こえ、一真の頭に衝撃が走る。

それもそのはず。いつの間にか後ろにいたなのはの手には、どこ

から取り出したのか、鉄の棒が握られていた。

「ちょっと、なのは・・・それはやり過ぎだよ」

「大丈夫じゃねぇか、こいつだしよ」

「ヴィータちゃんの言う通りだよ。それに、罪は償うものだから」

「ふざけんなやぁぁぁぁ！」

「うっさいのよ、さっきから！」

「がっ！」

散々だった。

「で、どこ行ってたんや？」

「その前にだ。いい加減、俺から離れろアリス！　暑苦しい！」

「嫌だ！　ずっと、会えなくて、一真分が補給できないんだもん！
だから、しばらくこうしてて！」

「・・・・」

何も言わないで、はやての方を見る。

「で、どこに行ってたかだな。千歳の家だ。理由は・・・・・・・・

言わねぇ。聞いたら、女だろうが全力で殴るからな。男女平等が、俺のモットーだ」

その目は本気だった。狩るものの目だった。

全員が聞こうとしていたのだろうが、その目を見て黙り込んでしまう。

「そんなことよりもだ・・・・」

一真の声のトーンが、低くなる。さっきまで離れることを嫌がっていたアリスでさえ、その声を聞くと一真から体を離した。

それほど真面目な話だと言うことだ。

はやて達も、真面目な顔になる。

「千里さんから聞いた話を、一言一句間違えないで今すぐ話せ。いいな？　もし間違えでもしたら、許さねぇぞ」

その意図を理解した彼女達は、千里から聞いたこれからのこと、千那から聞いた千歳のこととデバイスのことをすべて伝えた。

「これくらいかな？　そうだよね、はやてちゃん？」

「せやな。もらしてることは、多分ないはずやで」

「そうか・・・・出発は明後日か。うっし、準備するか」

そう言って、一真は部屋から出ていった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「忙しないね」

「でも、元気がないよりはいいよ。あんな一真、見たくないもん」

三人とも同意見で、首を縦に振った。

「それじゃ、私たちも準備を――――」

「失礼します」

そう言って入ってきたのは、ティアナとみーなという珍しい組み合わせ。

珍しすぎて、なのはは心配になって、

「どうしたの、ティアナ？　何かあった？」

「違います。隊長達にお話があって来ました」

「話？」

「はい。あの・・・アンノウンのことで、伝えないといけないことがあるんです」

《一真の部屋》

一真「復！　活！　そして、一美ぃ」

一美「何かしら、お兄ちゃん？」

一真「お仕置きだ」

一美「喜んで♪」

一真「・・・・」

な・ア「「やっぱり・・・・」」

一真「やらねぇ方がお仕置きなんだろうな、これ」

一美「放置プレイね。いいわよ、お兄ちゃん」

一真「もういや（涙）」

なのは「あ、そうだ。一真君に聞きたいことがあったんだ」

一真「何だよ？」

なのは「千歳ちゃんのことをどう思ってる？　ちなみにこれは、異性としてどう思っているか、だからね」

アリス「私もすっごい聞きたい！　どうなの、一真！？」

一真「・・・・拒――――」

な・ア「「却下で」」

一真「ぐっ」

一美「私も気になるわね。小娘を選ぶか、私を選ぶか」

一真「お前という選択肢は、永遠に俺の中に存在しねぇから、安心してくれ」

なのは「それでどうなの？」

一真「前にも言ったけどよ、その、あれだ。嫌いじゃ・・・・」

アリス「それはダメだよ、一真。好きか嫌いかじゃないと」

一真「ネタバレになるから、黙秘権を発動させてもらう！」

アリス「ネタバレって言われたら、これ以上聞けないけど・・・・ねぇ？」

なのは「今更、だよねぇ」

一美「そうね。読者にはもうバレバレなのに」

一真「う、うるせぇ！　さっさと次に行くぞ！」

なのは「それもそうだね。じゃあ、お返事コーナー！」

バルディッシュさんへ

一真「壊れるねぇ・・・そんな生易しいものならいいんだけどな」

アリス「どういうことなの？」

一真「俺には記憶が全くねぇんだけどな、ナイフで腕を切ろうとし

てたらしい」

な・ア「「は？」」

一真「これはあいつ・・・もう一人の俺から聞いたんだがな、あの状態になって二日後くらい、ナイフを使って自殺しようとしたらしいんだよ」

一美「それはかなりヤバイわね。でも、お兄ちゃんが死んだら、私もそうなりそう・・・・」

アリス「私としては、一真を生き返らせようとしそうなイメージがあるんだよね」

一美「それはありそうね。間違いではないと思うわ」

なのは「間違いじゃないんだ・・・・」

二階堂さんへ

一真「謝る必要はねぇよ、昶。そもそも、かける言葉があるのは、相手にそれを受け止める余裕があるとわかっているときだけだ」

アリス「一真がまともなことを・・・気持ち悪っ！」

一真「よし、死ねっ！」

なのは「それにしても、新しいデバイスって何なんだろうね？」

一美「・・・・鞭？」

なのは「それって、今一美ちゃんが欲しいものじゃない？」

一美「よく分かったわね。今、すっごく鞭が欲しいわ。そして、アリスを心行くまで叩くの」

アリス「私嫌だからね！」

一真「・・・・いや、行けんじゃねぇか？　お前ならよ」

アリス「私がMなのは、一真の時だけだもん！」

なのは「そんな告白をここでされても・・・・」

一真「つーか、俺の時だろうがなんだろうが、Mなのは困る。いや、マジで」

鴨川秘さんへ

一真「悪魔なのは本当だから認めるが、最凶ではないだろ」

なのは「だったら何なの？」

一真「知らん。だけど、最凶じゃねぇことは確かだな。それはそうと、何で俺があの親バカに殴られなきゃなんねぇんだっ！」

アリス「突然そこ！？」

一真「当たり前じゃあ！」

一美「このステッキ、使えるわね。じゃあ、えい」

一真「ごふっ・・・・何しやがる！」

アリス「ホント、中がいいよね」

なのは「さすが、お似合いのカップルだね」

一真「おいっ！　何を願い事にしやがった！？」

一美「私とお兄ちゃんが恋人同士」

一真「・・・・次回までに治しておかねぇと、千歳が・・・・って、何を言ってんだよ！」

ＴＯＵＤＡさんへ

一真「いや、それを止めるのは絶対無理だ。つか、その存在に関わりたくない。だから、そっちで処理してくれ」

アリス「うん。私も関わりたく――――」

なのは「アリスちゃんがそれを言っちゃダメだよ。よく暴走してるんだから」

アリス「うっ・・・・」

一美「アッシュとか言ったかしら。あなたが慰めないでも、私が慰めるから大丈夫よ。身も心も、アソコもね」

一・な・ア「「何を言ってんだ、お前は!?」」

アリス「その役目は一美じゃなくて、私の役目だよ!」

一真「お前も何言ってる!?　お前らは、少し考えて発言してくれ!」

なのは「そうだよ!　規制の対象になっちゃうかもしれないんだよ!」

ア・美「「だから?」」

一真「いやかなり重大なことだからな。もし、そうなったら」

アリス「知らないよ、そんなの」

一美「そこはアリスと同意見ね」

一・な「「はぁ・・・・」」

NKさんへ

一真「セラフィム、黙れや!」

アリス「照れてる、照れてる」

一真「テメェも黙れ！」

なのは「ホント、千歳ちゃんのお祖母さんって何者なんだろうね？」

一美「それは私にも分からないわね。分かっていることは、かなり特殊な人ということかしら。なぜか色々と分かっていて、デバイスを作れるのだから」

なのは「それはそうだね」

一真「クソガキ！　テメェのデバイス、何とかしやがれ！　そうしねぇと、テメェごと潰すぞ！　もっと言うと、男として人生今すぐ終わらせるぞ！」

アリス「・・・・あぁ、そう言うことね。それ、分かりにくくない？」

一美「確かにそうね。お兄ちゃん。言うなら金――――」

なのは「ストォォォップ！　それ以上はダメェェェ！」

一真「だそうだ。つか、これ以上はヤバイな。次回予告だ、次回予告」

アリス「千治さんと千里さんに連れられ、島根は出雲にやって来た私たち」

なのは「そこで待っていたのは、出会いと事件と事件」

一真「そして、新たなデバイスだった」

一美「次回、魔法少女リリカルなのは～七つの大罪～」

一同『【出雲へ】』

一同『次回へ、スタンバイレディ！』

出雲へ

「着いたぁ！」

機動六課と《断罪の鎌（エクスキューショナー）》の面々が下り立ったのは、島根県の出雲空港。

ちにみに、名前は出雲空港となっているが、出雲市にあるわけではないので、悪しからず。

「うっせぇよ、アリス・・・・」

あくびを噛み殺しながら、そう呟く一真。

出雲に着くまで飛行機で寝ていたはずなのだが、まだ寝足りないらしい。

そんな一真を他所にミッド出身のメンバーは、物珍しそうにキョロキョロと、辺りを見渡している。

「お前ら、何をしとんじゃい。さっさと行くぞ」

観光気分になってしまうのは仕方のないことだろう。が、今回島根に来た理由は、全くの違う。

「ここが出雲と言う所ですの？」

「俺に聞かないでくれ、隊長。こう言うのは、忍に聞くべきだろう？」

そうゼロに言われて忍の姿を探すが、全く見当たらない。さすがは、Ｍｒ．影薄。

「どこに――――」

「後ろですよ、後ろ」

「被せるとはいい度胸ですわね、忍。殺しますわよ」

「はぁ・・・で、何ですか隊長？」

もうツッコミを入れる気力もなく、話を変えてしまう。
おそらく最善の策なのは間違いない。

「そうそう。あなたも地球出身でしたわよね？　出雲とは、このような所なんですの？」

「いや、ここは空港ですよ。外に出たら、どんなところか分かるから、それまで楽しみにしていてくださいよ」

それだけ言って、そそくさと歩いていく。
さっさとアンナから離れたい忍であった。

「・・・どうしたのよ、スバル？」

「初めての所だから、ワクワクしちゃって・・・出雲って、どんな所なんだろね？」

次の日が遠足の小学生のような顔のスバルに、ティアナは呆れてしまった。

「『イズモタイシャ』って言うのが有名みたいですよ」

隣にいたエリオが、パンフを見ながら説明する。
キャロもそれを覗き込む。

「これが『イズモタイシャ』なんだ。これって、何するところなんだろ？」

急に現れたキャロに、一瞬ドキッとしてしまうエリオ。
女の子と密着して、ドキッとならない男子がいれば、それは色々とおかしい。しかもそれが好きな女の子となれば、尚更である。

「鈴蘭は、『イズモタイシャ』知ってる？」

「私も知らないんです。地球にはあまり来たことなくて・・・・お兄ちゃんに聞いたら――――」

「今聞いたら、僕たちが危険なんじゃ・・・・・」

エリオの言う通り、今の一真がまともに教えてくれることは、ほぼないと言っていい。
下手をすれば、身に危険が及ぶ可能性さえある。死にはしないだろうが。

「なのはさん達は、何か話してるし・・・・」

彼女達の前を歩くなのは達は、何か険しい顔をして会話をしている真っ最中。
非常に話しかけにくい。
ティアナにはその話の内容が、何となく予想できていたのだが、それをここで言うこともないだろうと思い、それを考えるのを止め

た。

「そうだ。あの、千里さん」

「どうしたの、鈴蘭ちゃん？」

「『イズモタイシャ』って、どんなところなんですか」

「出雲大社って言うのは、神社なの」

日本人なら誰でも理解できる説明だが、ミッド出身の彼女たちには全く伝わらない。

千里もそれに気づき、

「神社はね神様を祀っているところでね、おみくじで運勢を占ったり、絵馬って言うものに願い事を書いてお願いしたりできるのよ。暇があれば、行ってみたら？」

「そうだね～、エリオ」

「そうよね、エリオ」

「っ！」

一瞬だけキャロを見て、顔を真っ赤にすると、そのまま早歩きで歩いていってしまった。

「待ってよ、エリオ君！」

その様子を見て、ニヤニヤと笑みを浮かべるスバルとティアナ。

そして鈴蘭と千里は、どういう意味なのかすぐに理解できた。

「初々しいわ」

「そうですね」

とても楽しそうな笑顔を浮かべる四人であった。

「迎えが来てるはずなんじゃがのう・・・・」

「千治さん、いたわよ。悠一君達が」

千里の示す先には、三人の男女が立っていた。

「お久しぶりです千治さん、千里さん。そして初めまして機動六課、そして《断罪の鎌》の皆様。僕は中嶋悠一（ナカジマユウイチ）といいます。そして・・・・」

「初めまして、羽柴桂（ハシバケイ）です。よろしくお願いします♪」

「山村拓磨（ヤマムラタクマ）・・・・ふぁあ、ねむ。悠一、車の鍵出せ。俺、車で寝とくけ」

拓磨の姿を見た瞬間、全員の脳裏にある男が思い浮かんだ。

その男は、目の前の彼と同じように、眠そうにあくびを繰り返している。

「・・・あんだよ？」

「いや、何でもあらへんよ」

「そ、そうだよ。ね、なのは？」

「う、うん、そうだよ。にゃははは」

乾いた笑い声がなのはの口から出た。

「・・・・」

「・・・・」

一真と拓磨。

二人がようやくお互いを認識。そして、一気に表情が険しくなる。

（（こいつ、気に入らねぇ・・・・））

それがお互いがお互いに抱いた第一印象。

「それじゃ、こちらです」

二人がそんなことを考えているなど、誰も知るわけがなく、車へと向かっていく。

「・・・・」

「・・・・」

「あんた、名前は？」

「クソガキ。年上には敬語を使えって、親から習わなかったか？」

気に入らないと伝えるように、お互いが睨み続ける。

「習ったけど、あんたは別だ。あんたにだけは、絶対に敬語なんて使いたくない」

「そうかよ・・・・まぁ、テメェとは極力――――」

「あんただろ？　千那の婆さんの孫を見捨てて生き延びたってのは？」

拓磨の横を通りすぎようとした一真の足が、ピタリと止まる。

「今、何つった？」

「聞こえなかったのか？　じゃあ、今度は聞こえるように言ってやるけ、よう聞けよ。婆さんの孫を、我が身可愛さに見捨てて逃げた腰抜けは、あんただろ？　って、聞いたんだよ」

一真から発された殺気は、一瞬にして空港全体に広がっていった。到着ロビーの入り口にいたなのは達にも、それは感じられた。

「少しは、考えて喋れよガキ・・・・」

その殺気は殺意へ変わり、拓磨へと向けられる。

「俺が千歳を見捨てて逃げただぁ？　ふざけたことぬかしてんじゃねぇぞ・・・・」

ゆっくりと上がっていく左腕。凝縮された《罪》の魔力が、そこに集められていた。

「後悔させてやる。五体満足で、帰ることができると――――」

「ダメ、一真！」

アリスがそう叫ぶが、一真の耳には届かない。
そして腕が振り下ろされた。が、

「ストップです」

当たる寸前で、悠一が一真の腕を掴んでいた。

「・・・邪魔してんじゃねぇよ」

「しますよ。こんなところで暴れて、関係ない方達まで巻き込むのは嫌ですし。それに、拓磨に聞きたいことがあります」

「何だよ？」

「彼に何を言った？」

「何も――――」

「・・・・もういい」

殺気だけを発するまま、一真は歩き出す。
そんな一真の表情は無表情であったが、アリスには別の表情に見えていた。

「泣いてる・・・・」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

送迎バスの中。
一真と拓磨は離れて座っている。
お互いが自ら離れて座り、全員も一緒には座ってほしくはなかった。

「どうしたんだ、あいつ？　俺の時よりキレてないか？」

今は眠っているため、ユゥイの言葉は聞こえていない。

「たぶん言われたのは、千歳のことだよ・・・昔から、一真はそうだから。それに、今の一真には」

「彼女の話は、タブー。そうでしょう、アリスさん？」

「うん・・・・」

自分の前の席で眠る一真を眺めながら、アリスは頷く。
いくらいつも通りに振る舞っていても、一真の傷が治ったわけではない。ただ、誰にもバレないように隠しているだけ。
それを無理矢理さらけ出された一真が、今の状態。誰も、そんな一真を扱うのは不可能に近かった。

（悔しいな・・・羨ましいよ、千歳）

抱いたその感情。それは嫉妬。

だが、アリスはそれに気づくことはなかった。

「着きましたよ、みなさん」

バスが止まったのは、巨大な門の前。

楠木家の門など比べ物にならないくらい、その門は巨大。

「ほら、起きて一真」

「・・・んあ、何だよアリス？」

「着いたよ」

「そうか・・・・」

目を覚まして立ち上がった一真は、すぐに不機嫌な顔に変わる。

何かしたのかとアリスは思ったが、すぐに自分が原因ではないことが分かった。

「・・・・」

一真の睨み付ける先には、彼の傷をさらけ出した張本人の拓磨の姿が。

アリスは一瞬だけ殺気を感じた。一瞬だけだが、体が動けなくなるほどのものだった。

「一真。行こう」

「・・・・あぁ」

早くここから移動させないと、マズイことになる。そう感じたアリスは、一真の前に立ってバスから降りた。

前にいる拓磨に、一真が手を出さないように。

「揃いましたね。行きましょうか」

開かれる巨大な門。

見えてきたのは、平安時代の貴族が今でも住んでいそうな屋敷と、そこに続く一本の道。

そしてその道を挟むように、両脇に並んだ着物を着た百人はかるく超えるだろう男女が立っていた。

初めて見る光景に、全員が言葉を失ってしまう。

「ん・・・・」

その光景の中で、一真は気がついた。

屋敷へと続く道の先。つまり、その終着点に一人立っていることに。

「っ！」

無意識に動き始めた体は、一真自信にも止めることは出来なかった。

「千歳っ！」

道の先に着いた一真はそう叫んだが、そこにいたのは目当ての人物ではなかった。

「・・・・誰だテメェ？」

「誰だ、とは失礼。お前さんの好いている相手の祖母だというのに」

「・・・・・・・・じゃあ、千那ってのはあんたか？」

「そうなるの。それよりもお前さんが一人で来たせいで、連れが困っておるぞ」

「みたいだな・・・・」

そう返事するが、一真は別のことを考えていた。

（俺があいつを間違えるはずねぇのに・・・・どういうことだ？）

千歳と千那を何故間違えたのか。

どう考えても、その答えに辿り着かない。辿り着くことができない。

それに対しイライラが募っていく。

「フム・・・・拓磨かの？　それとも、今のことか？」

「・・・・どっちもだ」

「そうか。拓磨！」

「な、何だよ、婆さん！？」

突然呼ばれ、拓磨の足が止まる。

嫌な予感ばかりが、拓磨の体を駆け抜けていく。

「お前さん。一真に何言ったんじゃ？」

「何も――――」

「大方、千歳のことじゃろ？」

「だってこいつだろ！？　婆さんの孫を見捨てて、逃げて伸びたのって！」

そこが一真の限界。

自分の中で、何かが切れる音を聞いた気がした。

「もういい、喋るな。死ねよ」

辺りにふりかかる魔力の圧力。

「くっ・・・何だこれは・・・・」

「これが、一真の、魔力なのかよ」

なのは達でさえ何とか耐えている、という状態なのにＦＷメンバーが耐えられるはずがない。

だが、そんなことを一真は気にしていない。

「へっ。やん――――」

「喋るなって、一真が言ったの聞いてなかった？」

レヴィアタンの魔力紐が、拓磨の両手両足、そして首に巻き付いていた。

「拓磨っ！」

「小娘、手ぇ出すんじゃねぇぞ。俺の目的は、この小僧だけだ」

動けない拓磨に、一真はゆっくりと近づいていく。
その命を、ここで消すために。

「一真君。いい加減にしなさい」

千里のその一言で、一真の動きは止まる。

「アリスちゃんも。いいわね？　よくないのなら、お仕置きなのだけど・・・・」

無表情だった一真とアリスの顔が、一瞬にして青ざめる。
何故か千治もガタガタ震えているが、それは気にしないように。

「何だよ。行きなり止めてよ。腰抜け！」

「あんたには、あたしが直接お仕置きしてあげるよ、拓磨♪」

「へ？」

その声は拓磨の後ろから聞こえてきた。
ゆっくりと顔を回せば、そこには真っ赤な髪の毛をポニーテールにした女性が、笑顔で立っていた。

「あ、葵っ！　いつ帰ってきたんだよ！？」

「今だよ。それじゃ、行こうか♪」

「いや、ちょ、桂！　助けて！　Ｈｅｌｐ　ｍｅ！」

そう叫んで桂に助けを請うが、

「いや、無理。今回はあんたが悪いから」

そう言って、葵と呼ばれた女性に引きずられていく拓磨を、桂は同情することなく見送った。
直後、拓磨の物と思われる叫び声が聞こえてきたが、勿論スルー。

「拓磨のことは、葵に任せてよいの。それじゃ、悠一。わしは先に行くから、案内頼むぞ」

「はい」

何も説明なしに、勝手に状況は進んでいく。

「中嶋悠一。先の彼女は何者ですの？」

「坂本葵（サカモトアオイ）。僕らの仲間です。また後で会うことになりますので、聞きたいことがあれば、葵に聞いてください」

そう言うと悠一は歩き出す。
一真達も、それに続いて屋敷へと入っていった。
全員が通された大広間には千那と、数人の男女が座っていた。

「まず最初に、よく来てくれた。礼を言わせてもらう」

頭を下げる千那達。それに習ってなのは達も頭を下げるが、一真だけは頭を上げたまま。
じっと千那を見つめたまま、険しい顔を作っている。

「フム。それじゃ、何か聞きたいことがあるじゃろう？　何でも答えるぞ」

「じゃあ・・・・千歳ちゃ・・・・いや、千歳さんを見つけた方法と、今彼女がいる場所を教えてほしいんです。私達がどれだけ探しても、千歳さんが見つからなかったのに」

「やはりそのことかの。八神はやてじゃったの」

「どうして私の名前を？」

「お前さんだけじゃないぞ。高町なのはに、フェイト・Ｔ・ハラオウン。他の者の名前も分かるぞ」

「どうして・・・・」

「わしが生まれつき持っておる力での、わしはこれを『アカシックレコード』と呼んでおる。これはの、ある人物の名前が分かれば、その人物の生まれてから死ぬまでの間に関わる事象、人物の名前が

すべて分かる。更にそこから名前を知れば、その人間のことも調べられる。じゃから、千歳やお前さん達のことも分かるということじゃな。それにこの力にはメリットしかなくての、お前さん達のように魔力を使わなくても使える力なんじゃよ」

つまり、この能力があれば世界中のことを、際限なしに全て知ることができるということ。

規格外すぎる力。それは、恐怖を覚えるほどのもの。

「で、千歳の居場所じゃが・・・・」

何かを確かめるかのように目を閉じて、そして詳細を話始めた。

「ニュージーランドと南米大陸と南極大陸の中間付近、南緯４７度９分、西経１２６度４３分。そこに沈んでおる、石造都市ルルイエにネクロノミコンと一緒にいる。これは間違いないの」

「ちょっと待て、婆さん。今、沈んでるって言ったな？　つーことはなんだ？　クロノの体と千歳は、海の中、海の底にいるってことか？」

「そういうことになるのう」

まるで他人事のように、たんたんと言う千那。

それに一真はイラっとするが、堪え、黙って千那の言葉に耳を傾ける。

「次に、お前さん達には時間がないということを知ってもらいたい。今日を抜いてあと四日。それがタイムリミットじゃな」

「それはどういうことなの？」

「ネクロノミコンはお前さん達の魔力を追って、ここ出雲に来る。目的は、魔力の蒐集。もちろん千歳も来るぞ」

「ですが、我々にはデバイスが・・・・」

「そんなことは知っておるよ、シグナム。じゃから、わしは用意したんじゃ。お前さん達の為の、新しいデバイスを。悠一達だけでは、ネクロノミコンには勝てぬからのう。あれを持ってきてくれんか、悠一？」

「はい。分かりました」

「あれって何じゃい、婆さん？」

「魔力のないお前さんには、一生使えん代物じゃよ千治」

「・・・・そうかよ」

帰ってきた悠一は、丸い宝石のような物が置かれた、一つの箱を持っていた。

その丸い宝石の数は、ちょうどなのは達と同じ数ある。

「それが新しいデバイス、ですか？」

ネムの問いに、千那は首を縦に振る。

「これがお前さん達の新しいデバイス、『パラサイトデバイス』じゃ」

初めて聞き、初めて見るそのデバイス。

「これを四日で使いこなしてもらう。よいの？」

ネクロノミコンの襲撃まで、残りたった四日。

それはとても過酷な修行の始まりだった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

地球へと向かう、次元航行艦の中。

「・・・・」

その中にある一部屋。神無はベッドの上に寝転がり、天井を眺めていた。

「一真・・・・」

その呟きは誰の耳にも聞こえることなく、静かな部屋に響いて消えていく。

「入っていいかしら？」

そんな声が、入り口の向こう側から聞こえてきた。

神無はそれに返事を返さない。彼女からそう言われているのだ。

「何の用ですか、カエ――――」

「ラスト。そう呼ぶように。いいわね、神無ちゃん♪　話し方もい

つも通りにね」

「・・・・わかったわ。それで、何の用なのよ？」

「付いてきてほしい所があるのよ」

「どこに？」

「時空管理局本局。会いたい人がいるのよ」

それを聞いて、神無は怪訝な顔をする。

彼女の知り合いが、管理局にいるとは、全く想像がつかないのだ。

「誰？」

「それは、会ってからの秘密♪　じゃあ、行きましょうか」

――――現状ではフィール達によって、管理局本局は閉鎖されているのだが、彼の下についている神無達や、スポンサーであるラスト達は自由に行き来できる。

そのため、彼女達はここに来ることが出来る。

「それで、あなたの会いたい人って、ここにいるのね？」

「正確には・・・・」

＞誰にも見つからないように、ここに隔離しているが正解ね＜

ドアを開くと、その部屋の中には見覚えのある人物が、椅子に座ってこちらを見ていた。

「ミゼットさん!?」

「あら、カエデちゃん。それと・・・・」

「あ、こっちで会うのは初めてでしたね。一真の姉の神童神無です」

その名前を聞いて一瞬だけ驚いた顔をしたが、すぐに神無の姿の訳を理解した。

「そういうことなのね、神無ちゃん」

「はい・・・訳あってカエデさんに協力してます」

「そう。それで、今日はどうしたの?」

「ミゼットさん。そして、神無ちゃんに見せたいものがあって、ここに来ました」

いつの軽い雰囲気は、彼女の周りにはなかった。

誰が見ても別人のように見えるだろう。

「それは《罪人》と《聖人》の生まれた理由、悪魔と天使と人間の違い。そして魔王と神についての資料です。今は軽く目を通しておいてください」

渡された資料を目を通している内に、とある資料で手が止まった。

「これは、本当なの?」

「はい。間違いないことです」

「神無ちゃんはこの事を？」

「カエデさんから聞きました」

「そう・・・じゃあ、あの子達は？」

「たぶん知らないはずですよ。私たち以外にはアリスちゃんも知ってますけど、何も伝えていないかと・・・」

「今はまだ、その方がいいかもしれないわね、これは」

ミゼットの持つ資料の一文には、こう書いてある。

『次代魔王候補：神童一真
次代神候補：アンナ・シロガネ
候補条件：候補条件は３つ。一つ目は人間であること。二つ目は候補同士に血の繋がりがあること。３つ目は先代の生まれ代わりであること』

《一真の部屋》

一真「いいかげんに、元に戻せ！」

一美「嫌よ。これだけは、いくらお兄ちゃんの言葉でもね」

一真「テメェ・・・・」

アリス「千歳が帰ってきたら、一真は殺されるね」

一・美「「はっ！？」」

一美「何故、あの小娘の名前が！？」

一真「・・・あぁ。そういや、あいつって何故かここの神だったな。俺の部屋なのによ」

一美「なっ・・・・」

なのは「どうしたの、一美ちゃん？」

一美「な、何でもないわ。それよりもお兄ちゃん」

一真「な、何だぐほっ！」

一美「これであのステッキの効果はなくなったわ。良かったわね、お兄ちゃん」

なのは「よ、よく分からないけど、一真君はお兄さんなんだから殴るのは・・・」

一美「私だからいいのよ」

一真「理不尽だっ！」

アリス「その叫びって、今更だよね？」

一真「今更でも関係ねぇ！　叫ばないとやってられるか！　こうなったら、本編からあの二人を強制召喚！」

なのは「強制」

アリス「召喚？」

一美「誰をよ？」

一真「こいつらだぁ！」

忍・ユ「「へっ！？」」

ユゥイ「何で俺達ここにいるんだ？」

一真「俺が呼んだんだよ！　つか、ここにいるお前らは知らねぇだろうが、この二人はな勝ち組なんだよ！　本編で彼女いない歴＝年齢の更新が止まるんだよ！」

忍・ユ「「初耳だ！！」」

なのは「本人達も知らないこと、ここで言ってもいいの？」

アリス「って言うか、ネタバレ？」

一真「大丈夫だ。誰と、とは言ってないからな！」

一美「さすがお兄ちゃん。最高だわ」

忍「どこがだ！　最悪だろうが！」

一美「・・・・あら、まだいたの。もう帰ったのだと思って、いな

い程で話していたわ。というか、目障りよ。死になさい」

忍「ここでもこんな扱いかよぉぉぉぉ！」

ユゥイ「何で俺達・・・・いや、忍が呼ばれたか理解できた」

なのは「私も」

アリス「右に同じく。というわけで、ユゥイ。分かっていない読者の方々がいるかもしれないので、説明して」

ユゥイ「・・・・忍という最高の弄られ役がいると、自分が弄られなくてすむから、だろうなぁ」

なのは「忍君のためにも、お返事コーナーに行った方がいいのかな？」

ユゥイ「そうしてやってくれ」

忍「だから俺は――――」

一美「ねぇ、お兄ちゃん。さっきまでここにいたハエは、いなくなったようだから私と寝技の特訓をしましょう」

一真「するか、ボケッ！」

忍「存在が認識されなくなった・・・・」

鴨川秘さんへ

アリス「私も秘さんに賛成！」

なのは「でも、一真君もいろいろとやってるよ？」

一美「本編のあれはもう、別物よ。それにお兄ちゃんは、あの頃はまだ気がついてなかったでしょう？」

な・ア「「確かに」」

忍「神童！　あのちんちくりんステッキを、俺に貸してくれ！」

一真「何でだよ？」

ユゥイ「影が薄いのを直したいんだろ？」

忍「そうだ！」

一真「さっき砕いたけど、それでいいならくれてやる」

忍「ノォォォォォ！」

ユゥイ「・・・・何か同情できないな」

一真「俺もだ」

二階堂さんへ

一真「ありゃ、誰だ？」

アリス「千華でしょ。あっちの感想で見てきたじゃない」

一真「いや、そうだけどな・・・・」

忍「あれを見てると、楠木が神童にデレデレだった時を思い出すな」

一真「それを言うなぁぁぁぁ！」

忍「ぐぼふぅ！」

一美「・・・・リリカル、マジカ――――」

なのは「死ねよ。スターライトブレイカー！」

一美「無駄よ。爆流破！」

ユゥイ「あの二人は無視だな。で、神童。お前の妹なんだけど、あれは何なんだ？」

一真「あれは・・・・まぁ、本編で楽しみにしててくれ」

ユゥイ「だそうだ。それまで、待っててくれ」

ＴＯＵＤＡさんへ

なのは「そうだ。すっかり忘れてた。二人にお仕置きしないと。スターライト・・・・」

一・ユ・忍「「「それはオーバーキルでは？」」」

なのは「ブレイカァァァ！」

アリス「ねぇ、一真。これ、隆浩か――――」

一・美「「捨て（ろ／なさい）」」

忍「捨てろって、何が入ってるんだ？」

アリス「多分茸」

ユゥイ「茸って・・・お前らダメなのか？」

一真「あんな毒物食えるか！」

一美「あんなもの地球上に存在してはならないのよ」

※茸を作っている農家の皆様、本当にごめんなさい。

アリス「じゃあどうする？」

一真「食いたきゃ食え。ただし、俺達のいないところでな」

一美「もし目の前で食べるなら・・・」

一・美「「殺す（わよ）」」

忍「いや、それはやり過ぎ」

NKさんへ

一真「大丈夫。痛みもなく、去勢してやるからよ。ククク・・・・」

一美「それは」

アリス「こっちの」

ア・美「「セリフ」」

一真「あのクソ女(アマ)がぁぁぁぁ！　俺は逃げるがその前に、なのは！　これをあっちの『ますたー』に必ず送れ。中身は、読みたきゃ読め！」

アリス「待て、一真！」

一美「逃がさないわよ、お兄ちゃん！」

忍「行ったな」

ユゥイ「そうだな。で、その手紙には何て書いてあるんだ？」

なのは「えっとね・・・・」

『ますたー。お前のラディが、レオタード姿のフェイトを想像しながら、自家発電を毎夜行っているらしい。二度とそんなことがないように、再教育しておいて【お前にしか反応しないドMに調教して】やってくれ。そのための猿ぐつわとか、必要そうなものは全部送ったから』

忍・ユ「「うわぁ・・・・」」
なのは「自家発電って、何？」

ユゥイ「いや、知らないならそれでいい。それよりも、次回予告だ」

忍「そ、そうだな」

ユゥイ「千那さんが、俺達のために用意してくれた新デバイス、『パラサイトデバイス』」

忍「その力を試したいと言い始めたのは、神童と隊長の二人」

なのは「二人のために始まった、二対二の模擬戦。それは、最悪組み合わせでの模擬戦だった」

忍・ユ「「次回、魔法少女リリカルなのは～七つの大罪～」」

なのは「【パラサイトデバイス】」

一同『次回へ、スタンバイレディ！』

パラサイトデバイス・前編（前書き）

お待たせしました、一ヶ月ぶりの投稿です。
遅くなってすみません。
私事でいろいろとあり、書く時間がなくて……本当にすみません。
それでは『七つの大罪』始まります。

パラサイトデバイス・前編

「邪魔はするんじゃねぇぞ。いいな？」

「それはこっちのセリフですわよ」

屋敷の訓練場。

そこには一真とアンナ、拓磨ともう一人がいた。

これから何が行われるのかというと、二対二の模擬戦が行われることとなっている。

「あーあ。桂ちゃんと組むなら、俺様やる気出んのになぁ～。なぁ、拓磨君～」

「絶対に拒否だ。あいつとは組ませねぇからな！　つか、お前には桃香がいるだろうが！」

なぜこんなことになっているのかというと、約二十分ほど前まで遡る。

「『パラサイトデバイス』」

「寄生……何か嫌な響きよね」

ティアナの呟きは、周りにいた何人かには聞こえていたが、誰も

何も言わない。
寄生とい単語に、良いイメージを抱いていないからだろう。

「あの～、いいですか？」

おずおずと手を上げたのは、なのは達の後ろで話を聞いていたシャーリー。

「ん？　何じゃ？」

「その、『パラサイトデバイス』の説明が聞きたいんです」

「おぉ、そうじゃったな。すっかり忘れておった」

そう言って立ち上がった千那は、箱に近づき『パラサイトデバイス』を手に取る。

「まずこれを、セットアップすると使用者の体の中と一体化する。次に、『パラサイトデバイス』からナノマシン型デバイスが作られて、使用者の体を弄くるんじゃ。直後高熱が出て、身体中は激しい痛みに襲われる。それが約１２時間続き、そして目を覚ましたときには、体をデバイスとして使うことが出来るようになる。それ以外にも、これ使う時のメリットは何個かあるんじゃが……まぁ、ここまでがこれの簡単な説明じゃな。詳しくは、これを使うようになってからにしようと思っておるが、どうする？」

千那は説明を終えて、なのは達を見渡す。
そしてゆっくりと立ち上がって、

「フム。何も――――」

「納得できませんわね」

千那の声を遮ってそう声を上げたのは、今まで黙りを続けていたアンナだった。

「その『パラサイトデバイス』が、簡単にですが理解できましたわ。ですが、その実力。そのデバイスを使っている姿を、見なければ私はそのデバイスを使用しません」

「アンナ……」

「黙りなさい、ネム。今回ばかりは引きませんわ。いくらデバイスとは言え、自分の体に得体の知れないものが入るんですのよ。その正体を確認しないで、あなた達はいいんですの？」

アンナにそう言われて、全員は黙ってしまう。

デバイスはあちらが用意してくれたもの。アンナのように言うのは、少し難しいものがある。

さすがは、女版一真と言ったところだ。

そこに新たな味方が現れる。

「それには俺も賛成だ」

「お兄ちゃん！？」

珍しくアンナの意見に賛同する。

アンナ自身もこれは予想外だったようで、一真を見たまま固まってしまっている。

「お前さんもか？」

「当たり前だ。それを使って、本当にあの野郎と殺り合えるのかどうか分からねぇ。性能が信用できないものを、ハイそうですか、って使えるか。そんなもん使うなら、俺は自分自身の体だけであいつを落として、千歳を取り戻してやる」

「それは困るのう」

そう言うが、まったく困っているようには見えない。だが、考えるように手を顎に添えた。

「そうじゃのう。では、試してみるか？　パラサイトデバイスの力を。模擬戦でもして」

「構いませんわよ、私は。神童一真。あなたはどうしますの？」

「構わねぇよ。で、ルールはどうする？」

「二対二で勝敗は降参するか、戦闘不能にするかでどうじゃ？」

一真とアンナは黙って頷く。

「では決まりじゃの。お前さん達の相手は拓磨と、もう一人なんじゃが……芽衣。俊哉はどうした？　集まるように言ったはずなんじゃが」

葵の隣に座っていた無表情の少女は、興味が無さそうに、

「さっき桃華に連れていかれた。たぶんいつもの」

「しょうがないのう。ではのう、十分後に訓練場に。悠一」

「何でしょう？」

「訓練場には、お前が案内してあげなさい」

「分かりました」

それが十分前のこと。

〔では、準備はいいかのう？〕

千那の声は聞こえているのだろうが、誰も返事は返さない。

それを肯定と受け取った彼女は、

〔じゃ、初めじゃ！〕

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

場所は変わって、訓練場に備え付けてある観覧席。

そこには訓練場にいる四人以外が、全員集まっていた。

「こんな模擬戦、勝敗は未来を見なくても分かっておるんじゃがのう」

「それは、隊長と彼が負けるということでしょうか？」

リオルがそう聞くが千那は、どうじゃろうな、と返すだけ。
明確な答えは返してこなかった。

「なぁ、ゼロ」

「忍か。どうした？」

「隊長と神童が、まともに協力し合うと思うか？」

「無いだろう。というか、それは今さら確認することか？」

「だよなぁ絶対に、無理だろうな」

そんなことは、今までのことを思い出せば、誰にでも容易に想像できた。
なのにこの組合せ。最悪でしかない。
そして懸念材料はそれ以外にもある。それは、一真が素手だということ。

「大丈夫なのかな、一真さん？　一人だけデバイスを使わないで、模擬戦に参加するのって」

「その心配は今さらだよ、エリオ」

「え？」

鈴蘭の言葉の意味が分からないのはエリオだけではなく、他のFWメンバーや《断罪の鎌（エクスキューショナー）》メンバーも。

「それって、どういうことなんですか？」

その言葉に、なのは達全員が声を揃えて答えた。

『一真（君／神童／お兄ちゃん／ボウズ）だから』

その答えの意味は、答えたとしては成立していなかった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「じゃあ、始めっか」

その言葉と同時に、三人の視界から一真の姿が消える。

一真が使用したのは、瞬間移動の域に達してしまっている、彼特製の短距離高速転移魔法。

次に現れたのは、拓磨の目の前。その手はグー。

「吹っ飛べ、クソガキっ！」

魔力の込められた一撃は、誰にも防がれることなく拓磨を吹き飛ばす。

突然すぎて、誰も反応できなかった。

そのまま地面へ叩きつけられた拓磨の体は、バウンドを繰返し止まった。

「ちぃっ」

声のする方には、槍を構えた拓磨の相方が。

切っ先を一真に向けて突っ込んでくるが、

「どこを見ていますの！」

二人の間を、矢が通り抜ける。地上でおいてけぼりを喰らったアンナが、放ったものだ。

「あなたのお相手は私ですわよ、渡辺俊哉！」

「そりゃありがたいね～。俺様の相手は美人だとは」

テンションを上げて、俊哉はアンナへと向かう。が、それは一真にとってはありがたいことだった。

なぜなら、一真の狙いは初めから拓磨だったからだ。

「さぁて、クソガキ。いつまで寝てやがる、さっさと起きやがれ。そんなに強く殴ってねぇんだから、痛くねぇだろ？」

空中から、拓磨を見下ろす。その声は届いているだろう。

ゆっくりと体を起こす拓磨。そして一真を見上げる。

「まさかこの程度じゃねぇだろうな？　パラサイトデバイスとやらを使って」

「んなわけねぇだろ！」

拓磨の足元に出現したのは、ベルカ式の魔方陣。

「行くぞ、焔凰（エンオウ）！」

その言葉と共に、拓磨の体から溢れ出す紅い光の粉。

「……」

後ろに俊哉にも目を向ける。

彼の体からも、拓磨と同じように色は違うが光の粉が出ている。

（ありゃ、パラサイトデバイスの特徴の一つか。あれに何か意味があるのか分からねぇが、今は潰すだけだな）

「あんたも、今の一撃が本気なんてことはないだろ？」

「当たり前だ。《罪》、解放！」

いつものように一真は、《罪》の魔力のオーラを纏う。

纏った瞬間、一真は違和感を感じたがすぐに振り払った。

「何だそりゃ！？　見たことねぇぞ！」

驚きの声を上げる拓磨を無視して、一真は動き出す。

今度は転移魔法ではなく、魔力を固めて作られた足場を走っていく。

「落ちろ、クソガキっ！」

一撃で落とすための、一真が得意とする方法の一つ。

魔力の一点集中。

「それはゴメンだっ！」

「なっ！？」

拳を受け止められた一真は、すぐにオーラを纏おうとするが間に合わない。
代わりに、拓磨の拳が腹へと叩き込まれた。

「かはっ……！」

そのまま更に追撃をしようとする拓磨だったが、それは判断としては間違い。
すぐに一真から離れるべきだった。
オーラが一気に膨れ上がり、辺りに魔力を放出させた。
それは強大な一撃となって、拓磨に襲いかかる。

「うぉっ！」

直撃はした。それは誰の目から見ても確かなこと。だが、拓磨にダメージはない。

「マジかよ……」

驚いている一真だったが、その表情は楽しいと、大声で叫んでいるように見てとれた。
だが、その楽しいが一般常識に当てはまるかと言えば、そうではない。一真の楽しいは、

（くくく……ありゃ、本気でやっても全然大丈夫だな。なら、様子見はヤメだ）

「ぶっ潰してやるっ！」

と、こうなる。
その叫びの直後、一真の姿はまた消失。
今度は真っ正面ではなく、拓磨のずっと後方。
殴るには遠すぎるが、距離としては正解。今から使う魔法は近すぎれば、自滅する可能性があるからだ。　両手と胸の前に、光弾が出現する。

「ディバインっ」

そしてその3つが、一真の前で1つの巨大な光弾となった。

＞女ぁっ、上手く避けろよ！＜

＞なっ！？＜

「カノンっ！」

放たれたそれは、同じ『ディバイン』の名を持つバスターやドライバーとは比較にならないほどの、巨大な砲撃。比較するなら、なのはが本気で撃つＳＬＢと同等かもしれない。
撃った一真でさえ、反動を殺せず後ろに吹き飛ばされている。

「いっつ～～～～～！　やっぱり、直感でやるもんじゃねぇな。デバイスもねから魔力、大量に持っていかれるし」

「そんなこと、どうでもいいですわよ！」

「んぁ？　あぁ、避けてたのか」

「避けてたのか、じゃありませんわ！　何ですの、あの魔法は！？

私まで巻き込む気ですの、あなたは！？」

「うっせぇなぁ。いいじゃねぇか。結果、避けられたんだからよ。グタグタ言ってるとぶっ殺すぞ、クソ女（アマ）！」

「上等ですわよ、神童一真！　ここでその頭に、風穴を開けて差し上げますわ！」

六課、《断罪の鎌》メンバーの誰もが予想をしていた最悪の事態が、こんなにも早く起きてしまった。

二人の纏うオーラは、一気に濃度を上げていく。

「おい。俺とやるんじゃなかったのか？」

「そうですよ、綺麗なお姉さん。俺様と踊る約束があったでしょう？」

先の砲撃を受けても、やはりダメージのない彼ら。

そんなことに、今の二人は驚かない。むしろ、

「「邪魔（すんな／ですわ）！」」

完全に目的を忘れていた。

「……そりゃねぇだろ。模擬戦しろって言ったの、あんたらだろ？」

拓磨のそれは正論だ。正論だが、一真もアンナも納得出来ない。

そんな時の、二人の頭の回転は恐ろしく　早く、たどり着く先はこうなる。

「おい、女。手伝え」

「神童一真、手伝いなさい」

「「さっさと落として決着付け（るぞ／ますわよ）！」」

今度は一真だけではなく、アンナも同時に動く。

一真に当たらないように、魔力矢を連射。放たれた魔力矢は分裂を繰返し、一真の周りは矢一色となった。

「俊哉っ！　真面目にやれよっ！」

「言われなくても！　轟雷（ゴウライ）！」

俊哉の手が紫の雷を纏う。その雷は、俊哉の体も覆っていく。

「霆天（ティテン）！」

その魔法名を聞いた瞬間、身体中が危険信号を発した。

アンナに警告を促そうとしたが、もう遅い。

周りにあった矢は九割程消失。一秒もかかっていない。

「女っ！　今すぐ、防ぎ……ごふっ！」

視界には何も映っていない。なのに、腹には殴られた衝撃があった。

意味が分からない。状況が全く分からない。それだけが一真の思考はいっぱいだった。

ふとアンナが視界に入った。が、すぐに消えた。聞こえてきたのは、何かが叩きつけられる音。

「これで一人。もう終わりだな！」

（動かねぇ……こんなとこで落ちるわけにはいかねぇのに……）

「終わりだ」

炎に包まれた拳が、一真に叩き込まれた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「決まったわね」

と桂。

「決まったね～。これで、この模擬戦は終わりかなぁ？」

と葵。その近くに立つ無表情の少女、田仲芽衣と着物姿の少女、小林桃華も同意見のようだった。

そう判断してもいいだろう。今訓練場に立っているのは二人。拓磨と俊哉の二人だけなのだから。

「まだだよ。一真は、まだ落ちてないよ」

「そうだよね。一真ってなのは負けず嫌いやし」

「それにお兄ちゃんは、鬼ですから」

本人がいないからと、思いっきり言いたい放題の彼女たち。

これを一真が聞いていれば、いつもの『お仕置き』となるだろう。

「ゼロ。あれ、色々とヤバイくはないか？」

「あぁ。お前の言う通りだ、リーズ。かなりヤバイ。絶対に怒ってる」

「俺、これ終わったら絶対に逃げるからな！　いいなっ！？　いいよな、ユゥイ！？」

「あ、ああ。逃がしてやるよ」

忍の心からの叫び。

その叫びに《断罪の鎌》のメンバーは、苦笑いを浮かべるしかなかった。

「えっ！？」

それは突然だった。全員の目の前が、異常な光で覆われ訓練場が見えなくなった。

その原因はあの二人。

〔俺はＭじゃねぇぇぇぇ！　Ｓだぁぁぁぁ！〕

それを聞いて、何人かはずっこけた。

〔うるさいですわよ、神童一真！　風穴を開けますわよ！〕

〔るせぇぇ！　切り刻むぞっ！〕

二人の漫才。完全に場違いだが、彼らにとっては全く関係ない。

光が収まり、訓練場の中が見えてくる。そこには柱のように、天高く立ち上るオーラを纏う、一真とアンナの姿があった。

しかし、全員が違和感を覚えた。それは二人の髪型だ。

まず一真。その長髪は、あのネクロノミコン戦時と全く同じ。見たことあるものもいるだろうが、無いもののほうが多い。だが、それよりもアンナのほうが、全員に衝撃を与えていた。

長さは変わらないが、ウェーブは無くなりストレートに。銀髪だったそれは、栗色と変わっていた。

「マズイのう」

「たぶん、二度目で共鳴したことが原因なの」

「それはまだいい。問題はあの一真を見た鈴蘭じゃよ」

二人は鈴蘭の姿を後から見ていたため、気がつくことはなかった。あの姿の一真を見つめていた鈴蘭が、

「……お父さん？」

そう呟いたことに。

もちろん周りの誰にも、それは見えていなかった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「おいクソガキ。誰が終わりなんだ？　懇切丁寧に説明しろや、ボケェ」

「そうですわよ。誰も怒ってなんていませんから、私たちに言ってみなさいな」

二人とも笑顔だ。これがどこかの街中ならば、十人中十人が足を止めて、二人に見とれてしまうだろう。
しかしその笑顔。よく見れば目が全く笑っていない。

「やっぱ返事は聞かねぇことにする」

一真の手には、《罪》の魔力で作られた大剣が一つ。
それを構え先制しかけるが、動いたのは拓磨たちのほうが早かった。
俊哉の姿はすでになく、拓磨は見つけられたが攻撃準備は整っていた。

「紅之太刀壱式・煉刃！」

それでも一真の狙いは拓磨だけ。初めから俊哉は、狙いの中に存在はしていない。
だが、それは一真だけ。
煉刃は届かず、かき消されてしまった。

（やっぱり、この程度じゃ止めるのは不可能か。じゃあ、あれだな）

「蒼りゅ――――」

「させるわけねぇだろ！」

直感で動いたんだろう。拓磨はその拳を突き出していた。
そこから伸びてくるのは炎。それは一真を飲み込もうと、大口を開けて向かってくる。

「ちぃっ」

左に転がるように避けるが、炎は旋回して追いかけてくる。
追いかけてくるのは炎だけではない。

「追いかけるのは野郎よりも、美少女や美人のお姉さんのほうがいいんだけどなぁ」

避けた先には、雷を纏う俊哉がいた。槍の切っ先は、一真の目の前にある。
光速で突き出される槍。
当たる一瞬手前。転移魔法を使い、その場から離脱に成功した。
すぐさま足場を形成して、拓磨へと跳ぶ。

「グラディウス！　準備はいいですわね!?」

［もちろんです。狙いは？］

「この場内の射ち込める場所には、隙間なく射ち込みなさい！　あの男は、この程度では問題ありませんわ！」

［了解しました］

グラディウスを空に向け、弦を力の限り引く。

「プファイルレーゲン！」

打ち上げられた、三つの光弾。
それは一定の高さまで到達すると停止、そして炸裂し破片が飛び散った。

破片は矢へと姿を代えて降り注ぐ。

「マジかよ！？」

その矢の数は、先の矢の数を遥かに超える。
それを見た俊哉がもう一度動こうとするが、

「テメェが行くのはそっちじゃねぇ」

「なっ！？」

その場から離れることが出来なかった。
俊哉の右手首。そこをがっちり、一真の手がつかんでいた。

「下だっ！」

上から、叩きつけるように振り下ろされた拳は、プロテクションに阻まれる。が、それは一瞬のこと。
すぐに砕け散った。
胸を強打され、俊哉は地面へ。

「っのぉ！」

俊哉の体から溢れ出る光の粉が、一気に増える。
それを何を意味しているのか、一真にもアンナにも分からない。
しかし、

＞神童一真っ！＜

＞やかましい、叫ぶな！　言われなくても、何かヤバイのは分かっ

てる！＜

矢が降り注ぐまで、残り十秒もない。
しかし、それだけあれば二人は動く。それが一真とアンナには分かっている。
「何かわかんねぇけど、させるかっ！」
高速転移で俊哉の目の前へ。
「蒼之太刀壱式・天墜閃！」
《罪》の魔力で精製されたサタンを腰に構え、真っ逆さまに急降下。
俊哉に追い付きかけたところで、
「がっ！」
後頭部に激痛が走った。
何もできないまま、俊哉を追い抜いてしまう。
「このっ……テメェ」
振り替えれば俊哉と同等の量の光の粉を、体から吹き出させる拓磨が、そこにはいた。
その量は一気に増加し二人を、一真達を、辺りを包み込む。
「「フルドライブっ！」」
二人を中心に、波紋のように魔力の波が広がっていく。
「おいおい……嘘だろ」

「その姿、まるで……」

光の中。一真達が見た光の粉ではなく、魔力のオーラを纏う二人の姿。

その姿はまるで《罪人》や《聖人》のそれと、何ら変わらないものだった。

《一真の部屋》

一真「何でテメェがここにいんだよ？」

アンナ「ゲストだからですわ。何か文句ありますの？」

一真「あったり前だ！　俺はテメェを呼んだ覚えは、全くねぇんだ！　今すぐ帰れ！」

アンナ「上等ですわ！　グラディウス！」

グラディウス
［いつでもいけます］

一真「ほぅ……ここで俺に逆らえると、マジで」

チャキッ

なのは「二人とも。いい加減にしようか？」

一真「げっ」

アンナ「何を言ってま……すの……」

なのは「アンナさん。ここではね、争い事だめなんですよ」

一美「そうよ、お兄ちゃん。やるならそんな女より、私をやりなさい！　そして私は気持ちよくなるわ！」

アリス「はいはい～。ややこしくなるから、一美は静かにね～」

一真「な、なのは。レイジングハートをこっちに向けるな。そして集束を始めるな！」

アンナ「そ、そうですわよ！　それに私はゲストですわよ！」

なのは「だから？　ここでは、ゲストなんてのはあってないようなものなんですから」

アンナ「いいんですの、そんなことぶっちゃけて！？」

アリス「この状態のなのはって、何でもありだからね～。いいんじゃないかな？」

一真「ふざけんなよ！　ここでは俺が神じゃぁぁぁ！　なのはぁ！　お前は魔法使用禁止っ！」

なのは「えっ！？」

一美「こんな時だけ神になる……最高に卑怯だわ。だけどそこがカッコいい♪」

アリス「一美の感覚に全く追い付けない私って、戦いで負けてるのかな？」

アンナ「……ツッコミ、面倒ですわ」

アリス「それ、正解だよ」

なのは「いろいろと納得いかないけど、そろそろお返事コーナーにいかないと……」

一真「神に勝てると思うなよ！」

アリス「……お返事コーナーです」

鴨川秒さんへ

ア・美「「ジュルリ」」

一真「あの二人を見てると、身の危険しか感じないんだが」

なのは「今回のプレゼントが、一真君の人形だからね～。そんなことより、何で私の名前おかしいのかなぁ？」

アンナ「目、笑ってませんわよ……」

一真「ああなったら、止めようなんて思わない方がいいぞ。絶対に死ぬからな」

なのは「今回は魔法使えないから、命拾いしたね」

アンナ「神童一真。今回はあなたがいて、初めてよかったと思いましたわ」

一真「自分でも、今回はナイスだと思ったね」

ア・美「「い、イ――――」」

一真「テメェらはもう黙ってろ！」

バルディッシュさんへ

アリス「あの殺気って、それが原因だったんだ」

一真「あぁ。でもまぁ、この模擬戦で俺に土下寝させるから問題ねぇ！」

なのは「土下寝て……」

アンナ「それは私がいるから出来ることですわよ。神童一真」

一真「あぁ？　テメェは何を言ってんだ？　あんなもん俺一人で十分なんだよ」

一美「ふぅ。お兄ちゃん見てるだけで濡れてきたわ」

アリス「突然何もかもぶった切った！」

なのは「うん。もう病院行こうか、一美ちゃん」

NKさんへ

一真「フム……予定とは違ったが、結果オーライだ」

一美「ヤンデレ？　私に勝てるとでも思ってるの？」

アリス「いや、あんたは『ヤン』じゃなくて『歪み』でしょ」

なのは「上手い……のかな？　それでこの道具は」

一美「使わないわ。そんなものなくても、お兄ちゃんに虐められる妄想で、ＳＭプレイができるもの」

一真「しっかし、あのデバイス。何なんだ？」

アリス「スルーした！」

アンナ「そうですわね。気味が悪いですわ」

アリス「それについては……たぶん次回」

なのは「バトルだけにならない限りね」

一真「そうだな」

アリス「でもまぁ、うちの作者はいい加減にだからなぁ」

アンナ「それはいつものことではなくて？」

一同『確かに……』

一真「ま、いつものことだから気にしてもしょうがねぇだろ。つか、そろそろ時間だ」

一美「みたいね。では、次回へ」

一同『スタンバイレディ！』

パラサイトデバイス・後編（前書き）

また遅れてしまってすみません。
やらなければならないこと。やりたいことが、沢山あるので。
でも、執筆は最後まで続けますので、それまでよろしくお願いします。
というわけで、『七つの大罪』始まります。

矢は全て消えて、次の動きを始めなければならない。だが、目の前の光景を見て、二人は動けないでいた。

「どうした？」

「もしかして、俺に見惚れてる？」

検討違いのことを言っている男がいるが、誰も相手にしない。

「どういうことだ、あれ？」

「私（わたくし）にも聞かないでほしいですわ……」

現状が理解できない二人。だが、二人が理解するまで、拓磨達は待つことはない。

「いつまでもボサッとしてる暇あるんか！？　すぐに終わるで！」

一番最初に動いたのは拓磨。

一瞬遅れて一真も動き始める。

状況的には二対一。それでも、一真に引く気はない。

「ふっ飛べやっ！」

「お前がなっ！」

同時に突き出される拳はぶつかり合い、衝撃が辺りに広がってい

く。

＞神童一真！　２メートル下がりなさい＜

本人は動く気はなかったが、体が勝手に動いた。

（テメェ！　何してやがんだ！？）

―そこにいたら、ノックアウトだったぜぇ―

（はっ？）

直後に走る閃光。

その正体はすぐに分かった。俊哉だ。

それと同タイミングで、矢がそこへ飛んでくる。

それは最高のタイミング。アンナも手応えを感じていた。

―ありゃ、届いかねぇな。どういう理屈か、俺様にも分からねぇがよぉ―

“一真”の予想は当たった。

矢は消失。

現れた俊哉は無傷。

「蒼龍破！」

突如二人の真下から現れた、一匹の龍。

それは拓磨達を飲み込んだ。が、直後弾けて消えた。

そうなることは、二人には想定内。

「紅之太刀惨式……」

「デカディメント……」

一真は上から、アンナは下から。

「天魔裂牙！」

「アロー！」

今回ばかりは、二人はタイミングを外した。
原因は一真にある。
先の一撃を放ってから、この間数秒。本来なら一真は、術後硬直で動けないはず。
なのに、それを無視して動いていた。
二つの魔法はほぼ同時に着弾。

「……イテェ」

胸に突き刺さる痛み。
それはネクロノミコンと戦っている際に感じた、あの痛みと同じもの。

＞どうしましたの？＜

＞何でもねぇよ。んなことより、前見てろ＜

煙の中から飛び出してきた二人には、やはり傷はない。

（ちっ……やっぱりか。て、待てよ。あの婆さん、確か……）

『『パラサイトデバイス』からナノマシン型デバイスが作られて、使用者の体を弄くるんじゃ』

（まさかなぁ……）

―俺様も同意見だぜぇ、一真ぁ。試してみる価値は、あるんじゃねぇかぁ？―

（だな。思い立ったが吉日って言うし）

サタンへ大量の魔力が流し込まれていく。
収まりきらない魔力が、刀身から溢れている。

「ぐっ……」

痛みを堪え、サタンを振り上げる。
それはとんでもない魔法の合図。

＞女ぁっ！　十秒間だけ、あの二人を俺に近づけるな！＜

＞何をするつもりですの？＜

＞いいから、やれ！＜

柄を中心に、サタンを回し始めた。
これが何を意味しているのか。それは、一真だけにしか分からない。
だが、拓磨達の背筋には悪寒が走った。

「これ以上、何もさせねぇよ！」

二人は同時に動いた。

狙いは近くのアンナではなく、奥の一真。

「何だか分かりませんけど、やってやりますわ！　感謝しなさい、神童一真！」

（するか、バカ）

アンナが腕を振ると、そこには十数本の矢が並ぶ。

「シュートッ！」

その声を合図に、全ての矢が放たれた。

拓磨たちも、逃げるように別れる。が、矢も半分ずつになり、追いかけていく。

「めんどくせぇな、これ……」

「お姉様には悪いけど、これは片付けさせて――――」

「いいや。片付けられるのは、テメェらだ」

二人は同時に、その声の聞こえてきた方に顔を向けた。

「なっ！？」

「んだあれ！？」

一真の頭上には、巨大な魔力の球体が高速回転して存在していた。
拓磨たちもこんなに早く、一真の準備が完了するとは思っていなかった。

「これに耐えられたら、心の底から褒めてやる。いや、本当に」

そう言う一真の顔には、不適な笑みが張り付いていた。

「つーわけで、死ね。獄龍破！」

放たれたそれは、高速回転を続けながら二人へと向かう。

「誰が死ぬかっ！」

拓磨の纏うオーラが、炎へと変化していく。

「業火招来！　炎凰拳」

突き出された拳から撃ち出された、巨大な炎の塊。
その魔力量は、獄龍破に匹敵する。
しかし、一真の顔からは笑みが消えることはない。
ぶつかり合う、二つの強大な魔法。

ーくくくく……テメェもおもしろいこと考えたじゃねぇかー

（だろ？）

二つの魔法は一つとなり、逆走を始める。
つまり、一真と戻っていく。

「何をしていますの、神童一真！？　早くそこからーー」

「さっさとこっちに来て、あれのど真ん中を全力で撃ち抜け」

「何を言ってますの、あなたは！？」

「おもしろいことが起きるぜ。だからさっさとやれ」

おもしろいこと。

その言葉に食いついたアンナの顔には、

「責任はあなたが取るんですのよ！」

一真に負けないほど、楽しそうな笑顔が張り付いていた。

「グラディウス、フルドライブ！　アーチャーフォーム！」

一真の隣に立つアンナ。これほど違和感のある光景はない。

「私（わたくし）が造り上げるのは、勝利への道！」

二人のオーラが変化を始め、一対の巨大な翼となる。

そのような形への変化は、初めてだった。

「貫きなさい！　勝利の矢！」

矢に合わせて一真も跳ぶ。

「爆流破！」

一真の魔力は竜巻を造り上げる。それは魔力の塊を飲み込み、いくつもの竜巻を作っていく。
一真の竜巻とアンナの矢。
その二つが一つの魔法になり、拓磨と俊哉を包み込んだ。

「大成功♪」

「何ですの、今の……」

「だからおもしろいことだ。それに、確かめねぇといけねぇこともあるからな」

「確かめること？」

竜巻が消え、その中からは傷だらけの二人が。
その傷には光が纏わりついている。

「あの光、何ですの？」

「俺の予想だと、ナノマシンだ」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「もう気づいたか。思ったより早かったのう」

「何のことだよ、婆さん？」

「千歳の婿候補が、パラサイトデバイスの機能の一つに、気がついたということじゃよ」

「それがあの光、ということですか？」

なのはの問いに、千那は首を縦に振る。

「パラサイトデバイスからナノマシン型デバイスが作り出されると、説明したのを覚えておるの」

「はい。確か、使用者の体を弄るって……」

「そう。そのナノマシン型デバイスには、他にも機能があっての。使用者の体に出来た傷を、すべて治療するんじゃ。まぁ、限度はあるがな」

「だから、隊長達の攻撃が当たっても無傷だったわけか……」

「いや、それだけじゃないぞ。まだ言う気はないがの。そんなことよりも、わしも聞きたいことがあるんじゃがの」

千那の見つめるのは、一真とアンナに生えた羽。

「あの翼は何じゃ？　わしの『アカシックレコード』にも、あれの存在はないぞ」

そう聞かれても、誰も答えようとはしない。いや、答えが誰の中にもない。

一真と長いつきあいであるアリスや、アンナの部下のであるネム達でさえ知らないのだ。

「……」

「鈴蘭？」

訓練場を見たままの姿で、固まっている鈴蘭。
その様子はスバルだけではなく、誰の目から見ても明らかにおかしかった。

「あと１０分が限界なの」

「あの翼が現れたということは、二人もそこが限界かのう」

外を見ていたみーなは、全員の方へ振り向いた。

「フム……主ら、今から言うこと、一言一句聞き漏らすでないぞ」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「あれがある限り、ちまちました攻撃じゃ落とすのは無理だな」

「ということは、一撃必殺で決めればいいと言うことですわね。それなら得意ですわ」

二人の回復はまだ終わらない。それほどの威力が、先の魔法にあったということだ。

「そうだな……」

一真が睨みつけるのは、やはり拓磨だけ。
怒りが無くなったわけじゃない。
その感情に反応して、翼は大きくなっていく。

「さて、ガキ。終わりにするか？」

「何にがだ?」

天に向け振り上げた拳。

その手を覆うのは、巨大な炎の拳。

「治療用ナノマシンを見抜いたけぇって、調子に乗るなよ。炎破・鳳拳!」

「誰も調子になんか乗ってねぇよ!」

一真の手にあった魔力製サタンは、フルドライブ形態へ変化している。

すでに魔力の充填は終わっていた。

右から左へ振り抜かれたサタンからは、「死」の名前を持つ魔法が。

「死天閃破(シテンセンパ)ぁ!」

放たれた漆黒の刃は、炎の拳とぶつかり合い同時に消失。

煙でお互いが見えないでも、二人は動き出していた。

「砕け散れ、クソガキ!」

「燃え尽きろ、オッサン!」

双方の一撃は、相手の顔を捉えた。が、オーラによって止まっている。

(どういうことだ? さっき爆流破は、クソガキまで通った。それは確かだ。なのに、今回は防がれた……込めた魔力量はほとんど違

わないはずだ。何が違う？）

「神童一真！　何をしていますの!?　早くそこを退きなさい！」

アンナに呼ばれ帰ってきた一真の目の前では、拓磨が二発目の準備を。

そしてアンナではない、もう一つの魔力が動き出していることに気がついた。

「ちっ……」

転移魔法を使い離脱を試みるが、光の速さで動く男が、それに間に合ってしまう。

「お姉さまだけ残して、あんたは落ちろっ！」

完全に挟み撃ち。

逃げることは確実に間に合わない。

ーくくくく……させるわけがねぇだろうが、ボウズどもー

全員の頭に響いたのは“一真”の声。

ー右半分、借りるぜぇー

一真の意志ではなく、“一真”の意志で右腕が動き始めた。

それは俊哉の槍を掴み、攻撃を止めてしまう。

今の一撃を受け止めることは、タイミング的に不可能なはず。

「どうした？　手が止まってるぞっ！」

掴んだままの俊哉をバットにし、拓磨に向けてフルスイング。

「ぐうっ！」

「がぁっ！」

「デカディメントアロー！」

再び二人は煙の中に消えた。

「イテェ……」

胸を押さえ、一真は顔を歪める。
その痛みは、今までで一番の痛み。

「大丈夫ですの？」

「問題ねぇよ。んなことより、当てたんだろうな、今の？」

「もちろんですわ。手応えはありました」

「そうか……」

そう呟いて、煙幕へ視線を向ける。　睨みつけるように。
片手で持っていた刀を、両手で持ち眼前に構えた。

「死天龍封刃！」

刀身から伸びた魔力刃。それを叩きつけるように、一気に振り下

ろす。が、

「ん？」

それが煙幕に触れた瞬間、何かに引っかかり魔力の刀身は、そこで動きを止めた。

「ちくしょうが！　女っ、下がれ！」

その言葉が何を示すかアンナはすぐに理解して、その場から飛び退く。

一真も魔法を解除して、そこから離れた。

それと同時に出来上がる、巨大なクレーター。

「なぁ。あんた、本当にこの程度か？」

二人の後ろに立つ拓磨。

声を聞くまで、その接近にどちらも気がつかなかった。

「なっ！？」

「この程度の強さなら、見捨てて逃げた腰抜けっていうのも、あながち間違いじゃないかもなぁ！　オッサン！」

前からは電撃、後ろからは炎。

その二つの狙いは一真一人だけ。

「……いい加減にしろよ、小僧」

二つの魔法が、一真の姿を飲み込んだ。

そこを中心に起きる爆発。

「さて、残りはあんただけだな。どうする？」

「俺としては、美人のお姉さまを落としたくはないんだけどね～」

勝ちを確信している二人の言葉。それを聞いて、アンナは呆れていた。

「今の発言で、いろいろと分かりましたわ。あなた達が、部下のウスィのよりバカだということ。そして……」

爆煙が消え、無傷の一真の姿が見えてくる。

「自分達よりも強い者と戦ったことのない、井の中の蛙だということも！」

先の二つの魔法は、確実に着弾した。なのに、傷一つ無い。

その理由は、アンナには分かっていた。

《罪》の魔力の質は、感情の強さに大きく左右される。

《憤怒》の《罪》を持つ一真の場合、何かに対し強い怒りの感情を持っている時。

つまり、今ということになる。

「俺が千歳を見捨てただと……その場にいない貴様が、臆測だけで言ってんじゃねぇぞ！」

その叫びとともに辺りにまき散らされる、殺気と魔力による圧力。

一般の魔導師ならば気絶しているだろう。

大量の魔力が、一真の掌に集まり始める。

「消し飛べ！」

拓磨に向け放たれたのは、巨大な魔力弾。
それが纏う雰囲気は、さっきまでとは完璧に異質な物。
何かが根本的に違う。

「くっ……」

ギリギリで避けたが、その行動は間違いだった。
そもそも正解がある訳でもないのだから、間違いもなにもないが。
間違いだったのは確かなことだ。
なぜなら、避けた先にはすでに一真が立っていたから。

「誰が避けていいって言った？」

その言葉に拓磨は、生まれてから一度も感じたことのない寒気と、
言いようのない恐怖を感じた。
それは初めて感じた死の恐怖。
突き出されたサタン。その切っ先は、拓磨の首を狙っている。
躊躇なんてものは、一切感じられない。

「くっ」

これも間一髪で回避出来た。すぐに反撃しようとするが、

「誰が反撃してもいいって言った？」

それよりも早く、殴り飛ばされた。
魔力なんてものは関係なく、完全な力業でぶっ飛ばした。

「ぐっ……」

体中に走る痛みに耐え、ゆっくりと立ち上がる。
強く光り出すオーラと、両手に出現した環状魔法陣。

「真・炎鳳拳！」

炎の拳が一真を捉える。
正確には一真が避けなかったのだが。

「ぐふっ……」

「燃え尽きろぉぉぉぉぉ！！」

大きくなる炎は、一真の体を包み込みその姿をかくしてしまった。

「神童一真！」

アンナが叫ぶが、炎の中から返事が返ってくることはない。
ないが、無事だということはすぐに判断できた。
炎の中から右腕が生えてきたからだ。
その手は拓磨を掴む。

「炎の拳って言うのは……こうやるんだよっ！」

自らの魔力を接着剤にして炎を纏わせると、その拳で拓磨の顔面へ一撃。
避けることは不可能だが、防御はできた。しかし、それをしなかったのには理由がある。

自分の炎を使われたことに驚き、動くことができなかったのだ。

「呼んだか、女？」

振り返って気がついた。
眼中になかった俊哉が、こちらに向けて構えていることに。
槍に集まった大量の魔力。

（あの魔力量はマズい！）

一真も危惧するレベルの魔力が、あそこにはある。
二人ともが、なぜそれに気がつけなかったのか。
その理由は考えても分からない。

「雷神の槍（ランス・オブ・ラミエル）！」

投げられた槍は一瞬で加速。光速となり、一直線に飛んでくる。
全ての動作が間に合わず、まだ直撃した。

「ぐぅっ……」

投げると同時に動いていた俊哉は、一真の目の前に。
まだ一真に刺さったままの槍の柄を掴み、力の限り押し込む。

「グラディウス！」

「問題ありません」

「そこから離れなさいっ！」

矢の狙いは俊哉の頭。　しかし、光の速さで動くことのできる彼には、全く関係のないこと。
俊哉の姿は消えて、アンナの目の前に現れる。
殴り飛ばされたはずの拓磨とともに。

（ホント。何ですの、この耐久力は？　私達のオーラと、ほとんど変わりませんわよ……）

それでもアンナには秘策があった。
それはネクロノミコンとの戦いの翌日から、出雲に来る前日にかけて作り出した魔法。

「今度こそ……」

「お姉様だけだな」

「……だといいですわね」

視界の端に映る一真の姿。立ったまま電源が落ちたかのように、全く動かない。
あの槍の効果なのだろうと、アンナは考えている。

「……あなた達、甘いですわね。本当の死合ならこんな会話、存在しませんわよ！」

矢の早撃ち。
ほぼ同時に二人を撃ち抜く。
アンナしかできないであろう芸当。
二人の体に刺さったままの矢。それが光を放ち始める。

「弾けなさい」

その言葉を合図に、矢は爆発。そこへ矢を何度も撃ち込んでいく。
そして爆発。
それが繰り返されていく。

「グラディウス！　包囲しなさい！」

「了解です」

二人を中心に３６０度、全方位に矢を展開。

「射てぇ！」

全ての矢が放たれた。爆煙がなければ、二人のサボテンが見えていた。

「これで終わりですわ」

目の前に出した手を、力強く握り締めた。
全ての矢が全て爆発したのだ。今までのものよりも、大きな爆発が起きる。

「……」

それでもアンナは警戒は解かない。
まだ魔力反応が消えていないからだ。それもあの爆発の外から。
その反応は一定の場所に留まらず、転々としている。
光速で移動しているのだろう。

「上だっ！」

突然聞こえてきた一真の声。
その言葉通り、上から降ってくる二人の姿があった。

「俊哉！　お前、絶対に失敗したろ！　あいつの意識、あるがな！」

「んな訳ない！　手応えあったんだからよ！」

「そうかい。まぁいい。どうせ、あいつは動けないんだ。まず、こっちから片づけるけぇな！」

「お姉様には手を出したくなかったが、仕方ないな」

アンナは避けようとはしないで、グラディウスを構える。が、間に合わない。二人の方が早い。
触れるまで、あと数ミリ。そこで拓磨と俊哉は邪魔をされた。

「し、神童一真……」

蹴り飛ばされ、二人と入れ替わるように行く一真が目の前にいた。

「……アンナといったな、小娘。少し寝ていろ」

「突然何っ……」

腹への一撃が、アンナの意識を刈り取る。
アンナの体は力が抜け、一真にもたれ掛かるように崩れ落ちた。
しかし、それも一瞬のこと。すぐに、アンナは起き上がる。

「相変わらず、無茶をしますね。この体は、私の物では無いんですよ」

「関係ない。俺が会いたかったのはお前なのだから」

体は二人の物だが、中身が違う。そのようにしか見えない。

「久しぶりですね、あなた。何年ぶりでしょうか？」

「千年はたっているだろうな」

「そうですか……あの子には、寂しい思いをさせてしまっているでしょうね」

「いつまで何話してんだよ！　あんたらの相手は、俺たちだろ！」

拓磨はそう言うが、一真もアンナも反応はしない。

完全に二人の世界に入ってしまっている。

「ふざけんなぁっ！　炎鳳拳！」

跳び上がった拓磨は、その拳を一真へ。

近づいてくることには、二人とも気がついている。

なのに動かないのには、

「絶対にさせない……」

「なっ！？」

伸びてきた手が、拓磨の手首を掴んだ。

そこにいたのは、鈴蘭。

「お父さんとお母さんの邪魔は、絶対にさせないっ！」

《一真の部屋》

なのは「突然だけど、何で獄龍破の準備を？」

一真「あいつが……あいつが、来るからだよ！　一美！　手伝え！」

一美「言われなくてもそのつもりよ」

アリス「二人分の獄龍破って、ここ壊れるんじゃない」

なのは「ねぇ、アリスちゃん。一真君が来るって言ってるのって、もしかして……」

アリス「うん、あいつ。何でも、隆浩が目を離した隙に脱走したらしいよ」

？「一真くぅ～ん♪」

一・美「「獄龍破っ！」」

？「あぁぁぁぁん！」

アリス「今の声、何かおかしくなかった？　絶対に絶頂ーーーー」

なのは「言わない方が、絶対にいいよ」

一真「……死んだよな？」

一美「言いたくはないけど、まだ生きてるわよ。お兄ちゃん」

一真「死んだよな？」

なのは「それはないと思うよ、一真君」

一真「死んだよなぁ！？」

アリス「諦めた方がいいよ、一真。いくら血涙流しても、現実は変わらないから」

一真「言ってくれよ……誰でもいいから、アッシュは死んだって言ってくれ！」

アッシュ「安心して、一真君。私は死なないわよ♪」

一真「ごめんなさい。マジで近づかないでください！」

アリス「綺麗な土下座だ！　それに今までに見たことのないくらいに、すごく必死だ！」

アッシュ「はぅ……そんな一真君、見てるだけでおかしくなる」

一美「甘いわね。私なんか、おかしくなり過ぎて脳が溶けだしてるわ」

アリス「……流石に、この変態二人にはついて行けない」

美・ア「「私は変態じゃない！　正常よ！」」

一真「なのは。俺はあいつらの、あの思い込みが怖い……」

なのは「うん。私も、あれは怖いな」

一真「俺、今日は出来るだけ大人しくしてるな。だから、さっさと進めてくれ」

なのは「そうだね。じゃ、お返事コーナー！」

一美「知ってるかしら？　お兄ちゃんはシスコンなのよ。つまり、妹である私も対象になってるの」

アッシュ「だから何？　私と一緒になれば、そんなささいなこと関係ないの。私一筋に変えてあげるわ！」

バルディッシュさんへ

なのは「そのことにした関しては、ここでは言えないんだ。だからごめんね」

一真「次回は無理だが、本編で婆さんが説明してくれるはずだからよ。それまで待っててくれ」

アッシュ「一真君に寄生なんてさせない！　だって寄生するのは、私なんだから！」

一美「何を言っているのかしらね、この牝は。お兄ちゃんのあれは、

いつでも私に寄生しているのよ！」

アリス「二人、気づいてるのかな？　一真が端っこで震えてることに」

一真「怖い……」

TOUDさんへ

一真「テメェのせいで、俺は恐怖を味わってんだよ！　どうしてくれんだ！　それとな、俺は千歳の物じゃねぇ！」

アッシュ「そうよね。私の物だものね」

一真「ごめんなさい。調子に乗りました。もう話しかけないでください」

なのは「今日はアッシュの無双だね」

一美「それにしてもあの牝は、好きな相手のお兄ちゃんが怖がってるのに、どうするつもりなのかしら？」

アリス「でも、ああ言うのが一番怖いんだよね。いろんな意味で」

な・美「「確かに……」」

NKさんへ

一真「クソメタル！　何が似た者同士だ！　あんなのと一緒にすんな！」

なのは「でもスゴいよね。二人に傷がない理由を当てるなんて」

アリス「一真はそういう勘は鋭いからね」

一美「あれ、勘じゃないと思うわよ」

アッシュ「何を言っているの、この雌豚は。一真君は、経験からそう判断したのよ」

一真「いや。前見たマンガに、ナノマシンで怪我を治すって場面があってな。もしかしたらって思っただけだ」

一美「ほらね」

アッシュ「さすがは一真君！　柔軟な思考で戦うなんて、スゴいわ！」

一真「誉められてるんだろうけど、全然嬉しくないのは何故だろうか。これが……だったらなぁ。それなら喜べるのに……」

二階堂さんへ

アリス「あのオーラ、《罪》の魔力のオーラ並みに耐久力あるからすごいんだよね？」

一真「ああ、すごい面倒だ。あの婆さん、なんつー代物作ってんだよ」

アッシュ「一真君」

一真「な、何だよ？」

アッシュ「私はMなの。だから、相性はピッタリね」

一美「Mなのはあなただけではないのだけど、それは理解してる？」

アッシュ「だから何？　あなた程度じゃ、一真君の欲求を受け止めることは無理なの」

一美「私は元々お兄ちゃんだったの。私以上に、お兄ちゃんのことを理解している女はいないわ」

アリス「一応私もMなんだけどな……」

なのは「大丈夫だよ。アリスちゃんにはアリスちゃんの武器があるんだから」

アリス「なのは……」

一真「早く帰ってこねぇかなぁ」

鴨川秘さんへ

アリス「一真って、そんなにキレてる？」

なのは「もう少し多いんじゃないのかな？」

一真「そんなにキレてるか、俺？」

一美「気づいてなかったの？」

アッシュ「あ、あ、イ、イーーーー」

一真「自主規制だ。つか、こいつは何を見てんだ？」

一美「お兄ちゃんの、キレてる時の姿の映像よ」

一真「こいつは何をしてんだよ！？　バカだろ！」

アリス「今日はこの鎮静剤、いらなかったね。というか、アッシュに使おうか？」

なのは「今後のために取っておくといいんじゃないかな」

アリス「そうだね。今回は一真に我慢してもらうね」

なのは「そうだね。そろそろ次回予告の時間だし」

アッシュ「一真くぅ～ん。私とこれからあの時の続きしましょ」

一真「突然だなっ。それにあの時って何だよ！？　あの時って！？」

アッシュ「一昨日の夢で、私のこと好きなようなしたじゃない」

一真「テメェの夢なんぞ、知ったこっちゃねぇよ！　つか、俺を勝手に出演させてんじゃねぇ！」

アッシュ「その罵り、最っ高！　もっと罵って、一真君♪」

一真「アリス！　次回予告だ！　俺、もう関わりたくない（泣）」

アリス「うん」

次回予告

なのは「一真君とアンナさんを守るように、模擬戦に乱入した鈴蘭」

アリス「鈴蘭の謎の発言に、様子のおかしい二人に全員が戸惑いを隠せない」

一美「そして始まる三人との戦い。それは圧倒的な力との、戦いの幕開け」

アッシュ「次回、魔法少女リリカルなのは～七つの大罪～」

一真「【魔王（一真）と神と半神半魔（鈴蘭）】」

一同「次回へ、スタンバイレディ！」

ーーーー収録後ーーーー

一真「近づくなっ！　俺に近づくんじゃねぇ！それ」

アッシュ「これから私達の愛の巣に行くんだから、そんなに離れないで」

一真「んなもん、いつ作りやがったこと!?　絶対に行かねぇからな!」

一美「これから行くのは、私との愛の巣よ。あなたとではないわ、雌豚」

一真「どちらとも行かねぇよ!　誰か助けてくれ!　お願いだから、早く帰って来てくれ!　千歳ぇぇぇぇ!」

魔王（一真）と神（アンナ）と半神半魔（鈴蘭）・前編（前書き）

かなり遅れてしまってすみません。
次回はもっと早く更新したいです。
それでは『七つの大罪』、始まります。

『主ら、今から言うこと、一言一句聞き漏らすでないぞ』

訓練場から目を離さないまま、みーなは口を開いた。

『今から約十分後。一真と小娘は、二人ではなくなるはずじゃ。そうなれば、鈴蘭も二人のために動く。その時は、主らに動いてほしい』

初めて彼女から聞く頼み。

それほどのことが、十分後に起きると言うことを示している。

『どういうことだ？　神童と彼女が、二人でなくなるとは？』

『その説明は……今は出来ない』

視線をずらし、鈴蘭のことを心配そうに見つめる。

『あんた達は、その時何もしないわけ？』

『うるさいなの。したくても出来ないことだってあるなの』

『どういうことよ？　まさか、自分の主だから手が出せないとか言うんじゃないでしょうね？』

『桂様。それ以上は……』

『桃華ちゃんは黙ってて。で、どうなの？』

『わしらは、強制的に鈴蘭とユニゾンすることになる。じゃから、動けんのだよ。よいか小娘。わしらは、鈴蘭が殺せと言ったら鈴蘭を殺す。それくらいは出来る。覚えておけ』

自分達の主でも殺せるという、二人の覚悟。

それを言われてしまうと、誰も何も言い返せなくなってしまう。

みーなとしては、それで良かった。

『はぁ……みーなさん。それで、様子がおかしくなったアンナと神童君はどうしたらいいの？』

『簡単なこと。倒せばいいだけじゃ。といっても、一つだけ問題があるがのう』

『問題だと？　それは私たちにも関係があるのか？』

『主ら《聖人》には、全く関係のないことだよ。あるのは、《罪人》だけじゃ』

《罪人》限定の問題。

その言葉を聞いて、フェイトは気がついた。

『もしかして……』

『そう、暴走じゃよ。主ら《罪人》が一真に触れた、または触れられると暴走する可能性がある。まぁ、可能性だけじゃが闘わぬほうがよいな』

暴走。

それは《罪》による、一つの感情の暴走。
一人でもそうなれば、止めるのは用意ではない。そしてここにいる《罪人》は、一真を覗き四人。
その全員が暴走すれば、誰にも手がつけられなくなる。

『ということは、一真君はネム二尉達か羽柴さん達にーーーー』

『一真は《聖人》にやってもらうなの。これは、もう決定事項なの』

『何でや？　フェイトちゃん達以外なら、一真君と戦っても問題ないんやろ』

『これに関しては相性の問題じゃよ。《罪人》や《聖人》よりも主ら、人間のほうが鈴蘭と相性がよくての。じゃから一真は《聖人》が、小娘は《罪人》が、鈴蘭は人間が相手をするとよいよ。そうすれば他の組み合わせよりも、早く終わるじゃろな。それに、わしらも早く主らを手伝うことができる』

『ねぇ。最後に一ついいかな？』

ずっと話を黙って聞いていた葵が、ここでようやく声を発した。

『何じゃ？』

『おかしくなった彼らをほっておいたら、どれくらいの被害が出るの？』

『それはわしらにも分からん。もしかしたら被害はほとんど出ぬかもしれんし、死人が、いや出雲が壊滅してしまうかもしれん』

『そう……』

『もうよいのか？』

『うん。大丈夫だよ』

『そうか。なら、わしの話は終わりじゃ』

みーなの話が終わり、全員からやる気が感じられるようになる。
今日会ったばかり桂達も、被害の話を聞いたことで真剣な目をしていた。

『……なぁ、千里』

『何ですか、千治さん？』

『思ったんじゃが、この模擬戦を止めたらいいんじゃないのか？』

その一言で、みーなとリリンと千那以外の全員が、千治を見たまま固まる。
誰もが思いつくはずで、思いつかなかった答えがそこにあった。

『その手があるじゃねぇか！　だったらーーーー』

『『『無理だ（ね／じゃよ）』』』

アリス、忍、千那の声がハモる。

『どういうことだよ、アリス』

『一真が、説明もなしに止まると思う？』

『だったら説明すればいい。今、あのユニゾンデバイスが言ったことを』

葵の隣に立っていた田中芽衣が、無表情のままそう言うが三人は首を縦に振らない。

『まず一真が、』

『第一隊長が、』

『『売られた喧嘩を、途中で止めるわけがない』』

開いた口が塞がらないとは、まさにこの事だろう。

二人の返答が、桂達にとって予想外すぎた。

『千那様』

『何じゃい、悠一』

『千那様は、どうして無理だと?』

『アカシックレコードで、どうやっても止めることが出来ぬと出ておっての』

『返ることができるかもしれませんよ』

『そうかもしれぬが、わしとしてはどうなるか見たいんじゃよ。みーなの言ったことは、なぜかアカシックレコードで見えぬからな』

その表情は、とても楽しそうなものだった。

と、ここまでが十分前の出来事。

「あれが隊長と神童一佐、そして鈴蘭か……俺達の知っている三人とは確実に別人だな」

「お前の言うとおりなんだけどなぁ……」

「どうした忍？」

「いや今の隊長なら、俺に向かって矢を飛ばそうとしないだろうなって」

「お前……」

呆れるゼロだったが、いつものことを思えば少し同情してしまう。

「作戦はどうしましょうか」

「まず鈴蘭を、あの二人から引き離すことが先決やね」

「分かりました。では、僕らが先に行きます」

「それじゃ次は私達ね。暴走されるのは回避したいし」

「じゃ、最後はフェイトちゃーーーー」

「桜ノ宮っ！」

「アリスっ！」

後ろから聞こえてきた、シグナムとヴィータの声。

「どうしたんや！？」

「アリスが、勝手に訓練場の中に……」

「なっ！？」

魔法陣はすでに消失。

アリスは訓練場の中にいた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「そこを退けっ！」

篭手型アームドデバイス。それはパラサイトデバイス、焔凰とは別の拓磨の持つデバイス。

そこへ大量の魔力が流れ込んでいく。

「炎凰拳！」

炎の拳は鈴蘭へ向け、真っ直ぐ進んでいく。

それを払うだけであしらうと、足場を蹴って拓磨へ向け跳んだ。

「言ったはずだよ！　お父さんとお母さんの邪魔をするなって！」

「俺達としては、お前の方が邪魔だ！」

鈴蘭の背後を駆ける、一筋の雷。

俊哉だ。

光速で動ける俊哉は、一瞬にして後ろを取った。しかし、それは失敗に終わる。

「かっーーーー」

俊哉の声にならない叫び。
鈴蘭が予知していたかのように、蹴りを繰り出していたから。
光速というスピードで、鈴蘭の足と衝突。
その衝撃は計り知れない。

「落ちろ！」

蹴り落とされ、巨大なクレーターを作り上げた。

「俊哉っ！」

俊哉を蹴り落とした鈴蘭は、痛がる様子も見せず次の行動に移る。
つまりそれは、拓磨の迎撃。

「クソッタレが……」

鈴蘭より後ろ。
そこで一真とアンナは、ただこちらを見ているだけだった。

「くくくく……威勢のいいガキだな。一度、相手してやってもいいかもな」

「ダメですよ。この体は私達（ワタシ）の物では無いんですから。それにこの体を守るという役目もあるんですよ」

「そうなんだがな……そうさせてはくれないようだぞ」

「レヴィアタン！　フルドライブ！」

落下してくるアリスを、魔力の光が包み込む。

「あれは、《罪人》か」

「クラウン・レイス！」

放たれた砲撃。

それをたった一枚の障壁で、いとも簡単に防ぎきる。

「……何の用だ？」

「今すぐ一真とアンナさんの中に戻ってください！　あなた達が出てくるには、まだ早すぎる！」

「それは出来ない話だな」

「なら、実力行使です。何が何でも、戻ってもらいます！」

「くくくく……いいねぇ。俺は好きだぜ、そう分かりやすいの」

そう言って掌をアリスへと向けた。

「というわけで、先手必勝だ」

掌からは衝撃波が。

それは一真が使うことのない魔法。

その魔法は、アリスの体を軽々と吹き飛ばした。

「はぁ……ほどほどにしてくださいね？　あの娘は、一真君にとってーーーー」

「言われなくても分かっている」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「……」

「ここはどこですの？」

二人、いや四人がいるのは広大な草原のど真ん中。

「ここは俺とこいつが作った空間だ。お前達、二人のためにな」

そう言ったのは、一真達の前に立つ男女の内、男の方。

「俺達のためだぁ？　何言ってんだ？」

「何言ってるって、言われてもなぁ……」

「あなたの説明が足りないんですよ。私が説明しますから」

「私（ワタクシ）としても、その方が助かりますわね。その男より、確実に分かりやすい説明をしてくれそうですし」

「確かにな」

三人の視界の隅で、三角座りでいじける大の大人の姿があった。
あれほど、視界に入れたくないものはないだろう。
一真とアンナは完全無視。彼女はため息をついていた。

「で、全部説明してくれるんだろうな？」

「はい。まず、私達とあなた達の関係から話した方がいいかもしれませんね」

「それは私も気になっていましたから、とても助かりますわ。ですから、早く説明なさい」

相手と初対面だが、アンナは変わることはない。
どこであろうと上から目線

「ええ。まず私達ですが、あなた達の前世となります」

「前世、ねぇ。その証拠はあんのか？」

「そうですね……この翼が、その証拠になるとおもいますけど。見覚え、ありませんか？」

言われなくても見覚えはあった。
彼女背中から生えた翼は、あの戦闘中に一真達の背中に現れたものと同一の物なのだから。

「その翼……」

「これはあなた達、または私達しか使うことの許されていない力な

んです」

「あー、質問いいか？」

「何ですか？」

「何であんた達と俺達だけなんだ？」

「それはですね。私達が魔王と神で、一真君達が魔王候補と神候補だからです」

「「は？」」

「私とアンナさん物は『神の翼』。そして彼と一真君のは『魔王の翼』」

魔王と神候補と聞いたからか、それとも話の邪魔をしたくないからなのか。またはどちらでもないのか。

それは分からないが、二人は黙ったまま。

「この力は、1日くらいで使いこなせるものじゃありません。もしかしたら暴走し、あなた達のお友達に怪我をさせてしまうかもしれません」

「だからここで修行、って訳だな。そしてここがその場所だ」

「……」

「どうしましたの、神童一真？」

「あんたらの言ってることが本当なんだとしても、んな時間俺にはねぇんだよ。あいつが……あの魔本野郎が四日後、千歳と来るんだ！　だから修業してるーーーー」

「それは分かっている。だから、ここを作ったんだ」

「何だと？」

「ここは元の空間より時間が流れるのが速い。その意味が分かるな？」

「……」

「はぁ……もう面倒だ。始めるぞ」

「はい」

二人の手に二種類の刀剣。
魔王は漆黒の。神は純白の。

「何をするつもりですの？」

「今からおまえ達を強制的に暴走させる。それを自力で制御させろ。いいな」

返事が帰ってくる前に、二人の体に刀が刺さる。
痛みはなく血は出ない。代わりにゆっくりと、体の中に沈んでいく。

《がああぁぁああ！》

《……》

翼が生え、暴走を始める二人。

「……速く制御しろ。でなければ、魂が壊れるぞ」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

高速で伸びていく魔力紐。

それを彼は掴むと、自分を中心に回し始める。

「おらよっ！」

そのまま投げ飛ばし、アリスは壁に激突。

それとほぼ同時に、彼を囲うように六人が現れた。

「次々と……面倒だな」

「お父さん！」

「こっちもいるんだよ、鈴蘭！」

振り向けばスバル達が、アンナを、彼女を囲んでいた。

「こっのぉ……お父さんとお母さんから、離れろぉぉぉ！」

叫びと共に、体から吹き出す魔力。

鈴蘭の魔力ランクはＢランク。だがこの魔力量は、それを遙かに上回る物。

Ｓランクオーバーは確実だろう。

「ヘルズーーーー」

「そんな大技、誰が使わせるか！」

振り上げられた腕を掴んだのは、ついさっき鈴蘭に蹴り飛ばされていた俊哉。

その体には、光の粉が見える。まだ治療中なのだろう。

「はなせっ！」

一瞬だけだが鈴蘭の動きが止まる。しかし、その一瞬だけでよかった。

俊哉以外のパラサイトデバイス組が、すでに動いていた。

「拓磨、合わせて！」

「言われなくても、わーってんだよ！」

拓磨の両手に装着されている篭手型アームドデバイスと、桂の周りに浮かぶ札型インテリジェントデバイス。

札は数を増やし砲台となり、弾丸は、

「焔凰！　出力最大！」

拓磨の炎。

「「ガイアフォース！」」

撃ち出された炎の弾丸は鈴蘭へ。

今から撃墜や、防御は間に合わない。それだけの速さで向かって

くる。
ならばどうするか。
鈴蘭は大きく口を開けた。

「えっ！？」

「なっ！？」

炎の弾丸はただの魔力へ分解。口の中へと消えていく。
これはグラトニーの稀少技能（レアスキル）である、『暴食の口（イーター）』そのもの。
一度、アルプトラオムで見たことのあるスバル達も、呆気に取られていた。

「返すよ！」

向けられたのは、右の掌。
作り出されたのは、巨大な魔力弾。
おそらく自分の魔力は、一つも使用していない。使ったのは、先に食べた魔力だけだろう。

「マジかよっ！？」

「任せてくださいませ、山村様」

拓磨と桂の前に現れたのは、着物を来た少女、小林桃華（コバヤシモモカ）。
その体からは、桃色の光の粉が。
直後、軌道を変えて飛んでいく。

「っ……」

桃華がしたのは、魔力による風の操作。
それにより、魔力弾の進行方向を強制的に変更させた。

「あんた。どこに飛ばしたの？」

「あちらです」

桃華の指さす先。
それは、《断罪の鎌》のメンバーと戦っている一真、いや、彼。
そちらへ、まっすぐ飛んでいく。

「なぁっ！？」

「何なのよ、あれ！？」

《断罪の鎌》にとって、最大のイレギュラー。

「邪魔すんなよ、人間風情が」

彼の手には、魔力によって作り出された槍が一つ。
彼の一番近くにいたリーズは、今の動作に恐怖を感じた。
その槍に込められた魔力は、Ａクラス以上の一般魔導師百人が、三日かけてやっと溜まる量の魔力量。
《罪人》と《聖人》が全力で魔力を溜めても、確実に丸一日はかかる。
彼はそれだけの量を掌に集め、一気に凝縮をこの瞬間だけでやってのけたということだ。

「おらよっ、と」

放られたそれは、《聖人》に当たることなく魔力弾と衝突。
そして爆発もせず、完全に消失した。

「ぐっ……」

今のが、彼の作った少ない隙の一つ。
その隙に動いたのが、影の薄さなら誰にも負けない忍。

「お前かっ……」

「ユゥイ、ネムさん！　今だ！」

その叫びとともに、忍もろともバインドで縛り上げる。

「これであんたが動くまで、タイムラグが出来上がる」

「何だ？　お前も一緒に攻撃を受けるのか？」

「違いますよ。あなたに動かれて、範囲外に逃げられるのを防ぎたかっただけです」

「何だと？」

魔導書を開いたリオルの、ご丁寧な説明の直後《断罪の鎌》と彼の七人の姿は、訓練場から消えてなくなった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「警戒しなくてもいいんですよ」

そう彼女は言うが、フェイト達は警戒したまま。

「って言っても、信用してくれませんよね」

「根拠がないですから。あなたが、私達に攻撃してこないという」

「確かにそうですね。フェイトさんの言うとおりです」

どうやって証明しましょうか、と彼女が悩んでいると、

「大丈夫だよ。その人の言っていることは、本当だから」

現れたのはアリス。

セットアップしたままだが、その瞳に戦意は見られない。

「どういうことですか、アリスさん。この人に戦う意志はないって……上でみーなさんがーーーー」

「違うよスバル。この人は、私達と話がしたいだけだから。そうですよね、先代？」

「ええ」

三人を蚊帳の外に、二人は会話を進めていく。

「ちょっと待って、アリス。先代って、どういうことなの？　アンナじゃないの？」

「アンナさん？　違うよ。今、この体を動かして私達と話している

のは、先代の神様」

「先代の」

「神」

「様？」

「はい」

笑顔で返事をする彼女にフェイト、スバル、ティアナの三人は固まったまま。

数秒の沈黙。

そして、

「「「神様ぁぁぁあああぁぁ！！！！」」」

驚きの叫びが上がった。

（中編に続く）

《一真の部屋》

一真「あー、まず謝罪だな。長くなってすまねぇ。作者が軽いスランプに陥ってな。だから、また遅くなるかもしれねぇが、最後まで付き合ってくれ。さて、続いてだがーーーー」

アリス「クロスリレー参加記念で、今回から数回。いつまでかは分からないけど、メンバーを変えてやっていきます」

千歳「千歳ちゃん、ふっかーつ！」

一真「ごふぅっ！」

鈴蘭「お兄ちゃんっ！？」

神無「本当、あんた達は元気ねぇ」

一真「ふざけんなよ、このくそロリ甘党娘っ！　会う度、会う度、低空ドロップかましやがって！　いつか、俺死ぬんじゃねぇのか！？」

千歳「大丈夫。死なないようにしてるからっ！　イェイっ♪」

一真「信用しにくいわ！」

鈴蘭「仲がいいよね、お兄ちゃん達」

神無「あの漫才は、そうそうできないわね」

アリス「むぅ……」

神無「ホント、変わらないわねこの三人は……そんなことよりも、進めましょうか鈴蘭」

鈴蘭「そうだね。というわけで、お返事コーナーです！」

バルディッシュさんへ

一真「あのまま俺だったらよかったんだがなぁ。クソがっ」

千歳「だったら体取り戻せばーーーー」

一真「んなことできたら、誰も苦労しねぇんだよ！」

神無「そう言えば暴走してたわね。正確にはさせられてたわね」

一真「だから無理なんだよ」

鈴蘭「アリスさん。お兄ちゃんの体、誰が使っているんでしょうね？」

アリス「その質問。あんたが一番したらダメでしょ」

鈴蘭「……そうでしたね」

千歳「大丈夫だよ。一真なら」

一真「何の自信だ、それはっ！」

鴨川秘さんへ

鈴蘭「おばあちゃんじゃくお母さんだよっ！」

一真「そのツッコミ、今更だろ。前なんておじいちゃんだったぞ」

鈴蘭「えっとごめんね、お兄ちゃん」

一真「謝るな！　何か虚しくなる！」

アリス「というか、あのサモンナイト石。しばらく使うことなくなったね」

神無「そうね。でも、いいんじゃない。楽しそうだし」

千歳「私のおかげだよね！」

アリス（私の見間違いじゃないなら、どう見てもいつも通りなんだよね。私の目がおかしいのかな？）

ＮＫさんへ

一真「あのクソガキがぁぁあああぁぁぁぁぁあ！」

千歳「じーーーーーーーっ」

一真「ぐっ……」

アリス「いくら認めたからって、」

神無「本人の前じゃ言いにくいわよね。あの性格じゃあ」

鈴蘭「ラディも大変なんだね」

アリス「セラフィムがいつもディを、やりたい放題してるから」

神無「だからあまり気にしないほうがいいわね。それよりも」

アリス「あっちですね」

鈴蘭「あっちだね」

千歳「じーーーーーーーーーーーーーーーーーーっ」

一真「ああぁああぁぁぁぁぁあ！　後はテメェらでどうにかしてろっ！　俺は逃げるっ！」

千歳「あっ、一真ぁっ」

　神童一真様、楠木千歳様はログアウトされました。

神無「そろそろ締めましょうか」

アリス「そうですね。あの二人も出て行きましたし」

鈴蘭「うん。時間だし」

アリス「というわけで、次回へ向けて」

一同『スタンバイレディ！』

魔王（一真）と神（アンナ）と半神半魔（鈴蘭）・中編

一真の顔の前に出現した、巨大過ぎる魔力弾。　この魔法名は「竜王の殺息（ドラゴンブレス）」。一真が暴走時によく使う魔法である。
威力は獄龍破と、ほとんど変わらない。
違う点があるとすれば、何かに当たると爆発するかどうかだ。

「来いよ、一真っ！　俺は逃げたりしないぞっ！」

《がぁぁあぁあああ！》

挑発に乗り、そのまま魔力弾を放ってしまう。今の一真は、相手が誰であろうと関係ない。
今の一真の頭の中には、目の前の敵を消す、というたった一つの目的のみ。

「ふんっ」

彼はそれを、爆発しないように魔力でコーティング。そして掴んで止めた。が、それを飛び越え一真が現れる。
予想外、という訳ではないが、片手で相手をするのには面倒な相手なのは、間違いのないことだ。
一真の指の先には、魔力で造られた巨大な爪が。

「おら。返すぞ」

投げ返された魔力弾は、一真に直撃。
その姿は爆煙によって、完全に見えなくなってしまう。

（おかしいな……）

魔王である彼が感じた違和感。それは、一真の今の暴走状態について。

ここにいる４人は、魂だけの状態。

その状態での暴走は、一時的に魂の形が変質してもおかしくはない。むしろ、この二人の場合変質しなければおかしい。

アンナはすでに、背中から真っ白な翼を生やし、左手首からは弓が。瞳は金、白目は真っ赤。充血ではなく、真っ赤に染まったというのが正しいだろう。

頭上には天使の輪。

人間とは言えないだろう。

だが一真は人間の姿のまま、《罪》のオーラを纏っているだけ。

（どういうことだ？）

その時だった。

それは突然現れたのは、とんでもない量の魔力量。

「来たか」

《がぁぁあぁぁぁぁあ！》

煙の中から聞こえてきた、一真の咆こう。

そして現れたのは、一真ではなかった。

頭から二本の角に、背中には黒い翼。そして長い尾もある。

瞳は紅く、白目だった場所は黒く。

鋭く伸びた爪と牙。

悪魔だと言われたら、誰もが納得してしまう姿をした存在が、そこに立っていた。

「っ……」

目の前の悪魔は消失。次に現れたのは、彼の目と鼻の先。
転移魔法を使った形跡は見られない。
つまり脚力だけで、今の瞬間移動をやってのけた、ということとなる。

《ぐるぅ……》

「この、野郎がっ！」

投げ飛ばされたそれは、体を捻り両手両足で着地。同時に魔王へ向け全力疾走。
直後、二人の間に何かが落下してきた。

《っ……》

それは天使のようだが、そう呼ぶにはあまりにも異質な存在。だが、天使というのが、最も適切なのは間違いない。
それを見た悪魔は、空を見上げる。顔の前に集まっていく、ありえない量の魔力。
それはその存在が保有している魔力ではない。この空間に漂っている魔力。それを集めている。
まるで収束砲を放つかのように。

「あれは危険ですよ、あなた」

「そんなこと分かっている」

二人より早く動いたのは天使。
悪魔に一瞬で詰め寄り、顔面を蹴り飛ばした。

「「なぁっ！？」」

すかさず、矢を連射。その数は数百、いや、数千を超える。
それを縫うように避け、顔を掴んだ。
その手は黒く光っている。
そして爆発音。
それは二カ所から聞こえてきた。
一カ所は天使の顔。もう一カ所は、

《ぐぅっ》

悪魔の腹。
同時に落下していく二体と、それを見届ける二人。

「やること、無かったな？」

「そうだといいんですけど……」

「どういうことだ？」

「あれ」

神の指さす先には、黒と白の繭。
その中には悪魔と天使がいると思われる。

「嫌な予感しかしないぞ」

「嫌な予感というか、剣と完全に融合しているんじゃ」

「そうだとしたら……止めるぞっ！」

二人の足元に出現した、二種類の魔法陣。

「封印術式展開！　『万魔殿（パンデモニウム）』！」

繭を囲むように現れた、巨大な黒い箱。

この箱自体が、強力な封印魔法その物。中に入ってしまえば、出るのはほぼ不可能……、

「一時中断です。急いで剣を、あの二人から抜きましょう」

「ああ」

のはずなのだが、箱にヒビが入り始めた。

小さなヒビは、一気に広がり箱全体に。

そして、箱は砕けた。

「……こんな風になるんだな。剣と完全に融合すると」

「そうですね」

そこには悪魔も天使もいない。いたのは、一真とアンナ。

だが、その瞳に光はなく、どんよりと濁っている。

そして異様な一真の腕。あの剣と、完全に一体化していた。

「来るぞ」

「はい」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「ヘルズ……」

振り上げた右腕。その手首には、二つの環状魔法陣。
それを一気に振り下ろす。

「ブリンガァァ！」

ドォォン

響き渡る轟音。
地面に、巨大な線が出来上がった。
今の一撃は誰にも当たりはしなかったが、全員が警戒態勢を取る。

＞今の、直撃したらマズいな……＜

＞大丈夫だよ、ユウ。あたしと芽衣が行くから＜

葵の言葉に同調して、芽衣は頷く。

＞……分かった。僕達が全力でサポートする＜

会話を終えて、全員が同時に動き始める。
俊哉が光速移動魔法『霆天』で、桃華が高速移動魔法『風泳』で鈴蘭へ近づく。
しかし、先と同じ様に完璧なタイミングで反応。
俊哉の顎をアッパーが貫き、桃華の腹にストレートが撃ち抜く。

だが、その完璧な反応が隙へと変わる。上で一度それを見ていた悠一には、それが予想できていた。

「それ、待ってたよ。神童鈴蘭ちゃん」

魔法陣を蹴り、攻撃を仕掛ける。

悠一の両手の甲からは、青く光る巨大な魔力爪が三本ずつ。

「『迅爪』」

その言葉と共に悠一はフルドライブへ。

爪の光は更に強くなる。

「はぁっ！」

鈴蘭の背後からの攻撃。完全に死角で、鈴蘭に反応出来ない。ハズだった。

なのに鈴蘭は振り返りもしないで、腕を背後に伸ばして爪を掴んでみせた。

「っ！？」

悠一にとって、完全に予想外の動き。

だから反応が出来ない。

「吹き飛べっ」

腹を蹴り上げ、鈴蘭は悠一を指差す。

そして放たれたのは一筋の光。それは悠一の体を貫いた。

その一度では終わらない。

次は四肢を同時に。更には体へ数十発。

「終わりだよっ！」

トドメだと言わんばかりの、巨大な魔力弾。放とうとした瞬間、鈴蘭の目の前で爆発。

鈴蘭は何していない。悠一は何もできていない。

ではなぜ、魔力弾が爆発したのか。

その理由に、鈴蘭は気づいていた。

「このっ……！」

鈴蘭の睨む先には、拓磨と桂の姿が。すでに次弾装填済み。

それを見て次に鈴蘭が取った行動は、

「カイーナっ！」

本来ならば一真の稀少技能である、『永久凍土（コキュートス）』のキーワードを叫んだ。

そしてすぐに両足で、二人のいる位置まで跳躍する。

ここまで数秒。

「マジかっ！？」

跳んだだけでは届かない位置にいた二人には、予想外の出来事。

鈴蘭のいる位置は、二人よりも上。

それを確認した鈴蘭は、背後に魔法陣を展開。次はそれを蹴って、二人へ向かう。

「っ！？」

中で止まる鈴蘭の体。
両腕と両足を、水の触手が縛り付けていた。

「ギリギリセーフ」

抑揚のない声が響く。

「本当にな……」

どれだけ引っ張っても、相手は水。力でどうにかなるものではない。

「アンテノーラ！」

鈴蘭が叫んだのは、『永久凍土』の二つ目のキーワード。
それにより膨れ上がる魔力と、上昇する身体能力。触手を引きちぎり、その場から脱出はかる。
その直後に聞こえてきたのは、パァンという乾いた音。

「逃がす、かぁぁぁ！」

鈴蘭に向け、勢いよくせり上がってくる地面の一部。その中をよく見てみると、黒く光る物が。
地上では、葵が地面に両手をついて何かをしている。
地面にナノマシンを混ぜ、魔力で操っているのだ。

「邪魔だぁぁっ！」

拳一つでそれを砕き、一番厄介な芽衣へと体を向け動きだそうと

する。が、もう一度、触手が四肢を縛る。
そして鈴蘭の目の前に現れた、巨大な土の山。大きく口を開いたそれは、パクリと鈴蘭を飲み込んだ。

「ふぅ……これで終わりか？」

「そうだと願いたいな。俺の顔が変形する」

「黙ろうか、俊哉♪」

「いや、葵さん。その拳をしまってほしいんですが……」

「緊張感無さすぎ」

「そうなんだが、芽衣はもう少し気を……っ！」

悠一は気がついた。
土の山にヒビが入っていることに。

「葵っ！　再構成をっ！」

「っ！」

急いでナノマシンを流し込み、再び鈴蘭を閉じこめようとするが、

「クソっ、間に合わない！　みんな、急いで離れて！」

内側から山は崩れ、鈴蘭は現れる。
閉じこめられる前よりも強大な魔力を、その身から溢れさせながら。

「もう許さない……」

突如現れた、大量の魔法陣
その数は数え切れない。

「何だ、これ」

「魔法陣なのは、間違いないわよ」

「ですが、とても嫌な感じがします……」

時間が経つごとに、魔法陣の数は増していく。

「俊哉。もう一回、頼めるか？」

「結構厳しけれど、あと一回なら何とか」

悠一の問いに、顔を歪めながら答える。

「なら行ってみようか。何かされるまえに」

「軽くないか、葵っ！？」

「さっさ行け、女の敵」

芽衣の言葉が、俊哉の心を完璧に砕いた。それはもう完膚無きまでに。

「行けばいいんだろ！　行けば！」

そう叫び霆天で光速移動へ
それと同時に、
「消し飛べぇぇ！　大連鎖ぁっ！」
一つの魔法陣に大量の魔力を流し込む。
それが鍵だった。
「なぁっ！？」
一つ目の魔法陣が爆発し、連鎖して隣の魔法陣も爆発。更に、その隣の魔法陣も爆発。
爆発は一気に広がり、訓練場を飲み込んだ。
「はぁ、はぁ、はぁ……っ！？」
その爆発は一瞬で収束。一カ所に集まっていく。
「少しやり過ぎです」
「お母、さん……」
そこにいたのは神だった。
◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆
「神様が代替わりするとは、思ってもなかったわい」
場所は変わって、ここは訓練場の観戦室。

神を連れ、アリス達はここへ戻ってきていた。

「本当にアンナさんじゃないんですか？」

そう聞いたスバルに彼女は、アンナでは確実に見せることのない優しい笑みを向ける。

「はい。今、彼女の魂は一真君の魂と別の所にいます」

「魂？　別の所？　それは一体……」

言葉を理解出来ない面々。

そのことに対し説明しようとしたのか、神が話そうとした時だった。

窓の外は光でいっぱいになった。

「あれ、魔法陣？　鈴蘭のよね」

そこに広がるのは異様な光景。

訓練場を埋め尽くす、異常な数の魔法陣。

「すみません、この話はまた後で。あの娘を止めてきます」

そう言い残し、神は転移魔法で消えた。

「……」

「どうしたの、キャロ？」

「あの魔法陣、嫌な感じがするの」
「嫌な感じって？」
「それは分からないけど……」
その言葉の直後。
連鎖爆発は始まった。
ーーーーーーーーーーーー
「下がってください」
爆発が始まると同時に拓磨達の前現れた彼女は、自分の目の前に一つの光球を作り出す。
それは攻撃用ではないらしい。
「何よ、それ？」
「説明は後です。私の後ろに固まって、動かないでください」
爆発は一瞬で訓練場を埋め尽くした。しかし、その爆発は一カ所へ。
神が作り出した球体へ、全て吸い込まれていく。
爆発その物がなくなり、空に浮いている鈴蘭が見えてくる。その表所は、信じられない物を見たという顔。
「少しやり過ぎです」
「お母、さん……」

「はぁ……この体は私の物ではありませんし、本当は手荒なことはしたくないんですが……仕方ありませんね。鈴蘭、お仕置きです」

彼女から吹き出し始める大量の魔力と、その魔力が放つ金色の魔力光。

それはアンナとは全く違っていた。

「あなた達は下がっていてください。ここからは私がやります」

拓磨達の意見を聞く前に、彼女は動き始めていた。

跳び上がった神は、掌を向けた。

たったそれだけで、鈴蘭の体は簡単に吹き飛び、

「かはっ……」

壁に激突。

崩れ落ちる鈴蘭。

そんな彼女の姿を神は何も言わないで、ただ見下ろしている。

「おいおい。お前の方がやりすぎだろうよ。魔力を込めたデコピンだけで、全然よかったんじゃないのか」

「あれくらいで、ちょうどいいんです。というか、いつ出てきたんですか？」

神の隣に立つのは、結界の中に取り込まれたはずの魔王。

その体には傷一つない。

「今だ。ちなみにあいつらはあそこ」

魔王の指さす先。それは訓練場の地面。
六人はバインドで拘束され、寝転がっていた。
「あれ、本当に《聖人》だよな？」
「そうですけど」
「だとしたら、この代は最悪だぞ。《罪人》達と一真は敵対関係。そしてあいつらは、《聖人》として歴代最弱だ」
「やっぱりそうですか」
「何だ。お前、知ってたのか？」
「はい。ずっとアンナさんの中で、一緒に見てきましたから」
「だとしたらヤバいぞ。ガブリエル共が動く前に何とかしないと……」
「それはそうですね。それに鈴蘭も……間違いなく彼らの狙いは、あの娘ですから」
◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇
「どうした？　まさか、この程度じゃないだろうな？」
「くっ……」
無傷のままの魔王に対し、《断罪の鎌（エクスキューショナー）》のメンバーは肩で息をし

ている。

「おっ？」

体を半身にして、後ろからの一撃を避ける。

「なっ！？」

「予想外か？　そうでもないだろ。いくら影が薄くても、その体から出続ける魔力は薄くない。気づかないはずがないだろ、小僧」

魔王の言うとおり、《聖人》の魔力は強大。

そんな物を放出しながら隠れようとするのは、かなり難しい。

「さて……」

伸ばしている忍の腕を掴み、

「どうされたい？」

と聞いたが、返答も聞かず全力でブン投げた。

「ふぅ……お前達、弱すぎだ。このままだと、いずれ死ぬぞ」

《一真の部屋》

一真「あのな、千歳。ずっと視線を送るの、止めてくれないか？」

千歳「じーーーーーーーーっ」

一真「だから止めろって言ってーーーー」

千歳「じーーーーーーーーっ」

一真「いい加減に許しーーーー」

千歳「じーーーーーーーーっ」

一真「ぬおぉぉおおおぉぉ！」

アリス「一真、前回の最後からずっと視姦されてるんだ……」

神無「あれは誰でもキツいわね」

鈴蘭「お兄ちゃんも、そろそろ素直になればいいのに」

アリス「あれでも素直になったほうだよ」

鈴蘭「それは、まぁ……私も分かりますけど」

神無「というか、助けてあげないの？」

アリス「たまにいいかなって。新鮮だし」

一真「てめぇぇえぇぇらぁぁあぁぁぁああ！」

千歳「じーーーーーーーーっ」

鈴蘭「お兄ちゃんと千歳さんはほっといて、お返事コーナーです」

エドワード・ニューゲートさんへ

一真「何兆倍ねぇ……一回やられたら、再起不能になってもやり返すって普通じゃないのか？」

アリス「異常だから」

千歳「えっ！？」

鈴蘭「どうしたんですか？」

千歳「普通じゃないの！？」

神無「千歳ちゃんは家があれだからしょうがないとしても、一真はどこでこんなに……」

アリス「ラスト達といたときだと思いますよ。絶対に」

神無「まぁ、それしかないわよね」

一・千「「俺（私）、普通じゃないの（か）っ！？」」

鴨川秘さんへ

一真「ふむ……」

神無「また灰央がよけいなことを……」

一真「それもありだな。というか全次元の支配、やってみるか」

千歳「楽しそうだね。私も手伝う♪」

アリス「最悪の二人が手を組んだっ！」

鈴蘭「この二人だと、何でもできそうですよね」

アリス「そうそう、祇帰。ツッコミの数は、気にしないほうがいいよ。たまに一真一人で、三人以上のボケを捌いてる時あるから」

一真「そうだ。二人なんて、まだいいほうだ」

千歳「レモネード美味しいね、鈴蘭ちゃん♪」

鈴蘭「はい。すごく美味しいです♪」

神無「いつもお土産ありがとね。いつかちゃんとお礼するわ」

バルディッシュさんへ

一真「確かにな。魔王は俺じゃねぇ。なーーーー」

鈴蘭「お兄ちゃんっ！？」

アリス「一応これ、なのは達も見てるからね」

神無「自業自得よ」

千歳「一真の場合、魔王よりも」

神・ア・鈴「「「魔王よりも？」」」

千歳「鬼神だよね」

アリス「そういえば一真って、中学の頃周りから『鬼神』って呼ばれてたよね。不良を倒しすぎて」

神無「そういえばそうね」

鈴蘭「普通にそういう会話のできるお姉ちゃんたちが、すごい」

NKさんへ

一真「クソメタルがぁぁあぁあ！」

千歳「ぜ、全部見たよ」

鈴蘭「お兄ちゃん」

神・ア「「一真」」

一真「そんな目で俺を見るなぁぁぁぁ！」

アリス「あ、逃げた」

鈴蘭「お父さんとお母さん、すごいね」

神無「いや、神様の方は何もしてないわよ。何かやったのはあんたと、魔王だけだから」

千歳「ねぇねぇ、アリスちゃん。あれの内容が本物だと、一真って……」

アリス「そうだよ。その認識でいいから」

千歳「そうなんだ」

鈴蘭「千歳さん、すごく嬉しそうだね」

神無「そりゃ、嬉しいでしょうよ」

千歳「私、一真追ってくる！」

アリス「またこの三人か」

鈴蘭「そうですね。でも、たまにはこんなこともあってもいいじゃないですか。お兄ちゃん達嬉しそうですから」

神無「二人とも、そろそろ締めるわよ」

ア・鈴「「はーい」」

神無「それじゃ、次回へ」

神・ア・鈴「「「スタンバイレディ！」」」

「ふぅ……お前達、弱すぎだ。このままだと、いずれ死ぬぞ」

魔王からの、とんでもない宣告。

攻撃を仕掛けようとしていた《断罪の鎌（エクスキューショナー）》の動きが止まる。

「何だと？」

「ん？　聞こえなかったのか。なら、もう一度言ってーーーー」

「そういう訳じゃない。私達がいずれ死ぬぞというのは、一体どういうことだと聞いているんだ」

「簡単だ。お前たち弱すぎるからだ。《聖人（ライザー）》としては、歴代最弱だぞ」

「……」

再び言葉を失う中、唯一ゼロだけが全く別のことで口を閉ざしている。

それに気がついたのは、隣にいたリオルだ。

「どうしたんですか、ゼロ？」

「……リオル。奴は、誰だ？」

「どういうことです？」

「俺には奴が神童には見えない。いや、正しくは中身がだ」

「私には、あなたの言っていることはさっぱりなんですが……」

「なら、確かめるとしようか」

そう言って、ライフルの形を取っているケロベロスの銃口を、魔王へと向ける。

そして躊躇なく、引き金を引いた。

「あ？」

手を振っただけで魔力弾は、魔力に分解され霧散。

その場から完全に消滅した。

おそらくそれはゼロの予想の範囲内。すでに体勢を低くして、魔王へと近づいていく。

「ん？」

銃口はぴったり魔王の、いや一真の体にくっついている。

こうなれば防ぐことは不可能。

無傷ですむには、ゼロが引き金を引くより早くその場から動くしかない。

「これならどうだ？」

「上手いこと考えたな。これなら防ぐのは無理だ。防ぐのは、な？」

銃口を突きつけると同時に、その引き金を引くべきだったのだ。

完璧な判断ミス。

そうとしか言いようがない。

「なら、これはどうだ？」

向けられたのは、ただの掌。そこには魔力弾はないが、魔力はある。

「っ！」

それに気がついたゼロは引き金を引こうとするが、

「遅いんだよ」

勢い良くその体は吹っ飛んでいった。

今の一撃だけでも、そこそこの魔力は使う。だが、その顔に出し疲れた様子は見られない。

「ゼロの言うとおり、ですね？」

「どういうことだよ、リオル？」

「彼は一真君ではないようです。中身が、ですが」

「言っている意味が、俺には分からないんだが」

「ユゥイ君に分かりやすいように説明しますと、あの躯は彼の物で間違いありません。ですが、問題はその体を動かしている中身です。中身が神童一真ではないのですよ。普通ならば人格が変わった、と考えるのが妥当なのでしょうが、彼の場合はそれ当てはまらないかもしれませんね。違いますか、誰かさん？」

「まぁ、そうなんだが……今更かよ。つっても、人格が変わった程度じゃないって、よく気がついたな」

「一度に使っている魔力量が、彼と違いましたから。特に、結界の外であなたが使った槍」

「槍……あぁ、あれか。久しぶりにやったから、魔力を入れすぎただけだ。んなことより、続き始めるぞ。残りは四人、か。外もそろそろ終わってるだろうし、一瞬で終わらせる」

その宣言通り、一瞬でこの結界内の戦闘は終戦した。
彼は何をしたのか。
魔力を体から放出し、彼女達の頭上から降らせたのだ。
それは圧力となり、四人の体を地面に叩きつけた。

「《聖人》なら抵抗できると思ったんだが……やっぱり、弱すぎるな」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

模擬戦は中断。
来たときに案内された大広間に、集合させられていた。
理由は主に彼らにある。

「たくっ。何で俺達がこんなことに……」

「ちゃんと説明しないと、誰も納得してくれませんよ。私達のことも、この娘のことも」

「ま、そうだろうな」

「そろそろ説明を始めてもらっても良いかの？」

「はい。では、まず私達のことからですね。私とこの人は、皆さんの知っている神童一真君やアンナ・シロガネさんではありません。自分で言うのは恥ずかしいんですが、私は皆さんが神様と呼んでいる存在です」

「んで、俺が魔王って奴だ」

沈黙。

長い訳ではないが沈黙が続き、

「ネムさん、隊長連れて病院行きますよ！」

「あの娘なら神様とかいいそうだけど、今回はマズいわね。忍君、ユゥイ君手伝って！」

「分かりました！」

「了解した、副隊長」

完全に的外れだが、彼らなりにアンナを心配してのこと。

だが今はアンナではなく神。この心配の意味はない。

後数センチで触れる、という所で彼らは足を止めなければいけなくなった。

「下がれ」

殺意が込められたら魔力と、恐ろしいくらいに響く声。
それによって、三人の動き完全に止まってしまう。

「こいつの話の邪魔をするなら、俺がお前たちを消すが……」

ゆっくりと戻って行く三人達。そのまま元座っていた場所に、再び座り直した。
それを確認して、神は再び話し始める。

「一応証拠は、この翼ですね」

神の動かしているアンナの躯からは、純白の巨大な翼が。魔王の動かしている一真の躯からは、漆黒の巨大な翼が。
それはここにいる全員が、先に一度見ている。

「これは、体の持ち主である一真君やアンナさん。そして私達でしか使えない、強大な力の塊なんです。これは千那さんの『アカシックレコード』には、一度も見ることは出来ない。そうですよね？」

神の問に千那は肯定の仕草を見せる。
つまり、彼女の言葉が本当だということを示していた。

「『アカシックレコード』に映らない理由はなんなんです？」

「魔力の違いです。これに使われている魔力が、人間の住む世界では使われないものですから。それが、『アカシックレコード』に映らない原因です。えっと、一応納得してくれましたか？」

返答はない。
つまり文句はないと取っても、誰も問題はないということになる。

神もそう認識して、次の説明を始めようとしたのだが、

「聞きたいことあるけ、いいか？」

拓磨が手を挙げていた。

「何でしょうか？」

「今、あんたの膝で寝てるそいつ。何者だ？」

「私とこの人が生きているときの、娘です」

「娘だぁ？」

「これも嘘じゃないぞ。つか、スバル……だったな、お前」

「あ、はい」

「お前、鈴蘭がおかしくなったのを見たことがあるだろ？」

そう聞かれたスバルには、思い当たる節はありすぎた。

初めての模擬戦と、数日前の組み手。そこで鈴蘭は、間違いなく暴走していた。

彼の言っているのは、おそらくこのこと。

「はい」

「あれは、魔王と神のハーフの鈴蘭が、その力の使い方を知らないからあんな状態になっている。知らないって言うよりも、俺たちが自分以外の記憶を奪ったからだな。理由は聞くなよ。言ったところ

で、お前たちには今は何も対処は出来ないからな」

何か言いたそうにしていたなのはだったが、何も言うことは出来なかった。

一真の中から同じ光景を見てきた彼は、それに気づき、

＞何かしたいのだろうが、止めておけ。《聖人》として動けるならともかく、お前はまだ人間なんだからな。いいな？＜

念話でそう釘を刺していた。

だが、なのはが納得していないのは顔を見ても明らかだったが、これ以上彼が何かを言うことはなかった。

「私もいいでしょうか？」

「何ですか、リオル君？」

「あなた方が魔王と神であることは理解しましたが、隊長と神童一佐はどうなさっているのですか？　ただ入れ替わった、というわけではないのでしょう？」

「そうですね。今彼らの魂は、こことは全く別の場所で修業をしてもらっています」

「だが問題がある。その修業、もしかしたらギリギリ間に合わない可能性がある。その場合、あいつらが帰ってくるまで俺たちが戦うことになるが……今の俺達には、三割の力しか使えない。それを理解しておいてほしい。いいな？　と、俺達の説明はーーーー」

「最後に私からもいいか？」

「シグナムか。何だ？」

「その体を奪い、裏切るということは考える必要はーーーー」

「ない。お前たちが一真たちと敵対しないかぎりはな」

「そうか……」

「もういいのか？」

「ああ」

「なら俺たちの話は終わりだ。婆さん。後は頼んだぞ」

「分かった。さて、続いてはパラサイトデバイスについての質問の時間じゃな。先の模擬戦を見ていて、聞きたいことができたじゃろ？　今なら何でも答えるぞ」

「じゃあ、あの光は何なんだ？」

全く伝わらない、ヴィータの質問に全員の頭の上に？マークが出現するのが見えた。

唯一質問の意図が分かったのは、『アカシックレコード』を持っている千那だけ。

「ヴィータちゃん……」

「何だよ、シャマル？」

「それじゃ誰にも伝わらないんじゃない？」

「……あ、あれだよ。一真とあいつの攻撃を受けた二人の体に出来た、大量の傷。その傷に張り付いてた光だ。何なんだよ、あれ？」

「あれは治療用のナノマシンじゃよ。パラサイトデバイスの本体は体を作り替えるナノマシンではなく、それを作り出す核の方じゃからの。治療用ナノマシンを作ることも可能なんじゃよ。答えとしてはこんなとこかの。よいか？」

「ああ」

「あ、そうそう。ちなみにパラサイトデバイスは、体を作り替えると同時その人間に適した能力も付加してくれるんじゃよ。拓磨の発火現象と俊哉の放電現象はそれが原因だの。さて、次はあるか？」

「……《聖人》や《罪人》の物とと酷似したあのオーラ。なぜそんなものが存在する？」

「作ったからじゃよ。わしの《罪》を元にのぅ」

千那の体から放たれたそれは、《罪人》のオーラそのものだった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

抉られた地面に、巨大なクレーター。ここは、一真とアンナが連れてこられたあの緑の草原。

だが、今は緑の部分はほとんどない。あるのは茶色。

《ふんっ》

振り抜かれた剣と同化した一真の左腕。

「ぐっ……」

受け止めたが、足は地面へめり込んでいく。

「重っ……」

「あなたっ！」

神の呼び声。

それだけで魔王は理解した。自分に何が起きようとしているのか。

すぐに一真の腕を弾き上げる。直後、地面が吹き飛んだ。

それは一真の剣の力。

「間に合えよっ！」

その場で高く跳んで、宙返り。

一瞬遅れて、魔王の下を何かが通り抜けた。矢だ。

それには《聖人》の魔力が込められているが、魔王を神が感じたのはそれ以上の力。

《邪魔だ》

弾かれた融合した腕ではなく、何もない腕を伸ばし矢を掴んで握りつぶした。

矢に込められていた魔力が、一気に広がっていく。

「あの野郎……やってくれたな」

無理矢理に解放された魔力は、一真を中心に際限なく広がっていく。
残っている緑も、全て吹き飛ばす。
辺りは砂煙で視界は最悪。ほぼ自分しか見えない。
そんな中現れたのは魔力刃と大量の矢。
その二つを見て二人は、あの一真達の居場所を確認出来た。
二種類の魔法を避け、走り始める二人。真っ直ぐ一真とアンナのもとへ。

「っ！」

煙を抜けたが、そこにいるはずの二人がいない。
だが、すぐに見つけた。空だ。
すでに魔法の準備は完了している。

《死天……》

《プファイルレーゲン》

「ホント、初代の頃からの予言通りだなっ！」

「ですね。どうします？　やりますか？」

「当たり前だ！」

魔王は自分の体から、一本のバスタードソードが抜く。
神が持ち出したのは、一本のナイフ。それを逆手に構える。

「行くぞ」

「お願いします」

神を上空にいる二人へ全力投球。
その間に、アンナは矢を全弾発射。それはまるでスコールの様。
その全てをナイフだけで捌いていく。

「ナイスだ」

その真後ろから現れた魔王は、にバスタードソードを腰に構えていた。
狙いはまだ振り下ろされていない、一真の左腕の剣。
おそらくあれが振り下ろされたら、この辺りは軽く吹き飛ぶ。自分たちごと。そんなことをさせるわけにはいかない。
振り下ろされる瞬間刀身を滑り込ませて、

「させるかっ！」

振り上げる。
放たれるはずだった魔力は、その剣の中に留まったまま。
ゆっくりとした動作で、一真の剣は腰に構えられる。

《刀牙》

放たれなかった魔力を利用し、一真自信が出来る最高の居合い抜きを披露。
とっさに足場を作ってバックステップ。切っ先はギリギリを通り抜けた。

「こっちに持ってきたの七割じゃ、全然足りなかったかもな……」

「そうかもしれませんね。でも、今更そんなこと言っても遅いですよ」

「分かって、逃げろっ！」

逃げるよう命じるが、すでに遅い。巨大な刃が、神の眼前に迫っていた。

何とかナイフで受け止めるが、それだけがやっと。動くことができない。

そこを狙ってアンナが動き始める。

《……これならゼロ距離ですわね》

「そうですね……」

わき腹に触れているのは、魔力製の矢の先端。

それを見て、彼女の顔に浮かぶのは苦笑い。

本当にマズい状況である。何をしようとしても、必ずアンナの方が早い。

魔王でさえ間に合わないだろう。

「クソがぁぁっ！」

残酷にも放たれた矢は、あっさりと神の体を貫いた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

ここは太平洋の底に眠る遺跡、ルルイエの神殿の中。

そこにはクロノの体を奪ったネクロノミコンが、たった一人で立

っていた。
共にいるはずの千歳の姿は、彼の傍には存在しない。
《まだ足りないようだな……》
見上げるネクロノミコンの視線の先には、一つの球体が浮かんでいる。
その中には人影。
大きさは小学生と変わらないように見える。
（咎人の魔力でも、使った量の魔力を補うことが出来ないとはな。あの戦闘が、それだけの負担になったのか。ならば……）
もう一度球体を見上げ、笑みを浮かべる。
何かを思いついたらしい。
《駒が必要、だな》
◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆
予想外。
その言葉は、まさに今の状況のことを言うのだろう。
誰もが千那を見たまま、何も言えないでいる。
「婆さん。それ、どういうことだ？」
「千治さんも知らなかったんですか？」
「ああ。今の今まで、俺はそんなの話一度も聞いとらん」

「すまんの、千治。それに千里さんも。これは今日みたいな次期が来るまで、誰にも言いたくはなかったんじゃよ。さてあのオーラじゃがーーーー」

「待て婆さん。何で話を変えるんじゃい。まだ聞いてないことがーーーー」

「聞きたいことは分かる。じゃが、今はまだ何も言えん。わしが《罪人》ということ以外の。だから、話は変えさせてもらう。他も者も、それでよいな？」

千那は返答がないことを肯定とし、再び話し始める。

「で、パラサイトデバイスによって発生する、あのオーラのことじゃったな。試行錯誤して完成はしたんじゃがあれには欠点があって、耐久力が異常なまでに低いんじゃよ。《罪人》や《聖人》のオーラには、到底及ばん」

「なるほど。それを補うために、あそこまで高性能な治療用のナノマシンが必要だった、という訳なのですね」

「さすが神様。正解じゃな」

「なぁ、千那さん。あのナノマシンは、どこまでなら治療可能なんだ？」

ユゥイの問に、予想通りと言わんばかりの早さで、千那は答え始めた。

「頭が無くなったり、生きていくのに必要な臓器がなくなったりしたら、再生はふかのうじゃのう。だが、腕や脚が千切れる程度まで

なら何とかなるわい。不安なら、拓磨を使って実践してもよいが……」

「俺は嫌だからな！」

拓磨だけではなく、見せられる方も拒否したい。

全員の思いが一致した瞬間であった。

「このくらいかの。まだ聞き足りないことがあれば、後々聞くことにさせてもらう。さて、パラサイトデバイスはどうする？　使うか？」

「俺とこいつは、一真にもアンナにもそれが必要だと考えている。特に一真には、現在デバイスがないからな」

「そうか。ならお前さんたちはどうじゃ？」

おそらく千那ははやての、機動六課の返事は分かっている。もちろん《断罪の鎌》の返事もだ。

だが、聞かないわけにはいかない。

「もちろん使わせていただきます。仲間が戦っているのに、私らだけ何も出来ないなんてもう嫌ですから」

「八神さんの言うとおりです。それに……」

ネムが睨みつけるのは魔王。

「分かった。全員、好きなパラサイトデバイスを選び起動せい。あとはわしらがなんとかするわい」

それを聞いて、全員がパラサイトデバイスを手に取り起動。
同時に魔王一家を除いた六課と《断罪の鎌》は、意識を失い倒れた。

「どうしたんじゃ、お前さんたち？」

「やることがあってな」

魔王と神は眠っている鈴蘭に、躊躇なく腕を突き刺した。
こんな猟奇的な光景を見ても、千那は眉一つ動かさない。血が出ていることはないが、本来なら騒いでもおかしくない。

「これだなっと」

二人が鈴蘭の中から取りだしたのは、眠っているみーなとリリンだった。

「んっ……あれ？」

目を覚ましたが、全く状況を掴めていない鈴蘭。

「えっと、お兄……ちゃん？」

「やっぱり記憶がないようですね。どうします？」

「めんどくさいな。説明は後でしっかりしてやるから、質問に答えろ」

「あ、はい」

「お前には、パラサイトデバイスを使う意思はあるか？」

「あります」

「ってことだ。俺達にも、パラサイトデバイスをくれ」

悠一の持ってきたパラサイトデバイスを受け取った三人は、迷うことなくそれを起動。

鈴蘭だけが倒れた。

「ぐっ……」

「想像以上にキツいですね。体を弄られるというのは……」

「無理しないでいいんですよ。２４時間の間は、僕らが何とかしますから」

「なら鈴蘭とこの二騎を、一緒の部屋で寝させてやってくれ。俺達は部屋に戻るから」

そう言って、二人は大広間から出て行った。

「さて、シャーリーだったのう？」

一緒に出て行こうとしたシャーリーは、足を止めることになった。

「何でしょうか？」

「お前さんと残っている六課の者に、ちょっと手伝ってほしいこと

があるんじゃが……よいかの？」

「構いませんけど……」

「なら、こっちじゃ」

ようやく始まる修行。

それがどのような物になるのか、誰にも分からない。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

神無とラスト、いやカエデがいるのは《罪人》達の隠れ家。

「本当に腐ってないんですよね」

「ちゃんと保存してあるから、そこは安心して神無ちゃん」

二人が見つめるのは、一つの水槽。

その中にあるのは、この場にいる神無の体だった。

「問題は、一真の隠し持っている『コキュートス』……」

「ええ。あれがないと、魂は帰ってこないわ」

「『アビス』の方はどうなんですか？」

「それもまだね。一真君だけじゃなく、機動六課とアンナ達が集めた物が足りないもの」

「そうですか」

「だから急ぐ必要があるわ。『ヤツら』が動き始める前に」

《一真の部屋》

一真「……なぁ」

鈴蘭「言わなくてもいいよ、お兄ちゃん」

アリス「あそこまで酷いとは、私も思わなかった」

神無「……ねぇ千歳ちゃん」

千歳「何、神無お姉ちゃん？」

神無「これ、肉じゃがの材料よね？」

千歳「そうだよ」

材料～四人分～
・じゃがいも　４個
・牛肉　２００ｇ
・たまねぎ　一個
・しょうゆ　大さじ４
・砂糖　大さじ３
・食塩　小さじ１
・硫酸　４５ｃｃ
・硝酸カリウム　適量
・クロロ酢酸　お好み

一真「何で硫酸が必要なんだ？」

千歳「じゃがいものでんぷんが加水分解を起こして、単糖類になって甘味が増すからだよ」

鈴蘭「この硝酸カリウムは？」

千歳「防腐剤に入ってるから、美味しさ長持ちだよ♪」

アリス「じゃあこのクロロ酢酸は？」

千歳「隠し味だよ。でも酸っぱいのが苦手なら、冷やしたらいいよ。結晶化して、簡単に取り除けるから♪」

アリス「それ、酸っぱいの残ったままだよね！？」

一真「そんなことより、あの肉じゃが。多分、とんでもないものが出来上がるぞ……」

鈴蘭「それってどういうーーーー」

神無「これよ」

？食塩＋クロロ酢酸→クロロ酢酸ナトリウム＋塩酸

？硝酸カリウム＋硫酸→硝酸＋硫酸水素カリウム

？塩酸＋硫酸→王水

一真「やっぱりか……」

鈴蘭「？」

アリス「どういうことなの？」

一真「この王水ってのはな、簡単に説明すると普通の酸じゃ溶けない金や白金を溶かすんだよ。人間にとっちゃ、劇薬だ。つまり」

ア・鈴「「私達、死ぬ！」」

神無「大丈夫よ。作り終えるまでに、お返事コーナーを終わらせば！」

一真「そうだな。つーわけで返信コーナーだっ！」

千歳「みんなの舌がとろけるようなの作るよ～♪」

一・神・ア・鈴

（（（（骨髄まで溶ける！！！！！））））

鴨川秘さんへ

一真「パフェはありがてぇんだがな……」

アリス「あれには対抗できないよね……」

鈴蘭「お姉ちゃん。アンナさんたちって、何秒じゃ終わらないよね？」

神無「灰央（カイエ）の強さにもよるかもしれないわ。というか、人生が終わ

るのね……私達には、一生が終わる危機が迫ってるんだけど」

一真「ヤバいな。どんな会話でも、あいつの料理に繋がる」

鈴蘭「クロノさんのように、私達もあの料理でーーーー」

一・神・ア「「「言うなぁっ！」」」

千歳「出来たぁっ！」

一真「次回予告だ！　あいつが盛りつける前に終わらせろ！」

次回予告

アリス「手に入れたのは、じゃじゃ馬と呼ぶに相応しい力。それに誰もが苦戦する」

鈴蘭「だけど誰も諦めない。大切な仲間を取り戻すため、その力が必要なのだから」

一真「そして俺と女は……」

神無「次回、魔法少女リリカルなのは～七つの大罪～」

一・神・ア・鈴

「「「「【修業初日】」」」」

千歳「みんな、盛り付け終わったよ……って、何で逃げようとしてるのかなぁ？」

一・神・ア・鈴
「「「「ギクッ！」」」」

千歳「逃げるならこの王す……肉じゃがかけるけど、いい？」

一真「ちょっと待てよ！　お前、今王水って言いかけたよな!?　つか、確信犯か！」

千歳「知らないよ。そんなことよりも、絶対に食べてね♪　つか、絶対食べろよ……えっと、ここでお知らせです。お返事コーナーは終了です。でも、ちゃんと返信するから安心してくださいね♪」

一真「あれ？　意外といけゴフォォォッ!!!!!!!!!」

神・ア・鈴「「「一真ぁっ（お兄ちゃんっ）！！！」」」

千歳「それじゃ次回へ、スタンバイレディ！」

『犯人はにくじ』

倒れている一真の傍には、血でそう書かれていた。

修業初日

午前４時。
みーなとリリンは目を覚ました。
すぐ隣では、鈴蘭がパラサイトデバイスの影響でうなさるている。
が、二人はそれを知らない。
「鈴蘭っ！」

「かなり体温が高いなの……」

「くっ……わしが強制的にユニゾンしてーーーー」

「その必要はないですよ、みーな」

部屋の入り口には神が立っていた。
だが彼女もパラサイトデバイスで、高熱と体中の痛みでボロボロなのは間違いない。

「先代の神、か……どういうことじゃ？」

「その子はパラサイトデバイスを起動させました」

「そういうことか。お前さんは大丈夫なのか？　その様子だと、パラサイトデバイスを起動させたのじゃろう？」

「はい。ですから、本当はキツいんですよ。でも、あの人の頼みですから断りづらくて」

「本当に、お前さんは……この世界に生まれんで正解だったのう」

「そうかもしれませんね」
「まぁよいよ。じゃあ、行くとするかのう」
「……なの」

一人と二騎がやって来たのは一真、もとい魔王の部屋。
「やっと来たか」
部屋にいた魔王の手には酒の瓶が。名前は『魔王』。
「まぁ、座れ」
「その酒、どうしたんですか？」
「ばあさんに貰ったんだよ。飲むか？」
「私は結構です」
神に同調し、リリンも飲まないと首を横に振る。
魔王は初めから分かっていたようで、みーなに目配せする。
「もちろん貰う」
「わかった」

「それよりも話って何なの？」

「娘のことだ。俺達が死んでから……何年だ？」

「約千年じゃな」

「正確には９８６年なの」

「そうそう。その間、あいつのことを見ていてくれて助かった。つか、俺達が死んだ後もしばらくあっちにいたんだろ？　よく成長したな。普通なら、ここまで成長するのにあと数百年はかかるだろ」

「わしらが人界に適応させたんじゃよ。まぁ寿命は変わらんから、いつかは止めるが……それについてはお前さん達に頼まれたとは言え、わしらも望んでやったこと。礼を言われることはないよ」

「そうか……」

「そんなことよりも、問題は別の所なの。ガブリエルのことはどうなってるなの？」

リリンの問いに二人は黙り込んだ。つまり、二人は何も情報を持っていないということになる。

「まぁ、そうじゃろうな。魔王は一真の、神はあの娘の体の中にいたんじゃ。何を知っているわけでもなかろう」

「それはお前らも、だろ？」

「そうじゃな。一つ聞くが、ネクロノミコンが来るまでに二人は間

に合うのか？」

「あいつらにも言ってあるが、ギリギリ間に合わない可能性がある。そうなった時は、ユニゾンはするな。戦力として鈴蘭と、あいつらと戦え」

「私からもよろしくお願いします。これは神としてではなく、あの子の母としてのお願いです」

「はぁ……分かったよ。リリンもよいな？」

「……（コク）」

杯の酒を飲み干すと、みーなは立ち上がった。いや、正確には浮き上がったという方が正しい。

「もう戻るのか？」

「鈴蘭が心配じゃからの。それに、久々に主ら二人の時間もほしいじゃろ？」

「なっ……」

「何を言ってるんですか、みーな！」

「じゃあの」

「またなの、近親相姦兄妹」

それだけ言い、呆気にとられたままの二人を残し、みーなとリリ

ンは出て行った。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「あやつらの状態はどうなんじゃ？」

「今がピークですね。このまま行けば、午後４時頃から始めることが出来そうです」

「そうか……それくらいならば、あれも完成するだろう。のう？」

現れたモニターに映ったのは、別の場所で作業を続けているシャーリー。

何かを操作していたが、モニターに気がついたようで慌てて、

「あ、すみません。何でしょうか？」

「あれはいつ完成するかのう？　出来れば午後までに頼みたいんじゃが……」

「今のままですと、ちょっと間に合わないかもしれません」

「ちょっと……どれくらいじゃ？」

「よくて１時間。悪くて２時間、と言ったところでしょうか？」

「それは４時までに終わりそうですか？」

「４時ですか。それならぜんぜん大丈夫ですよ。その時間ならもう完成しているはずですし。まぁ、千那さんが来てくれたらもっと早

く終わるんですが……」

「そうか。ならあやつらのことは頼むぞ、悠一」

「分かりました」

そして午後４時半。

倒れていた六課と《断罪の鎌》のメンバーが目を覚まし、訓練場に集まっていた。

そこにはもちろん拓磨達もいる。

『……』

しかし、誰も言葉を失い立ち尽くしている。

原因は目の前の７つのモニターと転移用魔法陣。

モニターにはジャングルだったり、どこかの草原だったりとさまざまな光景が映っている。

「さてお前さん達に集まってもらったのは、これから修業をはじめるためなんじゃが……これの説明が必要か？」

当たり前だと、全員が目を向ける。

「これはのわしと、シャーリーを含む数人の六課の者で作った、修業の場じゃよ。で、今から言うとおりにしてくれ。よいのように？」

これについては全員が頷く。

「転移ポートに番号が振ってあるのは見えるな。まず1番ポートに悠一、2番ポートに桂……」

この後も彼らだけに指示していく。

3番ポート：渡辺俊哉。

4番ポート：山村拓磨、坂本葵。

5番ポート：田所芽衣。

6番ポート：小林桃華。

と、上記のようにポートに入りモニターの先に転移していった。

「次にお前さん達じゃな。最初に言っておくが、先に入ったあやつらを師として修業するように」

それについては全員が初めから分かっていたこと。

誰もが黙ったままだが、肯定の意思としてそうしていた。

「まずフェイトにエリオ」

「「はい！」」

「お前さん達は3番ポートで、俊哉の元に言ってもらう。次に神様にティアナにゼロは、桂のいる2番ポートじゃ」

残りのメンバーも以下の通りとなった。

1番ポート：魔王、シグナム、ネム・ユース、風切忍

4番ポート：山村拓磨組／ヴィータ、スバル・ナカジマ、神童鈴蘭、リーズ・ファウルス、坂本葵組／桜ノ宮アリス、キャロ・ル・ルシエ、シャマル

5番ポート：高町なのは、ユゥイ・ラズ・ホローライト

6番ポート：八神はやて、リオル・サイファー　この組み合わせ

の通りに、全員がポートへと消えていった。

「さて……」

現れた通信用の画面。

その先にはポートの先に繋がっている。

「聞こえておるな？　ちなみに返事は必要ないぞ。全員の声を聞き分けるのは、ちと面倒じゃからな。じゃから、今から言うことは黙って聞いておいてくれ。今から戦いが始まるまでの４日間、そこで修業してもらう」

それを聞いた全員が、モニターの向こう側で何かを言っているが、千那には全く聞こえてこない。

それもそのはず。

あちらの声を彼女が全て、完璧にシャットアウトしているのだから。

「じゃから、しばらくそっちで頑張るとよい」

そこで千那は通信を切った。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

第一ポート転送先。

そこはジャングルの中。

「本当に困ったものです」

「本当に困ってんのかよ、お前は？」

「はい。千那様はいつもあんな感じで、こちらのことは無視ですから」
「そうかよ。あーお前ら、特にスバルとシグナムと男女」
その名前で呼ばれ不機嫌な顔をするリーズだったが、魔王は気にもとめない。
「俺に対して、無理にかしこまって話しかける必要はないんだからな。一真に話しかける時と一緒でいいぞ。つか、そうしろ」
神童（一真さん）と一緒だ……。
二人とも初めて会った時のことを思い出していた。
「つーわけで、さっさと始めてくれ」
「分かりました。では、パラサイトデバイスを起動してください」
悠一に言われ、４人がパラサイトデバイスを起動。
その直後魔王以外の全員が顔を歪めた。
「パラサイトデバイスは起動させただけでも、魔力を使い続けます。理由はナノマシンを作り出すのに、使用者自身の魔力を使っているからなんです。ですから、パラサイトデバイスはいつもの倍魔力を使うと考えてください。それと、まずリーズさん」
「な、何だ？」
「あなたはこの修行中、初めから持っているデバイスも起動していてください。二つのデバイスを使う、ということに慣れて欲しいん

です」

「……分かった」

「それとシグナムさんを除いたお三方には、《罪》または《美徳》を発動してください。理由は、発動した後に説明します」

これも言われたようにスバルは《罪》を、リーズは《美徳》を解放させる。

だが、魔王に関しては何もしていない。

それが気になり、全員の視線が集中するが、

「俺は常に《罪》を解放してるようなもんだから、あまり気にすんな。つか、お前が《罪》を発動しろなんて言ったのは、こういうことか」

シグナムには理解できていないが、更に顔を歪める二人には分かっていた。

「これ、さっきよりも負荷が……強いんです」

「どういうことだ？」

「これは千那様から聞いたことなんですが、パラサイトデバイスは《罪》と《美徳》、特に《罪》の魔力を異物と感じ拒絶するようなんです。ですから、パラサイトデバイスが異物と関知しないよう、修業中はずっと解放状態を維持していてください。と、ここまでで質問はありますか？　なければ、さっそく始めたいと思いますが……」

誰からも声は上がらない。

「では始めます。まず、パラサイトデバイスを使用して、魔力の制御をしてもらいます。リーズさんは、二つのデバイスでお願いします」

「で、具体的に何をするんだ？　まさか、模擬戦じゃないだろうな？」

「その通りです。それが一番速く上達する方法ですから。それにもうパラサイトデバイスの使い方は、頭の中にあるはずです」

「あ、ああ」

なぜそのようになっているのか。理由は簡単。

パラサイトデバイスが体を弄っているときに、頭の中に書いておいたのだ。

自分の使用者に、使い方も分からずに死なれては困るからだ。

「では、始めです」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

矢に貫かれ倒れる神。

その瞬間、一真の動きが完全に停止した。

なぜ止まったのか？

それは誰にも分からない。

《あ……姉、さん》

一真が呟いた、たった一言。
それだけで、一真の動きが止まった理由に、彼は気が付くことが出来た。

《あ……あぁっ！》

暴走状態では蘇った過去の記憶で、大きく感情が揺さぶられる。
一真の場合一番揺さぶられるの《憤怒》、つまり怒りという感情だ。
だからといって、他の感情は揺さぶられないわけではない。
それと今の状況と、一体何の関係があるのか？
殺されていた神無の姿というのは、彼にとっては忘れることの出来ない記憶。
倒れた神の姿が、殺されていた神無と重なったのだ。

「そうだ！　お前が力を制御しないと、次は千歳やアリスを殺すことになるんだ！　それもお前の手でな！」

《ち……とせ……千歳！》

一真の前後左右、そして足元と頭上に六芒星の魔法陣が出現。
一気に光を放ち始める
そして一真の体のちょうど真ん中あたり。そこに七つ目の、最後の魔法陣が展開。
一真の周りに展開した魔法陣には、いつもとは違う点があった。
それは魔法陣の中心にそれぞれ、人読めない文字で一単語ずつ書かれていると言うこと。
何と書いてあるか。
前に『マモン』。
後ろに『レヴィアタン』。

左に『ベヘモス』。
右に『ベルフェゴール』。
頭上に『ベリアル』。
足元に『アスモデウス』。
そして最後の魔法陣には『サタン』。
これは《罪》を司る悪魔の名で、上から順に《強欲》、《嫉妬》、《大食》、《怠惰》、《傲慢》、《色欲》、《憤怒》である。

「始まったか……」

一真自身の魔力光である灰色と、魔法陣から溢れる漆黒の魔力光。
拮抗していたが、灰色の光が強さを増していく。
増していく光は、完全に漆黒の光を飲み込んでしまった。

《ーーーーーーーーーーーーっ！》

声にならない叫び、とは正にこのこと。
全員の視線が一真に集まる。
この光景に恐怖を感じたのだろう。アンナは、一真へと向かっていた。
完全に反応が遅れた魔王は、今から動いても間に合わない。

「行かせません！」

神の方がアンナには近いが、今の体では動きが緩慢で遅すぎる。
アンナはすでに矢を放っていた。
神速で向かう矢が、光の固まりまで数センチ、というところで腕が生えた。
その腕は矢を掴んで消滅させた。

「ふぅっ……」

「遅すぎだ、一真」

「うるせぇよ。で、これは貰っていいのか？」

これとは一真の体内に入り、つい先ほどまで腕と同化していた漆黒の刀剣。

一真はそれを肩に担いでいる。

「ああ。元々、お前に渡す物だったからな。名前はないから、好きに付けていいぞ」

「そうか。まぁ、いい。んなことよりも、あいつは俺にやらせろ。文句は聞かねぇからな」

「……分かりました。お願いします、一真君」

返事は返さない。

ゆっくり歩いていく一真の姿は、一瞬だけ魔法陣を展開し消えた。

高速移動ではなく、転移したのだ。

次に現れたとき響いたのは、金属と金属がぶつかる高い音。

「思い出したぞ、テメェのこと……」

その言葉だけを残して一真の姿はまた消えた。

今度は高速移動。

しかし、アンナもそれに反応した。

《今更……遅いですわ！　神童一真ぁ！》

一真の前に現れたのは大量の矢によって形成された、巨大な壁。

「邪魔だ」

相手は暴走中のアンナ。魔力は凄まじいが、今の一真には関係のないこと。

一真が振り抜いた漆黒の刀剣は、魔法を放つわけでもなく魔力を放出。

矢を全て消し去った。

「……さて、こいつの名前どうすっかな」

アンナは無視して考えるのは、魔王から与えられた名も無き剣の名前。

このような時に考えるものではないのだが、一真だから仕方がない。

「ちっ」

突然バックステップで、その場から離れる一真。

直後、さっきまで一真のいた場所に巨大な矢が。それは突如現れて、そこに刺さったのだ。

(転移との組み合わせか……一番厄介だな)

現れては突き刺さっていく矢の数々。

一真はそれを全て、予知しているかのように避けていく。

正しくは予知ではない。

転移魔法の魔力を感じて避けているのだ。

「面倒だな。紅之太刀壱式……」

刀身から溢れる魔力は、過去の一真では有り得ない質量をしている。

「煉刃！」

真っ直ぐアンナへと向かう魔力で構成されている、巨大すぎる刃。
アンナも対抗し、矢を連写。
しかし、その全てがかき消され刃は止まることなく、アンナへと突き進んでいく。

《くっ！》

ギリギリで跳び上がって、刃を避けた。が、そこには二つ目の刃が。

「甘いんだよ、女！」

刃は確実にアンナに当たる。誰もがそう思っていただろう。
だが結果は違った。
彼女の背中にある翼が、大きく羽ばたいた。

「っ！？」

巻き起こる風と魔力の突風。
それはいとも簡単に、魔力の刃を消滅させてしまった。

「……」

《……》

「本当に面倒な女だ……あの時から、人につっかかるのは誰よりも上手いんだよな、テメェはよ」

思い出すように一真は言葉を紡いでいく。

「テメェが俺に望んでるのは、俺との一対一の全力での勝負。んなことは、分かってる。それくらい千歳を取り戻して、この全てのことを引き起こした野郎を潰してから、好きなだけ付き合ってやる。だからな……」

刀剣を腰に構え、右足を前にして低く構える。

「さっさと力を制御するか、俺に倒されるかして大人しくしやがれっ！」

同時に動き出す一真とアンナ。

それが第二ラウンドの始まりであった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

3番ポート。

そこには何もない草原。

フェイトやエリオ、俊也の姿はない。

正確には目に捉えることが出来ないのだ。

模擬戦開始直後、3人は光速の世界に入った。それ以来、こちらに戻ってきていない。

「反応が遅れてきてるぞ」

エリオの突き出された槍に対する反応が、ほんの一瞬だけ遅れた。
それがいけなかった。
避けることも、防ぐことも確実に間に合わない。
そこに割って入ってきたのは、俊也の背後に回っていたフェイト。
その手には《罪》の魔力で作り上げた、バルディッシュ。

「はぁっ！」

逆袈裟に釜を大きく振り上げる。

「大丈夫、エリオ！？」

「はいっ！」

「話している隙はあるのかな、お姉様に坊やっ！」

槍を大きく振りかぶって、二人へと向け全力で投擲。
その速さは、三人の移動速度と同じ光速。

（あれ、試してみるかな）

そう呟くとフェイトは、バルディッシュを魔力に戻す。次の瞬間
彼女の掌が、左右別々の色に光り始める。
右の掌は金色に、左の掌は漆黒に。
それを一つにする。
すると、フェイトの体は濁った金色に包まれた。
それが完成した頃には、槍の切っ先は目の前に。
フェイトはその槍を掴み、

「ふんっ！」

自らの雷を上乗せし、全力で投げ返した。

直後フェイトはエリオとアイコンタクトを交わし、その場から消える。

「マジっ！？」

避ける物だと思っていたが、投げ返された俊也は完全に反応が遅れた。

が、反応が出来ないわけではない。

しかし動くことが出来ない。

気づけば後ろでエリオが、俊也の動きを肩をつかんで止めていた。

「トライデント……」

声の聞こえてきた方では、フェイトが砲撃の準備を完了させていた。

「スマッシャー！」

三叉の砲撃は俊也へと向かう。

このままだと、エリオまで巻き込んでしまう。俊也もそう思考が働いたが、大事なことに気が付いた。

砲撃は光速ではないということに。

「っのぉーーーー」

エリオは直撃前に離脱。

砲撃に飲み込まれたのは、動くことのできなかった俊也のみ。

「大丈夫、エリオ？」

「はい。それよりも、フェイトさん。それは……」

エリオが指さしたのは、フェイトを包む濁った金色のオーラ。

「これは、私自身の魔力を常に《罪》の魔力と融合させてるんだ」

これは彼女があの戦いから、ここ出雲に来るまでの間に自ら作り出した技法。

多少基本能力が上昇する。

「だから少しは、出力が上昇しているはずなんだけど……」

すでに回復し、迫ってきている俊也の姿が見えた。

彼の体には傷一つ見あたらない。この十数秒で回復したということになる。

フェイトとエリオの二人も、再び光速の世界へ。

これで何度目か分からない、光速対光速が始まる。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

五番ポート。

ここでは芽衣が二対一で、なのは達二人の砲撃を受けきっていた。

エース級の砲撃を受けても、芽衣は無表情のまま。

むしろ顔を歪めているのはなのはとユゥイの方。

「くっ……」

「キツっ」

二方向からの砲撃を一つの砲撃が受け止めているという光景が、始まってからずっと続いている。

「高町なのは。あなたはもう少し魔力量を増やした方がいい。それとも、それがあなたの全力？　それなら仕方がないけれど……」

芽衣は気が付いていた。なのはが全力ではないことに。

なのははすぐに体中に魔力を巡らせ、掌にさらに魔力を集めていく。

直後、なのはの放つそれに変化が起きた。

「っ！？」

一回り、いや二回り太くなるなのはの砲撃。

片手で対応していた芽衣だったが、両手に変えた。

「やっぱり、まだ耐えられるか」

始まる前から予想できていた結果を、彼女は淡々と述べる。

「あなた達に聞きたいことがある。あなた達は、パラサイトデバイスの名前を、デバイスから聞いた？」

「デバイスから？」

「どういうことだ？」

今の言葉を聞いた限り、二人はパラサイトデバイスの名前を聞いていないということになる。

「やっぱり。でも何で……？」

芽衣の予想では、すでに名前を聞いているものだと思っていた。

が、それは間違いだった。

そしてこの予想通りならば、この修業は厳しいものとなる。

「まさか、始めから分かってて……あの性悪ババア」

修業初日。終了まで残り、５時間３０分。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

《一真の部屋》

鈴蘭「今ここでは罰ゲー……いえ、ご褒美付きルール無用のデュエルが行われています。

一真・ＬＰ２６００。

隆浩・ＬＰ３０００。

ちなみに今回のゲストは『なのはＳＳ・ｆｒｅｅｄｏｍ』より阿部兄弟です」

隆浩「おいらのターン！　ドロー！　これで終わりだ、ナマケモノ！　『心変わり』を発動。お前のホーリーエルフを貰う。そしてブラッドヴォルスと、お前のホーリーエルフを生け贄にして、三体目のブルーアイズを召喚！」

一真「……」

アリス「うわぁ……あれ、どこの社長？」

鈴蘭「お兄ちゃん……」

神無「これ、ひっくり返すこと出来るの？」

晶彦「かなり難しいかな。一真兄ちゃんの伏せてるカードが、使えるものならいいけど」

隆浩「いくぜ、『滅びのーーーー』」

一真「……『破壊輪』と『地獄の扉越し銃』を発動。お前に６００のダメージだ。つーわけで、俺の勝ちだな。つか、少しは警戒しろバカが」

ア・隆・晶

「「「『破壊輪』、禁止カードぉ！」」」

一真「知るか。ルール無用って言ったのは、お前だろうが。さて、千歳！　お前の肉じゃが、隆浩が食ってくれるそうだ。一滴も残さずにな」

千歳「そうなの！？　じゃあ、はいっ♪」

晶彦「気のせいかな？　あの丼から、毒々しい物が流れているように見えるんだけど」

鈴蘭「あれの出汁って、王水なんだよ。」

一真「食って、臨死体験ですんだらいいだろ。ちなみに、俺達は食

ったから」

隆浩「ち、千歳様。おいら、来る前にーーーー」

千歳「四の五の言ってないで、さっさと食べようか。じゃないと、男として終わらせるよ？」

隆浩「く、くっそぉぉぉおおぉ！」

神無「ちゃんと葬式はするわ」

晶彦「兄ちゃんのことは、二分後まで忘れないよ」

アリス「けっこう薄情なんだね」

晶彦「兄ちゃんが死んだら、次回から僕が主人公！」

鈴蘭「な、なるほど」

一真「俺もそれに大賛成だ。さて、アリス。私立聖祥学園高校の女子用の制服、持ってこい」

アリス「いいけど、着るの？」

一真「俺じゃなく、この死にかけてる狐がな。そして狸に送りつける！　そして社会的に抹殺してやる！　晶彦、千歳。着替えと撮影は頼んだ。送るのは俺がやっておく」

千・晶「「了解♪」」

神無「あんたねぇ……まぁ、私も隆浩の女装には興味があるから、止める気はないけども」

アリス「私としては女装した一真がーーーー」

一真「テメェ、余計なことを」

千歳「遅いよ、一真♪」

一真「ノォォォオォオォォ！」

千歳「安心して。一真は巫女服だから♪」

一真「一体何を安心しろと!?」

千歳「ウルサいなぁ……えいっ」

プスッ

鈴蘭「今の、睡眠薬？」

アリス「そうだったらいいよね」

鈴蘭「違うんですか!?」

神無「千歳ちゃんって、たまに変な薬を持ってるから」

晶彦「一真兄ちゃん、ご愁傷様。それでどうしようか？　このまま兄ちゃんを連れて帰っても……」

千歳「ダメだよ！　一真も隆浩君も、私が遊ぶんだから！　だからＴＯＵＤＡさん！　晶彦君も含めて、次回まで借りるから！」

アリス「また勝手に……晶彦はいいの？」

晶彦「僕は大丈夫……だと思うよ。それよりも時間の方は、大丈夫なの」

神無「そうね。じゃあ次回予告、始めましょうか」

『次回予告』

アリス「休みなしで続けられた初日が終わり、二日目へ」

鈴蘭「そこで発覚する、パラサイトデバイスの秘密」

神無「そのころ、カエデさんと共にいる私は……」

晶彦「次回、魔法少女リリカルなのは～七つの大罪～」

神・ア・鈴・晶

「「「「【初日の終わりと二日目の始まり】」」」」

神無「次回へ！」

神・ア・鈴・晶

「「「「スタンバイレディ！」」」」

初日の終わりと二日目の始まり（前書き）

かなり遅くなってしまってすみません。
間違って削除してしまうことが、あの後にもう一度起きてしまったもので。
それでは『七つの大罪』、始まります。

初日の終わりと二日目の始まり

「「失礼します」」

「こんな時間に、二人そろってどうしたんじゃ？」

ここは千那の部屋。

初日の修行が先ほど終わり、田中芽衣と小林桃華の二人はそこを訪れていた。

気がついたあることを彼女に伝えるために。

「話があって来た」

「話？　何じゃ？」

「名前のことです。なぜ、皆さんはデバイスの名前を知らなかったのです？」

そう。

今日の修業で彼女達は、そのことに気がついた。

「そのことか」

ここに来るまではもしかしたら、と思っていたが今の言葉を聞いて、二人は確信した。

なのは達がデバイスの名前を知らないと言うことを、千那が知っていたということを。

「やっぱり知ってたんだ」

「ああ」

しかしそれは、とある疑問を作り出した。自分達の時と、大きな違いがあるからだ。

「ならどうして、私達の時は全員が知っていたの？」

「お前さん達の場合は、本当にたまたまじゃよ。運が良かった。ただそれだけのこと。それに皆がデバイス名を知らぬのは、当たり前こと。自らの力を１００％引き出してくれる者にしか、パラサイトデバイスは名前を教えぬ。デバイスと言ってもＡＩじゃが、ちゃんと意志はある。誰が自分の力を使いこなしてくれるのかくらい、自ら判断することは出来るじゃろ」

「だからと言って、名前ことを誰にも教えないつもり？」

「どういうことじゃ？」

「いきなり名前を聞かされ、戸惑う方が現れないと言い切れませんよね。そうなれば力の使い方を見誤い、暴走という結果になってしまう可能性があります。その用など可能性があるとしても、伝えないつもりなのですか？」

「そうじゃのう……」

千那として伝えるつもりはなかった。なぜなら、修業の目的が変わってしまうから。

今の目的はパラサイトデバイスを使いこなし、ネクロノミコンに負けないようにするというもの。だが、教えてしまえば名前を知る

と言うことが、この修業の目的になってしまうかもしれない。
だから言わないようにしていたのだが。

「お前さん達の言うことも一理あるからのう……分かった。明日の朝、皆を集めい。わしから話す」

千那としても暴走というリスクは避けたい。
特に魔王と神。
彼らは自らの体の代わりに一真とアンナの体を使っている。二人の魂が帰ってくるまでに傷を負わせるのは得策ではない。
だから言うこと決めたのだ。

「分かったな？」

「ん」

「はい」

「ならば部屋に戻るとよい。お前さん達も疲れたろう？」

「分かりました。芽衣さん」

「うん」

「「失礼します」」

二人が出て行くとすぐに瞼を閉じ、『アカシックレコード』を発動。
あることを確認するためだ。

「やはり変わらない、か」

その表情は落胆。

千那が見たのは、ネクロノミコンと戦う未来よりもさらに未来。

「なぜじゃ……何故、未来が変わらぬ」

そこに待っているのはハッピーエンドではなく、究極とも言えるバッドエンド。

「くっ……」

幾度となくこの未来を変えるため、様々なことを試行錯誤してきた。

しかし結果はやはり変わらない。

そしてタイムリミットまであと少し。

「どうしたら……何をしたら皆を救うことが出来る!?」

その問いの返事はなく、静寂の中に消えていった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

次の日の朝。六課メンバーと《断罪の鎌（エクスキューショナー）》のメンバーは、大広間に集められていた。

彼らは誰も理由は聞かされていない。

「千那さん。修業はええんですか？」

「それの前に話すことが出来たから……いや、パラサイトデバイス

について話していないことがあっての、それを話すために集まってもらったんじゃよ」

本当に話したくないのだろう。渋々といった感じで口を開いた。

「まず最初に、自分のパラサイトデバイスの名が言える者は何人いる？　挙手でよいよ」

そう聞かれ手を挙げたのははやてにスバル、ユゥイの三人。

昨日の夜未来を見た千那にとっては予想通り。

「もう下ろしてよい。さてこの名前じゃが、知っている者と知らぬ者では大きな違いがある。それはパラサイトデバイスを１００％使いこなせているかどうかじゃ」

「どういうことだ……なんです？　あたしらは仕えてねぇってことですか？」

「無理せずともいつも通りの話し方で構わぬ。で、パラサイトデバイスのことじゃがヴィータの言う通りじゃな。名前は使い手が自分自身を１００％使いこなせる、と判断した時点でお前さん達に伝える。じゃからあの三人は、そう判断され名前を聞くことができたんじゃよ」

「なぁ、婆さん。その名前ってのは、この先修業をしていく過程で聞くことは出来るのか？」

「もちろんじゃ。じゃが名前を知ることの出来るのは、お前さんと神様を除いた者だけじゃがな」

「何でーーーっ！」

理由を聞き出そうとした魔王だったが、すぐに理由に勘付いた。
二人の体は元は一真とアンナの物。自分の体でないぶん使い勝手が悪いのだ。
そんな状況でパラサイトデバイスを使いこなせるわけがない。
千那は未来を見ていたからそれを知っていたし、二人も修業中に違和感を感じていた。

「というわけじゃ。一応分かりやすいよう説明したつもりじゃが、何か質問があるか？」

「質問はないが、話はこれだけか？　私は他にも話してないことが、聞いておかなければならないことがある気がするのだが……」

「フム……」

シグナムにそう言われ考え始める。つまり言っていないことがまだあるのだ。

「一応はある。じゃが今は言っても意味がない。が、必ず言う。それは約束しよう」

千那のその言葉に嘘は感じることが出来なかった。
感じていれば誰かが反論していただろう。

「他はいないかの？」

二度目は無し。

「ならこれから二日目の修業の開始じゃ。もう拓磨達はもうあっちに行っておるからの」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

４番ポートでは、壮絶な殴り合いが行われていた。

「うぉぉぉ！」

「はぁぁ！」

ぶつかり合うスバルと鈴蘭。昨日も同じように殴り合いをしていた。

二人から離れた場所では、拓磨がヴィータとリーズの相手をしている。

「やっぱり素手ってのはやりにくいな」

「そういえば君は今デバイスがないのだったな」

「ああ。あたしの相棒はアイゼンだったからな」

「……なぁ、チビッコ」

間違いなく失言。

拓磨が「コ」を言うと同時に、ヴィータは動いていた。

「死ねっ！」

「ぬぉっ！」

ギリギリで防いだからよかったが、今の一撃は確実に人体の急所を狙っていた。
それも男にしかないあれを。当たれば……ある意味ヤバいことになっていたのは間違いない。

「誰がチビだ！」

「いや……すまん」

本能的に男としての危機だと感じた拓磨であった。

「……まぁいい。で、何の用だよ？」

「千那の婆さんから、これを渡すよう言われてたんだ。だけぇ、ほら」

そう言って投げて渡された物を見て、ヴィータの額には巨大な青筋が出現。

「なるほど。そういうことか……これでテメエの急所ぶっ潰せばいいわけだな？」

投げ渡された物。それは金鎚。

「ちょっ、待て！　ばっ、それはーーーー」

「何か意味があるのではないか？」

「どういうことだよ？」

「確かヴィータのデバイスはハンマーの形をしていたな」

「ああ」

「君の使っていたデバイスと同じような形の物を使えば、何かあるかもしれない。一つ聞くが、千那さんからこれについて説明は？」

「ただのハンマーってだけで、特に何も聞いてないぞ」

「そうか」

「……あたしはバカにされてるようにしか思えないんだけどよ」

渡されたハンマーを見ながら、そう呟くヴィータだった。

「思ったんだが、ヴィータ以外のみんなにも何か渡されている物はあるのか？」

「そりゃな。あの青髪やあいつの妹にもあったけど」

「さっさと始めちまったもんな」

「だから渡すタイミングをなくしたんだ。ま、昼休みにでも渡すさ。じゃ、俺たちも始めようぜ」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「最後に残った候補がここです」

「一真君もすごい所に隠すわね……ある意味で感心するわ」

「ホントめんどくさい性格してるよね、ラースって」

「ねぇ、プライドぉ。ここに食べ物あるかなぁ？　見た感じ何もないけどぉ」

「……グラトニーなら何でも食べられるんじゃないですか？　その辺にある枯れ木とか」

ここは数年ほど前に見つかった新たな次元世界。名前は無く一度だけ来たことのあるラストはこう呼んでいる。『黄泉比良坂（ヨモツヒラサカ）』と。

その名の通り、この光景はこの世の物とは思えない。

異常なまでに高密度の魔力が空気中を漂い、植物は枯れ動物は突然変異を起こしている。

「まだここに隠していると決まったわけじゃないんですけど、何となくここなんじゃないかと……」

「その感覚はあながち間違ってないんじゃないのか？　一応、あんたは自分の魂と繋がっているんだろう」

「確かにそうだった」

「神無お姉ちゃん。前にラースと来たのはいつなのぉ？」

「二、三年前だったと思うわ。でもここに着くと同時にスリープモードにされたから、一真が『コキュートス』をどこに隠したのかまでは……」

「かなりの念の入りようですね。そのロストロギアは、こうまでし

て隠すような物なんですか？」

プライドの言葉を聞く限り、彼は『コキュートス』のことを知らないと言うことが分かる。

「『コキュートス』はね……神無ちゃんの魂そのものなの」

「どういうことです？」

「一応あなたも知っているわよね？　神無ちゃんは死んだ。今ここにある神無ちゃんという存在は魂だけ、ということは？」

「ええ。それは知ってますが……」

「それは全部嘘なの。性格には死んでいない。それにここにいる神無ちゃんはサタンに上書きした神無ちゃんの意識。つまり、ここに神童神無という存在はいないわ」

今の説明だけで分かれというのが無理な話だろう。

全てを省いて結論だけ言われても分かるわけがないのだ。

「カエデさん。ちゃんと説明しないと、誰も分かりませんよ？」

「そうね……神無ちゃんの体は仮死状態で私達の隠れ家にあるわ。そして魂は『コキュートス』というロストロギアの中にあるの。一真君に神無ちゃんを死んだと思わせるために」

「《憤怒》の《罪人》にするため、ですか？」

「ええ。でも私達の目的はそこじゃないわ。一真君を魔王として覚

醒させ、《罪人》という連鎖を止めること。これは初代の《罪人》達から続く、最大の目的よ」

「……」

「そして今回神無ちゃんの魂を戻すのは、二つ理由があるの。一つはもう死んだと思わせる必要がないから。そしてもう一つは、これ以上体から魂を離しておくのは悪影響でしかないから。だから、『コキュートス』を探してここまで来たわけなの」

「……そうですか」

何故だが分からない。だが、誰にも分かるような不満なそうな顔が。

しかしここにいる誰にもプライドが何を不満に思っているのか分からない。彼以外。

だから気にも止めなかった。

「それで神無お姉ちゃん。感覚でいいんだけど、どっちにありそう？」

「そうね……こっち、かしら？」

神無が指さした方角。そちらは何もなく、広いだけの荒野がずっと広がっている。

このまま進んで何か目印があればいいが、地中に埋まっていたりしたらとんでもないことになる。

そう思った神無であったが、やる気がなくなりそうで考えるのを止めた。

「これで違ってたら面倒だな……なぁラスト。もっと確実な手段は方法はないのか？」

「無いわね。現状としては、サタンに上書きされている神無ちゃんの感覚に賭けるしか」

「あっそ……」

顔を荒野に向けるスロウスは、確実にさっきよりもめんどくさそうにしていた。

彼の性格上、それは仕方のないことなのかもしれない。

「そろそろ行きましょう。急がないと、マズいことになるわ」

ラストに促されて全員が荒野を歩き出す。

ーーーーーーーーーーーー

探索を始めて一時間が経っただろうか。彼女達は、一匹の魔獣と戦っていた。

「こいつ、かなり頑丈だよぉ！」

蛇のように長い体を持つその魔獣は、たったいまグラトニーの全力の一撃を受け微動だにしていない。

「死天閃破！」

神無の放った刃にも臆することなく突き進み、打ち勝ってしまった。

術後硬直で動くことのできない彼女へ、魔獣は突進していく。

「くっ……」

「何してんだ」

「きゃっ」

スロウスによって抱きかかえられた神無からは、珍しく可愛い悲鳴が漏れる。

神無の姿が無くなったことで、魔獣は地面に顔を叩きつけることとなった。

「アスモデウス！」

伸びていく鞭は魔獣の尾に巻き付こうとしたが、触れる瞬間に弾かれてしまった。

「っ！？」

ラストには感覚で分かっていた。魔獣その物触れていないことに。

「防御壁？」

「おそらくは……まだ、確証はありませんけど。ですが、確実に調べる方法ならありますよ」

そう言ったスロウスが見たのはグラトニーだった。

「私ぃ？」

「ええ。グラトニーのディケイランサーです。その後の攻撃が届けばそれでいいですし、届かなければまた方法を考えます」

「……というわけだ。グラトニー、やれ」

「よし。行くよ、ベヘモスぅ！」

弾き出された三つの薬莢。

「ディケイランサー！」

鉄鎚の鉄球部分についたトゲが全て、魔獣へ向け飛んでいく。
魔獣もそれに対して、尻尾を無知のように使い反撃に出た。

「がぁぁあぁ！」

「無駄だよぉ！　スプレッド！」

その言葉が合図だった。
尻尾が当たる直前で爆発。中から出てきたのは大量の針。
雨のように降り注ぎ、魔獣とその辺りの地面に突き刺さっていく。
針が止むとすぐに動いたのはスロウスと神無。
スロウスのデバイス、ベルフェゴールは篭手と具足の姿をしている。
その力で高速移動。魔獣へ近づき、何度も蹴りを繰り出しその巨大を蹴り上げていく。

（……さっきと感覚が違うな。成功したのか？）

見れば魔獣は苦しそうにしている。
プライドの案は正しかったということだ。

「頼んだ」

「了解！」

高速転移魔法で移動していた神無は、すでに攻撃準備は整っていた。
神無の周りには三匹の漆黒の龍が蠢いていた。

「死天龍封刃！」

三匹の龍はサタンの刀身に集まり、一つの巨大な刃となる。

「はぁっ！」

振り下ろされた刃は魔獣の体を縦に一閃。それだけでは終わらない。
何度も何度も切り裂いていく。

「最後っ！」

みじん切りのように斬った肉片は、バラバラと地面に落ちていった。
それをグラトニーはずっと見つめている。

「ねえ、あれ食べていいぃ？」

「手短にね」

「うん♪」

加工しないで食べ始めるグラトニーだが、誰もそれについて何も言わない。言う必要がないからだ。

彼女は何か食べて体に異常を来したのは、過去に一度のみ。アルプトラオムでの戦いで、一時的に《昇華》したなのはの魔法を食べた時のみ。

だから誰も心配はしない。

「こんな魔獣、他にもいるのか？　そうなんだったらめんどくさいぞ」

「それについては同意ですが……何とも言えませんよ。ラスト以外、ここ『黄泉比良坂』に来たことがないんですから」

「……そうだな。ラスト。その辺りはどうなんだ？」

「どうなんだと言われても困るわ。私も一人で来たことしかないから、魔獣とは遭遇しないようにしてたもの。だから詳しいことはサッパリね」

「ちっ」

この魔獣はたまたま現れ、戦うことになってしまっただけ。

「……ん？」

「どうしたの、神無ちゃん」

「いえ。気のせいなのかもしれないんですが、向かう方向が変わったような気がして……もう一回、探してみますね」

再び集中。自分の感覚を頼りに、向かうべき場所を探っていく。時間がかかるが、神無しか探すことが出来ないのだから仕方がない。

「何かめんどうなことになりそうなんだけど」

「そう言わないの。どう、神無ちゃん？」

「やっぱりそうです。場所が変わってる、気がします。方角としてはこっち」

神無が指さしたのは東。さっきまで向かっていたのは北。つまり九十度方角が変わっていると言うこと。

「それはこの位置に来たから、東に変わっただけなんじゃないのか？」

「そうなのかしら。そうなのだといいんだけど」

「ごちそうさまぁ。で、何があったのぉ？」

「これから東に向かうことになったんです。そっちに『コキュートス』があるようです」

「東ぃ？　それってどっち？」

「あっちだ」

スロウスの指差した方向を向いて、匂いを嗅ぐように空気を吸う。

「……」

「どうしました、グラトニー？」

「神無お姉ちゃん。本当にこっちなのぉ？」

「ええ。そうだけど」

「そうなんだぁ」

もう一度同じことを繰り返すグラトニーだったが、落胆の色がさっきよりも濃くなった。それは誰の目にも明らか。

「何かあるの？」

「古代種と同等のドラゴン」

「「「は？」」」

「しかもそれが真っ直ぐこっちに来てるの」

グラトニーは魔力を匂いとして感じることができる。それで相手の強さと種族を見分ける。

そして今回は、そんな大物の匂いを嗅ぎ当ててしまったのだ。

「まさか、ねえ……グラトニー。そのドラゴンに他の匂い混じってない？」

嫌な予感……それは違うかもしれない。姉としての勘が、この場合正しいだろう。そんなものを感じ、神無は逆らえずそう聞いてしまった。

「他の匂いぃ？」

「例えば……『コキュートス』の匂い、とか」

「え？」

「『ロストロギア』って魔力を持ってるから、もしかしたらって思ったんだけど」

「……一応確かめてみるぅ」

聞いた本人もあるわけないと思っているのだが、その反面、一真ならやりかねないと思っている自分もいる。

「なあラスト。最初からグラトニーに探させたらよかったんじゃないか？」

スロウスの言葉にラストは完全に固まってしまう。

「まさか忘れてたんですか」

「そ、そんなことないわよ。ただ、神無ちゃんの魂だし神無ちゃんの方が正確かなぁって」

言い訳にしか聞こえないそれに、二人はため息をつくしかなかっ

た。
そんなことをしている内にグラトニーの確認は終わる。
「どうだった？」
「神無お姉ちゃん……正解だよ」
古代種レベルのドラゴンという、強大すぎる存在と戦うことが決定した瞬間だった。
◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇
「らぁっ！」
力任せに叩き込まれた漆黒の刀剣での一撃。アンナはそれを難なく防ぎきった。
暴走している彼女だからできたことだろう。
一真を弾き飛ばすと、魔力で矢を作り上げ連射。
「このっ！」
回避も、刀剣での防御も間に合わないと判断した一真は、オーラの質を限界まで上げる。
一本目さえ耐えればどうにでもなる。
すぐに回避行動をとった一真だった。が、動きを止めて防御をする。
ガキィン、と響く音。一真にとっては完全に予想外。
「っ！？」

《私が近接武器を使わないと思っていたのでしょう？》

図星だった。

「だから何だ！」

一真とアンナでは接近武器、とくに刀剣系統では使っている時間が違う。はずなのだが、一真が押し負けていた。

《あぁぁあぁぁ！》

（どういうことだよ、これ）

気づけばアンナの瞳が、左右別の色になっていた。左はいつも通り碧い瞳なのだが、右は異形となっていた時と同じく金色の瞳に白目は赤に。

「くっ……」

押されていることを利用して、一真は後ろに跳んでアンナと距離を取る。そこで一真は見た。

アンナの後ろに何かがいることを。

＞神様よぉ！　ありゃ何だ！？＜

＞おそらく、初代の《罪》の感情です＜

＞はあ？＜

振り下ろされ始めた刀剣へ、一真は自分の剣の刀身を振ってぶつ

ける。
そうなったことで剣を持った腕は頭より上へ。
＞何でそんなもんが、ここに存在するんだよ！＜
すぐに刀剣を腰へ。
「死天刀牙！」
峰を使っての抜刀。
アンナを殺さないためにしたことだったが、その必要がないと知ることとなる。
彼女の後ろにいるそれが、今の一撃を受け止めていた。
＞初代は自分の中にある《罪》の感情を、あの刀剣の中に封じていたんです。それが今、彼女の感情を暴走させています＜
＞……このままだとあの野郎は《堕落》するとか言わねえだろうな＜
＞その通りです＜
＞ちぃ！　本当に面倒な女だな！＜
転移を使いアンナの死角へ。切っ先を向け一気に突き出す。
アンナはそれを死角にも関わらず回避。だが一真は止まらない。
刃の向きを九十度回転させて、腕を思いっきり振る。
ガキンッ。
「っ！？」
グラディウスから放たれた矢によって、刀剣が阻まれる。

一真は反撃を受けないように、転移で離れた。

「アンナ……」

《気安く名前を呼ばないでほしいですわね》

「テメェに言われたかねえよ……」

刀剣に魔力を溜めながら、ゆっくりと構える。アンナも同様にだ。

「多分、テメェがそんなのに捕まってるのはあの時のことが原因なんだろう……」

あの時。それは一真が九歳の時のことである。

《一真の部屋》

千歳「こんな感じ、かなぁ？」

晶彦「こっちとかどうかな、千歳姉ちゃん？」

千歳「あ、これなら陽子ちゃんにピッタリだ♪」

陽子「陽子って、おいらのことぉ！？」

？？「みてぇだな」

千歳「ちなみに一真は、一美ちゃんだから」

一美「ちょっと待てぇ！　何でそうなるんだよ！？」

千歳「だってもとは二人とも一人だし」

一美「だとしても、それはおかしいだろうよ！　あの野郎と同じ名前にしなくても……」

千歳「妹がもう一人ーーーー」

一美「いや、一美でいいです！」

アンナ「これは、一体なんですの」

鈴蘭「えっと説明が長くなるんですけど……（詳細は前回の後書きコーナーを）……というわけなんです」

アンナ「現実逃避したくなる状況ですわね」

アリス「だけど、これが現実なの」

一美「んな現実、認められるかぁっ！」

神無「諦めなさい。今回は完全に負けだから。っていうか、隆浩ーーーー」

千歳「違うよ、神無お姉ちゃん。陽子ちゃんだよ！」

神無「そ、そうだったわね。陽子ちゃん、その狐の耳と尻尾なんだけど気づいてる？」

陽子「なぁっ！？」

一美「この精神状態で気づけるわけねぇよ」

晶彦「そして狐の耳に尻尾ということで、ミニスカの巫女服をコーディネートしてみました」

陽子「ノォォオォ！」

アリス「あ、死んだ」

鈴蘭「お兄……お姉ちゃんもその服、気づいてる？」

一美「ん……なんじゃこりゃあぁぁぁ！」

千歳「今回、巫女服は陽子ちゃんに用意したから、一美ちゃん用は用意してないんだ。だからゴスロリの服を用意ししましたぁ♪」

一美「ごふぅ！」

鈴蘭「お兄ちゃん！」

アンナ「……」

神無「どうしたの、アンナちゃん？」

アンナ「な、何でもありませんわ！」

晶彦「もしかしてあんな服が着てみたい、とか？」

アンナ「ち、違います！　何を言ってますの、あなたは！」

アリス「大丈夫だよ、アンナさん。ね、千歳♪」

千歳「うん♪　というわけで、レッツゴー♪」

アンナ「あ、ちょっと！　止めなさい！　楠木千歳ぇぇ！」

一・陽「「……ご愁傷様」」

晶彦「アリス姉ちゃん、どうしたの？」

アリス「え、あ、女の子になった一真見てたら……ちょっと席外すね！」

鈴蘭「アリスさん？」

神無「いつものことよ」

一美「お前、そのまま帰んのか？」

陽子「千歳様も晶彦も元に戻してくれそうにないし……それしかないだろうなぁ」

神無「あ、そうそう。千歳ちゃんとアリスちゃんがいないから言うけど、次回はテストするから。二人には言わないようにね。隆浩と晶彦もよ？」

鈴蘭「テストかぁ。また強しなきゃ」

一美「めんどくせぇ……」

アリス「ただいまぁって、どうしたの？」

一美「何でもねぇよ……というか、お前」

陽子「ツヤツヤしすぎ！」

アリス「そりゃもう気持ちよすぎて、何度も何度もーーーー」

鈴蘭「自主規制です！」

晶彦「……そういえば千歳姉ちゃんに連れて行かれたアンナ姉ちゃん、どうなっちゃったんだろ？」

アンナ「思い出すのが遅すぎですわよ……」

鈴蘭「わぁ……凄いです」

千歳「今回は玩具じゃないから、ちゃんとやったよぉ！」

一・陽「「玩具ぁ！？」」

アンナ「それで何でウェディングドレスなんですの！？」

千歳「ドレスが似合うだろうなぁ、って思ったらウェディングドレスがいいかなって。嫌だった？」

アンナ「い、嫌と誰も言ってませんわ」

一美「嬉しいんだな」

アリス「満更でもないんだ」

鈴蘭「お似合いですよ、アンナさん」

神無「私も一度は来てみたいわね」

陽子「……」

晶彦「もしかして、はやて姉ちゃんのウェディングドレス姿想像してる？」

陽子「そ、そんなことはないぞ！　うん、ない！」

一同（（（（（（（（図星）））））））

鈴蘭「思ったんですけど、この服を実際に着るのが一番早そうなのって、千歳さんですよね」

千歳「へ？」

アンナ「確かにそうかもしれませんわね」

一美「何言ってんだお前ら？」

神無「不機嫌にならないならない。アリスちゃん、説明をしてあげて」

一美「アリス！」

アリス「だって一美、いや一真との結ーーーー」

千歳「死のうか、アリスちゃん」

アリス「あ、いや、ちょ、あーーー！」

楠木千歳様と桜ノ宮アリス様はログアウトされました。

神無「照れ隠しって、可愛いわね」

陽子「あれが照れ隠し！？」

晶彦「あんな物だよ。はやて姉ちゃんも、ラグナロクぐらいやるんじゃない。姉ちゃんに向けて」

陽子「いや、死ぬから！」

鈴蘭「お姉ちゃん。そろそろ時間だよ」

神無「そうね。というわけで今回の次回予告は、次回の内容を考えて一真とアンナちゃんにお願いするわ。形も少し変えるしね。じゃあ今回はこれで終わり。次回へ」

一同『スタンバイレディ！』

次回予告

一真「俺は忘れてしまっていた」

アンナ「私は忘れることが出来なかった」

一真「強い憎しみに溺れていたあの日のことを」

アンナ「自分自身の強さに溺れていたあの日のことを」

一真「次回、魔法少女リリカルなのは～七つの大罪～」

アンナ「【追憶】。それは私を縛る罪の記憶」

初日の終わりと二日目の始まり（後書き）

ＴＯＵＤＡさん、阿部兄弟の出演許可ありがとうございました。兄の方は性別が変わってしまいましたが……。

最後になりましたが、この作品を呼んでくださっている皆様。最近は更新がかなりスローになってしまっていますが、止めることなく最後まで書いていきたいと思っていますので、これからも『七つの大罪』をよろしくお願いします。

それではまた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7347i/

魔法少女リリカルなのは〜七つの大罪〜

2011年11月28日01時56分発行